IS〈インフィニットストラトス〉LABOR DAY FULL ACTION

神崎蒼兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニットストラトス〉ＬＡＢＯＲ　ＤＡＹ　ＦＵＬＬ　ＡＣＴＩＯＮ

【Ｎコード】
Ｎ７８８３Ｕ

【作者名】
神崎蒼兎

【あらすじ】
インフィニットストラトス、それは女性にしか扱えないはずの特殊なパワードスーツ。
男性で扱えるのは織斑一夏たった一人だけ。
ＩＳのコアは絶対数を保っている。
だが、織斑一夏に続く『二人目』のイレギュラーが現れ出でる。過去の記憶を失った赤い瞳の少年がもたらすのは可能性か、絶望か。
今一度、少年は黒き獅子となりて、世界と向き合う！

――芝居は終わり、物語は進められた。さあ、悲劇と歌劇の混在した未知の結末に繋がる演目の幕を開くとしよう。

作者は投稿初めての若輩者ですので、至らない点や不満があると思いますが長い目で見守ってやってくださいませ。

プロローグ　～嵐の後～（前書き）

はじめまして、神崎蒼兎です。

初投稿でいたらない部分もあるかと思いますが、そこは長い目で生暖かく見守ってやってください。

では、まずはプロローグをお楽しみくださいませ……。

プロローグ　～嵐の後～

プルル……プルル……プルル
ピッ！

「もしもし、織斑です」

『はろはろ～！ちーちゃんのお口の恋人こと天才の天才、束さんだよ～！』

「切るぞ」

『冷たい！ちーちゃんってば冷たいよぅ！』

「束、私はお前と違って万年暇を持て余してなどいないんだ。何度言ったらわかると…」

『そんなことどーでもいいにょだよ！今日はね～、なんと！ちーちゃんに面白いお話、持って来ちゃたりなんだったり！』

「お前……、人の話を聞けと」

『未確認のＩＳがね、ちーちゃんのいるがっこーの近くに落っこちちゃったんだってー！』

「そんなこと、今更珍しい事でも…、」

『そのコアとＩＳが私の作ったオモチャだったとしたら？』

「束……。お前、何をやった？」

『人聞きの悪いこと言わないでよぅ！束お姉ちゃんはなぁんにもしてないんだから』

「フン……どうだかな」

『酷ぉい！私のこと、信じてなぁい！でもそんなちーちゃんは大好きだよ！！』

「はいはい、私も大好きだ」

『わーい！ちーちゃんが好きって言ってくれたー！束さん、カンドーしちゃったぁ！』

「そうか、よかったな」

『それじゃあ、ちーちゃんの恋人（公認）の束さんから彼氏のちーちゃんにプレゼントをあげよう』

「プレゼントだと？」

『むふふー！それはねー、』

海に落ちたＩＳのヒ・ミ・ツ、だよ。

プロローグ　～嵐の後～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

プロローグということで、いやいや中々どうして…。

文才の無い自分が恨めしい。

さて、次回は設定を公開しようとおもいます。

では、またの機会に。

設定編？（前書き）

本編に入る前にまずは主人公とその愛機をご紹介します。

ありきたりとか、安い設定何て言わないでください。

９月２２日、追記・編集しました。

設定編？

●主人公
緋神カイト（あけがみ一）
●年齢
１５歳（仮）
●性別
男
●身体的特徴
黒い髪・切れ長の赤い瞳
●身長
１７５ｃｍ
●ＩＳ適性値
Ａ＋
●詳細
過去の全ての記憶を失っている少年。ＩＳ学園に流れ着いたところを学園の教職員である、織斑千冬によって保護され、超法規的措置により、『二人目』の『男』としてＩＳ学園に入学する事になる。素性は謎に包まれており、高いＩＳ適正を叩きだしている事のみ判明している。

いつもは気弱な性格をしており、他者と衝突することを極力避けたがるが、大切な物を傷つけられたり、激昂した時にはどんな窮地でも一歩も引かない熱い一面を見せる。そうなったとき、彼の一人称も『僕』から『俺』に変化する。

人の痛みがわかる反面、超がつくほどの鈍感で加えて天然の気があるのか、思わせ振りな態度を取っているかのように見えたり、それっぽい言動を取っているように見えたりすることもしばしば。一夏

が唐変木なのに対して、カイトは朴念人と呼ばれることも。

「僕は無力で一一屑だ」

●作者コメント

はいはい、好い人いい人。書けば書くほど俺のコンプレックスを刺激する究極のストレッサー。異性に人気のある人間は同性の目から見ると何がいいのかよく分からんという、人間関係における普遍的なテーマを形成したテンプレ主人公、それが緋神カイトです。いや別に彼が真剣に嫌いなわけではないです。カイトは天然だから罪はないし、悪いなんて思わない。ただ、彼は人格に隙がないんです。生きるのに余裕が無いというか、造花じみているというか……。そんな頑なな心を解きほぐすのは誰になるんでしょうか？

●専用機

ＣＹＣＬＯＮＥ－１９３６『ＬＡＢＯＲ　ＤＡＹ』

闇に溶けてしまいそうな漆黒の装甲を持つカイトの専用機。フェイスガードに備えた複雑な形状のブレード・センサーが特徴的なＩＳ。一夏の白式とは真逆の一対多戦向けの高機動ＩＳである。名前の由来は記録的な台風『レイヴァー・デイ』から。

●単一仕様

Ｍｏｄｅ－Ｉ（イオタ）

カイトの感情の高ぶりにより発動する。全身の装甲がスライドし、金色に輝く内部フレームが露出、角の形式が大きく変貌し、黒い獅子といった風貌へと変身する。発動するとＩＳのリミッターが外れ、レイヴァー・デイ本来の性能を発揮できるが、ＩＳの対Ｇ防護を超えた超機動を行うため、操縦者が耐えうるのは以て五分となる。発動認証コードは『Ｄｉｅ－Ｗａｌｋｕｒｅ』。

因みに、Ｉとはギリシャ数字で『６』を現し、同時に虚数（存在しない数）を現す文字である。

●武装

ビームマグナム《ガルベストーン》

レイヴァー・デイの主兵装となるエネルギー兵器。『マグナム弾』と呼ばれるＥパックを使用しての射撃は高出力にして高火力だが、予備のＥパックを含め、１５発しか射てない。

実体弾無反動砲　《ウィルマ》

バズーカ。レイヴァー・デイに装備された唯一の実弾兵器。発射されると、弾頭が圧壊して内蔵されたベアリング弾を散布する。

大型エネルギー機関銃　《フロイド》

《ガルベストーン》の欠点である牽制に使えない威力の高さ、連射性を補うために用意された四連装ビームガトリングガン。全部で四門あり、一門だけ使用する他、テール部を連結させて二連装として腕部ラックに直接装備することができる。

高周波ブレード《ディーン？》

単一仕様を発動したときのみ使用できるレイヴァー・デイ最大の武器。伝統的な形状をしているものの、破壊力はかなりのもの。『Ｃｏｒｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ』と呼ばれるモードに変化するが、詳細は不明。

なお、レイヴァー・デイの武装は全てハリケーンの名前を使っている。

●作者コメント

モチーフはガンダムＵＣに出てくるユニコーン二号機バンシィで

す。黒と金というカラーチョイスがそそる。レイヴァー・デイはその名前の通り、既存の物語を破壊する予測不能の嵐です。もはやこの機体は舞台装置などではなく、物語の登場人物としてカウントしてもいいくらい。ちなみに仮面ライダーダ●ルは俺が好きな番組。理由は挿入歌を聞けばわかる。

設定編？（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

主役の彼らがどんなオペラを見せてくれるのか？　それは次回から。

では、またの機会に。

第一話　～逃亡者～（前書き）

第一話です。

ここから物語がスタートします。

駄文ですが、お楽しみくださいませ。

第一話　～逃亡者～

船内警告（レッド・アラート）が頭上で鳴り響いたのを聞いた俺は急いで窓に走り寄った。

透明な窓を形成する有機プラスチックの向こう側では、豪雨が散弾をばらまいたかのように降り注いでおり、時折白色の閃光が視界を埋め尽くす。

こんな嵐くらいでアラートが鳴る訳が無い――。

嫌な予感に体を震わせた瞬間、

ドォンッ！

爆発音に続いて地割れを彷彿とさせる衝撃が襲い掛かり、飛行艇が大きく揺さ振られる。

『未確認ＩＳの接近を確認！数は一、急速に接近中！』

『左舷メインエンジン大破！バカな、あの距離から打ち抜いたのか！？』

『第五、第六通路に火災発生！なおも被害は拡大しています！』

オープンになっている無線交信が、館内放送媒体を介して耳に飛び込んできた。

未確認のＩＳが一機接近している。

俺はその正体に心当たりがあった。

こんなところまで俺なんかを追ってくる奴なんて、世界広しと言えど『蛇皇』しかいない。

畜生、日本まで逃げれば流石に諦めてくれるかと思ったんだが……。

二つ名どおり、しつこい野郎だ。

ドォンッ！

再び爆音が響くのに遅れて、艦が左へと傾いた。急激な傾斜の発生に耐えられず、壁に叩きつけられた。

「『蛇皇』、ここまでやるのか……！」

悪態をつきながら、窓から外を確認すると、海面が次第に近付いてきている。このままじゃ、艦が落ちるのも時間の問題だ。

アイツの狙いは俺一人。この艦の人は何も悪くない。

――出るしかない。やるしかないんだ。

覚悟を決めると、足元に転がっていた黒いヘッドセットをむんずと掴んで、装着する。

先程までの喧騒が全てシャットアウトされ、自分一人が世界から隔離されてしまったのかと錯覚させる。無音の空間で意識をヘッドセットただ一点に集中させて、その奥に眠る『モノ』に呼び掛ける。

「来い、『レイヴァー・デイ』！」

ヘッドセットがまばゆい素粒子を展開し、全身を包み込む。瞬間的に全身を漆黒の外装が覆い尽くし、俺の姿は鉄騎と変化する。

鶏の冠らしき金色の頭部センサーが立ち並ぶフェイスガードの奥から肉眼で見るよりもクリアな正面を見据える。

『レイヴァー・デイ』を展開したんだ、早いところ脱出しなければ。

背面に備えた大型の推進機を起動させ、戦艦の壁を突き破って外へと出る。途端に身体中が雨でぬれる。

スラスターを急停止させ、背後を仰ぐ。

奴は――いた。

夜の帳が降りた空間でも分かる紫色のアーマーを身に纏った蛇の皇がそこに佇んでいる。両腕に握る二丁のメガランチャー『パンデミック』はジェネレータからエネルギーを供給されているので、背面のバックパックからオレンジ色に発光するチューブが連結している。

――遠距離射撃戦を支配するコンセプトを持つ『蛇皇』専用ＩＳ、『アスクレピオーズ』。

その操縦者、『蛇皇』の狂気で歪んだ白い瞳が俺を捕えた。薄い唇が、ニィ…、と釣り上がる。胸が奴のプレッシャーで押し潰されそうになる。

「獅子座クン、みぃつけたぁ！」

嬉々として銃を振り上げ、構える。『蛇皇』が相手じゃ話し合いは無理か！

「くっ！」

スラスターを吹かして後方へと下がる。

ドンドンドンドンッ！

『パンデミック』から放たれた火線が次々と海を貫く。一撃の威力を物語るように、水柱が吹き上がり、ビームの熱量によって蒸発していく。

あんなのに当たったら、シールドエネルギーなんて有って無いようなモノだ。

（だったら……！）

円を描くようにブーストをかけ、襲い掛かる『蛇皇』の銃撃を躱しながら右手に武器を召喚する。

召喚されたのはビームマグナム『ガルベストーン』。コイツは並のＩＳのビーム兵器の四倍の火力がある。コイツならジェネレータ直結のビームランチャーだろうと、打ち負けしない！

「逃げちゃだめぇ！」

天から降り注ぐ藍紫の豪雨を避けながら距離を測る。

「ここならっ！」

最大限威力が発揮されるポイントで減速し、マグナムの銃口を『アスクレピオーズ』に向ける。

「行けぇっ！」

考えるよりも先にトリガーを引くと、刹那、フェイスガードでも押さえきれない光が膨れ上がり、膨大なエネルギーの濁流が銃口から走る。同時に、エネルギーを流し終えたパックが空薬莢の如く排出され、新たなパックが装填される。

『パンデミック』の打ち出したビームよりも悠に太い火線が、いや火球が紫色の一条の光を押し切り、『アスクレピオーズ』へと迫る。

「当たらないよーだ！」

驚いた顔をしたのは一瞬、その言葉どおり、灼熱の弾丸は厚い雲を打ち抜いただけで、ターゲットにかすった程度。けど、それでいいんだ。当てようなんて考えてない。

バシューン！バシューン！

立て続けに二発、三発と繰り出す。

『ガルベストーン』は高火力、高出力ゆえに掠めただけでシールドエネルギーを削れる。『蛇皇』はあれで避けているつもりなんだろうが、ＩＳのエネルギーは着々と削れてきている。

四発目のマグナムを撃った瞬間、火輪がシールドを貫通し、『アスクレピオーズ』の装甲を黒く焦がした。そこに至ってようやく気が付いたらしい。

「あれ！？どーして！？」

今更慌てももう遅い。ただでさえ、シールドエネルギーを『パンデミック』の銃弾として使っているんだ、かすった程度とは言え、シールドエネルギーは十分に削られている。

「今だ！」

『蛇皇』の気が動転しているうちに高速切替（ラピットスイッチ）を発動させ、『ガルベストーン』から実体弾無反動砲、いわゆるバズーカの『ヴィルマ』へと変更し、一直線に加速する。

「あっ！？」

「当てるっ！」

突撃しながら射出されたバズーカの弾は、圧力によって先端部が破裂し、内蔵されていたベアリング弾が散布される。

「きゃあああああっ！」

咄嗟に後ろに下がるが、対処が間に合わず、薄くなった『アスクレピオーズ』の防御障壁を濃緑色の尾を引く散弾が容易く破砕し、『蛇皇』の纏う鎧を砕いた。

鉄球の影に隠れるようにスラスターを稼動させ、一息で奴の背後を奪う。

「悪いな、ヘビ使い。コイツでダウンを貰うぞっ！」

バズーカを二本のチューブが伸びるバックパックに押し当てる。この距離なら外さないし、いくらシールドエネルギーが残っていよう

が、押し切れる自信がある。

勝敗を決する一撃を放とうかと思ったその瞬間、全身の熱が一気に逃げていく。この雨のせいじゃない。何か別のモノだと直感し、『ヴィルマ』を瞬間的に収納（クローズ）すると、すぐさま転身し、『蛇皇』から距離を取った。

刹那だった。数秒前に俺がいた場所に赤色の細い光が四方八方から降り注いだ。

危なかった……。あと数秒でも判断が遅れていたら、俺は機体もろとも四散していただろう。

俺を強襲したのは、あの白銀のロート状の自律兵器、ビットだ。強襲に失敗したビットは導かれるように主人の元へと帰還していく。

「心配になって来てみれば、人間からレンコンに転職か？『蛇皇』？」

そう声をかけたのは、肩部に一対のウィングバインダーを付けた白銀のＩＳを装着した金髪の女性だ。彼女からは『蛇皇』とはまた異なった威圧を感じる。『蛇皇』が狂気なら、この女性から感じるのは、純粋な殺気。

彼女のＩＳのウィングバインダーの内側のラックに次々とビットが回収されていく。

「余計な真似しないでぇ、『宝瓶』！獅子座クンはワタシの獲物なのぉ！」

「その結果がそれだ。穴だらけで、エネルギーもないＩＳで何ができる？」

「でも、ワタシが！」

「負けを認めろ。そして、この場は引け」

戦闘に介入してきた女性、『宝瓶（ほうべい）』に正論で諭され、悔しげに唇を噛み締めた『蛇皇』は俺を睥睨した後、最大出力のブースターで戦場から撤退していった。

一難去ってまた一難、いや、一難と称するにはあまりにも形成は不利だった。

『蛇皇』の他に追っ手がいると考えてはいたけど、よりによって『宝瓶』が来るとは想定外だ。

「さて、『獅子』よ。無駄だと思うが一応訊こう。もう一度、我らの元に戻ってくる気はあるか？」

「ははははっ！」

今更ながらの質問に、乾いた笑いが零れる。

「無駄だと思うなら、訊かなくてもいいんじゃないのか？」

「勘違いするなよ、劣等。私は貴様の顔を立たせてやったんだ。貴様に帰る場所なぞあるものか」

ぶわっ！と殺気が膨れ上がり突風となって体を押し出そうとしてく

る。

「安心しろ、一人は淋しかろうと思ってな、地獄への水先案内人は用意してある」

「……なに？」

『宝瓶』の含みのある言葉にざわざわと心が騒ぎだす。次に告げられる言葉が想起されるが、そんなはずはない。あり得ない。『彼女』は俺より遥かに強いんだ。だから、

「『乙女』だったあの女は貴様を地獄で待っているぞ？」

死ぬはず、ないんだ――。

「ちょこまか、ちょこまかとネズミのように逃げ回ってな、始末するのに時間がかかってしまった」

「殺した……のか？先生を？」

雨に濡れた髪の毛を掻き上げた『宝瓶』は吐き捨てるように答えた。

「殺したよ。この私がね」

ブツンと、頭の中で切れてはいけない何かが音を立てて弾け飛ぶ。腹の底の熱が、いや、メルトダウン間際の炉心と化した熱が、俺の体を包み込んだ。

「お前ぇぇぇ

蛇行する『宝瓶』の距離を『ガルベストーン』を速射しながら少しずつ詰めていく。だが、業火球は白亜の鎧に触れることすらできず、いたずらにパックを消費するだけ。

「ヌルイぞ、劣等っ！『エリュシオン』！」

ブースターとして機能していた一対のウィングバインダーが前に振り出され、メインスラスターが逆噴射の炎を瞬かせるや否や、あのロート状のビットが射出され、直径数メートルの球陣を形成して俺を取り囲む。

その砲口がエネルギーの光を滞留させ、中央に位置する俺へと一斉に閃光の暴力を振るう――。

「舐めるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！！」

四方八方から瞬く光の奔流を断続的にブーストをかけることで回避しながら両手に武器を呼び寄せる。

呼び出したのは、『レイヴァー・デイ』本体に流れる金色のラインと同様のものが入った黒い高周波ブレード『ディーン？（サード）』。セーフティが解除されないと使用できない『レイヴァー・デイ』最大の武器だ。

「はぁぁぁぁぁッ！」

両手で掴んだブレードで、一条のエネルギーを切り裂き、弾き、邪魔なロートを切り捨てていく。

『Ｉ』を解放した『レイヴァー・デイ』の翼のようなシルエットの

背面ブースターを一気に吹かし、光の渦から抜け出すと、即座に『宝瓶』に肉薄する。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ！」

右手の『ディーン?』を振り上げ、切り掛かる。

ガキィン！

しかし、機体の袖口に当たる部分から引き出したコールドナイフで受け止められる。

だが、ブレードはもう一本ある！すくい上げた左手の高周波ブレードは金色の軌跡を残して奴の右肩のウィングバインダーに直撃し、バインダーが中間部から切断され、大口を開けている海へと落下していく。

片方のメインスラスターが切り落とされたことで、『宝瓶』の体制が大きく崩れた。

（殺す、殺す、殺す、殺す！）

攻撃色に染まった思考が咆哮し、それに呼応するように、手に持ったものとは別の『ディーン?』が二本コールされ、両腕のラックに自動装備される。

「『宝瓶』、覚悟ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ！」

計四本の無慈悲な刃を振り上げ、寸分の狂いもなく、奴目がけて振り下ろした。

そう、狙いは合っていた。
ただ、頭に血が上っていたんだ。
だから、もう一方のスラスターの影から伸びたサブアームに気がつかなかったんだ。

ガシィ！

「なんだ、これ！？」

残ったバインダーから四本のサブアームが展開され、俺の両腕、ボディを拘束する。
引き剥がそうにも、体を押さえ付けられている所為で力が入らず、振り切れない。

「さすがは『獅子』に選ばれただけのことはある。確かに強い」

「なんだと！？」

「しかし、所詮はその程度だと、劣等種止まりだと言うことだ」

嘲笑う『宝瓶』の顔面を全力で殴ってやりたい。仇がいるのに、先生を殺した相手がいるのに！
俺は、俺はァッ！

もがく俺の目の前で、ゆっくりとその手に粒子が収束し、俺の『ヴ

ィルマ』と同系の無反動砲がコールされた。だが、そのバズーカ砲はジェネレータと直結しており、放たれる弾丸がエネルギー質である事は予想に難しくない。

キィィィン、と耳障りな音を響かせて高濃度に圧縮されたエネルギーの塊が銃口に形成されていく。その粒子量は『ガルベストーン』に匹敵している。

こんなところで終わるのか!?

まだ俺は何もしていないぞ!?

先生との約束だってまだ果たしていないのに!?

「さらばだ、可能性を食らう黒い獅子」

ダメだ、動けな――。

ギュガガガガガガがッ!

「ぐあああああああああああああああああッ!」

バズーカ砲から打ち出された螺旋状の圧縮粒子が俺の体を、機体を、魂を、意識までも焼き払っていく。

絶対防御なんて存在しないかの熱量が抗えない暴力となって全身を蹂躙する。

気がおかしくなりそうな無限の苦痛が続く世界で、俺は奴の顔を脳裏と心に焼け付ける。

絶対に忘れない……!

忘れるもんか…！

ぐるんと世界が逆転する。『宝瓶』に投げ捨てられたんだと感じたのと、海面に叩きつけられた衝撃が伝播し、意識が闇に溶けてなくなるのはほぼ同じタイミングだった。

第一話　～逃亡者～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

しょっぱなからバトルシーン。かなりクオリティ低いですし、一々表現がめんどくさいです。これが私の性分ゆえ我慢してお付き合いいただければ幸いです。

アドバイス、意見、文句などございましたらコメントお願いいたします。

それでは、またの機会に。

第二話　Aパート　～二人目～（前書き）

第二話のAパート、いわば前編ですね。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第二話　Aパート　～二人目～

織斑一夏は窮地に瀕していた。

さして暑いわけでもないのに、汗腺という汗腺から汗が吹き出し、カラカラに乾いた喉が水分を欲していた。

なぜ彼がこのような状況に陥っているのか？

簡単だ。彼以外のクラスメイト、更には担任までもが全員女性で合ったからだ。

とりわけ女性が苦手でもないが、数十名の女性に囲まれ、好奇心に満ちた視線を受けているとあれば、動けなくなってしまうというもの。

だが、それも仕方の無いことなのだ。一夏はこの世界でＩＳを扱えるたった一人の男性なのだから。

ＩＳは女性しか扱えないものだと言う定説こそが、この世界の基盤であると言い表わしても過言ではない。

しかし、織斑一夏はその定説を覆した。男の身でありながら、ＩＳを動かしてしまった。注目されるには十分すぎるファクターだ。

そんな噂の彼に出会え、あまつさえクラスまで一緒ときたら、クラスメイトらの意識は嫌でも向いてしまうだろう。当然、本人の考えなど介在しない。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

真っ白になった頭で組み立てた言葉を着飾らず、そのまま口に出して頭を下げる。

これで大丈夫だと安堵した一夏が顔を上げる。そしてその表情が再度硬直する。

彼が見たのは、『もっと色々喋ってよ』とか『これで終わりじゃないよね？』と訴えかける思春期の少女たちの痛いほどの視線だった。

何か話さなければならないと責任感に似た感覚にとらわれ、一夏の脳がフル回転する。

（よし……）

答えを導き出した彼は息を大きく吸い込むと、彼なりの最善の答えを口に出した。

「以上です」

ガタタッ！

往来の漫才の如く、女子が数名椅子からずり落ちる。せっかくの自己紹介がただの寸劇になってしまった。

一夏が自分が何か悪いことをしたのかと考え始めたその時。

パァン！

彼の脳天にツッコミ代わりの鉄槌が振り下ろされた。一夏が振り向いたその先にいたのはー、

「げぇっ、関羽!?」

ゴッ!

二度目は角だった。

「誰が三國志の英雄か、馬鹿者」

彼の頭を叩いたのは、黒いリクルートスーツに身を包んだ女性だった。抜き身の刃を連想させる鋭い目が一夏を睨んでいる。

一夏はこの人がここにいるのかに見当が付かず、ただ頭をさすっていた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わったんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいしないと……」

そう黒髪の女性に礼を述べられた副担任の山田真耶は、うつむきがちにはにかんだ笑みを浮かべる。一夏には、そんな真耶の姿に幼さを感じていた。

真耶にふっとほほ笑みを返すと、スーツ姿の女性が教卓の前に立つ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者

に育てるのが仕事だ。私の仕事に反発したい者はするといい。だが、私の言うことは絶対だ。いいな？」

絶対王政発言に教室は水を打ったかのように静まり返る。一夏にいたっては、実姉がここにいることに驚いて、凍り付いてしまっていた。

だがしかし、静寂は一瞬にして彼方へと消え去った。

「「「キャーーーー！本物の千冬様よーーー！」」」

「子供の頃からファンでしたー！」

「抱いてくださーーーい！」

「今の誰だ！？」

黄色い悲鳴に混ざって何やら不穏な単語が一夏の耳に飛び込んできた。改めて自分の姉の人気に恐れを抱く一夏。

毎度のことなのか、額に手を当て呆れていた千冬の瞳がその視界のセンターに一夏を捉えた。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は、」

ゴスッ！

本日三度目の名簿ハンマーが火を吹いた。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「まずは自分の席に座れ。話はそれからだ」

彼らの会話から、すぐさま二人が姉弟であると露見する。

すごすごと促されるまま席に着いた一夏はクラスメイトのひそひそ話に黙りを決め込むことで、無視することにした。

「さて、ＳＨＲを始める前に、まずは紹介したい者がいる」

千冬の言葉にざわめきが大きくなる。余りに騒々しいのか、千冬は教卓を強く叩いた。

「次に口を開いた者は、グラウンドを一日中走らせてやろう」

「「「「……」」」」

この学園のグラウンドがどんなものか知らないが、彼女の顔に鬼気迫るものがあることくらいすぐにわかっているらしく、教室に静寂が訪れる。

「よろしい。緋神（あけがみ）、入ってこい」

千冬は教室のドアに呼び掛けると、数秒間を置いて、扉がゆっくりと開かれる。

「……え？」

一夏は自分の目を疑った。それは彼だけではなく、クラスメイト達も息を呑み、さらには副担任である真耶も口に手を当てて驚きを隠している。

ドアから現れたのは一一男。

墨汁を垂らしたかのような艶やかな黒い髪の毛、その間から見え隠れする真っ赤な瞳。

どこからどう見ても、男だ。

少年は千冬の隣まで歩くと、正面を向いた。緊張しているのか、整った顔立ちが若干強ばっている。

「特例でこのクラスに編入する事になった緋神カイトだ。緋神、自己紹介をしろ」

「は、はい！」

彼は身を正すと、口を開く。

「あ、緋神カイトです！あの、その……、よろしくお願いします！」

？

ＩＳ学園。特殊パワードスーツ、インフィニット・ストラトス通称

『ＩＳ』の操縦者を育成する教育機関。ＩＳは女の子しか使えない事も相まって、女子校の様になっている。

…とは話に聞いていたけど、いくら何でもこれはー

これはひどい

教室中から視線が突き刺さっている。視線に物理的ダメージがあれば、今ごろ蜂の巣だ。

いくら男子の数が絶対的に少なくて物珍しいからと言っても、これじゃ落ち着けない。

「はぁ……」

ため息をはいた僕の肩をちょんちょんと誰かがつついた。そちらを振り返ると、

「よう」

いつの間にか千冬さん、じゃなくて、織斑先生の弟の織斑一夏君が片手を上げて立っていた。

「どうしたの、織斑君？」

「一夏でいいぜ、緋神」

「じゃあ、僕もカイトでいいよ」

そうか、と一夏は笑う。その笑顔につられて、僕の顔もほころぶ。

よかった、変に目の敵にされてたらどうしようかと思っていたけど、そんなことは無さそうだ。

「同じクラスで同じ男子、これからよろしくな、カイト」

「こちらこそよろしく、一夏」

差し出された手を握り返す。僕らの会話を聞いていた女の子が悲鳴を上げる。

……ゴキブリでもいたのかな？

ともかく、話せる人が一人いるのといないのでは、こんなに気持ちが軽くなるんだ。

「そういやさ、カイト」

「ん？」

「何でお前は編入生なんだ？」

「あー……」

ちょっと視線を逸らして頬を掻く。やっぱり気になるものなのかな、あの扱い方は。

「……気になる？」

「まあな。始業式に編入生っておかしな話だろ？」

ごもっとも。

どうしよう？話すべきか話さざるべきか。

まあ、そんなに格好付けて悩まなくても、とりわけ隠しておく理由があるわけじゃないし、話してもいいか。

ただ、下手に噂になったら困るし、教室で話すのは避けたい。

「一夏」

椅子から立ち上がった僕は、ちょいちょい、とドアの外を指差す。

それが何を示しているのかを理解してくれた一夏は頷くと、二人で話の場所を廊下へと移す。

よし、教室から距離を取ったし、これならあんまり聞こえないだろう。

「確か、僕が編入扱いだって話だったよね？」

「あ、いや、無理に話したくないならいいぞ？」

この話題はタブーだと思ったらしく、僕を気遣う一夏に笑って、平気さ、と答えると、編入された理由を話す。

「僕、記憶喪失なんだ」

「……」

あれ？一夏くーん？どうしたのさ、そんなブロンズ像みたいに固まっちゃってさ？

「わ、悪い、カイト！」

「うわっ！？」

頭を下げながら、パン、と手を合わせて謝る一夏。

「俺、そんなことなんてさっぱり知らなくて！」

「あ、いや。大丈夫、気にしてないから」

記憶がないって事はそんなに重く捉えられがちなのかな？

「とりあえず顔を上げてよ。これじゃ、まともに会話なんてできないじゃないか」

「お、おう…」

僕が怒ってるのかと勘違いしてるのか、一夏はキョロキョロと辺りを見回している。この様子じゃ、しばらく僕の顔を見れないかな。

仕方ない、勝手に話をしちゃうか。

「僕は二日くらい前かな、この学園に流れてきてさ」

「流れてきた？それって海からか？」

「らしいよ。第一発見者の千冬さんが海岸に打ち上がってた僕を見つけたみたい」

千冬さんに聞いた話だから、どうしても伝わりにくい箇所が出ちゃうな。

「それで、千冬さんに保護された僕が目を覚ましたら、昔の記憶が全部抜け落ちてたんだよ、これがさ」

軽くしゃべってるけど、起きたときの驚きはかなりのものだった。何せ、頭のなか真っ白なんだから。

頭をひねって、ひねって、ようやく思い出したのは自分の名前だけだった。

「帰る場所もわからないし、どうしようかなって事で、千冬さんが手を回してくれたんだ」

学園への編入手続きに、資金繰り、各種方面への説明まで。お陰で僕はこの学園の生徒として入学できた。

千冬さんに感謝をしてもしきれないし、足を向けて眠れない。どこに寝てるのか分からないけど。

「入学試験受けてないから、僕は編入生扱いって事なんだけど……分かった？」

「なんとなくだが……随分さっぱりしてるな、カイト」

呆れたような失笑を浮かべる一夏に、まあね、と返事をする。

「無くしたものを気にしてもしょうがないし、それにさ……」

「それに？」

「忘れるような記憶なんて、たぶんロクでもない記憶だろうし、無いほうがマシじゃない？」

「……ぷっ、あはははは！」

僕の言葉に呆気に取られていた一夏が急に吹き出した。

あれ？僕、変な事言ったかな？

「カイト、お前って滅茶苦茶ポジティブだぜ！」

「そうかな？でもさ、人間前向きに生きたほうが楽しくない？」

「だよな！」

笑い終えたのか、ふぅー、と息を吐いた一夏は僕を真っ直ぐに見ると、再度手を差し出した。

「改めてよろしくな、カイト」

「うん、よろしくね」

躊躇うことなく僕はその手を取った。

十分にも満たないのに、なんだか随分と仲良くなったのは気のせい

であってほしくない。

その時、授業開始を告げる鐘の音が鳴り響く。

「授業だね、一夏。教室に戻ろうか？」

「おう」

一夏の背中を追うように教室に足を踏み入れた僕に、妙に冷たい視線が突き刺さった。

さっき感じたものとは１８０度異なる視線を瞬間的に辿る。

視線の主は、白いリボンが印象的な肩下まであるポニーテールの少女だった。

どこか敵意を含んだ視線が僕に向いているのは錯覚では無かったようだ。

しかし、何で睨まれてるんだろう？

「それに彼女は……？」

さっき自己紹介してた。名前は確か……篠ノ之箒とか、

バァン！

「緋神、席に着け」

「……今すぐ席に着かせていただきます」

千冬さん、ナイスアタックです。

第二話　Aパート　～二人目～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

今回は作者の関係上、第二話は二つに分けて掲載します。

それでは、またの機会に。

第二話　Bパート　～宣戦布告～（前書き）

第二話のBパート、後編ですね。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第二話　Bパート　～宣戦布告～

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「ん？」

二時間目の休み時間。先の授業で分からないところがある、というか授業の内容を一夏に分かりやすいように噛み砕いて説明していると、毛先にかけて柔らかなウェーブのかかったプラチナブロンドの少女が話し掛けてきた。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話掛けられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

芝居がかったジェスチャーで話し掛けてきた少女に一夏は顔をしかめた。

気持ちは分かるよ、一夏。僕もこの子みたいな「お嬢様」してる娘は苦手なんだよね……。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

ズルッ！

椅子からずり落ちそうになった。まさか知らないということをストレートに尋ねるとは考えもしなかった。せめてオブラートに包むくらいするかと思ってたのに。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

やっぱりと言うべきか、主席入学したらしい彼女、オルコットさんは声を荒げて一夏に詰め寄った。

そんな事など露知らず、一夏は手を挙げる。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

ガタタッ！

さすがにこれには呆れた。さっきの授業でも入学前の参考書を捨てたって言ってたけど、本当に予備知識無いんだね、一夏。ほら、オルコットさんは目を皿のように丸くして、口をパクパクさせてるよ。

「一夏、２３ページの下から五行目」

「お、おう」

僕がページを指定すると、一夏は教科書をペラペラと捲るとそこに書かれている文章を音読していく。

「代表候補生とは各国で選定される、ＩＳ操縦者の候補生として選出される実力者である……」

「つまり、代表候補生はＩＳを操縦するのが上手な人、エリートって訳」

「そう！エリートなのですわ！」

復活早ぇ。オルコットさんは髪の毛を優雅にかきあげると、僕らに人差し指を向ける。

あ、爪長い。危ないから切ったほうがいいと思うよ。

「ですからＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ」

「いや、カイトに教えてもらってるんだけど」

「一夏、無駄だよ。話を聞いてない」

僕のことは視界に入っていないようだ。僕らを無視してオルコットさんは話を続けていた。

「何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一、って場所を随分と強調するけど……ん？

「どうしたのさ、一夏」

不意に一夏が眉をひそめていたので、問いかける。

「いや……。入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「他に何がありますの？」

「じゃあ、俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

お前は？と一夏が尋ねるような視線を投げ掛けてきた。僕は苦笑いを返した。

「僕は無理だったよ」

「で、ですわよね！男性風情が教官を倒せるなど――」

「だって相手は千冬さんだもん」

「は……？は……？」

何か言おうとしていたオルコットさんは目を白黒させている。

「お前、千冬姉と戦ったのか？」

「うん。編入試験の時、手の空いてた先生が千冬さんしかいなくてさ」

モンドグロッソ総合優勝は伊達じゃなかった。あっという間に叩き伏せられて、気が付いたときには天井を眺めていた。

「あれが『ブリュンヒルデ』なんだね。手も足も出なかったよ」

それでも一撃与えられたのは奇跡以外の何物でもなかったよ。

「にゅ、入試で教員を倒したのはわたくしだけで、『ブリュンヒルデ』と戦った生徒がいるだなんて聞いてませんが……」

「女子だけはってオチじゃないのか。多分」

「僕は編入生だから、ただ知られてないんじゃないかな。多分」

ビシッ！

妙な音が聞こえた。音源は……オルコットさん？あ、青筋みっけ。

「多分！？多分ってどういう意味なのかしら！？」

「落ち着いてよ、オルコットさん。人は誰だって知らない事の一つや二つあるんじゃないかな？」

「こっ、これが落ち着いていられませんわ！」

急に怒りだしたオルコットさんをなだめるが、火に油を注いでしまったらしく、彼女の怒りのボルテージがアップしていく。

うーん……。どうしたらオルコットさんの怒りを鎮められるのだろう？やっぱり、人柱か何かを立てなくちゃダメなのかな？

キーンコーンカーンコーン

「っ……！またあとで来ますわ！お二人とも逃げないことね！よくって！？」

教室に入ってきた千冬さ、じゃない織斑先生と山田先生を確認し、律儀に頭を下げたオルコットさんは不穏な言葉を残して立ち去っていった。……おや？

「お二人とも？」

僕も含まれてるの？僕は他人とギスギスしたくないんだけどな……。とにかく考えるのは後にして、僕も自分の席に戻ろう。名簿の一撃をこれ以上もらいたくないし。

一、二時間目と打って変わって教壇には織斑先生が立ち、口を開いた。

「授業を始めるその前に、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦に代表者。聞き慣れない単語だ。それを見越してか、織斑先生が一つずつ解説する。

「クラス代表者とは言葉どおりの意味だ。対抗戦に限らず、生徒会の開く会議や委員会への参加……いわばクラスの顔だな。ちなみに、

クラス代表者は学年が上がるまで変更はきかないぞ」

つまりは面倒を一年間背負い込む役目か。やるべきことが沢山あって大変そうだ。

「続いてクラス対抗戦だが、これは入学時点での各クラスの実力を測り、クラス間に競争を生むのが目的だ」

なるほど。明確な競争相手がいれば向上心も芽生えるし、自分の実力もはっきりするって事か。

一夏、難しい顔してるけど分かってるのかな？……あ、ダメっぽい。分かってなさそう。

「自薦他薦を問わない。誰か立候補する者はいるか？」

「はいっ」

お、一番後ろの三つ編みの娘が手を挙げたぞ。やってくれるのかな？

「織斑君を推薦します！」

「私もそれに賛成！」

「お、俺！？」

わあ、一夏は人気者だね（棒読み）。すぐさま二票も入ったよ。さすがは織斑先生の弟。

助けを求めるような視線を僕に向ける一夏に首を横に振る。

ごめん、一夏。僕には彼女等の期待を無下にはできないんだ。

その人気がちょっとでも僕にあったら――

「それじゃあ、私は緋神君を推薦します！」

「私も私もー！」

――前言撤回。人気なんて必要ないよね。

「候補者は織斑一夏に緋神カイト……」

拒否権はきっと……ううん、絶対にないね。

「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやりたくな、」

「自薦他薦は問わないと言った。自薦ならともかく、他薦された者に拒否権はない」

鬼でも裸足で逃げ出すような眼力で一夏を黙らせる。やっぱり拒否権はないか……。

諦めかけたその時、甲高い声が教室に響いた。

「待ってください！納得できませんわ！」

苛立っているのか、怒気の籠もった声を張り上げたのは、イギリスの代表候補生のオルコットさんだ。

「そのような選出、認めるわけにはいきませんわ！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このわたくしにそんな辱めを一年も味わえというのですか！？」

辱めって……。そんな大層なものじゃないでしょ？

「実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからと言うつまらない理由で、極東の猿にされてもらっては困ります！わたくしはこの場にＩＳの修練に来たのであって、サーカスをする気はありません」

ちょ、ちょっとオルコットさん？少しお口が回りすぎてません？人を猿扱いするのはダメだと思いますよ？

オルコットさんはさらに興奮していき、怒濤の剣幕で言葉を羅列していく。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！大体、日本という後進国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で――」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者を気取ってるんだよ」

「一夏！？」

我慢ならなかったんだろう、露骨に苛立っている一夏がオルコットさんを睨み付けている。

慌てて二人の間に割って入るが、一度導火線に火が点いてしまった

二人には意味をなさなかった。

「あっ、あっ、あなたねぇ！わたくしの母国を侮辱しましたわね！？」

「お、オルコットさん！落ち着いて！一夏も冷静になってよ！」

顔を怒りで紅潮させたオルコットさんをなだめようとしたけれど、僕が男であったことが災いし、怒りの矛先がこちらに向いた。

「五月蝿いですわよ！醜い豚の分際でわたくしに指図しないで下さらない！？」

「指図なんて、僕はそんなつもりじゃ……」

「あなたのような自分の立場が、自らの存在の価値が分かっていない男性ほど、この世界に不必要な存在はありませんわ！」

ブツン……！

前に変にギスギスしたくないって言ったよね？だから、少しくらいの悪口くらい耐えるつもりだった。

でもごめんね、数分前の僕。流石にもう無理。我慢できない。

「ぎゃあぎゃあ喚かないでよ、他人の迷惑だって気付かない？」

「なっ！あなた、誰にものを言って、」

「だから喋らないでって、言ったよね？君って鳥頭？ああ……、そ

の頭に乗ってるのって、鶏のトサカだったのか」

「ッ～～～～～！？」

分からなかった自分のことが少しだけ分かった。僕はこの女が嫌いだって事をね。

「いいでしょう、決闘ですわ！」

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「だね。受けて立ちますよ」

後には引けないし、引くつもりはない。この女の高飛車な態度は我慢ならない。

「話は決まったようだな」

僕らの話がまとまったのを見て、織斑先生が言葉を続ける。

「それでは勝負は一週間後の月曜、放課後の第三アリーナで行う。各自、それぞれ用意をしておくように。では授業を始める」

パンッ、と手を叩いて話を締める。不敵な微笑を浮かべるオルコットさん、いいや、さん付けはやめよう、オルコットを一瞥すると自分の席に戻る。

（時間はある。資料もある。後はやるだけやってみるしかない）

あの女の鼻をへし折る。そう腹を括った僕は教科書を開いた。

第二話　Bパート　～宣戦布告～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

原作とアニメの両方をベースにしていますので、第二話はここまでだと判断させていただきました。

では、またの機会に。

第三話　～勝利を目指して～（前書き）

第三話です。

早くもスランプに陥りそうです…。早く抜け出さなければ。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第三話　～勝利を目指して～

「……一夏」

「……わかってる。言わないでくれ」

未だにざわめきの冷めやらない、むしろ休み時間よりもにぎやかと思える放課後の教室。僕は一夏の顔に冷ややかな視線を向けた。逃げるように机に突っ伏した一夏に呆れを通り越して笑いがこみあげてくる

あの宣戦布告の後、一心不乱にノートと教科書にかじりついたお陰か、最低限の知識は理解できた。

一方の一夏は……言わなくてもいいよね。今の一夏を見てくれれば分かるよ。一夏も一夏なりに頑張ったんだろうけど、やっぱり事前知識があるのとないのじゃ、大きな差がでるみたい。

その差をなんとかしてあげようとしてるんだけど……何日かかるかなぁ、これ。

「それにしても……」

一夏をどうするかも問題だけど、もっと問題なのはあのオルコットの事だ。

話に聞くと、各国の代表候補生は自分だけのＩＳ、いわゆる専用機を持っているらしい。それらは常に先進的な技術を試験的に組み込んでおり、結果として現行ＩＳよりも高いスペックを誇っている。

オルコットが特例中の特例で専用機を持っていない、なんて事はまずありえないだろう。

さらに、ＩＳには稼働した時間に比例して使用者の特性を理解しようという特殊な学習ＯＳがセッティングされており、稼働時間はそのまま相性に直結する。ＩＳを稼働させた回数なんて比べるまでもなく、候補生たるオルコットの方が絶対的に多いだろう。

悔しいけど、オルコットはこの二点で僕らに圧倒的なアドバンテージを持っている。これは一朝一夕でひっくり返せるものじゃない。

逃げ出すのかって？冗談じゃない。やると言った手前、勝利以外の結果は必要ない。

でも、その勝つための方法が見えてこない。袋小路だ。

「「はぁ～……」」

僕と一夏が同時にため息をつく。そんな時だった。

「織斑くんに緋神くん。まだ教室にいたんですね。良かったです」

「山田先生？」

声の主はクラスの副担任を任されている山田先生だった。先生の手には書類が握られている。会議でもあるのかな？

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「寮？」

手渡された鍵をまじまじと眺める。

困惑している僕に一夏が助け船を出してくれる。

「この学校、全寮制なんだぜ。なんでも、ＩＳ操縦者の身を守るためだとか」

「今の世界ではＩＳ操縦者の数が国や企業の強さに繋がりますからね。どこかの国が強行的な手段をとらないという保証はありませんから」

「なるほど……」

一夏の言葉を受け継いだ山田先生に頷く。一夏が全寮制の理由を知っていて以外と思ったのは内緒。

ともかく、男子でありながらＩＳを起動できる僕らの存在は確かに各国からすれば喉から手が出るほど欲しい人材のはず。山田先生が言っていたように、干渉を受けないともかぎらない。

それなら寮に入ってしまったほうがよっぽど安全だ。

僕が納得したのを見て、山田先生はやわらかな笑顔を浮かべながら質問する。

「他に聞きたいことはありませんか？」

「あの、山田先生」

「はい。何ですか、織斑くん？」

困っていると顔に極太明朝体で書かれている一夏が手をあげた。

一夏、分かりやすいにも程があるよ。

「俺、今日から寮に入るって聞いてないので、一旦家に戻っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら――」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思えよ」

一夏の天敵（？）の織斑先生が現れ、無意識に一夏は一歩後ろに下がったいた。苦手なのかな？

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだかな。緋神、おまえのも用意してある」

「え？」

まさか僕の分まで用意してあるなんて思っても見なかったので、単純に驚いた。まさか生活用品まで用意してくれるなんて……。

「ありがとうございます、織斑先生」

最大限の感謝をこめて頭を下げた。織斑先生は軽くフッと吹き出すと、「かまわん」と一蹴する。

どうしよう、どうやって恩を返せばいいんだろう。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに寮には大浴場もあるんですが……お二人はまだ使えません」

「え、何でですか？」

「一夏」

ドン、と一夏の脇を肘で叩く。少し考えれば分かることなのに、何で頭が回らないのかな…？

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

一夏は織斑先生の言葉で僕らのいる環境が特殊だと思い出したようだ。

ここは元々女子しかいないはずの学園。僕と一夏はイレギュラーなんだよ。

「お、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

何を想像しているのか、真っ赤な顔をした山田先生が一夏をたしなめる。誤解を解くべく、一夏が即座に否定する。

「い、いや、入りたくないです」

「ええっ？女の子に興味が無いんですか！？そ、それはそれで問題のような……」

なにやら変なエンジンがかかったらしい山田先生の言葉が、僕らの話を聞いていた女の子たちに曲解して伝わった。

「織斑くん、男にしか興味が無いのかしら……？」

「ちょっと残念な気もするけど、それはそれで……いいわ。実にイイ！」

「夏×カイ、カイ×夏……。どっちも捨てがたいわ！」

「……」

すすすっ……

「あ、あれ？カイト、何で俺から離れるんだ？」

「なんでもないよ、気にしないで」

「そ、そうか……？」

そう、他意はないんだヨ。イチカ。

何で記憶はないのに、ああいう言葉は理解できるんだろう？自分がマッタク分からない。

「それはそうと、緋神」

「は、はい？」

織斑先生に名前を呼ばれ、そちらを向くと、こちらに背を向ている先生の姿があった。

「おまえには用事がある。私についてこい。山田君、後を頼む」

「え！？あのっ、会議は！？」

「後を頼むと言った。緋神、行くぞ」

あの～、山田先生が泣きそうなんですけど、織斑先生ぇ～？

「と、とりあえず行ってくるね。……山田先生のフォローよろしく」

「気が重いが……お、おう」

一夏に後を任せた僕はずんずんと先を歩いていく織斑先生の背中を追った。

先生が歩くたび、道を塞いでいた女子の壁が割れて道ができる。その姿は現代に現われたモーゼだ。

そのまま連れてこられたのは、職員室。

「どうした？入らないのか？」

そうは言いますけどね、織斑先生。学生にとって職員室というのは夏のグラウンドと並ぶくらい苦手なものなんですよ？
さすがに抵抗感が――

「あの子でしょ？噂のもう一人の男の子って？」

「うわ～、ああいう人タイプなんだよねぇ～！」

「写真部！写真部はどこ！？」

「失礼します」

迷うことなく一歩踏み出して職員室に入った僕は後ろ手でドアを閉める。開けたら閉める、鉄則だよね。

「こっちだ、緋神」

招かれるまま案内されたのは、織斑先生のデスクだ。教員ともなるとやることも山の様にあるようで、書類が小山を形成していた。

「そこに座って少し待っていろ」

椅子を勧めた織斑先生は、僕を残して職員室の隅の方へと引っ込んでいってしまった。

一人残された僕は先生方の視線に晒されることになった。職員、しかも全員が女性と言うことなので、すごく居たたまれない気持ちになってくる。

うぅっ、胃に穴が開きそう……ん？

不意に動かした視界のなかに何か奇妙なものが映り込んだような……。

気のせいかと思って、別の方向を向こうとした瞬間、

――ズクン

「……ッ！？」

妙な視線が胸中深くに突き刺さり、強烈な圧迫感を感じた僕は、手で胸を押さえる。圧迫感は僕の身動きを封じるように、心臓を締め付ける。それも逃がさないといわんばかりの強烈なものだ。

視線は人らしさを感じさせない、まるで、獲物を刈る前の血に餓えた獅子のように鋭くて、それでいて熱さと冷たさの矛盾を内包する視線。

なんだ？一体、『ダレ』が僕を呼んでいるんだ？

目を動かしてその正体を探る。いや、探すまでも無かった。

『彼女』は織斑先生のデスクに乗った書類の塔の影に隠れていた。

見つけたのは――黒いヘッドセット。

味気も飾り気もない、ただ機能だけを追求した簡素なデザイン。だが、その黒い輝きの秘めた魅力に僕は引き込まれていた。

（アレにふれたい）

そう考えてしまった僕の手は『彼女』に伸びていた。

距離が近付くにつれ、僕の心臓が痛いほど激しく高鳴る。何かが奥からこみあげてくる。

あと、少し。あと少しで――

パシンっ！

「痛ッ！」

静電気に似た衝撃が手のひらから伝播し、手を押さえて飛びのいてしまう。だ、誰！？

「人の机を物色しようとするな、馬鹿者め」

僕の手を叩いたのは、数枚の書類を小脇に抱えた織斑先生だった。物色、という言葉を妙に強調されたせいか、先生方の視線は一気に冷たいものへと性質変化した。

「い、いえ！僕は決して物色をしようとしたわけじゃ……！」

さすがに編入一日目で犯罪者予備軍入りしたくない！慌てて弁明する僕を見て、織斑先生はニヤッと唇を曲げた。

「冗談だ。何を真に受けている？」

「笑えない冗談は冗談じゃないですよっ！」

ただでさえＩＳの登場で男性の立場かないっていうのに、冗談とは言え、あんなことを他の聞いたら僕は警察に連れて行かれちゃうよ！

「そう怒るな。これが気になったんだろ？」

慌てている僕を軽くたしなめると、あのヘッドセットを手に取ってこちらに向けた。

それからは威圧するような視線も、押し潰されそうな圧力も感じない。

さっきのは錯覚だったのかな？

でも、あの二つの感覚はまだ胸に残っている。現に、僕の心臓は今だにバクバクと鐘を打ち鳴らしている。

「それ、先生のですか？」

「今のところは、な」

答えになっている様でなっていない返事を僕に返すと、デスクの引き出しにヘッドセットをしまいこんだ。

なんでだろう、またすぐにあえる気がする。これは一瞬の予感じゃなく、根拠のない確信として心に残っている。

「お前には色々話すことがある。だがその前にまずは座れ、緋神」

「あ」

織斑先生に指摘されるまで自分が立っていたことに気が付かなかった。大人しく椅子に腰掛ける。

妙な空気が辺りに漂い始める。もしかして僕、説教されるのかな？書類を退かし、そこへ脇に挟んでいた書類を置いた織斑先生が向き直り、僕を正面にとらえる。

「さて、」

「は、はい！」

「まずは今日一日はどうだった、編入生？」

「へ？」

てっきり説教されるのかと決め付けていたせいか、まさか感想を聞かれるとは思ってもみなかった。

とりあえず、正直にいこう。

「楽しかったです、とっても」

「無理はしていないか？」

いいえ、と僕は首を横に振る。

嘘なもんか。さすがにクラスメイトが全員女の子だったのには驚いたし、オルコットとの一件は頭に来たけれど、それらを差し引いても十分すぎる一日だった。

「お前がそういうなら追及はしないが、今日のようなあまり目立った真似は控えてくれよ？」

いや、あれは仕方ないと思いますよ。あれだけ人を小馬鹿にするような人は一回くらい鼻っ柱をへし折られたほうが後々成長しますよ、きっと。

そしてその役目は一夏じゃなくて、僕がやるんだ。一夏には悪いけどね。

「相手はイギリスの代表候補生、敵は強大だぞ」

「わかっています。ですから織斑先生、無理を承知でお願いします」

専用機を持つ代表候補生のオルコットと、ＩＳのイロハもあやふやなズブの素人である僕が互角以上に戦う方法。曖昧で、いまいち形にならなかったイメージが今、具体な形となって脳裏に浮かんだ。

口に出した瞬間殴られそうな提案だけど、背は腹に変えられない。僕は意を決して言葉にして伝える。

――ＩＳを一機、僕にください。

第三話　～勝利を目指して～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

なんだか雲行きが怪しくなってきましたね…。なんとか持ちなおせるよう努力しますので、生暖かい目で見守ってやって下さい。

それでは、またの機会に。

第四話　Aパート　～出撃～（前書き）

第四話、Aパートです。

クラス代表決定戦です。長くなりそうなので、前後編に分けました。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第四話　Aパート　～出撃～

一週間は意外と短い。オルコットに勝つべく東へ西へ走り回っているうちに、気付いた時には試合の日を迎えていた。

ISスーツに着替えた僕は決闘の場である第三アリーナのAピットへやってきた。

「目をそらすなっ」

「ん？」

ピットへ入った僕を待っていたのは、声を荒げている一夏と、ぷいっとそっぽを向いている篠ノ之さんがいた。

「おはよう。一夏、篠ノ之さん」

挨拶をしながら二人の元へと歩いていく。

「よう、カイト」

「……」

いつも通り挨拶を返してくれる一夏に対して、やっぱりと言うべきか、ツンと澄ましたように明後日の方向を見ている篠ノ之さん。

嫌われてるなぁ、僕。ちょっとショック。

「気を悪くしないでくれ、箒はいつもこんなんだから」

「大丈夫だよ、気にしてないから」

一夏が僕にだけ聞こえるように耳打ちしてくれる。篠ノ之さんに無視されるのは何となく見越してたから、あんまり気にしていないのも事実だし。

篠ノ之さんは気難しい、というよりも、古風な雰囲気の娘だからなぁ。他人と話すのがあまり得意じゃないって見える。

いつかはちゃんと話せるようになりたいけど、それっていつになるんだろう。はぁ…。

「それよりカイト、お前練習か何かしたか？」

「あ、うん。一応、この一週間はＩＳを動かしてたよ」

ちょっとでもＩＳを動かしてなければ、本番でまともに渡り合うことは出来ないだろうと考えた僕はこの一週間、暇さえあれば時間を目一杯活用してＩＳを動かしていた。

しかし、知識があってもＩＳを動かすのはそう簡単な事じゃない。どうしても自分の体と同じように動いてくれないのだ。反射的な動きが必要不可欠とされるＩＳ戦で、このポイントは重要だ。この問題を解消するのには大分時間が掛かった。なにせ、一週間の半分以上を費やして、ようやくものに出来たんだから。

おかげで、当初の予定から大きく遅れてしまった。今日もピットへくるのが遅れた理由もそこにある。

「一夏は？篠ノ之さんと練習したの？」

一夏はこの一週間ずっと篠ノ之さんと行動を共にしていた。きっと一人で練習していた僕よりも質の良い練習をしたはずだ。

「……ああ。練習はしたぜ」

質問をしかえすと、一夏はふっとニヒルに笑って顔を背けた。なんだろう、答え方が一夏にしては歯切れが悪い。まさか、僕には想像も出来ないハードな練習を、

「――剣道の練習を一週間ずっと、な」

ごめん、一夏。

僕は居たたまれなくなって、心の中で深々と頭を下げた。

「で、でもほら！ＩＳは人の動きをトレースするし、接近武器も持ってるから、剣道はとっても良い練習方法だって僕は考えるな！」

蔓延している妙な空気を払拭するようにフォローする。うん、嘘は言ってない。接近武器の扱いに慣れるという意味でも、剣道はいい練習方法である……はず。

「そ、そうだろう！ＩＳは自分の動きを模倣するということは、つまり！剣道の動きも無駄にならずにすむのだぞ、一夏！」

「ほ、箒！？」

突然、口を堅くつぐんでいた篠ノ之さんが口を開いて一夏に詰め寄

っていく。ビックリしたぁ。

「地に足を付け、しっかりと相手を見据えて、精神を鋭く集中させる。一心、二眼、三足。これはＩＳの動きにも通じるものがある！そうだろう、緋神！？」

「そ、そうだね……！きっと、そうだよ……」

「そ、そうなのか……？」

ＩＳは空中高速戦が基本です、とは口が裂けても言えないので、大人しく頷いておく。

僕が頷いたのを見た一夏は眉をしかめながらも納得？した。

後で一夏に色々とフォローしておこう。きっと分からないって頭を抱えるだろうから。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

緑色のボブヘアーを揺らしながら、山田先生がピットに駆け込んできた。

しかし、なんともまぁ、転びそうな走り方だ。うわっ、危ないですよ、山田先生！

今にも転んでしまいそうな山田先生だったが、ちゃんと一夏の元へとたどり着く。取り越し苦労でよかった。

「山田先生、落ち着いて下さい。はい、深呼吸」

「は、はい！す～～は～～、す～～は～～」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

言われるがまま、山田先生は息を止めた。一夏は冗談で言ったんだろうけど、山田先生にそれは通じなかったのか、そのまるっこい顔が赤に染まっていく。まずい、このままじゃ酸欠で倒れかねない。

「や、山田先生、早く息をはいてください！」

「ぷはぁっ！苦しかったです…」

ぜぇぜぇ、と肩で息をする山田先生。危ない、後ちょっとでも声をかけるのが遅れていたら、きっと破裂していただろう。

スパンッ！スパーンッ！

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者共が」

あの、それって僕も含まれてるんですよね？だから叩いたんですよね？

「千冬姉……」

パァンッ！

「織斑先生と呼べ。学習できない者は一度死んでこい」

クラッカーがなったと勘違いするような破裂音が一夏の頭の上で鳴った。痛みで一夏がうずくまっちゃったよ。

「さて、山田先生。伝えるべきことがあるんじゃないのか？」

「あっ！そ、そうでした！」

千冬さん、もとい織斑先生に促され、山田先生が頭をさすりながら立ち上がった一夏に話し掛けた。

「来ましたよ！織斑くんの専用ＩＳ！」

「「……え？」」

一夏への言葉のはずなのに、僕も同じように驚いてしまう。

一夏専用機？ナニソレ？僕、聞いてないよ？

「さあ織斑くん、行きましょう！」

「一夏、早くしろ！」

「え、ちょっ、まっ……」

「あ、一夏！」

専用機の事を訊こうとしたのに、山田先生と篠ノ之さんにがっしりと両腕をホールドされた一夏はそのままずるずると引きずられていった。

「織斑先生、一夏専用ＩＳってなんですか？」

やたら気になるので、一人残っている織斑先生に質問する。

「男性でＩＳを起動できる人材が見つかったことで、政府や企業連合からそのデータを提供しろとうるさくてな。データ収集を目的として専用機が用意されたんだ」

まあ、僕の存在は一応非公式らしいから、世間では一夏がＩＳを動かせるたった一人の男として認知されているんだろう。だから、専用機も用意されたんだろう。

「羨ましいか？」

「そりゃあ、羨ましいですよ」

ＩＳのコアは４７６個と絶対数を保っている。その中の一つを支給され、さらには最新鋭のシステムを積んだ機体まで付いてくる。ＩＳを乗る者なら誰しも、自分だけの機体が欲しいと思うのは当然だろう。

けど、一夏の専用機か……。どんなのだろう、やっぱり気になるなぁ。見に行ってこようかな？うん、そうしよう。

一夏達が消えていった方へと歩きだそうとする僕の肩を織斑先生が掴む。すごい握力だ、大人の男の人よりもあるんじゃないかな？

「待て、緋神」

「…な、なんでしょうか？」

底冷えする声色で僕を呼ぶ織斑先生に身体ごと向き直る。生命の危機を感じたのは、勘違いではない。織斑先生の鋭利な刃物を思わせる眼光が僕を射ぬいている。

「お前にはこれを渡しておく」

そう言って差し出したのは、織斑先生のデスクにあった、あの黒いヘッドセットだった。

「え、あの、これって織斑先生のじゃありません？」

差し出されたものの、どうしたらいいのか分からなくて、ヘッドセットと織斑先生の顔を交互に見る。

「緋神、これはお前のものだ」

「僕の？」

織斑先生の言葉の意味を今一つ理解できず、聞き返してしまう。「そうだ」と織斑先生は頷いて、話し始めた。

「お前を海岸で見つけたとき、これはその手に握られていた」

僕の右手に視線を送り、再度そのヘッドセットをさしだす。

「一応の検査が終わったので、持ち主に返そうと思ってな。どうした、受け取らないのか？」

口を開くことをせずに、ただ差し出されたヘッドセットに手を伸ばして受け取る。僕のたった一つの所持品、黒いヘッドセット。僕の無くした記憶の手掛かり。

――タダイマ。

「っ！？」

今、コイツから声がしたぞ……！？

頭を振って、もう一度ヘッドセットを見つめる。しばらく凝視していたけど、さっきの声は聞こえない。

（気のせい、だったのかな？）

「どうした、緋神。気分がすぐれないか？」

「あ、いえ。平気ですよ」

平気、そうだ、平気だ。織斑先生に返事をした僕は受け取ったヘッドセットを首にかける。

パズルのピースがかっちりと当てはまるように、僕の首にそのヘッドセットは馴染み、言い知れない安心感を僕に与えてくれる。

僕を無感情にじっと見つめていた織斑先生の携帯端末が鳴り出した。慣れた手つきで操作し、僕と目を合わせる。

「緋神、お前が注文していた奴が搬入されたそうだ」

言葉に続くように、ズズン、と目の前のピット搬入口が開かれる。
重い駆動音の後に、扉の奥に隠れていた物が顕になる。

僕が用意してもらったのは、日本産のＩＳ『打鉄（うちがね）』。現行しているＩＳの中でも、デュノア社製ＩＳ『ラファール・リヴァイヴ』と肩を並べるほど優秀な性能を誇っており、この学園でも訓練機として採用されている。

ただ、そのシルエットは本来の鎧武者から大分かけ離れており、どちらかといえば落武者に見える。

それもそうだ。この機体は打鉄であって打鉄ではない。この機体は、僕がオルコットに勝つべくしてチューンアップした特別な機体なのだから。

拡張領域限界（バススロット）まで武装を詰め込み、本体にも装備できる限りの武器を積んだ。それが機体のシルエットを変貌させている最たる要因なのだ。

これをしたかったから、ＩＳを一機くださいと頼んだんだ。まあ、にべもなかったけど。

けれど、僕の頼みを聞き入れてくれた織斑先生が僕のプランを受け取って、実行してくれたんだ。

「ありがとうございます、織斑先生」

「礼は後だ。さっさと装備しろ」

頷いて、展開されている前方装甲に身を預ける。クッション剤があるように、僕の身体をＩＳが包み込んだ。

肉眼よりもはるかに透き通った視界がオールビューとなって広がり、全身の感覚がＩＳと一体化する。各種センサーから様々なデータが雪崩のように表示され、水泡のように消えていく。

大丈夫。動いてくれる、理解してくれる。

「ハイパーセンサーは問題なく機能しているはずだ。気分はどうだ、緋神？」

「はい、千冬さん。問題ありません。いつでも出られます」

むしろ、フィッティングし過ぎて怖いくらいだ。

返事をした僕に「それはよかった」と小声でつぶやいた千冬さんは、顎でピットゲートをしゃくった。

「なら、行ってこい」

「あれ？一夏はどうしたんですか？」

「アイツの機体はまだ『初期化（フォーマット）』と『最適化（フィッティング）』が完了していない。出撃には少し時間が掛かる」

意外に専用機は面倒機なんだな。そんな事をやらないといけないなんて。

お言葉に甘えて、先にやらせてもらおうとしようかな。

と、その前に、

「一夏、聞こえる？」

『おう、バッチリな』

通話回線を開いて設定中の一夏に話し掛ける。姿は見えないのに一瞬で返事が返ってくる。

「悪いけど、僕が先にやらせてもらうよ」

『しょうがない、ここはカイトに任せるぜ』

「うん。任されたよ」

姿の見えない友達に返事をした僕は、射出カタパルトにＩＳを進ませる。

カシュッ！

踵裏がフックで固定され、射出の態勢を取ったところで、再び一夏の声が響いてきた。

『カイト』

「ん？」

『負けるなよ。ほら、箒もカイトに何か言ってやれって』

『な、私は別に……！』

一夏の回線から、篠ノ之さんの声が響いてきた。な、何を言われるんだろうか？

ドキドキする僕の耳に「あ、緋神」と、篠ノ之さんの声が聞こえてきた。

「し、篠ノ之箒だ。よろしく頼むぞ」

「あ、うん。僕は緋神カイト、こちらこそよろしく」

……あれ、これって自己紹介？先週やらなかったっけ？

まさかこの場面で自己紹介するなんて思わなかった。思わず笑いがこみあげてきて、緊張なんて忘れてしまった。

『な、何を笑っている！？』

「なんでもないよ。一夏、篠ノ之さん」

『な、なんだ？』

真っすぐ前を向いた僕は、深く息を吸い、ありったけの力を腹にこめた。

「一一行ってきます！」

『あ……ああ。勝ってこい、緋神！』

『負けたら承知しないぜ、カイト！』

二人の声援を背に受けた僕は、声を張り上げる。

「緋神カイト、出ますッ！」

声に反応し、装備した打鉄が勢いよくカタパルトの上を滑っていき、カタパルトとの接合を解かれた打鉄が宙に放り出される。

両肩のウィングが大きく展開され、空を舞った僕はアリーナの中央で腰に手を当てて待ち構えているオルコットと対峙する。

ビビットブルーの装甲、鋭利な四枚のフィン状の非固定（アンロック）ウィングを備えたその特徴的なデザインは見る者すべてに気高さを感じさせる。

――セシリア・オルコット専用機『ブルー・ティアーズ』。中距離射撃戦を得意とするビーム兵器搭載型の第三世代ＩＳ。

僕は今からコイツと戦わなくちゃいけない。

「あら、逃げずに来ましたのね」

金髪を揺らしたオルコットがふふん、と鼻を鳴らす。その人を見下したような態度が腹立つ。

「悪いけど、僕は人との約束は破らないようにしてるんだ」

「殊勝な心がけですのね」

「お褒めに与り光栄です、レディ？」

皮肉るように恭しく一礼を返した僕に、こめかみに青筋を浮かべたオルコットがびしっと人差し指を向ける。

「最後のチャンスをあげますわ。その鉄クズを脱ぎ捨てて、今すぐ地に頭を付けて謝罪すれば、許してあげないこともなくってよ？」

「君って、もしかしなくても馬鹿？」

なっ、とオルコットが言葉に殴られてよろめく。それにかまわず、僕は続ける。

「始まる前から負けるなんて考える人なんているわけないでしょ？それに、それは恥の上塗りっていうんだよ」

決めた。絶対に負けなんか認めてやるもんか。むしろ、その青い機体ごと地面に打ち落としてやる。

「そうですか……。せっかく私が恥を忍んでさしあげたのに」

「そういうのは要らないよ」

ブルー・ティアーズの装甲から敵意が漏れ始める。すでに試合開始のゴングは鳴っている。いつ仕掛けてくるのか、見極めるんだ。

「そう？残念ですわ。本当に、」

――警告！敵ＩＳ射撃態勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

（来る！）

「残念ですわねッ！」

第四話　Aパート　～出撃～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

Bパートはｖｓセシリアです。戦闘パートメインになるだろうと思います。

それでは、またの機会に。

第四話　Bパート　～予期せぬ覚醒～（前書き）

第四話、Bパートです。

今回はＶＳセシリア戦を全編に渡ってお送りします。戦闘パートという事で作者の限界ギリギリの文才を発揮しましたが、果たしてどうなることになっているのか……。

長文かつ駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第四話　Ｂパート　～予期せぬ覚醒～

「そう？残念ですわ。本当に――」

――警告！敵ＩＳ射撃態勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

（来る！）

「残念ですわねッ！」

キュインッ！

オルコットが六七口径特殊レーザーライフル『スターライトｍｋ？』の銃身を構えた刹那、蒼白の閃光が瞬く。

「ぐぁッ！」

肩に光が直撃し、身体を衝撃が貫く。突き飛ばされたような勢いに負けてそのまま地面に落下する。

「くそっ！」

地面にぶつかる寸前で体勢を立て直し、そのままウィングを広げて距離を取る。

反射的に身体を捻ってなんとか直撃するのだけは回避したのはいいけど、十分の一ほどシールドエネルギーが持っていかれた。

あのレーザー兵器、思ってたよりも弾速が迅い！

「さあ、踊っていただきましょうか。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

キュキュキュキュキュン！

聴覚にこびりつくような甲高い音と共にスターライトｍｋ？から次々と発射されるエネルギー弾が弾幕となって僕の頭上から降り注ぐ。

「機体が重いっ！」

機体をブーストして必死に回避をするものの、オルコットの放つライフルの狙いは正確無比で、まるで僕の動きを読んでいるかのように光が打鉄を掠め、じわじわとシールドを削っていく。打鉄に武装を詰め込みすぎたのか、機体のコントロールが若干遅れているのも原因だろう。

楽観視していた僕が甘かった。代表候補生とはこんなに実力の差があるものなのか。第二世代ＩＳと第三世代のＩＳでは、こんなにも性能の差があるのか。

それでも、負けるつもりなんてない。これは僕の『男』を賭けた戦いなんだ。

「行くよ、打鉄！」

降りしきる青いレーザーとレーザーの僅かな隙間をくぐり抜け、オルコットとの距離をつめると、打鉄のサイドスカートに収納しておいたアサルトライフルを一丁ずつ掴み、素早く狙いをさだめて発砲

する。

ダダダダっ！

褐色にも見える二本の火線がオルコットの纏う青い装甲をとらえる。やった、まずは一撃！

「このっ！極東の猿の癖に！」

「喋ってると舌を噛むよ！」

相手の狙いを定めさせないように加速しながら縦横無尽に滑空しつつ、アサルトライフルでオルコットを打ち続ける。最適な狙撃距離を保ち続けるように立ち回るオルコットの放つレーザー兵器が、機体を掠めることはあっても鈍い輝きの打鉄の装甲板をとらえることはない。

しかし流石第三世代ＩＳ、全然シールドが削れていない。相手の装甲は打鉄よりも堅いし、シールドエネルギーの総量も多い。アサルトライフルの火力でやるとなると長期戦は免れないだろう。

カチッカチッ！

打ち合っているさなか、ライフルのトリガーから虚しい音が響いてくるのに遅れて、画面に警告が表示される。

――装備中のアサルトライフル、全装填弾使用終了。リロードの必要あり。

「隙あり、ですわっ！」

キュインッ！

アサルトライフルの弾幕が切れたのをチャンスと見たオルコットのライフルが青を放つ。

「当たるもんかッ！」

デッドウェイト化したアサルトライフルを投げ捨てた僕は打鉄を急降下させ、オルコットのレーザーライフルの射線から離脱する。

訓練機に搭載されているだけあってやっぱり装填数は少ない。でも、そんなことは百も承知だ。

地面スレスレを飛行していた僕は再度スカートに手を伸ばす。そこには先ほど投げ捨てたアサルトライフルとまったく同じ物が収納してある。

ライフルを構えて急上昇、オルコットの真下から青い装甲を打ち抜く。

ブルー・ティアーズが大きく旋回し、ライフルの射程から退くと急停止した。

「このブルー・ティアーズを前にして、初見で、しかも一般機で耐え抜いたのはあなたが初めてですわ」

「それは光栄だね」

言葉の割りにはオルコットは不適な笑みを浮かべている。嫌な予感

が胸を騒めかせる。「ですが、」とオルコットが言葉を繋げたのを聞いた僕は予感が確信に変わったのを理解した。

「第三世代ＩＳの、ブルー・ティアーズの本当の力はこんなものではなくってよ！」

ギュンギュンギュンギュン！

そう叫んだオルコットの背後に浮かんでいたフィン状の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が四枚すべて外れて僕を包囲する。僕を中心に据え、円運動していたフィンが開き、そこから銃口が露見した。

これは飛行姿勢安定用のウィングユニットじゃなかったのか！？

ドドドドン！

銃口が輝き、けたたましい炸裂音が鳴り渡る。スターライトｍｋ？と同色の閃光が僕を飲み込もうとする。

「くっ！？」

打鉄のウィングをたたんで、自身が弾丸になったかの様に急速で降下する。間一髪直撃は免れたものの、逃げ出すときにシールドエネルギーがごっそり持っていかれた。

「これこそわたくしのＩＳ『青い雫（ブルー・ティアーズ）』の由来である『ブルー・ティアーズ』ですわ！」

（ややこしいよ！）

追ってくるビットユニットから逃げながら心の中で突っ込みを入れた。口に出している暇なんてない。

「もっと激しく踊って下さらないかしらっ！」

オルコットが導くように手を振ると、フィン達の動きが一段と素早くなり、打鉄の移動先を潰すように並び、一斉に光を放つ。

「お願い、打鉄！」

減速している暇なんてない。勢いを保ったまま、垂直に飛び上がる。身体が押しつぶされそうなGに唇を噛んで耐える。眼下では目標を失ったレーザーがアリーナの地面を砕いていた。

「左足、いただきますわ！」

「！」

スターライトｍｋ？のレーザーが宣言通り、左足に直撃する。脚を掬われたように、打鉄を身に纏った僕の身体が空で溺れ、上下左右の感覚がおかしくなる。

刹那、接近してくる四枚のフィンが視界に入る。なんとかしなくちゃ、このままじゃシールドエネルギーが持たない！

「これで！」

身体を回転させたまま、アサルトライフルのトリガーを引く。

ばらまかれた弾が牽制と作用してくれたのか、フィン達は僕から離れていき、オルコットの周囲で砲撃姿勢を保ったまま動きを止めた。

「どうかしら、ブルー・ティアーズのお味は？お気に召しまして？」

「くど過ぎて、僕には合わないかな」

軽口を返すが、実際にはそんな余裕はない。四つのビットユニットとの連携はかなりの脅威で、これを対処しないかぎり僕に勝ち目はない。

落ち着け。落ち着けよ、緋神カイト。どんなものにだって何かしらの欠点があるはずだ。それを捜し出すんだ。

「まさかこの程度、ではありませんわよね？」

ふふん、と僕を侮蔑したような笑いを浮かべるオルコットの手が見えない鍵盤をたたくと、それに合わせて、四つのフィンが僕に飛び掛かってきた。

？

「すごいな、カイトの奴」

「ですねぇ～」

ピットでモニタリングしていた一夏が感嘆の声を洩らした。隣に立つ箒は無言で頷き、さらに同意するように真耶がため息混じりにつ

ぶやいた。

モニターの向こう側のカイトは打鉄を巧みに操作し、セシリアの繰り出す連続攻撃に対処していた。

その動きは、到底素人のものとは思えないものだ。

「それにしても、どうして緋神くんは打鉄を選んだんだでしょうかね？」

不意に真耶が疑問を千冬に投げ掛けた。

打鉄は確かに汎用性が高いが、ラファール・リヴァイヴと比較すると速度面や旋回性で劣っている。スピードを生かしたコンバット・トリックを多用するカイトには打鉄よりもラファール・リヴァイヴの方が相性がいいのでは？と真耶は思ったのだ。

画面に見入っていた千冬は顔を動かすことなく質問に答える。

「編入試験の際にアイツが起動したのがあの打鉄だっただけだ。一度でも起動させたＩＳの方が勝手がきくんだろう」

「はぁ～、なるほど～」

真耶は千冬の説明に納得する。確かに一度でも動かしたことのあるＩＳの方が身体に馴染みやすい。そこをカイトも理解していたに違いない。

（だが、短期間で打鉄をあそこまで乗りこなすとは、緋神カイト、お前は何者なんだ？）

千冬が疑問をモニターの向こう側のカイトにぶつけた瞬間、試合が更に動き出した。

？

ドンドンッ！

砲撃音に続いて放たれた青色光線が打鉄の脇を掠める。なんとか直撃は避けられるようになった。

「避けるのはお上手ですのね？」

「それは誉め言葉として受け取っておくよ」

四基のブルー・ティアーズを従えたオルコットが僕を見下ろしている。まだまだシールドエネルギーが残っているのも自信に繋がっているんだろう。

「それに、あれだけ撃たれれば避けるのもうまくなるさ」

でも、避けるのだけが上達したわけじゃない。これ以上、好き勝手させない。

弾数が残り少ないアサルトライフルを収納（クローズ）すると、打鉄の標準装備である刀型の実体剣を二本展開（ダブルオープン）する。

「あら、勝ち目がないと思って自棄になったのかしら？」

「どうかな？」

挑発するように笑ってみせると、オルコットのこめかみがひくっ、と動いた。

「でしたら、これで幕引き（フィナーレ）にして差し上げますわ！」

オルコットが手を横にかざすと、周囲に浮かんでいたフィンが二基命令を受け、多角的な動きで僕へと迫る――、と目の前で上下に散開したビットが発光し、エネルギーの塊を放ってくる。

まずは、上のビットを狙う。

意識を上から狙撃するビットに定めた僕は打鉄を急旋回させて、二つのビットが繰り出す攻撃を回避すると、最大速度でビットに肉薄する。照準レティクルがロックオンを告げるや否や、刃を振りかざす。

「はあぁッ！」

すれ違いざまの斬撃に、ブルー・ティアーズの一基が二つに裂け、爆散した。

「なんですって！？」

驚愕に目を見開いたオルコットを余所に、もう一基のフィンへと急降下する。

「くっ……！」

苦い表情のオルコットが右手を振るい、待機していた残り二基のビットを飛ばしてきた。標的とされたビットを守るように、次々にレーザーを放ち、僕を牽制する。

深追いは禁物、僕は呼吸を整える意味でも、一旦攻撃の手を止める。

ビットを切り落としたことで、確証を得た。

「ようやく分かってきたよ」

「何がですのっ！？」

苛立ったように返事をするオルコット。やっぱり、僕の考えは正しいんだ。

「君の武器（ビット）は命令を受けないと動かないし、動かしている時には君は動けない」

ひくっ！

一際大きくオルコットの目尻がひくついた。図星のようだ。

「更に言えば、君は僕の反応が一番遅れる場所にビットを配置する。つまり、僕の『捉えきれていない』場所を狙ってくるんだ」

ＩＳのハイパーセンサーは３６０度すべてを視野とすることができるのに対して、人の視界は扇状に広がっている。よって、二つの情報にはどうしても重ならない部分が出てしまう。

その情報の差異が『矛盾』となって僕の動きを鈍らせる。オルコットはその鈍りを利用して攻撃を仕掛けてくる。

だけど、それさえ分かってしまえばいくらでも対処できる。

両手に持った二本のブレードを握り直した僕は、打鉄を前進させる。

「極東の猿にっ！」

忌々しげに吐き捨てたオルコットは三基のビットを起動させ、僕へと飛ばしてきた。

後方で三方向に別れたビットは三角を描くように包囲網を張る。どうやらこれ以上僕をのさばらせるつもりはないらしい。

ドドドン！

三つのフィンが同時に火を吹く。手にした剣でレーザーを弾き、道を作る。

「見えたっ！」

オルコットへ至る道をたどる。道標のように浮遊していた一基のビットを切り裂き、更に加速する。

（貰った！）

剣戟の間合いに入った僕はそう直感した。ビットも間に合わない、マストアイテムのレーザーライフルも構える暇はない。このまま攻

め落とせる、そう勝利を確信した僕の前で、オルコットの唇が吊り上がった。

「――、かかりましたわね」

背中に氷水でも流し込まれたように体中が凍てつく。まずい、と何かを悟りかける僕の目の前で、スカート部が起立した。

誘い込まれたのか!?

「ブルー・ティアーズは六機ありましてよ!」

打ち出されたのは光学兵器(レーザー)じゃなく、弾道型実弾(ミサイル)兵器!?

「間に合うか!?」

追尾してくるミサイルから逃げながら実体剣を収納(クローズ)し、代わりにアサルトライフルを握るとミサイルを打ち落とす。

ドガァァァン!

もうもうと立ち上る爆炎が僕の視界を一瞬さえぎる。その刹那、

キュインッ!

「がっ!?」

黒煙を突き破ったレーザーが僕の腹部を直撃した。鈍器で殴られたような衝撃に、僕の身体は真っ逆さまに地面へと落ちていく。

体制を立て直さなくちゃ、と考える僕の耳元でアラートがなり、画面が真っ赤に染まった。

――システムに重大なエラーが発生。飛行制御不能、絶対防御展開不能。

表示された情報に目を疑う。まさかさっきの一撃でシステムがおかしくなったのか!?

「さあ、終わりにしましょう!」

なすすべもなく落下していく僕に向けてオルコットがミサイルを射出する。

『絶対防御』も機能しないのに、あんなものの直撃でも受けたら僕は絶対に、生きてはいられない。

死ぬ?死ぬの?こんなところで?

自分が何者かも分からないままこの世を去るのか?まだ千冬さんにも一夏にも恩を返してないのに?

心臓がバクバクと跳ね上がり、血が熱を持ち始める。しなくちゃいけないことはまだたくさん残っているのに、僕は……僕はッ!

ドガァァァン!

？

「緋神！」

モニターを見ていた箒が思わず声をあげてしまう。画面の向こうのカイトが爆炎に包み込まれたのだ。

真耶は口を押さえて驚きを隠し、一夏は絶句する。

ただ一人、口を固くつぐんだ千冬はモニターをじっと見つめている。

四人の視線が集まるモニターの中で、爆炎から何が落下し、地面にクレーターを形成した。

「……山田君。落下したＩＳを拡大してくれ」

「は、はいっ！」

千冬に言われるがまま、真耶がカタカタとキーボードを操作し、落下したＩＳを拡大表示する。途端に、全員が言葉を失う。

地面に落ち、行動不能となっているＩＳにカイトの姿がないのだ。そこに映っていたのは、主人を無くし虚しげに横たわる鉄の鎧だけだった。

「千冬姉、カイトがっ！」

ピピピピッ！

一夏の言葉を遮るようにアラートがピットに鳴り渡った。その正体を確かめるべく、真耶がキーを叩いて情報を整理し、ディスプレイに表示する。

そこに表示された情報を見た千冬がポツリとつぶやいた。

「やはり出てきてしまったか……」

？

地面に落下し、微動だにしない打鉄を見て勝利を確信したセシリアだが、刹那、アリーナの空気がドクンッ！と鼓動したのを感じ取った。

爆炎の中に身を潜めている鼓動の主人が身動ぎし、その目がこちらを捉えたような気がした。

「な、なんですの……？」

何かが目覚めてしまう、とセシリアが直感した瞬間、黒煙が風にさらわれ、鼓動の源が姿を現した。

現われたのは、黒い装甲板とその隙間から覗く金色に発光する内部装甲を露出させた見たこともないＩＳ。

フェイスガードに備えた、ライオンのたてがみのようなアンテナから、セシリアはそのＩＳを黒い獅子だと形容した。

「修正プログラム、最終レベル……。全システム、チェック終了…

…」

ぶつぶつと、呪文でも唱えるかのように装備者、緋神カイトが口を開いた。何を意味の分からないことを、とセシリアが眉をひそめた瞬間、どこからか個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）が繋がった。

『オルコットさん……。聞こえ、ますか……？』

途切れ途切れのその通話の主はカイトだった。セシリアはカイトがプライベート・チャネルを勝手に使ってきたことに怒りを顕にする。

『あ、あなたっ！勝手にわたくしに通信を、』

『早く……、逃げて……！このままじゃ、僕はっ、君を……傷つけちゃう！』

『あ、あなた！？一体何を！？』

ここに至ってようやくセシリアは彼の様子がおかしいことに気付いた。身体と心がまるで別にあるかのような、『ぶれ』を感じる。

「戦闘モード、起動。ターゲット確認、」

直後、バイザーの奥から覗く二つの無機質な瞳がセシリアを射ぬき、凍り付かせる。

「――排除開始……！」

ギュウンッ！

動く間はなかった。背面の大推進スラスターを展開した黒い機体が突進してくる。

「なっ……！？」

驚きに目を剥いたセシリアのすぐ脇を漆黒の機体が金色の残照を残して通過していった。

セシリアの背筋が凍り付く。さっきとはまるで比べものにならない速さに、すれ違いざまに感じた圧迫感（プレッシャー）に。

アリーナを縦横無尽に駆け回る黒き獅子は彼女などには興味はないといわんばかりに空を走っている。その動きは、重枷からときはなれたかのような生々しい躍動感を伴っていた。

「わたくしを無視するなんて、いい度胸ですわ！」

自分に見向きもしない彼に苛立ちを覚えたセシリアはカイトの警告を無視して、残った二基のブルー・ティアーズを黒いＩＳに向けて射出し、レーザーを放つ。

ドンドン！

「……！」

迸った青い閃光が黒い体躯を掠め、その動きを牽制する。セシリアに背を向けていた黒いＩＳが彼女を睥睨する。

その視線に込められた、食い千切られるという原初的な恐怖がセシリアに襲い掛かる。

「ッ！！」

両手を大きく横に広げた獅子の手にＩＳ用の実体剣が展開（オープン）される。底見えぬ闇のような黒い刀身に一条の黄金の線が入った剣を確認したセシリアは考えるよりも先にフィンを稼働させる。

「……」

自身を囲む二つのヒレを捉えた獅子は爆発的なスラスターの光を背に携え、一気に上昇し、その先で発射間近のブルー・ティアーズを捉えると装備した実体剣を左右に振った。

ザンッ！

熱したナイフでバターを切るがごとく、ビットは真っ二つに切り捨てられ、瞬時に爆散し、アリーナの空に散った。

「オルコット、退け！今の緋神は普通じゃない！」

「冗談ではありませんわ！」

プライドが正常な判断を鈍らせる。アリーナ内に響いた千冬の警告を無視したセシリアは残った最後のビットユニットを彼に向ける。

青い粒子の光軸が立て続けに打ち出される。が、それを難なく避けたＩＳは急制動をかけ、姿勢を転換し黒の刃を振り下ろした。

スパン、と容易く割け、爆発したビットを一瞥した黒い鉄騎がセシリアに迫る。

「まだ手は有りましてよ！」

ぐん、とスカートの突起が外れて隠れていた銃身を晒すと、そこからミサイルが発射され、獣に飛来する。次の瞬間、セシリアは目を疑った。

「なっ――！？」

背面のスラスターが一際大きな光を爆発させた黒い獅子が視界から消えた。それだけではない、ＩＳの誇るハイパーセンサーすらもその動きを捉え切れず、目標をロストしたと情報を表示した。

『早く逃げてッ、セシリアッ！』

プライベート・チャネルから悲痛なカイトの声が響き渡ったその時、警告音がセシリアを貫いた。

――接近警告、それも下から。

理解したときには遅く、黒い獅子の金色のたてがみがぬっと眼前にせり上がり、刃が振りぬかれていた。

夢中でスターライトｍｋ？の狙いを付けようとして、セシリアの身体に衝撃が走った。

大きく仰け反ったセシリアはバラバラにされた青いレーザーライフルが頭の上を飛んでいくのを見、たちどころに接近した獅子がその二本の牙を交差させるのを見た。

牙が左右に振り下ろされ、鈍い衝撃がセシリアを包み込んだ。最後の武器であった二門の砲台は切り落とされ、半分以上あったシールドエネルギーは瞬間的にゼロになった。

（やられた！？）

セシリアが自分の敗北を感じ取る間もなく、止めとばかりに黒い獅子が剣を振り上げる。黒く鈍く輝く死神の鉈を見上げたセシリアはきゅっと目を瞑った。

『とまれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！』

カイトの絶叫がセシリアの耳に届いたが、いつになっても衝撃は襲ってこない。恐る恐る目を開く。

「あっ……」

振り下ろされた剣はセシリアの頭の数センチ上で止まっていた。助かった、と感じたセシリアの目の前で剣が粒子に解け、さらに黒いＩＳに異変が起こった。

雷鳴が轟いたようなＶ字のアンテナが鶏冠を模すように閉じ、同時に機体各所の装甲板がスライドし、金の燐光を灯した肌が収納される。セシリアが瞬きをした瞬間には、黒い獅子など見る影もない、鶏のトサカが生えたような奇妙なシルエットのＩＳがそこに残されていた。

「怪我は……ない、かな？」

カイトの気遣う声がセシリアにささやかれる。ＩＳの変化に見入っ

ていたセシリアは、はっとなってそれに返す。

「あ、当たり前ですわ！わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？」

「あはは……」

「何で笑って、」

「よかった」

えっ、とセシリアは言葉を失う。黒いフェイスガードの奥から覗く赤い瞳は憂いを帯び、声にはセシリアを心配している気持ちが溢れていた。

カイトの優しげながらも、強い瞳にセシリアの心臓が高鳴る。こんな気持ちを感じるのは初めてだ。

「怪我をしてなくて……本当に……よかった……」

ぐら…っ、とカイトの身体が大きく傾き、そのまま地面へと落下していく。

「ちょ、ちょっとあなた！？」

あわててブルー・ティアーズを走らせ、カイトの身体を受けとめる。セシリアが漆黒のＩＳを受けとめた瞬間、機体は光に解け、待機状態一一千冬から受け取ったあの黒いヘッドセットに姿を変えたのを薄れゆく意識の中でカイトは目にしたのだった。

第四話　Bパート　～予期せぬ覚醒～（後書き）

お楽しみいただきましたでしょうか？

全編に渡って戦闘パートとなっていますが、いかがでしょうか？

一応、セシリアやシャル、ラウラをヒロインに置きますので、フラグを立たさせていただきました。無理やりだろというツッコミはなしです。

では、またの機会に。

第五話　～世は事も無し～（前書き）

第五話です。

更新が早いのは、作者が試験期間に入ってしまうからです。試験面倒です…。

それでは、お楽しみくださいませ……。

第五話　～世は事も無し～

「うっ……ううっ」

自分の声とは思えないしわがれた声が僕の喉から搾りだされる。

虚ろだった視界が次第にはっきりとした絵となって僕の目に映った。

最初に目に入ったのは、白い光を落とす蛍光灯と真っ白な天井。

仄かに消毒液のツンとした匂いが鼻をくすぐって、僕は保健室で寝ているんだと実感させる。

「ようやく目が覚めたか」

そこまで考えたとき、ジャッと音を立ててカーテンが開かれ、千冬さんが姿を見せた。寝たままで話すのは非常識だと思い、身体を起こした。

「いっ――――!?」

身体を動かした瞬間、全身に電撃が襲い掛かった。四肢を引きちぎられるような痛みにベットから転げ落ちる。

「無理をするな、馬鹿者」

床の上をのた打つ僕に苦笑した千冬さんは、僕の背中と脚裏に腕を滑り込ませると、そのまま抱き抱える。

いわゆる、お姫様だっこ。

「あの、千冬さ――ッ!?」

「暴れるとまた痛むぞ」

遅いです。痛みに苦しむ僕は同時に恥ずかしさで顔を真っ赤にした。僕は男の子なのに、女の人にだっこされるなんて情けないにも程があるよ……。

泣きたいのを堪える僕をベットに戻した千冬さんはパイプ椅子を引っ張ってくるとそこに座り、脚を組んだ。妙に様になっていて怖い。

「……千冬さん、僕は何時間寝てましたか?」

尋ねると、千冬さんは腕時計を僕に見せた。時計の針は共に五時を指していた。

「約十二時間だ」

「ずいぶん寝てましたね、僕」

半日もベットの上で眠りこけてたのか。そんなに僕の身体は疲弊していたんだろうか。

「さて。目覚めて早々だが、いくつか質問に答えてもらうぞ」

すっと目を細めた千冬さんはそう僕に告げた。後にしてほしい、なんてお願いも聞いてはくれないんだろう。僕は首を縦に振った。

「よし。ではまず始めに、お前はここで起きるまでのことを覚えているか？」

「ええと……」

目を瞑って記憶をさかのぼる。今日はオルコットと決闘があったから、アリーナに行って、戦って、その際中に……、

「あっ！」

「大きな声を出すな。傷にさわる」

だから遅いですってば。痛覚が暴れてかなり痛い。筋肉痛なんて話じゃない。

そんなことよりも、思い出した。オルコットとの戦闘中に、僕の機体が入れ替わったことに。そして、ＩＳが命令を無視して戦闘をしたことに。

「思い出したようだな、緋神」

「はい……」

「では、訊こう。あのＩＳはなんだ？」

心の奥底まで見透かすような千冬さんの目を見つめながら僕は首を横に振った。

「分かりません」

「本当か？」

頷くしかない。記憶を失った僕にあの機体ことなんてさっぱり分からない。どうしていきなり発現したのかも、どうして相手を殺めかねない行動をとったのかも。

でも、

「……一つ思い出しました」

「なにをだ？」

「名前、です」

ぽつりとつぶやいた。詳しい情報はない。でも、僕の真っ白な頭の中にあの黒い獅子の名前が浮かび上がった。

「名前？」

「そうです」

あれは、すべてを飲み込む厄災の風――。

「レイヴァー・デイ、僕の専用機です」

僕の言葉を静かに耳を傾けていた千冬さんが「そうか、」と笑みをこぼすと何かを僕のお腹のうえに放り投げた。

ぽすん、と軽い音を立てて落ちたのは黒いヘッドセット、待機状態のレイヴァー・デイだった。

「感謝しろよ、緋神。条令に反するとかほざいていた委員会共に持っていかれるところだったんだからな」

「ありがとうございます、千冬さん」

「かまわんさ。生徒を守るのも教師の務めだからな」

くっくっと笑う千冬さん。軽く口に出しているけれど、きっと僕には予想もできない面倒をこなしたことだろう。

本当にありがとうございます、千冬さん。『僕（レイヴァー・ディ）』を守ってくれて。

「さて、長居は身体にさわるだろう。私はもう戻るが、緋神」

「はい」

白いカーテンに手を伸ばした千冬さんが背を向けたまま僕を呼ぶ。

「専用機が有るからといって、絶対に無理はするな。これは上官命令だ、いいな？」

「肝に銘じておきます」

「では、しっかり休め」

後ろ手でカーテンを閉めた千冬さんはそのまま保健室を出ていったようだ。ドアの開閉音がする。

人気のなくなった保健室で、僕はお腹のうえに鎮座するレイヴァー・ディを見つめて、話し掛けた。

「レイヴァー・デイ、僕らはいつか皆にお礼をしなくちゃね」

黒いヘッドセットが夕日の光を反射したようにきらりと輝いて返事をしてくれた、そんな気がした。返事をしてくれたのが嬉しくて、ふっと笑顔になる。

途端に力が抜け、眠気が襲ってくる。どうやら張り詰めていた緊張の糸がぷっつりと切れ、ため込んでいた疲労が吹き出してきたんだ。

今日はゆっくり休もう。そうしたら、また明日頑張ろう。

「お休み、レイヴァー・デイ」

言葉をかけた僕はそのまま心地よい闇に身を委ねた。

？

翌朝、昨日のような倦怠感も全身を襲う激痛も嘘のようになくなっていた。

けれど僕の言葉は信じてもらえなかったのか、執拗なまでの検査を受けることとなり、検査が終わったのは朝のＳＨＲが始まる時間だった。

「おはようございます」

検査があったとは言え、遅刻を怒られるだろうと覚悟した僕は、二回教室のドアをノックして、教室に入る。

……なんだろうか、この妙な空気わ。

僕を出迎えたのは、何とも言えない、耐え難い空気だった。

この原因はなんだろう?教室を見渡した僕は、黒板に書かれた文字に気が付き、全てを悟った。

『クラス代表者、緋神カイト』

『クラス副代表者、織斑一夏』

「……何これ?」

「あ、緋神くん、おはようございます」

にぱっと花咲くような笑顔の山田先生が朝の挨拶をしてくれる。うん、今日もいい笑顔ですね、山田先生。

でも、僕が気にするべきことはそこじゃない。

「山田先生、質問があるんですが」

「はい、緋神くん」

「なぜ僕がクラス委員長になっているんでしょうか?」

「それは――」

山田先生の言葉をさえぎるようにがたんと椅子が鳴った。その方向を見ると腰に手を当て、胸を張るオルコットさん（やっぱり女の子に呼び捨てはいけないよね）が立ち上がっていた。

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

「えっ？」

意外な言葉に二の句が続かない。辞退したって？あんなに僕か一夏がクラス委員をする事を嫌がっていたのに、一体どんな心境の変化が？

「わたくし、冷静になって考えましたの。そして、代表候補生たるわたくしはクラス委員という束縛された役割をいただくよりも、もっと柔軟に動ける役職に付いたほうが得策だと気付きましたわ！」

理路整然とした理由だけど、もっと分かりやすく解釈すると、

「それって、面倒は他人に押しつけたほうが楽だって事だよな」

キッ！

オルコットさんに睨み付けられた一夏が姿勢を正して大人しくなった。

ありがとう、一夏。危うく僕もまったく同じ事を言い掛けたよ。

こほん、と咳払いしたオルコットさんは僕に再び視線を合わせると、続きを話す。

「それに、お二人は初の男性ＩＳ操縦者でしょう？でしたら、たくさん経験を積むべきでありませんこと？」

一理ある。僕は一夏と並んで初の男性でＩＳを動かせる人材だ。けれど、僕らは男性であるが故に女性と比べて知識も経験もない。

だから僕らはもっとＩＳと触れ合って、さらなる理解に務めなくちゃいけない。クラス代表者になれば、その機会も自ずと増えるのではないかとオルコットさんは言いたいのだ。

「ですから、わたくしは恥を忍んでカイトさんと一夏さんにクラス代表者の座を譲ることにしましたの！」

恥を忍ぶくらいなら自分でやればいいのに……ん？

オルコットさん、今僕のことを『カイトさん』って呼ばなかった？

「いやぁ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー。せっかく男子が二人もいるんだもんねー。持ち上げてあげないとねー」

「これはカイ×夏フラグ、いや夏×カイフラグ！？キタ！キタコレ！コレで勝つる！」

本人たちを無視してクラスの皆が盛り上がりだす。盛り上がるのは嬉しいけど、誰かな？恐ろしいことを口走っている子は？何だか先週も似たようなこと言ってたよね？

まあ、楽しそうだからいっか。

「山田先生、後一つ質問いいですか？」

「はい。なんですか、緋神くん」

ぱぁっと顔を輝かせた山田先生が僕の質問を心待ちにしている。そういえばさっきの質問はオルコットさんに盗られちゃったから、落ち込んじゃってたんだろうなぁ。

「一夏じゃなく、僕がクラス委員長になった理由はなんでしょうか？」

「それはですねー」

「それは私が答えよう」

千冬さん、あなたは悪魔か鬼ですか？山田先生のあの嬉しそうな顔を見てなかったんですか？ああ、山田先生が涙目になってらっしゃる！？

「お前は事故（ぐうぜん）とはいえ、オルコットを負かした。一方の織斑はオルコットに情けなく負けてみせた」

うっ、と一夏が呻く。負けたところに織斑先生のキツい一言をもらうのは、傷口に塩を塗られるよりもしみるだろう。

「本来なら、実力的にオルコットやお前にはるかに劣っている織斑がクラス委員長になって、経験（いたいめ）を積むべきなんだろうが、」

もうやめてください、織斑先生！一夏のライフはとっくにゼロですよ！あなたの弟が声を殺して泣いてます！何があなたをそこまで駆り立てるんですか！？

「オルコットがどうしても緋神をクラス代表にと懇願してな」

「お、織斑先生！」

バンッ！と机をたたいて織斑先生の言葉をさえぎろうとする。そっか、オルコットさんは僕を推薦してくれたのか。

「オルコットさん」

「な、なんですの？」

僕はオルコットさんに握りこぶしを作って宣言する。

「僕、推薦してくれたオルコットさんの為にもクラス代表を頑張るよ！」

「～～～～～！」

ボンッ！

破裂したような音を立ててオルコットさんが顔を真っ赤にすると、すとん、と席に崩れ落ちるように座った。どうしたんだろう？

スパン！スパン！

「……織斑先生、どうして僕の頭を叩いたんですか？」

しかも二回も。

「緋神よ。思わせ振りな態度は取るな」

「はい？」

名簿で叩かれた頭を擦りながら、考える。はて、思わせ振りな態度ってなんのことかな？

「分からないならいい。早く席につけ」

「？？？」

叩かれた理由を模索しながら、促されるまま僕は席につく。

「ともあれ、クラス代表者は緋神カイト。クラス副代表者は織斑一夏。異存はないな？」

「「「「はーい！」」」」

ぶたれた理由に頭を悩ませる僕と、傷口を酷く抉られて沈黙している一夏を除いたクラスの皆が一丸となって返事をした。

クラスの結束が高まるのはいいけれど、誰か教えてくれないかな？

僕が千冬さんに叩かれた理由。

スパーン！

「織斑先生だ」

「……はい」

第五話　～世は事も無し～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

今回はクラス代表決定戦のオチに当たる位置付けとなる話となっています。

次回は鈴編に入る前にオリジナルのストーリーを一話入れさせていただく予定です。

それでは、またの機会に。

第六話　～Ｂｌｕｅ・Ｈｅａｒｔ～（前書き）

第六話です。

前回記したとおり、今回はオリジナル展開です。頑張って書きました。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第六話　～Ｂｌｕｅ・Ｈｅａｒｔ～

サァァァァ……

シャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。白雪のような彼女の肌に栄える金髪はシャワーで濡れ、十代とは到底思えない色香を漂わせていた。

（先日の試合、わたくしは負けた――）

敗北――。そう、完璧な敗北だった。今までＩＳで戦った事は数あれど、この前のような敗北を喫したのは初めてのことだった。

だが、不思議とセシリアの心には悔しさはなかった。

いや、悔しさはあったのかもしれない。しかし、そんなものよりも曖昧で、甘くて、熱い感情が彼女の胸を支配していた。

（緋神カイト……）

あの男子の名前を心の中で唱える。同時に脳裏に浮かんだのは、彼の赤い瞳。

海原の様な広い優しさで、その奥に秘める信念を隠した、初めて見る瞳の輝き。

（父とはまったく違う瞳……）

セシリアは目を瞑って過去を思い起こす。

セシリアの母は優れた経営者の才を持っていた人だった。女性の身でありながらも、数々の会社を立ち上げては成功を収めてみせた。

セシリアはそんな母の姿に同じ女性として尊敬の念を抱き、彼女の娘であることが幼い彼女の誇りだった。

それとは対照的に、父はオルコット家に婿入りしただけあってか、母はおろかセシリアにも腰を低くしていた。

婿入りした負い目もあったのだろうが、人の顔色を常に伺っている彼の姿は、父親としてはあまりにも分不相応で、母もそんな父の態度が気に入らず、鬱陶しがっていた。

それは、ＩＳが発表されたことで更に悪化していった。

その頃には、夫婦仲は修復不能な程に溝ができており、家族三人で過ごす時間は思いだす限りではなかった。

そんな二人を見て育ったセシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』と心に誓った。

だが、ＩＳが重要視される今の社会、右を見ても左を見ても、彼女の理想に適う人物はいなかった。

そんな時だった、彼女の両親がこの世を去ったのは。三年前に起きた、死者百人を越える越境鉄道の脱線事故。いつも別々にいた二人が一緒にいなくなったのは神様の悪戯なのか、当時のセシリアには皮肉としか取れなかった。

たった一人残されたセシリアは流れるままにオルコット家の当主の座につき、母の残した莫大な遺産が彼女の手元に転がり込んできた。

そして、彼女の周囲にオルコット家の遺産を狙った金の亡者が現われだした。

二人の生きた証を守るため、セシリアはありとあらゆる事を学び、両親が残した財産を守り続けてきた。ＩＳの適性検査を受けたのも

自身にプラスになるだろうと考えたからだった。

ＩＳの適性検査でＡ＋を出したセシリアに政府は国籍保持の為の条件を提示した。幾つも提示されたそれは、セシリアにとって願ったり叶ったりの好条件で、遺産を守りたいという一心でイギリス代表候補生の肩書きを受け入れた。

そして、第三世代ＩＳブルー・ティアーズの搭乗者（マスター）として稼働データ、ならびに戦闘経験を積むためにＩＳ学園へとやってきた。

男性で初のＩＳ搭乗者がいると訊いていた分、理想に叶った人物であだろうと期待していたセシリアだが、会って早々その期待は裏切られてしまった。

一人は織斑千冬の弟と言うだけの無礼な少年で、もう一人は父に似た弱々しい瞳を持つ少年。

前者はともかく、後者は特に気に食わなかった。同じＩＳを駆る者として、そもそも一個人として、あんなに弱い瞳で自分と同じ場所に立たれることが何よりの侮辱であると感じたから、決闘を申し込んだ。

二度とそんな目を自分に向けられないようにしてやろうと、自己満足から決闘を挑んだ。

だが、戦いを通じてたセシリアは自分が思い違いをしていたんだと痛感した。

彼は誰よりも強くあった。それは目に見える強さではなく、内に秘めた見えない強さ。

『怪我をしてなくて……本当に……よかった……』

彼が意識を失う前に見せた優しさ。自分のほうがよっぽど辛いくせに、セシリアを気遣うように微笑んでみせたあの笑顔。

瞬間、セシリアは見た。彼の優しい瞳の奥に、折れず、揺るがず、確固たる覚悟を持った本当の彼の姿を。

誰よりも優しくあろうとする、人間の瞳。
誰よりも強くあろうとする、獅子の瞳。

相反する二つの輝きを持ち合わせた真紅の瞳はセシリアの心を激しく揺さ振った。

見つけた――。

見つけてしまった――。

自分が理想とする男性を――。

「緋神、カイト……」

そっとささやくように、彼の名前を呼ぶ。とくん、と心臓が静かに跳ねる。

知りたい――。
この気持ちの正体が、一体なんであるのかを。

知りたい――。
誰よりも深くカイトのことを。

「緋神カイト……」

シャワーの音がこだまする浴室で、セシリアは彼の名前を呼び続けた。

●

クラス代表が決まったその日の夜、僕は机に向かっていた。エベレストに負けずとも劣らずとも取れる、うずたかく積まれた書類の山に書き終えた書類を乗せた僕はそのまま机に突っ伏した。

「お、終わった……」

もう腕が上がらない。自分の腕が疲労でパンパンに張ってしまってる。

積み上げられたこの書類の正体はオルコットさんと戦った時に使ったＩＳの事後報告書だ。

本来なら十枚程度で済むんだけど、僕は打鉄を魔改造した挙げ句、無茶な動きに付き合わせてしまった結果、壊してしまったために書類の数が十倍かそれ以上に増えてしまったのだ。

けれど、山田先生や千冬さんが手を回してくれたおかげで、僕は始末書を書くだけにとどまり、ＩＳの修理費まで出さずに済んだ。

記憶も貯金もない僕にあの金額を稼ぐことはかなり難しく、先生方には本当に頭が上がらない。

「さてと」

始末書を全部書き終わったんだから、早く先生方に渡して来ちゃうか。問題は早めに解決しておかないとね。

机の上で僕を応援していたレイヴァー・デイを手に取り、首に装着する。でも、ぶらぶらと音楽機器に接続されていないコードがぶら

下がった姿は何とも虚しい。

「後でお金を貯めて音楽機器を買ってあげるね」

僕の言葉にレイヴァー・デイは喜んでくれたのか、黒い光を僕に返す。口先三寸にならないようにしなくちゃ。

書類の山に手を伸ばしたその時、コンコン、と誰かがドアを控え目にノックした。

もしかして一夏？一人部屋を割り振られた僕に対して、一夏は篠ノ之さんと同じ部屋で暮らしていて、時々僕の部屋に遊びに来る。今日も来たのかな？

ともかく、お客さんを待たせるのは非常識だね。

「はーい、今開けますよ」

小走りにドアに駆け寄り、ドアを開く。するとそこには一夏が一一、

「……」

いなかった。その代わり、と言っては失礼だけど、そこに立っていた人を見た僕はたちまち凍り付いてしまった。

「お、オルコット……さん？」

かろうじて声を絞りだす。そう、僕の部屋を訪ねてきたのはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットさんだった。

でも、今のオルコットさんはまるで別の人にも見える。いつもの活発さはなりを潜め、沈痛な面持ちでそこに立っていた。

彼女の身に何かがあったとしか思えない。

「あの、」

心配になって声をかけた瞬間だった。

ガバッ！

オルコットさんは僕の胸に飛び込んできた。倒れそうになるのを堪えて受け止めた彼女の体は震えていた。

どうすべきかと悩む僕の耳に、鬼の声が響く。

「もうすぐ就寝時間だ！早く部屋に戻れ！戻らないものはグラウンドを朝まで走らせるぞ！」

「げぇ！羅刹！？」

悪鬼羅刹の化身と一夏が陰ながら比喩している千冬さんがこちらに近づいて来ている！？

こんな場面を目撃されたら僕の短い人生は終わりを告げる！

でも、こんな状態のオルコットさんを放っておけるわけがないし……！

ええい、ままよ！

「オルコットさん、ごめん！」

謝った僕はオルコットさんを抱き抱えたまま部屋に飛び込むと、ドアを勢いよく閉じる。

ドアに耳をあて、足音が遠ざかるのを待つ。

一分、いや、そんなに長くはない時間の後、千冬さんの足音は消えていった。

咄嗟の判断とは言え、女の子を部屋に入れちゃったんだ。千冬さんに惨殺される覚悟を持とう。さよなら、僕の短い生涯。

それは置いておくとして。とりあえず、温かい飲み物を用意しよう。きっとオルコットさんも僕も落ち着くはずだ。

僕の胸に顔を埋めるオルコットさんを抱き抱えて、ベッドまで歩いてくる。以外と遠く感じる。

「オルコットさん、ベッドに座って待ってて。僕、温かい飲み物を用意してくるから」

こくん、と頷いたオルコットさんは僕の腰に回していた両腕を離し、うつむいたままベッドに腰掛ける。

簡易キッチンに走り、ケトルに牛乳を入れ、火にかける。ホットミルクは気分を安らげるのにいいと、クラスの子たちが話していた。

ミルクが温まるまで手持ちぶさたになった僕はオルコットさんの前

に椅子を持ってくる。

「「……」」

痛いほどの沈黙が部屋を支配する。こんな時って何を話せばいいの？天気？芸能？スポーツ？

「カイトさんは、」

「え？」

頭を悩ませる僕の前でオルコットさんが口を開いた。でも、彼女の声はゾッとする程に弱々しいものだった。

「ここにいるカイトさんは、『本物』ですの？」

――え？

突拍子の無い事、違う、僕の存在に対する根本的な問いかけを投げ掛けられた僕は思考が停止する。

茫然とする僕の腕を引っ張り、ベッドの上に押し倒したオルコットさんは、馬乗りになると、僕の瞳を覗き込む。

オルコットさんの澄み切った蒼い瞳が彼女の心の動きを代弁するように、ゆれている。

「あなたが正真正銘の『緋神カイト』だと、あなたがわたくしを負かせた『緋神カイト』なんですの！？」

――本当に僕が『緋神カイト』であるのか？オルコットさんの問いはずっと胸に引っ掛かっていた。

記憶を無くし、ＩＳを使える『二人目』の男として学園に編入したこの『緋神カイト』が果たして現実に『本物』として存在しているのか、僕は時々不安になる。

もしかしたら、『緋神カイト』は別に存在していて、僕はその人の偽物（レプリカ）ではないかと嫌でも考えてしまう。

明確な答えを模索しても不安がつのるだけ。だから、僕は――。

「オルコットさん」

彼女の目を見据えて、ゆっくりと諭すように言葉を紡ぐ。

「僕はさ、この世界に『本物』も『偽物』もないと思うんだ。大切なのは、今ここにいる自分をどう受けとめるか、だよ」

この世界は残酷で、いつも自分に都合の悪いことばかり起こる。そんなときは自分が『偽物』であればいいと逃げたくなる。でも、僕らは嫌でもこうして現実と向き合っている。それは僕らが『本物』だから。

『偽物』と『本物』に境界線はない。でも、自分をどう規定するかで僕らは『本物』にも『偽物』にもなれる。

そう考えた僕はあえて答えを出さない。『偽物』？『本物』？関係ないよ。ここにいる僕は『緋神カイト』以外の誰でもないんだから。

「オルコットさんは僕が『偽物』だと思うかな？」

「そんなこと思いませんわ！ここにいるカイトさんは、わたくしにとって『本物』以外の誰でもありませんわ！」

少しだけ意地悪が過ぎたかな。声を荒げるオルコットさんを安心させるように、にっと笑ってみせる。

「なら、それでいいと思うよ」

「ふぇ……？」

「オルコットさんが僕の事を『本物』だって思うなら、きっと僕は『緋神カイト』なんだよ」

でしょ？と聞き返すと、しばらく目をぱちくりさせていたオルコットさんが吹き出す。

「ふふふっ……！そうですわね。何を言っていたのかしら、わたくしは」

よかった、元気を取り戻してくれたみたいだ。笑顔になったオルコットさんは、ベッドから立ち上がり、僕の顔をずびしっ！と指さした。

「あなたは、わたくしに膝を折らせた唯一無二の男性、緋神カイトさんですわ！」

うん、やっぱりオルコットさんはこうでなくっちゃね。

ピーー！

「っと、ミルクが沸いたみたいだね。よかったら、飲んでいってよ」

「そこまで言うなら、まあ、いただいてもよろしくてよ」

「はいはい」

「む！なんですの、その態度は？このわたくしが、せっかく味わって差し上げましょうといっているのに！」

小言を背に受けながら、僕は簡易キッチンにかけていった。

●

セシリアはキッチンでホットミルクをコップに注ぐカイトの後ろ姿を眺めていた。

その背中は少年とは思えない程に大きく広く、セシリアに安心を与えていた。

ここに来るまでセシリアは不安に押し潰されそうだった。自分は、理想を詰め込んだ妄想の産物である緋神カイトを偶像崇拝していただけなのではないかと。

あの時の笑顔は、ただのつまらない同情から浮かべたものではないかと。

何度否定を繰り返しても、底知れぬ不安が彼女を襲い、可能性が可能性を食らい合って破滅していく。

虚無感が体を包み、何が本当のことなのかが見えなくなってしまった。

自分が、セシリア・オルコットが『誰を』見ればいいのか。在りもしない幻に惑わされていた。

しかし、今はそんな不安は微塵もない。彼が、カイトが迷いを断ち切ってくれたのだ。あの優しすぎる笑顔で。

『オルコットさんが僕の事を『本物』だって思うなら、きっと僕は『緋神カイト』なんだよ』

彼の言葉を聞いたセシリアは自分の心が晴れていくのを感じ、そして、自分がどうしようもなく彼に惹かれていることも理解した。

どうだ、セシリア・オルコット。彼は、自分の理想としていた男性は、緋神カイトはここに存在するじゃないか。あの強い瞳も、あの笑顔もここにある。カイトが実在しているなら、この思いは『偽物』なんかじゃない。

彼がそこにいてくれれば、自分はもう迷うことはない。彼がいてくれるだけで、自分はもっと強くあれる。

永遠にそうありたいがために、自分は何をすべきなのか？

決まっている。カイトへの思いを自分だけのモノにするのだ。彼の温もりも、優しさも、強さも、誰にも渡さない。それを邪魔する者は排除してでも、はばからせたりするものか。初めて芽生えたこの気持ちをたやすく捨ててなるものか。

――彼に振り向いてもらうために。

――彼を独り占めするために。

――まずは、ここから始めよう。

セシリア・オルコットの恋物語はここから始まるのだ。

第六話　～Ｂｌｕｅ・Ｈｅａｒｔ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

オリジナリティー溢れているせいか、セシリアがベタ惚れ状態。こんなの僕らのセシリアじゃない！と考える方、ご容赦くださいませ。何分恋愛初心者なもんで。

さて、作者の方が試験期間に入ってしまうので暫く更新速度が落ちてしまいます。すぐに復活しますので、首を長くしてお待ちいただければ幸いです。

それでは、またの機会に。

第七話　～訓練と、放課後パーティーと？～（前書き）

第七話です。

クラス代表戦編、ひいては鈴編ですね。

テスト勉強の合間を縫っての投稿なのでクオリティはかなり低いです。ご容赦ください。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第七話　～訓練と、放課後パーティーと？～

ギュンッ！……ズドォォンッ！

「……あのさ、一夏。僕は時々思うんだ」

「……ああ」

「もしかしたら一夏は僕に恨みがあるんじゃないかって。でも僕らは友達だから、きっとそんな事はないんだってずっと思ってた」

「……それはきっとカイトの気のせいだ。俺達は友達だろ？」

「そうだね、僕らは友達だよ。でもね、一夏。僕は今はっきりと理解したよ」

「一夏、絶対僕に恨みあるでしょ！？」

四月も下旬に差し掛かり、学園の生活にも慣れてきた今日この頃。
アリーナに出来た大穴の底で僕は一夏に吠えた。

今日はＩＳの飛行操縦を実践する予定になっていて、専用機持ち三人で急上昇、急旋回、急降下、急停止をやってみせていた。授業は

順調に進んでいて、誰もこんな事故が起こるなんて予想できなかっただろう。

事件が起こったのは、ものの数秒前のこと。一夏が急降下、急停止の実践に移った際に起こった。

ただスラスターをふかして降りてくればいいのに、何を血迷ったのか、一夏はあろうことか僕目がけて『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』を発動させて急速に降下。ブレーキをかけることなく、むしろそのまま加速。

そして現在に至る。

瞬間的にレイヴァー・デイを展開出来たからいいものの、反応が一歩でも遅れていたら僕は消し飛ばされて、クレーターの一部となっていただろう。

はい、状況解説終了。ここからは僕のＳｕｐｅｒ説教タイムだ！

「なんでよりによって『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』なんか使ったのさ！？模擬戦じゃ一度も使えたことなかったのに！？」

一夏は専用機の白式を手に入れてから放課後は毎日、僕やオルコットさん、篠ノ之さんからＩＳの訓練を受けている。クラス代表決定戦の時にオルコットさんに負けたのが相当堪えたようだ。

白式は副兵装（サブウェポン）を持たない、完全な接近戦特化のＩＳなので、相手との距離を瞬時に詰める『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』が動きのキーになると思って練習させてるんだけど、一度たりとも成功した試しはなかった。今日と言う日が来るまでは。

一夏、これは僕への当て付けかい？僕は君の友情に涙が出そうだよ。

「し、仕方ないだろ！急降下しようってイメージしたら出来ちまったんだから！」

「だからってなんで減速しないのさ！？下にいたのが僕だったからいいものの、別の人がいたら危うく消し飛んでたところだからね！？」

ＩＳの最高速度は時速数百キロにも達する。そんな物体が人なんかにぶつかったら大惨事は免れない。

考えるよりも早く展開してくれたレイヴァー・デイには感謝しないと。絶対防御が発動してくれたおかげで身体的な怪我はない。ただ、守れるのは体へのダメージだけであって……、

「やっぱり織斑君が攻めで、緋神君が総受け！私の予想は間違ってなかったのよ！」

「違うわ！緋神君の荒々しい攻めで織斑君が果ててるのよ！緋神君は実は肉食系なのよ！」

「ボタボタボタボタボタボタ……！」

「やっぱり二人はそういう関係……！」

「美術部、あの二人の姿をこのメモ帳に写生するのよ！」

耳を塞ぎたくなるような言葉のダメージは防げない。男子二人がくんずほぐれずしている姿はさぞ美しく映っているだろう。僕らには

地獄にしか思えないけれど。

あと、鼻血を垂らしてるそこの君、そろそろティッシュを鼻に詰めた方がいいよ。貧血で倒れますよ。

「とにかく、僕の上から降りてくれないかな。心が折れそうなんだ」

ハイパーセンサーが僕の意志とは関係なく、彼女らの言葉を一語一句残さず拾ってくるから体はともかく、心がまずい。

「お、おう。悪い」

白式が左右のウィングを広げて僕の上から飛び上がり、クレーターの外へと飛び立っていく。続いて、僕もレイヴァー・デイを起き上がらせると、飛翔してグラウンドへと舞い戻り、ＩＳを待機状態へと変化させる。

「馬鹿者。誰が緋神に激突しろと言った。お前たちに怪我がなかったからいいものの、グラウンドに大穴を開けてどうする？」

「情けないぞ、一夏。それでもお前は日の丸を背負った大和男子か？」

「……はい。すみませんでした」

一夏は地面の上に正座をして、織斑先生と篠ノ之さんの小言を貰っていた。ざまあみろ。

一夏が説教される姿を横目で眺めながらスーツの汚れを払っていると、オルコットさんが小走りに近付いてきた。

「大丈夫ですか、カイトさん。お怪我はなくって？」

「うん、大丈夫だよ、オルコットさん。レイヴァー・デイが守ってくれたから」

「そうですか。それは何よりですわ」

ふふふ、と唇に手を当てて楽しそうに笑うオルコットさん。

クラス代表が決定したその翌日から、オルコットさんは何かと僕をサポートしてくれる。学園にいち早く慣れることが出来たのも、オルコットさんの力が大きい。

でも、どうして僕にこんなに構うんだろう？初めて会ったときのあの男なんて滅びてしまえと言わんばかりの態度は一体どこに行ったんだろうか？

僕はてっきり、オルコットさんは男の人が嫌いだとばかり思ってたんだけど……。女の子ってよく解らないや。

「何だか失礼な事を考えられている気がしますわ……」

「……？何が失礼なの？」

「い、いいえ！何でもありませんわ！」

はぁ、とため息をつくオルコットさん。疲れてるのかな？

「緋神、オルコット！いつまで話している！集合しろ！」

一夏への説教が終わったのか、僕らへ織斑先生が叫ぶ。見ると、地面に正座している一夏以外はみんな整列している。

「は、はい！ただいま参りますわ！カイトさん、お早く！」

「う、うん！」

急がなければ僕らも一夏と同じように地面に座らされてしまう。慌てて列に並ぶ。

「今日の授業はここまでだ。織斑と緋神、グラウンドを片付けておけよ」

「ぼ、僕もですか！？」

僕は被害者なのに、どうして穴を埋めるのを手伝わないといけないの！？

「レイヴァー・デイの出力なら白式を受け止めるのも可能だったはずだ。これはそれを出来なかった罰だ」

「そ、そんな無茶苦茶な……」

「返事は『はい』か『イエス』だ、緋神」

「……イエス、マム」

有無を言わさぬ織斑先生に頷き、一夏をキッと睨みつける。一夏はグッと親指を立てて口を動かす。

『さすがは俺の友達。苦楽は共にしなくちゃな』だって？

一夏、後でお礼参りするからね。

●

「ここがＩＳ学園……」

夕暮れに染まるＩＳ学園の正面ゲートに、小柄な少女が立っていた。髪の毛をツーサイドアップに結わい付けた彼女のアーモンド状の瞳が学園のエンブレムを見上げている。その勝ち気な瞳は期待に輝いていた。

「さてと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットをまさぐり、しわくちゃになった紙切れを取り出す。そこには地図と思しき絵が描かれているのだろうが、少女の性格を表すようにかなり大雑把で、バイタリティに溢れていた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあるのよ」

ぐしゃりと音を立てて、地図が彼女のポケットに納まる。彼女がそれを気にしたような様子は見られない。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ」

考えるよりまずは行動を。少女は深く考えることをせずに学園の門をくぐった。

だが、彼女のその性格が裏目に出てしまうのはすぐのことだった。

●

「というわけでっ！緋神君、織斑君クラス代表・副代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

パンッ！パパパーン！

高らかに拍手とクラッカーが食堂に鳴り響く。頭の上に乗っかった紙テープを掴みながら僕はちらりと壁を見る。そこには『緋神カイト・織斑一夏クラス代表・副代表就任記念パーティー』と大きく張り出されている。

どうしてこうなったんだっけ？

え～っと、確か放課後になったから一夏にお礼参りに行こうとしたところでクラスの女の子達に捕まって、食堂に連れてこられて、今に至るわけだけど。

事態が急転直下しすぎて、僕と一夏は唖然としている。とりあえず、このパーティーが僕と一夏を祝ってくれているってことは何となくだけど分かる。

周りを見渡すと、食堂を無理言って貸し切ったらしい一組のみんなが所狭しと盛り上がっていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねぇ！」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

あれ？よく見たらさっきから相槌をうってるのは二組の子だ。それによく数えてみたら、一クラスだけじゃ収まらない人数だ。

「人気があってさぞ嬉しいでしょうね、カイトさん」

「え？そう見えるの？」

「知りません！」

頬を膨らませたオルコットさんは、ぷいっとそっぽを向いてしまった。何で怒ってるんだろ？

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生（ルーキー）、織斑一夏君と緋神カイト君に特別インタビューをしに来ました～！」

オー！

食堂のざわめきが一際大きくなる。特別インタビューなんて、僕も一夏もそんな大層な人間じゃないのに。

「あ、私は二年の黛薫子。新聞部副部長やってます。よろしくね、

ご両人。はいこれ名刺」

そう自己紹介した黛さんは僕と一夏に名刺を渡す。へぇ～、この字で『まゆずみ』って読むんだ。勉強になるなぁ。

「まずは副代表の織斑君から！ずばり、クラス副代表になった感想をどうぞ！」

ずずいっと黛さんは一夏にボイスレコーダーを向ける。メガネの奥の瞳がまるで子供みたいに無邪気に輝いている。

一夏はポリポリと頭を掻きながらボイスレコーダーに声を飛ばした。

「えーと、まあ、なんというか、がんばります」

「えー！もっといいコメントちょうだいよー！俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

黛さんは一夏のコメントに不満の声をもらした。やっぱり報道する身としては当たり障りのないセリフはＮＧのようだ。

一夏は悩んだ後、もう一度レコーダーに顔を近付ける。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

自分の好きな名優を否定され、一夏が若干ショックを受けたらしく、くらっとよろめいた。

「じゃあまあ、テキトーにねつ造しておくからいいとして、次は緋神君ね！」

一夏が何かを言おうとしているのを軽く受け流した黛さんは僕にボイスレコーダーを向けてきた。

「緋神君、クラス代表になった感想は？」

「そうですね……。クラス代表と言っても、僕はまだまだ未熟者です」

ちょっと悩んで答えると、黛さんが驚いたように目を丸くした。僕の答えは予想外の言葉だったんだろうね。ですから、と僕は言葉を続ける。

「皆さんと一緒に一人前に成長していけるよう、僕も頑張っていこうと思います」

「まあ、物足りないけどこれでいっか！」

よかった、僕の台詞までねつ造されたらどうしようかと……。ほっと胸を撫で下ろした僕の隣に座っていたオルコットさんに黛さんはボイスレコーダーを向ける。

「最後はセシリアちゃんね。コメントもらえるかな？」

「わたくし、こういったことはあまり好きではありませんが、仕方ありませんわね」

すくっと立ち上がったオルコットさんは胸に手を当て語り始める。

そのわりには髪の毛のセットに余念がないですよね、オルコットさん。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表および副代表を辞退したかと言いますと、それはつまり――」

「あ、長くなりそうだからいいや。そんなにレコーダーの容量ないし。セシリアちゃんは、緋神君に惚れたってことにしておいてあげるよ」

「なっ、な、ななっ……！」

オルコットさんのコメントを遮った黛さんは茶目っ気たっぷりにウィンクをオルコットさんにする。

オルコットさんがどう反応したらいいのかわからず、顔を真っ赤にして震えている。

よし、ここはオルコットさんに代わって否定してあげよう。

「黛さん、馬鹿なことを言わないでくださいよ。オルコットさんが僕を好きなわけないじゃないですか」

「え、そうかなー？」

「そ、そうですわ！何を持って馬鹿なこととしているのかしら！？」

あれ？なんでオルコットさんが怒るの？可能性を否定してあげたのに。

「カイト……」

……一夏、どうして僕に手を合わせてるのかな？意味がわからないけど、でも一夏だけにはされたくないよ。

「だ、大体カイトさんは――」

「はいはい、痴話喧嘩は後にして緋神君、織斑君、セシリアちゃんはここに並んでね。写真撮るから」

「えっ、写真ですか？」

「そっ！三人は今のトレンド、専用機持ちだからねー。はいはい並ぶ並ぶー！」

黛さんはグイグイと僕らを押してテキパキと並ばせる。左から一夏、僕、オルコットさんの順で並ぶ。センターか、ううっ、緊張する～。

「……」

「な、何だよ、箒？」

「何でもない」

一夏、篠ノ之さんの気持ちを汲み取ってあげなよ。一夏と一緒に写真に映れなくて悔しいんだよ。

まったく、一夏はどうしてそんなに鈍いのかな……。

「……」

「どうしたの、オルコットさん。僕の顔に何か付いてる？」

「い、いえ！何でもありませんわ！？」

「そっか」

オルコットさんが僕を見てたからてっきり顔に何か付いてるのかと思ったよ。

「はい撮るよー！３５×５１÷２４は～？」

「え？えっと……２？」

「違うよ一夏、７４，３７５だよ」

「緋神君、せいかーい！」

「なんじゃそりゃ」

パシャッ！

一夏が苦笑した瞬間、シャッターが切られる。……あれ？

「なんで全員入ってますの！？」

我慢ならないと、オルコットさんが叫ぶ。一組の全メンバーが撮影の瞬間に僕らの周りに集結していた。篠ノ之さんも一夏の隣をちゃっかりキープしている。

もしかして、クラスのみんなはザ●ールドの使い手なの？

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「ううう～～っ！」

納得できないのかオルコットさんが低くうなっている。クラスは仲良くしたほうがいいに決まっているのに、なんでかな。

こうして『緋神カイト・織斑一夏クラス代表・副代表就任パーティー』は続いていったのだった。

●

「どうして僕が……」

パーティーが終わった後、真っ暗になった学園を僕は一人歩いていた。手には紙袋が三つ。

パーティーのお菓子を織斑先生と山田先生に届けるとクラスの誰かが約束していたらしくて、クラス代表としての初仕事がお菓子の配達に決まった。ちなみに紙袋が三つあるのは僕の分もあるから。

「早く届けて部屋に戻ろう……」

今日はいつもより疲れてるから、先生方にお菓子を届けたらすぐに眠れそうだ。

「あー、もう！どうしてこんなに広いのよ！」

「ん？」

歩く速度を早めた刹那、癇癪じみた声が夜の学園に響き渡った。もうすぐ就寝時間だというのに。

（一体こんな時間に誰が？）

気になった僕は声のするほうへと駆け出す。
すると、外灯の下に座り込んでいる女の子の姿を見つけた。

「あの、」

「！」

考えるよりも先に声をかけると、うつむいていた女の子が弾かれたようにガバッと顔を上げる。

釣り上がった瞳が涙で濡れている。大丈夫ですか、と声をかけようとした瞬間、

「ーーッ！」

閃光が彼女の右腕を走り、マゼンタの鉄塊が僕へと迫ってきた。

これってＩＳの腕部装甲――！？

ガンッ！

第七話　～訓練と、放課後パーティーと？～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

テストに意識を持っていかれたせいか、文章がアホなことになっています。早くテスト終わってほしいです……。

では、またの機会に。

第八話　～セカンドボーイ&セカンドガール～（前書き）

第八話です。

テストも一段落つき、更新速度も元に戻るかと思われます。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第八話　～セカンドボーイ&セカンドガール～

「あー、もう！どうしてこんなに広いのよ！」

外灯のすぐそばで、少女は天に向かって叫んだ。学園の敷地が広いというのは風の噂で聞いていたけれど、まさかこんなに広いだなんて少女には予想だにしなかった。

気が付けば夕日はすでに仕事を終えて沈み、代わりに月がぽっかりと浮かんでいる。

（もー……、サクッと手続きを終わらせてアイツに会いに行くつもりだったのに……）

ぼすん、と肩にかけていたボストンバックを地べたに落し、その上に座り込んでしまう。

脳裏に会いたかった少年の姿が呼び起こされる。彼と会えなかったよわい一年もの間、少女は彼を思い出さない日はなかった。だからこそ、今日という日を待ち望んでいた。彼と会える、ただその一点が少女の心を占めていた。

だが、現実は酷なものだった。彼に会うどころか、それ以前の受付すら見付けられない。

自分の情けなさに悲しみを通り越して呆れすら感じさせる。じわりと視界が歪む。

（ダ、ダメだってばあたし！泣くなんてらしくないじゃない！）

まぶたをきゅっと閉じて涙を堪える。

泣かない。泣いてたまるか。凰鈴音は強くあらなければいけないのだ。中国の代表候補生として、一少女として、そして――。

「あの、」

「！」

不意に声をかけられ、鈴音の体がびくりと震え、思考がフリーズする。

男の声だ。でも、この声は彼じゃない。

自分の感を確かめるように、顔を上げる。そこにいたのは黒髪、赤眼の少年。彼は心配そうに鈴音を見下ろしていた。

どうしてここに男子がいるのか？

どうしてこんな時間に外出しているのか？

そんな質問が浮かぶ前に、鈴音は直感した。

（こいつ、痴漢！？）

「――ッ！」

我に返ると同時に、鈴音は拳を振りかざす。光が凝固し、彼女の腕を紅紫色の装甲が包み込み、躊躇なく目の前の少年へと突き出した。

ガツンッ！

「んな！？」

●

「あ、危なかった……」

瞬間的にレイヴァー・デイの腕部装甲を展開して剛拳は防げたけれど……。この女の子、なんて力だろう。向こうは片手だけに、こっちは両腕に装甲を展開しているのにも関わらず、ＩＳの装甲板を貫いて衝撃がビリビリと伝わってくる。

「あんた、どうして男のくせにＩＳを、」

あ、やば。とっさに展開しちゃったけど、世界で唯一の男性ＩＳ操縦者は一夏だけで、僕がいることは世界には知られてないんだった。

殴りかかってきた女の子の大きな目がさらに丸々と見開かれている。そりゃあ、普通は驚くよね。襲い掛かった男の子がＩＳを使える特別な男の子だったんだから。

……いきなり殴りかかられた僕もかなり驚いたけど。

「あの、とりあえずお話を、」

ググゥ～～……

聞いて、と提案しようとしたけど、さっきの音は何？

クロスした両腕の向こう側の女の子が夜でもわかるほど頬を真っ赤に染めている。あ、そういう事か。

「もしかして、お腹減ってるんですか？」

「べっ！別に減ってないわよ、馬鹿！」

馬鹿て。まあ、女の子にお腹の空き具合を聞くのはデリカシーのない質問だった事は認めよう。僕は腕部装甲を解除して、地面に落ちた紙袋を拾い上げると中身を確認する。うん、大丈夫。潰れてない。

「はい、どうぞ」

「……はぁ？」

紙袋の一つを女の子に差し出す。意味がわからないとばかりに彼女の眉が釣り上がる。

「お腹すいてるんですよね？じゃあ、これ食べてください」

「はぁ！？どうしてそうなるわけ！？」

「もしかしてお菓子がダメですとか？」

「そういう話じゃなくて！」

今にも噛み付いてきそうな勢いで僕に迫ってきた。何でそんなに怒

るの？

「だってこの時間じゃ食堂も閉まっちゃってますよ？」

「だ、だからって知らない奴から物をもらうなんてありえないでしょ！？」

埒があかない。よし、ここは。

「緋神カイト」

「は？」

「はい、これで僕らは知り合いですね。というわけで、これを差し上げます」

彼女の手を取って、紙袋を乗せる。強行手段だけど、こういった子には有無を言わさず行動で押し切ってしまったほうが早い。

「それじゃ、僕はこれで」

ぽかんとしている女の子に噛み付かれる前に退散しよう。背を向けて駆け出そうとしたその時だった。

「ま、待ちなさいよ！」

「へ？」

急ブレーキ、そして転身。振り向くと、あの子が視線をあっちへふらふら、こっちへふらふらさせていた。

「ちょっ、ちょっと頼みたいことがあるんだけど……」

ぼそりと蚊の鳴くような声で話し掛けてきた。

頼みたいこと？

●

「そっか、転入生だったんですね」

彼女、凰鈴音さんから事情を聞いた僕は妙に納得してしまった。どうやら凰さんは本校舎にある受付を探していて迷ってしまったらしいのだ。

事情を聞いた僕は受付に案内してほしいという凰さんの頼みを聞き入れて、今僕は彼女と伴に受付へと向かっていた。ちょうど僕の目的地である職員室はその隣だし。

「まったく！この学園はもうちょっと人にやさしくするべきでしょ！」

「それには同感です」

パリッとポテチをかじっている凰さんはご立腹だ。気持ちはわかる。やけに広いからね、この学園。僕も一人でいるとき何回道に迷ったことか……。

「そういえば、緋神だっけ？あんたに聞きたいことが幾つかあるんだけどいい？」

「カイトでいいですよ、凰さん」

「じゃ、あたしも鈴でいいわよ。後、さん付けもいらないし敬語も必要ないから」

びしっと食べ掛けのポテチを僕の顔に向ける。凰と呼ばれることに抵抗があるのかな？まあ、そう呼んでほしいって言ってるんだし、今度からそうしよう。

「わかったよ、鈴。それで質問って？」

鈴はポテチの袋から一枚チップスを取り出して僕に向けた。くれる、と言うわけでは無さそうだ。

「カイトは織斑一夏って知ってる？あんたと同じＩＳを使える男子なんだけど」

「一夏？」

意外な名前が彼女の口から飛び出てきたので驚いてしまった。まさか一夏の名前が出てくるなんて。僕の驚いた顔を見て、鈴が気付いたようだ。

「やっぱ知ってるんだ」

「そりゃあ同じクラスで、クラス代表と副代表、一応友達だから」

そしてまだお礼参りしていない仲だ。今日は忙しかったし、明日はちゃんと一夏をシバく、じゃなかった、しごいてあげないと。

それは後の楽しみに取っておくとして。

「鈴こそ、一夏の知り合いなの？」

「まね。アイツとあたしは幼なじみなのよ」

「幼なじみ？」

首をかしげる。あれ？一夏の幼なじみって篠ノ之さんじゃなかったっけ？

「なによ？人の顔をじろじろ見たりして」

「いや、なんでもないよ」

かぶりを振って答える。後で一夏に聞いてみよう。と、ちょうど本校舎が見えてきた。

「ここが本校舎だよ」

「やっぱり無駄に大きいわね」

「そういう事は思ってても口に出さないの。さ、行こうか」

大きいものをＤＩＳってるの？鈴の呆れたようなセリフにツッコミを入れた僕は先に校舎へと入る。確か受付は……

「あった。あそこだよ、鈴」

まだ閉じていないようで、受付には大きなあくびをしている事務員さんが座っていた。ようやく受付を見付けて、鈴がほっと胸を撫で下ろした。

「案内してくれてありがと、カイト。いつかお菓子と案内のお礼はするから」

「困ったときはお互い様だよ。それじゃあね、鈴」

ひらひらと手を振ってその場で鈴と別れ、その隣の職員室へと僕は入った。

「遅いぞ、緋神！今何時だと思っている！？」

第一声は織斑先生のお叱りのお言葉でした。

●

「緋神君おはよー。ねぇ、転校生の噂聞いた？」

翌朝。席に付いた僕に後ろの席の天野さんが話し掛けてきた。

「転校生？今の時期にか？」

「おはよう、一夏」

「おう、おはようカイト」

自分の席に荷物を置いてきた一夏が話に加わった。そういえば一夏はまだ転校生が鈴だって知らないんだっけ。

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「え！？」

鈴が代表候補生！？わたし聞いてない！？驚く僕をよそに、一夏はまったく興味がなさそうにふーん、と軽く返した。一夏、ちょっとは興味持とうよ。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「だが、このクラスに転入してくるのではないのだろう？騒ぐことでもあるまい」

「あ、オルコットさんに篠ノ之さん」

腰に手を当てたいつものポーズを決めながらこちらに歩いてきたのはイギリスの代表候補生のオルコットさんに続いて、興味はないと言う体を保ちながら篠ノ之さんも話に混ざった。

「でもどんな奴なんだろうな、カイト」

「そうだね……」

昨日の鈴との事を思い出しながら一夏に答える。

「背が小さくて、栗色っぽい髪のツインテールをしてて、強気な目をしてて、勝ち気で、マゼンタ色の専用機を持ってる子だと思うよ」

「なぜそんなに具体的なんだ、緋神？」

篠ノ之さんが僕に白い目を向ける。いや、僕の好みを言ったわけじゃなくて一応事実なんだけど。それにオルコットさんもなんで僕を親の仇のように睨んでるのさ？

「まあいい。今の緋神に女子を気にしている余裕などないぞ。なにせ、来月にはクラス対抗戦があるんだからな」

「そう！そうですわ、カイトさん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくしが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくし達三人だけなんですから」

「あの、僕だけが出るわけじゃないんだよ？」

本来クラスの代表者によるリーグマッチなんだけど、今年のクラス対抗戦は学園の上層部の意向により、クラス代表と副代表の二人で戦うタッグマッチにルール変更された。より実戦的な模擬戦を得て、例年よりも実力の向上を図るつもりらしい。

このクラスからはもちろん僕と一夏のコンビが出場する。僕はともかく、一夏を鍛えることを考えてほしい。一夏は未だに白式に振り回されてるんだから。

「ま、やるだけやってみるか。な、カイト？」

「そうだね。やるしかないもんね」

と、決意する僕と一夏にキツい言葉が次々と突き刺さる。

「やれるだけでは困ります！お二人には勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男子たるものそんな弱気でどうする」

「おりむーとあけりんが勝つとみんな幸せだよー」

オルコットさん、篠ノ之さん、えっと……のほほんさん（？）が次々にプレッシャーをかける。あけりんって、僕の事だよね？

ちなみに、彼女らのやる気の源泉は一位になったクラスに贈呈される学食デザートの半年フリーパスだ。デザートときいて黙っている女子はいない。

「織斑君、緋神君がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「大丈夫だって！今のところ専用機を持ってるのは一組と四組だけだから余裕だって！」

やいのやいのと盛り上がるクラスメイトを見て、僕と一夏は顔を見合わせて苦笑する。これは意地でも負けられないよ、一夏。負けたら僕らはきっと村八分にされる。この環境で村八分は死に直結するだろう。

「ーーその情報、古いよ」

突然、凛とした声が教室に響く。おや、この声は。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝なんてさせないから」

ああ、やっぱり。教室の入り口で腕を組んで片膝を立ててドアにもたれかかっていたのは昨日出会ったあの女子。

「二組のクラス代表、そして中国の代表候補生の凰鈴音！今日は宣戦布告にやってきたわ！」

ふっとニヒルな笑みを浮かべた二組のクラス代表、鈴がツインテールを揺らして僕と一夏を指差した。

「背が小さくて、栗色っぽい髪のツインテールをしてて、強気な目をしてて、勝ち気……」

一夏が数分前のセリフを復唱すると僕にアイコンタクトをしてくる。『お前、知ってただろ？』と目で訴えてきたので肩をすくめて肯定する。すると一夏は、はぁっとため息をついた。

「なに？このあたしに恐れをなしたの？噂の男子ってのも腰抜けばかりね」

「カイト」

「わかってるよ、一夏」

一夏の言わんとしていることが理解できた。だって僕も同じ事考え

てたからね。そして、一夏と僕は同時に口に出す。

「「鈴が格好付けるのはすごく似合わない！だよねぇ（なぁ）！」」

一語一句外さずユニゾンした一夏と納得しあう。さすが、僕の友達だ。以心伝心。

「んなっ……！なんてこと言うのよ、アンタ達は！」

化けの皮を剥がされ、いつもの調子に戻った鈴が怒りだした。だって似合ってないのは事実だし。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！！と軽快な破裂音をＢＧＭに登場する、ＩＳ学園のリーサル・ウェポンこと織斑千冬担任教諭がご降臨なされる。今日も出席簿の破壊力は抜群ですね。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

たたかれた頭を擦りながら織斑先生に道を譲る鈴。鈴は織斑先生が苦手なのか、びくびくしている。

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏、カイト！」

「なんで俺が逃げるんだよ？」

「鈴、僕もなの？」

「当たり前でしょ！？」

ごめん、鈴。なにが当たり前なのか僕には見当がつかない。

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

即座にUターンして、二組へと戻っていった。足早いなぁ。

「お前、鈴と知り合いだったんだな」

「一夏もやっぱり鈴を知ってたんだね」

やっぱり鈴は一夏の幼なじみだったようだ。なるほど、これで謎が解けた――

バン！

机からはそう簡単にバン！なんて音は鳴らないはず。僕の幻聴？

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「か、カイトさん!?あの子とはどういう関係で――」

み、みんな、そんなに騒いじゃダメだよ!だって今この教室には――

スパパパパーーン!

「席に着け、馬鹿ども」

織斑先生、今三人くらいに分身しませんでしたか?これ以上叩かれてはたまらないと、クラスメイト達は急いで自らの席に戻っていく。去りぎわに、オルコットさんが恨めしげな視線を残していったけど……、叩かれた原因は多分僕だし恨み辛みがあってもおかしくないか。

そして、今日もＩＳ学園の授業が幕を開けるのでした。

●

ＩＳ学園は優秀なＩＳ操縦者を育成することが主な創設理由である。だが、年中ＩＳに関する授業をするわけではない。語学や数学といった一般教養の授業もきちんと存在する。

今はその内の一つ、数学の授業。教壇に立つ真耶の言葉を必死にノートに書き綴るクラスメイトに混じって、セシリアは同じようにノートにペンを――

（なんなんですか、あの人は!?）

――走らせていなかった。いや、そもそもペンすら握っておらず、自分の髪の毛を指にからめて物思いに耽っていた。

その議題はもちろんさっきの女子のこと。

いやにカイトと仲が良さそうに見えてしまって、授業なんか聞いていられない。

彼女にとって、これはそれほどまでに由々しき事態なのだ。

（目立ったライバルなんていないと思ってましたのに……。代表候補生のわたくしがカイトさんの一番のお役に立てるって……。それなのに……）

「くすん……」

悲しみに沈んだセシリアの声が微かに漏れる。カイトが頼りにしているのは、同性の一夏を除いて自分だけだと過度な期待をしていた分、同じ代表候補生ポジションの鈴の登場によるダメージは大きいものだった。

しかも、カイトは自分と話すときのように遠慮した話し方を彼女にはしていなかった。それはカイトが彼女を『鈴』と、さん付けしないところで気が付いた。

（代表候補生でさん付けをしない仲なんてそんなのズルですわ！イカサマですわ！！）

わしゃわしゃと時間をかけて念入りにセットした髪の毛をかきむしる。それすらも今のセシリアにはどうでもいいことだった。

せっかく地道にカイトと仲良くなっていたのに、一瞬でそのアドバンテージを奪われてしまった。人間関係にズルもイカサマもないが、初めて人に恋をするセシリアにとって、それが非常に卑怯かつ卑劣な手段にみえてしまう。

思うように事が進まず、予想外の事ばかり起こる。セシリアが焦れるのも無理はない。

（なんとかこの状況を逆転させませんと……）

カイトの意識を自分だけに釘付けにさせるような、ＩＳの練習なんかよりもはるかに効果的なアプローチを――。

「オルコット」

「……例えばデートに誘うとか、いえ、もっと効果的な、」

「……馬鹿者が」

ばしーん！

「きゃん！」

ぐしゃぐしゃになったセシリアの髪の毛が黒い鉄槌によって押しつぶされた。

セシリアの頭を叩いた千冬は流れるように箒の方へと向き直り、そのまま出席簿を振り下ろした。セシリア同様、考え事に夢中になっていた箒はそれに気付くことなく、

ばしーん！

「だっ！」

「授業中だ。集中しろ、ガキども」

千冬の愛の鞭を受けて机に沈んだ。そんな二人の様子を他人事のように眺めていたカイトと一夏であった。

●

「お前達のせいだ！」

「あなた達のせいですわ！」

昼休み、僕と一夏は篠ノ之さんとオルコットさんに詰め寄られていた。この二人は午前中だけでも山田先生に五回、織斑先生に三回ぶたれていた。

いつも勤勉な二人がこんなに注意されるのも珍しいけど。はて？僕たちが原因って？

「一夏、何かやったの？僕まで巻き込まれてるけど」

「いや、カイト。お前が気付かない内に何かしたんだろ？」

「「お前達の（あなた達の）せいだ（ですわ）！！」」

さっぱり心当たりが無い。怒りっぽくなるなんて、二人ともカルシウムが足りてないよ。

「ま、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「賛成。僕もお腹減ってるし。二人とも、行こうよ」

「む……。ま、まあそういう話なら、いいだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

誘うと、二人はしぶしぶながらも付いてきてくれるようだ。何だか篠ノ之さんとオルコットさんの性格って微妙に似てるよね。ほら、何だかんだで話を聞いてくれるところとか。

その他、一緒に学食へ行くというクラスの子を引き連れてぞろぞろと学食へと移動、

「待て、緋神、織斑」

するはずだったんだけど、織斑先生に呼び止められる。一夏、げんなりした顔なんてしないの。

「お前たちには今すぐ着替えを持って第二アリーナに行ってもらう。白式、及びレイヴァー・デイの学園側の不足分のデータを収集する」

「放課後じゃダメか、千冬姉？」

「織斑先生だ。悪いが急を要するんでな、早く来いよ」

それだけ告げた織斑先生はそのまま教室を後にする。一夏と顔を見合わせ、ほぼ同時に深いため息をついた。今日のお昼は抜きになりそうだ。

「悪いな、箒、セシリア。呼ばれたから行かないと」

「ごめんね、みんな。お昼はまた今度誘うから」

残念がる篠ノ之さんたちに謝った僕と一夏は第二アリーナに向けて駆け出した。

第八話　～セカンドボーイ&セカンドガール～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

本来二つに分けるはずだったんですが、必要性が無いことを悟り、一つにまとめました。計画性がなくて申し訳ありません。

では、またの機会に。

第九話　～過去から来たりて～（前書き）

第九話です。

今回はオリジナル展開から始まります。

駄文ですが、お楽しみくださいませ。

第九話　～過去から来たりて～

織斑先生にアリーナに呼び出されてから約五分後。僕と一夏はそれぞれ専用機を展開して対面していた。

『聞こえるな、緋神、織斑』

ＩＳのオープン・チャネルから織斑先生の声が聞こえてきた。僕と一夏は頷いて返事をした。

『今からお前たちにはＩＳのデータを収集するため、模擬戦闘を数回行ってもらう。両名、武器を構えろ』

キィン、と粒子が手のひらから溢れ、ものの数秒で実体となり、僕の手に装備される。

ビームマグナムガン『Ｇａｌｖｅｓｔｏｎ（ガルベストーン）』。三種類実装されている武装のうち、レイヴァー・デイの主武器となる大型ビーム兵装だ。

対峙する一夏の白式が握り締めたのは実体剣『雪片弐型』。白式のメインウェポンにして唯一の武器。

「まさかこんな形でカイトと戦うなんて思ってもみなかったぜ」

「僕もだよ、一夏。でも、手加減はしないからね？」

「それはこっちのセリフだぜ！」

雪片を中段に構える一夏が不適に笑う。模擬戦闘とは言え、負ける

つもりはないんだろう。それは僕も同じだけど。

ガルベストーンの弾数を確認する。予備のＥパックを含めて１５発ちゃんとある。弾数が少ないんだから無駄遣いできないよ、カイト。

『準備はいいか？』

「はい！」

「おう！」

『それでは、戦闘開始！』

ビーーーッ！

織斑先生の掛け声に重なるように戦闘開始を告げるブザーが鳴り響く。

「はぁぁぁぁ！」

開始同時に一夏が背面スラスターを光らせ、接近してくるとその刃を振り上げた。やっぱり接近戦に持ち込んできたね、一夏！でもっ、

「当たらないよ！」

レイヴァー・デイを急上昇させて斬撃をたやすく避けると転身し、マグナムを構える。照準サークルが白いＩＳをその中央にとらえる。

「これでっ！」

キュイン……バシュゥン！

トリガーを引くと、空になったＥパックが宙を舞い、銃口に収束していた高密度のエネルギーが一条の輝となり、白式を穿つ。

「ッわっと！」

白式を横にロールさせ、辛うじて弾丸を回避する。でも、ビーム光に白式のウィングが微かに触れた。それはガルベストーンの弾丸に当たる事とほぼ同意義だよ、一夏。

「な、シールドエネルギーが！？」

ガルベストーンは『マグナム弾』と呼ばれる専用Ｅパックを丸々一つ消費して高出力射撃を行う。その威力は計測しただけでも、オルコットさんのスターライトｍｋ？の約四倍に匹敵する。

火力が高い分、当たろうが当たるまいがシールドエネルギーを奪える。掠めただけで白式のシールドエネルギーを削られたことに一夏は驚きを隠せないでいる。足が止まってるのはいけないよ！

「もう一発！」

再度狙いを付け、ガルベストーンの引き金を引く。さすがにこの銃の威力に気が付いたのか、白式の鷲の翼にも見えるウィングを羽ばたかせ、一気に下降して射線軸から退避する。

「二回目はないぜ、カイト！」

一夏がマグナムの性質を理解しつつあるからか、火球が白式を捕ら

えられなくなってくる。一夏の見切りのセンスには舌を巻くよ。

だったら、作戦を変えようか。

マグナムを収納（クローズ）して、別の武器を呼び出す。今度は長い砲身を持った火器が展開される。

肩に担ぐように構えたそれを高速で移動する一夏に向ける。ターゲットが定まっていないとフェイスガードに表示されるが、かまわず弾丸を打ち出す。

「当たらない、ってぇ！？」

その油断が命取りだよ。打ち出された実体弾はすぐさま加速による圧力で弾殻が圧壊し、中からベアリング弾が深緑の尾を引いて、周囲にばらまかれる。

レイヴァー・デイに実装された武器その2、実体弾無反動砲（いわゆるバズーカ）の『Ｗｉｌｍａ（ウィルマ）』。これに装填されている弾丸は特殊で、時間差で破裂して中に詰めてある鉛玉を拡散させるんだ。威力はガルベストーンに大きく劣るけど、広範囲に攻撃するには有効だ。

散らばる鉄球を雪片で弾く一夏だけど、あれだけの弾丸をすべて切り落とせるわけもなく、見る見る内に白式のシールドエネルギーが減っていく。

そろそろ決着付けますか。

「レイヴァー・デイ、走るよ！」

僕の呼び掛けに答えるように、漆黒のＩＳが加速する。同時にウィルマを射出する。

「くっ、うおおおっ！」

圧壊し、拡散する弾丸の雨の中を一夏は猛然と突っ込んでくる。一夏はよくも悪くも直線的すぎるんだ。でも、その姿は格好イイよ。……実力が伴ってればの話だけど。

「行くぞ、白式！」

一夏が吠えるのにあわせて、白式の握る雪片の刀身が光を帯びる。雪片弐型のスキル、『バリアー無効化攻撃』か。当たったら強制的に『絶対防御』が発動して、エネルギーを持っていかれるんだっけ。

「おおおッ！」

「甘いよっ！」

ウィルマを投げ捨て、光刃を構える一夏の右腕を片手で受けとめる。しっかり見ていれば、僕だってこれくらいはできる！

「くっ！」

押し切ろうと力を込める一夏の懐にもう一方の腕を押しつける。僕の腕を見た一夏がぎょっと目を丸くした。そこにはレイヴァー・デイの腕部ラックにマウントされた２門のガトリングガンが装備されている。

３つあるレイヴァー・デイの武装の最後の一つ、大型ビーム機関銃『Ｆｌｏｙｄ（フロイド）』。ガルベストーンの欠点である連射性と牽制に使えない火力の高さを補うように用意された武器。全部で４門実装されており、一つだけ使う他にもこのように銃底部分をドッキングさせ、腕部ラックに差し込んで二連装とする事ができる。

「一夏、訓練の時間を倍にしたほうがよさそうだね」

「え……？」

ニコッと微笑む僕の笑顔を見て一夏が凍り付く。いまさら逃げようとしてももう遅いよ。

「ちょ、ちょっと待った！」

「待たない。ファイヤ」

ドガガガガガガガガガッ！

「うおおおお！？」

二門の四連装銃身が回転し、ジェネレータ直結の光弾が射ち散らされる。光の集中豪雨を受けた白式は勢いに呑まれ、アリーナの地面に打ち落とされる。

『そこまで！』

ビーーー！と二度目のアラームが響き渡り、織斑先生が試合の終了

を告げる。ガトリングの攻撃を受けて白式のシールドエネルギーが底を尽きたようだ。

「一夏、何で鉛玉の中を突っ込んできたのかな？」

地面に降り立ち、一夏に質問を投げ掛ける。まさか肉を切らせてって奴じゃないよね？

アリーナに尻餅を付いたまま一夏はポリポリと頭を掻きながらこう解説する。

「カイトがこっちに向かって突っ込んできたから、一撃入れられるかと思ってさ」

「だからってベアリング弾の中を突っ切ってこなくても」

まさかあそこで真っ直ぐ突進してくるなんて想定外だった。急降下して攻撃を回避した後で反撃してくるものだとばかり思ってた。

「白式はシールドエネルギーを攻撃に流転するＩＳなんだから、もう少しエネルギーに気を使ったほうがいいよ」

「う～ん、今度からそうしてみるか」

大丈夫かな、こんな調子でクラス対抗戦に参加するなんてすっごく不安なんだけど。

隠れてため息を付く僕を余所に、一夏は白式を収納する。

「何やってるの？」

「え？だって模擬戦は終わりだろ？」

違うのか、と問い掛ける一夏の姿にもう一度ため息がこぼれる。

「一夏、織斑先生言ってたよね。データ収集のために、模擬戦闘を数回行うって」

「だから、模擬戦はいまさっき……あ」

ようやく気が付いたようだ。織斑先生は一回だけとは言っていない。つまり、

『緋神、織斑。十分間の休憩の後、もう一度模擬戦闘を行う。両名はＩＳのエネルギーを充填しておくように。いいな？』

「ま、待ってくれ！俺はもう限界で、」

『一撃も与えられずに負けた者の言い分など聞く耳もたん。いいな、十分後だ』

痛いところを突かれて呻く一夏を無視して、それだけ告げると放送を切る織斑先生。まったく、織斑先生も人が悪いよね。たった十分しか休みをくれないなんて。

「さあ、一夏。ピットに戻ってＩＳのエネルギーを充電しなくちゃね！」

「カイト」

「ん？なんだい、一夏？」

「お前、絶対に楽しんでるだろ？」

「そんな訳ないじゃないか」

激突された恨みとか、グラウンドの穴を埋めるのを手伝わされた辛みとか、そんなのあるわけ無いじゃないか！

まったく、一夏は何を言ってるんだろうね。

「とりあえずまずはピットに戻ろうか？」

「納得しきれないが、わかった」

レイヴァー・デイを待機状態へと戻した僕と一夏はピットに戻って行った。

●

データ収集を目的にした模擬戦闘は午後の授業すらも無視して続けられ、そして気付けば夕日が沈み初めて辺りが暗くなりだしたところでようやく終了した。

「一夏、大丈夫？」

「だ、誰のせいだと思ってるんだよ……」

地面に横たわり、ぜえぜえと息を切らしている一夏は僕をじろりと睨み付けてきた。うん、それくらい軽口が叩けるならまだまだ平気

だね。ちなみに僕は結構大丈夫だったりする。むしろ、胸のつっかえが取れてすっきりしたくらいだ。

三十を越える模擬戦闘を経て、一夏の戦績は三十戦全敗という悲惨な結末。射撃武器の特性を今だに掴み切れていないのが敗因だ。

でも、正直最後の試合は危なかった。一夏に一太刀浴びせられたからね。やっぱり、一夏は強いよ。無意識のうちに短時間で僕の武装の特性を掴みはじめているんだから。

「ふん、鍛え方が甘いからそうなるのだ。軟弱者め」

放課後と言うこともあって、様子を見に来た篠ノ之さんの小言が一夏に突き刺さる。確かに篠ノ之さんの言う通り、鍛え方が足りないのかな。

「一夏、明日からはトレーニングメニューをもっと濃くしてあげるね」

「そうだな、緋神。うん、それがいい」

「き、鬼畜かよ……」

単純に善意だよ。変な意味で取らないでよ。まあ、それは明日からやるとして、

「篠ノ之さん。悪いんだけど、一夏をピットまで連れていってあげてくれないかな。一夏はもう動けなさそうだしさ」

「！　そ、そうだな！動けないのなら仕方がないな！ほら、一夏、

私が肩を貸してやろう！」

ウィンクを篠ノ之さんにしてみると、その意味を理解したのか、すかさず一夏の肩に手を回す篠ノ之さん。

「じゃあね、一夏、篠ノ之さん。また明日ね」

「お、おう……」

「また明日だ、緋神」

力なく手を振り返す一夏と、嬉しそうな笑顔を返す篠ノ之さんの後ろ姿を見送る。

気を回しすぎたかな。でも、篠ノ之さんは嬉しそうだったし、これでよかったんだよね。

「僕も戻ろっかな」

一夏とは真逆のピットに戻る。着替えは向こう側にあるけど、シャワーはこっちでも浴びられる。

「やっほ、カイト」

「あれ、鈴？」

ピットに入った僕を迎えたのは鈴だった。意外な人物がいるのでちょっとだけ驚いた。驚く僕を余所に鈴は僕にタオルを差し出す。

「あ、ごめん。ありがとう」

受け取り、汗を拭く。ふぅ、すっきりしたぁ～。

「これもあげるわ」

そう言って次に差し出したのはスポーツドリンクだった。いや、さすがにこれは……。

「さすがにそこまでしてもらうわけにはいかないよ」

「いいから。ほら、受け取りなさい」

やんわりと断る僕に鈴はぐいぐいとドリンクを押し付ける。仕方なく受け取り、口を付ける。……ん？

「どうしたのよ、カイト？」

「……なんでぬるいの、このドリンク？」

キンキンに冷えた物を期待したけれど、中身は若干温かかった。

「運動した後の体に冷えきった飲み物は毒なんだって一夏が言ってたのよ」

「一夏らしいよね」

「というよりも、ジジくさいわよ」

顔を見合わせて鈴と笑いあう。一夏は年の割に健康を気にした素振りを見せたり、時折おばあちゃんの知恵袋的な発言をするときがあ

る。それが僕と鈴に共通する一夏らしさなんだろうね。

「それでカイト、噂の一夏は？」

「反対側のピットに篠ノ之さんと一緒にいるよ」

「篠ノ之？誰よ、その子？」

鈴がにっこり笑顔のまま僕に詰め寄ってきた。あ、あれ？何で不機嫌なの？

「え、えっと……、篠ノ之さんは鈴と同じく一夏の幼なじみで、一夏の同居人……かな？」

「はぁぁぁぁっ！？」

うわ！？なに、どうしたの鈴！？いきなりそんな声を上げて！？

「か、カイト、それって一夏はその篠ノ之って子と寝食を共にしてるってこと！？」

鈴の背中に龍が見える！？あまりの迫力に首を縦に振って答えることしかできない自分が情けない。

「ぼ、僕と一夏の入学が特殊だったせいで部屋が用意できなかったから一夏は幼なじみの篠ノ之さんと同室にするしかないって山田先生が……」

ただ説明しているだけなのに、だんだんと尻すぼみになってしまう自分がいる。

鈴は僕の説明を聞くに連れて顔をうつむかせていく。と、ぼそりと鈴の口が動く。

「……ったらいいわけね……」

「え？」

「だから！幼なじみならいいわけね！？」

「あ、ちょっと！鈴！」

ガバッと顔を上げた鈴はそのままピットを走り去ってしまう。いいのかな、一夏はまだ向こう側にいると思うけど。

気になるけど、僕がどうこうできる問題でもなさそうだから、とりあえず向こう側のピットへ、

「緋神、いるな」

何だか今日は来客が多い。ロッカーの影から現われたのは織斑先生だった。

「僕に御用ですか、織斑先生？」

「今は無理に先生と呼ばなくてもいいぞ、カイト」

「はぁ」

温和な笑みを浮かべる千冬さんに曖昧な返事を返してしまう。

「何か思い出したか？」

「え？」

急に質問されてきょとんとなる。思い出したかって、僕の記憶のことだよね？

ゆっくりと、でもしっかりと首を横に振る。

「いいえ、今のところは何も」

「そうか……」

千冬さんが疲れたように息を吐いたのを見て、僕をここに置くことがどれだけ大変なことなのかを察してしまう。

僕がＩＳ学園に来て、レイヴァー・デイに乗り続けること一ヶ月間経った。色々なことがあったけど、何も思い出すことなんてない。何か一つでも思い出せれば千冬さんにこんな気苦労をさせなくて済むのに……。

「すみません。僕の記憶が無いばっかりにご迷惑をかけてばかりで」

「気にするな、と言っても気にするだろうな、お前は」

ロッカーに背中を預け、くっくっくっ、と唇に手を当て笑う千冬さん。まあ、なんというか、僕の性格をわかってらっしゃる。

「レイヴァー・デイと関わっていれば少しは昔の出来事が想起され

ると思ったんだがな」

「もしかして、だから今日僕を？」

今日の模擬戦闘にはそういう意図もあったのかな？ふん、と鼻を鳴らした千冬さんは微笑を浮かべる。

「私を買い被りすぎだ、カイト。偶然お前と一夏の専用機のデータが必要になっただけだ。それ以上でも以下でもないさ」

その答えに、やっぱり千冬さんなりに手を回してくれたんだと確信した。だから、僕は――

「なら、そういうことにしておきますよ」

へたに突っ込むことなくそれを答えとして受けとめる。この恩は僕の心のなかにしまっておこう。

「もう遅い時間だ、風邪を引くなよカイト？」

「そんなに子供じゃありませんよ！」

「そうか」

わざと声を荒げて反論する僕に、手を振ってそのままピットを後にする千冬さん。まったく、どうしてあんなにいい人なんだろうね。

「あれで鬼じゃなければ完璧なんだけど」

っと、それはいいっこ無しか。さて、一夏たちも帰った頃だし、向

こう側のピットへ着替えを取りにいこう。

鈴からもらったぬるめのスポーツドリンクを飲み干しゴミ箱に捨てる。バシュッと格好イイ空気が抜ける音が鳴り、スライド式のドアが開く。……あれ？

「これは？」

ドアの脇に落ちていたのは乾いたタオルと、水滴のついたドリンクのセットだ。

「鈴の？いや、違うな」

自分の言葉を即座に否定する。鈴は一夏の言葉を信じてぬるめにしていた。でも、このドリンクは買って間もないのかまだ冷えている。

いったい誰のなんだろう？

しばらく頭をひねってみても答えは出ず、アリーナ中を捜し回ってみたけれどその２つの持ち主は結局見つからなかった。

●

「結局誰のなのかな、これ」

ため息混じりにぼやきつつ、手に持ったタオルを眺める。何だかんだで寮まで持って帰ってきちゃった。

水色のタオル地に波をモチーフにした意匠を凝らしたこれは、ありふれたホテルや旅館で配られるものとは違った風格を醸し出している。

こんな高級そうなもの、いったい誰が……？

「最っっっ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

「この声は……鈴？」

聞き覚えのある声が目と鼻の先の一室から寮全体を振動させる。何事だろう？

駆け寄る僕の前で扉がバタンッ！と音を立てて開き、ボストンバックを持った小柄な女の子が飛び出してくるとそのままの勢いで僕へと突っ込んできた。って、マズイ！

ドンッ！

「あだっ！」

「きゃっ！」

気が付いたときにはもう遅い。鈴は僕に追突し、しりもちをついてしまう。

「大丈夫、鈴！？」

「か、カイト！？」

ぶつかったのが僕だと気付いた鈴が顔を上げる。今にも泣きだしそうな瞳を持つその顔は悲しみに満ちていて、見ていてすごく痛々しい。

「どうしたの、鈴？」

「な、なんでもないわよ！」

「でも、」

「ホントに大丈夫だから！」

呼び止める間もなく、鈴は今にも崩れそうな笑顔を僕に晒して走り去っていってしまった。

いったい何があったんだ？そう思って鈴が飛び出してきた部屋を覗き込むと、そこにも見慣れた二人がいた。

「……どうしたの、その顔？」

「ああ、カイトか」

どこか魂の抜けたような表情の一夏の頬は真っ赤に染まっていた。一夏の前に折れた竹刀を片手に立つ篠ノ之さんも一時間ほど前に見た笑顔なんて微塵も見えない。

「鈴が走って行ったけど、何かしたの？」

「いや、昔した約束のことなんだけど」

「約束？」

律儀な一夏が約束を破るなんて思えない。だとしたら鈴があんなった理由は……。

「一夏、差し支えなかったらその約束の中身を教えてもらっていいかな？」

「えーっと、鈴が中国へ帰る前にした約束なんだけど、いつか鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚をおごってくれるってヤツなんだけどさ」

ああ、なるほど。そういう事か。

「てっきり俺は毎日メシを食わせてくれるんだってばかり思ってて……カイト？」

開いた口が塞がらないとはまさにこの事。なんてことをしたんだ、この男は。呆れて物も言えない。

「一夏」

「な、なんだよ？」

僕の発した声に一夏がたじろぐ。顔に手を当てたまま言葉をつなげる。

「僕は今まで一夏は『もしかしたら、一夏はバカなんじゃないか？』なんて疑ってたんだ。ごめんね、一夏。でもね、今の話を聞いて僕

は自分の間違いに気付いたよ」

「ま、間違い？」

そう、決定的な間違い。何で気が付かなかったのかな。そうさ、この織斑一夏と言う少年は、

「喜んでいいよ、一夏。君は本当に最低のクズだよ」

「バカじゃなかったのかよ！？」

知るか、そんなの。鈍感すぎる一夏へ向けた溜息は不思議と篠ノ之さんと重なった。

●

翌朝、生徒玄関前廊下にある紙が大きく張り出された。表題を『クラス対抗戦日程表』と書かれたそこには僕と一夏の対戦相手が表記されていた。

初戦の相手は鈴がクラス代表を務める二組だった。

第九話　～過去から来たりて～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

少しずつオリジナル展開を入れつつあるのですが、いかがでしょうか？ご意見などございましたら、よろしくお願いします。

次回はクラス対抗戦、ＶＳ鈴です。もしかしたら長くなってしまいますので、前後編になるかもしれません。

では、またの機会に。

第十話　Ａパート　～Ｂｒｅａｋ・Ｏｖｅｒ～（前書き）

第十話、Ａパートです。

文才がない所為でかなり滅茶苦茶な内容と思いますが、何とぞご容赦を。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第十話　Ａパート　～Ｂｒｅａｋ・Ｏｖｅｒ～

クラス対抗戦当日、第二アリーナの客席は噂の男子コンビの戦いを見るべくアリーナ内は見渡すかぎり人、人、人。座れない人は立って観戦し、アリーナからあぶれた人は校舎や食堂に設けられたリアルタイムモニターで試合をチェックするらしい。

ボルテージが最高潮に達するかという第二アリーナ、そのＡピットに僕と一夏、篠ノ之さんはいた。

「まさか、最初から鈴と当たるなんてな」

「誰かに仕組まれてるんじゃないかって考えちゃうよね」

一夏と鈴の約束の一件以来、二人の間には大きな溝ができてしまって、一夏と鈴は一切口を聞いていない。鈴が一夏を避けているんだ。そんな二人を見ていると一お節介かも知れないけど一二人の仲をなんとかしてあげたい。

そういえば、避けているということで思い出したけど、

「ところで、セシリアはどこに行ったんだ？」

「知らん」

「僕にもちょっと……」

ピットを見渡す一夏に篠ノ之さんがどこか苛立った様子で、僕は困ったように答えた。

鈴が転校してきたあの日から、オルコットさんとは話していない。
話し掛けても、

『なんでもないですわ！』

の一点張りで、一夏の訓練にも参加しなくなり、オルコットさんが僕らといる時間は激減した。

篠ノ之さんをはじめとする女の子の話を聞くかぎり、どうも僕を避けているらしいんだけど、心当たりがない。

気付かないうちに何かしてしまったんだろうか？

ＩＳのチャネルが開き、物思いに耽っていた僕に山田先生の声が届き、思考が途切れる。

『織斑くん、緋神くん、対戦者のデータを転送します』

「あ、はい」

ピピッ、と電子音を鳴らし、山田先生が送ってくれた二組陣のデータが開示される。

「二組の副代表はラファール・リヴァイヴか……」

先に表示されたのは二組の副代表の駆るＩＳ、ラファール・リヴァイヴ。ネイビーカラーをした四枚の多方向加速推進翼を装備し、学園で採用されている同じ第二世代ＩＳの打鉄に比べて柔軟な動きができるが、その分防御力は打鉄に劣る。

装備を確認する限り、この子は特に警戒すべきポイントは見当たらない。大丈夫、なんとかできそうだ。

続いて展開される鈴のＩＳ。これは……、

『凰さんのＩＳは『甲龍』といって、織斑くんの白式に類似した接近格闘戦用の機体となっています』

マゼンタに統一されたＩＳの背面ラッチに備えた巨大な実剣も警戒すべきだが、なにより両肩に備えた一対の球を模した非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が目と注意を引く。

一夏の白式と同じ接近戦用のＩＳだから、加速用のブースターかもしれないけれど、何か匂う。あのユニットは加速に使用するブースターじゃないのかも。

「一夏、鈴の肩に付いたパーツには気を付けて。何だか嫌な予感がするんだ」

「おう。あれで殴られたらすげぇ痛そうだしな」

「そういうのとはちょっと違うけど……」

なんにしても、一夏がどんな形でもあのパーツに気を配ってくれるならその理解の仕方は問うまい。

（……あれ？）

鈴の専用機のスペックを確認していて、不意に一夏の手が震えてい

ることに気が付く。緊張してるんだね、一夏。無理もないか、オルコットさんの時とは訳が違うんだし、お客様もたくさんいる。嫌でも緊張しちゃうよね。

緊張を解そうと僕が口を開くよりも先に、篠ノ之さんが一夏の前に立った。

「一夏、、そんなにかたくなるな。肩の力を抜くんだ。そうでなければ本来の力は発揮できないぞ」

「箒……。そうだな」

さすがは幼なじみ。一夏が緊張していたことに気付いてたか。篠ノ之さんに続いて僕も一夏にハッパをかける。

「だね。この日の為に練習してきたんだから不様な真似なんて見せないでよ、一夏？」

「言ってくれるじゃんか、カイト」

一夏がふてぶてしい笑いを僕に返す。ちょっとは緊張がほぐれたようで何よりだね。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスが届くのに合わせて、ガコンッ！とピットゲートが開き、アリーナが視界に映る。既に鈴たちは出撃しており、僕らを待ち構えている。

「一夏、緋神、勝ってこい！」

「うん！」

「ああ！白式、行くぞ！」

一夏の白式がカタパルトの上を滑り先行する。続いてレイヴァー・デイをカタパルトに乗せる。高ぶる気持ちを静めるように深呼吸。

……よし！

「行きます！」

踵部のアンカーに押し出され、カタパルトを走るレイヴァー・デイがアリーナの空へと飛行する。

先に出撃した一夏と同じ高さまでならび、対戦相手の二人を眼前に捉える。この距離は立った五メートル。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛め付けるレベルを下げてあげるわよ」

「そんなのいらねぇし、謝りたくもねぇ。全力でこいよ、鈴」

一夏が若干の怒気を孕んだ声で鈴の提案を一蹴する。一夏は手を抜くのも抜かれるのも嫌いで、純粋に戦いに意味を見出だしている。だから、鈴の言葉が尺に触ったんだろう。

「言っておくけどＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

鈴の自信に満ちたセリフがやけに引っ掛かる。確かにかなりの攻撃力があれば殺さない程度にいたぶることはできるけれど、鈴のＩＳの装備にそれだけの火力がある武装があるとは思えない。

と、鈴の目が僕を捉える。

「カイト、あんたには先に謝っておくわ。あんたに恨みはないけど、今のあたしは手加減できないから」

「一夏も言ってたけど、それでいいよ。僕だって下手に情けを掛けられるよりはマシだからね」

どうやら僕も一夏と根底では同じみたいだ。手加減も哀れみもいらない。全力で戦いたい、それだけだ。

『一夏』

『お、おう』

一夏へのプライベートチャネルを開くと、一歩遅れて返事が返ってくる。まだ慣れてないのかな。

『鈴はきっと一夏を狙ってくる。だから、鈴は任せていいかな？僕は向こうの子を引き受けるから』

アイコンタクトを交えて戦略を伝える。

鈴の性格からして一夏を狙ってくるのは必至。なら、それを利用して戦力を二分する。一対一に持ち込めたのなら、絶対に勝機はある。

『わかった。でも長くは持たないぜ？』

『わかってる。難しいと思うけど、お願いね』

戦略を伝えるとチャネルを切り、武器を呼び寄せる。ここはウィルマの出番だ。

鈴がフン、と鼻を鳴らし、背面ラッチに備えたＩＳ用の青龍刀をバトンを回すかのごとく振り回す。

ＩＳを装着した四人の視線がぶつかり合い、火花を散らす。ウィルマのグリップを意味もなく握りなおす。

今になって緊張してきたのか？らしくないだろ、緋神カイト。

僕らは勝つ、それだけだ。

『それでは、試合を開始してください』

ビーッ！

試合開始のゴングが鳴り響く。瞬間、雪片を構えた一夏と鈴が飛び出し、切り合う。やっぱり一夏を狙ってきた。

ダダダダ！

「っと！」

レイヴァー・デイをロールさせ、飛来した二本の火線から逃れる。

二組の副代表の子が両手に構えたアサルトライフルで攻撃してきた。
やっぱり向こうも分断しにきたか！

「だったら！」

グンッ！

誘いに乗るべくスラスターを点火し、一夏たちとは真逆へと加速する。背後を仰ぐと、よし、ちゃんと追ってきてる。

『この！逃げるな！』

「痛っ…！」

キーン、と耳に痛みが走る。向こうの子、声大きいよ。そんなに逃げるなって言うんだったら――

「プレゼントっ！」

反転し、直進してくるラファールに向けてウィルマを構える。前方側面の補助グリップが起立し、砲身がスライド延長して発射シークエンスを一息で完了させると、即座に発射レバーを引く。

ドォン！

排煙機（エバキュエーター）から排熱と排煙が四方にガスの帯を漂わせながら射出された弾頭が弾け、濃緑色の鉄球を振り掛ける。

『そんな武器なんて卑怯っ……！』

悪態を付きながら四枚の推進翼を羽ばたかせ、ラファールが鉄球群を慌てて後方へと回避しつつ、ライフルを応射する。

『当たりなさいよ！』

操縦者の苛立ちと共に断続的に発射されるライフルが足元を掠める。回避によって上下逆転した姿勢のまま、身長に匹敵する砲身を肩に担ぎ直して再度ベアリング弾入りのバズーカ弾を放つ。

『くっ！』

急停止したラファールは体を傾け、肩に備えた物理シールドでベアリング弾の雨を耐える。足が止まった！

（ガルベストーン、フロイド！）

間髪入れずにウィルマを収納（クローズ）し、右手にガルベストーンを、左手には一門のフロイドを呼び出すと、メインブースターを着火させて、急速に接近する。

『うそ！？はやい！？』

「ッ！」

相手が反応するよりも早く四連装の銃身を回転させたフロイドがぶつ切りの光の豪雨をラファールに降り注がせた。

怯みながらもショルダーアーマーの防御障壁をかざし、無数の弾丸から逃れつつ距離を離そうとウィングを開く。でも、そんな速度じゃ！

「遅いッ！」

トップスピードとなったレイヴァー・デイがネイビーカラーのＩＳの懐へと潜り込むのに合わせて、加速度の乗った脚で空を凪ぐ。

ガギィン！

『きゃ！』

相手の両手に持つアサルトライフルごとシールドを蹴り飛ばし、防御体勢を崩す。瞬時に空中一回転（サマーソルトターン）で彼女を正面に捉えると、ガルベストーンの銃口を突き出す。照準なんて不必要。

「ごめんね。でも、これでお終いだよ！」

キュイーン……バシュン！

告げるが早いか、ガルベストーンが業炎の叫びを上げる。光の大河に飲み込まれ、吹き飛ばされたラファールがアリーナの地面に落下する。

―ラファール・リヴァイヴ、エネルギー残量ゼロ。戦闘続行不可能。

バイザーに戦闘結果が表示される。同時に、客席から歓声が上がった。よし、まずは一人倒した！次は――

「ぐあ！」

ドンッ！

「一夏!?」

僕が振り向いた瞬間、一夏が見えない何かに吹き飛ばされて地面に衝突していた。

なんだ、さっきの!?

「まだまだ行くわよ!」

ふらふらになっている一夏へ鈴が咆哮し、あの球状の非固定浮遊部位がスライドし、砲身が露出する。それを見て、鈴が自信に満ちていたのかを理解した。

アレはスラスターじゃなくて――!

「一夏!」

反射的にガルベストーンの引き金を引く。太い炎熱線が鈴の行く手を遮る。

「カイトっ!」

バシュン!バシュン!

続けて一射、二射と高エネルギーの塊を甲龍に投げ付けた僕は空薬莢が地面に落ちるよりも早くレイヴァー・デイを突出させる。苦々しく僕の名前をつぶやいた鈴は脚部スラスターを噴かして一夏から距離をとった。

すぐさま急制動をかけ、鈴の前に立ちふさがる。

「一夏、立てる？」

「ああ……、なんとか」

雪片を支えにして立ち上がった一夏がめまいを覚ますために頭を横に振っている。やはり、鈴の攻撃は貫通して肉体にダメージを与えることができるんだ。

でも、彼女の優位が崩れないのはその武器の特性から来ている。

「鈴。その肩の武器、スラスターじゃなくて『衝撃砲』だね」

「へぇ。よく分かったじゃない、カイト」

「僕は一夏と違ってちゃんと勉強してるからね」

鈴がマジックの種を当てられたというのに、不敵な笑みを浮かべている。種は割れてもあの武器がある限り、鈴の絶対的優位は変わらないか。

「カイト、衝撃砲ってなんだ？」

「空間そのものに圧力をかけて砲身を作り出し、その時にできた衝撃を弾丸として発射する第三世代ＩＳから搭載された新兵器なんだけど、鈴の物はそれに加えて射角に制限がないみたい」

「えーっと、つまり？」

「見えない弾をバンバン撃ってくる滅茶苦茶強力な武器」

鈴を凝視したまま背後の一夏に答える。第三世代には第二世代とは一線を画す武器が搭載されているってオルコットさんに聞いていたけれど、衝撃砲なんて厄介な武装が装備されているなんて。

「一夏、まだやれるね？」

「当然だろ？」

一夏が僕の隣に並ぶ。強がってるけど、肉体的にも機体的にも長期戦に持ち込まれたら一夏は持たない。それなら、とるべき手段は一つだ。

「一夏。僕がアシストするから、隙を見て切り込んで。早めにケリを付けるよ！」

一夏の返事を聞く前にガルベストーンの引き金を引く。最後のEパックが排出され、閃光の濁流が鈴へと飛び掛かった。

●

「緋神くん達、押してますよ！」

ピットのリアルタイムモニターを見ていた真耶が興奮気味に声を上げた。モニターの向こうではクラスの代表としてアリーナを飛翔する白と黒の機体は敵対する鈴の機体に立て続けに攻撃を加えていた。

「二人のコンビネーションは凄いですね！」

「……いや、あれをコンビネーションと呼ぶにはお粗末すぎる」

真耶の言葉を冷静に試合を分析していた千冬の一言が否定した。その言葉に口をかたくつぐんで試合を観戦していた箒の眉がぴくりと動いた。

「織斑の動きをよく見てみろ」

「織斑くんの、ですか？」

真耶は千冬に言われたとおり一夏の動きに注目する。アリーナでは、カイトの放ったビームガトリングの豪雨を回避した鈴に一夏が切り掛かっていくシーンだった。残念ながら、一夏の雪片による斬戟は甲龍の青龍刀によって受け流されてしまう。

「特に変なところがあるようには見えませんが……」

「さっきの場面、援護が緋神でなければ一撃入っていた」

「え？」

腕組みを解き、指で画面に映るレイヴァー・デイを指差す。

「緋神の機体は圧倒的な火力で複数の敵を排除するコンセプトのＩＳだ。だから、一対一や一対多数ならば本領を発揮できるだろう」

だが、とそこで言葉を切った千冬の目が鋭く細まり、その目でガルベストーンを構えるカイトを捉える。

「自分が複数側に入ってしまうと、自らの火力の高さで味方の攻撃のチャンスを奪ってしまう結果を招く」

千冬の言葉を裏付けるように、右手のマニュピレーターによって引かれたガルベストーンは一夏の行動先を狭めるように放たれていた。

「緋神とて自身の武装の特徴を把握しているだろうが、いかんせん連携訓練を積んでいない為に織斑の攻撃を妨げてしまう」

自分の意志とは関係なくな、と続けた千冬の背後でドアが開く。真耶が注意しようと仰ぎ見ると、そこにいた人物を見て「あ、」と声を洩らす。

「セシリア？」

箒が驚きの声を上げる。ピットに表れたのはセシリアだった。その表情はどこか晴れ晴れとしていて、決意に満ちたものだった。

「遅刻だ、オルコット」

「すみません、織斑先生」

謝罪もそこそこにセシリアはリアルタイムモニターの前に立つ。その表情を見た千冬は小さく吹き出す。

「踏ん切りがついたようだな、オルコット」

「はい」

彼女の蒼穹の瞳は真っすぐに、モニターに注がれていた。

●

ガシュン！

鈴の肩に備えた衝撃砲の中が露見し、大気が震える。

「一夏、散開！」

一夏に指示を飛ばし、レイヴァー・デイを急降下させる。一夏は白式を急上昇させ、狙いを二分させる。

「甘いわよ、二人とも！」

ガコンッ！と左右の球がそれぞれ別々の方向に傾き、不可視の砲弾を乱射する。威力を物語るように、衝撃砲が直撃した地面が次々に爆ぜる。

無理矢理な回避マニューバを実行しながら背面ラッチに手を伸ばし、替えのEパックを掴むとガルベストーンに装填する。

ガシュッ、とボルトが前進して五基連結したマガジンを固定すると、鈴へ向けてガルベストーンを放つ。

「そんなんじゃ当たらないわよ、カイト！」

見えない砲弾を弾きながら迫る高濃度圧縮ビームを容易く躱した鈴

は上空へ飛翔し、一夏に手にした青龍刀で切り掛かる。

ガギィン！

雪片弐型が青龍刀とぶつかり合い、アリーナに高周波を響かせる。

拮抗しているかに見えたのも一瞬で、

ヒュゴッ！

「ガッ！？」

白式の白い装甲に甲龍の拳がめり込み、一夏は地面に叩きつけられる。

「一夏っ！」

「よそ見してる場合？」

「しまっ――」

ドン！

一夏に気を取られた隙を見逃さなかった鈴が衝撃砲を開いたのを察知できず、見えない砲弾を腹部に受けて、地表に激突する。

「痛っ……」

不可視の砲撃に当たった体がいやな熱を持ち、ジンジンと痺れる。

お腹を抉られて吐き気がするけど、まだ大丈夫。

「カイト」

地上を滑るように一夏が近付いてきた。不味いね、白式のエネルギーが危険域（レッドゾーン）に近い。これじゃ、僕たちの切り札であるバリア無効化攻撃もよくて後二回が限度だ。

やはり、雪片と白式しかこれを行えないというのがネックで――

（――いや、待てよ）

ふと気が付いた。バリア無効化攻撃は白式と雪片が揃った時に発動するんだよね。なら、そうだ、これなら。

「一夏、お願いがあるんだけど」

「なんだ、カイト」

鈴と向き合っている一夏に突拍子のない提案する。

「僕に雪片を貸してほしいんだ」

一夏がぎょっと目を丸くして僕を見る。その目が無茶だと訴えるが、なにも自暴自棄になったわけじゃない。これは逆転の一手だ。

「いつまでおしゃべりしてるつもり！？」

焦れた鈴が衝撃砲を展開する。考えるよりも先にレイヴァー・デイを疾駆させる。

先程までいた場所が抉れ、石つぶてが散らばる。

ドンドンドンッ！

弾雨が背面に迫る危機的状況ながらも、一夏にチャネルを開いて呼び掛ける。

「一夏、僕を信じて！」

『カイト……。ああ！』

アリーナの空を大きく旋回していた白式が急下降をしたのを見て、僕もその方向へと転換し、最大速度で一夏に接近する。

僕達のＩＳが重なった一瞬、一夏から後ろ手に武器を手渡され、それと同時に一一。

「信じたからな、カイト！」

「うん！」

直後に下降していく一夏。僕は手にした雪片をしっかりと握りしめ、鈴へと猛突する。

「はぁぁぁ！」

「そうくるのねっ！」

キィン！

雪片を振り上げ、鈴に切り掛かる。が、物理的な衝撃に押し返される。だけど構わない、この刃を振り続ける！

ひっきりなしに金属音が響き、鈴の操る青龍刀とぶつかり合い、擦れ合った金属が火花を散らす。ただひたすらに付かず離れずの距離を保ち、接近戦を挑む。

「この距離なら外さないわよ！」

雪片ごと僕を押さえ付けた鈴は右肩を押しつける。球体のカバーがスライドし、衝撃砲の準備を始める。本来なら逃げるところなんだろうが、生憎と逃げは趣味じゃない。

それに一一僕は一人で戦っているわけじゃない。

バシュゥン！

「んな！？」

足下が光り、見慣れた輝きの濁流が迫り、たまらず鈴が急上昇した。

駆け上がってきたのは、ガルベストーンを構えた一夏だ。一夏から雪片を借りた一瞬、僕も一夏にガルベストーンを渡していた。さすが一夏、ナイスなアシストだよ。

「一夏！」

鈴に向けて一直線に加速する一夏に雪片を投げ渡す。ブーメランのように回転した雪片は主人の手に収まり、光刃を形成する。

バリア無効化攻撃を発動させるには、白式と雪片が揃ってさえいればいい。そこに気が付いた僕は一夏と雪片を別々に運ぶ戦法を取った。これなら、白式のシールドエネルギーを心配する必要もない。

「今度は外さねぇッ！」

白式のウィングスラスターから爆発的な光があふれる。強襲とも錯覚させる『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を発動させた白式が純白の軌跡を残し、甲龍に肉薄する。いくら鈴とは言え、どう足掻いても直撃は避けられない。

勝った、誰もが思ったその時だった。

ズドォォォォンッ！

「「「！？」」」

突然の衝撃にアリーナが大きく揺れる。轟音が空気すらも怯えたように震わせ、全身を包み込む。ビリビリと何かが裂ける音が不安を煽る。

何かがアリーナの遮断シールドを突き破ってきたのだ。『それ』はステージ中央でもうもうと立ち上る煙に身を隠している。

『試合中止！織斑、凰、緋神、即刻アリーナから退避しろ！』

頭上から織斑先生の切羽詰まった声がアリーナに轟く。同時に客席

を保護するための防壁が伸び、客席をステージから隔離した。

「な、なんだ？何が起こって……」

「一夏、試合は中止だよ！早くピットに戻って！」

困惑する一夏に声を飛ばす。瞬間、警告音と共にバイザーに情報が表示される。

ーステージ中央に高熱源反応。所属不明のＩＳと断定。ロックされています。

「所属不明のＩＳ……！？」

アリーナの遮断シールドはＩＳとほぼ同じ構成をしている。それを破壊するだけの攻撃力を持つＩＳが僕をロックオンしているだって？

一体、どんなＩＳが――

キィン！

「あぐ！」

目を凝らしたその時、脳裏に甲高い音が響き渡った。それがトリガーになるように、頭の中で色々な情報がぐちゃぐちゃになり、酷い頭痛となって襲い掛かってきた。

「カイト！？」

鈴が僕の容態の変化に気付き、走り寄ってきた。

「大丈夫……平気、だよ」

「そんな顔で言われても説得力ないぞ、カイト」

戦闘不能で動けなかった二組の副代表をピットに運んだ一夏がそう指摘する。どんな顔なのか、自分でも見てみたいけど、今はそれどころじゃない。

頭を押さえながら前方の煙を睨み付ける。すると、敵意に触発された何かが煙の中で身じろぎする。確かな質量を持ち、肌を粟立たせる明らかな悪意を持った何かが僕に殺意を突き付けてくる。

心の暗い場所から沸き上がる恐怖に戦慄する僕の前で、その悪意が土埃を切り裂き、姿を顕現させ、産声を上げた。

「ＺｉＧａａａａａａａａａａッ！！！！！」

第十話　Ａパート　～Ｂｒｅａｋ・Ｏｖｅｒ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

今回はＶＳ鈴編、乱入前まで書かせていただきました。乱入してきたＩＳとは？　少なくともゴーレムではありません。次回はオリジナル展開になります。感想、ご意見、ご指摘がありましたらお願いします。

それでは、またの機会に……。

第十話　Bパート　～黒獅子、咆哮す～（前書き）

第十話、Bパートです。

何だか長いだけでグダグダになっていますが、ご容赦くださいませ。

駄文、長文ですが、お楽しみくださいませ……。

第十話　Bパート　～黒獅子、咆哮す～

それは最初、無感情に爆炎の奥でただ突き立っているように見えた。

灰色の装甲を炎で炙られる人型の機兵、その腕部に走る血管の如き赤いラインがうねりを上げて、握り締めた黒いバベルの塔で渦巻く黒煙を引き裂き、僕らの前に全身を顕にさせた。

「ＺｉＧａａａａａａａａａａａａッ！！！！」

理性すら感じさせない猛々しい雄叫びを上げた異形のＩＳ。声に混ざり込んだ怒りが僕の恐怖心を揺さ振る。

度重なる戦闘によるものなのか、傷だらけの濃い灰色の装甲は大柄な奴の全身を覆いつくし、背負っているスラスターも無骨で機能性のみを追求した形状をしている。『全身装甲（フル・スキン）』に覆われたそのＩＳは、怨嗟の籠もった死の臭いが漂っており、死神、或いは生ける亡者と呼ぶに相応しい。

更に、肩に担ぐように構えたあの武器に意識を持っていかれる。槍、いいや、そもそも槍なのか？矛先が余りにも肥大化しているので、持ち手との大きさがアンバランス過ぎる。ＩＳの武器の中にはオーバーサイズの物も数あるとは言うが、アレはその中でも群を抜いて異質だ。

姿を現したそのＩＳはデスマスクのようなフェイスガードの奥から覗く赤い二つ目で僕達をじっと見つめている。

……違う。あれは僕らを見ているんじゃなくて――。

「お前、何者だ？」

いつでも対応できるように《雪片弐型》を構えた一夏が謎の機体に呼び掛ける。やはりと言うべきか、ＩＳは応答に応じることなくただじっと立っているだけだった。

「答えろ、お前は何者だ！？」

沈黙に苛立った一夏が再度問いを投げ掛けた。無駄かと思ったその時、チャネルが強制的に開かれる。

「……ヴァル……キュリ……ア……」

女性とは到底思えない、擦れ、しわがれた抑揚のない声が耳を打つ。

――ヴァルキュリア？

それがあのＩＳの名称なのか？それとも搭乗者の名前か？いや、または別の、

キィン！

「ぐっ！」

さっきからなんなんだ、この頭痛は！？砂嵐のように頭の中で情報がうねり、それが体にまで伝播し、吐き気を誘発させる。ヴァルキュリアという言葉が僕という存在を掻き乱す。

「ヴァルキュリアってなんの事だ！？お前の名前か、そのＩＳの名

前なのか！？」

「……ヴァル……キュリ……ア……。……ヴァルキュリ……ア」

問いには答えず、呪咀のようにひたすらその言葉を連呼する灰色のＩＳ。埒が開かないことを悟った鈴が一夏の前に躍り出た。

「一夏！あたしが時間を稼ぐから、その間にカイトを連れて逃げなさいよ！」

なっ！？　ダメだよ、鈴！　アイツは一人で相手にできるような奴じゃない！

そう叫びたいのに、口を開けば吐いてしまいそうで口に出せない自分がもどかしい。

「逃げるって……女を置いてそんなことできるか！」

「馬鹿！　あんたはカイトが居たからあたしと渡り合えてるだけで、一夏だけじゃあたしよりも弱いんだからしょうがないでしょうが！」

代わりに一夏が反論するけれど、即座に反論され口をつぐんだ。痛いところを突いてきたね、鈴。でもそれは、

「それは違うよ、鈴」

「何が違うのよ、カイト？」

しっかりと呼吸をして吐き気をお腹の底の方へと押し込むと、鈴の目を見据えて断言する。

「逃げるのは、鈴と一夏だよ」

「「！？」」

二人に動揺が走る。反論される前に考えを言う。

「甲龍も白式もエネルギーの残量は少ないでしょ？　だったらここはまだまだエネルギーの残ってる僕がアレの相手をするのが定石じゃないかな？」

「そ、そりゃあ正論だけど、」

「それに――」

鈴の言葉を遮った僕は、デスマスクの奥に見える目を睨み付ける。

「それに、あのＩＳの狙いは僕だ。僕が下手に引っ込むよりも、ここで戦ったほうが被害は少なくて済む」

巨体から溢れだす殺気も、あの敵意に満ちた視線も、ひたすらに呟かれるヴァルキュリアとかいう言葉も、全て僕に向けられたものだ。だったら、なおのこと僕が気分が優れないなどとほざいて逃げ出すわけには行かない。

いくら正論でも納得できないのか、鈴が地団駄を踏むように空気の床を蹴りながら反論する。

「で、でもカイト、あんたは――」

「Ｋａａａａａａａａッ！！」

鈴のセリフに被さるように灰色のＩＳが咆哮する。いけない、注意が僕から鈴に移ったんだ！奴のスラスターが光を貯えている。

「鈴ッ！」

ドンッ！

レイヴァー・デイを走らせ、鈴を突き飛ばす。その直後、大型ブースターを噴かした巨体が僕をその手で捕まえると、速度を保ったままピットに連行され、そして――

ドガァァァァンッ！

●

「カイト！」

爆音を残し、所属不明のＩＳと共に消えていったカイトに一夏は声をかけるが、チャネルから聞こえるのは断続的な爆発音と何かが崩れる音だけでカイトの声は返ってこない。

「くそっ！」

チャネルを切り、悪態をつく。助けに行くしかない、そう考えた一夏が白式を動かそうとした瞬間、ハイパーセンサーが何かを捉え、

彼に警告する。

――警告！　未確認のＩＳを確認。操縦者不明。攻撃体勢に移行。トリガー確認。

「一夏、上！」

鈴の声が一夏の耳を貫く。一夏の思考を読み取った白式がその場から飛び退く。刹那、オレンジ色の火線が先ほどまで彼が居た位置を蜂の巣に変える。

「実弾兵器……。一体誰が？」

急停止した一夏の目の前で、破壊された遮断シールドをくぐり、新たに三機のＩＳが姿を見せた。

またしても『全身装甲（フル・スキン）』に覆われたＩＳ、しかしそれらをＩＳと呼ぶには余りにも不完全だった。

中央の素体にいたずらに外装を付けて、武器を持たせただけにも見える統一感を欠けらも感じさせないアンバランスなそれは、教科書の中頃で見た第一世代のＩＳに酷似していた。

「なんなんだ、こいつら……」

まるでガラクタ、それ以下と三機を捉えた一夏のチャネルが開き、慌てふためく真耶の声が響く。

『織斑くん！　凰さん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』

「いや、俺と鈴で食い止めます」

『織斑くん!?　だ、ダメですよ!　生徒さんにもしものことがあったら――』

真耶の言葉を一蹴した一夏はそれだけ告げるとチャネルを切り、《雪片弐型》を握り締める。その隣に青龍刀を構えた鈴が並ぶ。

「いいな、鈴」

「誰に言ってんのよ。早く片付けてカイトの援護に行くんでしょ？」

「当然だろ」

頭を抱え、苦しそうな表情のカイトが一夏の脳裏をよぎる。あんな姿を見せられてしまっては、助けに行かなければならないだろう。

（ほっとけるかよ、馬鹿野郎）

カイトへの愚痴を溢した一夏はさらに刀を握り締めた。こんなところで油を売っている暇なんてない。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあ、行くぞ！」

キンッと雪片の切っ先を青龍刀に当てた一夏は言うが早いか、白式のスラスターを点火させた。

●

「もしもし!?　織斑くん聞いてます!?　凰さんも!　聞いてますー!?」

パニック状態に陥った真耶は声を張り上げてアリーナで戦闘を行う一夏らに呼び掛ける。因みに、ＩＳのプライベートチャネルに呼び掛ける時には声に出す必要はないが、焦りに背を押された真耶はすっかりそれを失念していた。

「本人達がやると言っているのだからやらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生!　何をのんきなことを言ってるんですか!?」

落ち着き払った様子で千冬が真耶を宥めつかせる。だが、教師という職からくる責任感からか真耶の混乱はさらに強まる。

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

と、自ら進んでコーヒーを手に取るとそばにあったガラスケースから白い粉をコーヒーに投下する。しかしそれは……

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「……塩?」

真耶に指摘され、千冬はぺろりと一つまみし、舐めてみる。確かに塩だ。現にケースにも『ＳＯＬＴ』とでかでかと表記されている。

「なぜこんなところに塩が……」

「あっ！やっぱり織斑くん達が心配なんですね！？　だからそんなミスを――」

そこまで喋った真耶は地雷を踏んでしまった事を否応なしに悟ってしまった。空気がずっしりと重い。彼女らの話を聞いていた箒とセシリアは真耶の助けを乞うような視線からさっと目を逸らした。

「山田先生」

「はっ、はい！」

「山田先生にもコーヒーをご用意しますよ。特別甘～いものを」

ダバダバダバダバッ！（千冬が塩の容器をひっくり返した音）

「ちょ、織斑先生！？　その容器には塩が、あとそのコーヒーには元から塩が入って、」

「さあ、どうぞ。山田先生」

「……いただきます」

ずずいっと有無を言わさず押しつけられたコーヒーは未だに溶かし切れていない塩が山を描いていた。泣く泣く真耶はそれを受け取った。

「コーヒーは淹れたてが一番うまい。熱いうちに飲むといい」

今の千冬の背中に悪魔の羽が見えたのは真耶だけではないだろう。

「先生！　わたくしにＩＳの使用許可を！　すぐにでも出撃できますわ！」

千冬と真耶の寸劇に痺れを切らしたセシリアが告訴する。こんなところにいるくらいならば今すぐにでもカイトの元に駆け付けたい。

だが、無情にもその願いは届かなかった。千冬は首を横に振った。

「そうしたいところだが、――これを見ろ」

ブック型端末を操作し、アリーナの現状を表示する。

「遮断シールドがレベル４に設定……？　しかも、扉がすべてロックされて――あのＩＳの仕業ですの！？」

「そうらしいな。さらには火災時用の非常隔壁も展開されているのでな、これでは避難することも救援に向かうことも出来ない」

ついでだが、といったん言葉を切った千冬が端末を叩いて情報を切り替える。第二アリーナの断面図が映し出され、二つの光点が映った。

「これは緋神と所属不明機がいる地下のＩＳハンガーだが、ここはとりわけセーフティが高度に設定されている。織斑達ならいざ知らず、緋神の事となるとより時間が掛かる」

一夏に加え、カイトにも助けを出せないもどかしさに千冬の苛立ちは募る一方だ。

「で、でしたら！　緊急事態として政府に助勢を――」

「やっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐにでも部隊を突入させる」

一際大きく千冬の眉が跳ねたのを見たセシリアは口から出そうになる鬱憤を押し殺し、ベンチに座った。

「はぁぁ……。結局、待っていることしかできないですのね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって！？」

さすがにその言葉を聞いても落ち着いていられるほどセシリアは大人ではなかった。自分が、ブルー・ティアーズという専用機を持つ自分が人の助けになれないだとは、彼女のプライドが許せる次第ではなかった。

「お前のＩＳは一対多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる。さらに言えば、同じコンセプトのＩＳを駆る緋神と組む場合にはそれが顕著に現れるだろうな」

「そんなことはありませんわ！　このわたくしがカイトさんの邪魔になるなどと――」

「ならば訊くが」

ギン、と千冬の目が細まりセシリアを射ぬいた。底冷えする視線に当てられて、セシリアがたじろぐ。

「連携訓練はしたか？　その時のお前の役割は？　ビットをどういう風に使う？　敵味方の構成は？　敵はどのレベルを想定してある？　連続稼働時間は――」

「もう結構ですわ！」

「あ、オルコットさん！？」

千冬の講義を遮ったセシリアは真耶の制止を振り切ってピットを走り去ってしまう。

追い掛けようとする真耶の肩を千冬が掴み、席に押し付けた。

「オルコットは放っておけ。我々には他にすべき事がある」

「しかしですね、」

「今の奴には何もできんさ」

冷酷に言い放った千冬だったが、その瞳は不安を隠しているくすんだ輝きを見せていた。

●

ドガァァァンッ！

分厚い手に押さえ込まれたまま、幾重もの隔壁を突き破り、僕と謎のＩＳはＩＳハンガーへと傾れ込み、床に叩きつけられた。

「ぎぃっ！」

余りの衝撃に呼吸が疎かになり、意識が僕の手を離れそうになる。首を絞める手の圧力が強くなるにつれ、それに拍車が掛かる。

「ヴァルキュリア……！ヴァルキュリアァ……！」

「いい加減に……しろよっ！」

ドガガガガガガッ！

二門連結させた《フロイド》を展開（オープン）し、敵の腹部に銃口を押し付けると、そのまま引き金を引く。合計八門の銃口から緑色のエネルギー弾が弾け、馬乗りになっていた灰色の巨体を引き剥がす。

「げほっげほっ……」

むせ返るほど酸素が一気に肺にしみ込む。かろうじて意識は保てたぞ。すぐさまレイヴァー・デイのダメージチェックを行う。目立った損傷はないが、シールドエネルギーが半分切ってしまっている。

「……」

さっきの加速が嘘のように、のろのろとした動きで立ち上がる敵機。

人が乗っているのかも疑わしい動き方だ。

「お前、一体なんなんだ？　どうして僕のことを狙うんだ？」

無駄だと思うが、奴に質問を投げ掛ける。一夏がやって無駄だったんだから、有益な情報を取り出せるとは思えないが。

すると、またしてもチャネルが開き、あの擦れた声が響いてくる。

「……聖…餐…杯……」

「せいざんはい？」

また意味不明な単語を呟く。ヴァルキュリアに聖餐杯。一体なんのことなんだ？でも、その二つが僕に関わっていることははっきりしている。

「ヴァルキュリアってなんだ？　聖餐杯ってなんなんだ！？　答えろよ、木偶野郎ッ！」

自分でも知らぬ間に声が荒くなる。アイツは僕のことを、本当の僕のことを知っている。真実を知りたいという欲望が心の奥底から沸き上がる。

「聖餐杯……」

自ら呟いたその言葉に反応するように、奴の巨体が震えだし、そしてそれは臨界点を迎えた。

「聖餐杯ィィィィィィィィィッ！！！！」

狂気に満ちた咆哮を上げる。刹那、ハンガーの防壁が作動し、通路に繋がるドアや天井の穴を塞ぎ、僕と敵ＩＳを隔離した。まるであのＩＳを閉じ込めさせるみたいに。

ともすれ、これで僕に逃げ場は無くなったけど、それは向こうも同じ。覚悟を決めろよ、緋神カイト。

ブースター光を背負った灰色のＩＳが槍モドキを構えて疾走してきた。早いが、捉えきれない速度じゃない！

「お前を倒して、全部聞き出してやる！」

僕の思考を捉えたレイヴァー・デイの右手が持ち上がり、ダブルガトリングを射ち散らす。

牽制として放ったビームガトリングの球をものともせず、敵は肥大化した矛先を振り切った。すると槍に走っている赤い燐光が瞬き、瞬間切っ先からエネルギーの刃として打ち出してきた。高密度に圧縮された赤い波動はガトリングの弾を切り裂き、僕に迫る。

「チッ！」

短く舌打ちをし、弾幕を張ったまま後方へと下がる。直後、遮断シールドと同じ強度を誇る床が木っ端微塵に吹き飛んだ。見かけ通りの破壊力だ。

「聖餐杯ッ！聖餐杯ィィィィィィィィッ！Ｒｕａａａａａａａ！」

槍先を発振させ、立て続けに衝撃波を放ってくる。その前では僕の弾幕なんて存在しないにも等しい。

これ以上は無駄弾になる。多角的な動きで衝撃波を回避しながら、《フロイド》を収納（クローズ）し、《ガルベストーン》を召喚する。マグナム弾は装填済みのものを合わせて後七発。天井を蹴ると同時に推進翼を着火して敵機に接近する。

「当ててみせるさ！」

キュイィン……バシュゥン！

赤色の光芒がマズルフラッシュに重なり、槍から放たれた斬波を押し切って敵ＩＳに食らい付く。

《ガルベストーン》のエネルギー塊が肩部装甲を消し飛ばし、その余波にひっぱられるようにぐらりと巨体がよろけた。

バシュゥン！

二射目を続け様に撃ち放つ。装填済みのパックが無くなり、マグナム弾のグリップが排出される。閃光は相手の腹部を深く抉った。

「ａａａａａａａッ！」

二発のマグナムの威力に敵ＩＳが自らの体を支え切れなくなり、後ろにあったシャッターを破砕し、倒れこんだ。

最後の五基のマグナム弾を装填しつつ、シャッターの煙に沈んだ敵ＩＳの様子を伺う。

《ガルベストーン》の直撃を受けたんだ。これで沈んで――

――初弾エネルギー装填。トリガー確認。

「！！」

警告音が耳をつんざき、反射的に身を翻す。ギュオンッ！と唸りをあげた黒色の光輪がフェイスガードに備えた角をかすめ、天井を突き破って空へと駆けていった。

ビームマグナムの直撃を受けてもシールドエネルギーが無くなってない！？　まだ動けるのか！？

「Ｋａａａａａａａッ！」

薄墨の煙をそれよりも黒いビームで塗り潰した敵機が姿を見せた。

手にしている槍の形状が変わっていた。矛先が上下に開き、その中に大口径の砲門が見える砲狙撃戦形態。あの一撃がアリーナの遮断シールドを破壊したのか。

「Ｇａａａａａａａａッ！」

分析する僕に向け、再度光が迫る。避けただけでもシールドエネルギーが削られ、腹部を保護していた装甲が焼け爛れ、直撃した隔壁が溶けてなくなる。あんなものが当たったらと考えるだけでゾッとする。

防壁すらもぐずぐずに溶かしてしまうあの火力は同じ性質の《ガル

ベストーン》よりも遥かに上。あんなものとまともに撃ち合ったところで出力負けするだけだ。

バチン！

槍が元の形に戻り、背に担いだＩＳがフロアを蹴り上げ、冷たく光る赤い目の残光を残して飛行する。レイヴァー・デイには接近武器が搭載されていない、近づかれでもしたら……！

「やらせない！」

瞬間的に《ガルベストーン》を収納（クローズ）し、両手に二門の《ウィルマ》を、両腕ラックに四門の《フロイド》を全展開（フルオープン）し、一斉にトリガーを引く。

《ウィルマ》から出た弾頭が砕け、ベアリング弾を撒き散らしながら、その隙間を縫うように十六門もの《フロイド》から散らされるライトグリーンの弾殻が槍兵に飛び掛かっていく。

実と虚、二つの性質の弾雨をその身に受けてシールドエネルギーが削られていくが、それを露と知らずしてか、装甲を砕かれながらも巨体が猛進してくる。痛みを感じないのか！？

「Ｚｉｇａａａａａａａａａａッ！！」

ザンッ！

雄叫びを上げ、振り回される槍の矛先に触れ、ガトリング弾をばらまいていた《フロイド》の銃身が切り飛ばされ、宙を舞う。衝撃に体が揺さ振られ、ぐらりと傾く。ガトリングが切り落とされても、

まだ武器は残ってる！

傾いた姿勢のまま《ウィルマ》を構えた瞬間、再び振動が僕を包んだ。二つの砲身が目の前を通り過ぎ、落下していく様がどこかこの世のものとは思えなかった。

「ａａａａａａａａッ！」

転身し、相対速度を保ったまま巨体を打ち当てられ、絡め取られた僕は呆気なくフロアに沈められる。

「聖…餐…杯…！」

組み合ったままボディを密着させ、骸骨のような頭部から赤い瞳で僕を覗き込む。腐り果てた死肉のような堪え難い臭いが嗅覚を歪める。

「ぼ、僕は……聖餐杯なんて知らない……！」

吐き気を催す体臭に顔を歪めながら言い返す。たとえ知っていても教えたりするもんか！

「ａａａａａａａａａａッ！」

僕の言葉に悲しみと怒りが入り交じった声を張り上げ、僕の胸元を踏み付ける。叫びによってスイッチが切り替わったのか、槍が真ん中から開いてあの銃口が露見し、僕に突き付けられる。

こんな至近距離で撃たれたらいくらレイヴァー・デイと言えども耐えきれない。なんとかして抜け出さなくちゃ……！

脚部装甲に手を掛けた瞬間、ハンガーの入り口から大声が響いた。

「カイトさん！」

聞き覚えのある声。試合が終わったら聞きたかった声。でも、今一番聞きたくない声。警笛が鳴り響く頭を傾けると、

「オルコットさん！？　何でここに！？」

融解した遮断壁をくぐった制服を着たその姿はオルコットさんそのものだった。髪の毛が額に張りつき、肩を上下させているから急いでここに来たんだろうけど、

「来ちゃダメだよ！　早く逃げて！」

「できませんわ！　わたくしはもう逃げないと、カイトさんと向き合うと決めたんです！」

「オルコットさん！」

怒鳴り散らすように大声を張り上げるが、いやいやと頭を振ったオルコットさんは逃げようとしない。ダメだ、君には逃げてもらわないといけないんだ！

「ａａａａａａａａッ！」

まずい！　さっきの会話で敵機の注意が僕からオルコットさんに移ってしまった。叫びを上げた敵ＩＳは僕に突き付けていた銃口をオルコットさんに突き出した。

逃げてと言って間に合う距離じゃない。早くこの足を退かして……！

そう思えば思うほど、敵の脚部が腹部に深く押し付けられ、力が入らなくなってくる。

レイヴァー・デイ！　このまま見ているだけで君はいいのか！？

僕は嫌だ！　手を伸ばせば届く距離に助けたい人がいるんだ！　だから、だから……！

「動けよ、レイヴァー・デイ！！！！」

『……約束、してください』

「……え？」

聞き慣れない声が耳朶を打つ。ふと気が付けば、周囲は白一色の空間に僕は立っていた。あのＩＳもオルコットさんの姿もどこにも見えない。

代わりにいたのは、黒いドレスを身に纏った金色の目の女の子。どうしてか、その顔が悲しみにくれていた。

『力をあげる代わりに、私に約束してください。もう誰も傷つけないと』

ゆっくりと手を差し出す。白い空間に溶けてしまいそうな、色白の手。

力が得られるならと僕はその手に自分の手を重ねようとして、止めた。

「ごめん、約束できないよ」

『どうして、ですか？』

首を横に振った僕に問いかける女の子の目を見て答える。

「ほら、この世界って結構わがままでしょ？　誰かを傷つけないと生きていけないし、傷つけられることだってたくさんあると思うんだ。だから、誰かを傷つけないなんて無理だよ」

人間は不器用で、誰かと衝突することで生きていく。だからこそ、傷つくことを避けてしまってはそれは人間を止めることと同じだ。

「君が僕にくれるのが、使い方を間違えれば人を余計に傷つけちゃう力なら僕はいらない」

こぶしを握り締める。ただでさえ僕は男なのにＩＳを使える特異ケースなんだ、不必要に力があったら暮すのに余計に困るだろうし。

『じゃあ、どんな力が欲しいんですか？』

「どんな力か……」

いざ考えてみると曖昧だな……。腕を組んで考える僕を見ていた女

の子がくすっと笑みをこぼした。

『貴男はそれでいいと思います。力に固執しない、ありのままの貴男が私は好きですから』

「へ……！？」

かあっと顔が熱くなる。生まれて初めて（？）誰かに好きと言われて、穏やかでいられない。赤くなる場面じゃないことはわかっているけど、顔の火照りは治まらない。

パニくる僕をおかしげに笑ったその子の姿が白い空間に消えていく。僕の意識も次第に白んでいき、彼女の姿を認識できなくなる。

『カイトくんは、私が守ります。だからカイトくんは、』

断絶される意識の中、最後の言葉は僕の脳裏に焼き付いた。

――私を守ってください

●

二度目だ、とセシリアの脳裏に言葉がよぎったのを合図に、それは始まった。

一回り巨大なＩＳを蹴り飛ばし、立ち上がったレイヴァー・デイの装甲板の継ぎ目から金色の燐光が漏れだし、レイヴァー・デイの肩

を構築するパーツが黄金の光をなぞるように割れ、スライドした装甲の下から金色に輝くフレームが露出する。

足、腕でも同様の現象が起こり、背面の翼のようなスラスターも拡張され、胸元の装甲も展開すると、レイヴァー・デイのシルエットが一回り大きくなったように見える。金色の閃光が鋭さを増し、黒い装甲を鮮やかに際立たせる。

最も変化があったのはフェイスガードに備えた複雑な形状の角だ。枝分かれした複数の突起を持つ角が左右に割れ、たてがみから稲妻へと変貌を遂げたマルチブレード・センサーが額を飾った。

黄金の光を放つ黒い獅子がシャッターに激突したＩＳを睥睨し、背面の大型推進器ユニットを爆発させる。

速い。人間の五感ではその残光しか察知できない速度で敵ＩＳの両手を押さえ込んだのだ。ギリギリと灰色のアクチュエーターが悲鳴を上げ、それが本体にも伝わり、灰色の機体が苦痛で体を捩らせる。

「ここから……ここから……！」

レイヴァー・デイの回線が全てオープンになっているのか、操縦者であるカイトの声が全領域に伝播する。

彼の声には底知れない膂力、迸る迷いのない意志が込められており、それは大きなうねりとなって灰色のＩＳを飲み込み、圧倒した。

「ここから、出ていけぇーっ！」

感情を爆発させたカイトの声が響き渡り、黒い機体のメイン・スラ

スターが火を吹き、灰色の敵機ごと隔壁を破壊しながらアリーナの外へと飛び立っていった。

●

「ぜらぁぁぁぁっ！」

鈴の甲龍の放った衝撃砲で逃げ道をふさがれた機体に接近した一夏がそのボディに雪片を突き立てた。絶対防御が発動した形跡もなく、袈裟型に切り裂かれたＩＳモドキが機能停止する。

その背後で一夏に向けて腕部と一体化したアサルトライフルを持ち上げたＩＳの体が斜めに傾く。その背後では青龍刀を二つ繋げた鈴が立っていた。

「これで全部か？」

「どうやらそうみたいね」

鈴と一夏はステージに横たわる三機の敵に視線を送った。所属不明ＩＳに続けて現れたこれらの機体は一夏らが知っているものとは性質が大きくかけ離れていた。

『全身装甲（フル・スキン）』の三機はいずれも武器と腕が融合した形状を持ち、更にはＩＳならば当然とも言える『絶対防御』を始めとしたバリアが実装されていなかった。

それも当たり前か。何せ、この三機のＩＳには――。

「まさか、無人機なんて……」

鈴が真っ二つにされたＩＳに吐き捨てる。

乱入してきた三体は全て人が乗っていない、無人機だったのだ。鈴は終始有り得ないと言いながらも、こうして戦い終えて見てようやく実感がわいてくる。

「ＩＳは人が乗らないと動かないのに何で……？」

「考えるのは後だ。カイトを助けに、」

「ここから……ここから……！」

行くぞ、と続けようとした一夏の声がかき消される。オープンチャネルが勝手に開き、カイトの声が聞こえてきたのだ。話し掛けようと一夏がチャネルを接続した瞬間、

「ここから、出ていけぇーっ！」

いつもの彼とは思えない感情的な声が響き渡る。遅れて爆発音が続いてごうと唸る風の音を響かせた後、背後のピットが崩れさり、そこから二つの影が飛び出していった。

●

隔壁を貫き、アリーナの外へと敵機を押し出した僕はバーニアを焚いて灰色のＩＳを投げ飛ばした。

虚空で一回転した敵機が槍を砲狙撃形態から近接形態に切り替える。

『単一仕様の展開を確認。『レイヴァー・デイ』のＯＳをＳ（シルエット）からＩ（イオタ）へ移行完了。全兵装のセーフティを解除』

ディスプレイにそう表示され、続いて武器の一覧が表示される。三種類の遠距離武器の後に、新しい武器が表示されている。

高周波ブレード《Ｄｅａｎ？（ディーン・サード）》。僕はそれを展開（オープン）する。

両手に粒子が収束し、形作ったのはレイヴァー・デイに誂えたような漆黒の実剣。金色のラインが枝のように走るそれを構える。

新たに発現した黒い刃を握ると、実感する。

今の僕らなら、間違いはしない。

今の僕らなら、やれると。

「Ｋａａａａａａａａッ！」

怒気に溢れる叫びを上げた敵機が突進してくる。同じように加速し、正面から刃をぶつける。

キィン、と金属同士が共鳴したような甲高い音を響かせる。最初にやられた時のように力負けしていない！

《ディーン？》を切り返し、その素体に蹴を打ち込み、体勢を崩す。勢いに負け、敵機が空中で溺れる。

「レイヴァー・デイ！」

呼び声に答えるようにスラスターが最大稼働し、突き飛ばした敵機へと肉薄する。

「ＺｉＧａａａａａａッ！」

させないとばかりに、槍を砲狙撃形態に切り替え、《ガルベストーン》よりも数倍太く、数倍速い灼熱の光芒が空を切り裂く。

（見える……！）

ギュンッーー！

一陣の黒い風と化したレイヴァー・デイが『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を作動させ、炎熱線の斜め下へと滑り込む。太い熱線が仇となり、僕の姿を隠した瞬間、さらに加速を掛けた僕は槍を構えて硬直している敵機の背後に回り込む。

「もう遅いよ！」

ギンッ！

唸りを上げて大気ごと横に凪ぎ払う。黒と金の斬撃がシールドエネルギーを喰らい、ガシャンッ！と音を立てて身を守っていた防御膜

を破壊した。

「Ｇａａａａａッ！」

「なっ！？」

シールドを破壊されてもなお戦意を喪失しない敵ＩＳが僕を掴んで地面に落下する。地面に叩きつけてでも僕を戦闘不能にしたいんだろう。

「ヴァルキュリア……！　ヴァルキュリアァ……！」

「違う！　僕はヴァルキュリアなんかじゃない！」

縺れ合いながらも敵機に馬乗りになると刃を振り上げる。刀身が一際輝きを強め、一夏の《雪片弐型》を彷彿とさせる形状へと変化し、中央部から光刃を発振させる。

『Ｃｏｒｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ』

「僕は、緋神カイトだぁぁぁぁぁッ！」

鳴り響いた機械音声を塗り潰し、光刃を振り下ろす。紙一重で槍に阻まれるが、構わず刃を突き付ける。スパーク光がフェイスガードを突き破って視界を白く染める。その中で槍にひびが入るのを見た僕はあらんかぎりの力で《ディーン？》を振り上げる。

「あああああああッ！」

バキィッ！

堅い感触が《ディーン？》から伝わり、次の瞬間、肥大化した矛先が砕け散る。だが、そこでレイヴァー・デイのエネルギーが底を突き、形成されていた光の切っ先が粒子になって宙に溶けてしまう。

だけど僕の役目はコレで十分だ。シールドエネルギーを削り、防御できるような武装を破壊した。

「狙いは付いた？」

『完璧ですわ！』

「なら――！」

レイヴァー・デイが僕の声に反応して奴の体を蹴り、宙へと舞い戻る。刹那、僕の視界に入り込んだ彼女に声を飛ばす。

「オルコットさん、決めて！」

『了解ですわ！』

――キュイン！

ブルー・ティアーズを装備したオルコットさんが《スターライトｍｋ？》を振りかざし、その銃口から青い閃光が蒼穹を切り裂き、敵のエネルギーを奪い尽くした。

力を失ったＩＳは僕に力なく手を伸ばしたのち、アリーナの地表に激突する。

切り裂かれ、打ち抜かれたＩＳはぴくりとも動かない。勝利を確信し、ディーンを収納（クローズ）した僕にオルコットさんが近づいてきた。

「ギリギリのタイミングでしたわ。わたくしがいなかったらどうなっていたことか」

「大丈夫だよ。僕はオルコットさんを信じてたから」

「そ、そうですの……。……。とっ、当然ですわね！　何せわたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生なのですから！」

凄く嬉しそうだね、オルコットさん。やっぱり、勝利すると気分がいいからね。

ブルー・ティアーズを展開して急上昇してくるオルコットさんを見て、この奇襲が絶対に成功することを悟った。あのＩＳは僕にしか興味を向けなかった。それを逆手に取らせてもらったよ。

「そ、それよりも！　いいんですの、あのＩＳに全力で射撃してしまって？」

「勿論。だってあのＩＳには、」

『緋神、オルコット！　気を抜くな！　まだ終わっていないぞ！』

僕の言葉を遮り、千冬さんの声がチャネルから響く。嫌な予感に下を向くと、エネルギーが無くなったはずのあのＩＳがその巨体を持ち上げていた。

『馬鹿な！　再起動だと！？　有り得るのか、こんなＩＳが！？』

千冬さんが動転し、荒げた声を上げる。瞬間、全身のブースターに点火した灰色の機体が猛スピードで上昇し、雲のなかに消えていった。生身の人間にあの速度が耐えられるとは思えない。だとするなら、やはりあのＩＳには――。

「カイト、セシリア！」

「あ、一夏」

アリーナであのＩＳのお供と交戦していた一夏と鈴が僕らに並ぶ。その様子だと三機とも倒せたみたいだね。

「カイト……。それ、あんたのＩＳ？」

訝しげに眉をひそめた鈴に指摘されて思い出す。そう言えば、今のレイヴァー・デイはリミッターを外した姿になってるんだっけ。

頷き、説明する。

「そうだよ、鈴。これが僕のＩＳ、レイヴァー・デイなんだ」

第十話　Bパート　～黒獅子、咆哮す～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

これは酷い……。皆まで言わなくても分かります。文才の無い自分が悪いんです。どうも戦闘パートになると龍頭蛇尾になってしまいます。文句や意見、アドバイスがございましたら、コメントしていただけると幸いです。

次回は原作一巻のメに当たる話になっております。ご期待くださいませ。

では、またの機会に……。

第十一話　～一つの始まりは一つの終わり～（前書き）

第十一話です。

今回は原作一巻の〆となります。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第十一話　～一つの始まりは一つの終わり～

これは何の関係もないことだから、あまり苛めてもしょうがない。

大人のくせに、勝負に負けてべそをかいている彼女に目を向けた。

そう、何の関係もない。だから、この事は俺の胸のうちにしまっておこう。

彼女がどんな危うい場所に立っているのか、俺たちがこれから何をしようとしているのか。今だけは知らないでいてほしい。

刻一刻と時間は無くなっている。だけど、彼女にはありのままでいてほしいのだ。

わがままな俺の歪んだ泡沫の夢が、現実（リアル）だったらいいのに。

「ねぇ、獅子（レオ）。辛い事でもあったの？」

「ん？　いや、悪い。特別何もなかったよ。いつもどおりさ。俺、そんな顔をしてたのか？」

「ええ、そりゃあもう。『××××』の名が泣きそうなくらい酷い顔をね」

「今泣いてる奴には言われたかねぇよ」

一体全体、誰のせいで俺が頭を悩ませているのか知っているのか……。

コイツと話してると自分が思い悩んでいるのが馬鹿らしくなってくるよ。

「昔の獅子より、今の君の方が素敵だよ。少なくとも私は、今の君が大好きだよ」

「……生意気だぞ、乙女（ヴァルゴ）」

だから、そう言われて嬉しく思うのも気のせいだ。頬が熱くなるのも何かの間違いだ。まさか俺が、な。有り得ないね、絶対に。

「私の取り柄、生意気なところだもん。昔からずぅっと私、君にだけは偉そうでしょ？」

「……ああ。まったく、偉そうだよ」

胸を張った彼女の顔は涙の跡があったけど、引き付けられる笑顔。

きっと俺の顔も、その時くらいは笑顔だっただろうな。

メフィストに願うファウストでは無いから、聞き入れてくれとは言わない。せめて、せめて俺が足掻いた自己満足の証として覚えてくれ。

Ｚｅｉｔ　ｈｏｒｔ　ａｕｆ，Ｄｕ　ｂｉｓｔ　ｇａｎｚ　ｓｃｈｏｎ.　――時よ止まれ、おまえはいかにも美しい

●

「……二度目だ」

どうも僕は保健室と相性がいいらしい。またしてもベットの上で目が覚めた。短い期間に二度も保健室に担ぎ込まれるなんて悪霊か何かがついてるんじゃない？

「気が付いたようだな」

お、言ってる傍から現れたぞ。

「美人の保健室の幽霊だ」

「悪いな、期待していた美人の保健室の幽霊ではなくて」

ガスッ！

眠気覚ましなんて目じゃない衝撃に頭が正常な働きを取り戻す。

それにしても、ずいぶんと懐かしい夢を見ていた気がする。もう思い出せないような、大切なこと。でも、それがなんなのかはっきりしない。頭が霞みかかっているように、虚ろなんだ。

千冬さん、自分で言うのもアレですが、怪我人にくらいは優しくしてくださいよ。グーで殴ることはないでしょうが。出かけてた記憶まで飛んでいっちゃいましたよ。

「それは悪いことをしたな。お前は甘やかすと確実にミスをするタ

イプだからな、いつだろうと優しくはせん」

「人の心を読まないでください」

「顔に出ているんだ、馬鹿。まったく一夏といい、お前といいどうして分かりやすいんだ」

ふぅ、と額を押さえて溜め息をつく千冬さん。一夏と同じだって？　それは心外だ。僕は一夏ほど顔には出てない……はず。

「あの、織斑先生」

「無理に先生と呼ばなくていい」

「じゃあ……、千冬さん。どうして僕はここにいるんですか？」

思い返すかぎり、鈴にレイヴァー・デイを紹介したときまでしか覚えていなく、保健室に駆け込んだ記憶はない。

「あの後すぐにお前は気を失い、保健室に担ぎ込まれただけの話だ。どうせまた無理をしたんだろう？」

おっしゃるとおりで。隔壁を破り破られ、敵の強攻撃に当たり、挙げ句レイヴァー・デイをフル稼働させたんです。そりゃあ、気を失っても文句は言えない。

「幸い体に致命傷はないが、全身に軽い打撲がある。数日は地獄だ。耐えろよ」

「はぁ……」

どうりでさっきから動こうとするたびに断続的な痛みが走るわけだ。この痛みを感じるのも二回目か。

「しかし、よくも死ななかったものだな。あんな高速移動を行えば、内臓の一つや二つ潰れていてもおかしくないのだが」

「そんな化け物を見るような目で僕を見ないでください」

きっと人一倍タフなんだろう。これも毎朝牛乳を飲んでいるおかげだ。ビバ、牛乳。

「まあ、何にせよ無事でよかった。知り合いに死なれては寝覚めが悪い」

「僕のことを心配してくれたんですか？」

「当たり前だ。お前はもう私の弟だからな」

……はぃ？

突然飛び出した言葉に僕は自分の耳を疑った。僕が千冬さんの『弟』？

「お前の身元引受人には私がなった。よってお前は、今日から織斑家の一員、引いては私の弟となったんだ」

「……」

ああ、どうしてこの人はやってくれちゃうかな。不意討ちにも程が

ある。僕はそこまでの期待を求めていないのに。千冬さんの優しさが身に染み、胸の奥が熱くなる。馬鹿、泣くなよ、緋神カイト。男だろう？

「では私は自室に戻る」

「あのっ！」

「うん？　なんだ？」

立ち去ろうとする千冬さんを呼び止める。カイト、お前はこの人に助けてもらってばかりだろ？　だったら、今までのお礼もこめて言うべき言葉があるんじゃないか？

「あの……、その……、心配かけてすみませんでした。これからは気を付けます」

「いや、気にする一一」

「千冬、姉さん……」

小さく繋げた僕の言葉を拾った千冬姉さんの顔がきょとんとなる。きっと僕の顔は保健室に差し込む夕日の光よりも赤く灯っているだろう。

僕は、この人に助けてもらってばかりだ。だからいつか、僕はその恩を返さなくちゃいけない。それが僕の記憶を取り戻すことなのかは分からないけど、今ぐらいは僕は千冬姉さんの優しさを受け入れよう。それが、恩返しの第一歩だと考えるから。

耐え難い沈黙を千冬姉さんがふっと笑って崩した。

「心配などしていないさ。カイト、お前は私の弟だからな」

ではな、とカーテンをくぐり出ていく千冬姉さんの背中を静かに眺めた。返事くらいしようとしたさ。でも、ダメだ。

だって、口を開いたら嗚咽を堪えきれないから――。

布団にくるまり、目をきゅっと瞑る。こんなところを誰かに見せたくないし、見られなくない。ああ、畜生。涙が止まらないよ……。

●

「……」

ん？　人の気配かな？　それも一人じゃなくて二人。　恐る恐る目をあける。

「あのさ、鈴」

「なによ」

（っとぉ！？）

開きかけた目蓋を気合いで閉じる。傍にいたのは一夏と鈴だった。お見舞いに来てくれたんだから起きるべきなんだろうが、アカンよ、今はアカン。めちゃくちゃいい雰囲気じゃないか。

さっきチラッと見たら鈴なんか借りてきた猫みたいに大人しかったじゃん。

ということで、僕はこのまま寝たふりを決め込ませていただきます。

「その、なんだ……。悪かったよ、約束のこととか色々と。すまん」

いきさつがどうだったであれ、一夏はやっぱり鈴を傷つけたことを気にしていたようだ。僕がでしゃばるまでもなく、一夏は鈴に謝っていただろう。織斑家の人たちは根は優しい人だからね。

「ま、まあ、あたしもムキになってたし……。いいわよ、もう」

動揺を押し隠した声で鈴が答えた。まさか一夏から謝ってくるとは思っても見なかったんだろう。

「あ、約束のこと思い出した。正確には『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』だっけ？　で、どうよ？　上達したか？」

「え、あ、う……」

ところで、『ｉｃｈｉｋａ』と言う英単語を知っているかな？　名詞で馬鹿な人物とか、それに匹敵する阿呆を現すんだ。ちなみに、『ｉｃｈｉｋａｆｕｌ』で形容詞。

「なあ、ふと思ったんだが、その約束ってもしかして違う意味なのか？　俺はてっきりタダメシを食わせてくれるんだとばかり思っていたんだが――」

「ち、違わない！　違わないわよ!?　だ、誰かに食べてもらったら料理って上達するじゃない!?　だから、そう、そうだから！」

鈴、今君は千載一遇のチャンスをみすみすどぶに捨てたんだよ？　相手はキングオブ唐変木、織斑一夏だよ？　ここで引いたら、一夏は絶対に勘違いしたままに――。

「確かにそうだな。いや、もしかしたら『毎日味噌汁を～』とかの話かと思ってさ。違うんならいいけど。深読みしすぎだな、俺」

「そ、そうね！　深読みしすぎじゃない!?　あは、あははは！」

からからと笑う一夏。それに釣られて愛想笑いの鈴。彼女の春が光の彼方まで遠退いた瞬間だった。

Ｉｃｈｉｋａ　ｉｓ　ｓｏ　ｉｃｈｉｋａｆｕｌ．（一夏はこの上なく愚かな人物だ）

「鈴の料理も食べてみたいけど、鈴の親父さんの料理うまいもんな。また食べたいぜ」

「あ……。その、お店は……しないんだ。あたしの両親、離婚しちゃったから……」

この男をそろそろ排除しようかと思ったその時、鈴が沈んだ声をささやいた。冗談を言っているようには聞こえない。

「あたしが国に帰ることになったのもそのせい。父さんとは一年会ってないの。たぶん、元気だとは思うけど」

家族って、難しいよね。と言葉少なく続けた鈴。その言葉は僕の胸の深いところに突き刺さった。

僕には家族がいるのか分からないけれど、離れ離れになるそれが如何なる苦しみを与えるのかを察することはできる。いや、すべてを察することはできないだろう。

本当の苦しみを味わっているのは、鈴本人なのだから。話に聞くしかできない僕らはそれを追体験しているだけなのだ。

「なあ、鈴」

「ん？　なに？」

「今度どっかに遊びに行くか」

「え！？」

（キターーーーーーー！）

いいぞ、一夏！　いくら君がどうしようもない駄馬だからってこんな露骨に傷心している女の子を見捨てていいわけが無い！　さすがは僕らの一夏だ！

「五反田も呼ぼうぜ。久しぶりに三人で集まるか」

「「……」」

頭のなかで、かぁかぁ、とカラスが鳴いた。きっと鈴の頭のなかで

も同様の事態が起きていることだろう。

Ｉｃｈｉｋａ　ｉｓ　ｕｎｐａｒａｌｌｅｌｅｄ　ｉｎ　ｈｉｓｔｏｒｙ　ａｎｄ　ｉｃｈｉｋａｆｕｌ．（一夏は史上類を見ないほどの愚か者だ）

やはりこの男、生かしておくべきではない。いつかその言動によって幾名もの女の子が泣かされる前に。

ズドドドドッ！

ん？　遠くの方から猛ダッシュしてくるこの足音は、まさか。

「一夏！」

この声はやっぱり篠ノ之さんだ。声の調子からして、僕のお見舞いに来たのでは無さそうだ。

「貴様、人が部活で席を外している間に何を……！」

怒り心頭。ここまで怒りを顕にするなんて、相当来てたんだろうな。

「あたしは暇を持て余した幼なじみの一夏と一緒にカイトのお見舞いに来てただけよ。別に変なことなんてしてないわよ」

「知ったことか！」

ですよね。

「二番煎じ風情が私に楯突こうと言うなら相手をしてやる」

「いいわよ、上等じゃない。どっちが本当の幼なじみか決着付けようじゃない！」

「おまえら静かにしろよ。カイトが寝てるんだから、」

「「一夏は黙ってて（いろ）！」」

「……はい」

弱ぇ。一夏、それでいいのかい？　さすがに情けないよ。

どったんばったん、ぎゃいぎゃいと騒ぐ二人をよそに僕はもう一眠りに……眠りに……。

「私はお前よりも幼い頃から一夏を見ていたんだ！　年季が違うのだ、酢豚娘！」

「はん！　思春期を一緒に迎えられなかった時代錯誤の侍女には言われたくはないわね！」

「なんだと！？」

「なによ！？」

ブチッ！

あ、僕のなかの何かが切れた。切れてはいけない何かが。

「おまえら……」

「お、カイト。起きたのか、もう体は平気、」

ギラッ！

「……」

ヘタレ。ガンくれただけで縮こまるなんて女ですか、あなたは。まあいいさ。ずんずんと竹刀と青龍刀を振り回す二人に近付き、怒鳴る

「痴話喧嘩するなら余所でやれッ！」

「「……」」

「返事は！？」

「「は、はひ！」」

まったく、身内のもめ事を持ち込まないでよね！　これだから一夏はダメなんだ！

「なんか俺が罵倒された気がするんだが」

「何か言った！？」

「……何でもありません」

●

学園の地か五十メートルには、教師のなかでも選ばれた人間のみしか足を踏み入れることを許されない機密ラボラトリーがある。

一夏と鈴が撃破したガラクタＩＳは三機ともここに運び込まれ、解析を行われていた。

そこへカイトの見舞いを終えた千冬が降り立った。それを迎え入れたのはいつもよりも数段きびきびとした動きの真耶だった。

「ご苦労さまです、緋神くんの容体はどうでしたか？」

「言うほど酷くはない」

「それはよかったです。あの機体の解析結果が出ています」

「聞かせてもらおうか」

うなずき、ディスプレイに解析データを表示する。

「構造は第一世代のＩＳとほぼ変わりませんが、コアを使用されておらず、代わりに大容量コンデンサと高性能ＡＩで制御されていました」

「プロトタイプのＩＳと言ったところか。やはり無人機か？」

「ですね。コア・ネットワークの情報を受信して起動していたと思われますが、これらの機体からはそれ以上の事はなにも」

ＩＳに似た機動兵器。人が操る必要もなく、コアからの情報を使い

自律行動を行う。こんな技術を完成させるのは篠ノ之束しか有り得ないが、果たして彼女がこれをやったとは千冬には考えられなかった。

だとすれば、こんなことをするのは――。

「心当たり、ございますか？」

「いや、確証が無い。だから、今は私の胸のうちに秘めておこう」

千冬の鋭い視線がバラバラに解体された白い機体に注がれる。つるっとしたのっぺらぼうの頭部がじっと彼女を見つめていた。

●

某国　某所　某時刻

金色の髪をたなびかせた女性が足早に一室に踏み込んだ。途端に塗装ペンキと、電気コードの加熱した匂いが入り交じる空気が彼女の嗅覚を襲い、閉鎖空間を否応なく実感させる。

「どうだ、調子は？」

「これはこれは赤騎士（ルベド）殿。このような場所までご足労頂き誠に有難うございます」

（下衆が）

猫背に載せた禿頭を振り向け、にたりと笑った白衣の男に赤騎士と呼ばれた女性の顔に露骨な不快の色が浮かんだ。

視界に入ろうとする男を無視し、紅い瞳を正面に向ける。そこには、ＩＳ学園を襲撃したあの灰色の機体が力なく横たわっていた。

「『トバルカイン』の損傷は？」

「現状、最も酷い状態にあります」

「目立ったところは見当たらんがな」

確かに外装が剥げ落ち、内部フレームが露見しているが、最も酷いと呼ぶにはいささか過大である。

「外部フレームは問題ありませんが、問題は星痕核（ゾディアックコア）にありますので」

「……なに？」

赤騎士が怪訝そうな顔を白衣の男に向ける。キシシ、と等間隔に入った金歯を晒しながら不気味な笑みを浮かべた男がキーを弄る。すると、灰色の巨体からひし形のクリスタルが抜き取られ、赤騎士の目に映り、その顔が驚愕に歪むのはその直後だった。

ひし形の水晶の中には輝く十九もの球体が埋め込まれ、それらはおうし座をかたどるように配列されていた。

だが、これはどういう事だ。それら輝きがくすんでいる。先日見た際にはもっと神々しい光を放っていたのに。

「コア内の情報が２５％抜き取られたようです」

「抜き取られただと？　一体誰が――」

赤騎士の口が止まる。そうだ。いるじゃないか。この世界にただ一人それを行える人物が。

まさか生きていようとは。墜としたとばかり考えていたが、しくじったのか？　いや、この赤騎士が失態を犯すなど――

『言ったでしょう、『宝瓶』。女の戦場に上がってすらいない貴女だけには言われたくないと』

あの女か――。四方八方から迫る紅い閃光を恐れることもなく、命乞いすらしなかったあの女が死して尚も私を迷わせるのか。

ああ、だから女というのは嫌いなんだ。自分の勝手我儘で誰かを貶めることしか脳のない、下世話で淫乱な汚物が。男に抱く、抱かれた、抱かれないの一点で勝者と敗者を決め、それによってくだらない人生を謳歌する、そんな劣等生物などが自分にとってこの世で最も憎悪する。

だから、自分が女であることを時としてこの上なく恥じる。だが、それが我が誇りでもある。自分が女であるが故にあの方が自分を騎士として認めてくれている。ならば、自分はそれに忠義に応えなければならない。

「トバルカインの修復を三日で終えろ。私は『エリュシオン』で出

る」

「承りました」

黒い軍服を翻し、金色の軌跡を残した赤騎士は残忍な狩人の笑みを浮かべつつその場を後にした。歪めたその唇から彼女も気付かぬ内に言葉がこぼれた。

「この世で、狩りに勝る楽しみなど存在しない」

第十一話　～一つの始まりは一つの終わり～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

何だかようやく物語が動きだした気がします。ずいぶんと長いプロローグでした……。

次は原作二巻に入る前にオリジナルストーリーを入れたいと思います。

どうも表現がマンネリ化してしまいますので「ここはこうしたらいいんじゃね？」と言ったアドバイス等ございましたら、コメントお願いします。

それでは、またの機会に。

第十二話　～神、知りたもう事無かれ～（前書き）

第十二話です。

夏バテ、合宿、アルバイトのオンパレードで休まる日がありません。
せっかくの夏休みなのに。

忙しすぎて、今回はかなりクオリティ低めでお送りしますが、何とぞご容赦くださいませ。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第十二話　～神、知りたもう事無かれ～

神様というものがいるのならば、きっといい性格をしていないに違いない。

人に乗り越えるのもギリギリな試練を与えて、もがき苦しむ様を腹を抱えて笑ってみているはずだ。

神様なんていないと思っていたけれど、今だけは歪んだ性格の神様がいると確信している。

だって、そうでしょ？

「さあ、カイトさん！　どんどん食べてくださって構いませんからね！」

――これは本当に、大した試練だ。

「う、うん……。ありがとう、オルコットさん」

期待に目を輝かせたオルコットさんに差し出されたバスケット、そこに詰められたサンドイッチに手を伸ばす。

やだな、手なんか震えてないよ。これは女の子の手料理が食べられる興奮で理性が飛ぶのを押さえているだけなんだ。決して未知の領域に足を踏み込むのが怖いわけじゃない。

意識を失ってベットに横たわる一夏が僕に警告しているかのようにビクビクと断続的に痙攣し、一夏の看病を行っている篠ノ之さんも

僕に同情の視線を送ってくれている。

二人とも、たとえ僕が倒れるようなことがあっても、絶対に動転しないでね。お兄さんとの約束だよ！

（よし！）

覚悟を決めた僕は掴んだＢＬＴサンドを口に放り込んだ。

――ああ、神様。どうしてこんな試練を僕に与えるんですか？

●

～事件前日～

「はぁ……」

心地よい春の日差しとは対照的などんよりとした大きなため息をセシリアは吐いた。クラス代表戦が事実上中止となり、食堂のデザート半年フリーパスが取り上げられて落ち込むそこらのクラスメイトとはその内容は大きく異なっていた。まあ、それもあったのだろうが、いまさらそんなものに未練はない。あったとしてもろくに喉を通らないだろう。

それよりもはるかに問題なのは彼だ。視線の先にいる黒髪の少年に視線を注ぐ。同年代の男子と楽しげに談笑する姿は自分より話すよりも遠慮ない表情を浮かべていた。同性だからまだ心中穏やかだ。

だが、

「カイト、いる？」

「よう、鈴。カイトに用事か？」

彼女は例外だ。なぜ、ぽっと出の彼女のほうが自分よりも仲が良いのか？　セシリアには不思議でたまらなかった。

「カイト、ノート貸して？」

「またなの、鈴？」

「だってカイトのノート見やすいんだもん。ね、一夏？」

「だな。色とりどりでかなりわかりやすいからな、カイトのノートは。俺もときどきお世話になってるぜ」

「一夏の場合はいつもでしょ？　まったく、しょうがないなぁ……」

ぶさくさ言いながらもノートを差し出すカイト。体のいいパシリにされているようにも見えるが、彼の嫌そうじゃない顔を見ると苛立ちよりも嫉妬心が勝る。自分の場合はこうはいかない。

（どうしてうまくいかないんですの……？）

はぁ、と先ほどよりも深いため息をついたセシリア。効率的な方法を、からめ手をと無駄に難しく考えてしまって頭がこんがらがってしまっていた。

「オルコットさん？」

「ひゃ、ひゃい！？」

びっくりして裏返った声が出てしまい、声をかけてくれたカイトまで驚いて仰け反ってしまう。いけない、いくら考え事に夢中になっていたとはいえ、せっかくカイトが話し掛けてくれたのにこの対応はあんまりだ。

「あー……、ごめん。考え事してたならまた後にするけど」

やはり気を回してきた。その遠慮が彼の美徳なんだろうが、時にはそれがどこまでも疎ましくすらある。

「い、いえ！　大丈夫ですわ、

カイトさん！」

「本当に？　無理とかしてない？」

そう言ってカイトはセシリアの顔を覗き込む。こうして間近で見られると、化粧の乗りとかを嫌でも気にしてしまう。ましてやどことなく紅潮した顔を見られるのがいやで、カイトの顔をやんわりと押し返しながら尋ねる。

「そ、それでわたくしになにかありまして？」

「あ、うん。今日もＩＳの特訓をするんだけどオルコットさんはこれるかなって」

「ごめんなさい、カイトさん。今日はちょっと……」

嘘だ。

「そっか。用事があるならしょうがないよね」

カイトは残念そうな表情を浮かべるとあっさりと引き下がる。彼を騙していることにちくりと小さな痛みがセシリアの胸に走る。

やはり自分にはカイトへの負い目があるのだと、そう確信した。

「あ、あの、カイトさん！」

「ん？」

「実はわたくし――」

キーンコーンカーンコーン……

「始業の鐘が鳴ったぞ。早く席に着け」

「やばっ。ごめんね、オルコットさん。また後でね」

「あ、」

チャイムとほぼ同時に織斑先生が入ってきたのを確認したカイトはセシリアが呼び止めるよりも早く自分の席へと戻っていってしまった。

タイミングが悪いのか、それとも意気地のない自分が悪いのか。た

だただ自己嫌悪をしてしまう。

（これではいつになったら謝れるんでしょう……）

本日三度目の溜息がセシリアの口を割って出た。

●

「オルコット」

「は、はい！」

放課後、カイトが一夏らとアリーナに行くのを見送ったセシリアは千冬に話し掛けられた。あわただしく椅子を鳴らし立ち上がったセシリアに千冬は至極冷静な態度で告げる。

「暇なら手伝ってもらいたいことがある」

「わたくしに、ですの？」

「まあ、別件があるようならば無理にとは言わないがな」

くっくっと喉をならして笑う千冬を見て、ばれていると理解する。

「わかりましたわ」

「では付いてこい」

と、先導されてつれてこられたのは――『生徒指導室』。さすがのセシリアでも顔色が一変する。どうやら嵌められたらしい。

「先生、実はわたくし急用が」

「そんな古典的な言い訳が通用すると思っているのか？　潔く諦めて入れ」

「ぅぅ……」

がっくりとうなだれ、しぶしぶ教室に入ったセシリアは途端に目を丸くした。

生徒指導室とは名ばかりの教室は小洒落たカフェの様相を呈していた。白いテーブルクロスのかけられた円卓には色とりどりの焼き菓子が並べられ、湯気がたつ三つのカップからは仄かに甘い薫りが漂ってくる。

セシリアが予想していたような学術書がびっしりと詰め込まれた本棚の並ぶ薄暗くかび臭い部屋ではなかった。

ぱちくりと目を瞬かせているセシリアの存在に気付いたのか、準備をしていた女性がこちらを仰ぐ。

「こんにちは、オルコットさん。お待ちしてましたよ」

「山田先生？　ここで何をしてらしているんですの？」

ティーポット片手に、にこやかに挨拶をする真耶にそう聞き返してしまう。これはどの角度から見てもお茶会と返ってこなければおかし

い。

「補習、と言うかカウンセリングだな。山田先生、準備を任せてすまなかったな。おかげで助かった」

答えた千冬はセシリアの隣をすりぬけ、円卓に用意された椅子にドスンと腰掛ける。

「オルコットさんもどうぞ」

「は、はぁ……」

カウンセリングと言われてもあまり釈然としないが、カップから覗く琥珀色の液体の薫りに誘われるようにセシリアは椅子に座った。

真耶がポットをテーブルの中央に置くのに合わせ、千冬が話を切り出した。

「オルコット。お前をここに呼んだのはうちのクラスのバカから相談を持ちかけられたからだ」

「バカ？」

セシリアは首を傾げた。バカとは誰のことなのだろうか？

●

「一夏、誰がバカだって？」

「いや、俺はそんなこと一言も」

「まったく、無駄口を叩ける余裕があるなら次は篠ノ之さんと鈴とついでに僕の攻撃くらい捌いてみせてよね」

「カイト!?　カイトさん!?　いくら何でもそれは濡れ衣で、ってマグナムを構えるのは止めてくれぇー!」

「いっくよー!」

バシュゥン!

ガルベストーンの光芒が一夏の悲鳴を焼き尽くした瞬間だった。

●

「緋神がな、最近おまえの様子がおかしいとしきりにつぶやいていてな」

「カイトさんが?」

「嬉しそうですね、オルコットさん」

「そ、そんな事ありませんわ!」

取り繕うように否定してみせるが、それだけ自分のことを気に掛けてくれたことにうれしさを隠し切れず、勝手に自分のほおが緩んで

しまう。

「先走るな。まだ話は続いている。アイツはお前の様子がおかしいのは自分が何かしたからだと思い込んでいるからだ」

「そんなこと!?」

「だろうよ。どうせお前に避けられていることを無駄に深くとらえすぎているだけなんだろうがな」

紅茶の香を楽しむ千冬に触発され、セシリアの脳裏に過去の記憶が甦る。

●

あれは一週間ほど前のことか。あの凰鈴音という女の子が転向してきた日まで遡る。

千冬に呼び出され、ひたすら模擬戦を続けるカイトを労るために時間を見計らってセシリアはピットを訪れた。その手には買ったばかりのスポーツドリンクとタオルが握られていた。

ロッカールームの前に立ったとき、彼女は中から話し声がすることに気が付いた。耳をそばたてるとかたやカイト、もう一人はどうやら千冬のようだった。

「何か思い出したか?」

「え?　……いいえ、何も」

「そうか……」

――思い出す？　言葉の真意は読み取れないが、カイトの声が沈んだのを聞いて何か胸騒ぎがする。浮き上がろうとする不安を押殺して、耳を傾ける。

「すみません。僕の記憶がないばっかりにご迷惑をかけてばかりで」

「――！」

セシリアは咄嗟に両手で口を押さえつけた。強く、強く、もてる力の全てを持って自らの口と出てきそうになる言葉を押し返す。

危なかった。後一瞬でも反応が遅れていたら口から悲鳴が出てしまいそうだった。手から離れたペットボトルがタオルの上に落ち、音を抑えてくれたのはせめてもの僥倖か。

記憶が無い――。突拍子の無い語彙が重くセシリアにのしかかる。ひやりと、背中が冷たくなった。胸が張り裂けてしまいそうに痛い。

まさか、そんな、どうしてと状況を飲み込めずに気が動転している自分に隠れて、ああ、やっぱりか、と冷静に納得する自分がいることに気付いたセシリアの脳内で二つの自分がないまぜになる。

地面の感覚が遠退き、虚空に放り出されたような浮遊感が体を包む。それはＩＳで空を飛ぶのとは根本的に異なる、暴力的なまでの無重力。人一人がどうこうできる力ではなかった。

「もう遅い時間だ。風邪を引くなよ、カイト？」

「そんなに子供じゃありませんよ！」

「そうか」

千冬のものだろうと思しき足音がドアへと近づいてくる。ごちゃごちゃになった頭では観葉植物の影に退くことしか叶わなかった。

「……盗み聞きとは感心しないな、オルコット」

ドアから出てくるなり、ギン、と冷えきった刃の如き視線が観葉植物を切り裂き、セシリアに刺さる。その視線には大なり小なり怒りが孕んでいた。

「先生、今のお話は……」

「全部事実だ。一応言っておくが、今のお前じゃ受け止め切れるものじゃないぞ、アイツの闇は」

闇、それがカイトの記憶を示していることくらい分かる。過ぎ去りし思い出が甦るとき、緋神カイトという人物に隠れた獣が解放されるかもしれない。もしかしたら世界を滅ぼす悪魔なのかもしれない。すべて予測の域を出ない、だが予測だからこそ『最悪の事態』がこうして想像されてしまうのだ。

「この先緋神と関わり合うなら、覚悟を決めることだ。恐怖劇（グランギニョル）に一生付き合うだけのな」

これは女としての感だがな、と続けた千冬はそれだけ言い残すとアリーナを足早に立ち去っていった。

（恐怖劇（グランギニョル）に一生付き合うだけの覚悟……）

そんなことはない、カイトの記憶がなくとも彼は彼だ。否定したい気持ちがより悪い予想を駆り立てる。記憶が戻ったら、彼は、自分の愛した緋神カイトでいてくれるのか。不安を拭えないセシリアの耳に再び足音が響く。カイトのものだ。

今の自分がカイトと会ってしまったら何を口走ってしまうのかわかったものじゃない。セシリアは逃げるようにその場を後にした。落としたドリンクとタオルをその場に残して——。

●

「不安なんです。もしわたくしがカイトさんの秘密を知っているなんてことが知られたら」

「愚問だな」

懺悔するかのセシリアの告白を千冬は一蹴した。

「確かに驚きはするだろう。だが、その程度で奴は人を避けたりはせん。緋神はそういう奴だ」

渇きを潤すように紅茶を飲み干した千冬は、それに、と続ける。

「お前は緋神と向き合う覚悟を決めたんじゃなかったのか」

嘘すら見破る、試すような視線。セシリアは目を背けずにはいられなかった。

確かに、十数日もかけて自分なりの答えは出した。不安はない。だが、それはそれだ。

相手に隠れて秘密を握っているとあっては、いくらカイトとて冷静ではいられないだろう。もしもカイトが怒り猛り、絶縁を持ちかけられでもしたら自分は正気ではいられない。今まで抱えていた不安に加えて罪悪感までもがセシリアの心を蝕み、カイトときちんと向き合えずにいるのだ。

俯き、きゅっと唇を噛み締めるセシリアへはぁ、と深い息をはく。

「まあ、私は人にそんな気を抱いたことはないからわからないが」

「織斑先生、恋愛処女なんですか？　私はてっきりそう言った話の一つや二つ、」

「山田先生、実は今夜にでもＩＳ実習訓練の予行をやろうと思うのだが、お相手願えますか？」

「あぅ……。はい……」

死刑宣告を受けた真耶を横目にわざとらしく咳払いをした千冬はセシリアに告げる。

「早めに暴露したほうが良いぞ、オルコット。でなければ、溝は深くなる一方だぞ」

「わかっています！　わかっていますが……」

今すぐにでもカイトの元へと言って胸の内を曝け出したいが、最悪

の事態を思えばこそ、軽率な行動はとれない。冴えたやり方なんて思いつくわけが無い。

重苦しい空気が漂いだす指導室。その沈黙を切り裂いたのは、真耶だった。

「あの、織斑先生。私、まだあまりオルコットさんのお話を理解していないんですが」

「「……」」

さすがの戦乙女（ブリュンヒルデ）と言えど、このような質問をされては頭を抑える他無い。千冬は痛む頭を抑えて真耶に解説する。

「オルコットが緋神を振り向かせるにはどうしたら良いのかを考えているんだ」

「そ、そうなんですか、オルコットさん!?」

「ち、違います！　いえ、ち、違いませんけど、あの、端折りすぎですわ、織斑先生!」

鼻息を荒げた真耶が赤くなった顔をセシリアに近付ける。確かに根本的にはその一点であるが、そこにつながるしがらみをすべてすっ飛ばした説明にセシリアの頬が真っ赤に染まる。

そんな彼女等を檻の向こうの動物を見るような楽しげな視線を向けつつ真耶に話を振る。

「さて、緋神の気を引く妙案はないか、山田先生?」

「そ、そうですね……」

腕を組み、年不相応の幼い顔をしかめて頭を悩ませた真耶は閃いたのか、ポンと手を叩いた。

「お料理なんてどうでしょうか？」

「お料理、ですの？」

真耶なりに導きだした妙案に今度はセシリアの顔が崩れた。

正直、料理なんてやったことなどない。イギリスにいた頃は使用人が何から何までやってくれたので、実家のキッチンには立ったことすらない。

「この前読んだ漫画ではですね、主人公の男の子にヒロインの女の子が手料理を持ってくる話なんですが、いつもはそっけない女の子が見せた優しさと不恰好ながらも差し出してくれたお弁当に主人公がキュンと来てしまってそのまま仲良くなってしまうんですよ～！　あ、でもその様子を別の子が眺めていて、それがですね、」

「……だ、そうだが、どうする？」

キャーキャーと一人漫画のストーリーを熱く語る真耶を止めることもせずに、深い嘆息をついた千冬が尋ねてきた。

そういえば、前にカイトは一夏が箒の手料理を食べているのを羨ましげに眺めていた。

手料理を食べさせて、機嫌を良くしてもらったところで切り出せたら、少しはカイトの態度も緩くなるだろう。

物で釣るようで若干の引け目は有るが、いまさらそんなことを気にしている場合だろうか。ぐっとこぶしを握って腹を括る。

「分かりましたわ！　織斑先生、わたくし、料理に挑戦してみますわ！」

「ああ。頑張れよ、小娘」

千冬はセシリアの宣言をうれしそうに聞くと、クッキーを頬張った。

●

～事件数分前～

「うわー！　また負けたー！」

「へへっ！　まだまだだな、カイト！」

僕はコントローラを持ったまま背もたれに倒れた。そんな僕を一夏が勝ち誇った顔で見下ろしてくる。くそぅ、一夏のくせに生意気な……。

今日は休日と言うことで、僕は一夏とテレビゲームに興じていた。

一夏が持ってきてくれたのは『ＩＳ（インフィニット・ストラトス）／ＶＳ』という対戦ゲームだ。

第二回ＩＳ世界大会『モンドグロッソ』を基盤に使った名作、らし

い。

ちなみに、千冬姉さんのデータは入っていないらしい。込み入った事情があるとかないとか。

しかし、一夏め。このゲーム大分やりこんでるな。ちょっとは操作に慣れてきたのに今だに一勝もできないなんて。僕をボコるために持ってきたんじゃないかと錯覚してしまいそうだ。

「次こそは勝つからね、一夏」

「まだまだ勝たせないぜ、カイト！」

麗らかな昼下がり、ゲームにハマる僕らの時間はゆっくりと過ぎていく――、

コンコン

「カイト、誰か来たみたいだぞ？」

「みたいだね。はーい、今開けまーす」

ポーズ画面に変え、僕は部屋のドアに駆け寄ると鍵を外し、扉を押し開ける。

「こんにちは、カイトさん。ご機嫌いかがですか？」

「……」

「オルコットさんに篠ノ之さん、どうしたの？」

スカートのはしを摘んで優雅に挨拶をしてくれるのはオルコットさんだった。それに、なぜだか顔色の悪い篠ノ之さんまでいる。驚いたな、いきなり部屋に来るなんて。

「あの、お昼はもうとりましたか？」

「ううん、まだだけど」

「でしたら、その……」

もじもじしているオルコットさんが右手に持ったバスケットを僕に差し出し、中身を見せる。そこには美味しそうなサンドイッチが並んでいた。そう言えばゲームに熱中しすぎてお昼を食べて無かったっけ。

「よろしかったら、これを召し上がってくださらないかしら？　前に一夏さんがイギリスには不味い料理しかないと仰っていましたから、それを誤認させてはいけないと思いまして」

「誰か呼んだか？」

「い、一夏！？　なぜお前がここにいるんだ！？」

自分の名前を呼ばれたのを察知し、ひょこっと一夏が姿を見せた。途端、篠ノ之さんの顔色がさらに青ざめ、一夏に詰め寄った。ど、どうしたんだ？

「今日はカイトのところに行くって言ってなかったか？」

「そんなのは知らん！」

「お、旨そうなサンドイッチじゃん！　セシリアが作ったのか？」

「人の話は最後まで聞けぇーっ！」

憤慨する篠ノ之さんを余所に、一夏がオルコットさんの差し出すバスケットの中身に気が付き、お腹を鳴らす。まったく、気が早いというかなんというか。

「オルコットさんの差し入れだよ。イギリスにも美味しいものがあるんだって教えてくれるんだって」

「へぇ～、言うだけあるなぁ」

色気より食い気。今の僕らはまさにそんな諺が似合う。

「じゃあ、入ってよ二人とも。みんなで食べようよ。一夏、ゲームを片付けてくれないかな？」

「お安い御用だ」

「そ、それじゃあお言葉に甘えて」

促すと、オルコットさんはおずおずと部屋に入り、一夏はゲーム機を片付け始めた。

「あれ、篠ノ之さんは入らないの？」

微動だにしない篠ノ之さんに声をかける。すると、何かをあきらめ

たように息を吐くと、

「緋神」

「なに？」

「地獄はそこにあるぞ、気を付けろ」

謎めいた言葉を残して部屋に入った。地獄はそこにあるって、何？

悩んでてもしょうがない。施錠し、キッチンでジュースを四人分注ぐとそれらを持って急ぐ。

「飲み物はジュースでいいかな？」

「あ、すみません、カイトさん。頂きますわ」

「……」

無言で受け取る篠ノ之さんにいよいよ不安になってくる。なんだか何かに怯えているように見えるけど。

「それじゃあ早速、いただきまーす！」

「あ、一夏ズルい！」

素早くバケットに手を伸ばした一夏がハムとチーズのサンドイッチを口に放り込んだ。それは僕が狙ってたのに！

流れるように口にはこんだ一夏は一一、

パクッ　バタン！　ガタガタガタ……

机に頭を激しく打ち付け、ジュースの入った紙コップを薙ぎ倒すと、小刻みに痙攣しだした。

「ど、どうしたんですか、一夏さん!?」

「い、一夏!?」

「だ、大丈夫!?　一夏!?」

一夏の痙攣の速度が加速度的に激しくなっていく。寄り添い、一夏の状態を確認すると僕の方をじっと見て、彼は目で訴えてきた。

『カイト、毒を盛りやがったな』と。

『できるわけ無いじゃないか』と目で返事をする。友情が可能にしたアイコンタクトだ。こういうときはプライベートチャネルよりも便利だ。

『緋神。地獄はそこにあるぞ、気を付けろ』

篠ノ之さんが言おうとしてたのはまさかこのことなのか？　かちりと何かが僕のなかで音を立てて当てはまった。

「一夏ったら、がっつきすぎだよ。いくら美味しいからって、オーバーだなぁ。篠ノ之さん、一夏は疲れてるみたいだからベットに寝

かせてあげてよ」

「わ、わかった。……死ぬなよ、緋神」

とりあえず、まずは一夏の処理だ。オルコットさんの様子を見るかぎりわざとではないとは分かるが、オルコットさんってもしかして破滅的に料理がヘタなんだろうね。

不吉な言葉を残して人間バイブレータと化した一夏を運ぶ篠ノ之さん。

「一夏さん、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だよ、美味しさのあまりに昏倒するフリするくらいにね」

嘘を吐くのがこんなにもつらいと思ったのは今一瞬ほどない。

「良かったですわ！　なら、カイトさんも遠慮せず食べてくださって構いませんからね！」

「う、うん……。ありがとう、オルコットさん」

期待に目を輝かせたオルコットさんがそう勧めてくる。そんなに期待された笑顔で見られたら断ろうにも断れないし、むしろどんな破壊兵器だろうと食べきって見せるという気になってくる。

でも、僕には目を虚ろにして体を振動させる一夏の姿が忘れられないんだ。

死の恐怖からくる震える手を制し、ＢＬＴサンドを口に運んだ。こ

んな試練を与えた神様を呪いながら。

（グアァアアアアアアアア！）

悲鳴をせり上がってきた吐き気ごと租借する。色合いは良いのに、まったく味が感じられない。味蕾が、舌が、味覚が破壊されていく……！

コレはもはや料理ではない。死神の鎌だ。その凶刃で魂もろとも意識を刈り取るカルタグラ。味のバイオハザードだ。

「……ぐっ」

「ぐ？」

いかん、悲鳴が唇の隙間を縫って出てきてしまった。『ぐ』から続く単語をなんとか考えねば！　え～っと、

「……グッドだよ、オルコットさん」

「お口にあいましたか！　良かったですわ！」

浮かべられるギリギリの笑顔で、親指を立てる。これくらいなんてことないさ、……たぶん。

するとオルコットさんは花開くようにぱぁっと顔を開花させる。畜生、なんて素敵な笑顔なんだ。悪意なんて塵一つも感じさせない魅力的な笑みだ。そんな笑顔を浮かべられたら、こんな些細な嘘でも罪悪感で押し潰されそうだ。

ダメだ、震えるな僕の体！　これは美味しさに打ち震えているだけなんだ。決して痙攣などではない。振るえる腕を机に乗せた瞬間、

ガッ

「やばっ」

誤ってコップを弾いてしまう。あわててキャッチしようとするが、それを嘲笑うかのようにコップは僕の手を擦り抜け、床にぶつかると、中身をぶちまけてしまう。

「大丈夫ですか、カイトさん!?」

「平気だよ、オルコットさん」

幸い、僕の服にはかかってないし、何より顔色が悪いのを悟られてはいないようだ。

「セシリア、食堂に行って濡れた雑巾を持ってきてくれないか？ここは私と緋神で片付けておく」

「わ、分かりましたわ」

篠ノ之さんに言われるがまま、駆け出していくオルコットさん。扉がしまったのを確認した僕は机に倒れこんだ。

「言っただろう、緋神。地獄はすぐそこにあると」

「仰るとおりで……」

落ちたコップを拾い上げ、僕の傍らに置いた篠ノ之さんが淡々と告げる。その様子から僕は悟った。

ああ、篠ノ之さんもコイツの餌食になったんだと。

「それでこれをどうする？」

腫れ物を扱うように、バスケットを差し出す。出来ることならどぶに捨てたくてしょうがないけれど、

「ちゃんと食べるよ、全部ね」

「そんな体で大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、問題ないって言いたいけど、正直そんな余裕はないよ」

軽口を叩くのだって、そうでもしなければ僕の意識が無くなりそうだからだ。

「一つ確認。オルコットさんはこれを僕のために作ってくれたんでしょ？」

「やっぱりね」

「そうだな。慣れない包丁に苦戦しながらな。必死だったぞ」

「あまり驚いていないようだが、まさか感づいていたのか？」

「何となく、だよ」

一夏が先にサンドイッチを頬張ったとき、一瞬だけ悲しそうな顔をしていて気になっていた。そこにさっきの笑顔がくれば、いくら僕でも気が付くさ。

篠ノ之さんの話を聞いて何だか嬉しくなった。避けられてるから嫌われているかなと思っていたから、たとえそれがどんなに不味いものだったとしても、それを無下にすることは僕には出来ない。

バスケットを持ち、息を整える。集中しろ、意識を研ぎ澄ませろ、これはとても美味しいサンドイッチなんだ……！

我らに勝利を与えたまえ（ジークハイル・ヴィクトーリア）！

「いただきまーす！」

そこから先のことは、よく覚えていないんだ。でも意識が摩耗して、別の世界が見えてきた。そんな気がしたんだ。

●

「ん……あれ？」

「気が付きまして、カイトさん？」

オルコットさんが僕の顔を覗き込んできた。僕は何で仰向けになっているんだろう……？

「食べてすぐに寝てしまうなんてテーブルマナーがなっていませんわよ」

「あはは……。今度から気を付けるよ」

その原因が君だとは口が裂けても言えない。上体を起こしたところで一夏と篠ノ之さんの姿が見えないことに気が付いた。

「あれ、一夏たちは？」

「部屋に戻りましたわ。わたくしは篠ノ之さんにカイトさんの様子を見てくれるよう頼まれましたから」

「そっか。ありがとう、オルコットさん」

「いえ、それはこちらの方こそ綺麗に食べてくださってありがとうございますわ」

空になったバスケットが差し出されると、僕は悪夢に打ち勝ったと実感する。

「そ、それでですね、カイトさん。あの、この後お時間を頂けますか？」

壁に掛かった時計を見る。まだ一夏の勉強を見てあげる時間じゃないな。

「うん、平気だよ。なにかな？」

「こんなことをいきなり言われると困惑するかも知れませんが、で

すけど言わせてください」

そう前置きした上でオルコットさんは急に頭を下げた。え、な、何？

「ごめんなさい、カイトさん！　実はこの前カイトさんと織斑先生が話しているところを聞いてしまって、」

「――僕が記憶が無いこと、気付いちゃった？」

言葉を引き継いだ僕の言葉を肯定するように、オルコットさんが俯きがちに頷くと、ゆっくりと説明してくれた。

輪が転校してきた日に僕と千冬姉さんが話しているのを聞いてしまったことを、それが元で僕を避けていたことを、それでも僕と向き合おうとしてくれて、それだけのために料理を作ってきてくれたこと――。

すべてを語り終えたオルコットさんの表情は、沈痛で深い影を落としていた。今の彼女の心を浮き彫りにするように。

「そっか、知っちゃったか……」

納得の末、紡がれた言葉は驚くほど冷たい響きを秘めていた。それは僕が記憶が無いのを隠しているのは千冬姉さんの面倒になりたくなくて、誰かに避けられないようにとの配慮なだけであって、僕自身が記憶喪失にお熱なわけじゃないからだ。そりゃあ、無くなった記憶は知りたいけど、無くしたものを気にしていてもしょうがないじゃないか。

だから、こうして謝られてしまうと逆にどうしたら良いのか分から

なくなってしまう。とりあえず、聞いておきたいことがある。

「オルコットさん。僕は怒ってないから、こっちを向いて。ね？」

「……はい」

不安に揺れる青い瞳は涙で潤み、今にも泣きそうだった。僕はあやすように、優しく語り掛ける。

「僕は別に気にしてないよ。それよりも、嬉しいんだ」

「どうして、ですか？」

「だってオルコットさんはそんなに思い悩んでくれて、慣れない料理にも挑戦してくれたんだよね？」

とっさに手のひらを背中に隠す。いまさら隠したってもう遅い。オルコットさんの白く、細い指は絆創膏だらけだった。篠ノ之さんが言っていたように、僕なんかのために必死だったんだろう。

それだけ僕が記憶喪失であるのを知っている事がしこりになって僕らを邪魔するのが嫌だから、こんなにも頑張ってくれたんだ。

そんなに優しい人をどうして怒れるの？　僕はそんな冷血人間じゃない。

「僕には記憶が無い。でもだからこそ、誰かにそう思ってもらえるのがとっても嬉しいんだよ」

『わたくしはもう逃げないと、カイトさんと向き合うと決めたんです！』

脳裏に想起されたのはクラス対抗戦の時に言ってくれたオルコットさんの台詞。あんなに強く言ってくれるほどにこんな僕を思ってくれる人がいる、それはこの上なく幸せなことだ。それが僕の秘密を知っている人物ならなおさらだ。

「だから、そんなに気にやむことなんかないよ。むしろ秘密を共有できる人が出来て喜んでるんだから」

「カイトさん……。ありがとうございますわ。」

笑うオルコットさんの顔には影は見えず、さっきまでの堅さはない。やっぱり女の子は笑顔が一番だね。

しかしオルコットさんを見ていて改めて思うけど、

「何だか謝ったり、感謝したり忙しいよね、オルコットさんって」

「それは一体誰のせいだと思っていますの？」

「ごめんらはい！　僕のせいれふ！」

顔をどこか赤くさせたオルコットさんに、ギュウ～、と頬が伸びるまで力一杯引っ張られる。痛い、痛いってば！　何で引っ張るのさ！？

「悪いと思うのなら、今後はわたくしの事をセシリアと呼んでくだ

さらないかしら。秘密を共有している仲ですものね」

「わかったはら、わかったはら手をはらしてよ！」

そろそろ離してもらわないと僕の頬がべろんべろんになっちゃうから！

ぱっと手を離して僕のほっぺを解放するオルコットさんもといセシリアさん。あれ、セシリアさんって呼ぶのに意外と抵抗ないな……。心の中で呼んでるだけだからかな？

「そういえば、セシリアさん」

「はい、なんですの？」

お、やっぱり抵抗無いな。鈴の時には若干抵抗感があったんだけど。それは置いておくとして、僕は先刻から抱いていた疑問を投げ掛けた。

「さっきからもじもじしてるけど、もしかしてお手洗いに行きたいの？」

ギュウ～～～～～～ッ！

万力のごとき力で頬を捻られた。

五月最後の日曜日はこうして穏やかに、そして緩やかに過ぎていった。嬉しい事とか色々ありすぎて、忘れられない日になりそうだよ。

……そうだ、セシリアさんに料理のことといつ言おう？　被害者が増える前に手を打たないと……。

第十二話　～神、知りたもう事無かれ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

投稿遅れてすみません。もう言い訳しません。私が悪いんですから。

クオリティを高めるために超常的な力を探しに行こうかな……。ハーブダークションーン！って感じで。

次回は原作二巻、五反田ブラザーズ（？）が登場します。そしてあの御方もようやく……。長いスパンは開きませんから、ご期待ください。

では、またの機会に。

第十三話　～六月の花嫁～（前書き）

第十三話になります。

原作二巻に突入です。

駄文ですが、お楽しみくださいませ……。

第十三話　～六月の花嫁～

ＩＳ学園の六月はなかなかに忙しい。ＩＳ稼働における基礎実習が終了し、本格的な訓練が始まるだけではなく、月末にはそれのお披露目の場として学年別個人トーナメントが開催される。僕ら一年生にはあまり関係しないけれど、上級生、とりわけ三年生には各国からのスカウトがあるから不様な真似を見せるわけにもいかない。だから、三年生の緊張はそれは学園の雰囲気を変えてしまうほどにピリピリしていた。

とはいえ、さっきも言ったとおり一年生には実力測定のための模擬戦程度の認識しかなく、実にまったりとしている。現に第一日曜日と言うこの日、一夏なんて今日は友達の家に遊びに行ってるし、セシリアさんも友達と買い物へ、篠ノ之さんは部活に参加、鈴はコンビニの新商品の大試食会と、それぞれ思うように過ごしている。三年生が必死に練習しているのに対して一年生のモチベーションはこんなもんなのだ。

僕？　僕は――

「ふぁ～……」

スウェットを着たままベットの上で睡眠中。僕の体温が移った毛布がすごく気持ちよくて、今日はずっとこうしている。

ＩＳの基礎実習が大詰めになるのに合わせて専用機持ちがフューチャーされる機会も相対的に増えるわけで、一日中ＩＳと一緒なんてこともざらになった。いくら飛んだり跳ねたりするだけだからとはいえ、ＩＳを動かし続ければ少しずつでも疲労が蓄積していくわけ

で、塵も積もればなんとやら。重ねて、放課後には一夏の練習も行わなくちゃいけないので、疲れはさらに溜まっていく。

だけど今日は待ち望んだ日曜日！　授業も特訓もない、完全なオフ！　夜には一夏の勉強を見てあげる時間があるけど、それでも一日の大半をダラダラできる！　こんなにも怠惰で駄情だけど素晴らしいことが他にあるだろうか？　いやない、あってたまるか！　故に僕は今日という日を心の底から楽しませてもらうんだ！　反論はないね、あっても聞かないけど。

そんなわけで僕はもう一眠りしよう。時刻はまだお昼前だしね、もっと眠れるさ。躊躇うことなく心地よいまどろみに身を委ねた。

「悪いがそうはいかん」

「へ？」

バコッ

「うぼあああああッ！」

僕を包む怠惰で駄情なまどろみは圧倒的な衝撃で霧散し、意識が急浮上する。脳天から足先まで雷鳴のように勢い良く走り去った痛みにベットから飛ぶように起き上がった。

奇襲を仕掛けられた。まあ、別に取り立てて怒ることじゃないんだけど。腕組みをして僕を見下ろしているこの人物には二つほど聞きたいことがある。

「……どうしてここへ？　あと、なんで殴ったんです？」

あなたの登場はゲンコツ、もといバイオレンスなアタックと一緒じゃなくちゃダメなんですか？

「毛布を抱き締めただらしのない男に活を入れただけのことだ。男がそんな顔をするな。気色悪いぞ、緋神」

なんて男らしい答えなんでしょう。家族の絆は痛みを伴うものなんですね、千冬姉さん。

「せっかくのお休みを満喫していたんですから、そりゃあだらしなくもなりますよ。それで、どういったご用件ですか、織斑先生？」

ベットの上にあぐらをかいた僕はそう問い直した。サマースーツを着ているのを見るかぎり、家族団欒の時間を過ごしに来たわけではないとは分かる。だって僕の事をカイトではなく、緋神で呼んでいたわけだからね。姉ではなく、教師としての織斑千冬さんへの対応へ切り替える。

「織斑がどこに行ったか知らないか？」

「一夏ですか？　実家の様子を見てくるついでに友達の家に行くと言ってましたよ。確か名前は五反田、とか。それがどうかしましたか？」

「……はぁ」

「その『コイツ分かってねぇ』的な深く息を吐いた理由をお聞かせ願えますか？」

「お前の事じゃない。織斑には困ったものだな、と思っただけのことだ」

一夏に？　今日って何かあったっけ？　僕が健忘症じゃなければ、特には聞いていなかったはずだけど。

「今日は白式の戦闘ログを確認する予定だったんだが」

「戦闘ログを、ですか？」

言われて、ふと先月のクラス対抗戦で起きた事件を思い出す。どの国家、企業にも所属しない、所属不明（コードレス）のＩＳの乱入事件。僕、一夏、鈴、そしてセシリアさんの四人で解決したあの一件は学園で実験していたＩＳの暴走と表向きにはそう公表している。

でも、事実はそうじゃない。リーダーである灰色のＩＳには人が乗っていたし、その後を追うように出現した三機も無人機だったらしい。だからあれは事故じゃなく、何者かが何かの理由で僕らを襲ったんだ。

白式のログを見るということは、本格的に調査のメスが入るんだろうか？

「言っておくが、お前の考えていることは外れだぞ。白式を作った研究所からすべてのデータをよこすように頼まれたんだ」

「そうですか……」

もしかしたら無くした記憶の手がかりが出てくるかも知れないと期待していた僕は肩を落とす。やっぱり、事が事なだけにおっぴろげ

には調べられないか。

「織斑には一昨日言ってあるのだが」

「確かその日は武器の特性についてやりましたよね？　じゃあ覚えてないと思いますよ」

一昨日は武器の秘める特性について、実際のアクションを交えて授業を行った。内容が専門用語の応酬で、一夏に噛み砕いて説明したからいやに覚えている。

あの時の一夏は頭から湯気がでるくらい知識を詰め込んでたから、データを取るなんて絶対忘れてるな。今頃五反田って人とゲームでもしているんだろうな。

「いないのなら仕方ないな。緋神、織斑を呼びに行ってくれないか？」

「嫌です」

ゴンッ

「いくらなんでも全力で殴ることないですよね！？」

「すまない、あまりの即答につい自分を抑えきれなかった」

今のはさすがに腑に落ちないですよ！　理不尽だ！

「第一、お前たちは兄弟みたいなものだろう。兄（一夏）の不始末は弟（カイト）がするものだろうが」

「頭が悪くて人の好意に気が付かない唐変木な兄貴はいりません！　てか、誰が一夏の弟ですか！？」

「お前、自分で自分のことを窄めているのに気付いていないのか……」

確かに千冬姉さんの保護下に入ったから、僕と一夏は兄弟みたいなものなんだろうけど、いくら何でもそれはあんまりだ！　あんな手間のかかるお兄様なんて僕は嫌だよ！

あと、自分を窄めているってなんのことですか！？

「大体ですね、仮に、仮にですよ。僕が行くとしても、一夏の友達の家の場所は分かりませんよ。鈴に頼むのが一番効率的なんじゃないんですか？」

鈴は一夏の幼なじみなんだから、五反田さんの家くらい知ってると思うんだけど。

「確かに凰に頼めば早いだろう。だが、彼女とお前のどちらが時間を持て余しているかと尋ねられれば私はお前を選ぶ」

「横暴だぁーっ！」

コンビニスイーツを味わってるくらい大した用事じゃないでしょう！？

反論しようと口を開いた僕よりも早く千冬姉さんは喋りだした。

「そもそもお前は私の言うことを拒否できるのか？　四月の一件を忘れたとは言わせんぞ」

「ぐっ……」

弁慶の泣き所を蹴り飛ばされて、反論する気がごっそりと削がれた。千冬姉さんが焦れてジョーカーを切ってきた。

四月の一件とは、クラス代表が決定されたその日の晩にセシリアさんが僕の部屋を訪れたことだ。セシリアさんのルームメイトの子がいつになっても帰ってこない彼女を心配して千冬姉さんに報告し、そして僕の部屋で楽しそうに話すセシリアさんを見つけたわけで。

外出禁止時間に別の部屋にいて、かつその相手が身元不明の男子であれば学園を巻き込む大事件に発展してしまいかねない。僕らをこってりと絞った千冬姉さんの手回しによって事無きを得た。その時の苦労は傍から見ていても苦痛そのもの。

千冬姉さんにはただでさえ大きな借りがあるのに、その話を切り出されたら受けざるを得ない――

「冗談だ、カイト」

「はい？」

急に表情を崩した千冬姉さんに呆気に取られる。冗談だって？

「クラス対抗戦の日からずいぶんと立て込んでいたからな。無理強いをさせるつもりなんて、もとより無い」

「千冬姉さん……」

「カイトには私も助けてもらっているからな。主にバカな弟の面倒をだ」

喉を震わせ、千冬姉さんは笑った。助けてもらっているのはこっちの方なのに、そんな言い方をするなんて、千冬姉さんはズルい人だよ。

「姉さんズルいですよ、そんな言い方ばかり」

「生憎コレが私の性分なんでな、死なないと治らんよ」

「……分かりましたよ、迎えに行きますよ」

「すまないな、カイト」

良いように誘導された気もするが、そんなことはどうでもいい。千冬姉さんの気苦労を少しでも軽く出来るのならね。

ベットスプリングの反発を利用して立ち上がった僕はクローゼットに歩き寄る。が、千冬姉さんが僕を呼び止める。

「カイト、一夏を迎えに行く上でお前に必要なものを渡しておく」

そう言って取り出したのは――

●

コンコン

「はいはーい。今出まーす」

控えめにノックすると、中からパタパタと足音がドアに近付き、声の主である鈴が姿を見せた。そして、眉をひそめた。当然だ。

「鈴。深く聞かずに教えてほしい。一夏の遊びに行った五反田とかいう人の家を教えてくれないかな？」

鈴には悪いけど、今の僕には誰かを気遣う余裕なんて無い。だから、さくって答えてくれ。

「あんた、一夏の友達？　クラスメイト？　それとも、恋人？　答えなさいよ、あんた！」

鈴が敵意をむき出しにして僕の肩を掴んで激しく揺さ振る。やっぱり無理があるよね。鈴の怒声を聞き付けてか、ひょこっとドアの影から次々に頭を出す女の子たち。いかん、何だか見知った顔がちらほらと。

騒ぎが大きくなる前になんとかしないと……！

「あら、鈴さん何をしてらっしゃるんですの？」

「げ、セシリアさん……！」

今の僕の右手は幸運すらも打ち消すらしい、人の合間を縫って現れ

たのは買い物に出かけていたはずのセシリアさんだった。まだお昼時だよ？

「あら？　あなた、どこかでお会いしましたかしら？」

まずい、ばれちゃう！？

「人違いですよ、人違い！　それじゃあ鈴、部屋でゆっくりと話そうか！」

訝しげな視線を向けるセシリアさんから逃げるように鈴の部屋にダイブする。それに合わせて、部屋を中心に集まっていた女生徒らが部屋へと戻っていった。セシリアさんも行ったよね、人の気配感じないし。

ほっと胸を撫で下ろす僕にキッと鋭い眼光を向ける鈴。あー、こりゃあ僕を完全に敵だと思ってるな。しょうがない、背に腹は帰られない。

「そんなに睨まないでよ、こうすれば話を聞いてくれるでしょ？」

鈴の部屋に他の人がいないのを確認した僕は、死にたくなるような羞恥心を見ないフリをして、喉に巻いたチョーカー型変声機と地毛と同色のウィッグを外した。瞬間、鈴の顔が恐怖と驚愕に歪んだ。無理もないか、何せ今の僕は――。

「か、カイト！？　なんでアンタ女装なんかしてんのよ！？」

そう、今の僕は世界に二人しかいない男性ＩＳ操縦者の『緋神カイト』ではなく、黒髪ロングの謎多き女の子『緋神　蛍（けい）』に超変身し

ている。着ている服も、タイトなデニムのスカートとTシャツの上にベストを羽織った、最近のトレンドを意識したガールズファッション。

先ほど千冬姉さんから渡されたのはこの姿に変身するための道具だったのだ。姉さんいわく、今は未だ緋神カイトとして外出するのは危険ということなのでこの姿はそれへの対応策と言うわけだ。さすがに辞めたいと何度も言ったが、最終的には当て身で気絶されたところを無理矢理女装させられた、なんてことがあったわけなんですが。

「……って訳なんだけど、わかってくれた？」

「なるほどね～。アンタも苦労してるわね」

「ありがとう、鈴」

僕が五反田さんの家に一夏を迎えに行かなくちゃいけない理由も含めて、外した変声機とウィッグを付け直しながら説明すると、ようやくわかってくれたようだ。

「ところでカイト、いや、蛍？」

「ひっ！」

鈴、目が！　目からハイライトが消えてるよ！　身も凍るような視線で僕の胸に穴を開ける。

「これはあたしへの当て付け？」

「ち、違っ！　これは仕方なく！」

僕の胸は大量のパットを詰められてかなり肥大化している。千冬姉さんの悪戯、いや、嫌がらせだ。

それが思わぬ形で鈴に飛び火してしまったらしい。

「巨乳なんて人間なんて高尚な生き物じゃなくて、ホルスタインとかいう脂肪の固まり……。だから殺しても殺人にはならないのよ……」

ビュイン！（衝撃砲《龍咆》ご降臨）

なぜだろう、死の予感。

「さあ、蛍！　無い者の恨み辛みと羨望の籠もった死を受け入れなさい！」

「何でっ！？　後、せめてカイトって呼んでよ！」

「しーーーーねーーーーー！」

「話を聞いてぇぇぇぇ！」

捕まったら抹殺される地獄の鬼ごっこは鈴が正気を取り戻すまで三十分も続いた。よく生き残れたよね、僕って。

●

「うぅぅ……、酷い目に遭ったよ……」

ぼやきながら、衝撃砲の掠めた肩を擦る。痣にはなってないけど、まさか本気で射ってくるなんて正気の沙汰とは思えないよ。今日は厄日かい？

ため息一つ、肩を落としながら見知らぬ町の住宅街を手に持った紙切れとを見比べながらひたすら歩く。目的地は一夏の遊びに行った五反田さんの家なんだけど……、

「本当にあるのかなぁ……」

鈴に描いてもらった地図だけを頼りにここまで来てみたものの、見渡しても五反田と表札のかかった家は見当たらない。鈴いわく『そんなものはいらない』らしいけど、こんな住宅街に表札代わりになるようなものなんて無いよ、鈴。

そもそもこの地図合ってるのかな？　あまりにアバンギャルドでエキセントリックだから、描いた本人には悪いんだけどあんまり信用できない。

「はぁ……」

「なにかお困りですか？」

もはや癖になりつつあるため息を吐いたその時、不意に声をかけられ振り向いた。

買い物帰りなのか、コンビニの袋をぶら下げている赤い髪の毛の女の子だ。活発そうなその子の瞳が僕を見つめている。綺麗な子だな、半袖のワンピースを着こなしている。

きっと地元の子だよね？　声をかけてくれたのも何かの縁、道を聞いてみよう。

「実は道に迷ってしまって、ここに行きたいんですが……分かりますか？」

「随分と過激な地図ですね……」

簡単に事情を述べた僕は鈴手作りの地図を女の子に渡す。受け取った子の眉間に皺が寄った。鈴、君の描いた地図は過激だそうだよ。

「拙い地図ですみません。ぼく、じゃなかった、わたしは五反田さんの家に行きたいんです」

「うちに何か御用ですか？」

一一え？

まさかこの子が一夏の言ってた五反田さんなの？　また女の子かい、一夏。君の周りにはいつも女の子がいるね。

「少々込み入った事情がありまして、とりあえず案内をお願いできますか？」

「はぁ……」

女の子は首を傾げながら、道を歩きだした。僕はその少し後ろを歩く。ごめんなさい、理由を説明できなくて。事情を説明するには僕が女装させられた男だってところからしなくちゃいけないから。

そんなことをしたら僕は警察に連行される。それだけは絶対に避けなくちゃならない。

「あの、付きましたよ」

「え？　あ、ああ。ありがとうございます、五反田さん」

僕の先を歩いていた女の子が振り向き、前を指差した。ああ、確かに表札なんて必要ないね。目の前にでっかく『五反田食堂』って書いてあるし。その下にひっ付いた表札なんて申し訳程度。

一夏って、友達に食べ物関係の子が多いよね。鈴もたしか中華料理の店をやってたらしいし。

そんなことを考えながら食堂へと入る。

「いらっしゃい！」

「ど、どうも……」

飛び込んできたのは定食屋独自の食欲を呼び起こす匂いと、調理場から響いてきた勢いのある挨拶。勢いに押されてついつい挨拶を返してしまった。

挨拶をしてくれたのは筋骨隆々の男性だ。軽がると中華鍋を二つ同時に扱っている姿に感動すら覚える。その風格すら察するに店長か

な？

「空いている席に座ってくれ。メニューは、」

「お父さん、この人お客じゃないってさ」

僕の脇を擦り抜けた女の子が男性にそう言った。ほう、と短く答えたその人は中華鍋を置いて僕に向き直った。千冬姉さんに匹敵する眼力にびびる。あの子の父親だったんだね。似てねぇ。

「いえ、お仕事があるならお先にどうぞ。わたしの用事は後でも結構ですので」

「客もいねぇ。別に賄いを用意してただけだから気にすんなや、お嬢さん」

鳥肌なんてたってない。お嬢さんなんて言われて鳥肌なんてたってないからね。

「では、お言葉に甘えまして。ここに織斑一夏さんがいらっしゃいますよね？　わたしは彼に御用があるんですが、呼んでいただけないでしょうか？」

「あのガキにか？　呼ぶのは別にかまやしねぇけどよ」

丸太のように太い腕を組んで渋る。当然か、見知らぬ人物が店にやってきて人を呼べといっているんだから。

「あの！」

「なんでしょう？」

僕と店長の間に滑り込んできたのはさっきの女の子だ。なんだか視線が敵意に満ちてるんだけど、僕の気のせい？

「一夏さんとはどういったご関係で？」

「わたしと一夏の関係、ですか？」

顎に手を当て少し思考する。学園の関係者、クラスメイト、友人……。どれもしっくりこない。この場を乗り切るにはもっとインパクトのある関係がベストなんだけど……。

そうだ！　ビビッと来たよ、これが閃きか！

「実はわたし、一夏さんの――」

「一夏さんの？」

「――恋人です」

たっぷりと間を開けて、そう答える。瞬間、空気が凍り付いたが気にしない。ちゃんとモジモジしながら頬を赤らめることも忘れていない。恥じらいは重要だよね。

「あいつの彼女さんだったのか！」

「ええ。お恥ずかしながらお付き合いさせていただいております、緋神　蛍です。お初にお目にかかりますわ」

ベストの胸ポケットからＩＳ学園の生徒証（蛍ｖｅｒ）を取出して見せた。千冬姉さん、用意周到ですね。

「実は今日、わたしは一夏さんとデートする予定だったんですが、一夏さんがそれを忘れて別の方と遊びに行ったと聞いていてもたってもいられず」

「それでわざわざ迎えに来たってのかい？」

「その通りですわ、店長」

つらつらと僕がここに来た理由をこじつける。やだな、楽しんでないよ。

「あ、ああ、あああ……」

おや？　僕を案内してくれた女の子がわなわなと震えている。どうしたというんだろう？

「い、」

「い？」

「一夏さぁぁぁぁぁぁん！」

バビュン、という擬音語が似合うような猛ダッシュ。僕も彼女の父

親も完全に無視して一夏を呼びながら走り去っていった。

目をぱちくりさせながら待つこと約一分。なんだかぎゃいぎゃいと騒ぎながら食堂に三名の客人が来店。

「俺に彼女なんていないって」

「ほらここにいるじゃないですか、一夏さん！」

帰ってくるなり僕を引っ張り、一夏の前に連れてくる女の子。っと一夏には目の色でばれちゃうかな。笑顔で一夏と向き合う。

「ほお～、かなりかわいい子じゃん。やるじゃねえか、一夏！」

からかいながら一夏の脇を肘で突く男子が一夏の友達の五反田君なんだろう。可愛いとか言わないでくださいね、殴りたくなっちゃうから。

「お兄は黙ってて！　一夏さん、この人と付き合っているんですか!?」

「いや、えっと……」

一夏がじっと穴が開くほど僕の顔を見つめる。そして一言を、

「俺はこの子を知らな、」

「酷いわ、一夏さん！　昨日あんなに激しく（ＩＳの特訓を）したのにそんな冷たい言い方をするなんて！」

「「したぁ！？」」

よよよ、と泣く真似をして一夏の言葉を遮る。五反田兄妹の動揺が一夏の心を揺さ振りをかける。案外僕は役者に向いてるのかもしれない。

「一夏さんがあまりにも不器用だから、わたしが手とり足とり教えて差し上げたのに！」

「手とり！？」

（五反田兄驚く）

「足とり！？」

（五反田妹驚愕）

ちなみに瞬時加速（イグニッション・ブースト）のことを言っています。

いい加減、自由にスピード調整できるようにしてもらわないと。

「でも、不器用なところも素敵なところですよ。ね、一一一夏さん？」

「お前、まさか……！」

スッとゆっくりと笑顔を崩し、赤い目を露出させる。一夏の顔が見る見るうちに青ざめていく。ようやく僕が誰であるのか理解したようだ。

「ごめん、弾、蘭！　ちょっと時間くれ！」

「あん、一夏さんったら」

一夏は大慌てで僕の手を引き、五反田食堂から逃げ出し、小道に飛び込んだ。

「こんな暗がりで何をするんですか？　でもわたし、一夏さんの望むことなら何でも……」

「目を潤ませるな、カイト！」

「あ、恥じらいの無い積極的な女の子がよかった？」

「そう言う問題じゃなくて！」

まあ確かに、これ以上『緋神　蛍』を演じる必要はないよね。

「何でカイトがここにいるんだよ！？　あと、何で女装してるんだ！？」

「……はぁ？　何で、だって？」

コイツ、何で僕がここに来たのかまったく分かってねぇ。完璧に千冬姉さんの伝言を忘れてやがる。

「一夏、自分の胸に手を当ててよ～～～～～く考えてみて。今日、何の日かをね」

「今日が何の日か？　……あ！」

律儀に胸に手を当てて考え始める、すぐに答えに行き着いた。千冬

姉さんに呼び出しくらってたでしょ？

「夏用の制服の購入日か！」

蹴り飛ばしてやろうか。

「違うでしょ！　今日は白式のデータ採取があるんでしょ！？　一昨日に織斑先生に言われなかった！？」

「ああ！　そう言えば！」

頭痛い。どうしてこの男はこうなんだろうね？

「思い出してくれたようで何より。じゃあ僕が来た理由もわかるよね？」

「千冬姉に言われて俺を迎えに来たのか？　女装して」

「憎らしいほどに正解。だから、さっさと学園に帰れや、糞野郎」

これ以上長居すると見も心も蛍になってしまいそうだ。一刻も早く学園に帰りたいんだよ、僕は。

「でも、まだ俺は、」

「未練がましい。帰るぞ、織斑一夏」

言い訳を聞くつもりはない。一夏に背を向け、道に戻る。

「……カイト、もしかして怒ってるのか？」

おそるおそる僕に尋ねる一夏。まったくいまさら何を訊くかと思えばそんなことか。

「せっかくの休みの日にグーパンで叩き起こされて、女装して友達の迎えに行けと言われて、身に覚えのない恨みで殺されかけて、男としての尊厳を爆破（ボンバー）されかけただけだから別に怒ってないよ」

「いや、それを怒ってるっていうんじゃないのか？」

「とにかく僕は伝えたから先に帰るね」

「え？　だって今さっき迎えに行けって言われたって」

「あれ、放っておける？」

親指であるものを指し示す。一夏の目が僕の指の先を辿り、あるものを見つけると、その顔がまたもや青白く変貌する。

五反田食堂の入り口で仁王立ちする五反田（妹）さん。浮かべているのは温和な笑みだけど、僕には分かる。あれが攻撃色であることに。遠目にもめちゃくちゃ怒ってらっしゃることは察せる。

「なぁカイト、俺たち友達だろ？」

「あら、カイトって誰のことかしら？　わたしは緋神　蛍ですよ、一夏さん」

「こういうときだけ女のフリするなよ！？　薄情者！」

「それでは失礼しますわ、一夏さん。蘭さんと仲良く、ね？」

「ま、待ってくれカイト！　置いていかないでくれ、ってなんか物凄い勢いで蘭が走ってきた!?　ま、待ってくれ！　話し合いをしよう、そうすればきっと誤解が解ける！」

一夏、少しは僕の味わった苦しみを味わうといいよ。僕は助けないからね。一夏の声をＢＧＭに僕は五反田食堂を後にした。

●

ＩＳ学園へのアクセスにはとあるモノレールを用いる。ＩＳ学園は日本の領土にあるとはいえ、人工島だから交通手段はある程度限られるしね。

だから、時間帯によってはあまり客がいない時もある。事実、僕の乗っている車両なんて僕以外誰一人乗っていない。

一夏？　知らないよ。今頃は蘭さんにぼっきりと絞られているだろうね。いい気味だ。

海の向こうに沈んでいく夕日をぼぅ、と見つめながら考える。

テーマはやはりあの灰色のＩＳ。

ヴァルキュリア、聖餐杯の二つの言葉しか発さない人形じみたＩＳ。人が乗っていることは明白なんだろうけど、あのＩＳは僕や一夏と

は根幹を成すものが違っていた。もしも僕の根っこが記憶のため、一夏が誰かを守るためだとするなら、あの機体はヴァルキュリアと聖餐杯に対する憤怒だ。

四肢を、五臓六腑を切り刻んでもまだやり足りない。その魂すらも破壊し尽くす底の無い怒りの焔。それは相対した僕が一番感じている。あの時の恐怖を思い出すだけで肌があわ立つ。

あのＩＳを考える上のキーワード、『ヴァルキュリア』、そして『聖餐杯』。一体何のことなんだろう？

「でも……」

あのＩＳの態度からするに、ヴァルキュリアってもしかしたら――。

「少しいいかな」

声をかけられ、我に返る。いけない、思いの外長く思考の海に潜っていたようだ。

顔を上げた僕は驚いて息を呑んだ。

今日最大の驚きに呼吸が疎かになる。なんで、どうして、と疑問が沸き上がってくる。

だって、そうでしょ？

一一目の前には、男子が立っていたんだから。

ここはＩＳ学園に向かうモノレールの中だよ？　男子がいるなんて、ありえないじゃないか。一夏と僕がイレギュラーじゃなかったのか？

「相席してもいいかな？」

「……（こくこく）」

「ありがとう」

呆然とする僕の前の席にその少年は座った。洗礼された彼の動きに合わせて揺れる、黄昏の光を受けて輝くのはセシリアさんよりも濃い金色の髪。あまりにも綺麗で、僕の目は釘付けになった。

『貴公子』。嫌味ではなく、彼の印象はその言葉の意味を体現しているようにも見えた。

「これってＩＳ学園に向かうモノレールだよね？」

「え？　ええ。そうですよ」

「よかった。人がいなくて少し心配だったんだ」

眩しくて、それでいて人懐っこそうな笑顔。どうやったらあんな笑顔が浮かべられるんだろうか？

「君はもしかして学園の生徒？」

「はい。その制服からすると貴方も？」

「うん。といっても、明日からなんだけどね」

「明日から？　それってつまり転入生ってことですか？」

彼は首を縦に振る。鈴に続いて二人目の転入生、しかも男子と来た。いくら何でもスパンが短くないかな？

作為的なものを感じるのは、きっと僕が考えすぎているからだろう。

「あ、そうだ。訊きたいことがあるんだけどいいかな？」

「なんでしょう？」

「学園に僕と同じ男の子でＩＳを操縦できる人がいるって噂を聞いたんだけど、知らないかな？」

「はい、知ってますよ。織斑一夏さんですよね？」

いくら同じ男子といえども、さすがに僕のことを話すのは危険だ。千冬姉さんにも堅く口止めされているし。だから僕は彼に事実の半分を教えた。そもそも世間で認知されているのは一夏だけなわけだからね。

「そっちもそうなんだけど、僕が知りたいのは彼じゃないんだ。知らないかな、もう一人の男の子のこと」

「――――――」

一瞬、彼の言葉が理解できなかった。心臓が警告音を乱れ鳴らし、僕にこれでもか危険を知らせてくる。じっとりと不安を煽る嫌な汗が手のひらに滲み、最悪の予想を確信として具現化させる。

一夏じゃない『もう一人の男子』。考えるまでもない。それが指すのはつまり――。

「表向きには箝口令が敷かれたもう一人の男性ＩＳパイロット。彼の名前は――」

――緋神カイト。

第十三話　～六月の花嫁～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

シャルがキター！　ようやくご登板のシャルロットさん。今回は出番がチョロっとでしたが、次回からは増えると思います。

蛍ちゃんは……出番あるのかなぁ？　なんだかノリで出しちゃったし、また日の目を見れるようにしなくちゃ。

では、またの機会に。

第十四話　～幕開け～（前書き）

第十四話です。

シャルル・デュノア降臨！

駄文ですが、お楽しみくださいませ。

第十四話　～幕開け～

「やっぱりハヅキ社のがいいなぁ」

「え？　そう？　ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的にミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

「……はぁ」

月曜の朝。今日からＩＳスーツの申し込みが始まるらしく、クラス中のみんながわいわいと談笑する傍ら、僕は重苦しい息を吐いた。気だるい月曜日、まさしくブルーマンデーと言う奴だ。

僕はこれから起こる事態に頭を悩ませていた。悩みは言わずもがな。あの転入生のことだ。

僕の情報は千冬姉さんの尽力で隠し通せているはずだ。実際、学園の『外』ではＩＳを操れる男子は一夏だけであると報道されていた。図書室に置かれている各国の新聞にも僕の写真すら載っていなかったのがいい証拠だ。ちなみに彼に関する情報もなかった。

でも、あの子は僕のことを知っているような素振りだった。千冬姉さんがいるのに校内から僕の情報が漏れたとは考えにくいし、考えたくない。

だとしたら、一体どこから僕の存在が漏洩したんだ？　まさか、クラス対抗戦に乱入してきたあのＩＳか？　いや、それこそ考えにくいことだ。あのパイロットが正常な精神を保っているとは思えない。破壊し、蹂躙し、生者を犯し尽くすために用意された機体だったんだ。だから僕の情報を流すなんてありえないことだってわかる（・・・）んだ。

「……ダメだ」

考えるのを止め、机に倒れこんだ。考えれば考えるほどロジックが曖昧になってどんどん泥沼化していく。考えることはあんまり得意じゃないのに。

「なにが駄目なんですの？」

「考え事を色々とね。おはよう、セシリアさん」

「おはようございます、カイトさん」

スカートの裾を摘んで一礼を返してくれるセシリアさん。朝日に揺れる薄い金色の髪を見ると、否応なしに昨日電車で出会ったあの子を思い出してしまう。

昨日はあの子に僕の名前を出されてからの記憶がぼんやりと霞みかかっていて、よく思えていない。顔には出していなかったけど、僕はかなり動転していたんだろう。だから、彼の話をきっちりかっちり聞いていなかったんだと思う。

「カイトさん、いかがしまして？　わたくしの顔をじっと見つめて。

もしかして、何か付いています？」

セシリアさんが僕の視線から逃げるように身を捩った。いけない、ついつい考え事に没頭しちゃった。女の子の顔を見ながら考え事するなんてマナーが悪いかな。

「セシリアさんは今日も綺麗だから、大丈夫だよ」

「綺麗……！　……と、当然ですわね！　わたくしが美しいのは神が作りし至高の創造物だからですわ！」

今日のセシリアさんはずいぶんとご機嫌だなぁ。少し顔が赤いのは気になるけど、饒舌なところを見るかぎり大丈夫だね。元気があって、良きかな良きかな。

「と、ところで、皆さんは何の話題で盛り上がっていらっしゃるんでしょう？」

「今日からＩＳスーツの申し込みが始まるから、みんなはその相談をしてるんだよ」

咳払いをしたセシリアさんに簡単に説明する。まあ、専用機持ちにはそれに誂えた特別なＩＳスーツがあるから、わざわざ注文しなくても平気なようになっているから、あまり関係はない。

「ふと思い出したのですけど、カイトさんのＩＳスーツはどこのメーカー製なんですの？」

う～ん、と唸りながら記憶をさかのぼる。僕のスーツはこの学園に流れ着いたとき身に纏っていたらしいから、千冬姉さんが僕の経歴

を調べるときに手がかりにしてたっけ。その時にメーカーを教えてもらったけど、あれは……そうだ、

「確かサイクロン社製だって織斑先生が言ってたよ」

「サイクロン社？　どうしてそのメーカーのものを？」

セシリアさんが眉をひそめてさらに質問してきた。どうしたんだろう？　レイヴァー・デイもそこで作られたらしいんだけど、サイクロン社って僕はよく知らないんだよね。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

「それではカイトさん、また後程」

「う、うん」

鬼、違った、悪魔、じゃなくて、織斑先生の登場により、クラスの喧騒が静まり返る。なんだか、重要な情報を聞きそびれちゃった気がする。願わくば、もう少し遅く来ることはできませんでしたか？

ロボットのように精確なのもちょっと困りもんだ。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるが、ＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学園指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学園指定の水着で訓練を受けてもらうからそのつもりで。それすら忘れるような愚か者には下着で授業に参加してもらうが、まあ問題はないだろう」

いや、大アリだよ！　このクラスには健全な男子生徒が二人もいるんですよ！？　そんなことになった暁にはお嫁にいけなくなること間違い無し。

いや、そんな突っ込みをしてる場合じゃない。このむず痒い雰囲気を何とかしてください。僕と一夏から隠すように胸を隠したりするもんだから、この教室ではいかに男子らがどう見られているかがモロバレだ。かゆい、背中がかゆい。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はい！」

場を引っ掻くだけ引っ掻き回した織斑先生が山田先生にバトンタッチ。わたわたと子犬のような動きで眼鏡を掛けた山田先生とふと目が合う。

……ポッ

いやいや、山田先生！　何でそこで顔を赤くするんですか！？　別に僕は先生方をそんな目で見てませんし、そんな展開は期待してませんからね！？　やめてくださいよ、あらぬ誤解を生んでしまうじゃ――。

『カイトさん？　山田先生のどこを見ていたんですの？』

聞こえない、聞こえないよ。プライベートチャネルから聞こえてくる敵意たっぷりの声なんて。だから、チャネルを切っても問題ないのだ。

「えとえと、ホームルームを始める前に今日は転校生を紹介します！」

「「えええええっ！？」」

上ずった声で高らかに告知した山田先生に続いて、教室が喧騒に包まれた。落ち着いているのは、きっとその正体を知っている僕くらいだろう。

騒めくクラスメイト達を余所に、教室のドアがスライドすると、その影に隠れていた人影が顕になる。その一瞬は教室の熱気を奪うのに十分なものだった。

やっぱりか。僕は誰にも聞こえないくらい小さくため息を吐いた。気品を感じさせる優雅な歩きで教卓の横まで移動した彼はくるりと向き直り、僕らを直視した。あの、見慣れた金色の髪を揺らして。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

彼、シャルル・デュノアはにこやかな笑みを浮かべ一礼する。その姿に貴公子の印象を抱かない者はいないだろう。

「お、男……？」

後ろ側の席の誰かがそう呟いたのを聞き取ったのか、はい、と彼は答えた。

「こちらに僕と同じ境遇の方が二人もいると聞いて本国より転入を

一一」

言葉を聞いて確信した。彼は、シャルル・デュノアは僕を知っている。さっき彼は『二人も』と、断定した言い方をしていた。どう鑑みても、緋神カイトの情報を知っているとしか思えない発言だ。

やはり、千冬姉さんに一度聞いておくべきだろう。

そう決心した瞬間だった。

「きゃあああああああーーっ！」

天地万物を切り裂く黄色い悲鳴がソニックブームとともに飛来する。ま、まあ、喜びたくなる気持ちは分からなくもないけど、今はＨＲ中なわけだから、静かにしたほうがいいと思うんだけど……無理だね、うん。

「男子！　三人目の！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「……！（ボタボタボタボタ）」

騒ぎはさらに加速する。このまま放置しておけば、彼を纏りたてて宴会でも開いてしまいそうな勢いだ。

あと、最後の君。妄想が先走りすぎて、お鼻から垂れ流れてますよ。ティッシュ貸しますか？

「静かにしろ！」

「「……」」

織斑先生の魂まで響く恫喝を受け、教室に静寂が戻ってくる。こういうのを鶴の一声っていうんだろうね。

「緋神、デュノアの面倒を見てやるように」

「……どうしても、ですか？」

「なんだ、不服なのか？」

「いや、不服ではありませんが……」

不服、と言うよりも不安だ。昨日の件もあるから、対策が出来るまでは彼とは積極的な関わりは避けたいんだけど。

ちらりと彼を横目で見ると、毒気のない笑顔を向けてきた。敵意は感じないし、僕としても出来るなら仲良くしたい。

「わかりました。デュノア君の面倒を見させていただきます」

「よろしい」

クラス代表の立場にいる上で、何となくこんな流れになることはわかっていたけれど、これもクラス代表の仕事だからしょうがない、って割り切っちゃうか。

向こうが僕を知っているのを何かの縁と思って仲良くしよう！　うん、そうしよう。そうこじつけでもしないと不安だし。

「さて、各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

織斑先生が手を二度ほど叩いて行動を促すのに合わせて、みんなが着替えの入ったバックを取り出す。女子は基本的に教室で着替えるんだ。

「カイト、デュノアを連れて急ごうぜ。今日は確か第二アリーナ更衣室が開いてるはずだ」

「お、ラッキーだね」

一夏に答え、席から立ち上がる。男子はＩＳの実習のたび開いている更衣室を探して使わなくちゃいけない。だから、ときどき集合場所と更衣室がやたら離れている時があり、そうなったら高確率で遅刻確定。その点、今日はその二つが同じ場所と言うことで遅刻はないと言い切れる。

ＩＳスーツの入った着替え袋を持ったところで織斑先生に声をかけられた。ただし、僕じゃなくて一夏に。

「おい、織斑。おまえはまず職員室に来い。昨日の遅刻分の課題を渡す」

「放課後、と言うわけには？」

「生憎、今日の放課後は野暮用があってな。話す暇があるなら早く

来い」

「わかった。カイト、悪いな。ちょっと行ってくる」

手を合わせて謝罪した一夏は織斑先生の後ろをおとなしく付いていく。ちゃんと非があることを認めているところが一夏らしい。

さて、問題は。

「君が緋神君？　初めまして、僕は――」

自己紹介、と洒落こみたいのは山々だけど、そろそろ移動しないと女子の視線がキツい。

「ちょっとごめん。まず移動をしなくちゃ。女の子と一緒に着替えるわけにはいかないからね」

言葉を遮り、彼の手を取って急いで移動する。そう、急いで。

「僕らは基本、開いてる更衣室で着替えるから覚えてね」

「う、うん……」

どうしたんだろう？　もじもじして、どこかよそよそしい。

「先にお手洗いに行く？」

「だ、大丈夫！　気にしないで！」

「？？　そう？」

話しながらも速度を緩めない。モタモタしてると、

「ああっ！　転校生発見！」

「しかも緋神君と一緒！」

「……あっちゃ～」

階段の影から女の子が飛び出してきた。せめてモノローグで説明してから見つけてほしいものだ。

転校生、しかも男子と来たら好奇心をくすぐられるというもの。なればこそ、学年クラス問わず情報を仕入れに来るはすだ。彼女らはその先見隊と言った体か。

「いたっ！　こっちよ！」

「者ども出会え出会え！」

ＩＳ学園はメダルの力でひっくり返って江戸時代まで戻ってきたんですか？　ホラ貝鳴ってるし。誰だ、欲望を解放したのは？

ってそんなくだらないこと考えている場合じゃない！　せっかく一階まで降りてこられたのに、囲まれるなんて！

「緋神君の黒髪もいいけど、金髪っていうのも捨てがたいわ！」

「しかも二人の目って宝石みたいじゃない？　緋神君がルビーで、デュノア君がアメジスト！」

「きゃああっ！　見て見て！　二人！　手！　手を繋いでる！」

「緋デュノ、デュノ緋、夏デュノ、デュノ夏……そそるわ！」

いやな寒気が！　背中に走った悪寒の原因を探る前にこの状況を何とかしないと！

頭のなかで目的地までの道筋を描く。だめだ、どう考えてもこのままじゃ授業に間に合わない！　そもそもこんな数の女の子を蹴散らすとなると時間と手間が掛かってしまう。

他にルートはないのか！？　小窓とか、鏡に似せたドアとか、そう言った類の秘密の抜け道みたいな！

……窓？　ああ、そう言う手があるか。正攻法じゃないけど、これなら確実に間に合う。

「つかぬことを聞くけど、デュノア君」

「何？」

「君は織斑先生の説教を受けたいかい？　僕は絶対に嫌だ」

「う、ううん……。僕も初日から怒られるのはちょっと……」

「なら一一決まりだね」

え？と聞き返したデュノア君を引き寄せ、お姫さま抱っこの姿勢を取る。おお、心配なくらい軽い。

「「きゃあああああああっ！」」

「あ、緋神君！？」

「文句ならあとで聞くから！」

色めきたつ女の子の目の前ですぐ脇の教室に飛び込む。授業の準備をしていた上級生らがどよめくけど、それを無視して目標確認！よし、ターゲットまでの障害物もない！　脇目も振らず、猛然と駆け出す。

「しっかり掴まっててね！」

「え？　ええっ！」

僕の考えがわかったのか、しっかりと制服を掴んだデュノア君。そんなに恐がらなくても大丈夫さ、必ず成功するからね！

「でりゃあ！」

ダンッ！

いい感じに距離が詰まったところで跳躍し、窓枠を飛び越え、そのまま校舎の外へと飛び出した。ナイス着地、十点は堅いね。

「追っ手が来る前に急ごう。時間もないし」

「う、うん……」

「……顔赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ！？」

真っ赤になったデュノア君を降ろし、手を引いて第二アリーナに駆け込む。アリーナが目と鼻の先にあったのが幸いしたね、更衣室に到着してもまだ五分ある。

「やっぱり僕ら男子は人気者だね。特別なケースっていうのも嬉しいものじゃないよね」

「特別なケース……？　あ、ああ、うん、そうだね。あんなこと、これっきりにしてほしいよね。楽しかったけどね」

「それは言えてる」

窓から飛び出すなんて普通に生活してたらまずありえないことだし、これっきりにしてもらいたい気持ちは分かる。楽しかったのも、頷けるけどね。

「あ、そうだ自己紹介してないね。僕は――」

「緋神カイト君、だよね？　知ってるよ、キミのことは」

知ってる？　何をだ？　疑問に首を傾げる僕に彼はこう続ける。柔和な笑みを崩さずにこやかなままで、彼は残虐な言の響きを持って刃とした。振り上げられた刃は倫理を切り裂き、明確な因果を作り出した。

それはすなわち――白か、黒か。

「キミは僕の、『敵』だからね」

デュノア君の言葉は一字一句正確に僕の耳朶を打った。だから、それが僕の幻聴であることはあり得ない。殺意にも勝る敵意が彼の視線には籠もっており、それを余計に際立たせる。彼は、シャルル・デュノアは僕を敵とみなしていると。

僕がデュノア君の敵って、一体どう言うことなんだ？

第十四話　～幕開け～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

あれっ？　何で敵対フラグがビンビンなの？　僕の予定が崩壊を始めている……。大丈夫か、この話？

次回は初ＩＳを使った実習の話になる予定です。

それでは、またの機会に。

第十五話　～訓練開始～（前書き）

第十五和です。

残念ながら黒ウサギ部隊の方の登場まで持っていくことができませんでした。後一、二話は必要かなぁ……。

駄文ですが、お楽しみくださいませ。

第十五話　～訓練開始～

「僕が君の敵……？　それって、どういう意味なのさ？」

突飛なことを突き付けられ、デュノア君の言葉を復唱してしまう。

ニコニコ笑顔のままデュノア君は続ける。

「言葉どおりだよ。緋神君は僕の探してた敵、ただそれだけのことさ」

「だからどうして僕なんだよ！？」

「分からないならいいよ。でも、僕はキミを逃がすつもりなんてないから。絶対に」

「逃げるもなにも……！」

事情が飲み込めないまま、話だけが先行する。

いきなり敵だなんて言われても、はい、そうですか、で理解できるほど僕の頭は単純じゃない。

「僕の話は終わり。早く着替えないと遅刻しちゃうよ、緋神君？」

声を荒げる僕を余所に、実に冷めた態度で制服を脱ぎ始めるデュノア君。

「待ってよ！　僕の話はまだ――」

パシンッ！

「触らないで」

肩を掴んだ手を乱暴に振り払われる。

彼の顔は整っているが故に、愛想がごっそり抜け落ちると感情ない鉄面皮へと早変わりする。

藍紫の瞳から覗かせた嫌悪、いや憎悪が僕を震え上がらせる。人の目はこんなにも力を持つものなのか？

「あっぶねぇー！　間に合ったー！」

睨み合いをしていた僕らの間に割り込んでくるように一夏が更衣室に乱入してきた。

「ん？　どうした、二人とも？」

「なんでもないよ。ね、緋神君？」

「え、あ、うん……」

「そうか？　なら深くは突っ込まんが」

瞬時に猫を被ったデュノア君に話を振られ、一夏に曖昧な返事をする。

「とりあえず僕は先に行くね」

「おう」

制服を畳んで、ロッカーにしまったデュノア君が僕の横をすれ違いざまに吐き捨てるようにつぶやいた。

「不本意だけど、みんなの前では仲良くしてあげるよ。緋神君」

「待っ――」

呼び止めようと伸ばした手のひらは虚しく空を切った。

敵、たったその一言が頭のなかでぐるぐると渦巻いていた。

●

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習なので、グラウンドに並んでいる人数はいつもの倍いるだけあって、返事も妙に気合いが入っている。腑抜けているのは、考え事をしている僕だけか。

ちらりと横を見ると、デュノア君が真っすぐ前を見ている。僕なんか眼中にないって感じに。

（ええい！　考えるのは後にしろ、緋神カイト！）

脳内で自分を叱咤する。そうだ、今は授業中。集中しなくちゃ。

「今日はまずは戦闘を実践してもらおう。凰、オルコット！」

「「はい！」」

「専用機持ちならすぐに始められるな、前に出ろ」

安堵した息を吐く。よかった、選ばれなくて。

「面倒臭いわねぇ～」

「こういったのは見せ物のようで嫌なんですが……」

片や呆れたように、片や嘆息混じりに文句を言いながら言われるがまま前に歩いていく鈴とセシリアさん。

「おまえら、少しはやる気を出したらどうだ？」

「ですが……」

「なら、こう考えろ。一一ここでいいところを見せれば、アイツらが食い付いてくるかもしれない、と」

「「！！！」」

なんだ？　鈴とセシリアさんの瞳が異様な光を放ち出したぞ？

「カイト、さっきの千冬姉の言葉聞こえたか？」

「ううん、聞こえなかったよ」

でも、とてつもなく碌でもないことなんだろうなって思うよ？

現に、

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの！」

あのふたりがあんなにあっさりやる気になるなんて明らかに織斑先生が変なことを教えたに違いない。

「それで、相手はどちらに？　わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は――」

キィィィン……

何だか聞き慣れた音が聞こえてきた。これは、そう例えるなら、ＩＳの落下音。

「あああああーっ！　ど、どいてください～！」

「カイト！　上、うえ！」

上？　って嘘！

ドガーン！

一夏に指摘されるも時すでに遅し。深緑色の隕石に激突し、そのまま縺れるように地面を転がる。

「た、助かったよ、レイヴァー・デイ……」

展開速度の自己ベスト樹立だね。しかし、一体何が落っこちて、

むにゅん

「むにゅん？」

あれ、グラウンドってこんなに柔らかかったっけ？　感触はゴム鞠みたいなんだけど。

「あ、あのう、緋神くん……ひゃんっ！」

「……」

絶句。頭が真っ白になる。ありえないと可能性を否定しながら視線を落とす。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ！　場所だけじゃなくてですね！　私と緋神くんは仮にも教師と生徒の関係でですね！　……ああ、でも教師と生徒の禁じられた関係というのもすごく魅力的でですね……。ああ、緋神くんだめですよそんな

激しくなんて……！」

成る程、つまり僕は落下してきた山田先生と縺れ合った結果、先生のおっぱいを掴んでしまったわけで。

ごくり、と生唾を飲み込んだ。ＩＳスーツって体に張りつくように展開されるから、装備者のボディーラインを現してしまう。

山田先生、なんと言いますか……お見それしました。

大きさとか形とか揉み心地とか、文句なしの百点満点で、理想的すぎやしませんか？　もう美乳とか巨乳とか、そんなちゃちな言葉で表せるじゃない。

これは、魔乳だ。触ったものをすべからく魅了する悪魔のおっぱいで――はっ！

「――殺気っ！？」

キュインッ！

突き刺すような殺気に当てられ、その場から飛び退いた。刹那、蒼白のレーザー光が胴体を掠める。

「ホホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ」

怖ぇ！　セシリアさん、どうしてそんなに怒っているんですか！？

「ち、ちちち乳、違う！　違うんだ、セシリアさん！　これは不可抗力で、」

「カイトくん、そんなに恥ずかしがらなくても、先生はカイトくんの全部を受けとめてあげますからね……！」

「……（イラッ）」

ひぃぃぃ！　笑顔の影が、影がより深くなって度し難い恐怖が！

「カイト、頑張れよ～」

一夏の奴、自分に害がないからって薄情な態度をとるなんて！

いいさ、そっちがその気なら、こっちにも相応のやり方がある！

「一夏、一つ質問！　巨乳と貧乳、どっちが好み！？」

「え、そりゃあ当然巨乳だろ。昔から大はを小を兼ねるって言うしな」

さも当たり前のように答える一夏。まんまと引っ掛かったね。

ガシーン！

「……あれ？」

一夏の背後にたたずんでいた鈴がおもむろに青龍刀、《双天牙月》を連結させた。そしてためらいなく、薙払った。

ザンッ！

「うおお！？」

一夏は大きく体を反らせて、鈴の斬撃を回避した。生身なのにやるね、一夏。

「さあ一夏！　これで僕らは一蓮托生、運命共同体だ！　力を合わせてこのピンチを乗り切ろうよっ！」

「カイト、おまえ謀ったな！？」

知らないね、巨乳が好きだと公言した自分が悪いんじゃないのかなっ？

「一夏ぁぁぁぁぁっ！」

「カイトさぁぁぁぁんっ！」

甲龍の手から連結した青龍刀が投てきされ、背後ではガシャン、と銃火器を構える音がする。

あ、やば。死んだかも。

「はっ！」

ドンッ！ドンッ！

短く二回破裂音が響き渡る。ロングバレルから射出された二発の弾丸は吸い込まれるように《双天牙月》の刃に当たり、軌道を変更させる。

しかも、それだけでは終わらない。

キュイン！

逸らされた刃に《スターライトｍｋ？》から伸びた蒼い光が直撃し、それすらも防いでしまう。

キンッキンッと空薬筴を排出したアメリカのクラウス社製実弾銃器（レッドバレッド）をマウントしているのは、驚くべきことに山田先生だ。

セシリアさんと鈴の攻撃を相殺させた手際も見事ながら、さらに特筆すべきはその姿勢だ。

上体を起こしただけの簡易なフォームながらも、あんな精確射撃を行った。

「……」

この人が本当にさっきまで妄想に耽っていたあの山田真耶先生なんだろうか？　僕どころか一夏やセシリアさんに鈴、騒ぎを傍観していた他の生徒まで呆気にとられていた。

「怪我はありませんか、織斑くん、カイトくん、いえ……あなた」

前言撤回。間違いなく同一人物だ。

あの、山田先生、あなたの妄想のなかで僕は一体どこまでやっちゃったんですか？　あなたって……。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は

造作もない」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……」

肩部ラッチにライフルを預けた山田先生がわたわたと真っ赤になって否定する。

先生の力量から、当時の代表候補生のレベルの高さが窺えた。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさとはじめるぞ」

「え？　二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「そう遠慮するな。今のお前たちなら二分も持たずに負ける」

自分らを侮っているとしか思えない発言にプライドを傷つけられたか、二人の目に並々ならぬ闘志の炎が宿る。

「では、はじめ！」

号令とほぼ同時にセシリアさんと鈴が天を走る。それを確認した山田先生が空中へと飛び立った。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは全然マジじゃなかったしね！」

「か、カイトくんのためにも負けませんから！」

あの～、そろそろ下の名前で呼ぶのを止めていただけないでしょうか？　何だか気恥ずかしいんだけど……。

「さて、今のうちに……そうだな、ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

「あっ、はい」

三色の流星が激突する様を横目にデュノア君が解説を始めた。

しかし、ちょうどいいって？

「山田先生のしようされているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です」

２０秒経過。鈴の繰り出した衝撃砲を容易く躱し、山田先生がライフルを連射する。

「第二世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは黎明期の第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です」

さらに３０秒。セシリアさんのオールレンジ攻撃を肩に装備したフレキシブルシールドで受け流しながら、武器を素早く交換する。

「現在配備されている量産型ＩＳの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七ヶ国でライセンス生産、十二ヶ国で正式採用されています」

残り５０秒。牽制として射ちだされたパンツァーファウストが鈴の視界を塞ぐように爆発する。途端、避けた方向にいたセシリアさんと衝突し、コントロールが一瞬だけ彼女等の手を離れる。

あ、決まったかな。

「特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多いことでも知られています」

デュノア君の説明が終わるのに合わせるかのように、山田先生がグレネードを打ち込んだ。

ドーンッ！

爆炎が二人を包み、くるくると回転しながら折り重なって地面に激突した。

試合終了。タイムは宣告どおり一分半で、二分かかっていない。やっぱり山田先生強ぇ～。

つか、穴が二つも開いて大丈夫なのかな、この学園？　また僕らが埋めるなんてことはないよね？

「くっ、うう……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねぇ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！　無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！　何ですぐにビットを出すのよ！　しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎぎぎぎっ……！」

どうでもいいけど、喧嘩は止めたほうがいいと僕は思うな。なんというか、専用機持ちの格式が疑われる。

「さて、これで諸君にも教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

子供の喧嘩だと唖み合うセシリアさんと鈴を一瞥した織斑先生は、手をたたいて注目させる。

「これから八人グループになって実習を行う。各グループは織斑、オルコット、デュノア、凰、それと緋神の各専用機持ちがリーダーを勤めること。いいな？　では、分かれろ」

織斑先生が言い終わるや否や、男子三人の元に二クラス分の女子が詰め寄ってくる。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「緋神君、ＩＳのこと手取り足取り教えて～」

「デュノア君の操縦技術を見たいなぁ」

「ね、ね、私もいいよね？　同じグループに入れて！」

……うん、まあ、こうなることはなんとなく予想はしてた。

圧倒的な数の女の子に囲まれ、茫然としている僕達を見兼ねてか織斑先生がため息混じりに助け船を出してくれた。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！　順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」

（千冬姉さん、それは体罰ではなく、拷問です）

心の中で突っ込みを入れたときにはすでに僕ら専用機持ちの前にグループができていた。

「……やったぁ。織斑君と同じ班っ。名字のおかげねっ……」

「……うー、セシリアかぁ……。さっきボロ負けしてたし。はぁ……」

「……緋神君、わたし頑張るからっ。後でいっぱいおしゃべりしようね……！」

「……凰さん、よろしくね。あとで織斑君と緋神君のお話聞かせてよっ……」

「……デュノア君！　わからないことがあったら何でも聞いてね！

ちなみに私はフリーだよ！……」

担当する人物でこんなにもモチベーションが上下するものなのか、ひそひそ話の内容が酷すぎる。特にセシリアさんのが。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生が四倍（当社比）輝いていらっしゃる。さっきの模擬戦で自信を取り戻したのがそうさせるのか。

まあ、さて。メンバーで多数決を取って、リヴァイヴを運んできたし、さっそく授業開始だ。

「それじゃあ、出席番号順にＩＳの起動と歩行を実践してみましょうか。一番目は誰ですか？」

「わたしわたし～」

ひらひらとゆっくりと手を振ったのは、えっと……のほほんさん、じゃなくて、

「布仏さん？」

「ぴんぽ～ん、私の名前は布仏本音だよ～、あけりん。のほとけなのに、とっぷぼったーなのだ～」

危ないところだった……。名前まで覚えてなかったよ。

……あけりん？

「ちなみに、生徒会役員に入ってて、好物はケーキとお茶ずけ～。よろしくね～、あけりん～」

「ああ、うん。こちらこそ、布仏さん」

礼儀には礼儀を返さないと。頭を下げ、差し出された手を握ろうと、手を伸ばそうとした瞬間だった。

「ああつ、ずるい！」

「私だって！」

「「「お友達から始めましょうっ！」」」

にょきにょき、と別の方向からも手が伸びてきた。え？　どして？

「「「第一印象から決めてました！」」」

「「「お願いしますっ！」」」

と、背後で同じような声が聞こえてきた。振り向いた先にはまったく同じ状況に陥った一夏とデュノア君の姿があった。

（苦労しそうだなぁ、二人とも……）

スパーン！

苦笑した僕の前で惨劇が繰り広げられた。一直線に並ぶ彼女等の頭

を黒い鉄槌が叩き潰していく。

織斑先生、ご降臨。

「やる気があって結構なことだ。どれ、私が数名見てやろう」

「いえ、結構です！」

「先生の手を患わせるには……」

「なに、遠慮するな。相応のレベルを求めるならば、私がみっちりしごいてやろう。緋神、いいな？」

「……はい」

「では数名貰っていくぞ」

「緋神くーん！」

ごめんなさい、皆さん。でも僕には無理だ。あの笑顔が怖くてたまらない。

「あけりん、あけりん」

手を合わせて合掌する僕の肩をちょんちょんとつつくのは、咄嗟に僕の影に隠れて連行を免れたのほほんさんだ。

「あ、ごめん。何かわからないところあった？」

「そうじゃないよ～。これをあけりんに、ぷれぜんとふぉ～ゆ～」

そう言って手渡されたのは、ＵＳＢメモリ。いまどきこんな化石じみた記録媒体なんてお目にかかれないぞ。

「これは？」

「んとね、かいちょーからあけりんに渡してって頼まれたの～」

「会長？」

僕の知り合いに会長なんて人はいないし、知らない。

素晴らしいッ！　あ、これは違う会長か。

「布仏さん、会長って？」

「生徒会長だよ～」

「……は？」

生徒会長ってまさか、あの？

「せいとかいちょー。この学園で先生の次に偉い人のこと～」

「いや、そういう意味で聞いたわけじゃ、」

「学園さいきょ～で完全無欠、容姿端麗、文武両道～」

「いや、だから、」

「人呼んで狂気のベルセルク～」

「それ、頭痛が痛いと同じくらい重複表現だよ……」

「それだけ強調したいってことなのだ～！」

あと、物凄く痛い表現だけどこの際そこには触れない。

重要なのは、どうして生徒会長とやらが僕にこれを渡したのか、その一点。

「何でもね、後で絶対に必要になるからだ～、って」

「必要になる、ね。……ありがとう、布仏さん」

「どういたしまして～」

胡散臭さはあるけれど圧迫するような責務に追い立てられ、僕はそれを粒子変換して、レイヴァー・デイに一時的に収納しておく。

お昼休みにでも中身を確認しておこうかな。

「それじゃあ、授業に戻ろうか。早く済ませないとお昼食べられないかもだしね」

「おっけー、私頑張るからね～」

「期待してるよ、布仏さん」

天に向けて拳を振り上げたのほほんさんのゆっくりとした動作に苦

笑した僕だった。

そんな僕らの様子を冷ややかな視線で見つめていたデュノア君に、この時は気が付かなかった。

第十五話　～訓練開始～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

いかん、予定が音を立てて崩れていく……。破壊的すぎるよ、綿密な予定を立てなければいけないかな。

では、またの機会に。

第十六話　～プログラム～（前書き）

第十六話です。

カイトが受け取ったＵＳＢに入っていたモノとは……！

駄文ですが、お楽しみくださいませ。

第十六話　～プログラム～

昼休み、千冬姉さんに事情と無理を言った僕は山田先生と共に第六アリーナのピットに来ていた。

ちなみに、山田先生は僕のお目付け役だそうだ。

「カイトくん、布仏さんに貰ったＵＳＢを」

「これです」

コンピューターの前に座った山田先生にのほほんさんから渡されたＵＳＢを手渡すと、先生はそれをスロットに差し込む。

「そう言えば、生徒会長ってどんな人なんですか？」

「え？　カイトくん、もしかして会ったことないんですか？」

「そのもしかして、ですよ」

実は結構気になっていたりする。入学式には僕は出ていなかったわけだし、今の今まで見たことすらない。

そんな人が同じく面識のない僕に手を回すなんて考えられない。

「生徒会長、更識楯無さんは学園始まっての才女と誉れ高い生徒で、同時に学園最強のＩＳ操縦者ですよ」

「学園最強、ですか……」

だからのほほんさんが会長を狂気のベルセルクなどと呼称したのか。危うくただのイタい人かと勘違いするところだった。

そんな人からプレゼントを貰うなんて、理由がいよいよもってわからなくなった。一度生徒会室に押し掛ける必要がありそうだ。

瞬間、ピコンと薄暗いピットに電子音が響き渡った。

「はい、アクセスできましたよ」

「お手数をおかけします、山田先生」

「い、いいえ！　これも教師の務めと言いますか、何ていうんでしょうか、カイトくんの為って言いますか……。あ、別に深い意味はないですよ！？　あくまで教師と生徒の間柄なだけであって、」

今朝から暴走気味の山田先生を余所に、僕はパソコンの前に陣取った。

山田先生の手によって開かれたＵＳＢにはプログラムファイルが一つだけ入っていた。

「……読めない」

タイトルはドイツ語なのか、まったくもって理解できない。身近なところでドイツ語を読める人がいればいいんだけど……。

（開けたらウィルス、なんてことはないよね？）

タイトルを読むことを諦めた僕は、ファイルをクリックした。

すると別ウィンドウが開かれ、妙なものが表示された。

「円、ですね……」

黒いスクリーンをバックに表示されたのは、山田先生の言うとおり、円。正確には規則的に並んでいる十三の球を媒体（スフィア）に、それらが互いに手を伸ばして、不恰好ながらも円を描いているだけのこと。

さらに、それぞれの球体から小枝のように小さなレールが助長し、周囲を取り巻く小さな玉に繋がり、数多の球体が展開されている様はさながら夜空の星々を見ているかのように錯覚させる。

だが、そのすべてが輝きを封じられているように黒ずみ、光が灯っていない。

（あれ……？）

瞬間、僕は妙な感覚に襲われた。言葉にするなら、既知感（デジャヴ）。そうだ、僕はこれをどこかで見たことがある。これを使ったこともある。

だからこそ理解できる。この盤面は、

「担い手がいないからまだ目覚めていないだけ、か」

「カイトくん？」

感覚に導かれるように、首に下げていたレイヴァー・デイの端子を引っ張ってパソコンにつなぐ。

すると、どうだろう。円を描く球体のうち、二（ツヴァイ）と六（ゼクス）に輝きが灯り、その光が小枝を伝って二（ツヴァイ）は四つ、六（ゼクス）は五つの小玉を点灯させた。

プロテクトが解除されたことを告げる単語の羅列をアンダーバーに押し込むと、ポインタをスライドさせて、六番目の光点を叩く。

瞬時に画面が切り替わり、画面に文字が浮かび上がる。

「Ｗｅｒ　ｅｓ　ｓｏ　ｓｃｈｍａｈｌｉｃｈ，ｉｈｍ　ｉｎｎｉｇ　ｖｅｒｔｒａｕｔ-ｔｒｏｔｚｔ，ｉｃｈ　ｄｅｉｎｅｍ　Ｇａｂｏｔ．」

「ドイツ語、ですね……」

初めてＩ（イオタ）を起動したときと同じく、頭の奥底で何かが蠢き、頭蓋を突き破ってこの言葉の意味を僕に教えてくる。

「私が犯した罪は、心からの信頼においてあなたの命に反したこと」

「え！　カイトくん、これが読めるんですか？」

「……冗談、キツいですよ……」

山田先生に問われて我に返った僕の背中にぞくりと悪寒が走った。

読めるはずがない。

知っているはずがないのに。

分かってしまった。

「これ、何かの一説だとは思うんですけど、山田先生わかりますか？」

「実はあまりドイツ語は得意ではなくて、ちょっと私には」

「そうですか……」

以前にテレビや教科書で目にしたとか、そんなつまらない話じゃない。僕はこの文章を知っている、いや口ずさんですらいた。ずっと昔に、誰かと一緒に。

「一体何なんだよ……」

これを見ていると気持ち悪くなる。僕は表示されていたドイツ語の文章を閉じた。

もう一方の光点に手を伸ばそうとすら思わない。それほどまでに僕は疲弊していた。

胸の奥がざわざわする。闇に紛れて、何か得体の知れないものが身体中を這いずり回っているようだ。

「これはもしかして、開示された、のかも」

「開示？　どういう意味ですか？」

ぽつりと呟いた山田先生に問い掛ける。先生の顔は真剣そのもので、眉をひそめながらも答えてくれた。

「カイトくんの専用機、レイヴァー・デイに反応してプロテクトが

解除されたところを見た予想でしかありませんが、これは特定の条件を満たしたときにデータを開示する仕組みになっているんだと思います」

「じゃあ、さっきデータが開いたのはレイヴァー・デイ自身に反応したから、だと？」

「もしくは、レイヴァー・デイに記録されたログ領域にプログラムが反応して、ですね」

「ログ領域に？」

ログ領域とは、言ってしまえば人間の記憶に当たる部分のこと。装備者や戦闘記録はもちろん、武器のデータとか開発年号から、場所や天候など、とにかくＩＳの体験したデータが混在する場所のことを指すんだ。

「ログ領域内の情報をこのプログラムがパスコードに変換して、」

「それに伴って開示されたか、ですね」

「私もその手の専門ではありませんから断言はできませんが、おそらくは」

どちらにしろ、このプログラムはレイヴァー・デイを戦わせ続けることで段階的に開く一種の宝箱であることは理解に至った。

だとすれば、レイヴァー・デイはさしずめ『鍵』だ。持ち主の資質を問うように鍵口をことごとく変える宝箱（ラプラス）を開くための可能性を秘めた唯一無二のＩＳ。

誰が何のためにこんなプログラムを作ったんだ？　どうしてその鍵が僕の手元にあるんだ？　それを使える僕って一体――？

僕という存在を追い詰めるように次々に疑問が噴き出してくる。解らないことだらけで、頭が悲鳴を上げている。

「カイトくん、これを調査に回しますか？　もしかしたらより具体的なことがわかるかも知れません」

「……いえ、そこまでして頂かなくても大丈夫ですよ」

「ですけど、」

「これは、僕がしなくちゃいけないことだって思うんです。だから、ごめんなさい」

申し出をやんわりと断る。このプログラムは僕の手で紐解かなくちゃいけない。

それが僕の果たすべき責任。僕の存在理由であると直感した。

プログラムをレイヴァー・デイのログに記録した僕は、ＵＳＢを引っ込抜いてウィンドウを閉じると背もたれにもたれかかった。

「山田先生、頼みがあるんですが」

「何ですか？」

「五分だけ、一人にしてくれませんか？」

正直、今の表情を誰かに見られたくない。解らないことだらけで、自分という存在がバラバラになりつつある僕の顔はひどい表情をしているはずだ。

こんな顔をしていたら、きっと一夏たちにいらない心配をかけてしまう。これは僕自身の問題であり、一夏らには何の繋がりもない。

だから五分だけ弱気になろう。弱気になった後は、いつもの緋神カイトに戻るんだ。

「わかりました。五分経ったら呼びに来ますね」

「ありがとうございます」

「いいえ、これも先生のお仕事ですから」

僕の心中を察してくれたのか、柔らかな笑顔で答えてくれた山田先生はピットを出ていってくれた。

「ふぅ……」

一人残された僕は深く息を吐いた後ゆっくりと目を閉じ、しばらく闇のなかに身を委ねた。

「Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈ，ｎ　Ｋａｍｅｒａｄ……」

何かと決別するように、知らぬ間に僕の口から紡がれた言葉。それは山田先生へ向けた言葉じゃないってことは、僕だけが分かっていればそれでいい。

●

・・・
・・
・

星痕核（ゾディアックコア）Ｎｏ，０２『狂気に染まる金牛』のＯＳをＮｏ，０６『可能性を喰らう獅子』に統合完了。星素群配列（ネビュラルート）、誤差を修正、異常値無し。動脈不能（カウントゼロ）の危険性を排除。システム、オールグリーン。

アルゴリズムの再構築により、本機の近距離格闘能力、および反応速度の上昇を確認。

格闘アビリティの熟達を確認。斬撃武器による、シールドエネルギーを流転した攻性エネルギー砲撃の使用を解禁。

ＯＳアップグレード終了。型式番号Ｃｙｃｌｏｎｅ‐１９３６、機体名『Ｌａｂｏｒ　Ｄａｙ』通常モードに移行します。

・
・・
・・・

●

少し休んで心身共にすっかり回復した僕は屋上に続く階段を急ぎ足で上っていた。

「皆まだいるかなぁ……」

昼休みはあと三十分ほど残っているが、次も実習だからその準備を考えると結構危うい。

「いなかったら、一人で食べるかな」

そう悲しいことをぼやきながら、屋上に続く扉を開け放った。

「おお……っ」

まず感じたのは感動だ。

抜けるような青空。
頬を撫でるのは初夏を感じさせる温かな風。
花壇に咲き誇るのは色とりどりの季節の花々。
白目を剥き気絶している一夏。
何かに怯えるように震えている篠ノ之さんと鈴にデュノア君。
期待に満ちた目でバスケットを差し出すセシリアさん。

感動は瞬間、絶望に変貌していた。

「皆さんも遠慮なさらず、食べてくださって構いませんのよ♪」

「あは、あはは、あはははは……。あはははははは……」

「……（ガタガタガタ）」

「あ、後で頂くよ……」

鈴が壊れたように笑い、篠ノ之さんが恐怖のあまり震え、額から冷や汗をダラダラと流しながら断るデュノア君。

何だかわからないけど、これはまずい。僕の生存本能が『今すぐ逃げろ』と叫んでいる。

「そう言えば、学食の割引券を貰ってたから今日はそっちに――」

「あ！　やっときたわねカイト！　ほらそんなところに立ってないでこっちに座りなさいよ！」

「……ッ！（コクコクコク）」

ちぃッ！　おのれ鈴、僕の逃亡を阻止しにかかってきたな！

篠ノ之さんが壊れた人形のように、顔面を蒼白にしながら首を縦に振る。

「いや、せっかく割引券があるんだから使わないと、」

「そんなこと言ってないで、早く座ろうよ、緋神君」

いつの間にか背後に回ったデュノア君がぐいぐい僕を押す。

「僕が驚異になる前に対策を立てているなんて、やるじゃないか」

違う、といっても信じてくれないだろう。デュノア君、あれはセシリアさんの実力なんだ。

「もう用事は終わったんですか？」

「う、うん。大した用事じゃなかったからね……」

諦めてセシリアさんの対面に座る。惨状を確認すべく、気を失っている一夏に目をやる。

ん？　地面に何か書いてあるぞ。まさか、死して尚誰かを助けようという一夏の気遣いが、

『犯人はサンドイ――』

僕らはもう終わりかもしれない。

『カイト、あれアンタがなんとかしなさいよ！』

『無茶言わないでよ！　前に一回食べたとき三途の川が見えたんだからね！？』

『確かにあれは人の耐えられるものではないな』

『僕は、美味しそうに食べた次の瞬間に倒れた織斑君の姿が忘れられないよ……』

セシリアさんに聞こえないくらいね小さな声で鈴たちと緊急会議を開く。

表情は当然笑顔のまま。セシリアさんにこの緊迫を悟らせないためだ。

ここには敵味方の境界線はない。重要なのはいかにこの状況を打破するかだ。

『緋神、お前が行くべきだ。セシリアはお前のために作ってきたんだろうからな』

『ナイスアイディアよ、箒！　さあ、カイト。覚悟を決めて三途の川を渡る準備をしなさい！』

『そんな殺生な！　それに、セシリアさんは皆のために作ってきたんでしょ！？』

『『『いや、それはない』』』

『どうしてそこだけ皆否定するのさ！？』

意味がわからない！　セシリアさんは皆とより親睦を深めるために料理を振る舞っているんじゃないの？

『しょうがない、僕にまかせて』

『デュノア、アンタ何か作戦でもあるの？』

『ま、見ててください』

鈴の問いをはぐらかしたデュノア君はセシリアさんに話し掛けた。

「オルコットさん、サンドイッチを貰ってもいいかな？」

「どうぞ、デュノアさん。お口に合えばいいんですけれど」

もじもじと恥ずかしがるセシリアさんの抱えるバスケットに手を伸ばし、最終兵器を取り出したデュノア君。まさか、いくのかっ！？

「タマゴサンドか、とってもおいしそうだね」

ゆっくりとゆっくりと、その右手を食べやすいように口元に寄せた。

一一僕の口元に。

「はい、緋神君。あーん」

「あああああっ！」

「「おおおおっ！」」

「……」

セシリアさんの悲鳴と、篠ノ之さんと鈴の感心した声が重なる。

恥も外聞もかなぐり捨てて、自分のピンチを人に押しつける気か。

敵ながら天晴れだ、シャルル・デュノア。

「やだな、冗談はやめようよ」

友達の悪ふざけを軽くいなす感じでサンドイッチを押し返しつつ、顔を逸らす。

すると、顔を背けた先にも二つのサンドイッチが用意されていた。

「さあ、カイト。あたしが食べさせてあげるわよ。ほら、口を開けなさい、口を」

「そんなにこれが食べたいか、緋神。しょうがない奴だな、お前は。仕方がない、私が食べさせてやろう」

猫なで声の鈴と殺人スマイルの篠ノ之さん。この学校に他に男子がいなくてよかった。いたら確実にハーレムだと勘違いされて、富士の樹海に埋められていただろう。

「恥ずかしがらなくてもいいんだよ、緋神君。誰も見てないんだから」

「そうだぞ緋神。ほんの一口で（色々と）終わるんだぞ。日本男児たるもの潔く覚悟を決めろ」

「ほら、カイト。照れなくてもいいのよ。だから、いいから口を開けなさい……！」

「いやいやいや！　別に僕は食べたくないわけじゃないんだよ！ただ、テーブルマナーを損ねる真似は止めたほうがいいんじゃないかなって言ってるの！」

神様仏様、僕はどうしたらいいですか？　もしも僕の声が届いたなら、せめてこのサンドイッチを無害化して下さい。

祈りが届いたのか、女神さまが救いの手を差し伸べてくれた。

「か、カイトさんっ」

「なんでしょうか？」

助けて、女神様（セシリアさん）！

「あ、あーん」

顔をほのかに朱に染めながらも、セシリアさんはサンドイッチを一つ手にとって僕の口に寄せてくれた。そのいじらしさに胸が熱くなる。

違うんです神様仏様。僕はハーレムの人数を増やしてほしいなんて一ミクロンたりとも願っていません。

アンタ等、僕のこと嫌いだろ。

「焦れったいわね、あたしが口を開けるのを手伝ってあげるわよ！」

「もがぁ！」

「さあ、緋神。腹一杯食べるといい！」

「カイトさん、これもよろしければ！」

「飲み物が欲しいって？　しょうがないなぁ、緋神君は。僕のレモンティーをあげるよ」

鈴が腕部装甲を展開して無理矢理僕の口をこじ開け、すかさず篠ノ之さんとセシリアさんがバスケットに残ったサンドイッチを口に押し込み、止めにデュノア君がレモンティーでそれらを流し込んだ。

流れるような連係プレー。なすすべもなく、サンドイッチは僕の胃袋のなかに納まった。

「カイトさん、お味はどうですか？」

「……と、とっても美味しいよ、セシリアさん」

ぱぁっとセシリアさんの顔が華やぐ。僕はこの笑顔に心底弱いらしい。

「ばーか」

はい、バカで結構ですよ。でも忘れないでね、鈴にもこの責任の一端はあるんだから。

僕の手を離れようとする魂を必死に繋ぎ止めながら、昼休みの一時を過ごした。

●

時は過ぎて夕刻。昼休みの件があったから、晩ご飯は食べずに（というか食べられないから）僕はベットに横になっていた。

「今日はいろんなことがあったなぁ」

目を閉じ、一日を振り替える。三人目の男子、デュノア君の転校に始まり、ＩＳの初実習、会ったことのない生徒会長から渡された意

味のわからないプログラム。

昼休みのアレはまあ、別件だとしてもあまりにも波乱だった。

『キミは僕の、『敵』だから』

「敵、か……」

デュノア君に突き付けられた言葉が脳裏に蘇る。

冗談や嘘を言っているようには見えなかったし、あの時僕に向けた瞳に一転の曇りもなかった。

あれは、復讐を決意した目。嫌な目、見ていると彼のなかの黒くて冷たい感情が伝わってくるような、そんな力を持っている。

「あんな目をしているから、なのかな……」

敵だといわれても、僕はデュノア君を傷つけようとは微塵も思わない。それはきっと、デュノア君にあれ以上悲しい目をさせたくないから。

あんな自分の在り方すらも拒絶してしまいかねない闇の中から救ってあげたい。

余計なお世話かもしれないけど、僕が、いや僕だからなんとかしないといけないんだ。

首に掛けていた黒いヘッドセットを持ち上げ、謳うように告げる。

自戒と自傷と少しの自虐を混ぜた謡を。

「だから、君の力を貸してくれ、レイヴァー・デイ。僕は無力だから、君が必要なんだ」

僕のこの短い手が届くかぎり、誰一人としてあんな顔をさせないためにも。

コンコン

「緋神、いるか？」

「織斑先生？　ちょっと待ってください！」

何の用だろう？　ベットから跳ね起き、ドアを開いた僕は直後に硬直した。

「今日からルームメイトになる奴を連れてきた。面倒を見てやれ」

織斑先生の後ろに控えていたルームメイトが僕の前に立った。クラスで挨拶をした時のように、にこやかに、優雅に。

「これからよろしくね、緋神君」

「……よろしく、デュノア君」

これから忙しくなりそうだ。

●

翌朝、一組は重苦しい沈黙に支配されていた。教壇に立つ山田先生はどうしたらいいのか分からないのか、あわあわ言ってるし、織斑先生は疲れたような深いため息を吐いた。

なぜこんな事態になっているのか？　それは壇上に立つもう一人が原因だ。

「……」

銀細工のように輝く銀髪を腰近くまで伸ばした威圧的な少女。左目に黒い眼帯をした彼女は一切口を開かず、じっとそこに立っていた。

二人目の転校生。いや、転校生と呼ぶにはあまりにも達している出で立ちは、まさしく『軍人』。

僕と同じく赤い瞳はクラスのみんなを見てすらなく、ただ一人、織斑先生を見ていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「教官はよせ、今はただの教員だ」

「了解（ヤヴォール）」

一向に喋る気配の見せない彼女に痺れを切らした織斑先生の言葉に敬礼で答えた転校生はようやく正面を見た。

教官って、何のことなんだ？　一夏が苦い顔をして、織斑先生が頭を抑えているけど。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

最低限の自己紹介。それ以上は話すことなど何もないと体現するように再び口を閉ざしてしまう。クラスのみんなもどう反応したらいいのか分からず、困惑しているようだ。

「あ、あの、以上……ですか？」

ギロッ！

「うぅぅ……」

居たたまれなくなった山田先生がボーデヴィッヒさんに質問するが、返ってきたのは軍人特有の眼力が籠もった赤い視線。

山田先生、泣かないでください。まだ一日は始まったばかりですよ。

そんなことを考えた折、ボーデヴィッヒさんと目が合った。

「！　貴様か――」

僕が？　そう聞き返す前に、彼女はつかつかとこちらに歩き寄ってくる。そして、手を振り上げて――、

パァンッ！

「ガぁッ！」

有無を言わさずに頬を張り飛ばされ、席から転げ落ちる。どうしてぶたれたんだ？

「認めない。このような劣等、私は絶対に認めない」

拳を強く握り締めた彼女は僕を見下ろしながら、吐き捨てた。

「貴様はあの人の下にいるべき人間ではない。覚えておけ、緋神カイト。私は貴様を必ず排除する」

「排除、だって？」

「ふん」

銀髪をなびかせ、ボーデヴィッヒさんは空いている席に座り、腕を組むと石像のように動かなくなった。

口のなかに広がる鉄の味が何とも言えない後味の悪さを引く今朝のＨＲはとんでもない結果を残して幕を閉じた。

一体これからどうなるんだ？

第十六話　～プログラム～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

ついに満を持してラウラが登場！　ようやく二巻も中盤に差し掛かりました。長かったぁ……。

次回はカイトＶＳシャルのバトルを予定しております。次回以降バトルシーンが増加します。ご期待いただければ幸いです。

では、またの機会に。

第十七話　～金髪貴公子と褐色のＩＳの秘密～（前書き）

第十七話です。

シャルルが転校してから5日が経った土曜日。カイトはいつものように一夏の特訓に付き合っているようですが……。

それでは、駄文ですがお楽しみくださいませ。

第十七話　～金髪貴公子と褐色のＩＳの秘密～

ガキィン！　ガキィン！

「一夏、ぼさっとしない！　反応が遅いよ！」

「んなこと言ってもなっ……！　一本じゃ防ぐのにも限界があるんだっての……！」

《雪片二型》と、レイヴァー・デイにインストールした打鉄の二振りの近接ブレードが激しくぶつかり合い、火花を散らす。

デュノア君が学園に来てから五日がたった土曜日。第二アリーナでは、半ば日常の一コマになりつつある一夏の特訓が行われていた。土曜日は午後が丸々空いているので、今日の訓練は僕との模擬戦。

「武器が二つ？　だからどうしたのさ？　格闘戦はそっちのお株でしょ？」

「上等……。言ってくれる、なっ！」

切り返し、ブレードを弾いた一夏が一端距離を取った。『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を使って強襲をかけるつもりか。考えは悪くない。けど、ツメが甘いよ一夏！

「行くよ、レイヴァー・デイ！」

ギュン！

背面ブースターを着火し、即座に一夏に迫る。単純なスピードなら、レイヴァー・デイの方が上だ！

「『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』か！？」

「ご明察っ！　そらぁ！」

「くっ！」

ガキィッ！

すくい上げるようにして抜いた切っ先は寸でのところで一夏が受けとめていた。

確実に腕を切り落とせる一撃を放ったつもりなんだけどさすがだね、一夏。でもさ、

「一手先を読むのが戦闘の基本だよ！」

「のわあ！？」

脚部スラスターを一噴かしし、身を屈めつつ白式の踵を払うと、呆気なく一夏は後ろに倒れた。

起き上がろうとする一夏の首元にブレードをあてがうと、彼に笑いかける。

「はい、ゲームオーバー」

「くっそー！　また負けかよ！」

どうあがいても逆転できないことを悟り、一夏は白式を待機状態に戻しすと、体を大の字に預けた。

勝負ありだ。近接ブレードを『収納（クローズ）』して、僕もレイヴァー・デイをセーブモードに移行する。

「一夏、かなり強くなったよね」

「そうか？　自分じゃあんまり分からないんだが……」

「うん、とっても強くなってる」

一夏と手合わせをするたびに、彼がめきめきと実力を付けてきているのを実感させる。

先ほどの一戦を見ても、全力の一撃を防いでみせたしね。

「これだったら、月末のトーナメントでいい結果を残せそうだよ」

「それでまたカイトに負けるのか？」

「それが嫌なら、もっと練習しようよ。すぐに一夏は僕より強くなるからさ」

本当に楽しみなんだ。今の一夏ならきっといい成績を残してくれるし、今日の一夏よりも強くなっているって確信がある。

「カイト、あんまり誉めると一夏はつけあがるだけよ？」

「そうだぞ、緋神。一夏はお前に一勝すら出来ないにもかかわらず誉めるなど愚の骨頂だ」

「なぁ、お前らはそんなに俺が嫌いか？」

「「別に」」

不貞腐れたように答えた鈴と篠ノ之さんに一夏が肩を落とす。

誉めるもなにも僕は事実を言ってるだけなんだけどな。

「一夏、次はあたしと勝負しなさいよ。まだクラス対抗戦の決着がついてないしね」

「いや、私の剣の稽古が先だ。先の戦闘を踏まえて立ち回りを確認しよう」

「「……！！（メンチの切り合い）」」

「同じパワータイプのＩＳだから、きっと得るものはあるわよ」

「だがそれだけだろう？　ならば、私のように剣を振るう者と戦ってこそ成長するものではないか？」

「「……！！（ガンのくれ合い）」」

うわあ、すごい睨み合い……。バチバチって音まで聞こえてきそうだ。ここに居たくないなぁ……。

……よし、逃げよう。

「じゃあ一夏、僕はちょっと休憩するね」

「おう、また後でな」

「うん、……君が生きていればね」

「なんか言ったか？」

「なにも言ってないよ。それじゃ」

一夏に背を向けた僕は胸の前で十字架を切った。天にまします我らが父よ、彼の者が無事に帰ってこられるよう祝福を与えたまえ。

（ーーアーメン）

お祈り終了。祈りが届けば、きっと一夏は無事に帰ってこられるだろう。まあ、僕はとことん神様に嫌われてるから無理だとは思うけどね。

「さて、どうしようかな……」

休憩、とは言ったもののそんなに疲れてないし、どうしようかな。

「……ん？」

ふと前方に人だかりが出来ているのに気付く。何の騒ぎだろう？

「デュノアさんが練習中なんですって」

「あ、セシリアさん」

「模擬戦お疲れさまですわ、カイトさん。よろしかったらタオルをどうぞ」

「ありがとう」

セシリアさんからタオルを受け取り、軽く汗を拭く。ふぅ、スッキリした。

「デュノア君が練習してるのか……」

「気になりますの？」

「一応僕らルームメイトだしね」

デュノア君がルームメイトになってからもう五日か。なんとか関係を改善しようと色々策を講じたけど、徹底的に無視されてどれ一つとして実を結んでいない。

その一方で教室では人当たりのいい優等生で通っていて、その時だけは僕とも話してくれる。それがさらに溝を深めている。

「せめて普通に話せるようにはなりたいなぁ……」

「誰と、ですの？」

「……あのさ、質問するだけなら銃を下ろしてよ」

最近セシリアさんの考えが読めなくて困る。

笑顔でロングレンジライフルを突き付けるセシリアさんを制していると、人だかりがぱっかりと割れてＩＳを装着したデュノア君が現われた。

「見たことないＩＳだ。ワンオフ機かな？」

「いえ、改良型のラファール・リヴァイヴですわね」

オレンジをベースとしたＩＳはなるほど、確かにラファール・リヴァイヴに似ている。

ただ、四枚のフレキシブルシールドが取り外されていたり、所々の装甲が削られていて全体的にスリムアップしている。

その一方で、右腕の装甲は厚く張っており、シールドと一体化している。ああいったシールドが僕のＩＳにもあれば戦略の幅が広がるのになぁ。

「あ、緋神君。オルコットさん」

僕らの視線に気が付いたのかデュノア君がＩＳを待機状態に戻して、笑顔で歩いてくる。

「君たちも練習？」

「いえ、わたくし達は一夏さんの練習のお手伝いをしていたんです」

「織斑君の？　……ああ」

デュノア君が後ろを見て顔を引きつらせた。無理もない、さっきから断続的な一夏の悲鳴が聞こえてたから、どうせ地雷でも踏んじゃって二人がかりでボコられているだろうさ。

やっぱり僕の祈りは届かなかったか。二度と神様に頼むもんか。

「そう言うデュノアさんも練習を？」

「僕は転校してきた分、みんなから遅れてるからね。その分練習しなくちゃ。今月にはトーナメントもあることだし、恥はかきたくないよ」

そこでデュノア君が僕を正面に捉えた。やっぱり僕狙いか。わかっていたけど、敵が多いな。あのラウラって子もそうだったし。

「あ、そうだ。緋神君、頼みがあるんだけどいいかな？」

「なにかな？」

頼み、か。会話の流れからすると、それってやっぱり……。

「僕と軽く手合せして欲しいんだ」

●

所変わって第六アリーナ。さっきの場所だと人が多すぎるため、場所を移したんだ。このアリーナは超高速飛行訓練に使われるため、空が完全に解放されているのが特徴だ。

「なになに、緋神君とデュノア君が模擬戦するの？」

「緋神君の専用機って初めて見るけど、格好いいよね！　黒いボディが素敵！」

「デュノア君のラファール・リヴァイヴも負けてないよ！　あのシルエットがいい感じ！」

「二人とも頑張ってー！」

「トトカルチョやるよー！　掛け金は十円からー！」

どこから聞き付けたのか、客席は超満員。トーナメントの予行演習といった様相を呈している。

それよりも誰ですか、勝手に賭け事を始めてるのは？　見付かったらタダじゃすまないよ。

『緋神君』

プライベートチャネルでデュノア君が僕に呼び掛けてきた。そこにさっきまでの暖かさは微塵もない。

『僕はこの一戦を模擬戦なんて思わないから』

『それは僕が君の敵だから？』

『それもあるよ。でも、それ以上に知りたいんだ。一一君の実力を』

一一敵ＩＳ、武装を展開。データベース照合。五五口径アサルトライフル《ヴェント》と断定。

展開したライフルを構え、臨戦態勢をとるデュノア君。射撃主体の構えだ。

「デュノア君」

それを眺めつつ、僕はあえて肉声でデュノア君に話し掛ける。

「一つ賭けをしようよ」

「は？」

きょとんとするデュノア君を余所に、レイヴァー・デイの武器スロットからビームガトリング《フロイド》を四門すべて呼び寄せ、二基ずつ連結させて両腕のラッチに装備すると、話の続きをする。

「もしも僕が勝ったら、仲良くしてもらうから」

「ぷっ、あははは っ！　おもしろいね！　いいよ、勝ったら君の友達でも彼女でもなんでもなってあげるよ！」

いや、そこまで言ってないけど。てか、君は男の子なんだから彼女はおかしいでしょ？

ともかく、言い出した以上おいそれと負けられなくなったわけだぞ、緋神カイト。

空に簡易ディスプレイが投影され、試合開始までの時を刻み始める。カウントダウンを告げる観客の声に混じり、デュノア君の冷たい声が耳に飛び込んできた。

「じゃあ――」

『三っ！』

「僕が勝ったら――」

『二っ！』

「君を――」

『いちっ！』

「――殺すから」

『試合開始っ！』

「行けっ！」

ブザーが鳴り響き、火蓋が切って落とされた。先手を打つべく《フロイド》を乱射する。緑色の飛沫がオレンジ色の機体に降り注ぐ。

「甘いよっ！」

右腕を持ち上げ、シールドで弾丸を弾きながらその影からライフルのバレルを伸ばし、僕に銃口を向ける。打ち方を止め、空に飛び上がる。

バァンッ！

マズルフラッシュに続いて、《ヴェント》の弾丸が足元を掠める。牽制か。

弾速はあまり早くない、銃口に注目していれば躱せる。それさえ分かれば、どうってことない！

「逃がさない！」

「逃げるつもりなんてない、よっ！」

二射、三射と続けて打ち続け、次第に距離を詰めてくるデュノア君に向け、右腕のガトリングを収納した代わりに展開したバズーカ《ウィルマ》を構える。

「実弾兵器！？」

「ビーム兵器だけじゃないんだよね、これがさ！」

煙を引いて飛来し、爆散した弾頭は、内部に詰め込まれたベアリング弾を共に撒き散らす。

身を翻し、急降下をするオレンジ色のＩＳ。速い。チューンアップをされているんだろう、ベアリング弾のダメージは微々たるものだ。

「それでも、距離は取れた！」

再度ガトリングの雨を降らせる。僕向きのいい距離だ、この間隔をキープする！

「貰ったデータには武器の情報はなかったからね、さすがに焦ったけど、でも！」

側宙し、弾雨を躱したラファールが武装を切り替える。それって……！

「パンツァーファウスト！？」

「火力だけなら凄いよ！」

スイッチを押すと同時に、先端部の成型炸薬弾が射出された。目で追える速度で放たれたそれは、レイヴァー・デイを執拗に追い掛けてくる。

躱すだけなら簡単でも、マシンガンを乱射しながらデュノア君がその逃げ道を塞いでくる。

「ホーミング能力を強化してあるからね、そう簡単には振り切れな

いよ」

「だったら――！」

打ち落とすまでだ！　《ウィルマ》から《ガルベストーン》に武器の切り替えを行い、一際高く空に飛び、スモークを吐き出す弾丸を捉えると、瞬時にトリガーを引いた。

キュイン……バシュゥン！

銃口に形成された、紫色にも見える火球がパンツァーファウストを吹き飛ばし、爆破させる。赤熱した液体金属がアリーナの宙に飛散する。

「はあああっ！」

その合間を這うように、デュノア君がショットガンを撃ち散らしながら突っ込んでくる。もう一方の手には実体剣を展開している。

「くっ……！」

まさかあの中を突っ込んでくるなんて！　回避は間に合わない。ブレードをコールし、刃を受けとめる。

「焦りすぎじゃないのっ……？」

「どうかな！」

チャキッ……

つばぜり合いをしている影から銃口が伸びてきた。さっきのショットガンか、いや、違う！

「アサルトカノン！？　いったいいつ！？」

狼狽する僕を見て唇を歪めるデュノア君。そうか、刃をぶつけた瞬間には切り替えが既に……！

切り払おうとも、ブレードは押さえ付けられているし、《ガルベストーン》にしろ《フロイド》にしろ撃つのにラグが生じてしまう。

「これでっ！」

「させるかぁ！」

ぐわんっ！

脚部ブースターを点火し、レイヴァー・デイを一回転させる。突き付けられたアサルトカノンの銃身を蹴り付け、そのまま後方へととんぼ返り。

「逃がさないって言ったよね！」

瞬間的に武器が切り替わる。サブマシンガン二丁を手に距離を寄せてくる。

火力の高い武器、面制圧に向いた武器、連射速度に優れた武器、一点突破に適した武器を自在に切り替え、多角的な戦術を取る姿はまるで砂漠で幻影を見ているようだ。

「なんて対応がしにくい……！」

悪態を吐きながらもビームガトリングを応射し、近付けないように弾幕を張る。明らかに流れが向こうに傾いている。シールドエネルギーはまだ残ってるけど、このままじゃ墜とされるのも時間の問題だ。

ならばどうする？　そんなの決まってる。

「おおおおっ！」

《フロイド》を打ち続けながら、一気に距離を詰める。まずは剣の届く範囲まで近付く！　急に攻勢に転じた僕を迎え撃つべく、デュノア君の手に先の剣が握られる。

ガキィン！

「今度は君が自棄になったんじゃないの？」

「さてね！」

立て続けに剣を振り下ろす。一夏といつも剣を打ち合っているせいか、剣を扱うのも慣れてきた。銃を撃つ隙を与えず、矢継ぎ早に刃を振り下ろし続ける。

「やぁっ――！」

ギィン！

一際耳障りな甲高い音を鳴らし、デュノア君が僕から離れるとアサ

ルトライフルを展開し、トリガーに指をそえた。

今だ！

「っ！」

後ろに下がりながら背面ラッチに手を伸ばし、そこにあるものを掴んで投げ付けた。デュノア君がその正体に気付いた時には弾丸は一直線に打ち出されていた。

弾丸が吸い込まれた。――Ｅパックに。そして、衝撃に耐え得るだけの強度を持たないパックは、破裂する。

ズドォォォォォン！！！！

Ｅパック五基分の凄まじい爆音、熱波がアリーナを埋め尽くす。視界を光のシャッターが遮り、膨大なエネルギーの波にハイパーセンサーが機能障害を起こす。

咄嗟に投げ付けたはいいけど、からめ手にしては五基はやりすぎたか。こっちのシールドが六割も持っていかれてるし。次やる時には気を付けないと。

「やられたっ！　まさかこんな……！」

爆風にあおられるように、褐色のＩＳが飛び出してきた。あちらもかなりの被害を負ったようだ。僕よりも爆心地に近い分、ダメージもかなりのモノになっているが。

「今ならっ！」

《ガルベストーン》を収納し、代わりにもう一本の近接ブレードを展開し、《瞬時加速》により一息に肉薄する。

デュノア君が虚を突かれたような顔をしたのも一瞬で、即座にコールしたブレードで応戦し、三度、武器同士が火花を散らす。

「無茶なことをするね、緋神君っ……！」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

「皮肉ってるんだよ、これでもね！」

軽口を叩きながらも互いの攻撃はとまらない。三本の剣が幾度となくかち合い、アリーナの上空に火の花が咲き誇る。

振り下ろし、薙払い、回転し、刺突し、持てる限りの剣技を駆使し、デュノア君に銃器を使わせない隙を与えない連続攻撃を繰り出す。

多数の武器を行使し、多角的な戦術を取る相手に対する対処はどうすればよいか？　僕の答えはこうだ。

――単純に武器を抜かせなければいい。

武器を瞬時に切り替える器用さを売りにしているなら、その強みを逆手に取る。つまり、デュノア君の武器は切り替えなければ使えない。なら、切り替えをさせなければ勝機はある！

「一旦距離を、」

「取らせると思う？」

ガンッ！

併走するラファールのシールドに鈍い銀閃が食い込み、そのまま押さえ込む。しかし、この盾は見た目どおりの堅牢さだ。この実体剣を鈍刀（なまくら）とまでは言わないが、反動でこちらの腕が痺れる。

「君の器用さは脅威だからね！」

二閃目、全体重を乗せて左方向から剣を振るう。剣を逆手に持ちかえたデュノア君がそれを受けとめる。逆手に持ちかえれば受け流せると判断したんだろうけど。

「甘いっ！」

刃を反転させ、そのまま振り上げる。デュノア君の構えた刀身がレールと化し、その上を滑った切っ先は、

ザンッ！

「くっ！」

腕部マニュピレーターを切り裂き、装備品を振り落とす。落下していく彼の剣は途中で粒子となって消えた。が、今更そんなことを気に掛けている余裕はない。

「このまま押し切る！」

「――甘いのは君の方だよ、緋神君」

刹那、背筋が凍てつく。彼の笑みが無慈悲な天使のそれに見えたからだ。やばい、と遅れて警告くるが、遅かった。

バコンッ！

「なっ！？」

腕部の外装をパージした！？　炸裂し、剥がれた装甲に剣先が押し戻された。

そして、僕の目に曝される右腕に装備された本当の脅威。盾はあくまでフェイク、その真の姿は、

――パイルバンカー。

「ここは、僕の距離でもあるんだっ！」

自機のスピードを一点に集中した圧倒的な速度。ダメだ、躱しきれない！

ズガンッ！！

「ぐうぅっ！」

かろうじて滑り込ませた刃にパイルバンカーの重い一撃が突き刺さる。なんて破壊力だ。たったの一撃で刀身に罅が入った。受け切っ

たのか？

「安心するのはまだ早いよ！」

グイッと、さらに杭打ち機を押し込んできた。瞬間、内蔵された弾薬庫が回転する。まさか、この武器――

ズガンッ！　ズガンッ！！

――連射可能！？

続けざまに二射され、刃にひび割れがさらに走っていく。このままじゃ折られる！

「だあああっ！」

刀が折られる前に勝負を決める！　残ったもう一本をデュノア君のＩＳに突き立て、シールドエネルギーを削る。

空中から地上へ縺れるように落ちてくる。デュノア君が刀を破壊し、バンカーが僕に到達するのか、それともデュノア君のシールドエネルギーを削り切るのとどちらが早い！？

「おおおおっ！」

「あああああっ！」

互いがありったけの力を込めたその時だった。

『大火力砲撃武器の展開および安全装置の解除を確認、対象を大型レール砲（カノン）と断定』

警告に耳を疑う。大火力砲撃武器？　そんな武器をデュノア君は出していないし、僕だってそんなもの――、

「！！！」

その時、デュノア君の背後に見えた黒いＩＳ。その左肩には、大型レール砲。おい、まさかそこから撃つつもりじゃないよな？　その射軸には僕以外にもいるんだぞ？

『初弾装填――警告！　ロックオンを確認――警告！』

「デュノア君！」

ドン！

「うわ！」

聞くが早いか、デュノア君を突き飛ばし、射軸から退避させると《ガルベストーン》を呼び出す。刹那、実弾砲が火を噴いた。

バジュゥン！

ギリギリ発射が間に合い、マグナム弾によって実弾が融解し、光の渦中に消え去った。

「……」

突然の乱入者に会場が水を打ったように静まり返る。その静寂を切り裂いたのは僕だ。

「……さすがに今のは危ないんじゃないかな、ボーデヴィッヒさん」

「知ったことではないな」

漆黒のＩＳを展開してこちらを睥睨しているのは、僕を張り倒した二人目の転校生、ラウラ・ボーデヴィッヒさんだ。

身に纏った黒いＩＳからは殺気にも似た闘気が滲みだしている。いつ仕掛けられてもおかしくはない。

「貴様も専用機持ちだと聞いた。私と戦え、緋神カイト」

「嫌だ。戦う理由がない」

「貴様に無くても、私には戦う理由がある」

ギリッ、と歯を噛み締めるボーデヴィッヒさん。どうしてそんなに恨みを僕に向ける？

「なぜ私ではない？　なぜ貴様風情を教官がお側に置く？　たかが人形（マリオネット）ごときを」

教官、千冬姉さんの事か。つい最近知ったんだけど、千冬姉さんは昔ドイツでＩＳ部隊の教官をしていたらしい。その時の部隊にボーデヴィッヒさんがいて、千冬姉さんの強さに惚れ込んだんだろう。

「貴様ような極東の猿のどこがいい？　私に実感させてみろ」

彼女のなかでは千冬姉さんは絶対的な存在であるが故に、どこの馬の骨だか知らない男が寄り付いたと聞いたならば、憤慨するのも無理はない。

僕も、正直に言えば千冬姉さんがどうして味方でいてくれるのか分からないし、その力に甘えている節もあるから、家族の輪に入っていいものかと考えてしまうときもある。けれど、

「だからと言って、それは君の理屈だよ、ボーデヴィッヒさん。少なくとも、僕らがここで戦う理由にはならない」

今更それが戦う理由になるかと問われれば、答えはノーだ。これは僕らの問題だ、部外者に口出しされる理由はない。

「ならば、意地でも戦わざるをえない状況を作るまで！」

そう叫び、肩に備えたレール砲が僕をとらえた瞬間、

バァン！

ボーデヴィッヒさんの足元の地面が爆ぜる。撃ったのは、デュノア君だ。アサルトカノンを構えたまま、僕の眼前に割り込んできた。

「モテない僻みは嫌われるよ、ドイツ人」

「言ってくれるな、行き遅れ（アンティーク）。ちょうどいい、貴様もここで、」

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

「――チッ」

突然、アリーナにスピーカーから怒声が響く。さっきのボーデヴィッヒさんの行為を危険と判断した誰かが先生に密告したんだろう。

「興が削がれた。今日は引こう」

こう何度も横槍を入れられてはやる気も失せる。ボーデヴィッヒさんは戦闘態勢を解除するとそのままアリーナを去っていく。

ゲートの向こうでは先生が怒り心頭で待っているだろうが、ボーデヴィッヒさんは絶対に無視するだろうな。

「さてと、じゃあさっそく試合の続きを」

「ううん、今日はもういいよ。もうすぐアリーナの閉館時間だし」

アサルトカノンをクローズしたデュノア君がつまらな気にそうつぶやいた。まあ、そうなるよね。

「あ、緋神君っ」

「なにかな、デュノア君」

もしかして、模擬戦の先約かな？　僕としてはウェルカムだけど。

「さっきは助けてくれてありがとう……」

「はぇ？」

「それだけだから！　じゃあ」

まくしたてるように早口で述べたデュノア君はＩＳを待機状態に戻すと、そのまま歩き去っていった。

今、お礼言われたの？　あのデュノア君に？

「え？　どうして？」

一人アリーナに残された僕は終始首を傾げていた。

●

「……はぁっ……」

一人、寮の自室に帰ってきたシャルルはため息を吐いた。それまで我慢していた分、吐き出されたそれは思いの外深いものだった。

（何で、僕は緋神君にお礼なんか……）

本来あんなに口を利くべき相手ではないのに、どうして自分はお礼なんかを口走ってしまったのか？

（彼は僕の探してた仇じゃないか……！）

でも、と知らずに続けていたシャルルの脳裏にここ最近のカイトの姿が浮かぶ。

いくら敵だと言われても、冷たく突き放してもしつこいくらいに自分に付き纏ってくる。その姿に自分の心がかき乱される。

（迷惑。そうだよ、迷惑なんだ。あんなお節介焼きなんて……）

胸の内に感じた小さな痛みを隠すようにそう結論付けると自分のベッドに荷物を放り投げる。鬱憤が溜まっていたのか、手のひらから離れたバッグは壁にぶつかり、跳ねるようにしてベッドに落ちた。

（……。シャワーでも浴びよう。そうすればきっと……）

タオルを持ってシャワールームに急いで入っていくシャルル。

だが、彼はこの時気付くべきだった。着替えを持っていかなかったことに。

●

「はぁ……」

部屋に帰ってくるなりため息を吐いた。あの後、ボーデヴィッヒさんの代わりに先生方から小言を頂き、反省文を書かされたのだ。

何を言っているのか分からないだろうが、僕も分からない。クラス代表だからとか、そんなちゃちな理由じゃなくて、もっと恐ろしいものの鱗片ってやつを味わったよ。

「あれ、デュノア君？」

サアアアア……

姿が見えないと思ったらシャワーを浴びてたのか。僕も浴びたいけど、仕方ないか。レイヴァー・デイを充電しながら待ちますか。

ガチャ……

文庫本を読みながら待つこと十分弱。シャワールームの扉が開く音がした。

「着替え忘れちゃうなんて……早く着替えないと」

お、デュノア君があがったみたいだ。さて、それじゃあ僕も。

「……」

席を立ったその瞬間、僕は金縛りにあった。いや、これは夢か？僕は自分の目を疑った。

シャワールームから出てきたのは、見たことのない『女の子』だったんだから――。

第十七話　～金髪貴公子と褐色のＩＳの秘密～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

戦闘シーンが少なく、クオリティが低くてすみません……。こちらも色々学びます故、アドバイスなどがございましたらよろしくお願いします。

次回の内容は伏せさせていただきます。皆様のご期待に添えるようなお話に昇華させられるよう努力いたしますので、しばしお待ち下さいませ。

それでは、またの機会に。

第十八話　～心の闇を穿ちて～（前書き）

第十八話です。

シャルルは女の子！？
それを知ったときカイトは……！
今、カイトとレイヴァー・デイの真価が試される！

それでは、『心の闇を穿ちて』幕が開きます！

第十八話　～心の闇を穿ちて～

「どうして、この部屋に女の子が……？」

状況をこの上なく端的に表した言葉が口の隙間を縫って出た。あまりのことに頭が理解を拒んでいる。体と思考が別々の場所にあるような感覚に征服される。

それは、ある種の麻酔のように体に染み渡る。現実の理解を拒む愚者を黙すのに使われるような強力で、抵抗すら無意味にさせる甘美な毒――。

（ここは僕とデュノア君の部屋に間違いない。けど……）

この部屋のキーは僕とデュノア君の持っている二つだけでスペアはない。だから、見知らぬ誰かが部屋に入ってくるのはまず有り得ないし、シャワーを浴びるなど言わずもがな。

「どうして、緋神君が……」

生まれたままの姿でお風呂場から出てきたその子が瞠目している。まるで僕がそこに居るのがありえないと言わんばかりに。

夕日が放つ黄昏を編み込んだようなサラサラの金色の髪の毛は湯気に当てられ艶やかに輝き、贅肉を一切廃した無駄のないスレンダーな体はお風呂上がりでほんのりと明るい肌色を、驚愕に大きく見開かれた両目は透き通った藍紫（アメジスト）。

三つの絶妙なバランスで創造された彼女の姿は、どうしようもなく

魅力的で、僕は呼吸をすることも忘れ見入っていた。

（あれ……？）

ふと何かが心に引っ掛かる。既知感（デジャヴ）る。金色に輝く髪の毛と宝玉にも勝る透明な目。これを僕は見たことあるぞ。一体いつ？　どこで？

「！！……まさか……」

思い起こすのもバカらしくなるくらい、それは簡単に想起された。

ありえない。馬鹿げている。いくら何でも荒唐無稽すぎて信じられないような答え（アンサー）。こんなことを誰が信じる？

だが、いや、だからこそ正解なのかもしれない。あの日モノレールで見た光景と今の光景が重なって見える。それは引いてはある人物を導きだす。

「まさか君は――デュノア君、なの？」

導きだされた答えは余りにも単純で、それでいて余りにも残酷な事実。

当然といえば当然の帰路か。そもそもこの部屋は相部屋。片方が白なら、残るもう一方は自ずと黒に変わる。白が二つ並ぶことはないんだから。

僕の言葉にはっと息を呑んだデュノア君は、

「――っ！！」

そのまま、瞬時に距離を詰めてきた。な、速いッ！？

ドガッ！

スケートリンクを滑るような低空から、かち上げるような蹴りが鳩尾へ伸びる。両腕を交差してガードしたものの、衝撃を完全に殺し切れずによろめいてしまった。

ズパンッ！

「っあ！」

体重を移動させ、そこに追い打ちをかけてくる胴廻し回し蹴り。まともに受け、窓に吹っ飛ばされた。特殊ガラスで構築された窓は割れなかったけど、おかげで息が止まりそうになった。

「君って見た目の割に頑丈だね、緋神君」

畜生。女の子に回し蹴りを食らって、吹っ飛ばされたなんて一夏に話したら笑われるだろうな。

「僕が毎朝欠かさず牛乳飲んでるの知ってるでしょ？」

「そういえばそうだね」

おかしそうにクスッと笑いを洩らすデュノア君、いや、デュノアさ

んか？　もうこの際どっちでも同じか。彼女はゆっくりと手を伸ばして、サイドテーブルに置かれていた十字の刻まれたネックレス・トップを掴む。

「今更僕が女の子だからどうこうって言い訳はしないよ。そんなものがこれから役に立つなんて思えないからね」

裸体を惜し気もなく曝すデュノア君の微笑みは薄く、かつ透明で、そしてどこか危うい。今まで浮かべてきた表情はその下に渦巻く感情を隠すための仮面（ペルソナ）に過ぎなかったモノだと痛烈に実感させる。

「そうやって自分を誤魔化したり、取り繕ったりして自分に酔うのはもうおしまい、疲れたよ。僕は現実を見るんだ」

微かに俯き、面倒だとばかりに肩を竦める。寒々しい笑顔を浮かべたままデュノア君は仮面を外し、感情をむき出しにする。

「ここで死んでよ、緋神君。そしたら君の首を本国に持って帰るからさ」

「――！」

ガッシャーン！

デュノア君が粒子の光に包まれた瞬間、考えるよりも早く頭を屈める。直後に背後の強化ガラスが轟音を響かせ、粉塵に帰した。アサルトカノンの砲弾が僕の頭上数ミリ上を通過して、窓をぶち破ったのだ。

「へぇ、よく避けられたね」

デュノア君が感嘆の吐息を洩らす。彼女は既に、ＩＳスーツごと改良型ラファールを展開していた。ＩＳスーツを機体と同時に展開すると余計にエネルギーを使ってしまうが、今の彼女には関係のないことのようだ。

（今の一発、当たってたら吹き飛んでた……）

人間が耐え得る限界を遥かに上回る破壊力と速度を乗せた一撃は情け、手加減一切ない死の先駆。それを避け切れたのは奇跡と有りがちな表現をするに他ならない。

死にたくなくば敵を葬れ、そうでなくば死ぬだけだと無情な僕の心が訴えかける。

うるさい黙れ、そんなこと言われなくてもわかってるんだよ。倫理とか理屈とか云々は後で考えればいいだろうが。とりあえず僕が今すべきなのは、目の前の状況に全力で対処するだけだ。

ガチャッ！

（畜生っ！　やるしかないっ！）

再度向けられた大穴に悪態を吐きながら割れた窓を転げるようにしてくぐり抜け、そのままベランダから飛び降りる。刹那、爆音が炸裂し、ベランダが木っ端微塵に吹き飛ばされる。

「行くよ、レイヴァー・ディッ！」

コンマ五秒にも満たない一瞬で、自由落下をしていた僕の体は黒い鎧に包み込まれ、落下してきた大きめの破片を足場にして飛翔する。

バァンッ！

窓枠を吹き飛ばした六一口径（バースト）爆破弾が頬を掠め、そのまま放物線を描き、直撃した街路樹が破裂音を高らかに鳴らして真っ二つに木っ端に砕ける。

ドォン！　ズドォン！！

部屋から飛びだしてきたデュノア君の繰り出す砲撃に木々が砕け、舗装された地面が粉砕される。

マズい、このままここで戦ったら流れ弾が寮に当たるのは免れない。僕が武器を使い始めたら尚更だ。

（場所を変えるしか……！）

人気がなく、流れ弾の危険性のない場所が理想的。しかし、そんな場所がこの近辺にあるのか？

「考え事なんて余裕だね！」

「！」

切り替えられていた多連装ショットガンが火を噴く。散開発射された鉛玉が街頭の灯りを浴びて鈍く輝き、夜空に殺意の光を煌めかせ

る。

まずい。まずいまずい、躱せ――！

「くっ……、おおおっ！」

反射的に空を蹴り、死に物狂いで急降下。地面に激突するわずか数ミリ手前で辛うじて停止し、そのまま後方へ飛び退くように加速をかける。追撃とばかりに、散弾の雨が降り注ぎ、通学路を壊していく。

『被弾を確認。シールド損傷は軽微。戦闘続行可能』

などとマシンボイスが耳朶を打つが、先の模擬戦でエネルギーをかなり消費してしまっており、シールドエネルギーはよくて後六割。充電が完了していなかったのと、ＩＳスーツをダイレクトに展開したのが痛すぎる。

「ほら、次行くよっ！」

ひたすらに後ろへ下がることしかできない僕に向け、彼女は一切の光沢を発さないガンメタルな重機関銃を擬す。一体何種類武器を積んでるんだ！？

ズガガガガガガ！

リコイル式のそれから打ち出される弾丸の幕。速射される小銃弾にセンサーが引っきりなしに警告音を響かせる。少し静かにしててくれ、危険信号なら間に合ってるよ。

「動いてみせてよ、レイヴァー・デイ！」

応えるように漆黒の体躯が風を切り裂く。当たれば死の舞いを踊らされる独唱歌（エール）に合わせて黒い踊り子が躍動し、舞を披露する。

ほぼ被弾がないのは、もはや動物的な勘ゆえ。命のやり取りにおいて発揮される生存本能に身を任せ、背面の大型デュアルブースターと全身のスラスターをフル稼働させ回避に撤していたから。

「速い……！」

苦々しく言葉を零すものの、その指はレバーを引きっぱなしで、断続的なマズルフラッシュが視界を埋める。

瓦礫と硝煙の匂いを撒き散らしながら一対のＩＳは学園を駆け抜け、今や入り組んだ浜辺までやってきていた。僕が誘導した結果といっていい。

「……なんとか落ち着いた場所に出られた……」

砂浜に着地した僕は周囲を調べる。寮から離れ、人気もない。ここならば一一。

ズタン、と砂を踏み荒らし、デュノア君が地に足を付けた。打ち切らしたマガジンを砂浜に落とし、替えのモノを呼び寄せながら話し掛けてきた。

「見かけの割に落ち着きがないんだね？」

「今だけだよ。別に他意があったわけじゃない」

「へぇ」

事実、さっきまでは場所を移すこと以外頭になかったし。

「でも、もう逃げない。戦ってやる……！」

キィィィイン……！

右手に集まった粒子が凝固し、甲高い音を立てて武器を形作っていく。呼び出した武器は《ガルベストーン》だ。

Eパックの補給をし忘れていたので、弾数は装填済みのを含めてたった八発だけ。さすがに心許ないけれど、やるしかない。

「実際滑稽な話だよね。僕は君と戦うために来たはずなのに、君たちと送っていた学園の生活が楽しく思えたんだから」

「何もおかしいことはないでしょ？　ここの生活は楽しいよ」

「……そうだね。うん、そうだ。それだけは君に同意するよ」

不味い料理はいつ食べても不味いし、旨い料理は常に美味。飽きることはあっても心は事実を捉える。

この学園での生活は毎日楽しい。一夏がいて、篠ノ之さんがいて、セシリアさんがいて、鈴がいて。気の知れた友達と過ごす日常は誰にとっても楽しいものだ。

それにデュノア君も気付いていたんだろう。でも、それを彼は自ら

手放した。やるべきことのために。

「だから、正直に欲求不満なんだ。ね、緋神君。君がなんとかしてくれるよね？」

ジャキッ！

答える代わりに、ビームマグナムを射撃位置に保持した。瞬間、ターゲットレティクルが褐色のＩＳを自動で補足する。

僕に拒否する権利はないし、あっても使わない。どのみち戦うしかできないんだから。

「「……」」

互いに構えた銃口が交錯する。無言で相手の出方を窺う。下手に飛び出せば撃たれる、それが分かっているからこそ動けない。

一定のリズムで寄せては返す波の音は今の僕らの心情を表しているようだ。冷静に相手を観察しているが、その実自分の爪牙を研ぎ澄ませ、静寂が崩れるその時を待っている戦人の心。

ざざぁ……ざざぁ……ざっ……

「「！」」

波の音がリズムを崩したのを期に、二機のＩＳが疾走を始める。

先にトリガーを引いたのは、僕。

キュイィン……バシュゥン！

闇夜を切り裂く一軸の光条が砂を灼熱させ、デュノア君に牙を剥く。巨大な熱線を横ロールで回避したラファールが速度を落とすことなく、レイヴァー・デイに近付いてくる。

（入り込まれたっ！）

思った瞬間、デュノア君が呼び出していたブレードの鈍光が足元からすくい上げてきた。

ギヂィッ！

咄嗟に起立させた腕部ラックが楯の代わりを担い、剣先を受けとめる。装甲板が削れ、耳障りな金属音が耳朶を打つ。

「女の子相手に容赦がないねっ！」

「男装してた子には言われたくない言葉じゃないかな！」

「ごもっとも！」

ブレードで左腕を押さえ付けたデュノア君が機関砲を向けた。大口を開けたマズルが吠えるその瞬間、銃身をビームマグナムの銃把で殴り付ける。

ズガガッ！

捌かれた機関銃による掃射が足元の砂を撒き散らし、視界を黄土色

に染める。

「だらあああっ！」

――ブン！

力任せに左腕を振りぬき、素早くしゃがみこんで掃腿を繰り出す。スラスターの加速度の乗った一撃を跳ねるようにして躱したデュノア君にその姿勢のまま《ガルベストーン》を打ち放った。

「くあああっ！」

右腕のシールドで火球を受けとめた。が、対ビーム加工されていない盾では威力を殺し切れず、派手な飛沫を上げて海に落ちた。

「まだ……やれる！」

ぐずぐずに溶け、使い物にならなくなったシールドをパージしたデュノアが海面を突き破って夜空に舞う。手にはサブマシンガン二丁。加えてシールドを破棄したことであのパイルバンカーが露出している。

（一気に仕掛けてくるのか？）

断続的な二軸の火条を避けながらデュノア君との距離を測る。下手に距離を取ろうものなら、あのパイルバンカーの餌食になる。

相手の動作を見極めながら攻撃を捌き、マグナムの一撃を当てられる隙を探る。と、

――ビュイン！

やおらここに来て彼女のパイルバンカーが粒子に包まれ、形を変貌させると一気に加速する。粒子を吹き破った三角のステークが杭を穿つように射出される。

――ズドン！

「がああああぁッ！」

腹部へ直撃、のみならずボルトから放出された雷撃の超衝撃が全身を蹂躙する。爆散する紫電の奔流に弾かれ、砂の上を転がる。バンカーに気を取られていたのが仇になった。

『警告！　本機体のＯＳに深刻な損傷を確認。コア・バイパス出力低下により補助動力をカット、粒子変換システム異常発生、単一仕様（リンティ）の使用不能（ワンオフアビ）。離脱を推奨。警告！』

機体のダメージは小さい。だが、電流は絶対防御で防ぎきれるものではない。

防御を貫いた死雷（デスインドラ）は操縦者そのものを痛め付け、あまつさえＩＳの中にまで被害を及ぼす。画面が真っ赤に染まり、さまざまな情報が飛びかう。

あれは、ただ人を傷つけるためだけに作られた兵装だ。だからこそこんな事が起きている。

「痺れるでしょ、これ。対ＩＳ格闘戦用プラズマステーク《エーク

レール》って言うんだ。ちょっぴり危ない武器だから人前じゃ使うの躊躇われるんだけどね」

「くっ……！」

《エークレール》……。確かにフランス語で雷を表しているに相応しい威力だ。生身だったら黒焦げになっていたし、もう少し出力が上がっていたらレイヴァー・デイの方が持たなかったはずだ。

「どう？　降参する？」

「……それ、なにか意味あるの？」

「これ以上苦しまなくて済むメリットはあると思うけど」

「降参してもここで痛め付けられるのもオチは同じでしょ」

バチバチと青白い火花を散らせるプラズマステークをちらつかせながら脅しを掛けるデュノア君にそう答えると、お腹を押さえながら立ち上がる。機体が重い、コア・バイパスから補助動力源にエネルギーを供給出来ない所為か。

（シールドエネルギーはまだ半分くらい残ってる。でも、）

肝心のレイヴァー・デイそのものがボロボロだ。

出力はイエローゾーンギリギリ、武器はシステムエラーで残弾六発の《ガルベストーン》以外は使えない。そして何よりも問題なのは切り札のⅠ（イオタ）モードが使用できないことだ。

これでは勝負をかけることすらままならない。

それでも負けるわけにはいかないのは、死の恐怖よりも僕のプライドが勝っているからだ。

「じゃあ、交渉決裂ってことだから――行くよ」

雷光煌めくデルタを備えた右腕を引き、再誕した疾風が雷撃を伴って夜の帳を引き裂いた。

●

カイトがシャルルに劣勢を強いられているその頃。学生寮の一角は騒然となっていた。

群がる生徒達の前にあるのはある部屋。そう、カイトとシャルルの部屋だ。

騒ぎの拡大を防ぐため、しっかりと施錠された相部屋では、騒ぎを聞き付けた千冬と真耶が現場の調査をしていた。

「数分前に爆発音を聞いた生徒さんからの報告でしたが、これは……」

「どう鑑みてもＩＳによる戦闘が行われた形跡があるな」

真耶が砕けた窓と散らばっている粉末状のガラスの欠片、そして奥に見えた壊れたベランダを目の当たりにして言葉を止めてしまう。

言葉を引き継いだ千冬が足元に転がっていた空薬莢を踏み潰した。

「何者かによる襲撃でしょうか？」

「いや、それにしては手段が煩雑だ。その手の者ならば、こんな騒ぎには発展せんよ」

経験者は語る、だ。弟をさらわれた千冬だからこそ、これが誘拐まがいの暴挙ではないことを見抜いていた。

「でしたら、これはなんなんですか？」

「さしずめ喧嘩だろうな」

「喧嘩……？」

「兎に角、ここの処理は私がしよう。山田先生は外の騒ぎをなんとかしていただけますか？」

「は、はい！」

首を傾げていた真耶だったが、千冬に促されるまま部屋を退出すると群がっていた生徒達に事情を説明を始めた。

その覚束ない様子に一抹の不安を抱えるが、真耶ならば大丈夫だろうと結論付けると、改めて部屋を見渡す。

「……予想がこのような形で当たるとはな」

シャルルが女子であることは転校してきたその日に気付いていたし、だからいつかは何か善からぬ事が起こりそうな気配はあった。

にも拘らず、それを放置したのはカイトへの信頼ゆえだった。例えシャルルが女であっても彼ならばどうにかしてくれるというやや過信気味な。

だが、その予想は悪い意味で裏切られたことを部屋の惨状が雄弁に物語っていた。

「しかし、妙だな……」

なぜ彼女は男装までして学園へやってきたのか？　順当に考えれば男性専用機持ちのデータを持ちかえることなんだろうが、どうもしっくりこない。彼女にはもっと別の理由があるはずだ。

「……」

千冬の目にシャルルのキャリーケースが留まる。もしかしたら何か手がかりになるようなものがあるかもしれないと踏んだ千冬はそれを開く。

「……ん？」

着替えやなんやらに交じって見つけたのはスクラップブック。使い込んでボロボロになったそれからはシャルルの強い想いが籠もっているようだ。

おもむろに手に取り、パラパラとめくっていく。

「なるほど、そういう理由だったのか……」

スクラップブックを閉じ、何かを悟ったようにつぶやいた千冬が窓の外に視線を投げた。

（無事でいろよ、カイト……）

鋭く研ぎ澄まされたそれは学園の教員のモノではなく、純粋に家族の身を案じる姉の目だった。

●

振り下ろされる鉄拳に全身が総毛立つ。受けたらダメだ、触れてはいけない。迸る閃光の渦に呑まれたが最後、あらゆるものが炭と化す。

「ぐぅぅぅっ！」

重い鎧を引きずるように無理やり体を捌き、直撃を逃れる。補助動力を使えないのが、恐怖心をあおり足枷となっていた。

「動きが遅くなってるんじゃないかな？」

せせら笑うような笑顔のデュノア君が左手に構えたパンツァーファウストを回避先の地面に打ち込む。

「一一ッアアア！」

それは数千度を超える熱波と金属片をばらまく。体を捻り、着弾は避けたものの、ＩＳは爆風に揉まれ、砂の上を転がっていく。

『バリアー貫通！　シールドエネルギー減少！　実体ダメージ深刻！』

「――！？」

アラートを無視し、地面を転がり続ける。刹那、数秒前まで頭があった場所をパイルバンカーが打ち抜いた。

「避けてばかりじゃ勝負にならないよ！」

ズガン！　ズガンッ！！

転がる僕を潰すように巨大な杭打ち機が唸りを上げて突き刺さり、次々に砂を爆ぜさせる。

「逃げたくて逃げてるんじゃないんだよっ！」

俯せの姿勢のまま、《ガルベストーン》の引き金を引く。最後の薬筴が排され、遅れて太いエネルギーの塊が発射される。

やはり無理な姿勢で撃ったからなのか、弾丸はオレンジ色の装甲板を黒く焦がしたのみ。

だけど、それが功を為したのか。デュノア君は追撃を警戒してか、飛び退いて下がった。

「ずいぶん苦しそうだね、緋神君？」

「誰の所為だよ……」

吐き捨て、立ち上がった僕に失笑を返す。余裕が為せる笑みだ。今の僕にはそんな余裕は微塵もないというのに。

システムは相変わらずエラー。武器はおろか、バイパスが狂ってしまっているらしく背面のブースターすら使えない始末。

いっそのこと、使えないものを放棄したほうがよっぽど早く動けるだろうか……。

「レイヴァー・デイ、背面ブースターを収納、バイパス凍結。蓄積分はすべて補助動力へ移行」

もはや飾りでしかなくなった背中の黒翼を破棄し、そこに至るルートを封鎖し、エネルギーの循環経路を変更する。

補助動力が動きだす。これで少しはマシになったか、幾分か体が軽い。

「ブースターをしまったら、どうやって攻撃を躱すんだい？」

「そんなの決まってるでしょ」

攻撃の回避は自分の足を使うさ。人間、ピンチになったときに信じられるのは自分だけだというし。

そして、背面ラッチに備えた最後の五基のEパックを一一

「いや……」

掴もうとした手を引っ込める。ああ、どうして僕はこう変質的（バカみたい）な考え方しか出来ないんだろうか。戦術としては定石の埒外もいいところだ。

だけど、やるしかないだろうな。言葉を借りるなら、守ってばかりは勝てないからだ。

マガジンのセットされていない《ガルベストーン》を構える。

「その空っぽの銃で何をするつもり？」

「さあね。気になるなら確かめてみなよ」

「じゃあ……遠慮なく！」

わざとらしく挑発した僕へ応えるように、コールされたショットガンが連射される。実包（ショットシェル）が弾け、散弾がこれでもかとばらまかれる。

「っおおおお！」

砂を蹴り、一気に飛び退く。やはり、補助動力の有無では動きがかなり異なるけどエネルギーはギリギリ、長くは持たないだろう。連射される散弾銃を避けながら、相手のあるモーションを誘う。

さあ、早くアレを使ってくれよ……！

ガチャッ！

高速切替（ラピットスイッチ）により、ショットガンがアサルトカノンへ変化すると、銃口が爆ぜる。

ズドンと重い音を響かせ、足元に六一口径弾が突き刺さる。衝撃で砂と海水がしぶく。

前方から接近警告。水柱の影を利用して近付き、近距離から重撃を繰り出すつもりだろう。

（上等っ！　もとより迎え撃つつもりだしね！）

さあ、どっちを使う？　パイルバンカーか？　それともプラズマステークか？　もしも僕の予感が当たっていればこの一撃は、

「でやあああっ！」

水のカーテンを乱暴に破り捨てて矛先を見せたのは、杭打機（パイルバンカー）だ。左手を握り込んで叩き込むように突き出した。

ズガンッ！

炸薬が破裂し、猪突したバンカーは射出された。けれどそれは一一。

「一一残念ッ！」

打ち出されたステークは、マガジンの装填されていない《ガルベストーン》、そのボルトとマガジン部に備えた四つのツメに引っ掛かるように絡め取られ、僅かに僕には届いていない。

本来ならボルトはEパックを固定するための、ツメはパックをせり上がらせる代物。だが、ステークをマガジン部に誘導させることでこれらを防御に利用できないかと考えたのだ。

結果は成功。狭いスペースに滑り込んで失速したステークにボルトと複数のツメが食い込み、それを受けとめることを成し遂げた。

「まさか、そんなことに使うなんて…！」

「さっきデュノア君言ってたよね、後手に回ってたら勝てないって。あれ、僕もそう思うよ。でもさ、戦いでもっと重要なのはそうじゃないよね？」

攻めなければ勝利は得られない。だからこそ、戦闘では気を付けないといけないことがある。それは後手に回った者がいかにしてそれを逆転するか。有体に言えば、

「先は読んでも読まれるな、だよ！」

即座に最後のEパックをマガジンを装填する。パックに押し上げられ、バンカーの先端が弾き飛ばされた。勢いに負け、デュノア君の上体が仰け反る。

デュノア君が僕にパイルバンカーを使ってくることは予想できた。ラファールに搭載されている大半の武器は打点の低いものばかり。

ならば勝利を確実なものにするべくして、火力の高いもので決めに来るのは予想に容易い。全力を出さなければならない相手ならなおのこと。

もしあの時飛び出してきたのがプラズマステークだったらマグナムのグリップで殴り付けて対処していたけど、タラレバの話はどうでもいい。

「この距離なら、外さないッ！」

「っ！？」

いまさら回避しようとしてももう遅い。虚を付かれた者はなまじ思考に体が付いてこない。

僕がトリガーを引くのが数段早い。

バシュゥゥゥン！

「うあああああっ！」

灼けたマグナム・カートリッジが勢い良く排莢される。収束していた光が爆発し、巨大な光条となって虚空と海面を裂き、ラファールを海底へと沈めた。

「はぁ……はぁ……。っあ……」

安堵ゆえか、その場にへたり込んでしまう。防御特化のＩＳだろうと耐えきれない、ほぼ零距離からの高出力射撃。さすがにもう動けないだろう。

「あーあ……負けちゃったか……」

どこか晴れやかな声が聞こえてきた。ざぷざぷと声のするほうへ歩

いていくと、海水特有の浮力に身を委ねるデュノア君の姿があった。
すでにラファールは待機状態に戻っており、戦闘の意志が無いことを物語っていた。

「もう止めよう」

僕の言葉にデュノア君が驚きに目を見開いた。

「こんな空中戦（ドッグファイト）に意味なんて無いよ」

ＩＳの超高速戦闘（ハイスピードバトル）を例えた言葉には、自嘲の意味も存在していた。
つまるところ、他愛もない犬の喧嘩に等しいからだ。

「君が僕を敵だと思っていても、女の子だろうと構わない。僕は君と友達になりたいだけなんだ」

「……ぷっ、あはは！」

やりたかったのはこんな生死を賭した殺し合いじゃない。僕は、ただシャルル・デュノアという学生と友達になりたいだけ。その思いを込めて、デュノア君に告げた。
その答えにデュノア君が吹き出す。あれ、なんかデジャヴ？
きょとんとする僕の前でデュノア君はしばらく笑っていた。

●

おかしくてたまらない。シャルルは沸き上がる感情を押さえ切れず、ひたすらに笑っていた。

最悪の相手に秘密を知られたからシャルルは覚悟を決めていた。例え、殺されることになってもこの男だけはなんとしてでも自分が殺すと。

だから、死力を尽くして戦った。使うなといわれた《エークレール》まで使った。それほどの確固たる意志を持って挑んだのに。

――ズルいな、君は。

友達になりたいだけ？　こんな自分と？　有り得ない。頭の螺旋がトンでるんじゃないかと疑ってしまう物言い。

いつもあんなに冷たく接していたのに、殺しにかかったのに彼は恨み言を一切言うことをしない。

緋神カイトは壊れている。いや、もしかしたら壊れているのはシャルル・デュノアの方かもしれない。

さっきまであんなに激しく命のやり取りをしていたのに、今は楽しくてしょうがない。しかも、あんなに固執したカイトへの恨みを忘れてしまうんだから救いようが無い。

負けたからこそ見えてくる。ようやく気が付いた本当の自分の欲し

いもの。そうか、もしかしたら僕は――。

コロシタインダロウ？
アイツハカタキジャナイノカ？

心の深いところから何者かが呼び掛けてくる。溶岩のようにドロリとした黒い感情が沸き上がる。それは着実にシャルルの意識を蝕んでいく。

――違う！　歪んでいたのは僕の方！　彼は歪んでなんかいない！

ミトメロ。
ラクニナレル。
ヤツガニクインダロウ？

――それ、は……。

イマサラゼンニンブルナ。
オマエノネガイハナンダ？
ナニヲエニココマデヤッテキタ？

――だとしても僕はもう……。

テヲクダセナイカ。
ナラバ、オマエニカワッテヤツヲコロシテヤロウ。
ソレガワレノソンザイスルリユウダカラナ。

――なっ！　待って！

シャルルの呼び掛けも虚しく、意識が闇に食い千切られ、深い黒に飲み込まれていった。

操縦者のバイタグラフ低下。戦闘効率低下。
これより、オプスキュリテ・スレートの起動を認証します。
システム正常に稼働。ガンマ波最大値まで上昇。行動パターンレベルをDに設定。

ＳＴＡＲＴ　ＵＰ

前座は終わった。さあ、今宵の恐怖劇（グランギニョル）はこれからだ。

●

「っあ、あああああっ！」

「どうしたの、デュノア君！？」

突然デュノア君が胸を押さえて苦しみだした。さっきまで笑っていたはずなのに、一体何が起きたんだ？

あわてて駆け寄った僕の前でデュノア君が粒子に包まれ、それが弾けると再びオレンジ色のラファールが姿を見せた。彼女は何をするわけでもなく、絶対防御を展開せずに佇む。しかし、その様子がどこかおかしい。

生気が感じられないとでも言うんだろうか、そこにあるはずなのに影を見ているように虚ろで儚い。

「！！」

ガン！

「ぐあ！」

いきなり殴り飛ばされ、砂浜まで押し戻される。嘘でしょ、十メートル近い距離を殴り飛ばしたというのか？

「キサマ、アケガミカイトカ？」

吐き出された言葉に背筋が凍る。なんて寒い、なんて苦しい、なんて狂った声なんだ。デュノア君のそれとは根底から違うおぞましい響き。

「キサマ、アケガミカイトカ？」

「だったら？」

「ソノイノチ、イタダク！」

吠えるように叫んだ『それ』は海面を猛然と疾走する。走っているだけなのに、その速度は先ほどよりも数段上。

同時、繰り出されるのは荒々しい獣の一撃。細工は弱者がするものだと言わんばかりの力任せのそれ。

「ーーー！」

飛び退く僕の胸を凶爪が掠める。ごうっ、と空気が悲鳴を上げる。いくらＩＳを装備しているからといっても、これは無茶苦茶だ。

そして、それは止まることを知らない。

ブン！　ブン！　ブン！　ブン！

続けて四発の多角攻撃。体を掠める斬風は全てが食らえば致命傷となる威力を持っていた。それはＩＳだろうと関係ない。執拗に、ただ僕を殺すという目的のために振られる剛拳は、ギロチンと化している。

ガン！

異様な禍々しさを込めた断頭の一振りがガードを貫き、僕を地面に叩きつける。

「ーーは、ぁっ！」

焼けるような痺れが両腕を包み、尋常じゃない苦痛が奔流となって体を苛む。

ただでさえさっきの戦闘で満身創痍なのに、こんな重い一撃を受けてはもはや立つことすらままならない。幸いなのは、絶対防御が発動して死ぬのを防いでくれたことか。

「マダシナナイ。タラナイ、イタミガタリナイ！」

途端、褐色のＩＳが馬乗りになり僕の腕に、体に、顔に拳が何度も振り下ろされる。絶対防御を貫く衝撃にむせ返り、吐き気が体の中からせり上がってくる。

容赦のない攻撃にシールドエネルギーがガリガリと削られていく。機体維持警告域（レッドゾーン）から操縦者生命危険域（デッドゾーン）へ。これ以上ダメージを受けようものなら、ＩＳが強制解除され、文字通り死を迎える。

「アトスコシ！　モウスコシ！」

デュノア君の体を借りた何かの攻撃はさらに激しくなる。この苦痛から逃れる手立ては二つ。

一つはこのまま僕が殴られ続けて絶命すること。そしてもう一つはこの場で絶対防御のないデュノア君を殺してしまうこと。

死こそが永遠の解放なんてアホなことは言わないが、現状況どちらかの命を差し出すしか逃れるしか手段が見当たらない。

殺すか？　殺されるか？　僕の選択は――。

「……っざけんなよ」

僕はバカか。僕が死んだからってこの凶獣が止まるとは限らないし、だからと言って僕は自分の手を血に染めたくない。つまりさ、

どっちかが死ぬなんて結末自体、願い下げなんだよ！

ガシッ！

「！？」

「っうおおおああああ！」

振り下ろされた拳を受けとめると感情を爆発させ、機体を最大出力にしてラファールを海に投げ飛ばす。

「おまえ、なんなんだよ」

人の友達の体にズケズケと入ってきやがって。その体とＩＳはデュノア君のだろうが。何勝手に使って暴れてんだよ。

「返せよ、アイツを――僕の友達を！」

おまえもだよ、デュノア君。まだ答を聞いてないんだよ。君は僕の友達になりたいのかなりたくないのかを。いや、答なんていらない。

そこから引きずりだして嫌でも頭を縦に振らせてやる！

「レイヴァー・デイ、お願いだ。君の力を貸してくれ」

まだ力とは何たるかがまったく分からない未熟な僕だけど、それでもいいかい？　現実問題として力がいるんだ。

助けるために、取り戻すためにこんな不条理（ゲットー）をブチ壊すための唯一無二の輝きをくれ。

そのためにここで誓おう、契ろう。僕はなんとしてでも君を護る。

だから、君の刃を僕に預けてくれないか。

契約は僕の深層意識（イド）を超えた普遍的無意識（ウヌス・ムンドゥス）の領域に届き、応える声が耳を打った。

『モン・シェリ、愛しいカイト君……。あなたがそれを望むなら』

「――――」

ありがとう。それじゃあやろうか、『俺』と一緒に楽劇（レヴュー）を。

「『Ｄｉｅ－Ｗａｌｋｕｒｅ』！」

そうして、黒い鎧に黄金の恒星（ひかり）が落下した。

呟いたのは俺か、それとも彼女か。ただ瞬間に爆発した意識が嵐（レイヴァー・デイ）となって、俺の中を駆け巡る。

フレームが拡張し、各部の装甲がスライドし、黄金の光を放つ。鶏冠状の角が左右に開き、Ｖ字に展張したマルチブレード・アンテナが獅子のたてがみのごとく輝く。

『単一仕様の展開を確認。『レイヴァー・デイ』のＯＳをＳ（シルエット）からＩ（イオタ）に移行完了。全兵装のセーフティを解除』

雷撃によって停止していたシステムが次々と復旧していき、背面に翼のシルエットをしたブースターが誕生する。まるで、生まれ落ちた金色の流星を祝福するように。

「《ディーン？》」

『Ｃｏｒｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ』

手のひらに粒子が集まり漆黒の両刃剣が形成される。実体を得た直後に刀身が割れ、エネルギーの刃が現れる。

「コロス、コロスノカ？」

「違うな。――壊すんだ」

腰を低くし、息を整える。チャンスは一度きりだ。それ以上やるとなるとエネルギーが無くなってしまう。

今から俺がやろうとしているのは、デュノア君を暴走させているシステムコアのみを彼女を傷つけることなく破壊する、曲芸まがいの攻撃だ。

ただ、それはかなりの危険を伴う。その一つに、デュノア君の状態がある。

彼女は絶対防御を張っていないので、力を入れすぎたり、手元が狂えば彼女はＩＳごと真っ二つだ。逆に力を抜きすぎると、攻撃は届かない。

つまり、成功させるには自らの実力を極限まで引き出すと共に、文字どおりの奇跡が必要になる。

「デュノア君！　聞こえているんだろう！？」

自我を失い、破壊衝動に駆られた機械に叫ぶ。君にこの声が届くと信じているから。

「賭けの続きをしよう！　もし君を助けられたら、俺たちは友達だ！　それで文句はないね！？」

絶対に助ける。君はもう俺の友達なんだ。一度手に入れたものはずっと傍に置いておきたいのが性分でね。

だから、君から返ってくる答えは一つしかない。さあ、プライベートチャネルは開いてるよ。答えてくれ、デュノア君。

『……いいよ。助けられたら、友達でも彼女でもなってあげるよ……』

「オッケー！」

これで進むべき道が見つかった。やるべきは一つだ。

『レイヴァー・デイ、コア・バイパスをフルオープン』

何の自信も根拠もないけれど、今更できないとか怖いとか泣き言は言わない。

『星素群配列変更（ネビュラルート）。Ｎｏ．０６からＮｏ．０２へ。誤差を修正。異常値無し』

俺より怖いのはデュノア君の方だ。自分の生死を他人の手に預けるんだから。

『動脈不能（カウントゼロ）の危険性を排除。演算速度上昇』

だからこそ、この賭けだけは負ける訳には行かない。確率がなんだ、試すべき案があるなら躊躇している時間はない。

『星痕核（ゾディアックコア）フルドライブ。出力１２０％』

一人じゃ不可能。俺だけじゃ出来ない。そんなこと到底単独で成せる業じゃない。

でも、今の俺なら出来る。レイヴァー・デイの力を借り、デュノア君の命を預かっている今の緋神カイトならば。

「アケガミカイト、コロス！」

うるさいな獣野郎。黙ってみてることも出来ないのかよ。大体さ、これはついさっき言ったことだけど、

「どっちかが死ぬなんて結末、願い下げなんだよッ！」

そして瞬間、引き金は引かれた。

『Ｚｏｄｉａｃ　Ｂｕｒｓｔ：ＴＡＵＲＵＳ』

「おおおおおぉぉぉーーー！」

気合いと共に居合いの要領で《ディーン？》を振り抜いた。エネルギー体の剣先が振動し、帯状に金色の閃光が広がると走ってくる偽者に刃となって飛翔する。力を燃やし心をたぎらせ、魂までも残らず全てを注ぎ込んだ一撃は――。

ガッシャァン……

デュノア君の胸に付いたネックレス・トップを捉えた。微かにガラスのようなものが砕ける音が聞こえ、彼女の体からＩＳが剥がれ落ち、急速に失速する。

「っと……」

砂に足を取られて倒れそうになったデュノア君の体を受け止める。
相変わらず、心配なくらいに軽い体だ。

力なくもたれかかったデュノア君に囁きかける。

「賭け、僕の勝ちだからね」

「……うん」

短く答えたデュノア君は意識を失い、穏やかに呼吸をしはじめる。
よかった、眠っただけなのか。

「それじゃ、帰ろうか。みんなで」

デュノア君を抱っこした僕はレイヴァー・デイをはばたかせ、学生寮へと飛び立った。

第十八話　～心の闇を穿ちて～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

厨二病キターー！！！　十四歳神様ご降臨！　ご都合展開ここに極まれりですね！　拙い文章ですみません……。でも、そこをつかれたらどうしようもありませんのでご容赦下さいませ。

正直、今回は山でした。どう戦闘を書けばよいものか模索しながらの話ですので、お見苦しい点がございましてすみませんでした。

次回はドラマパートです。こっちは早く書き終わるかなぁ……。

それでは、またの機会に。

第十九話　～Ｕｎｎａｍｅｄ　Ｐｌａｃｅ～（前書き）

第十九話です。

総合特定１００達成ーーー！
僕なんかの拙い文章にお付き合い頂いている皆様のお陰です。ここに感謝の言葉を述べさせて頂きます。本当にありがとうございます。
これからもこの作品を気紛れにでも読んで頂けるとそれだけで励みになりますので、今後ともお付き合いお願いします。

シャルルの心に抱えた闇とは？

第十九話『Ｕｎｎａｍｅｄ　Ｐｌａｃｅ』幕が開きます。

第十九話　～Ｕｎｎａｍｅｄ　Ｐｌａｃｅ～

二年前、オーストラリア、ノーザンテリトリー。

ＡＭ　０１：２５

ここにはデュノア社傘下の技術研究施設があり、そこでは日夜第三世代ＩＳの開発が行われている。

いいや、厳密には行われていたと言うべきか。今宵、研究所は紅蓮の炎に包まれ、悲鳴と銃声と爆音の狂騒曲（カプリス）が絶え間なく、かつ容赦なく鳴り響いていた。

「撃（ッテ）エーッ！」

防衛に当たっている五機のラファール・リヴァイヴ、その隊長機と思しき装甲板に白いラインの入ったＩＳを駆る女性が叫ぶ。曲調を乱すように、爆ぜる銃火の嵐。

５００発／分×１０挺ものアサルトライフルによる一斉射撃。

当然のことながら打ち落とせる数ではないし、避けられる速度でもない。

「Ｄｅｒ　Ｆｒｅｉｓｃｈｕｔｚ――」

だが、彼女にはそれすら必要なかった。無常に紡がれるは狩人の歌。瞬間、歌に聞き惚れた草木が黒く焼け焦げ、灰となって崩れ落ちる。血と炎で照り返しを受け、赤く染まった空のたもと、魔砲の声が響

き渡った。

「――Ｓａｍｉｅｌ」

――――――！

刹那に灼熱の焔が無数の弾丸ごと哀れな羊（ラファール）たちを飲み込んだ。尋常な火力ではない。第二世代ＩＳはもとより、第三世代ＩＳなどでも発揮し得る破壊の限界を超えている。旧世代の最強兵器たる核兵器、それを一点に集中させたかの如き超熱量の爆撃。

地形すら変貌させる暴威の残る一帯からはこの世のものとは思えない、思いたくない断末魔が木霊する。一瞬の猛火に晒され、ＩＳのコアすら残らず蒸発した防衛隊、巻き込まれる形で闇夜の塵と化した技術者のそれが呻いているのだ。

「……寒いな」

忌々しげに吐き捨てた女が優雅にたばこの煙をくゆらせる。揺らぐ金色の髪、纏う白銀の鉄塊は鮮血か、それともこの業火を浴びているためか赤色に変貌していた。灼熱の大地に立つ、その赤き影はまさしく赤騎士（ルベド）。

大地は赤熱し、大気を獄炎で満たし、暴虐の火柱はこんなにも猛ているのに、彼女の視線は興醒めだと言わんばかりに冷えきっていた。しかり、怜悧な美貌と評されるだろう容姿とのアンバランスさが浮き彫りとなっていた。

脆い、弱すぎる。所詮はＩＳを行使できるだけというだけの劣等か。元来使うべきではないが、止むを得ずこの『炎（ローゲ）』を使ってやっただけ光栄だと思え。天の獄で誇れ、この刃を抜かせたことを。

「Ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｈ，ｎ」

それを死者への手向けのつもりなのか餞別の言葉を残した女は身を翻し、くわえていた煙草を宙に放る。その僅かな火が拡大し収束し陣を描くと、その中から魔砲の砲口が現われる。爆炎の砲神が狙うのは、超高温で飴のようにぐずぐずに歪み、自重で今にも崩れてしまいそうな鉄の城。

「Ｆｅｕｅｒ！」

爆ぜる魔性の大火砲、その炎の大輪がオーストラリアの一角をさながら大焦熱地獄（ムスペルヘイム）に創り替えてしまう。

破滅の炎が全ての不浄を払い清める様を一瞥した焔の女騎士は身を焦がすような火炎流を浴びながら夜空の彼方へと姿を眩ましてしまった。

●

「いたたたっ！　ち、千冬姉さん、もっとやさしく……」

「却下だ」

「ひぃぃぃぃ！　しみるぅぅぅ！」

誰かが喋っている。騒ぎを耳にし、シャルルが目蓋を開け、天井に灯る蛍光灯を見上げた。

（あれ……僕はどうして……）

眠りから醒めたばかりのもやもやした頭が緩やかに回転を始め、シャルルはベッドに横たわったまま顔を動かした。わずかに開いたカーテン、その奥ではカイトを千冬が手当てしていた。

「しかし、オプスキュリテ・スレートとはな。デュノア社も厄介なものを引っ張ってきたものだな」

（あ、僕のラファール！）

千冬は苦々しく吐き捨て、その視線の先の薬品のビンが並べられた机に無造作に放置されたネックレス・トップに気が付く。妙に体が軽いと思ったのはそういうわけか。

（でも、オプスキュリテ・スレートってなんだろう？）

シャルルが疑問に感じたことをカイトも感じたらしく、千冬に問い掛けた。

「千冬姉さん、そのオプスキュリテ・スレートって何ですか？　何だか怖いものだってことは分かるんですけど……」

「怖いもの、か」

「戦っていて、そう感じたんですよ。笑いますか？」

「いいや。お前の感性は正しくモノを見ているな、と思っただけだ」

子供のように感じたことをそのまま口に出したカイトに千冬の眼が和らぎ、彼女の苦笑混じりの声がシャルルの耳朶を打った。

「ならその見識に答えて教えてやるが、このシステムに関する情報は重要かつ機密な事項であることを忘れるな」

ここだけの話であると念入りに前置きし、千冬はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「現在のＩＳの置かれている現状は分かるな？」

「……それはＩＳが各国の抑止力であると同時にその数が国の優劣を分けるって……」

「そうだ。この世界はことＩＳでヒエラルキーが決まってしまう。腕利きのパイロットや、画期的な技術があったところでそれは所詮付加価値に過ぎない」

これはＩＳに限った話ではない。知識や情報など、革新的な力（イノベイティブ）は時に世界の均衡を崩す。バランスが崩壊した世界が今の世界であると千冬は語る。

「だが上の国ならともかく、下の国々はいつまでも下でいることを由としないものだ。であるなら、ヒエラルキーを変えようとするわけだ」

「だから各国はＩＳの研究をしているんですよね」

「半分正解だ。確かに画期的な技術があればそれは強みになる。だが、ＩＳは機械だ。低俗な技術者どもが歓喜する夢とロマンの詰まった代物なゆえ、先進国も研究を惜しまんだろうさ」

「ＩＳ乗りとして、その言い方はどうかと……」

「お前は本物のマッドサイエンティストを見たことが無いからそういえるんだ」

吐いたため息には十数年分の苦労が滲んでいた。

「話が逸れたな。強力なＩＳはヒエラルキーを上るための一つの武器には成る。しかし、それだけでは宝の持ち腐れだろう。ここにもう一つの武器が必要となる」

「……だから、強いパイロットですか」

「勘のいいお前だ、ここまで説明すれば分かっただろう？」

「強力無比なＩＳがあってもそれを操縦できるパイロットが必要になる。それも、ありふれたモノじゃなくてそれこそブリュンヒルデのような」

「とは言え、そんな人材が早々簡単に見付かる訳が無い。オルコットの様にＡ＋のＩＳ適正を持った人間ですら億分の一だぞ」

「そこで考えたわけですか、いなければ造ればいいって」

忌々しげに呟いたカイトの真紅の瞳が怒りに燃える。握り締めた拳

がギリギリと悲鳴を上げている。

「当然歓迎された行いではないが、自国の利権に眼の眩んだある国が諸手を上げて歓迎した。投薬に始まり、遺伝子操作、肉体改造、精神調整。本来の人格が壊され、攻撃的な性格に変貌したり、偏狭的になったりと、まったく反吐が出る」

「オプスキュリテ・スレートはそのなかの一つ、と言うわけですね」

「ＶＴシステムと並んで条約によって開発を禁じられた悪魔のシステムだよ」

千冬はネックレス・トップを手のひらに乗せ、カイトに見せる。

「元々は精神安定（トランキライズ）に使われていた医療用の技術を軍事応用したもので、ガンマ脳波を強制的に引き上げる特殊な電磁パルスを発信させることで搭乗者を極度の興奮状態にしてしまう装置だ。一種の催眠だと考えてくれれば分かりやすいか」

「そんなものを使ったらパイロットは……」

「アドレナリンの過剰発散に脳の処理が追い付けず、脳が溶けて死ぬだろうな」

（っ……）

シャルルは絶句した。自分のＩＳにそんな恐ろしいものが積まれていたとは考えもしなかった。不安が沸き上がる胸をきゅっとつかんだ彼女の前で、カイトが千冬に詰め寄った。

「ち、千冬姉さんっ！　デュノア君は、デュノア君は大丈夫なんですか！？」

「落ち着け、馬鹿者。検査はしたが、脳波に問題は見られなかった。無事だよ、奴は」

「そ、そうですか……。よかった……」

ほっと胸を撫で下ろして元の場所に戻ったカイト。彼がどうしてあんなに動揺し、安堵しているのかシャルルには分からなかった。

「しかし、お前も無茶が過ぎるぞ。まさか、母体を傷つけずにシステムだけを切り裂くなど私にも出来た芸当ではない」

シャルルの脳裏に最後の一瞬がリフレインされた。金色の燐光を纏ったＩＳが自分の何かを切り裂いたその時を。

千冬にいわれ、カイトは照れたように笑いながら答えた。

「出来るって信じてましたからね。僕とレイヴァー・デイなら」

「確信があったのか？」

「いいえ。そんなのありませんよ。ただ、失敗した結末なんて有り得ないって思っただけですから」

さも当然だと言ってのけるカイトに思わずクスッと微かに笑ってしまう。なんて実直な人間なんだろうか。

と、不意に千冬が立ち上がった。

「さて、まずはここまでだな」

「はい？」

脈絡のない言葉に首を傾げたカイトを尻目に千冬はすたすたとこちらに歩いてきて――

ジャッ

「うわぁ！」

●

「うわぁ！」

ドサッ！

千冬姉さんがおもむろにカーテンレールを引くと、患者衣を着たデュノア君がベッドから転げ落ちた。それも顔から床に。痛そうだなぁ。

「ううぅ～……、イタタ……」

「デュノア君、大丈夫？　立てる？」

「う、うん……。ありがと、緋神君……」

手を差し伸べると、視線をさ迷わせながらも僕の手を取る。ひんやりとした彼女の手を引き、立ち上がらせる。

「さて、目覚めたばかりで申し訳ないが事情を聞かせてもらおうか」

「千冬姉さん！」

歯に衣着せぬ物言いに怒鳴り返し、デュノア君を守るように立ちふさがる。

「カイト、お前は帰っていいぞ。ここからは教師たる私の仕事だ」

「お断わりします」

「カイト……！」

「デュノア君は怪我人ですよ！？　あんなことがあったすぐ後に事情聴取なんて大人のやることじゃないでしょう！？」

これは僕のわがままだ。辛い事があった直ぐ後に続けて辛い事があっていいわけが無い。

しばらく無言の睨み合いが続いていたが、それにデュノア君が割って入ってくる。

「緋神君、ありがとう。だけどね、僕は大丈夫だから」

「デュノア君……。わかった。でも、僕も一緒に話は聞くから」

「うん。僕も、君には聞いてほしいんだ」

微笑んで僕の手からするりと抜け出し、ベッドに腰掛けたデュノア君は千冬姉さんと対面する。僕は姉さんの隣に戻る。

「さて、デュノア。お前がここに来た理由はさしずめデュノア社からの命令だな？」

「はい。現ＣＥＯの父からの命令でＩＳ学園に現れた特異ケース二名と接触してそのデータを持ち帰れと」

そう言えば、数日前の授業中にデュノア君にラファールの説明を求めていたけど、それは彼女がデュノア社の関係者だったからなのか。

「デュノア社は第二世代で多大な利益を上げましたが、開発が第三世代に移行するに当たって経営不振に陥ったんです」

「『イグニッション・プラン』から除盟されたからか」

「その通りです」

『イグニッション・プラン』。新しい主力量産機（トライアル）を選定するための欧州企業連の統合防衛計画。現段階の参加はイギリス、ドイツ、イタリアだけだとセシリアさんが言ってたような。

「デュノア社は第三世代ＩＳ開発の着手が最後発でしたから、トライアルに間に合わせるには圧倒的にデータも時間も足りません。しかし、次のトライアルで選定されなかったら政府からの援助を全面カットされ、その上でＩＳ開発許可も剥奪されてしまいます」

「だから学園に転入してきたのか。特異ケースたる男子に接触し、

機体データを奪うために」

「命令だからと言い訳はしません。ごめんね、緋神君。だますようなことしちゃって」

「それは別に気にしてないけど……聞きたいことが二つあるんだけど、いい？」

デュノア君は首を縦に振る。千冬姉さんに眼を向けると、うん、質問してもよさそうだね。

「君がここに来た理由は概ね理解できたけど、男装する意味はなんなの？」

「それは広告塔としての役割と、同じ男子だったら君たちと接触しやすいからっていう考えからだよ」

「どうしてそんな命令を……。相手は父親でしょ？」

「だって僕は――あの人の本妻の子じゃないんだ」

「「……」」

僕と千冬さんが同時に絶句する。記憶を失っても僕は一人間だ。『本妻の子じゃない』という言葉の意味を理解できないほど頭は腐っていない。

「お母さんが無くなったのが二年前に亡くなってね、その時に父に引き取られてからずっと非公式でテストパイロットをやってたんだ。社長の愛人の子がいるなんてマスコミに知られたらまずいからって

別邸で軟禁状態」

乾いた笑いを時折洩らしながら語るデュノア君。ねえ、なんで君は笑っていられるの？　僕は今にもキレそうなのに。

「だから、いまさら僕のことなんてどうでもよかったんだよ。男も女も関係ない、あの人にとってはただＩＳに乗れる都合のいい駒にすぎなかったんだよ」

「……もういい。次の質問に移ろう」

いったいデュノア社の社長とやらはデュノア君をなんだと思っているんだ。これ以上聞いていると僕は自分を抑えられそうにもない。速やかに次の問い掛けに移った。

「何で君は僕のことを狙ったの？」

そう。これが最大の疑問だ。さっきの話の中にはこの質問の答えになるようなものはなかった。デュノア君がどういった理由で僕を『敵』だとしていたのか、それを知りたい。

デュノア君は重苦しい息を吐くと僕を真っすぐに捕らえるとゆっくりと語りだした。

「僕にはね、お母さんの他にもう一人大切な人がいたんだ。その人はオーストラリアでＩＳパイロットをやってたんだ」

「やってたって……もしかして、」

「うん。その人も二年前に亡くなっちゃってるんだ。オーストラリ

ア、ノーザンテリトリーのデュノア社技研の事故でね」

「これの事だろう？」

黙して話に耳を傾けていた千冬姉さんがすっと僕らに差し出したのはぼろぼろのスクラップブックだ。

「見たんですか？」

「悪いとは思っているよ。だが、成る程納得したよ。カイト、お前も見ろ」

「え？　でも」

差し出されたスクラップブックを受け取ってもいいのかと考える僕にデュノア君が笑いかける。

「いいよ、見ても。君にはそれを見る義務があると思う」

「そこまで言うなら……」

どこか後ろめたさじみた感覚を味わいながら、受け取ったそれを開いた。貼られているのはフランスの新聞。読めないが、そこに張り出された写真に僕は唖然となった。

なんだ、これ……。写真には研究所の跡地が映っているが、ここを研究所と呼ぶには無理がある。鉄骨の一本くらい映っていたら納得できるが、そこに映り込んでいるのは黒ずんだ湖らしきものだけ。

これってもしかして、乾留液（タール）か？　物が燃え尽きたときに出る液体

だ。

「死者百名以上。技研は溶けてなくなって証拠もない。警察はＩＳの暴走による不慮の事故として片付けるしかなかった」

スクラップブックを捲っていくと、それに関した各国の新聞が所狭しと貼られていて、そのどれもが同じ事を報道していた。

「認めたくなかったけど、僕もそう思ってたんだ。つい最近までね」

スクラップブックの最後のページに行き着いた。そのページだけ他のとは異なるものが貼り付けられていた。これは手紙か？

「でも、そんなある日。僕に一通の手紙が届いたんだ。差出人は分からなかったけど、僕は衝動的にそれを読んだんだ。そこになんて書いてあったと思う？」

「僕のこと、だよね」

「そうだよ。ＩＳ学園には公表されていないもう一人の男性ＩＳパイロットがいる。その男が君の探している人物だって」

黄色いスクラップブックを閉じ、デュノア君に手渡すと、彼女はそれをぎゅうっと愛しむように抱き締めた。

「そこに父からの命令さ。日本には渡りに船って諺があるけど、まさしくこのことだよね。僕は快諾したよ、あの人の仇を討つために」

「だから、あんなに僕を敵視していたのか……」

でも、デュノア君には悪いけど、僕はその事件を知らないし、覚えていないし、思い出さない。

過去に関する事なら何か前兆があるはずなんだけど、この事件にはそれがない。つまり、僕は彼女の仇じゃないって事だ。

これをどうやって説明すべきか頭をひねる僕の横で千冬姉さんがふぅ、と息を吐くとデュノア君に何かを手渡した。

「デュノア。こいつはお前の仇ではない事を証明するいい証拠を持ってきてやった」

Ａ４判の封筒、その中身をデュノア君が引っ張りだす。また写真か。

「二年前の事件を気になって私も調べてみた。それは事件の起こった晩に衛星写真が捕らえたものだ」

「これは……ＩＳですね」

引き伸ばされ、荒い画質ながらもそこには飛行するＩＳが映っている。機体色まではっきりとは判別できないけど、その形状はレイヴァー・デイとはまるっきり異なっていた。

これなら有無を言わさずに僕が犯人じゃないといえるが、さらなる疑問が浮かび上がる。

「姉さん、この写真をどこで見つけてきたんですか？」

ぱっと見、捏造では無さそうだけど……。訝しむ僕の視線を受けて

千冬姉さんが出どころを教えてくれる。

「国連のデータベースだ」

「「……は？」」

……なん……だと……。

「国際連合。ＷＷ２の戦勝国様。下世話な言い方をすれば地球大統領府」

「元世界チャンプの教師がハッキングですか？」

「正しくは山田先生がやった。私ではない」

責任転嫁ですか。お二人とも、ただの先生から犯罪者予備軍まで降格しましたよ。

「ともすれ、これでこいつが犯罪者じゃないと解ってもらえたか？」

「こんなことをされなくても、僕もそんな気がしてましたから。こんなお人好しがあんなことをできないって」

デュノア君はそう僕に笑いかけるけど、これは誉められてるの？貶されてるの？

「事情は概ね分かった。して、デュノア。お前はこれからどうなる？」

「どうなるもなにも、時間の問題だと思いますよ。このことをフラ

ンス政府が知ったら本国に強制送還されて、よくて牢屋行きですかね」

「そんな……！」

親のエゴで無理矢理やらされているのに、それがバレたら牢屋だなんて。そんな理不尽が認められるわけが無い！

「千冬姉さん、どうにかなりませんか！？　僕はデュノア君がいなくなるのは我慢できませんっ！」

「緋神君……」

友達。そうだ、友達なんだ。せっかく手に入ったものをみすみす手放すなんて愚行、僕は嫌なんだ。

「デュノア君はどうしたいんだ？」

「え？」

「ここにいたいのか、いたくないのか。君の本当の気持ちを教えてくれ。そうしたら僕は――」

「……」

デュノア君は僕の視線から逃れるように顔を背ける。しまった、結論を急かしすぎた。自分の浅はかさに呆れて物も言えない。唇を噛んで黙り込む。

「まあ、方法が無いわけではないが、その様子ではまだ結論は出な

いようだな」

千冬姉さんは僕らの様子を見て、そう洩らすと背を向ける。

「この件は私が担当している。結論が出たら来るといい」

そう残して姉さんは保健室を後にし、息苦しい沈黙のなかに取り残される僕とデュノア君。

「ごめん、デュノア君。変なことを言って」

「ううん。気にしないで」

向かい側のベッドに腰を落とし、頭を下げる。家の事情とか企業の思想とか、色々と考えが足りなかった。でも、

「でも、おかしいよ。普通じゃないよ」

「え？」

「親がいなくちゃ確かに子供は産まれない。そんなの当たり前だけどさ。だけど、子供は親の道具じゃない……！」

社長の子がなんだ？　愛人の子がなんだ？　どうして生き方まで拘束されなくちゃいけない？　それこそただの思い込み、エゴじゃないか。

「ここに生きてるデュノア君は人形じゃない、シャルル・デュノアっていう人間だ。人を道具にするなんて間違ってる！」

怒りが止まる事を知らず、流れだす。理不尽に、不条理に打ち震える心を静める為に拳を握り締めるけれど、焼け石に水。

「デュノア君、君はそれでいいの？」

「いいも悪いもないかな。仕方ないよ、僕は所詮人形なんだ。選ぶ権利なんて無いんだ」

「ッ！」

ガタッ！

諦観浮かぶデュノア君の笑顔に、ぷちんと何かが音を立てて切れた。ベッドから立ち上がり、デュノア君に近付く。僕を見上げるデュノア君の瞳が戸惑いと怯えに揺れている。けれど、それを無視して僕は一一。

ぎゅ……

「あ、緋神君っ！？」

彼女の頭を抱いた。デュノア君が慌てているけど無視する。

「自分が人形だなんて、そんな悲しいこと言わないでよ。ここにいる君はシャルル・デュノア、間違いなく人間だよ」

「……詭弁だよ、そんなの。お母さんたち以外、誰も僕を人として見てくれなかったから。だから僕は空っぽなんだ。君が見てるのはシャルル・デュノアっていう、器なんだよ」

「だったらッ！」

声を張り上げて言葉を遮る。自分が空っぽ？　なら満たせばいい。それだけの物がここにはある。

「だったら僕が君を満たして上げる。デュノア社の言いなりでもない、愛人の子でもない、一人の女の子にしてあげるから！　だから、ここにいてくれ！」

「……なんでそんなに僕に構うの？」

一一ああ、そうか。こうして改めて問い掛けられてようやく分かった。僕は……。

「それはきっと、僕も君と一緒で空っぽだからだよ」

「緋神君も？」

デュノア君に言いながら、無意識に自分と重ねていたと気が付いた。だから、デュノア君を放っておけなかったんだ。

「僕には過去の記憶が無い。思い出せないんだ、自分が誰なのか」

「あ……その、ごめん」

「いいよ、記憶のことなんて気にしてないから。いまさら思い出したいとは思わないし。それに、自分が空っぽで良かったって思ってるし」

「どうして？」

「そうだね……そっちのほうが楽しいから、かな」

「楽しい？」

あ～、そうだな、何ていったら伝わるかな……。

「ここには大切な人たちがいるんだ。一夏、篠ノ之さん、セシリアさん、鈴、千冬姉さんに山田先生、クラスの皆だってそう。皆と過ごす時間は楽しいでしょ？　そうしたら感じるんだ、空っぽの自分が少しずつ満たされていくのが」

皆と触れ合って自分（カイト）が自分（カイト）であると実感できるんだ。空っぽだからこその特権とさえ思える。

「空っぽの自分が悪いわけじゃない。空っぽのままがいけないんだ。だから、デュノア君がこのままでいいわけが無い」

こんなに嬉しくて楽しいことを実感できないなんて、人生を棒に振るのと同じ事だって気付いたから。僕はここにいるんだ。

「今からでも遅くない。自分らしくなろうよ」

「自分、らしく……」

「見つからないなら、僕が手伝う。邪魔する奴がいれば僕が君を守る。だから、君はここにいるべきなんだ。それに、」

「それに？」

「賭け。僕の勝ちだったでしょ？　僕の友達なら、ここにいるべき理由にならない？」

「……そうだね。ふふっ」

口を丸く開けて呆気にとられていたデュノア君がやっと笑った。これがデュノア君の本来の笑顔。屈託の無い綺麗な笑顔だ。

「決めるのは君だけど、これだけは覚えていてほしい。僕には君が必要なんだ」

「……ぁ」

不意打ちだった。デュノア君の目から堰を切ったように涙があふれる。

「え！？　デュ、デュノア君！？」

「ごめんね、緋神君……。もう少しだけ強くぎゅってして」

僕の胸に顔を埋めるデュノア君。そっか、お母さんが亡くなってからずっと辛かったんだね。自分が誰からも必要とされなくて、自分の居場所がどこなのか分からなくて。自分が誰なのかも分からなくなって。

でも大丈夫だよ。君はもう自分を殺さなくていいんだ。

「君の苦しみの全ては分からない。でも、君の辛さを半分だけもらってあげる。だから、今だけは泣いていいよ。僕はここにいるから」

「緋神君っ……僕はっ……」

「カイトでいいよ。シャルル」

「カイトぉ……僕は、ぼくはぁ……！　うぁあああぁあああぁぁ！」

糸が切れたように泣きじゃくるシャルルを強く抱き締める。苦しかったよね？　辛かったよね？　でも、もう我慢しなくてもいいから。君はもう一人じゃない。

「君の居場所は、僕が護ってあげるから」

「うん……！　うん……！」

シャルルが手に入れた名もない居場所、きっとそれはいつか君を君らしくしてくれるから、今はまだ泣いていればいい。

その居場所は僕が護るから——

第十九話　～Ｕｎｎａｍｅｄ　Ｐｌａｃｅ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

相変わらずのダメ×２な文章で申し訳ありません。いつか皆様のご期待に添えるような文章に昇華させて見せます故、その時まで首を長くして待っていてくださいませ。

次回は今回ほど酷い文章にはならないと思います。多分いやきっと……。

それでは、またの機会に。

第二十話　～黒い雨、穿つ～（前書き）

第二十話です。

今回は久しぶりのドタバタと、バトルシーンの二部構成になっていますので少し長めですね。

では、第二十話『黒い雨、穿つ』幕が開きます。

第二十話　～黒い雨、穿つ～

「セシリアさんお願いだ。今夜、君の部屋で寝かせてほしいんだ」

こういうのは最初が肝心だと偉い人は言っていた。だから、僕は思い切って話を切り出した。

「か……！　カイトさん……、そんなご冗談は……」

「僕は本気だ！　僕には君が必要なんだ。だからセシリアさん、頼むよ」

目が点になっていたセシリアさんの顔がみるみる真っ赤に染まる。

「そそ、そんなっ、いきなり……。わたくしにも、こ、心の準備が……っ！」

「一晩だけでいいんだ」

「えええええっーー！？」

今度は一転してはらはらと涙を零し始める。

「それではわたくしの気持ちはっ……、えぐっ……、ひどっ……、カイトさん……、ひど……っ」

あ、あれー？　会話のキャッチボールがうまくいってないのかなー？　何やら誤解が……おぜうさん…？

「それでも……、わたくしはっ、遊びでも、一晩だけの幻でもっ、構いませんから……！」

なにか、根本的にすれ違っているようだ。

「いやセシリアさん、冷静に僕のお話を――」

それからたっぷり二十分ほどかけて、僕はどうにかセシリアさんを宥めすかし、一夜の宿とおっきなモミジを手に入れた。

何でこんなことになっているんだっけ？　事の発端は三十分前まで遡る。

●

「カイト、お前は今日はリネン室で眠れ」

「は？」

シャルルが落ち着いて五分後くらい、保健室に再び現われるなりそんな無茶苦茶な命令を下す織斑千冬鬼教官。

「お前たちの部屋は先程の騒ぎで使い物にならない。分かっているな？」

「「うっ……」」

痛いところを突かれ、同時にうめく僕とシャルル。いくら初夏とは

言え、窓が粉砕されたボロボロの部屋で寝たくない。

「デュノアが今、女であると露見するのはこちらとしても不味い。よって、デュノアには私と一緒に宿直室で休んでもらう」

「妥当ですね。で、僕はリネン室ですか？」

「妥当だろう？」

「どこがですか！？」

シャルルは仕方がないとはいえ、僕にも相応の対応ってものがあるんじゃないんですか？

「嫌ならば、このテントを貸してやってもいいが」

「どうあがいても、僕への仕打ちは変わらないんですね」

千冬姉さんが取り出したテントを見て、思わずため息を吐いてしまう。どうやっても、『普通』の部屋は取れないようだ。

「織斑先生、僕は平気ですからカイトを宿直室にしてあげてください」

「……デュノア」

姉さんが額を押さえる。言いたいことは分かる。それを僕が代弁しよう。

「シャルルは女の子だよ。そんなところじゃ寝かせられないよ」

「だけど……」

「それに、シャルルは男の子としてここにいるわけだから下手を打ってバレでもしたら大変だよ」

皆はシャルルが女の子だって知らないわけだから、もし知ってしまったら暴動は免れない。僕なんて真っ先に狙われるだろうな。同じ男子で同室なんだから……、

『カイトさん、どうしてデュノアさんが女の子だと隠していたんですの？』

バキューン！　ぎゃーっ！

あ、死んだな僕。

「……（ガタガタガタ）」

「か、カイト！？　顔が真っ青で、唇が紫色になってるけど大丈夫！？」

「……いや、大丈夫じゃないかも」

最悪のエンディングが見えた。バレたら風穴の一つや二つで許してはくれないだろうな、セシリアさん。

これはなんとしても僕の命の為にも隠し通さなければならない。なら、一日くらいリネン室で寝ることくらいこの緋神カイトをもってすれば造作もないことだ。

「シャルル、君は姉さんといるべきだ。僕なら平気」

「でも……」

「シャルルは遠慮しすぎ。もう少し周りを頼ったほうがいいよ。そんな調子じゃまたパンクしちゃうよ？」

「……意地悪だよ、カイト」

しばらく迷っていたようだけど、話が進まないことを気にもんだのか、シャルルは頷いた。

「じゃあ、お言葉に甘えて。今晩お世話になります」

「ああ」

「後、今日だけカイトが誰かと相部屋をすることを許してあげてくれませんか？」

思わぬ提案に驚いたのは僕だけじゃないだろう。まさか、シャルルがそんなことを持ち出すなんて……。

「加害者の僕だけがそんな施しを受けるわけには行きません。ですから、カイトにも恩情を与えてあげてください。お願いします」

「そうは言うがな……」

シャルルの強い瞳に負け、姉さんが息を吐いた。

「……わかった。今日だけだぞ」

「ホントですか！？」

「ただし、どこの部屋に泊まるのかをきちんと連絡するように。いいな？」

「はい！　ありがとう、シャルル！」

「お役に立てて光栄だよ」

やった！　そうと決まったら早速行動だ。

「おやすみ、シャルル、姉さん！」

「うん。おやすみ、カイト」

「夜更かしはするなよ」

二人に挨拶をして僕は保健室を飛び出し、向かったのは一夏の部屋だ。正直、一夏と篠ノ之さんの愛の巣を壊してしまうのは忍びないが、今日だけ許してもらおう。

「一夏～、いるかい？　入るよ～」

ノックをして部屋に入るとそこでは――。

「だから、今日はあたしが一夏の勉強をみてあげる約束でしょ！？」

「そんなのは知らないな。そもそも一夏は私の部屋の同居人だ。然

るなら、私が面倒を見るものだろう」

「何よ!?」

「何を!?」

愛の巣どこ行った？　嫁姑さんの喧嘩みたいなものが展開されているんですけど。火サス？

「カイト、ちょうどいいところに！」

「……一夏、君は今度は何をしでかしたんだい？」

篠ノ之さんと鈴から逃げるように一夏が小走りで駆けてきた。大方予想は付くが友達のよしみってやつで、一応理由をお聞かせ願おうか？

「今日の勉強の復習をどっちかに見てもらおうとしたんだけど」

「こうなっちゃったってわけか……」

この二人って顔を合わせるたびに仲が悪くなっていってる。それもこれも一夏が好きだからってことなんだけど、やれやれ、恋する乙女っていうのは怖いね。

「カイト、その生暖かい目で見るのはやめてくれ。何だか無性にに腹が立つ」

「え？　なんのことだい？」

しかし、二人の喧嘩のペースを見るかぎり、この調子じゃ朝までに決着は付かないだろうな。仕方ない、一夏の部屋は諦めよう。

「お、おい、カイト。帰るのかよ？」

「皆忙しそうだからね。あ、そうそう一夏、君に偉い人の言葉を贈呈するよ」

ドアを閉める間際、一夏に向けて投げ捨てるように言葉を呈した。せめてもの救いに笑顔で教えてあげよう。

「リア充爆発しろ」

「どこの偉人だよ！？」

「それじゃあ頑張ってね、一夏」

「ま、待てよ、カイ――」

バタン

「ふぅ……」

さて、どうしようか……。このままじゃシャルルの好意を無駄にしちゃうなぁ。それだけは避けたいよね。でも、僕なんかの頼みを聞いてくれる人なんて――。

「あら、カイトさん。こんなところで何を？」

あ、セシリアさん発見。そして最初に戻る。

●

そんなこんなで一夜明けた日曜日。僕は食堂で深々と頭を下げていた。

「本当にごめんってば」

「……」

暖簾に腕押し、糠に釘とでも言うんだろうね、この状況。つーん、とそっぽを向いて紅茶を飲むセシリアさん。生真面目なセシリアさんのことだ、僕の理由を聞いて愛想を尽かされてしまったに違いない。昨日からこんな調子なんだよね。

（困った……。どうしよう……）

事情が事情なだけ説明のしようがない。セシリアさんに機嫌を治してもらいたいけど、本当にどうしよう……。

「カイト、おはよう」

「シャルル。おはよう、昨日はよく眠れた？」

「おかげさまでぐっすり」

頭を抱えている僕の前に現われたのはシャルルだ。言葉どおり快眠だったんだろう、だいぶ元気になったみたいだ。顔色がよくなっている。

「おはようございます、デュノアさん」

「おはよう、オルコットさん。僕も一緒していいかな？」

「ええ。どうぞ」

「ありがとう」

貴公子スマイルでお礼を言って席に着いた。いや、女の子だから貴公子っていうのもおかしいか。

「昨日は本当にごめんね。僕のせいで迷惑をかけちゃって……」

「怪我をしたわけじゃないから気にしてないよ。シャルルも気にしないで」

「ありがとう、カイトはやさしいね」

屈託なく笑うシャルルにどきりとなる。復讐の仮面（ペルソナ）が外れて、一女の子に戻ったシャルルの笑顔の破壊力はこう、胸にグッとくるものがある。

「なんで赤くなってますの？」

「あ、赤くなってないよっ！」

「どうでしょうね……」

どこか刺のあるセシリアさんの言葉に言い返す。確かに可愛いと思ったけど、そんな露骨に顔に出してないよ！　……おそらく。

「ところでカイト」

「うん？」

「昨日はどこで寝たの？　織斑先生には部屋が取れたってことしか聞いてないんだよ」

そう声を潜めて尋ねてくる。昨日はセシリアさんの部屋で一夜を明かしたと正直に言うべきなんだろうけど、コレを口に出していいものか。

言っていいかな、とセシリアさんにアイコンタクツ。あ、目を逸らされた。それは好きにしろって事でいいんだよね？

「昨日はセシリアさんの部屋に泊めてもらったんたよ」

「オルコットさんの……？」

包み隠さずに告白するけど……シャルルさん、どうしてそんな冷めた目で僕を見るの？　何だか居心地が悪い。

「カイト、質問いいかな？」

「は、はい！　なんでしょうか？」

いけない、過剰反応してしまった。これじゃまるで後ろめたい事があるみたいじゃないか。

「気になってたんだけど、オルコットさんとどういう関係？」

僕の思考とどんぐりの背比べな問い掛けだ。張りついているのは摂氏零度の笑顔、それも見つめられるだけで魂が凍り付いてしまいかねない。

セシリアさんは僕の事情を理解してくれている一番の理解者だ。……部屋には泊まったけど。

よし、ここは穏便な回答で乗り切るのがベストと見た！

「そうだね……、セシリアさんは僕の一番の理解者かな。部屋に泊めてくれたのだって部屋が壊れてるって事情を踏んでくれたからだよ」

うん、無難な答えだ。これなら問題もないよね。

――しかし。

「ふーん。カイトはそんな人と一夜を過ごしたんだねー。理解者だからねー、きっと色んな事を知ってるんだろうなー。カイトって意外と発展家なんだねー」

僕、選択ミスった？　おかしいな、絶妙なアンサーだと思ったんだけどな。

「いや、その、シャルル……？」

「ふーうーん！」

何でそんなに怒るの？　僕の説明が悪いのか、余計に拗れてしまった。こんな時に頼りになるのは――、

「セシリアさん、シャルルに事情を、っていないし！」

さっきまでここに座ってたのに一体何処に？

この後しばらく僕はシャルルに必死に言い訳をする羽目になった。

●

「まったく、カイトさんは……」

カイトがへそを曲げたシャルルに言い訳を繰り返しているその頃、セシリアはぷりぷり怒りながら寮の廊下を歩いていた。

「何で言ってしまうのかしら……」

いくら同じ男子だからといってそうそう簡単に口を割るようなことではないはずなのに、どうして教えてしまうのか。

「それに…」

『セシリアさんは僕の一番の理解者かな』

「理解者ってなんですの……！」

もっと他に言い方があるのではないか。カイト自身を理解してくれていると言う点ではたとえ一番だろうと、一夏やシャルルと同じだろうに。自分は所詮彼らと同程度の関係なのか。

自分にとってカイトはかけがえのない存在なのに――。

「それってホントなの！？」

「嘘じゃないわよね！？」

「？　なにかしら？」

ぶつぶつと恨み言を零して歩いているとふと、談話室に人だかりが出来ていることに気が付く。いつもならあまり興味を示さないのだが、今日に限ってはその魔力に惹かれるようにセシリアは談話室に足を踏み入れていた。

「皆さん、なんのお話をしていますの？」

「あれ、セシリア知らないの？」

信じられないと言わんばかりに目を丸くしたのは同じクラスの鷹月静寐だった。

小首を傾げるセシリアに静寐はびしっと指を立てる。

「今月末の学年別トーナメントで優勝すると、織斑君か緋神君のどっちか好きな方と付き合えるんだって」

「そ、それは本当ですの！？」

「わわっ！　セシリア、声が大きい！」

「す、すみません……」

こほんと咳払いして気持ちを落ち着ける。しかしそれは体面状のことで、彼女の内心は今にも飛び上がりそうなほどハイになっていた。

「それで、詳しく聞かせてもらえます？」

「詳しくもなにも聞いたとおりだよ。この噂、学園中で持ちきりなんだって」

「それはカイトさんも承諾済なんですの？」

「そこはよくわかんないんだけど、なんでも女子のなかだけの取り決めみたいよ」

学年別トーナメント。セシリアにとってはブルー・ティアーズに経験値を効率よく積むための通過儀礼のようにしか捉えていなかったが、そんな話が持ち上がっているとあらばこの行事の意味はガラリと変わってくる。いや、経験値云々も二の次となる。

（勝てばカイトさんと付き合える……）

優勝した姿を見ればいくらキングオブ朴念仁のカイトでも自分の魅力を再認識するはず。そして、そんな魅力あふれる自分から告白されたら断るなんて出来ないはずだ。

なんて魅力的な提案なんだろうか。学年別トーナメントの存在意義はこれだけの為にあるとすら思う。そうと知ったらこんなところで油を売っている暇はない。

「あ、ちょっとセシリア！？」

脱兎のごとく駆け出したセシリアは脇目も振らず、アリーナに向かっていった。

●

それから程なくして、ＩＳスーツに着替えたセシリアが第三アリーナに出ると、

「「あ」」

時を同じくして現われた鈴の姿を見て、ふたりそろって間の抜けた声を上げてしまう。ちなみに彼女もスーツに着替えていた。

「奇遇ね。あたしはこれからトーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

彼女らの間でバチバチと火花が散る。二人が狙うのは当然優勝、引いては一夏ＯＲカイトとの交際権利だ。交際を求める相手は違っていても、互いが強力なライバルであることに代わりはない。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはっきりさせておくのも悪くはないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらのほうがより強くより優雅であるか、この場ではっきりとさせましょうじゃありませんか」

言い終わるが早いか、二人の待機状態のＩＳが粒子に変換、０．５秒でアーマーに変貌、彼女らの体に装着される。

幸いアリーナが開放して間もないので人はいない。二メートル程飛行し、距離を取ると互いのメインウェポンを構える。

「では一一、」

セシリアが《スターライトｍｋ?》のセーフティを解除した瞬間、響くのは大音響。猛り狂う魔弾がその凶牙をぎらつかせた。

「「!?」」

スリップしたようにも見える緊急回避で弾丸を回避した彼女たちはその射手を睨み付ける。

腕を組み、こちらを見下すような突き放した視線。纏う黒はアリーナを支配するだけの威圧を伴う重厚な鉄機(アイゼン)。

ドイツ第三世代ＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』。登録操縦者は一一、

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……！」

セシリアが苦々しく吐き捨てた。ティアーズ型に並ぶ欧州連合のトライアルに登録されたレーゲン型。だが、彼女にとって企業同士の小競り合いなど気にする必要はない。

彼女はカイトを張り倒した最低の女とセシリアのなかでレッテルが貼られていたからだ。

「……どういうつもり？　いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

邪魔され、頭に来ているのか《双天牙月》を肩に預けた鈴が半ば無駄だと思いながらもラウラを問いただす。いつでも仕掛けられるように鈴は衝撃砲のロックを少しずつ解除していく。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

せせら笑うラウラに鈴、セシリアの唇が釣り上がる。

「何？　やるの？　わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行（はや）ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも共通言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？」

怒りを辛うじて押し殺し、言葉のみで応戦する二人。ここで手を出したらこの女に負けてしまう。そういったプライドから言葉だけに

したのだが、

「貴様ら風情が私と同じ第三世代の専用機持ちとはな。嬉しくて泣けてくるよ。数くらいしか脳のない国と、古いだけが取り柄の国はよほど人材が溢れているようで羨ましいかぎりだ」

ブチンッ！

二人の堪忍袋の緒が弾け飛んだ。甲龍、そしてブルー・ティアーズの全武装の最終安全装置が外れる。

「この人、スクラップがお望みみたいねっ！」

「そのようですわね！」

「はっ！　二人がかりで来たらどうだ？　教官の弟だけということ以外秀でたところがない劣等種と、へらへらと人に媚びへつらう事しか出来ない人形（プッペ）に構っているだけの低俗な女ごときに私が負ける筈などない」

「「ッ――――！！！」」

怒りが彼女等のバロメーターを振り切り、理性という人間の最終安全装置を破壊した。もう二人の脳内にはラウラを打ち落とす事のみしか考えられていない。

「今なんて言った？　あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたんだけど！？」

「この場にいない人間の侮辱までするとは、その軽口、二度と叩け

ぬようにして差し上げますわ！」

「御託はいい。――とっとと来い」

「上等ッ！！」　「上等ですわッ！！」

両手を広げてアピールするラウラに向け、セシリアと鈴の専用機が空を走った。

●

「だから誤解だってば、セシリアさんみたいな人が僕なんかと付き合うわけないよ」

「……」

いや、そんなじっと見られても……。あれから三十分近く弁明を続けているけれどシャルルはますます機嫌が悪くなっていく一方だ。

ちゃんと事情を説明しているのに、どうして納得してくれないんだろう……。

「はぁ……」

シャルルに聞こえないくらい小さく息を吐く。その矢先、廊下を女の子の一団が走ってくる。どうしたんだろう？

「第三アリーナで代表候補生三人が模擬戦やってるって！」

「みんな専用機持ちらしいよ！」

「マジで！？　急ごう！」

「……」

興奮する彼女たちの言葉を聞いて、歩く足が止まった。第三アリーナで三人の代表候補生が模擬戦、全員が専用機持ち。

「カイト？」

「……シャルル、第三アリーナに行こう」

「急にどうしたの？」

嫌な予感がする。何だか分からないけど、心の奥に何かが引っ掛かっている。それは不安を引き寄せ、僕の心をかき乱す。

唯事じゃない何かが起こっている、そう直感する。

「急ごう！」

「ふぇ！？　カイト！？」

シャルルの手を取って話に出ていた第三アリーナへと駆け出す。僕ら同様走っている生徒の間をうまく擦り抜け、あっという間にアリーナの観客席にたどり着く。

「カイト！」

「一夏！」

たどり着いた僕らに遅れて一夏と篠ノ之さんがやってきた。二人も騒ぎを聞き付けてやってきたようだ。

「緋神、一体何が起きている？」

「僕にもさっぱり。でも、代表候補生が模擬戦を――」

ドゴォン！

「「「「！？」」」」

遮るように響いた爆発に一斉にアリーナへと向いた。もうもうと立ち上ぼる煙を突き破って現われたのは、見知った色のＩＳ二機。彼女達の機体は攻撃によって各部のアーマーが砕け、ところによっては完全に装甲が剥げていた。

「鈴！　セシリア！」

「いや、二人だけじゃない」

篠ノ之さんが爆発の中心部を睥睨した。二人を追うように煙の中から飛び出てきたのは、漆黒の機体。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……！」

シャルルが苦々しく名前を呼んだ刹那、彼女の機体に装備された大型レールカノンが爆ぜる。

「くらえぇっ！」

赤熱した弾頭をかわした鈴がすかさず衝撃砲を応射した。最大稼働の衝撃砲、訓練機程度なら鉄塊に換えられる威力の込められたそれは空を裂きボーデヴィッヒさんに当たるかと思われた直後、

「ふっ……！」

何を思ったのか、鼻で笑ったボーデヴィッヒさんが右手を突き出した。瞬間、黒いＩＳの前で何かが爆発した。受け止めた、いや、かき消されたのか？

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

「くっ、こんなに相性が悪いなんて……」

鈴が悔しさに歯を食い縛る。あの一撃でもダメージを入れられないことに焦りを感じつつあるようだ。

勝ち誇った笑みを崩し、ボーデヴィッヒさんが瞬時に攻勢に転じる。肩と腰の装甲板についた突起部がスライドし、エネルギーのワイヤーを伴って多角的に鈴に接近する。

絡み合うような複雑な動きに翻弄されながらも鈴が衝撃砲で迎撃行動に移る。だが、四つもの多次元的攻撃のすべてを捌き切ることは出来ず、その内の一本が甲龍の脚部に絡み付き、その動きを完全に殺した。

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

鈴の援護をすべく、セシリアさんが背面のラックからビットを飛ばし、ボーデヴィッヒさんを追い詰める。

「ふん……。理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代兵器とは笑わせる」

嘲り笑いつつ、黒い機兵が空を駆ける。セシリアさんの精密射撃と四つのビットの連携をまるで踊っているかのような優雅な動きで回避を続けるボーデヴィッヒさんに向け、ブルー・ティアーズのスカートが起立し、二つの銃口が覗く。

ドドンッ！

強烈なバックファイヤを放ち、反応弾がシュヴァルツェア・レーゲンに迫る。ボーデヴィッヒさんはさして驚いた素振りも見せずに、ブレードのついたワイヤーで二つを打ち落とす。

「甘いですわよ！」

ギュン！

撃墜されることを予測していたのか、爆風を突っ切り青い四枚のフィンが飛び出した。うまい、爆発の影に忍ばせていたのか！

「それで取ったつもりか？」

呆れたように呟いたボーデヴィッヒさんの両腕が同時に持ち上がる。すると、ビットが見えない腕に捉まれたように黒い機体の数センチ手前で動かなくなってしまう。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

同時に発射される青い閃光と褐色の巨砲。それらは互いの威力を相殺し、光の華をアリーナの空に花開かせる。続けてもう一射しようとしたセシリアさんだけど、危ない！

「きゃあああ！」

ワイヤーを手繰り、振り下ろした鈴がフレイルと化しセシリアさんに激突し、地面に叩きつけられた。運動エネルギーも相まってかなりのダメージだろう、叩きつけられた二人のＩＳは酷く損傷していた。

上空から一気に急降下し、セシリアさんと鈴を見下すボーデヴィッヒさん。その目に感情らしき感情は見えない。まるで、道端に転がる石ころでも見ているようなそれ。

「くっ！」

ガシュッ！　と球状の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が開き、《龍咆》を展開する。

「甘いな。この状況で発射までのラグのある空間圧兵器を使うとは」

ドォン！

素早く右肩のレールカノンが傾き、轟音を響かせる。衝撃砲が打ち出されるよりも早く放たれた弾丸はマゼンタの球体を爆散させる。

だが、その一瞬がチャンスを作った。ブルー・ティアーズのウェスト・アーマーが立ち上がり、ミサイルが放たれる。ボーデヴィッヒさんが気付いた時にはそれは既に煙を吐き出し、発射されたあとだった。

ドガァァァンッ！

凄まじい爆発にアリーナ自体が振動する。転げるようにセシリアさんと鈴が爆炎から逃げ出してきた。よかった、二人とも無事だ。

「こんな至近距離でミサイルなんて、無茶するわね、あんた……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが――」

と、セシリアさんの言葉が途切れる。信じられないモノを見たと言わんばかりの視線の先には、

「嘘だろ……」

ああ、そうだね一夏。僕も夢だと思いたいよ。でも、これは紛れもない現実だ。空に佇むドイツの第三世代ＩＳは――、

「ノーダメージ……！？」

「終わりか？　ならば――」

あれだけの大爆発を間近で受けても、ボーデヴィッヒさんの機体には傷一つ付いていない。その理由は分からないけど、これだけは言える。

「セシリアさん、鈴、逃げてッ！」

「――こちらの番だ」

ギュイン！

腰からワイヤーブレードが勢いよく伸び、二人の首に巻き付くとそれを巻き戻す。

「くっ！」

「あああっ！」

苦しげに呻く二人の前に降り立ったボーデヴィッヒさんはその腕を、足を、体をなぶるように攻撃を続ける。これは模擬戦の行為を逸脱している。その行為を目の当たりにしてアリーナが静寂に包まれる。

「かっは……！」

「っあ……！」

響くのは一方的な暴力に為す術のない、二人の苦しげな悲鳴。それを快楽と感じているのか、ボーデヴィッヒさんの攻撃は激しさを増す。

バギィ！

「ＩＳが！」

度重なる攻撃に耐えられなくなった二人のＩＳがさらに破壊されていく。装甲が砕け、その下の素肌が痛々しく腫れ上がる。

「酷い、あれじゃシールドエネルギーが持たないよ！」

「このままダメージが蓄積しＩＳが強制解除されでもしたら、二人の命にかかわるぞ！」

そうだ、このまま放っておけばエネルギーが操縦者生命危険域（デッドゾーン）を切ってでもしろ、セシリアさんと鈴の命は……！

アリーナに張り巡らされたシールドに駆け寄り、それを叩いて向こう側にアピールする。

「止めろ！　止めてくれ、ボーデヴィッヒさん！」

「カイト、アリーナのシールドは防音だぞ！？」

「分かってる！　分かってるけど、でも！」

一夏に言われなくても分かってる。この壁がある限り向こう側に声が届かないし、助けにも行けないなことくらい。

でも、じっとしているのだけは嫌なんだ！

「止めろ、ボーデヴィッヒさん！」

「……」

僕の想いが届いたのか、ボーデヴィッヒさんがおもむろに顔を上げ

ると僕を見つめ、そして、笑った。

その瞬間、ボーデヴィッヒさんの行為の真意を悟った。

「今、ラウラは笑ってたよな、カイト。……カイト？」

「そうか……そういう事かよ……」

自分の鈍感さに嫌気がさしそうだ。怒りのあまり、拳がギリギリと悲鳴を上げている。

『私は貴様を必ず排除する』

『意地でも戦わざるをえない状況を作るまで！』

排除だと？　戦わざるをえない状況だと？

ざけんなよ、そんなに戦いたいなら上等だ、戦ってやろうじゃねぇか。お前ごとき凡兵に『俺』の大切な人を奪われてたまるかよッ！

「レイヴァー・デイッ！」

金色の燐光が煌めき、瞬間的に全身を黒い装甲が包み込む。そして、もう一言、黒い装甲のなかに隠された真の暴風（レイヴァー・デイ）を解放する祝詞を。

「『Ｄｉｅ－Ｗａｌｋｕｒｅ』ッ！」

装甲の継ぎ目から金色の燐光が噴き出し、ぐん、と全身のフレームが拡張する。鶏冠が二つに裂け、マルチブレードセンサーとなり、ハイパーセンサーがよりクリアになった視界を投影する。

「カイト、何する気!?」

「シャルルは下がっててっ!」

《ガルベストーン》を展開（コール）し、アリーナのシールドに銃口を押し付けると、トリガーを引く。

バシュゥンッ!

「……くそっ!」

零距離からのビームマグナムの砲撃を受けてもアリーナのバリアは健在。一発だけじゃ破れないか……ならば!

バシュゥン! バシュゥン! バシュゥン! バシュゥン!

続けざまに四連射。銃口が熱に耐え切れず、融解し始めているが気にしない。その分、シールドも結合崩壊を始めている。あと一押しか!

「ッおおおお!」

意志に反応して左腕に備えた腕部ラックが立ち上がり、《ディーン?》をそこに呼び出すとシールドを突き破る勢いを乗せてアリーナのバリアへと突き立てる。

ガッシャァァァン!

高周波ブレードの威力に耐え切れず、アリーナを取り囲んでいたバ

リアの一角がガラスが砕けるような音を響かせ崩壊する。

すぐさまレイヴァー・デイをその隙間にねじ込ませた俺はそのまま黒い機体へと疾駆する。

「ラウラ・ボーデヴィッヒーーーーーー！！！！」

第二十話　～黒い雨、穿つ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

カイト君、キレると途端に口が悪くなるよね……。お兄さん、ちょっと今後の展開が心配になってきちゃったよ。まあ、平気だとは思いますがね。

原作第二巻も後半戦、次回はカイトＶＳラウラをお送りします。ご期待いただければ幸いかと。

それでは、またの機会に。

第二十一話　～Ｃａｄｕｃｅｕｓ～（前書き）

第二十一話です。

ＰＶ１０万＆ユニーク１万達成いたしました！　こんな拙い文にお付き合い頂きまして有難うございます。この結果に満足せず、皆様を満足させるように致します故、これからも本作品をよろしくお願いします。

前振りが長くなりましたが、第二十一話『Ｃａｄｕｃｅｕｓ』幕が開きます。

第二十一話　～Ｃａｄｕｃｅｕｓ～

カイトとラウラが戦闘を開始する二十分程前。ＩＳ学園の南側に位置する停船所に到着した一席の船から一人の少女が降り立った。

黒いショートカットから覗く紫陽花色の瞳が周囲を見渡す。

「ここがＩＳ学園ですか……。噂には聞いていましたが、無駄に広いところですね」

感慨も感動もなく、ありのままの現状を口に出した少女はカラカラとキャリーケースを引いて校舎へと向かう。

専用機の最終調整が長引き、加えて交通機関の遅延で到着が遅れたせいで明日から授業に参加することになるが、果たしてこの場所は自分を『ドキドキ』させてくれる領域なのか。それだけが彼女の気掛かりだった。

「この場所は、前の場所と違うといいですが……」

空を見上げてそう呟くが、あまり感情を出すのが得意ではないのか、あまり期待しているようには聞こえない。

「……？」

ＩＳ学園の正門にたどり着いた彼女は学園内が慌ただしいことに気が付いた。何かの行事中なのか？　ならば是非とも参加したいところだ。

「少しいいです？　これは何の騒ぎです？」

少女は目の前の女の子を呼び止める。体育会系なのか、足をせわしなく動かしたままその子は答えてくれた。

「今ね、第三アリーナで派手な模擬戦やってるらしいんだー！」

「模擬戦ですか。そうですか、ありがとうです」

頭を下げ、アリーナに急ぐ女の子を見送る。模擬戦なんて本社にいたときに散々見てきた。今更興味をそそられるイベントじゃないが、それが逆に不思議だった。

（なぜです……？　どうしてこんなに『ドキドキ』してるです？）

どうして自分はそれに異常に興味を示す？　模擬戦なんて日常茶飯事過ぎて『ドキドキ』なんかしないのに、今の自分は一一。

（確かめたい……）

少女の足は自ずと向きを変え、そのまま人の流れに引っ張られるように第三アリーナに歩いていく。

そうして訪れた第三アリーナでは一一、

「ラウラ・ボーデヴィッヒーーーーーー！！！！」

ビリビリと鼓膜を震わせる少年の灼熱した叫びがこだましたまさにその瞬間だった。

「……ひゅっ」

喉が鳴って、唇が震える。意味の分からない言葉が紡がれるがその音は少女の耳には入っていなかった。学園に降りたってから初めて彼女の瞳に感情が浮かび上がった。

――歓喜と感動だ。

こんな気持ち、いつぶりだろう？　初めてＩＳに乗って蒼天を翔んだ時よりも遥かに胸がドキドキしている。

そう、自分はコレが欲しかった。氾濫した在り来たりなものじゃなく、もっと殺那的にしか見られなくて、それでいて永久不変な未知の世界。今、その世界の鱗片を垣間見た。

この場所は、いや『彼』は未知に溢れている。たった一言で自分をこんなにも『ドキドキ』させてくれている。陳腐な言葉を借りるなら、まさしくこの気持ちは――、

――恋。

黄昏の光を借り、アリーナを暴れる獅子に自分は心を奪われてしまったのだ。

なんて愚かしいんだろう、いや愚かで構わない。こんなにも『ドキドキ』しているなら、他のことはどうでもいい。

少女は呆然と彼を眺めた。空を駆け、地を疾走するあの少年を――。

●

「ラウラ・ボーデヴィッヒーーーーーー！！！！」

Ｉ（イオタ）を解放したレイヴァー・デイが風を切り裂いてボーデヴィッヒに走り込む。俺の叫びに過敏に反応した漆黒の機体が旋回し、こちらを振り向いた。

「緋神カイトッ！」

キュイン！

激しい憎悪を顕にしたボーデヴィッヒが叫ぶ。瞬間、セシリアさんと鈴の首を絞めているものとは別のワイヤーブレードがエネルギー光を引いて迫り来る。

感情的になっていながらもその攻撃は正確無比、刃が複雑な軌道を描いて狙うのは俺の急所、いやどこだろうと関係ない。当てさせない。

キィィィィン……

甲高い音を立てて粒子が結合、右腕のラックにもう一本の《ディー

ン？》が装備されると、背中の推進器ユニットを最大稼働させると空に飛び上がる。

ボーデヴィッヒの顔がこちらに向くのに合わせて、ワイヤーが地表から跳ね上がった。空中というアドバンテージを生かし、ワイヤーの動きがより複雑に、多角的になる。

だけど、それはこちらも同じ。それに、そもそも俺はこっちのほうが性に合うんでね！

「仕掛けさせてもらう！」

金色の光を纏うＩＳがブレードの二連続攻撃を《ディーン？》で弾き返すと即座に急制動、急降下をかける。ほぼ垂直な落下だ。その真下にはボーデヴィッヒの姿がある。

「頭が切れる男だと踏んだんだがな……私の思い違いか」

ボーデヴィッヒの腕が持ち上がる。瞬間、機体のエネルギーを一点に集める。それが次の瞬間には爆発し、レイヴァー・デイを大きく横に吹き飛ばす。

ギュン！

「『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』か！？」

すぐさま態勢を立て直し、地表を滑めるように再度『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を発動、数十メートルあった距離が一瞬でゼロになる。

ザンッ！

両腕が黒い斬撃を放つ。左右の腕から伸びる切っ先はセシリアさんと鈴を捕らえていたワイヤーを一刀両断する。

「貴様ッ！」

「シャルル程じゃないけど、俺も『高速切替（ラピッドスイッチ）』が得意でさ」

ジャキッ！

右腕に握られたのはビームガトリングガンの《フロイド》、刹那に呼び出したそれは四連装銃身を回転させると、

ドガガガガガガガッ！

ライトグリーンの光弾をさながら豪雨のように速射する。

「くっ！」

ボーデヴィッヒが《フロイド》の勢いに押され、一歩下がったその時を狙って声を張り上げる。

「一夏ッ！　シャルルッ！」

「おうっ！」

「しょうがないなぁっ！」

「一一なんだとっ！？」

二機のＩＳが俺の背後に降り立つ。一夏とシャルルだ。二人は負傷したセシリアさんと鈴を抱き抱えるとそのまま後方へ下がる。

「逃がすものかっ！」

ガギョン、とレールカノンが銃口を傾け、四人を狙う。そうはさせるかよっ！

「だあああああっ！」

ガンッ！

地面を蹴ると、そのままジャンプキック。大火力の砲撃が放たれる直前にレイヴァー・デイの脚部が当たり、ボーデヴィッヒの姿勢ごと射軸を逸らす。

炸裂音を響かせ、弾丸はすぐ脇の地面を粉砕した。爆風をうまく受け流して距離を取った俺に今度はボーデヴィッヒのＩＳが突進してくる。

かきぃん！

軽快な音を鳴らして互いの獲物がかち合う。こちらは高周波ブレード、向こうはトンファータイプのプラズマ手刀。

ギチギチと耳障りな音と絶え間なく散る火花の奥のボーデヴィッヒに問い掛ける。

「こんなもん、何が楽しいんだ、お前は」

痛くて、怖くて、反吐が出るくらい悪趣味で、相手を傷つけることがそんなにご満悦か？

「その気になったのか？」

「当たり前だろ」

自分の大切な人を傷つけられてキレない奴がいれば人間終わってる。

「俺と戦いたいとか言ってたよな？」

俺を排除したいとかさ。

「面白いじゃねぇか、やってみせろよ。でもな、」

互いに一歩も引かないつばぜり合い。その剣の奥に見えたボーデヴィッヒの赤い瞳を睨み付けて言葉にする。

「俺は、お前みたいなウサミミ女には絶対に負けないけどな！」

「抜かせ、人形っ！」

「黙れ、敗戦国の飼い犬ッ！」

ガキィン！　ギンッ！　ッガ！　ガァン！

二つの黒が高速で打ち合う。極限まで集中し、相手の太刀筋を見極め、それを掻い潜って攻撃に移る。

ボーデヴィッヒの攻撃は精密機械のように人体の急所を狙ってくる。

アキレス腱、膝の後ろ、股間、腹、肋骨の下、鳩尾、手首、二の腕、脇、鎖骨の上。無抵抗の人間なら十名弱を地獄送りにできる狂気の交響曲（シンフォニー）。

「はあああっ！」

と、ここに来てボーデヴィッヒの型が崩れ、右腕が突き出される。打突かと思われたそれは、不意にプラズマ手刀が消失した瞬間に別の意味に変化する。しまった！？

「もう遅い！」

全身が何かに押さえ付けられているように動けなくなる。鈴の衝撃砲やセシリアさんのフィンを止めたアレか！　警戒はしていたのに！

「そうなっては躱せまい。失せろ」

右肩の大型レールカノンが俺の顔を睥睨する。やばい、動けない！

「カイトッ！」

ダダダダダッ！

「アンティーク風情がぁ……！」

断続的なマズルフラッシュを煌めかせ、援護に駆け付けてくれたのはシャルルだ。ボーデヴィッヒは苦々しく吐き捨てると、後方に下がっていく。途端に体を押さえ付けていた圧迫感が無くなった。

「助かったよ、シャルル！」

「いくらなんでも無茶が過ぎるよ、カイト」

ジトッと湿気を多分に含んだ嫌な視線に頬を掻く。確かに、シャルの援護がなくちゃ砲弾とキスしてたところだからね。

「セシリアさんたちは？」

「あそこ。一夏がいるから平気だよ」

俺が壊したアリーナのシールドの向こう側、観客席にいる一夏を確認する。その横には体のあちこちが腫れている酷い姿のセシリアさんと鈴の姿があった。

あんなに怪我をして、すごく苦しそうで……。やっぱりお前だけは許せない、ラウラ・ボーデヴィッヒ。

「シャルル、援護頼める？」

「いやって言ったらカイトは一人で突っ込むでしょ？」

「当たらずとも遠からず」

「もう……」

苦笑いしながらもアサルトライフルを両手に構えるシャルル。その姿に心強さを感じるのは気のせいじゃないだろう。

左右のラックに備えた実体剣の他に後二本、《ディーン？》を展開し握り締める。訓練でしかやったことのない四刀流（カルテット・モード）。これにシャル

ルの援護が加わればいけるはずだ。

「雑魚が増えようが関係ない、この『シュヴァルツェア・レーゲン』の前では貴様も有象無象の一つには変わりの無いことを教えてやろう」

「やってみせろよ、ドイツ軍人ッ！」

ボーデヴィッヒが再びプラズマトンファーを両手に展開し、レイヴァー・デイが飛び出すのに合わせて加速を始めた。まさにその瞬間、

「Ａｓｓｉａｈ――」

ガギンッ！

突然割って入ってきたのは大小異なる二つの影。大きいほうはボーデヴィッヒを、小さいほうは『僕』の刃を受けとめていた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

ため息混じりに自身の身長よりも長い打鉄用近接ブレードを振るい、ボーデヴィッヒの攻撃を殺したのは千冬姉さん。ＩＳスーツを着用しないあたり姉さんがいよいよ化け物じみてきていることを伺わせる。

そして、もう一人。

「双方、こんな意味の無い喧嘩はやめるです」

僕のを受けとめているのは見たこともない女の子だ。黒いボブヘヤー。シャルルとはまた違った色合いの紫色の目。シャルルがアメジストなら、この子は赤みがかかった紫、ワインの色だ。

彼女はＩＳを部分展開しており、右腕一本で四本もの高周波ブレードを受け切っている。それが可能なのは、そこから伸びる武器、ギロチンによるものだ。

赤い紋様の刻まれたそれは首を切るための処刑道具ではなく、一種の芸術性を秘めるほど美しいものだった。

「模擬戦をやるのは構わん。が、アリーナのバリアまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

あっさりと承諾したボーデヴィッヒはＩＳを解除すると、千冬姉さんに敬礼をしてそのまま歩いていってしまう。

「緋神、デュノア、お前たちもそれで良いな？」

「分かりました。そうします」

「僕もそれで構いません」

口惜しいけど今は納得するしかない。この借りは学年別トーナメン

トで返すとしよう。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁じる。解散！」

パンッ！　と千冬姉さんの手が拳銃じみた音を響かせると、アリーナにいた生徒が蜘蛛の子を散らしたようにあっという間にいなくなってしまう。

で、残ったのは僕にシャルルに千冬姉さんに、

「おい、そこの」

「？」

「そうだ、腕にそんなけったいな代物を付けているお前だ」

「うるむの事ですか？」

話に入れず、仕方なくギロチンでアリーナの地面に絵を描いていた女の子が顔を上げた。

そう、この子だ。見たところ一年生みたいだけど、右腕に展開しているＩＳの装甲は訓練機のものじゃない。

もしかしなくてもアレは専用機の一部だ。だけど、この学年に専用機持ちって他にもいたかな？

「お前は誰だ？」

「あれ？　千冬姉さん、知らないんですか？」

てっきり知っているものばかり。

「学年全員の顔を暗記しているわけではないが、こんなとぼけた顔を見忘れるはずはないからな。ましてや専用機持ちならな」

「うるむはとぼけた顔をしてるですか？」

「……あの、どうして僕に聞くの？」

ちょっとたじろいでしまう。ずずいっ、と女の子が顔を近付けてくるんだからしょうがないでしょ。

「とりあえず、名前と所属クラスを教えてくれ」

「了解です」

右腕のアーマーを収納したその子は表情を崩さないまま名乗った。

「竜胆（りんどう）うるむです。明日からＩＳ学園に編入される予定ですので、よろしくお願いしますです」

今月に入って三人目の転校生に学年別トーナメントがさらなる波乱になることをなぜだか僕は予感した。

●

ボーデヴィッヒとの模擬戦もとい喧嘩から一時間後。場所は保健室。そのベットの上には打撲の治療を受けてあちこち包帯の巻かれた鈴

とセシリアさんがいた。しかし、その表情は随分と膨れていた。

「別に助けてくれなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「お前らなぁ……」

口を開いたかと思えば憎まれ口。まあ、僕自身がイラッてきたから介入したんだし、そもそもお礼をいわれるようなことじゃないんだけど。

「またまた、二人とも無理しちゃって」

「？　シャルル、無理ってどういうこと？」

シャルルが紙コップにお茶を注ぎ、こちらに持ってくる。無理をしてるってどういうこと？

「二人とも好きな人にカッコ悪いところを見られて恥ずかしいんだよね？」

「「？」」

一夏と顔を見合わせる。僕らの耳には届かなかったけれど、それはセシリアさんと鈴の耳にはしっかりと届いたらしい。途端に顔を真っ赤にして怒りだした。

「なななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！　ここここれだから欧州（ヨーロッパ）人って困るのよねぇっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！　そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

あわてて否定しながらシャルルの渡した紙コップに口をつける。シャルルが何を言ったのか気になるけど、

「ところでさ、二人はどうしてボーデヴィッヒと模擬戦なんかやってたの？」

バフッ！

「うわぁぁぁっ！？」

尋ねた瞬間、二人の口が霧吹かれた。キメの細かなミストはすぐそばのシャルルを頭から濡らしてしまう。あ、虹だ。

「いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわ……」

二人とも僕と一夏から目を逸らしてゴニョゴニョと呟いた。随分と言いにくそうだ。ボーデヴィッヒの奴、いったい何を言ったんだ？

「あ、もしかしてカイトと一夏のこと、」

「「あああっ！」」

ガバーッ！

何かを言わんとしていたシャルルを二人が超特急の勢いでベットに押し倒した。

「あんたはホンットに一言多いわねぇ！」

「そ、そうですわ！　まったくです！　おほほほほ！」

「むぐー！　むぐぅー！！」

いや、あの、力みすぎてませんか？　シャルルの顔が青ざめてきてるよ。

「二人とも、シャルルが苦しがってるから止めてあげてよ。それに怪我をしてるんだから無理はしちゃいけないよ」

と、二人の肩を軽くつつく。

「「〜〜〜っ！！！」」

言葉にならない悲鳴をあげて、セシリアさんたちはその場に蹲ってしまう。

「「……」」

「あ、その、ごめん……。そんなに痛いなんて思ってもみなかった……」

恨みがましく睨まれ、素直に頭を下げる。二人の様子を見るかぎり、どれほど痛いのかが痛いくらいに伝わってくる。

ドドドドドドド……ッ！

「な、なんだ？　何の音だ？」

「削岩機ってオチじゃないことは確かだね……」

「しかも、だんだん近づいてきて――」

ドカーン！

シャルルの言葉を遮るようにドアが空を舞った。比喩的表現じゃなくて、現実の光景として。人生初の体験に茫然となっている僕らをよそに保健室は――、

「織斑君！」

「デュノア君！」

「緋神君！」

瞬間的に女の子の雪崩の直撃を受け、室内が女子で埋まる。さらに、彼女たちは僕らを囲い込むように並び、奪い取るがごとく手を伸ばしてきた。

見渡すかぎりの手、手、手。トラウマになるレベルだ。

「な、な、なんだなんだ！？」

「みんな押さないで、保健室が持たないよ！」

「ど、どうしたのみんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「これ！」」

混乱する僕らにバン！　と突き出されたのは学内の緊急告知文の掲載された申告書。えっと、なになに……。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組（ツーマンセル）での参加を必須とする。なお、ペアの出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする、締め切りは』、」

「緋神君、そこまででいいから！　とにかくっ！」

そして再び伸びる手のお花畑。B級ホラーだ。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「一緒に頑張ろう、緋神君！」

もしかしてさっきの一件があったからペアの参加が義務付けられたのかな？　しかし、教師陣の対応も早いけど、一年生の情報網も負けず劣らず早い。現にここにいるのは全員一年生だ。みんな、噂の男子と組もうと躍起になっているんだろう。

「え、えっと……」

ふとシャルルが困り果てた顔をしているのに気が付いた。あ、そうか、シャルルは女の子なんだった。タッグを組むとなると、正体がバレる可能性があるかもしれない。

と、困り顔のシャルルと目が合うけど、すぐに視線を逸らしてしまった。遠慮しないでって言ったのに、しょうがないな……。

「みんなごめんね、僕はシャルルと組むことになってるんだっ！」

声を張り上げると、わあわあ騒いでいた女の子がしぃん、と静かになった。き、気まずい……。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりは良いし……」

「男同士っていうのも絵になるし……ごほんごほん」

う～ん、まだ押しが足りないのかな。仕方ないね、ジョーカーを切らせてもらおう。

「代わりっていうとアレだけど、」

ドンっ

一夏の背中を押して女の子の渦の中心に投げ落とす。

「一夏はみんなの要望に答えてくれるよ☆」

「カイト、お前なぁ！？」

ごめんね、一夏。シャルルの正体がバレるのに比べたら、君の犠牲なんて月とスッポン。比べるまでもないよね。

「そうよね、二人がダメでもまだ織斑君がいるし……」

「それにうまくいけば千冬様にも会えるかもしれないし……」

「くぅぅぅ……」

ジリジリと一夏を窓際に追い詰める女子一同。おっと一夏、そんな絶望的な顔をしないでよ。僕は友達として鈍感な君の背中を押してあげただけなんだから。

「俺は……俺は……！」

「「「織斑君ッ！」」」

「悪い、みんな！」

がらっと保健室の窓を開けるとそこから逃げていってしまう。チッ、ヘタレめ。

「みんな追え、追うのよ！」

「サーチ&デストローイ！」

「焼き討ちじゃあああっ！」

テンションＭＡＸの女の子は我先にと窓を潜って一夏を追跡する。

それに紛れて鈴も一夏の後を追って窓を潜っていったのは見ないふり。

君とまた生きて出会えるように神様に祈ってるよ。頑張ってね、一夏。

「カイトって、意外と鬼畜だよね……」

「そんなことないよ」

シャルルが何か言ってるけど気にしない。一夏の断末魔が聞こえるけど気にしない。

「カイトさんっ！」

「な、なにかな、セシリアさん？」

安堵のため息をはいた僕目がけてセシリアさんが飛び出してきた。ロケット並の速度に驚いた。

「わたくしと組みましょう！　わたくしのブルー・ティアーズなら、カイトさんの動きをアシスト出来ますわ！」

確かにセシリアさんと組むのも選択肢の一つだけど、今回に限ってそれはありえない。

「セシリアさん、君のＩＳはダメージが酷いって聞いたよ？」

「そ、それは大丈夫ですわ！」

「いいえ、許可できません」

いつからいたのか、山田先生がセシリアさんの申し出を却下した。

「オルコットさんのＩＳですが、ダメージレベルがＣを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ」

「ううぅ……！　ですが……」

「いいえ、ＩＳを休ませる意味でもトーナメント参加は教師として許可できません」

セシリアさんの言い訳を聞くまでもなく、山田先生はそれを拒否した。

山田先生の言うとおりだ。損傷が酷いＩＳを酷使してしまうと、内部バイパスが狂ってしまう恐れがある。それはＩＳのコアが自己進化する特別な学習ＯＳを積んでいることによる。

蓄積された戦闘経験により、より操縦者とシンクロした動きを可能にするのがＩＳが現世代最強の兵器と言われる最大の理由だったりするのだ。

「それはわかっていますが……、わかっていますけど……。う～～」

わかっていても納得できないのか、セシリアさんが山田先生をにらみつけて唸っている。

ボーデヴィッヒに仇を討ちたいのかな。なら、大丈夫だよ。

「安心して、セシリアさん」

「カイトさん？」

「君を傷つけたボーデヴィッヒは僕が必ず倒すから。だから、今回は応援してくれないかな？」

「そう言う話ではないのですが……」

なぜだかため息を吐いたセシリアさんだったけど、納得してくれたのかゆっくりと首を縦に振った。

「分かりましたわ、カイトさんがそう仰るなら……。ですが、このわたくしが応援して差し上げるんですから、負けることは許しませんからね」

「任せておいて！　ね、シャルル？」

「うん、オルコットさんの思いに応えられるよう頑張るよ」

「美しい友情ですね、先生もちょっと羨ましいです」

ここに学年別トーナメントを制覇するための最強コンビが誕生した。目指すは打倒ボーデヴィッヒ、そして優勝だ。

……最強コンビってちょっと痛いよね。今更ながら恥ずかしくなってきた……。

●

「あ、あのね、カイトっ」

「うん？」

セシリアさんのお見舞いの帰り、シャルルが口を開いた。気のせいか、ずいぶんと語尾が強い。

「あの、遅くなっちゃったけど……助けてくれてありがとう」

「何かしたっけ、僕？」

むしろお礼を言わなくちゃいけないのは僕の方だ。アリーナでシャルルが援護してくれなかったら、顔面に風穴が出来ていたからね。

「ほら保健室で。トーナメントのペアを言いだしてくれたの、すごく嬉しかった」

「気にしないでよ。事情を知ってるのは僕と千冬姉さんだけなんだから、サポートするのは当然だよ」

それにバレたら僕の命もないし、と心の中で付け加えておく。つまり自衛のためでもあったんだけど……、

「そんなことないよ。それが自然と出来るのは、カイトが優しいからだよ。誰かのために自分から名乗り出られるなんて、すごく素敵なことだと思う。僕はすごく嬉しかったよ」

「買いかぶりすぎだよ、僕はそんなんじゃないよ」

シャルルは熱心に感謝の意を示してくる。こそばゆくて妙に顔が熱くなる。シャルルは僕を過大評価しすぎてるよ。

熱を醒ますために頬をパタパタと扇ぎながら部屋へ戻るための一歩を踏み出した、瞬間。

「男同士で照れているのはちょっと危険に見えるですよ」

「「わあ!?」」

「……そんなに驚かれると、うるむもショックです」

ぬっと僕とシャルルの間に現れた女の子に揃って悲鳴を上げてしまう。傷ついたのか、がっくりと肩を落とす女の子は、アリーナに千冬さんと一緒に乱入してきた——

「竜胆うるむさん?」

「うるむの名前、覚えてくれたですか」

少し元気になったのか、声に覇気が戻った。しかし、この子は表情があまり変わらないなぁ。鉄面皮とはまさにこの顔のことを言うんだろう。

「それで、その竜胆さんが僕らに何の用かな?」

シャルルがどうしてか、むすー、としていて言葉も刺々しい。なんで?

「カイトはお昼食べたです？」

「え？　いや、まだだけど……」

「決まりですね」

シャルルを完全に無視した彼女にガシッと手を掴まれて、そのまま引っ張られる。おお、ひんやりした手だなぁ、じゃなくて！

「あの、竜胆さん？」

「さん付けはいらないですよ。うるむのことはうるむでいいです」

「じゃあ、うるむちゃん、どうして僕の手を引っ張るのかな？」

あと、出来れば手を離してほしい。無言で僕らの後を追うシャルルが般若の形相をしているんだ。僕には直視できません。

「カイトもうるむもお昼がまだですから一緒に行こうと」

なるほど、出来ればそれを先に言ってほしかった。

「じゃあ、僕も行く！」

ガシッ！

「シャルル……。君もどうして僕の手を引っ張るんだい？」

「い、良いでしょ！？　竜胆さんも握ってるんだからっ！」

それを言われたら反論できないんだけどさ、シャルルさん。

「む、ライバル出現ですか。でも、うるむは負けませんですよ」

いや、君も変なこと言わないの。ライバルってなにさ?

期せずして、絵に書いたような両手に花状態に陥った僕。ハーレムだなんて諸手を上げて歓迎できない。なぜかって? 答えは単純明確。

「痛い痛い痛い! 二人とも力入れすぎ! 僕は逃げないから手を離してってば!」

「いや!」 「やです」

君たち女の子だよね!? 何でこんなに握力強いの!? 大丈夫だよね、食堂に到着するまでに手が握り潰されたりしないよね!?

(誰でもいいからなんとかしてぇーーー!)

心の叫びが痛みに握り潰され、声も出せぬまま僕は食堂に連行された。

第二十一話　～Ｃａｄｕｃｅｕｓ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

新キャラ&オリジナルキャラの竜胆うるむちゃん登場！　不思議系の女の子ですが果たして彼女の登場が話にどんな風に作用するのか、作者である僕にも分かりませんが、読者の皆様が受け入れてくれると幸いです。

では、またの機会に。

第二十二話　～響け、開戦の号砲～（前書き）

第二十二話です。

第二巻も残すは後僅か、その刹那を雷鳴のごとく疾走しよう。皆様も遅れなきよう……。

では第二十二話『響け、開戦の号砲』、幕が開きます。

第二十二話　～響け、開戦の号砲～

「んぐ、むっ、ん、ん、ん、むぐむぐ」

突然だけど、胃袋の大きさをみんなは知っているだろうか？　中身がない状態では約５０ミリリットルしかない。

「んぐ、もぐ、んぐ……」

そして食物を押し込み、胃が膨らんでお腹を圧迫したときに僕達は満腹感を得られる。

「もぐ、もぐ、んぐ、はぐ」

人間は１．８リットル程度の食物を胃袋に押し込むとお腹一杯、つまりは満腹状態になる。これ以上は入らないとされている。

うん、だからさ、

「むぐ、もぐ、はぐ、んぐ」

都合６キロの特大プリン（？）が人間様のお腹のなかに入り込むわけがないんだよ。

「……すごいね、竜胆さん」

「そんな細い体のどこにキャパシティがあるんだろう……」

シャルルが失笑しながらそう呟いたのに激しく同意する。

目の前に鎮座ましましている、どこか圧倒的に間違っているとしか思えないこの超特大プディング。値段にしてなんと七千円。もはや食べ物の金額じゃない。

なお、３０分で完食すれば返金してくれる所謂チャレンジメニューなんだけど、食堂のオバチャンたちは何を考えてコレをメニューに組み込んだのか、甚だしく疑問だ。食い切れるわけがない。

「カイトも食べるです？」

「いや、僕が食べちゃ駄目だから」

「じゃあ、シャルルちゃんはどうです？」

「僕はそんなにお腹すいてないから、竜胆さんが食べちゃっていいよ」

「そうですか。では遠慮なく。はぐ」

そもそも僕らは見ているだけで胸焼けがしそうなんだ。差し出されたカラメルたっぷりのプリンを二人してやんわりと押し返す。

なんでこの竜胆うるむちゃんはいたって涼しい顔のままリスっぽくほっぺたを膨らませて特大プリンをかっこめるんだろうか？

「カイト……、コレが日本で噂に聞くストマック・ブラックホールなんだね……」

「シャルル、それ違うから」

うるむちゃんは早食いのチャンプで「俺の胃袋はブラックホールだ」

なんて言わないからね……たぶん。

「んぐ、はぐ、美味しいです」

ならよかったけど、まさかこれを食べるためだけに食堂に来たわけじゃないよね？

結局、見事に制限時間内に完食し、七千円をふんだくったうるむちゃん。すごく悔しがっていた食堂のオバチャンの顔はしばらく忘れそうにない。

「美味しかったです。また注文するです」

……まあ、口喧しく言うことじゃない気もするけど、タダにさせすぎていつか出禁を食らわないようにね。

●

「カイトはサイクロン社って知ってるです？」

「え？」

チョコぷりん（これはさすがに通常サイズ）を頬張りながら尋ねてきたうるむちゃんの台詞を思わず聞き返してしまった。

思考するよりも先に、隣に座るシャルルに目配せをする。いきなりの問い掛けの真意を謀りかねているのは同じのようだ。

「詳しくは知らないけど、名前だけなら」

「ちょっと意外ですね。ＩＳに関わる大多数の人なら知ってる企業だと思ったんですが」

相変わらずの鉄仮面をかぶったまま、うるむちゃんの話は進む。

「サイクロン社は環太平洋圏を中心とした世界でも最大級のＩＳ企業団体です。本社はアメリカですが、ヨーロッパや日本なんかにも進出してるですよ。とはいっても、日本では倉持技研がある所為で余り目立った活躍はしてませんが」

それでもシェアはそこそこありますけどね、と続けながらも仄かに甘い香りを漂わせるぷりんをちまちまと口に運ぶ。

「先ほども述べたですが、サイクロン社は幾つもの企業の複合体です。なので、その発揮する領分が異なるです。兵器開発、電子系、ロケットエンジンに炸薬技術。今更時代遅れと取れる部署も幾つかありますが、いいえ、だからむしろ現在の地位を築いてこれたと言えますが、興味ありませんですね。うるむには興味ない話です。シャルルちゃん、さくらんぼ食べるです？」

「僕はクリームのついたさくらんぼはあんまり好きじゃないんだ」

「気が合いますね、うるむもです」

何を思ってシャルルに話し掛けたのかまでは分からない。でも、その交差した視線に二人なりの意思の疎通があったように見えた。

だからこそ、

「うるむはサイクロン社から送り込まれたテストパイロットですから、仲良く出来そうですね。デュノア社の隠し子ちゃん」

そんないびるわけでもなく、同情するわけでもない、何も思うところがない傍観者（エキストラ）じみた言葉が彼女の口から紡がれたことが癪に触った。

「うるむちゃん、君がどこまで知ってるのかなんて僕は知らないけど、でもこれだけは言える」

「？」

「二度と友達（シャルル）に隠し子とか言うな。ここじゃどうでもいいだろ、そんなこと」

シャルルから聞いたくらいで何を偉そうに、とは自分でも思う。だけど、高々知り合って数時間の子にだけは言われたくないだろう。だったらまだ青臭い理想をもてる僕のほうが言ってやったほうがいい。

「隠し子だからって忌避されなくちゃいけないのか？　違うだろ、僕らがすべきなのは傷口に塩を塗ることじゃない」

人を生まれで差別するのは矮小な俗物がすることだろう。それは詭弁だといわれるし、そんなことは苦しみを知らないから言えるんだとも言える。

でも、シャルルが胸の内を吐露したあの日。確かに苦しみの半分は僕の胸に移った。目に見える像ではないけど、その痛みは僕の空虚

な胸に突き刺さったんだ。

「僕らがやるべきなのは、いつもどおりでいること。気なんて使うだけ負担なんだから、知っても知らない振りをするんだよ」

正しいことを言ってるつもりはないし、偽善者ぶるつもりもない。所詮今の僕も舞台装置の一部もしくは一般人だからさ、シャルルが僕らをキャスティングするまでは大人しくしてろって事だよ。

「……カイトの言い分は分かりましたです。撤回しますです」

「あ、いや、いいよ。気にしてないから」

頭を下げたうるむちゃんにシャルルが慌てた様子で手を振って答える。素直に非を認める辺りにうるむちゃんの素直さが伺えた。あれ？

「シャルル、顔赤いよ？」

「だ、大丈夫！　大丈夫だからっ！　あはは……」

「そう？」

気になるところではあるけど、本人がそう言うならそうなんだろう。

「そ、それじゃあ先に部屋に戻るねっ！」

「え？　あ、うん」

「じゃあ、また後で！」

早口でまくしたてると、あー、呼び止める前に行っちゃったよ。何か用事があったのかな？　先に部屋に戻っただけだから気にする必要はない、よね？

「カイトも部屋に戻るです？」

「僕は別に」

とりわけ急ぎの用もない。ＩＳの訓練をしようにもボーデヴィッヒとの戦闘でＩ（イオタ）を使っちゃったから暫くは無理だ。アレを使うとコアが一定時間不調をきたすんだよね。

「じゃあ、うるむの部屋に来ませんですか？」

「うるむちゃんの部屋に？　いいけど、急にどうして？」

「二人だけというのもなかなかに魅力的ですが、部屋に行ってルームメイトと三人で話した方が盛り上がるですよ」

「そういうことなら」

こちらとしては断る理由はないので首を縦に振る。

「なら、行くです」

空になったデザート皿を流し台に放り込んだうるむちゃんに手を引かれ寮へと移動する。で、彼女の部屋に着いたわけですけど。

「……うるむちゃん、君の部屋って、ここ？」

「そうですよ。では」

見たことのあるルームプレートに心の臓が打震える。部屋のドアが開かれるの似合わせてそれは高らかに鳴り響く。歓喜と勘違いしそうになるけど、これはまさしく――

「「あ」」

ばったりとドアを開けた傍から見えた見知った顔。うん、この展開は予想が出来た。だってこの部屋見覚えあるんだ。天磐のついたベッドとか、高級感溢れる家具とか。まあ、昨日泊まったわけだし知っていて当たり前なんですが。

「うるむのルームメイトのセシリア・オルコットさんです」

「カイトさん……？」

こめかみをひくひくさせているセシリアさんを見て抱いた感情はまさしく恐怖。歓喜？　何それ、食えるの？

正座確定かな、これ。

●

体が熱い。こんな気持ちは初めてだ。喜でも怒でも哀でも楽でもない、胸の奥が締め付けられ、甘美な痛みに震える。無理に言葉にするなら、泥のような砂糖の底無し沼に浸っているとでも言うべきか。

「……」

ベッドに四肢を投げ、やわらかな毛布に身を預けるシャルルの表情は得体の知れない感覚に戸惑っていながらも、どこか嬉しそうで恥ずかしさがスプーン一杯分混ざった微笑だった。

「カイトって、ちょっと強引だよね……」

さっきの食堂の一件を思い出していびるように天井に話しかけた。

サイクロン社のテストパイロットである竜胆うるむの『隠し子』という言葉に心は痛むが別段感慨はない。隠し子であることは事実であるし、否定することは出来ない。彼女の声はそのまま無視するつもりだった。

でも、それを是としなかったのはカイトだ。

『二度と友達（シャルル）に隠し子なんて言うな。ここじゃどうでもいいだろ、そんなこと』

急にそんな言葉が飛んできた。痛みも透過していて自分のことなんてどうでもいいのに、だけど不思議だ。おかしいのだ。たったそれだけの言葉が嬉しくて、気恥ずかしくて、それでもやっぱり嬉しくて。自分が壊れてしまったんじゃないかと錯覚してしまえた。

『隠し子だからって忌避されなくちゃいけないのか？　違うだろ、僕らがすべきなのは傷口に塩を塗ることじゃない』

――カイト、僕を無視しないでよ。これでも我慢強くて、こんな言葉くらいじゃ傷もつかないのに。なんで君はそんなにお節介なんだ

よ。ひどいよ、馬鹿。カイトなんか嫌いだ。

そう心の中でカイトを卑下しているのに、どうしてかカイトが嫌いになれない。むしろ頬が緩みかける。他人事なのに自分の事のように受けとめて、怒りを顕にするカイトの横顔に心が震えて、喉まで震えが伝播する。

「カイト。緋神カイト」

自分をこんなにしてしまった悪魔の名前を呼ぶ。いつもは自己主張をせず人畜無害な羊のくせに、そうかと思えば誰よりも強い獅子へと変貌してその力を振るって他者を守ろうとする。その姿に触れようとしても天秤のように実体を分け隔て、こちらに本心を見せないのだから余計に質（タチ）が悪い。

「やっぱり嫌いだよ、カイトなんて」

言葉とは裏腹に破顔したシャルルの耳にドアが開いた音が聞こえてきた。羊の登場だ。

「た、ただいまぁ……」

「お帰り、カイト。何かあったの？」

「ついさっきまでセシリアさんに……ごめん。言いたくない」

よろよろ、ふらふらなカイトはそのまま頭からベッドにズドンと倒れこんだ。セシリアと何があったのかとっちめてやりたいけれど、それはまた後にしよう。

「カイト、制服は脱がないとしわになっちゃうよ？」

「あー、大丈夫だよ……。うん、僕は大丈夫」

「そうは言うけど、……カイト？」

「…すぅ……っぅ」

疲れがピークを迎えていたのだろう、一瞬で眠ってしまった。無理もないか、昨日と今日だけで余りにも沢山のことがあったのだ。シャルルもそれは同じだったが、カイトに比べれば髪の毛一本でしかない。

「しょうがないなぁ」

元通りになった窓にカーテンを引き、夕日をさえぎる。こうしたほうがゆっくりと安らげるだろう。

「……」

薄暗くなった室内。まるで今から自分が禁忌を侵そうとしているかのようにシャルルの胸がドキドキと鳴る。

（カイト、僕はね……って、ぼ、僕はなにやってるんだろうっ！）

カイトの顔を覗き込んだが、恥ずかしさに真っ赤になった顔を手で覆った。

『僕には君が必要なんだ』

眠っているはずのカイトの声がシャルルの脳裏でリピートされた。
あんなことを言われたの初めてだ。母親らが死んでからというもの、自分は父親の戦略的なモルモットとしてしか扱われなかった。灰色だったんだ、期待なんて持つだけ無意味で、それでも自分が生きているという実感（あかし）が欲しかった。

だから、あの言葉はするりと胸に入り込んだ。飾りなんていらない、ばか正直に思いだけを込めた人並みでしかない告白。実感して、この手に掴んだんだ。自分の居場所が、自分の存在が確かにあったと納得できたんだ。

「ズルいよね、カイトは」

自分はこんなにもいっぱい考えているのに、安らかに寝息をたてるカイトに少し苛立ちを覚えながらもシャルルは笑顔だった。ひどく優しくて聖母のようなそれだけど、同時にいたずらっ子のそれでもあった。

（ちょっと仕返ししちゃおっかな……。しても、いいよね？）

「ん……」

カイトの黒髪をかき分け、シャルルはそこへ唇を当てた。不快なわけがないが、余りにも気恥ずかしくてシャルルはその余韻を味わうよりも早くベッドに潜り込んだ。

「おやすみ、カイト」

未だ冷めやらぬ体の熱を抱きながら、シャルルは目蓋を落とした。

●

同時刻。学園の屋上に二つの影が延びていた。一つは長く、もう一つはそれの半分の長さ。

「何故です、教官！」

空よ割れろと激昂した声が茜に染まる夕刻の空に響き渡った。小さい影法師がぐわんと揺れる。

「何故、貴女があんな得体の知れない男をお側に置くのですか！？」

「やれやれ……」

答える声は多分に呆れを含んだものだった。駄々を捏ねる子供の世話を焼くのは得意ではあるが、これほどまでの聞かん坊も珍しい。頭を抑えながら千冬は口を開いた。

「何度も言わせるな。私には私の考えがある。それだけだ」

「その考えとは何ですか！？」

ラウラ・ボーデヴィッヒがさらに声を荒げる。気に食わない、完璧なこの人があんな気味の悪い男に関わるのか。許せない、許せるわけがない。

「お願いです、教官。再び私にご指導を。私ならば貴女のご期待にそうことが出来ます」

「ほう」

「大体、あの男は教官が手塩にかけるまでもありません」

「なぜだ？」

「奴は意志も力も弱い。自らの力量すら見極められず、その本質すら理解していない。そのような程度の低い劣等に教官が手を焼くなど、」

「――そこまでにしておけよ、小娘」

「っ……！」

ラウラの吹雪のような響きを氷結地獄（コキュートス）を持って、一刀の元に両断した千冬。眼光に込められたのは最上位の強者に君臨していたあのブリュンヒルデそのものの姿。月日が経とうとも錆付かない高貴な剣は今も堂々たる覇気を放ち、齢十五の少女を黙らせるには過ぎた代物だった。

「少し見ないうちに偉くなったものだな、ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐殿。その程度の階級で選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……！」

「私がなぜ緋神を傍に置いたのかと聞いたな。答えを知りたかったら、奴とぶつかってみろ。全力でな。そうすればわかるさ」

それだけ告げると、千冬はラウラを屋上に残して去っていった。茫

然としていたラウラが我を取り戻したのは、千冬がドアの向こうに消えた後だった。

悔しい。悔しい悔しい悔しい

色にかわる。各国からの来賓の数は凄まじく、生徒総出で会場の整理を行わなくてはならなかった。
と言ってもそれは数分前に終っており、僕ら男子三名は（内一名女子はいるけど）更衣室で待機している。

「しかし、すごいなこりゃ……」

一夏がモニター越しの会場の盛況ぶりを見て感嘆する。無理もないか、各国政府関係者に始まり、研究所員、企業エージェント、亡国のスパイ……はいないか、さすがに。とにかく、テレビで日夜眼にする顔触れが揃っていた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないけど、トーナメント上位入賞者にはチェックが入るけど、僕らにはあまりね」

「興味ないもんな」

就職氷河期なんてつまらない事を言うつもりはないけど、ここまで興味を持たないのもいささか問題か。まあ、僕には他にやるべきことがあるんだけど。

「カイト、お前はラウラとの対戦だけが気になるみたいだな」

「当たり前だよ」

鈴とセシリアさんはやっぱりトーナメントには参加できなかった。国家代表候補生たる彼女らの不参加はそれぞれの国で問題にされそうだけど、大丈夫かな二人とも。

「誰かを傷つけて平然としてるなんておかしいよ」

先日の戦闘の際に浮かべたボーデヴィッヒの残虐な笑みが脳裏を過る。あいつにセシリアさんたちへ謝罪させないと気が済まない。

「カイト、落ち着いて」

すっと僕の手を握ったのはシャルルだ。いつのまにか僕は拳を握り締めていたんだ。

「感情的にならないでね。彼女はおそらく一年の中では現時点で最強だと思う」

「わかってるよ、僕は落ち着いてる」

いまさら慌てたところでどうしようもない。やることはやったし後は本番で全力でぶつかるだけだ。

「カイト」

「どうしたのさ？」

モニターを食い入るように見ている一夏の隣からシャルルが僕をロッカーの影に引っ張ってきた。なんだろ？

「カイトはこの大会に出て問題ないの？」

「どうして？」

「どうしてって……。カイトはその、記憶がないって。だから……」

ああ、何だそんなことか。問題はすでに解決済みさ。

「一昨日にね、僕は正式に千冬姉さんの養子になったんだ。だから、記憶がないからって実験動物にされる心配はないよ」

まだ手続きは残っているけど、これで僕がここにいてもいい理由は出来上がった。本当なら一年くらいかかる手続きを二ヵ月ちょっとで済ませた千冬姉さんに脱法すると共に感謝をした。

シャルルはそれを聞いて安心したのか、ホッと胸を撫で下ろした。

「そっか、よかった」

「心配してくれてありがとう、シャルル」

「どういたしまして」

にっこりと笑顔のシャルル。こうして笑顔を見せてくれるなんて今月の頭には思っても見なかった。

「二人とも、トーナメント表が発表されたぞー」

一夏の声を聞いて、早足でモニターの前に戻る。確か僕とシャルルはAブロックで、一夏と篠ノ之さんは明日のBブロックだったっけ。

さてと、僕らの初戦の相手は一一、

「……カイト」

「うん、分かってる」

シャルルの真剣な声に僕は重厚に頷いた。何かが起きそうな予感はしていたけど、まさかここで的中するのか。液晶ディスプレイに表示された対戦表に緊張が走った。

Ａブロック一回戦第一試合、緋神カイト＆シャルル・デュノアＶＳラウラ・ボーデヴィッヒ＆竜胆うるむ――。

●

第二アリーナは最高潮に達している。熱気ゆらめくその中心に僕らはＩＳを展開して睨み合っていた。

「まさか一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたよ、緋神カイト」

「奇遇だね、まったく同じ事を僕も考えてたよ」

《ウィルマ》のグリップを握り、開戦の号砲が鳴るその瞬間を待つ。空中ディスプレイに数字が投影される。

5……

「貴様が教官に選ばれた理由など、どうでもいい。私にとっては貴様が選ばれたことが不服なのだ」

4……

「ゆえに排除する！　戦乙女（ブリュンヒルデ）の剣となるのはこの私だ！」

3……

「そんなこと僕にとってはどうでもいい。でも君は僕の大切な友達を傷つけた」

2……

「だから許さない！　人の痛みが分からない冷血人間なんかに負ける僕たちじゃない！」

1……

「「だから――っ！」」

試合、開始。

「勝つのは僕らだっ！！」　「勝つのは私だっ！！」

第二十二話　～響け、開戦の号砲～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

タイトルどおり学年別トーナメントの号砲が鳴り響きましたね。次回がバトルパート一辺倒ですが、皆様がお楽しみになられるような話に昇華できるように励みます。

ちなみに、皆様は厨二的なものはお好みですか？　僕は大好きです。ですから、これからちょっとアレな表現がちまちま入りますがご容赦くださいまし。

では、またの機会に。

第二十三話　Aパート　～慟哭の黒～（前書き）

第二十三話Aパートです。

久しぶりの前後編です。いやはや、タッグ戦とはかくも難しいものですね、痛感しました。頭痛いですわ。頑張りましたので、皆様に楽しんで頂ければ幸いです。

では、第二十三話前半戦『慟哭の黒』、幕が開きます。

第二十三話　Ａパート　～慟哭の黒～

「勝つのは僕らだっ！！」「勝つのは私だっ！！」

瞬間、ブザー音に重なるように《ウィルマ》を射出する。弾頭が弾け、濃緑色の尾を引くベアリング弾が会場をかける。

「ふん……」

ボーデヴィッヒの右腕が持ち上がる。来る、と思ったその時には二桁では納まらない数の鉛玉のスコールは凍り付いたようにぴたりと動きを止めた。

「開幕直後の先制攻撃。読めないとでも思っていたか？」

「……まさか。コレくらいは出来て当然じゃないのかな？」

「口の減らない男だ。反吐が出る」

ビシュンッ！

ボーデヴィッヒのＩＳ、『シュヴァルツェア・レーゲン』からブレードワイヤーが伸びる。同時に、控えていた真っ赤なＩＳがその背を飛び越えて現れる。

「うるむちゃんっ！」

「カイト、うるむを『ドキドキ』させてくださいです」

起伏のない声にあわせて、彼女の足が振り抜かれる。ウィルマの銃身で受けとめ、立て続けに振り下ろされるワイヤーの群れとその隙間を潜り蹴撃を繰り出すうるむちゃんを回避する。

ボーデヴィッヒの性格上、誰かと連携を取るとは考えていなかったが、うるむちゃんの攻撃が合間ったことで二人の攻撃には恐ろしく隙がない。

「動きが単調だな、貴様」

「ッ！？」

回避に気を取られていたせいか、ピシリ、とレイヴァー・デイの身動きが停止する。見ると、ボーデヴィッヒがピンポイントで僕に手を突きだしている。停止結界に引っ掛かったのか！？

「まずは一撃、もらうですっ！」

すかさず腕部の大型甲手が撃ち込まれる。身動きが取れないんだから当たるしかない――訳ないだろう。

「させるもんか！」

狙いすませたタイミングでシャルルがサブマシンガンを乱射、見事にうるむちゃんに命中させる。体操選手のような動きでシャルルから距離を取ったうるむちゃんをマシンガンで牽制しつつ、シャルルが右手に構えた得物をボーデヴィッヒに突き付ける。パンツァーフアウスト《ヴィットマン》だ。パイプのような発射筒を滑り、炸裂薬夾が勢い良く空を駆ける。

「チッ！」

後方に下がりながら肩のレール砲のリボルバーを回転させ、執拗に自機に追い縋る形成炸裂弾を打ち落とす。黒煙が漆黒のＩＳを被い隠すが、シャルルにはその避ける方向が見えているようだった。

「逃がさない！」

ヴィットマンの発射筒を投げ捨て、代わりにアサルトライフルを瞬時に展開したシャルルのＩＳである『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』がフィールドを疾走する。その読みどおり、加速した先には爆風から逃げ出たボーデヴィッヒの姿があった。

ダダダダッ！

「ッ……！」

二筋の火戦がシュヴァルツェア・レーゲンの胸元を掠める。流石はドイツの代表候補生か、反応スピードはかなり早い。

「カイトの相手はこっちですよ」

ガツッ！

援護に回ろうとした僕を牽制したのはうるむちゃんだ。回し蹴りが僕の手からバズーカを蹴り飛ばした。

続けざまに放たれた足払い。速度を殺さない巧みな体捌きに舌を巻きながら、バックステップで飛び退くと打鉄用近接ブレードとビームマグナム《ガルベストーン》を呼び出し、マグナムを背中のマウ

ントラッチにセットする。

『シャルル、援護は？』

『大丈夫だよ、カイト。まずはこのまま行こう』

『わかった。それじゃあ』

プライベートチャネルで即座に会議を行い、ブレードを構えた僕はうるむちゃんに斬り掛かる。

ガキンッ！

甲手と刃がぶつかり合い、火花を散らす。

「久しぶりですよ、こんなに楽しくて心がドキドキする戦いは」

顔には出さないが、心底そうだと言わんばかりの言葉を持って、近接ブレードの一撃を捌くと、同意を求めるかの如き一撃が僕に迫る。

「なら、いつでも相手してあげるよ」

垂直に蹴り上げた足が拳を弾き、そのまま踵落としとして攻撃に移行する。振り下ろされた黒い脚部を僅か数ミリの紙一重で躱したうるむちゃんと僕の間の地面が砕ける。

「それは魅力的な提案ですね。ですが、まずはこの勝負を勝たせてもらうです」

「生憎、負ける予定はないかな！」

二合、三合と切り合いながら少しずつうるむちゃんを後ろへと押していく。

「！」

負けじと出力を上げたうるむちゃんの正拳突きが赤い残光を残す。

『シャルル、行くよ！』

『うん！』

ギィィン！　と刀身で一撃を受けとめると、瞬時にうるむちゃんの伸び切った腕を足場に大きく跳び出す。

向かった先には、ボーデヴィッヒを追い掛けていたシャルルがこちらに向けてバックジャンプをした刹那だった。シャルルが僕に手を伸ばし、同じく僕も手を伸ばす。互いに伸ばされた手は一一、

ガチャッ！

すれ違い様の一瞬、マウントしていた《ガルベストーン》をシャルルが引き抜き、シャルルが投げたサブマシンガンを僕が受け取った。着地し、背中合わせになった僕達は同じタイミングでトリガーを引いた。

バシューン！　ズダダダダッ！

マグナム弾の閃光がうるむちゃんを捉えて吹き飛ばし、速射される弾丸が攻勢に転じようとしていたボーデヴィッヒの判断を遅らせる。

「シャルル。僕さ、ボーデヴィッヒのＩＳを見て言いたかったことがあるんだ」

「奇遇だね、僕もだよ。じゃあ、一緒に言おうか」

大胆不敵な笑顔のシャルルが転身し、ガルベストーンの銃口がこちらを振り向く。シャルルから受け取ったマシンガンで牽制しつつ、ガトリングガン《フロイド》を二門接続したものを腕部ラックに展開する。

「お前は、」

「君は、」

「「兎（バニー）のコスプレでもしてたらどうかなっ！」」

渾身の叫びに合わせて、パープリッシュレッドの火球とライトグリーンの弾幕がボーデヴィッヒ目がけて一斉に飛来する。

「貴様らっ……！」

苦々しく唇を噛み締めたボーデヴィッヒが回避に撤した瞬間を狙って、僕とシャルルの役割（ロール）を交替する。

「はあああっ！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で加速し、ビームガトリングを乱射してシュヴァルツェア・レーゲンに肉薄し、近接ブレードを振り抜く。

ギィン！

プラズマ手刀で防いだボーデヴィッヒの機体からワイヤーが伸びる。数で攻める気か。

「ここからは僕が相手だ、ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

●

バァン！

シャルルの両手に握られたショットガン《レイン・オブ・サタディ》が火を噴いた。拡散弾がうるむに飛び掛かる。

「っ……と」

深紅の機体が跳ねるように地面を滑る。一夏の白式にも負けず劣らずの高い機動性のＩＳらしく、シャルルの攻撃を避け続ける。

ダンッ！

体を旋回させてシャルルを正面に捉えたうるむが地面を蹴った。瞬時加速（イグニッション・ブースト）で爆発的な速度で散弾の幕を越えてシャルルに詰め寄ると、腕に備えた大型グローブを振りかぶる。

（ストレート！）

モーションから逆算したシャルルがバックジャンプで宙に飛び上がる。その足元を鉄拳が通り過ぎる。右手のショットガンが光に還り、次の瞬間にはその粒子はまったく異なる形状である近接ブレード『ブレッド・スライサー』を形成する。

『高速切替（ラピット・スイッチ）』、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？の大容量の拡張領域（バススロット）を活用した、事前呼び出しを必要としない戦闘と並列して武器をコールする、シャルルの十八番。

「てやぁっ！」

呼び出された実体剣がうるむに向けて振り下ろされる。身を屈め、前転をするように転がって距離を稼ぐうるむ。深追いはせずに、自らの距離を保つシャルルはカイトへチャネルを開く。

『カイト、平気？』

『まだ平気だよ。そっちは？』

『僕も大丈夫。このまま作戦を続けよう』

『了解。気を付けて』

カイトとの通話を切り、正面を向いてうるむと対峙する。シャルルが述べていた作戦とは、うるむを先に倒すというものだ。

ラウラは一対多に特化したバトルスタイルである。それは、自分側

が複数である状況では真価を発揮できないだろうということ。自分が全力を出すには他者を犠牲にするしかなく、この状況ならばラウラはうるむに手を貸さないだろう。

そう予想できればあとは簡単だ。一対一（ワンオンワン）に持ち込んでうるむを先に撃破、その後にラウラと戦う。相手は一対多に慣れているだろうが、カイトとコンビネーションがあれば突破できるとシャルルは予感していた。

（正直、厄介ですね……）

近距離武器しか持たないうるむにとってシャルルの様に遠近両方に対応でき、かつ自分の距離を保つ堅実な戦略をとる相手は苦手だ。ラウラの援護があるならまた話は別だろうが、無いものを期待してもどうしようもない。

このままなら押し切られるのも時間の問題だ。そう、このままならば。

負けるのは嫌いだ。それが全力を発揮できないものならば尚のこと。そもそも自分はこんなところでは負けられない。ゆえ、上からの命など知ったことか。勝たねばなるまい。

「……はぁ」

息を落ち着け、シャルルを見据える。彼女は多彩な武器を利用して、自分の距離を保つ戦法を得意とする。なら、その距離を保てなくさせればいい。速度なら、誰にも負けないのだから。

「――ヘルメス・フィン、展開」

カシュッ！

うるむのＩＳ、『ケリュケイオン』の腰の後ろのオーバースカートが尾のように可変する。本来の役目を果たすための準備運動なのか、鋭角状のフィンから熱が解放されている。

「Ａｓｓｉａｈ――」

続く二言目。右腕の甲手が大きくスライド展開し、二重になった装甲が露出する。

「まずい……！」

シャルルが何かを察知し、即座に呼び出したアサルトカノンのレバーを引いた。未だうるむに砲弾は届かない。ほんの数メートルにまで迫った距離がこんなにも遠い。

鉛の弾丸よりも早く、うるむの口から最後の一節が紡がれる。

「――Ｃａｄｕｃｅｕｓ」

ザンッ！

シャルルは二つのことに驚き、言葉を失った。一つは六一口径の爆破弾（バーストバレット）が、赤色の一閃によって破壊されたこと。目にも止まらぬ弾丸を斬るなど、簡単に出来るものではないからだ。

そしてもう一つ。うるむの機体の腕部。先ほどまで大型グローブが装備されたそこには、今は別の武器、ギロチンが展開されていたことだ。数週間前にカイトとラウラの喧嘩にてみせたあれだ。こうして改めて直視すると、紅黒い首切りの刃はＩＳだろうと切り落とせる剣呑な輝きをシャルルにギラつかせている。

かなりの重量があるだろうそれを軽々と振り回すと、下段に構える。

「シャルルちゃん、行くですよ」

その声がシャルルの耳朶を打った瞬間には、赤い閃光は目の前に迫っていた。

フォンッ！

「くっ！」

咄嗟の判断で体を捩らせ、そのまま横に飛び退いたラファールのサイドスカートが斬撃によって切り落とされる。転がり、距離を取ったシャルルがアサルトライフルで狙い撃つ。

バシュン！　とまるでレイヴァー・デイのマグナムが炸裂したかのような音は、ケリュケイオンが走りだした足音だった。展開したオーバースカートから赤いスラスター光を放出しながら多角的な軌道で弾雨を避ける様は一条の流星。

『シャルル！』

「……っ！」

弾幕を潜り抜けたケリュケイオンのギロチンが薙払われる。頭を引っ込め、氷上を滑るように一回転。頭上を断頭の刃が通過した瞬間、伸ばした右腕にがくんと衝撃が走った。うるむの攻撃が直撃したのではない、そこには漆黒のＩＳがその体を乗せていた。

「任せたよ、カイト！」

「そっちこそ！」

剣を振るう要領で、シールドを横薙ぎに振り払う。打ち出されたＩＳ、レイヴァー・デイが近接ブレードでギロチンを押さえ込んだ傍ら、シャルルはカイトを追い掛け回していたワイヤーブレードをライフルの掃射で打ち払う。

「アンティーク風情が私の邪魔を……！」

「相手がカイトじゃなくてゴメンね」

「馬鹿にするなよ、劣等種！」

「ドイツの軍人さんは随分と沸点が低いんだね！」

ラウラの停止結界に引っ掛からないように緩急をつけた動きでラウラにサブマシンガンとショットガンの連続射撃を行い、カイトとうるむから距離を離す。

カイトを追い込んでいたつもりのラウラだが、それを逆手に取った二人の戦術で戦いのリズムを崩され、思うように攻められない。彼女のなかで苛立ちが少しずつ首をもたげ始めた。

●

「ふあー、すごいですねぇ。二週間ちょっとの訓練であそこまでの連携が取れるなんて」

アリーナのピット脇にある観察室で、試合映像を見ていた真耶は驚いているのか、どこか間の抜けた声を上げた。

「緋神君とデュノア君のコンビネーションは華麗の一言に尽きますね」

「……あれぐらい出来て当然だろう」

そう辛辣な評価を下した千冬に真耶が苦笑しながら続けた。

「ですが、パートナーの動きを読んで瞬時に動きをシンクロさせるなんてそう誰にも出来ることじゃないですよ。私だって出来るかどうか……」

「まあ……そうかもしれないな」

何が納得いかないのか、ぶすっとして告げる千冬。この調子の時は彼女なりの照れ隠しなのだが、真耶にはこれが何を恥ずいているのか分からなかった。

「それにしても今回の学年別トーナメントのいきなりの形式変更は、やっぱり先月の事件のせいですか？」

「詳しくは聞いていないが、おそらくそれが一枚噛んでいるだろう」

先月の事件とは、カイトがしきりに気にしていた四機の所属不明機の乱入だ。箝口令こそ引いているが、情報はすでに漏洩している。シャルルがカイトを知っていたのがいい例だ。カイトの存在はあの時はまだ学園内の秘密事項だったのだから。

「より実戦的な戦闘経験を積ませる上でペアを組むとしても、一年生はまだ入学して三ヶ月ですよ？　戦争が起こるわけでもないのに、今の状況では彼らに必要とは思えませんが……」

「そこに先月の事件が出てくるのさ」

「自衛のため、ですね」

「そうだ」

一夏やカイトの男性ＩＳ適合者の出現、各国の第三世代ＩＳ搭乗者の過多な編入と今年はイレギュラー要素が多い。学園側は彼らとその愛機たちを護るべく動くだろうが、教師の数は限られてくる。ならば、搭乗者（マスター）自身に自らの危険を回避してもらわねばならない。

さらには、各国の戦略的な思想も絡んでくるだろう。実戦的な戦闘を行うことでＩＳ自身に経験値が蓄積される。それは無駄になるようなものではない。得られたデータは新たなＩＳを開発する上で基盤となり得、天文学的な確率ではあるが戦闘によって第二形態（セカンドフェイズ）へシフトすれば儲け物だ。

学園に入学した代表候補生に最新鋭の機体が与えられるのはこのためであり、たとえ実力が低かろうと大した問題ではないのだから。

「それにしても、竜胆さんとボーデヴィッヒさんは強いですよねぇ」

しみじみと真耶が声を洩らした。カイトとシャルルがコンビネーションで力を数倍高めているのに対して、この二人は己が力でそれに追い縋っている。

「変わらないな、あの馬鹿娘は」

ビームガトリングの光渦を避けながらワイヤーによる反撃を試みるラウラを見て、心底つまらなそうに千冬が吐き捨てた。

自身の強さが攻撃力と直結していると今でも思っているのだろうが、いい加減その邪教ばかり見ていると足元を掬われるだろう。

強さなど目に見えるものではなく、ましてや攻撃力などを考えるなどもっての他で、僚機がいるならばなおさらそれらを排他した考え方をしなければならないのに――。

ワァァァッ！

歓声が地鳴りのように観察室に響いてきた。

「あ！　緋神君とデュノア君のコンビネーションがまた決まりましたよ！」

「……」

「織斑先生？」

「山田先生、ここを頼めるか？」

おもむろに千冬が口を開くなりそう告げると、真耶が何かを言う前に背を向けた。

「ちょ、ちょっと織斑先生!？　どちらへ!？」

動転しながら真耶が尋ねると、こちらに背を向けたままたった一言こう答えて立ち去った。

「野暮用だ」と一一。

●

ギィン！　ガァン！　ギィ！

二本の近接ブレードがうるむちゃんのギロチンを弾く。なんて重い一撃なんだ、剣を伝って腕がビリビリと痺れる。

「アアアっ！」

「っ……！」

痺れを無視してブレードで畳み掛ける。攻勢に転じた僕の勢いに負け、うるむちゃんの体が傾いた瞬間を逃さず、大上段から刃を振り下ろす。

ザシュ！　ガツンッ！

「くうぅ！」

「っう……」

体制を崩しながらも線対象に放たれたうるむちゃんの一撃が胸部装甲を切り裂き、僕の攻撃が彼女の肩から袈裟型に入る。痛み分けだ。

高々シールドエネルギーを削られた程度。敗北にはまだ遠い。

「やっぱりカイトは素敵です。こんなにもうるむをドキドキさせてくれます」

紅い弾丸となって、地面を疾駆するうるむちゃんが嬉々とした声を上げ、ギロチンの鈍い輝きが喉元を掠める。

「うるむは今まで楽しいと思ったことはありません。何をしても前にもやったことの延長戦だと感じてしまうのです。デジャヴ、と言えば分かるですか？」

斬首の刃がアーマーの継ぎ目を狙い、幾度となく迫る。それを刀二本で受け、捌く。

「ですが、ＩＳ学園（ここ）は違いました。カイトがいるこの場所は既知感（デジャヴ）がないんです。だから全部が新鮮なんです、眩しいんです」

言葉に比例して、攻撃の回数が跳ね上がる。興奮、してるのか？

「カイトは未知に溢れています。それが、だから、カイトはうるむ達の――」

ズガンッ！

一段と黒く輝いたギロチンに右手の近接ブレードの刃が真っ二つに切り落とされ、その隙に左手の甲手が腹部に直撃する。痛みを堪え、殴られた反動を利用して空中に退避する。

『カイト、ダメージは？』

『三割、ううん、四割ってところかな』

『僕も同じかな』

ボーデヴィッヒのレールカノンやうるむちゃんのギロチンの直撃は避けているので、酷いダメージは受けてはいないがこのまま削り落とされる可能性がないわけでもない。

でも、時間は十分に稼いだかな。

『シャルル、そろそろうるむちゃんを片付けよう』

『……やれる？』

『当然』

『じゃあ、行こうか』

プライベートチャネルでの作戦決行を告げた僕はものの見事に折れたブレードを捨てると、右腕ラックにフロイドを呼び出すとうるむちゃんにダッシュする。合わせて視界が二分割され、そちらにはボ

ーデヴィッヒが映っている。
直視映像（ダイレクト・ビュー）、いわばＩＳというネットワークによる視界の共有だ。テレビ電話が発達したものだと思ってくれればいい。

「いけぇっ！」

ドガガガガガッ！

シャルルの映像を確認しつつ、フロイドを起動させる。四門＋四門の弾幕を張りながらうるむちゃんの動きを誘導させる。薄い緑の光弾が爆ぜるその向こうでは、

「こっちだよ！」

「貴様、ちょこまかと……！」

引き撃ちによってシャルルがボーデヴィッヒを誘導してくる。巧みに停止結界から逃れる辺り、さすが代表候補生だ。

『カイト、タイミング合わせて！』

『分かった！』

フロイドをわざと雑に撃ち、うるむちゃんの動きをボーデヴィッヒに合わせる。

逆方向から背中合わせで赤と黒のＩＳがほぼ同じ位置に重なる。タイミングは重畳。

「シャルル！」

「任せて！」

高速切替により、ヴィットマンを呼び出したシャルルがそれを射出する。爆風の範囲を含めても二人に直撃することは明白だ。

だが、

「舐めるなぁ！」

ボーデヴィッヒが停止結界を発動し、薬夾を受け止める。やはり受け止めたか。

「無駄だ、この停止結界の前ではな！」

「でも、二人とも『足』は止まってるよ？」

「！？」

ボーデヴィッヒが何かに気が付いて足元を仰ぐ。そこには僕のガルベストーンから切り離されたEパックが埋められていた。

気が付こうがもう遅い。左手のブレードを足元目がけて投げ付ける。うるむちゃんが反応して距離を取ったけど、手遅れだ。剣先は吸い込まれるようにボトルに直撃し――、

ズドォォォンッ！

アリーナ中央から光が溢れ、凄まじい爆発光で会場を埋め尽くし、

爆風がアリーナに砂塵を生み出す。パンツァーファウストも誘爆したのか、鉄の焼ける匂いが鼻孔を刺した。

試合開始直後にシャルルが動かなかったのは、これをセッティングするためだ。準備に手間取るかと思ったらかなり手早く済ませてくれる辺り、シャルルはさすがだ。けれど、パックをいくつ使ったんだろう？　この爆発の規模は一つや二つでは足りないよ。

「シャルル、やりすぎだよ」

「カイトだってやったことじゃないか。はい」

フィールドを旋回して落ち合った僕にガルベストーンが返却された。そう言えば渡しっぱなしだったっけ。

受け取り、粒子変換させた僕らの前にもくもくと立ち上ぼっていた爆炎を切り裂いて二機のＩＳが飛び出してきた。

「やっぱり落ちてくれないか……」

二人のＩＳはかなりのダメージを受けてはいるが、直撃を避けたのか戦闘不能までは至っていないようだ。

「味な真似をしてくれるな、緋神カイト！」

怒号を上げてブレードワイヤーを六本全部展開し、加速し僕に迫ってくるボーデヴィッヒ。シャルルに目配せした僕は両腕にフロイドを展開して飛び掛かる。

十六門もの機関銃から放たれる弾丸の渦と三次元的軌道のワイヤー

ブレードがぶつかり合う眼下ではシャルルがうるむちゃんに加速していく。手にはブレードが握られている。

カキィン！

「っく……」

刃同士の小気味よい音が響き、攻撃を受けた衝撃でうるむちゃんの体が揺らぎ、苦悶に顔が歪む。

「シャルルちゃん……」

「前に僕が君と同じだって言ってたよね。仲良く出来るとも」

言うなり、うるむちゃんちゃんに攻撃を仕掛けた。対応するうるむちゃんだが動きに先程のキレがない。やはり痛みのせいで、ギロチンを振るう速度が遅れてきているんだ。

爆発の衝撃で刃の大きく欠けたギロチンは容易くシャルルに弾き返される。

「僕も君とは仲良く出来そうだとは思うけどさ、」

キィン！

「っ！」

「友達として一つ忠告」

ギロチンを切り払い、展開していたレイン・オブ・サタディのバレ

ルでケリュケイオンの腹部を殴り付けた。怯んだ一瞬、うるむちゃんを捕らえたのはショットガンのマズルだった。

「しゃべり方、直したほうがいいよッ！」

バァン！　バァン！

ショットガンの散弾がケリュケイオンの装甲を砕き、地に伏せた。紅い機体から白煙が上り、エネルギーが底を尽きたのを物語っていた。

「よそ見をしているとは、余裕だな」

（まずい！）

うるむちゃんがやられたのを見た一瞬の安堵を付かれ、全身を停止結界で硬直させられる。

「では、消えろ」

ガギョン！

巨大なリボルバーの回転音が轟き、薄暗い銃口が僕を睥睨する。ダメだ、動けない。

ズガンッ！

「お待たせ！」

間一髪、僕とボーデヴィッヒの間に割って入ってきたシャルルがシ

ールドで砲弾を防いだ。すると、体にのしかかっていた不可視の圧力が無くなり、即座に離脱する。

もしかして、あの停止結界は……。

「さすがシャルル、助かったよ」

「どういたしまして。でも、その言葉はこの試合に勝ってからね」

フロイドを収納し、ガルベストーンを再展開する僕の前で、シャルルは新たに武器を呼び出す。重機関銃の《デザート・フォックス》だ。

「じゃあ、」

「うん。そろそろ、」

互いに目線を絡ませ、意志を疎通する。これが僕らが待ち望んでいた状況。勝利への方程式。

「「決めさせてもらう！」」

地面を蹴り、先行するのはシャルルのリヴァイヴ。手にしたヘビーガンから蒔かれるのは褐色の弾雨。

「二対一だろうと、負けはしない！」

火線の渦を逃れたボーデヴィッヒの突き出された両手。目には捉えられない糸に絡まり、シャルルの動きが凍り付く。動きを止められても、シャルルの表情に恐怖など微塵も現われていない。あるのは、

魅力的で残酷なあの笑顔だ。

「忘れてるよ。僕らは、『二人で』戦ってるんだよ、ボーデヴィッヒさん？」

「！」

バシュゥン！

シャルルのリアスカートを足場に跳躍した僕のマグナムの光芒が黒い敵機の最大の武器を喰いちぎる。

「くっ！」

粉々の鉄屑となり、爆散するレールカノン。やはりそうだ。あの停止結界は強力な兵器だが、対象物に意識を向けていなければ効果を持続できない欠点がある。

「カイト！」

「了解！」

続けてマグナムを一射。火球を躱し、反撃とばかりワイヤーが飛んでくる。それらをシャルルのマシンガンが迎撃、弾き落とす。

「負けられない！　私は負けられない！　私は……、私は！」

ボーデヴィッヒの声が迫ってくる。ワイヤーを囮に、僕の懐へと突っ込んできたのか。

「私はラウラ・ボーデヴィッヒなのだ！」

両手に展開されたプラズマ手刀の連撃。左腕のラックを起立させることで楯に見立て、ガルベストーンも駆使して攻撃を受け流す。

「やらせないよ！」

「邪魔をするな！」

不意討ち気味に伸びたワイヤーはシャルルの腕部に絡み付き、そのままアリーナの地表に叩きつけられる。

「シャルル！」

「他人に寄生する貴様などに――！」

シャルルに気を取られた刹那、ボーデヴィッヒのプラズマトンファーとブレードワイヤーが僕の鳩尾に打ち込まれる。

「私は負けられん！」

「ぐぁ！　ぁ……」

込み上げる吐き気。侵食するように四肢に伝わる嫌な熱。防御を突き破ってかなりのダメージが入ったことを実感させる。

レイヴァー・デイから力が抜ける。虚脱感に頭が白む。

「は、ははっ！　どうだ、緋神カイト！　私のほうが貴様より優れていると、あの人の剣（りそう）に近いのは私だとはっきりしたなっ！」

高らかに勝利宣言するボーデヴィッヒ。でも、まだだ。まだ折れていない、暴風（レイヴァー・ディ）はまだ止むべき時じゃない。ありったけの力で腹部に突き刺さったままの彼女の腕とワイヤーを掴み、握り締める。

「貴様、まだ……！」

「寄生、か……。君の言うとおり僕は他の誰かに張り付いて生きてるのかもしれない。僕は無力で一一屑だ」

もしも千冬姉さんに出会ってなかったら、僕はここにいなかっただろう。悔しいけど、ボーデヴィッヒには言い返せない。

「でも、それは君も同じだ。いや、君は僕より屑だ」

「なんだと……！」

ボーデヴィッヒの色白の顔が怒りで朱に染まる。

「君は一人でどうやって生きる？　一人でどうやって成長する？僕は情けないほどの屑だから他の人と一緒だからこそ強くいられる、こうして君と戦っていられるんだ」

「ふざけたことを抜かすな！　私は寄生など、他者など頼らん！私は完遂するのだ、私自身の力で貴様を排除すると、」

「だから君は、ずっと一人のままなんじゃないか。だから、ずっと前に進めないんじゃないか」

「！！」

ボーデヴィッヒの表情が崩れる。均衡が、絶対的な勝利が、勝敗が分かたれたのはこの一瞬だ。今の君はこのことに気付いていない。だってそうだろ？

「ほら、また周りが見えなくなってるよ？　僕は、『一人で』戦ってるわけじゃないんだから」

君の後ろには僕のパートナーが幕引きの一撃を構えていたことに、君は気付いていたかい？

「しまっ――！」

「この距離なら、外さない！」

バガァン！

狼狽するボーデヴィッヒの眼前で爆ぜるシールドの残骸、その死角から放たれるのはラファール・リヴァイヴ・カスタム?最大武装、六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》。その穿孔の破壊力から付いた二つ名は一一『楯殺し』。

完全な意識の虚を突かれたボーデヴィッヒに迫るパイルバンカーを防ぐ手立ては無い。ワイヤーは僕が全部握り締めているし、停止結界は間に合わない。

ズガンッ！！！

「ぐぅぅぅぅ！」

ボーデヴィッヒの腹部に喰らい付く、破砕の牙突。その破壊力は凡庸なＩＳ兵器の比ではない、絶対防御が発動する威力がシュヴァルツェア・レーゲンを射抜き、ボーデヴィッヒへのダメージとして貫通、彼女の体が地面にたたき伏せられる。

「はあああああっ！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）による強襲攻撃（アサルトマニューバ）。炸薬交換など息を吸うように済ませ、追撃するシャルルの楯殺しがボーデヴィッヒに突き刺さる。

ズガンッ！　ズガンッ！！　ズガンッ！！！

二発、三発、四発。一撃毎にアリーナの地面が反動で砕け、ボーデ

ヴィッヒの体が跳ねる。漆黒の機体から蒼白い雷光が迸り、ＩＳの強制解除の兆候が見え始めた。

あと少しで手に届く僕らの勝利、だがそれは永劫に掴むことが出来なかった。

「あぁあああぁあああっ！！！！」

第二十三話　Aパート　～慟哭の黒～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？　戦いのオペラはここで小休止を挟みましょう。

複数戦闘の描写は僕には難しすぎます。なんだよこれ、鬼門だろ。読みにくかったらすみません。

さて、原作二巻も残すところあと二話となりました。次回の後半戦にはあの禁断のシステムがその面を上げる時が……。

では、またの機会に。

第二十三話　Bパート　～輝きを力に～（前書き）

第二十三話Ｂパートです。

主演の本懐を見せてみろ、緋神カイト。より劇的に、より苛烈にクライマックスを彩ってみせろ。

というわけで、原作二巻の山場であるＶｓＶＴシステムです。

では、第二十三話後半戦『輝きを力に』、幕が再びあがります。

第二十三話　Bパート　～輝きを力に～

『非常事態発令！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はすぐに避難すること！　繰り返す！』

けたたましく鳴り響く避難誘導の怒号。状況もわからぬまま我先にとアリーナから退避する客の中でただ一人、その場から一歩も動かない女性の姿があった。

腕を組み、ただ一点のみを見つめる絶対零度の灼熱の魔眼。その瞳に映る情は、この世界にあるべきではないおぞましい悪意の固まり。いや、むしろそれが人間というものの本懐なのか、その悪意は透き通るような純粋な結晶。磨き、研磨されたものとは一線を画す純粋培養された赤化の因（ルベドルーン）。

黒い軍服が歩みだした。首にかけた紅蓮のストラが陽炎の如く残像を残し、一歩、また一歩とアリーナへと近付いていく。

「止まれ」

声を掛けられたのは同じ。首元に突き付けられたのは、打鉄用の１７０近接剣。ＩＳの補助もなく、それを突き付ける人物に見向きもせず、恭しく言葉を発した。

「久しいな、ブリュンヒルデ。貴様の剣は随分と鈍刀（ナマクラ）まで堕したものだな。再会の祝賀を上げたいものだが、生憎そのような感情など持ち合わせていないのでな」

「何故お前がここにいる？」

肌を突き刺す圧倒的な威圧感。格が違う。人という器を形作りながらも、その体のなかでは大灼熱地獄が形成され、その業火が今か今かと外へと放たれるときを心待ちにしている。彼女の前でこうして話を出来るのは、彼女が背を向けているからだろう。正面を見てしまったら、魂まで灰塵に帰してしまうのは明白だ。

「……なあ、ブリュンヒルデ。雑談をしようじゃないか」

「なんだと？」

嘲りを乗せた灼熱の句が千冬の耳朶を打つ。質問の意図が分からず、聞き返す千冬の前で彼女は煙草を口にくわえ、目で火を灯した。手を使わず、まるで火そのものが彼女の両目に込められていたかのように。

そのいがらっぽい匂いに千冬は顔を歪めた。

「失礼。配慮が足りなかったか。これは癖でね、悪意はないのだ。謝罪しよう」

「昔から煙が好きな性分だったな、お前は。火種から立ち上る煙を見て、吸って、嗅ぐと落ち着くんだったか？」

「嗜好品とは概してそういうものだろう。説明は出来ぬがね」

そう言ってくわえていた煙草を揉み消した。漂う紫煙を見る彼女の瞳は何かを追想しているのか、この場所を見ていなかった。

しかし、雑談をしようという言葉に嘘や偽りはなくただ純粋に話がしたいだけであると伺わせる。

「ともかく、結構なことだよ。礼儀を知らん輩にぞんざいな扱いを受けたのだろうが、玉体を重んじるのは近衛たる我々の重要任務だ。以前の無礼な行いは、言い訳にしかならないが、私の恥だよ」

「お前が奴を落としたのか？」

「早すぎたか。だが、芯の無い鈍刀（ナマクラ）ならば、溶け落ち砕けるのみ。そうした意味では奴は一つの正念場を切り抜けたこととなるが、まだ足りんよ。芯が柔いのだ」

「だから鍛え直すのか、貴様等に都合がいいように」

「勘違いをしてもらっては困るな、ブリュンヒルデ」

そこでようやく彼女が千冬と向き合った。世界最強の剣豪と灼熱地獄を従える赤騎士の眼光が交差する。

「我が君から命を受けたのだ。奴が我々に楯突ける騎士（リッター）であるかどうかをな」

「騎士、だと？」

「然るに今の貴様に用はない。下がれ。貴様に抜くべき剣など生憎持ち合わせていない」

「抜かせるものか！」

振り下ろされる乾坤一擲の鉄塊。迅雷一閃、まさしく雷速で間合いに踏み込んだ千冬の剣（ブリュンヒルデ）が放たれる。

「愚かしい。まるでメイフィールドあたりを見ているようだよ」

抜き打ち気味に放たれた一撃。だが、その迅速の切っ先は赤騎士に届くことはない。

――溶けたのだ。

折れ、欠け、破損することは多々あれど、刃が融解していく様は常識では考えられない光景だった。驚愕に千冬の顔が歪む。

「言っただろう、貴様に抜くべき剣など持ち合わせていないと。ああ、どうやら期待を持たせてしまったようだな。訂正しよう。既に貴様ごときに抜く剣は私には存在しないのだよ、織斑」

憐れむようにそう告げた赤騎士の揺れる髪はその名を体現するように赤く揺らめき、火の粉のような光を宿していた。

●

「あァあぁぁあああっ！！！！」

アリーナに響くボーデヴィッヒの絶叫。空よ割れろ、地よ砕けろと口から上がる悲痛な叫びは雷光となり、黒い雨から放たれて暴虐の嵐と化す。雷撃を受け、シャルルが吹き飛ばされた。反射的にレイヴァー・デイを走らせ、間一髪、壁に当たるぎりぎりでシャルルを

受け止める。

「ありがとう、カイト」

「気にしないで。それより怪我は？」

「僕は大丈夫だけど、ラファールが……」

電撃が直撃したためか、オレンジ色の機体は所々黒ずみ、衝撃で背面のウィングが破損してしまっていた。これじゃ、まともに動くことも出来ないな。

「カイト！」

「っ！？」

呼び戻された僕が見たのは、ありえない光景だった。視線の先、ボーデヴィッヒのＩＳが変形している。違う、あれは変形なんてお粗末なものじゃない。漆黒の装甲板が熱せられたようにグニャリとゲル状に溶け、ボーデヴィッヒを中心に新たな『何か』に進化を始めている。

唖然とする僕らの前で、ついにボーデヴィッヒが黒の緞帳に飲み込まれ、より完全なものへとなるべく胎動を始めていた。

「なんだ、これ……」

ＩＳは原則的にその形を変化させない。パッケージを換装しても第二形態（セカンドフェイス）に移行しても、その大まかなアイデンティティーは変化しない。ＩＳとは『そういうもの』なんだ。

だけど、目の前で起きているのはまた違う現象だ。言うなれば、破壊と再構築。粘土を練り直すようなもので――。

地面に降り立つ、濁った黒が作り出したのはＩＳに似た別の兵器。黒い全身装甲（フルスキン）、見た目は打鉄のように左右の肩にフロートアーマーが展開されている。フルフェイスの甲冑から覗くラインアイ・センサーからは邪悪な悪意を湛えた赤い閃光。

そして、何より僕を驚かせたのはその右手に持つ刀だった。見間違うわけがない。あれは、

「《雪片弐型》……！」

形状こそ僅かに異なる程度の高い精度で生み出されたのは雪片だった。なんであれが――？

「――！」

手にしていた刀に意識を持っていかれた次の瞬間、黒いＩＳが僕に切り掛かってきた。中段に引いたような構えから入る体捌き、必中の間合いから放たれる迅速の一刀。この太刀筋、僕は見たことがある。

これは、千冬姉さんの使っていた――！

ズガンッ！

「ぐあああっ！」

縦一閃。辛うじて直撃は回避したけれど、バイザーが砕け、胸部と脚部の装甲が切り落とされる。衝撃に地面を転がる。

本能で避けたはいいものの、当たっていたら僕は真っ二つだった。なんなんだ、こいつは……！

『カイトッ！』

突然、プライベートチャネルから聞こえてきた一夏の声は憤怒で燃え盛っていた。明らかに冷静さを欠いている。

『そいつを……そいつをぶった斬ってやれ！　ぶっ飛ばしてやれぇっ！』

「な……」

一夏らしからぬ台詞に言葉を失った。いつもならこんなこと言わないのに、本当にどうしたんだ。

『お前がやらないなら、俺が！』

「待ってよ、一夏！　冷静になって！　どうしてそんなになってるのさ！　いつもの一夏らしくないよ！」

『これが落ち着いていられるか！　あいつは、あいつはッ！』

「一夏ッ！！」

プライベートチャネルは声を出す必要はない。だけど、僕は叫んでいた。事情も分からないまま、ぶっ飛ばせなんて言われても僕には

どうしたらいいのか分からないよ。

僕の意志が伝わったのか、『悪い』と一夏が謝った。

「気にしないで。それで、僕にも分かるように説明してよ」

『あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉ものだ。千冬姉だけのものなんだ。それを……くそ！』

アリーナの中央で微動だにしないＩＳを見る。あれには千冬姉さんのデータが反映してあったからモーションが重なって見えたのか。

『さっきの剣技、俺が最初に千冬姉に習った『真剣』の技だったんだ。初めて握った刀は重くて、冷たくて、殺意が溢れていて。こんなものを千冬姉が振るってるって実感したから、俺は……』

「そっか……」

一夏は強くありたいと願っていた。毎日篠ノ之さんの稽古に付き合ったり、僕らに模擬戦を何度も挑んだのはその想いが彼の根底にあるからだ。何回も地面に叩き伏せられても、何回も苦汁を味わっても折れない芯が一夏にはある。

だからこそ、一夏は誰よりも強い。僕なんかよりもずっと。

『ねぇ、獅子（レオ）。これだけは覚えていてほしいの。忘れないで』

「戦いの何たるかを知っているのか、血の何たるかを知っているのか、殺意の何たるかをしっているのか、か」

『カイト？』

「ちょっとだけ、思い出したよ」

今、唐突に霞みかかっていた記憶のカーテンが少しだけ開かれた。まさか、こんなところで思い出すなんて。

「すべて意志と覚悟なんだ。戦場を駆けるのも、血を浴びるのも、殺意を具現化するのも全部確固たる意志と覚悟が為せる業。覚悟もないのに力を振るうな、逃げてしまえ」

戦いも、血を浴びるのも、殺意を持つなんてことを僕はしたくない。でも、現実問題として力が僕らにはあるんだ。ＩＳという最強にして最凶の業の深い武器が。それらを操ることが何を生み出すのか、理解しなければならなくて。

「決めたよ、一夏。ぶっ飛ばすよ」

『カイト、お前……』

「君のやりたいことと僕のやりたいこと、一緒みたいだしね」

『やりたいこと？』

依存しちゃダメなんだ。力は確かに甘美な麻薬だけど、それに囚わ

れたら見えるものも見えてこないだろう。主の手から離れた力はただの暴力なのだから。

「ボーデヴィッヒに言わなくちゃいけないことが出来たんだ。だから、やるんだ」

他の誰かに譲れないし、譲らない。そもそもそんなこと、僕が知ったことじゃない。これは僕だから、緋神カイトだからやらなくちゃいけないことだって分かるんだ。

「一夏、君の想い確かに受け取ったよ。必ず、勝つから」

『頼んだぜ、カイト』

頷き、通信を切る。一夏、今だけは君の強さを借りるよ。負けないさ、相手がたとえ世界最強のＩＳ操縦者の幻影だろうと、君の強さは誰にも負けないから。

「シャルル、頼みがあるんだ」

「エネルギー、分けてほしいんでしょ？」

「……よくわかったね」

「さすがに分かるよ」

リヴァイヴの腰部からケーブルを引っ張り、レイヴァー・デイの腕部装甲に接続される。

「リヴァイヴのコア・バイパスを解放。エネルギーの流出を許可」

ぽうっとリヴァイヴから暖かな光が漏れだし、レイヴァー・デイを包み込む。日溜まりの中にいるような温もりに心が落ち着く。

「カイト、約束して。絶対に負けないって」

びしっとシャルルが僕を指差す。シャルルには珍しく、その言葉には有無を言わせぬ圧力があった。

「負けないよ。僕はこんなところで負けるわけには行かないよ」

「じゃあ、負けたら今月の頭にやってたような女の子の格好をしてもらうからね？」

……は？

「え？　もしかして、気付いてました？　僕が電車で会ったおんにゃのこだって」

「うん♪」

頭を抱えたくなる。まさか気付かれていたなんて……。自分で言うのもあれだけど、パーフェクトな女装だったと思ってたんだけど……。

「本家本元は違うか……」

「カイト、その言葉の意味を聞こうかな？」

「い、いえ！　とりわけ大した意味はありません！」

シャルルがバンカーを構えていたので即座に否定。いまから戦おうかって言うのに怪我なんかしたらたまらない。

「完了。リヴァイヴのエネルギーは残量全部渡したよ」

「ありがとう、シャルル」

光となって消失するリヴァイヴ。受け取った僕は、レイヴァー・デイのエネルギーゲージを確認する。瞬時加速（イグニッション・ブースト）二回分か、欲を言えた義理じゃないけれど、全力（イオタ）を使うにはこれだけだと若干心許ないな。

「じゃあ、うるむのエネルギーも使ってくださいです」

と、再び伸びるケーブル。うるむちゃんだ。

「うるむのＩＳにはあんまりエネルギーが残っていませんが、無いよりはマシですよね」

「ありがとう、うるむちゃんの力も借りるよ」

「ケリュケイオン、エネルギーを流出です」

流れ込んでくる力の奔流。シャルルの時とは違う、不思議な一体感と懐郷感。外殻がバリバリと剥がれていくような、僕とレイヴァー・デイが再誕していくみたいな鮮明で荒々しい感覚。

（これは……何だろう？）

その感覚を掴み取る前にうるむちゃんからのエネルギー受け渡しは

完了していた。

「完了ですよ、カイト」

「あ、ああ、うん。ありがとう、うるむちゃん」

「これが終わったら一緒にプリンを食べに行くです。だから、負けるのは許さないですよ」

「うん、約束するよ」

負けるわけには行かない理由がまた一つ増えた。けれど僕が出来るのは、ただ一つだけ。心を落ち着き、深層意識にアクセスする。

そこにいるんだろう？　僕の声、届いているんだろう？

僕に出来るたった一つのことは、皆の思いを無駄にしない事なんだ。だから、君にはまた辛い思いをさせてしまうかもしれない。でも、お願いだ。どうか聞き入れてほしい。僕には君の力が必要なんだ。我が儘な僕を許してくれとは言わない。憎んでくれてもいい。だけど、打算だけはしたくないんだ。

君はこんな僕を受け入れてくれるかい。皆のために、僕のために、どうしても君が必要なんだ。シャルルを助けた時のような暖かな力をもう一度、僕に授けてくれ。

願いが届き、ふわりと包むような声が聞こえる。

『モン・シェリ、愛しいカイト君は変な人。私は、貴方のオペラの主賓で主役なんだから』

（なら――）

『そう。なら――』

ここにもう一度、歌劇の幕を開こう――。

Ｄｉｅ－Ｗａｌｋｕｒｅ－－－。

僕の、一夏の、シャルルの、うるむちゃんの、そして彼女の想いがレイヴァー・デイを枷から解き放つ。黒い装甲板がスライド展開し、内部装甲から金色の燐光が迸る。バイザーに備えた角が裂けて獅子のたてがみを形成し、レイヴァー・デイが本来の姿を顕現させる。

『単一仕様の展開を確認。『レイヴァー・デイ』のＯＳをＳ（シルエット）からＩ（イオタ）へ移行完了。全兵装のセーフティを解除』

黄金の輝きを宿らせたＩＳで、漆黒の機体へと歩み寄り、武器を招来する。実体剣の《ディーン?》だ。両手でしっかりと構え、その黒い切っ先を向ける。

『カイトさん！』

耳朶を打ったのはセシリアさんの声だ。

『死なないでください！　絶対に帰ってきてください！』

「ははは……。縁起でもないことをいわないでよ」

『で、ですがわたくしは、』

「セシリアさん」

『え？』

「心配しないで、僕は負けないよ。セシリアさんは、そうだね……僕を信じてくれればそれでいいから」

『カイトさんを信じる？』

確固たる意志も覚悟も生憎と持ち合わせていないから、元来僕はＩＳに乗る資格が無いのかもしれない。けど、誰かの間違いを正すことは出来るし、呼び戻すことは出来る。自己満足にしかなりえないし、ただの偽善かも知れないけど、今の僕にはちょうどいい理由だ。

「セシリアさん、僕は君を信じてる。だから、君も僕を信じて。必ず勝つから」

『……わかりましたわ。ですが、必ず勝ってください！』

まったく、これだけ期待を寄せられたら負けるわけにはいかないじゃないか。

「ディーン？」

『Ｃｏｒｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ』

刀身が割れ、黄昏色の光の刃が中央より生み出される。それは僕の意志を汲み取っているかのように、堂々たる波動を伝播させる。

集中しろ。意識を一点に集めろ。

研ぎ澄まされた意識（つるぎ）を構えて、誰よりも早く駆け抜けろ。そうだ、超音速で走り抜けろ。総てが止まって見えるほどに早く、早く、光となって。

そして破壊しろ。その輝ける剣で燃やし尽くせ。それが僕の望む渇望（ノール）へと繋がる巓になる。不条理なんて瓦解させてやれ、それだけの力を刹那に込めろ。僕らの中にはそれを為すだけの剣（ちから）があるだろう。

この瞬間、それを引き出す器になれ。緋神カイト。

「一一行くぞ、化物野郎」

背中のブースターが爆発的な推力を生み出し、暴風が金色の流星となって走り翔る。後先考えない、余力なんて残さない、撃ったあとに致命的な隙を生むであろう全身全霊を込めた魂の一太刀。

切り刻まれ、停滞するかのように遅延する時間のなか、遅れて刃を構える黒いＩＳ。ブリュンヒルデの幻影とは言え、その太刀筋は速く、鋭く、鮮烈。

走る漆黒の切っ先。しかし、濁り淀んだ黒よりも黄昏を讃える閃光の刃が数段速く、数倍鋭く、紛い物の剣舞よりも壮烈。意志を持たぬ木偶にこの一撃を防ぐ手立てなど在りはしない。

「お前なんか、あの人の残姿にしかすぎないだろ」

大上段からの袈裟斬りが凝り固まった闇を一刀の元に両断する。雪片を持った腕が宙を舞い、胴体が裂け、頑なに目を閉じた少女がそこにいた。見えた、ボーデヴィッヒだ！

「手を伸ばせ、ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「……ぁ」

微かに目を開けたボーデヴィッヒが僕に向かって手を伸ばす。その手を掴んで引っ張り上げる。

だが、有り得ない事に怪物が息を吹き返した。融け始めていた液体が再び形を取り戻そうと濁流となって逆流する。切り落とした腕を喰らい、ボーデヴィッヒを喰らい、その狂気とさえとれる暴食は僕まで及ぶ。

「このっ！」

切り払おうとしても先の一撃に力を使ってしまった所為で機体の出力が上がらない。粘着質な液体が足を、腕を、体を、顔を、心までも闇に堕すべく、汚れた液体で包み込む。影の揺らめきが僕を絡め取り、飲み込む。

「カイトーーーーー！！」

とぷん……

●

人工合成された遺伝子から作られ、試験管のなかで生まれたのが遺伝子強化試験体Ｃ－００３７、私だ。

――じゃあ、ラウラ・ボーデヴィッヒって名前は？

それは識別の為の与えられた器だ。軍に入隊するために必要だったんだろう。ただ戦いの為だけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた私だ、必要なのはいかにして人体を攻撃するか、いかに敵軍に打撃を与えられるかだ。格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦法を体得するだけの私には不要な代物、一つの枷だ。

――遺伝子を強化された君は優秀だったんだ。

だが、それはある時より一変したのだ。ＩＳが、世界最強の兵器が現れたことでな。然るに私は適合性向上の為に『ヴォーダン・オージュ』の移植処置を行った。

――『ヴォーダン・オージュ』？

疑似ハイパーセンサーとでも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度上昇と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的としたナノマシン移植処理、及びその処置を施した目のことを『ヴォーダン・オージュ』、越界の瞳と呼ぶ。

危険性はまったくなく、理論上は不適合も起きない――はず、だったんだ。

――失敗、だったんだ。

不慮の『事故』だ。この処置によって私の左目は金色へと変色し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。

――だから、君は眼帯を……。

これにより、私は部隊の中でもＩＳ訓練において後れを取ることとなる。そうしてトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。今まで抱いていた理想が泡沫と化し、私は暗い絶望（やみ）の中を止まることなく転げ落ちていった。

――そんなときに出会ったのが、

そうだ。教官との、織斑千冬との出会いだった。

「ここ最近の成績が振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

――……すごい自信だね。

私もはじめはそう思った。だが、その言葉に偽りはなかった。特別私だけに訓練を課したということはなかったが、あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はＩＳ専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。安堵はなく、自分を疎んでいた部隊員も気にならなくなっていたが……。

――憧れたのか、千冬姉さんに。

その強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に強烈に深く、憧れ焦がれた。ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。そう思ってからの私は、教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけては話しにいった。

――姉さんと話か……。あんまり話せそうにないね。

いや、話など出来なくてもよかった。ただ側にいるだけで、その姿を見つめるだけで、私は体の深い場所から熱いものが湧いてくるのが感じられた。あれは『勇気』という感情に近いらしいが、教官への『恋情』とも受け取れた。私が特別だと、そう思い込んでいたのだ。

だから、尋ねたくなった。どうしてそんなに強く在るのかと。どうすれば貴女のように強くなれるのかと。その時、ああその時だ。あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた。

「私にはな、とある天才ととある凡人の友人がいる」

「天才と凡人……ですか」

「奴らを見ていると、わかるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ。天才はどうだか知らんが、凡人ならいつか会えるときが来るだろう」

優しい笑み、どこか気恥ずかしそうな表情。

違う。

それは違う。私が憧れる貴女ではない。貴女はブリュンヒルデ、世界最強だ。貴女は強く、凛々しく、堂々としているからこそ織斑千冬なのに。

だから――許さない。教官にそんな表情をさせる存在が。そんな風に教官を変えてしまう凡人とやらが、認められない。認めるわけにはいかない。だから、

――僕を排除する、そのための力を求めたのか。

諜報部からの情報を受けて直感した。この男が教官を地星に堕した下朗だと。

『敗北させると決めた、徹底的に排除すると決めたのだ。あれを、お前を私の力で完膚無きまでに叩き伏せると！』

君は間違ってるよ。

――なんだと!?

僕は姉さんの言うような人物じゃない。それこそただの凡人だ。強さなんて欠けらもない。言ったじゃないか、僕は無力で、屑だって。

――ならば、どうしてお前が教官の側にいる!?　無力なのだろう、屑なのだろう!?　なら、

どうしようもなく優しいんだよ、千冬姉さんは。自分にも他人にも厳しいけどその分、誰にも優しくあるんだ。君なら分かってるんじゃないかな?

――違う!　教官は、

君の抱いている姉さんは至高にして究極の戦乙女なのかもしれない。そこに文句を言うつもりはない。でも、だからと言って彼女の本質を否定するな。君は千冬姉さんの側にいたんじゃないか?　意固地になるなよ、認めろよ。あの人を決め付けるのはやめろ。

――意固地か。確かにな。私にとって、教官は誰にも届かぬ愛されざる光なのだ。どれだけ恋い焦がれても決して届かないメフィストフィレス。だから、だろうな。悔しかったのだ。その凡人とやらがあの人の寵愛を受けるなど、私は許せなかった。この思いの根底は、なるほど、嫉妬だったのか。

君はなりたかったんだね、その凡人に。

――なれると思ったんだ。私は遺伝子改造で生まれた空虚な人形だからな。散々お前を人形と罵ってきた私が一番の人形とは、笑えるじゃないか。

……空虚だとか、人形だとか。そんな悲しいこと言わないでよ。君はこうして生きているじゃないか。

――何を今更。私は戦闘単位の一つで、

それでも！　それでも君はラウラ・ボーデヴィッヒだ！　だから、悔しいって感じたんだろ！？　嫉妬したんだろ！？　感じることが出来るなら君はれっきとした人間じゃないか！

――ラウラ・ボーデヴィッヒはただの記号だ。お前の言うような高尚な人間ではない。

いまさら逃げんな！　耳かっぽじってよく聞けよ！　一回しか言わないからな！　俺は、俺は君を可愛い女の子だって感じるんだよ！

――なっ……！

口を挟むなよ、黙って聞いてろよ！　ふざけてるって思ってるだろうけど、俺は本気だし冗談なんか大嫌いだ！　そりゃあさ、出会い頭にいきなりビンタされたりとか、シャルルとの模擬戦の最中に不意討ちかまされたり、セシリアさんたちをボコボコにしたりしたから、君のことは嫌いだし好きにはなれない。でも！　君が可愛い女の子だってことは嫌でも分かるし、風に揺れる銀髪は凄く綺麗だって感じるんだよ！

――う、嘘を吐くなっ！

こんな恥ずかしこと嘘で言えるか、ドイツ軍人！　頭固いんだよ、もっと素直に感じろ！

――す、素直に……。

さっきの言葉は一回しか言わないし、二度というつもりはないけどこれだけは言える！　いいか、

「お前は出来損ないの人形じゃない、ラウラ・ボーデヴィッヒって名前の人間なんだよッ！！！」

ああ。そうか……。成る程、教官が入れ込む訳が分かった気がするよ。お前は強いよ、緋神カイト。

――そんなわけないだろ。言ったじゃないか、無力で屑だってさ。

それでもそう言えるのが、お前の強さだ。なあ、緋神カイト。質問をしていいか？

――答えられる範囲でなら。

私もお前みたいになれるだろうか？　力の本質を見誤ず、正しくものを見られるような透明でしなやかな強さを得ることが出来るだろうか。

――さっきも言ったけど、君はラウラ・ボーデヴィッヒだ。緋神カイトじゃない。俺のようになるなんて絶対に無理だ。

……。

――でも、だからこそ君は僕の隣に並べるんだ。

僕は手を差し伸べる。

『誰かになっちゃったらそれは誰かのレプリカだ。それを受け入れたら、その人の隣に並ぶことは出来ないし、向き合うことだって出来ないだろう』

気付いて。

『だけど、君は今日この瞬間に気が付いたじゃないか。自分が他の誰かにもなれない、たった一人の人間だって理解したんだろう？』

もう君は人形じゃないんだって。

『なら、その人の隣に歩いて行けるんじゃないか？　同じ目線で同じ物を見ることができる力を君は持っているじゃないか』

さあ、手を伸ばして。

『僕は君を否定しないし、君も君だけの答えを見つけられると思う』

こんな世界から一歩を。

――答えになっていないぞ、緋神カイト。

そんな僕をバカにするようで、それでいて心底楽しそうな声が聞こ

えてきた。

『しょうがないじゃないか、語力無いんだ』

――だが、隣に立つか。そんなこと、考えもしなかったな。

ぴしり、と世界に亀裂が走る。絶対的な静寂で、緞帳の降りた闇で編み込まれた混沌の結晶が揺らぐ。

――なあ、緋神カイト。お前の見ている景色はどんなものだ？　どんな色をしている？　どんな薫りがする？　気になるんだ、教えてくれ。

『嫌だよ』

崩れ行く壁、砕ける天井、剥がれる床。それらが飛沫する世界で僕はひたすら彼女かの応答を待つ。

『知りたいなら、自分で確認してみなよ。きっと今の君なら気に入るよ』

『そうか。なら――』

ガラスが砕けるように、木っ端微塵に崩壊する闇の世界。差し出した手に冷たい感触が伝わってくる。響く声は相変わらず冷えきっているけれど、

「私にも見せてくれ、お前の愛した景色を」

不器用ながらも浮かべる、はにかむようなその微笑み。薄桃色に溶

けてなくなりそうな、それは淡雪を思わせて僕に実感させる。

やっぱり君は、女の子なんじゃないか――。

●

「カイトーーーーーー！！」

シャルルの絶叫は悲しく響き渡る。その声を届けたい人は闇に喰われ、数秒持たずに飲み込まれてしまった。

あまりの光景にシャルルが膝から崩れ落ちる。嘘だ、ありえない。カイトが、カイトに限ってそんなことは有り得ないと必死に否定する。

「……カイト」

自分の居場所になってくれると言ってくれた優しい人。自分を護ってくれると言ってくれた強い人が居なくなってしまった。その事実が受け入れられなくて、シャルルの瞳に涙が滲む。

涙で歪む視界の奥、大切な人を飲み込んだ怪物がさらなる変貌を遂げる。背中に大推力スラスターが一対生え、左手にはカイトの愛刀である両刃の剣が握られていた。姿形がよりシャープになった黒の怪物がこちらに歩みを進める。

「シャルルちゃん、逃げるですよ」

危険を察知してシャルルの手を引くうるむの声もシャルルには届かない。まだ言ってないことがあるのに、伝えてないことがあるのに。勝手に居なくなるなんて、やっぱりカイトは嫌いだ。自分の気持ちなんか微塵も考えてくれなくて振り回すくせに。

「……カイト」

奇跡よ起これと、願いをこめて彼の名前を呼ぶ。一筋の涙が頬を伝い、地面に滴る。奇跡など起きないと分かっているのに、縋らずにはいられないのだ。

だが、そもそも奇跡とはそんな時に起きるものではないか？

「……なんです？」

ピタリとＩＳが止まり、体がくの字に曲がる。苦しむように、何かを押し込むように蠢く機体。その動きは時間と共に激しさを増す。その表情は歪んでいるように見えた。それは痛みでもなく苦しみでもない。

恐怖。

「ーーーーーーーーー」

声にならない叫びを上げる機体の腹部が四散する。ばらまかれる汚泥のようなくすんだ黒の血液。アリーナの障壁にまで飛び散ったそ

れらと共に、仰け反った黒い体から這い出てくるモノがあった。

それは、翼。豪雪のように黄金の粒子をちりばめるそれが、腹から出てきたのだ。

「っあああああああああ！」

金色の獅子の咆哮。絡み付く黒を引きちぎり、次第にその姿がシャルルらの目に曝される。

見間違いようがない。この声、この光。嫌いになれそうでなれないもどかしさと、どうしようもなく自分をひきつけるこれは――。

バカ。心配したじゃないか。君は僕のことが嫌いなのかい？　そうじゃなかったら、こんなひどい仕打ち出来ないよ。ねぇ、そうでしょ？

「カイトっ！」

シャルルの叫びに応えるように、完全に粘着液を振り切った緋神カイトがアリーナへと戻ってきた。即座にスラスターを一噴かしし、怪物から距離を取ったカイトの腕にはＩＳから引き剥がされ、気を失ったラウラの姿があった。

ガシャッ！

アクセルターンを決めたカイトがガルベストーンをコールする。その照準はただ一つを、異形のＩＳに当てられていた。

「もう、こんなのはいらない。いらないんだよ」

生へ縋るように、それともラウラの思念の残留なのか、自身の核たる存在を引き抜かれても動くＩＳにカイトが吐き捨てるように言った。その声は驚くべきほど冷静で、最大限の侮蔑を孕んでいたものだった。

「だから、もう終わりにしよう。亡霊なら亡霊らしく……、暗黒に帰れぇっ！」

瞬間、静と動が逆転する。カイトの声が怒りに染まり、容赦なく怪物を焼き捨て、触発されたように最後のマグナム・カートリッジが排夾され、火球を発射した。咆哮は爆発的な閃光と融合し、巨大なうねりとなってＩＳを光の渦に飲み下した。灼熱するエネルギーの渦が膨張し、爆発する火炎のなかでＩＳだったものは砕け、コアを残して消滅した。

跡形もなく消し飛んだ異形のＩＳを見て、安堵の息を吐いたカイトが腕のなかで眠るラウラに視線を落とす。

「これで、いいんだよね」

誰にも聞かれないような小さな声でつぶやいたカイト。その表情はどこか達観めいたものを感じさせるものだった。

●

「……ふむ」

目を細めて笑う赤の騎士。彼女は心から称賛していた。この局面で行使すべき力が何であるかを自ら選択し、その枠内を破壊する姿まで見せてくれた。ゆえにとりあえず一つは主命を果たしたことになるのだが……。

「しかし困ったな。もう一つの任務は依然果たしていない。獅子があの様では、結果を盗んだようで心苦しいではないか」

自分は騎士である。ゆえに、ここで戦いを求めるのは、束の間の英雄とはいえ、勝者の名誉を汚す無粋な言動であると心得ている。

黒の軍服が翻り、アリーナをあとにする彼女に千冬が呼び掛けた。

「帰るのか？」

「男の意地には応えてやる主義でね。奴にとってこの場所を失うのは敗北だろう。先の一戦は彼の勝利。であるなら、二戦目も尋常にいきたいな。私にとって、勝利とは盗み取るものではないのでね」

着込む軍服は飾りではない。その気概、信念、その魂はまさしく軍属である。ラウラの語る軍人など児戯に過ぎない程に。

「ああ、そう言えば名乗り忘れていたな。無意味だろうが、私の吟持に反する」

ゲートをくぐる間際、思い出したかのようにそんなことを言い出した赤騎士は眼下の千冬を見下しながら、口を開いた。

「我が君より命を受けて推参せしは、黄道十三星座騎士団第十位、大隊長『宝瓶』＝アガーテ・ツェンタゥア。ではな、『過去の』ブ

リュンヒルデ」

赤色の髪を揺らした赤騎士、アガーテはゲートを潜り、その気配を影に溶かしてしまう。融解した剣を片手にぶら下げ、それを見送ることしか出来ない千冬は自らの腑甲斐なさに舌打ちをしたのちに、アリーナの中央に視線を移す。そこでは一夏や、箒、セシリアに鈴までもが揃い、カイトを取り囲み、喜びの声を上げていた。

「まあ、今だけは喜んでおくとしよう。よくやったな、カイト」

胸の内の不安は拭えないが、今だけは彼らに知られないように深いところへとしまい込んだ千冬だった。

第二十三話　Bパート　～輝きを力に～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

なんだよこれ、グダグダだし高濃度の厨二病じゃねぇか。もはや笑うしかない。

山場を越え、次回は原作二巻の最終話。長くなるでしょうことは予感しております。大丈夫だろうか……。

では、またの機会に。

第二十四話　～Ｈｅｌｌｏ，Ｇｏｏｄ－ｂｙｅ～（前書き）

第二十四話です。

原作二巻のメにして、新たなステージへと向かうターニングポイントになる話ですので、お楽しみいただければ幸いです。

それでは、第二十四話『Ｈｅｌｌｏ，Ｇｏｏｄ－ｂｙｅ』幕が開きます。

第二十四話　～Ｈｅｌｌｏ，Ｇｏｏｄ－ｂｙｅ～

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上－－』

「デュノアさんの予想どおりになりましたわね」

「ＩＳのデータを取れるまたとない機会だからね。中止には出来ないよ。あ、カイト、七味取って」

「はい、パス」

「ありがと」

ボーデヴィッヒをあのＩＳモドキから救い出して早数時間が経過した。事情聴取も終わった僕とシャルルは、途中で合流したセシリアさんと一緒に晩ご飯を食べていた。

「それにしても、お二人とも当事者ですのに、随分と落ち着いてますのね？」

「それ、さっきも先生に言われたよ。でも、もう終わったことだし、気にしてもしょうがないでしょ？」

エビチャーハンを食べながらセシリアさんに答えた。幸い死傷者はゼロ、物的被害も大したことなかったからね。

「ご馳走様。学食っておいしいからついつい食べ過ぎちゃうよね。

……うん？」

ふと視線を感じて振り向くと、十人あまりの女の子達がひどく落ち込んでいる。さっきまで僕らのご飯が終わるのを待っていたんだけど……。

「優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

「廊下では静かにしろ！」

バタバタと走り去っていった女の子たちを注意する千冬姉さんのお叱りの言葉が聞こえた。多分、彼女らの耳には届いていないだろうなぁ。

「なんなのかな？」

「さあ？」

「……おほほ……」

顔を見合わせて首を傾げる僕とシャルルの横でセシリアさんが苦笑いを零す。何か知ってるのかな？

「あ、そうだ。セシリアさんに聞きたいことがあったんだ」

「な、なんですの？」

こほんと咳払いしたセシリアさん。ＩＳの知識が豊富なセシリアさんなら、きっと僕の疑問にも答えてくれるはずだ。

「ＩＳ同士で会話って出来るの？」

「それはチャネルが合えば会話は出来ますわよ？」

「あー、いや、そうじゃなくて」

なんて説明しようかな。あの時の感覚は曖昧だったからなぁ。

「えーっと、プライベートチャネルとは違ってて、なんというか、二人だけの空間みたいな場所で会話する、みたいな」

「ＩＳにそんな機能はありませんわよ」

「待って、オルコットさん。もしかしてカイトが言ってるのって、相互意識干渉（クロッシング・アクセス）のことなんじゃないかな？」

「クロッシング・アクセス？」

シャルルがそう答えてくれるけど、はて、そんな用語、教科書に載ってたっけ？

「わたくしも噂でしか聞いたことしかありませんが、操縦者同士の波長が同調（シンクロ）すると、ＩＳ同士の情報交換ネットワークの影響による個人的空間（アウタースペース）が発現するらしいんですが……」

「うん、多分それかな。でも、波長かあ。なんだかよくわからない

や」

「ＩＳにはよくわからない現象や機能がかなりの数あるよ。作った篠ノ之博士は全機能を公表してない上に現在も失踪中だし、前に何かのインタビューで自己進化する部分があるから、本人も全部を把握するのは無理だって言ってた気がする」

「篠ノ之博士、か」

篠ノ之束はＩＳに関する基礎理論を一代で構築・実証した稀代の天才で、クラスメイトの篠ノ之箒さんのお姉さんだ。しかし、作った本人にもわからないという箇所があるというのは機械としてどうかと思うな。

そんなことに思い耽っていると、なんというか、セシリアさんとシャルルが妙に刺々しい視線を送っていた。

「……カイトさん、二人だけの空間というのは、つまりボーデヴィッヒさんと？」

「う、うん、そうだけど……」

「「ふーん」」

なんでもないと言うように二人は席を立って食器を片付ける。なんだか足早いし。

……あの、二人とも？　どうしていきなり不機嫌になるの？　僕はただ相互意識干渉について訊いただけなのに。うーん、謎だ。

「あ、緋神くんにデュノアくん。ここにいましたか。さっきはお疲れさまでした」

「それを言うなら山田先生こそ大変だったでしょう？　ずっと調書を書いていたじゃないですか」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから。えへん」

「――っ！」

いかん、ぷるんと弾けるように揺れる大きな胸の膨らみに視線が引き付けられる。顔を背けて即座に対処。

ゲシ！

「足が木っ端微塵になるくらいの痛みがっ！？」

「カイトさん、破廉恥ですわ」

「カイトのスケベ」

「待つんだ二人とも！　それは誤解で――痛いから足を退けて！」

足の骨が悲鳴を上げてるから！　歩けなくなっちゃうからっ！

「？　どうかしましたか？」

「だ、大丈夫ですよ……！」

「そうですか。それよりも朗報です！」

ぐっと山田先生が両拳を握り締めてのガッツポーズ。またしても胸が揺れ、目を逸らし、足を踏み潰される。足が砕けるまであと数分といったところか。

「なんとですね！　ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「あれ？　予定では来月からじゃありませんでしたっけ？」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、もともと生徒たちが使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、それなら男子の三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

それはなんと嬉しい知らせなんだ。シャワーに文句を付けるつもりはないけれど、疲れた日にはどっぷりとお湯に浸かりたいんだよね。コレで僕もシャルルも疲れが取れるよね。

あれ？　男子『三人』？

「織斑くんは準備に部屋に戻りましたから、ふたりも早速お風呂にどうぞ。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣場の前で待っていますね。じゃあ」

そういって呼び止めるまもなくすたすたと歩いていってしまう山田先生。

そうだ、そうだよ。僕や一夏はともかくシャルルは女の子じゃない

か。表向きには男子で通しているから、一緒に入らないっていうのは女の子から怪しまれるだろう。

「と、とりあえずシャルル、部屋に戻ろっか」

「う、うん。それじゃあオルコットさん、また」

セシリアさんと別れ、部屋に戻る。着替えの準備をしている間も会話はなく、黙々とお風呂の準備をして、そして――、

「あ、来ましたね」

「あれ、一夏は？」

待っていたのは山田先生だけ。一夏の姿はない。どうしたんだろうか？

「織斑くんは疲れて寝ちゃったそうですよ」

なぜだろうか、その言葉が信頼できない。

「とにかく、一番風呂ですよ！　ごゆっくり～」

アルコールが入っているようなテンションで脱衣場のドアを閉め、取り残される僕とシャルル。

「「……」」

沈黙、痛いほどの沈黙が脱衣場に蔓延する。なんだかシャルルの顔が見られなくて、気恥ずかしくてついつい背中を向けてしまう。

一夏がいないのは僥倖だけど、さすがにシャルルと一緒という訳にはいかない。前にシャルルの裸は見ているけれど、今と前とじゃ状況が違うし、見せていいものじゃない。

「えっと、シャルル？」

「は、はひっ！？」

声が裏返ってるよ。まあ、いいけど。

「シャルル、お風呂に入ってよ」

「え？　カイトはどうするの？」

「さすがに一緒には入れないじゃないか。僕は部屋でゆっくりさせてもらうよ」

シャルルには疲れを取ってほしい。それは女の子だからという理由だけじゃなくて、この学園に来てからシャルルは男として通っている。それはきっと肩が凝るとかそう言う問題じゃなくて、もっとメンタリティーな問題なわけで。

つまり、シャルルには女の子として安らげる時間を与えたいんだ。僕は男だから、我慢強いしお風呂には入れないくらいでなんらデメリットはないし。

「い、いいよ。それなら僕が部屋に戻るよ。僕はカイトに入ってほしいんだ」

「それを言うなら、僕はシャルルに入ってもらいたいよ。タッグマッチでもたくさん助けてもらったし」

互いに主張を譲らず、相手にお風呂を勧めるだけ。しばらく譲り合いが続き、先に折れたのはシャルルだった。

「……わかったよ。カイトの好意を受け取るよ。もう、カイトの石頭」

「石頭でいいよ。それじゃあ僕は部屋に、」

「あ、待って！」

どう言い訳するかを考え始めた矢先、シャルルに呼び止められる。

「カイトにね、その、お願いがあるんだけど……いい、かな？」

顔を赤らめて、もじもじしながらそう上目遣いで尋ねてくるシャルル。雨の降りしきるなかに段ボールから送ってくる小型犬の眼差しに心臓がどきりと跳ねる。

ずるいな、そんな顔をされたら断れないよ。

「あ、あのね――」

真っ赤になったシャルルが切り出してきたお願いとは――。

●

かぽーん……

大浴場には大きな湯船が一つ、ジェットとバブルのついた中くらいの湯船がそれぞれ一つずつ、檜風呂が一つ、サウナ、全方位シャワー、打たせ滝まで完備しており、首都圏の高級スパを彷彿とさせる。

僕は今大浴場の湯船に浸かっている。入らないって言ったくせに何で入ってるのかって？

それを説明するには僕の背中を見てもらえば大体理解してもらえるだろう。

「「……」」

背中合わせに湯船に浸かっているのはシャルルだ。当然ながら背中に伝わるのはやわらかな素肌の感覚。

そう、シャルルからのお願いとは一緒にお風呂に入って欲しいということだったのだ。

嫌とかそう言うんじゃなくて、なんというか、困るんだ。記憶を失っているとはいえ、健全な男子だし、人並みには女の子に興味もある。いけない感情だって、ないとは言いきれないし。

だから、僕は一度は断ったんだけど……。

『僕はカイトと一緒に入りたいんだ……。ダメ？』

なんだか凄まじく罪悪感を触発されて、つい頷いてしまったのだ。

情けないと思うが、そう上目遣いで頼まれて断れる人間がいたらどなたか紹介してほしい。

ぴちゃん……

時折落ちる水滴の音にエコーがかかって静かな湯槽に乱反射する。妙に大きく聞こえて、なんだかドキドキしてしまう。

「「あのっ！」」

何か話したほうがいいかなと思ったその声は、奇しくもシャルルと重なり、この沈黙から逃げるように反響を残して消えていく。

「ど、どうしたの、シャルル？」

「か、カイトの方こそっ」

「ぼ、僕はなんでもないから。シャルルからどうぞっ」

「う、うん……」

シャルルの手がお風呂のなかで僕の手と絡み合う。逃げないで聞いてほしい、ということなんだろうか。

「その……前に話したこと、なんだけど」

「前に話した……それって学園に残るかどうかって、あれ？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにいようと思う。僕はまだここだって思える居場所を見つけられていないし、それに……」

「そ、それに？」

「……」

「シャルル？」

急に会話が止まったことを疑問に思った僕は反射的に後ろを振り向こうとした。

「こ、こっち見ちゃダメ！　あっち向いてて！」

「ご、ごめん！」

慌てて前を向くけれど、水面に浮かぶ金色の髪、そしてその隙間から覗く白い肌が脳裏に焼き付いてしまった。忘れないといけないよね！？

（あー、もう！　どうしたらいいのこの状況！？）

軽くパニックに陥る頭はのぼせてきたのかクラクラしている。だけど、そんな意識が次の瞬間には目を醒ます。

ちゃぷ……ぴとっ……

「しゃ、シャルル――！？」

僕の手を握っていたシャルルの手が一度離れ、続いて背中を離したかと思った次にはその手が僕の背中に触れ、流れるように僕を抱き締める。

背中にシャルルの華奢な体が密着して、心臓がうるさいほどに鳴り響いてどうしようもなく僕の心をかき乱す。

「カイトが、僕を必要だって言ってくれたから。そんなカイトがいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「そっか……ありがとう、シャルル」

「お礼を言うのはこっちなのに、変なカイト」

変じゃないよ。君が必要だって言ったのは僕のワガママで。誰も失いたくない、取りこぼしたくないんだ。そんな青臭い理由で言った言葉をシャルルが頼ってくれたなら、こんなに嬉しいことはない。

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ……？」

「そう。僕の在り方に意味、理由。これもカイトが教えてくれたんだよ」

「そ、そうなの？」

「カイトって本当に自分のことには鈍いよね。嫌いになっちゃうくらい」

「ごめんね、シャルル。僕ってどうしても、」

「シャルロット」

「え？」

やさしい、まるで聖母のような笑みが僕に向けられる。

「カイトには僕のこと、これからはシャルロットって呼んでほしい。君だけには僕の本当の名前で呼んで欲しいんだ」

「それが、君の本当の……？」

「そうだよ。お母さんがくれた、本当の僕。ねぇ、呼んでほしいな」

「もちろんいいよ――シャルロット」

「ん」

横目で見たシャルル――シャルロットの表情は純粋無垢な子供のようなそれでいて、目の眩むような輝いている最高の笑顔だった。

「と、と、ところで、さ。あの、いつまでもこの体勢でいるのは、正直色々ヤバいんだけど……」

改めて意識すると、背中に触れている彼女の膨らみが気になってしまう。い、意外と大きい……。

「あ、ああっ、うんっ！　そうだねっ！　ぼ、僕、先に体と髪を洗っちゃうね！」

ばしゃばしゃと湯船から上がっていくシャルロット。よかったと思う自分と残念と感じる自分がいたのは見ないふり。

「こ、こっち覗いちゃダメだよ？」

「の、覗かないよ！」

「そんなにムキにならなくてもいいのに……。カイトになら、いいんだけど……」

何かを呟いたような気がしたけれど、波打つ水音に阻まれて聞こえなかった。

それから三十分、僕らは大浴場を満喫したのだった。

●

翌朝。朝のホームルームにシャルロットの姿はなかった。朝ご飯を食べ終わった後すぐに、『先に行ってて』と言っていたので先に準備して教室に来たんだけど……。

来ない。昨日の怪我が後を引いているだろうボーデヴィッヒは仕方ないとはいえ、どうしてシャルロットは来ないのだろうか？

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生の足元がおぼつかず、なんだかふらふらしている。二日酔い、という訳でもないみたいだし、何があったんだろうか？

「えーと、今日は転校生を紹介します。転校生といいますか、すでに紹介は済んでいると言いますか、ええと……」

うん？　何だか歯切れが悪いけれど、また転校生なのかな？　シャルロット、ボーデヴィッヒ、うるむちゃんに四人目だよ。

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

え？　この声まさか……！

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

「「「よ、よろしくお願いします……」」」

シャルロットが頭を下げる。その姿はＩＳ学園指定の白いスカートを履いている。相変わらずの礼儀正しさにクラスみんなが礼を返した。

「ええと、デュノアくんはデュノアさんでした。ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります……」

だから、そんなによろよろになっているんですね。成る程、納得。

……待てよ、これはまずいんじゃないんですか？

「え？　デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って緋神君、同室だから知らないってことは――」

「ちょっと待って！　昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ザワザワザワッ！

教室の喧騒が一気に爆発し、感情の爆発が嵐となって蹂躙する。

ヤバい、ヤバいヤバい！

ズドカーン！

「一夏ぁっ！！！」

壁が吹き飛び、むせ返る灰煙りの奥から登場したのは修理した甲龍を装備した初代転校生、鈴だ。背後に龍が見えるのは錯覚ではないだろう。燃えよドラゴンってこのことか。

カシュッと両肩の衝撃砲が開かれ、エネルギーが収束する。一夏、お願いがあるんだ。避けられないからって僕を楯にするのは止めてよ！

「死ね！！！！」

「うわあああああっ！」

死ぬ死ぬ、僕も死んじゃうからーー！

ズドォォォォンッ！！！

炸裂する衝撃砲に教室が揺れる。…あれ？　痛くない。頭、胴体、両腕、両足をすばやく確認するけれど吹き飛ばされた場所はない。どうして僕は無事なんだ？

「……」

「君は……」

前を向いた僕が見たのは、僕と鈴の間に割り込んだボーデヴィッヒだ。装備している『シュヴァルツェア・レーゲン』にはあの大型レールカノンがない。

「邪魔だ」

「一夏ぁっ！？」

振り向いたボーデヴィッヒは一夏の首根っこをつかむとそのまま鈴の方へと放り投げた。放物線を描く一夏を追い掛けようとした僕の胸ぐらを掴まれて、って？

「むぐっ！？」

いきなり、いきなりだった。引き寄せられた僕は一一彼女に唇を奪われた。

「！？！？！？！？」

キス『ＫＩＳＳ』。日本では接吻ともいい、男女が唇を重ね合わせたりする愛情表現の一つ。僕のキスに対する知識はそんなものだ。だけど間違っているとは思わないのに……。

「んっ……んっ」

彼女の息がくすぐるように僕の頬を撫でる。ファーストキスはレモン味とは誰が言ったんだろうか？　まあ、当たり前なんだけど。

「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」

「……嫁。婿じゃないの？」

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

誰だよ、この子に日本のサブカルチャーを一般常識として刷り込んだのは。ちょっとアリーナ裏まで行こうか。ブッ潰してやるよ。

じゃ　な　く　て！

ビシュン！

我に返り、よろけた僕の鼻先を青い閃光が掠める。おそるおそるそちらに顔を向けると、

「ああら、カイトさん？　わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがありまして。ええ、突然ですが、急を要しますの。

おほほほほ……」

ひぃっ！　こめかみに怒りマークを目測五つ以上見せる、大逆鱗バージョンのセシリアさんが《スターライトｍｋ？》を構えている。ゆらりと、立ち上がったセシリアさんの手に、体に粒子が収束してブルー・ティアーズが展開される。

話し合おう！　そうだよ、話せば分かってくれるはずだ！

「ち、ちがっ、違うよ！　これは誤解で！」

「問答無用ですわ！」

ダメだ、今のセシリアさんに言葉は通用するとは思えない！　とにかく逃げなくちゃ！

ぼす……

「ぼす？」

振り向きたくないけれど、振り向かざるをえない。油の切れたロボットよろしく、振り向いた先にいたのは……。

「……」

シャルロットだ。

「にこっ」

「に、にこっ」

笑顔を返せているだろうか？　正直不安だ。シャルロットのエンジェリックスマイルに相応しい笑顔じゃないことは確かだ。

「カイトって他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしちゃったよ」

「だから、僕は被害者であって……あの、シャルロットさん？　ＩＳを展開している理由をお教え願えますか？」

「ひ・み・つ」

雷光迸るトライ・ステーク。『エークレール』は使用しないんじゃなかったっけ？

一夏の悲鳴をバックに迫る青と褐色と黒の鉄機に追い詰められる僕。

「は、はは、ははははは……」

本能的に死期を悟っているのか、口からは乾いた笑いがこぼれる。どうやら記憶を取り戻す前に僕は死ぬかも知れません。

ドガァァァァァァン！

今日のホームルームは血と硝煙の匂いが蔓延した。

●

ぱらりろぱらりらぺろ～♪

「はーい、みんなのアイドル・篠ノ之束ここに一一待って待ってぇ！　ちーちゃん！」

「その名で呼ぶな」

「おっけぃ、ちーちゃん！」

「……はあ。まあいい。今日は聞きたいことがある」

「何かしらん？」

「お前は今回の一件に一枚噛んでいるのか？」

「今回、今回一一はて？」

「ＶＴシステムだ」

「ああ。あれ？　うふふ、ちーちゃん。あんな不細工なシロモノ、この私が作ると思うかな？　私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ？　すなわち、作るのも完璧において十全でなければ意味がない」

「……」

「ていうか忘れていたけど、つい二時間ほど前にあれを作った研究所はもう地上から消えてもらったよ。……ああ、言わなくてもわかってると思うけど、死亡者はゼロね。赤子の手をひねるより簡単一

ーていうかちーちゃん、赤子の手をひねるって結構大変じゃない？
私だけ？　あれ、おかしいなぁ」

「そうか。では、邪魔をしたな」

「わー、待って待ってぇ！」

「……今度はなんだ？」

「私からもしつもーん。十全な束さんにもわからないことだってあるんだよー」

「……」

「ねえ、ちーちゃん。緋神カイト君は元気かにゃ？」

●

「ようこそ、お待ちしていましたよ、お二人とも」

とある町にかかる鉄橋。その上、僧衣に身を包んだ高司祭がそう言った。

「本当にお久しぶりです、『巨蟹（クレープス）』、『天歇（スコルピオーン）』。月並みですが、相変わらずのようですね」

穏やかながら狂気のにじむ声に答えるものは、歩く厄災の結晶。血の、硝煙の、不臭の、狂気の、凶事の、悪魔の匂いがむせ返るほど

に鉄橋に立ちこめる。彼女らはあらゆる意味で人間を超越し、言うならば人食(マンイーター)。

「はンッ」

司祭の挨拶を鼻で笑い飛ばしたのは、まだ若い女性だ。

「相変わらずってこたぁ、昔のまま進歩ねぇって言いたいのかよ、『双児』。言葉選ばねぇと殺すぜ、てめぇ」

無頼な物言いは親しみの現れであり、それを理解している司祭も本人も笑している。色がごっそり抜け落ちた白い肌は白蝋のように冷たく、深く、幾千幾万の絶望で塗り固められた彫刻を連想させる。

対して、

「ごきげんよう、司祭様。あなたは本当に変わってないわね。少し怠けすぎなんじゃないのかしら」

鈴を転がすようなその声は、印象どおりの可憐な少女のもの。華奢な姿も、桜色の髪の毛も、彼女のすべてがこの場にそぐわず、愛らしい背格好な故にこの場で最も異彩を放っていた。

「私はしばらく陰棲していたものでしてね。まあ、怠けているのは今に始まったことでもなし、一応それなりの理由もありますが、説明責任を求めますか？」

「要らねぇよ、知った仲だ。堅苦しいのは止めようや。オレが知りたいのは一つだけだ。この極東の地に誰と誰が来ている？」

「『獅子(レーヴェ)』、『蛇遣(アスクレピオーズ)』、『射手(シュッツェ)』、『宝瓶(ヴァッサーマン)』、そしてあなた方の計六名ですよ」

「『双児(ツヴィリング)』、今あなたさっき『獅子』って言ったわね？　彼は死んだんじゃなかったの？」

「どうやら『宝瓶』殿が仕留め損なったようでしてね。存命が確認されているのですよ」

「へぇ」

「ほぉ」

少女と女性の口許に、亀裂ような笑みが浮かんだ。面白い。あのアガーテ卿を持ってしても倒せなかっただと？　知らぬ間に大したものになったものだ。それは是非とも一一、

「二人とも」

不穏な気配を感じ取り、釘を刺すように司祭が続けた。

「『乙女(ユングフラオ)』亡き今、これ以上Z∴D∴Oが欠けるのは我々には」

「んなこたぁ、わかってるぜ。んで、後は『魔羯(シュタインボック)』だけだが、あいつはいつ来る？」

「もう少しかかるでしょう。なにせ、彼女は次の作戦の準備に奔走しているはずですから」

「作戦かぁ。楽しそうな響きじゃない。それって私たちも参加して

もいいんでしょ？」

「願わくば」

「だってさ、ベイ」

「面白そうじゃねぇか。ちったぁお預け食らうのはアレだが、派手な戦になるような気がするぜ」

「では、ここに盟約を」

つぶやき、司祭は口調を改める。それに従い、二人の騎士が道化た態度を改める。目付きが変わり、厳粛と言っていい雰囲気が、辺り一面に立ちこめる。

「『巨蟹』＝ヘルガ・アーレント」

「『天歇』＝ルサルカ・ベルゲングリューン」

「汝らの名誉は忠誠であり、その誉れを星の輝きとすることを黄道十三星座騎士団第三位、『双児』＝リーゼロッテ・アーベントデンメルングの名において、ここに汝らを祝福する」

一拍置いたその後に、彼女等は揃いの言葉で締めくくった。

ジークハイル・ヴィクトーリア、我らに勝利を与えたまえと。

ここにまた、新たな戦いの火蓋が切って落とされたことを知る者は少なく、戦いの歌劇は次の演目へと幕を移していく。

第二十四話　～Ｈｅｌｌｏ，Ｇｏｏｄ－ｂｙｅ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

原作二巻終了っ！　いやぁ、長かったぁ。山あり谷ありで結構手間取りましたが、皆様がお楽しみいただければそれに勝るものはございません。

次回からは原作三巻に突入します。臨海学校編？　福音編？　いいえ、違いますよ。次回からお送りする第三のオペラは……。

それでは、またの機会に。

設定編？（前書き）

第三章に突入するまえに、オリキャスをご紹介します。

今回は不思議ちゃんこと、うるむちゃん。

設定編？

●オリジナルキャスト
　竜胆うるむ（りんどう　一）
●年齢
　１５歳
●性別
　女
●身体的特徴
　黒のショートカット・ワインレットの瞳
●身長
　１５３ｃｍ
●ＩＳ適正
　Ｂ
●詳細
　学年別トーナメント間近のある日に学園へ転校してきた少女。一人称は『うるむ』で、語尾に『です』を付けて喋る。また、カイト以外は年齢に関係なくちゃん付けで呼ぶ。

物静かで派手な物や争いを好まない反面、『自分がドキドキできる場所』、つまり自分の知らない未知には非常に貪欲で、興味を持ったら一途に参加する。ＩＳ学園に来るまでは未知に枯渇し、全てに既知感（デジャヴ）を感じていたらしい。

かなり無愛想なうえ、年のわりに冷めた態度やキツい物言いが多く声もあまり大きくない。プリンが好物で、人一倍プリンに関する意気込みが高い。

環太平洋圏を中心とした世界最大のＩＳ企業、サイクロン社のテス

トパイロットとして専用ＩＳ『ケリュケイオン』の搭乗者に登録されている。

「カイト、うるむを『ドキドキ』させてくださいです」

●作者コメント

ちょっと不思議な女の子、竜胆うるむちゃん。君を書いていると無性にプリンが食べたくなってくるよ。ちょっくらセブン行ってきます。ＩＳ学園には色々な性格の女の子がいるけれど不思議系女の子がいないなと思い、書いてみましたがどうでしょうか？　余談ですけど、女の子がドキドキとか言うとこっちまでドキドキしてしまうのは俺だけですかね。

●専用機

ＣＹＣＬＯＮＥ－Ｘ－ＴＲＩＡＬ－００２　『ＫＥＲＹＫＥＩＯＮ』

竜胆うるむが装備する高機動格闘戦型の戦闘能力に秀でた第三世代ＩＳ。鋭角的なフォルムに大型の甲手、深紅のカラーリングとうるむの個性が反映された彼女の専用機である。腰の後ろのオーバースカートを可変させ『ヘルメス・フィン』として展開することで、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を圧倒する加速性を発揮する。

なお、この機体はサイクロン社のＩＳシリーズ『アクティブシリーズ』の基本となった試作ライン『Ｘ－ＴＲＩＡＬ』の一つを徹底改造した機体である。

●武装

大型ナックル《シュランゲ》

ケリュケイオンの両腕に装備された大型の甲手。リーチは短いものの、持ち前の機動性を活かしたバトルスタイルをとる事が可能。

スラッシュデヴァイス《ギフトシュランゲ》
『ヘルメス・フィン』を展開することで限定的に使用可能になる巨大な赤黒いギロチン。ＩＳの防御を貫く圧倒的な切れ味を誇っているが、うるむはあまりお気に召していない様子。

●作者コメント
忌避されるべき常軌を逸した暴力をコンセプトとしたのが、このケリュケイオンです。本来機体に装備するべきではない武器を積んだらどうなるのか、ということでマルグリット・ボア・ジュスティス、つまりはギロチンを装備してみましたが、ドラマ性にメリハリは付けられたでしょうか？　ちなみに、レイヴァー・デイのガルベストーンが連射できないのも、同じ理由ですが諸兄らはお気付きか？

設定編？（後書き）

アガーテ姉さんとかはって？
まだ先ですよｗ

第二十五話　～空回りな空騒ぎ～（前書き）

第二十五話です。

原作第三巻へと突入です。（僕が）待ちに待った新章開幕！　臨海学校編？　福音編？　いいえ、これから始まりますオペラは星座煌めく天の歌劇。言うなればそう、

『星座編』

それでは第二十五話『空回りな空騒ぎ』、そして星座編の幕が開きます。

第二十五話　～空回りな空騒ぎ～

『……っと』

目が覚める。どうやら眠っていたみたいだ。俺は手の書物から顔を上げた。疲れが溜まっているのだろう、肩がバキバキと骨が折れるのではないかと疑うくらい酷い音を鳴らしている。

疲れているのも無理ないか。本年はおそらく我がドイツに栄光輝く日であると祭り上げられるだろう。何せ、ドイツ軍にあの噂高いブリュンヒルデが仮入隊したのだから。おかげでこっちは東へ西への大奔走。

思い返せばＩＳが発表されてもう結構な年月が経っている。白騎士事件だのアラスカ条約だの難しいことはあったものの、俺のような若輩としてはデカい戦争だけ無ければそれに越したことはないと思ってしまう。平和ボケしてると馬鹿にされそうだが……。

もしかしたら軍の上層部はそんな現状を打破するため、ＩＳどうこうで開戦に踏み切るのかも知れない。今やＩＳが世界を制するといっても過言じゃないんだ。ウチのトップは妙に戦いが好きだからなぁ。

『いや、待て。それは困る』

自分の問いを自分で却下する。俺はこの今を、鳴動の時代のなかの微かな満足を得られる今を揺るがされては堪ったもんじゃない。お偉いさん方には悪いが俺の本音はそんなものだ。

特に読書が好きな俺にとって、ついさっき読み終えた本の新刊が出なくなるのは非常に困る。作者には是が非でも執筆活動を続けてもらわなくては。このシリーズを読破する事は俺のささやかな楽しみなんだから。

なんて埒もないことを考えていたその時だった。

カツカツ……

『……』

背後から聞こえてくる足音を聞いて、嫌な予感が駆け巡る。ただの予感だが、こういう悪い方向に限って俺の予測は百発百中だったりするから余計に厄介だ。

やっぱり読書は大人しく自室ですべきだったか。あ、でも今部屋には『アイツ』がいるから無理か。ホールの長椅子に座ってるだけじゃあ隠れもできないだろ。

別に俺への客ではないだろうし、こういう存在は無視とか、適当に流すのが吉だろうが、足音が近づく度に首筋がチリチリする。威圧、研ぎ澄まされた嫌な気配だ。

『失礼』

●

だから、そいつが俺のすぐ横で立ち止まって声を掛けてきた瞬間、最悪だなんて思ってしまったんだ――。

「シャルロット、僕はもう我慢できないよ」

「か、カイト……」

赤い夕日の差し込む放課後の教室。臨海学校について書かれたプリントを薙ぎ倒し、シャルロットはカイトに机に押し倒されていた。

「じょっ、冗談が過ぎるよ。いくらなんでもそれは……」

「僕は、本気だ！」

冗談で逃げようとしたシャルロットの言葉は、カイトの真摯な叫びで遮られてしまう。

「好きな人にこんなことをするくらい、僕はもう我慢できないんだ。だから、シャルロット……」

「うん……」

真紅の瞳の魔力に虜にされたシャルロットはゆっくりと目を閉じ、体を彼に預ける。包み込むような黄昏の光を浴びる二人の体は一一。

「一一あ、れ？」

唐突に現実へと引き戻される。寝呆け眼をこすりながら、部屋を見渡す。教室ではない、寮の自室だった。

「……」

霞がかかったような意識がようやく晴れてくる。そして、さっきのが何であるかを理解してしまった。

「夢……夢……」

ずーん、とシャルロットが崩れ落ちた。世の中に不条理があるとするならまさにこの瞬間だとシャルロットは直感した。

（ああ、せめてもう十秒くらい見ていればなぁ……）

目が覚めてしまったのが悔しくて、シャルロットは目を瞑ってさっきの夢をリピート再生する。

「……」

途端に、ボッ、と彼女の顔が真っ赤に染まる。照れているのではない、恥ずかしいのだ。

（が、学校の教室で、なんて……。ぼ、僕ってば何を考えてるんだろ……！）

胸に手を当てて深呼吸。落ち着こうとしても胸の奥がドキドキと跳ねてしまうのがとまらない。

（あのカイトが自分からするわけないじゃないか……）

先月を同じ部屋で過ごしたシャルロットには分かっていた。カイトが夢のように積極的にはならないことが。それっぽい言は言うかもしれないが、実行に移すほどの気概を悲しいかな、カイトは持ち合

わせていないのだ。

（それは一番僕が分かってるのに……）

分かっていながらそんな夢を見てしまうのは、今はもうカイトと同じ部屋ではないからだろうか。それでもこんな夢を見てしまうのはすぐ傍にカイトの姿を求めているからで、

「あれ？」

ふと隣のベッドにルームメイトの姿がないことに気付いた。しかもベッドはメイキングされたまま、使用された形跡のないものだった。

「……どこ行ったんだろ？」

しかし、そんなことはどうでもいい。今は夢の続きを見れるかが重要だ。まだ時間はたっぷりとある。

（せっかくなら、もうちょっとエッチな内容でも僕は全然構わない）

ボンッ！　破裂音が部屋に鳴り響く。シャルロットの顔が熟したトマトのように紅色に染まっていた。

「な、何を言ってるんだろうね、僕はっ」

布団を被っても心臓の音は鳴り止まず、二度寝するのにも一苦労するシャルロットだった。

●

チュンチュン……

「……ん……ぁ……？」

目を覚ませと言わんばかりにスズメが鳴いている。枕元の目覚ましを手に取ると、なんだ、まだ三十分もあるじゃないか。

（だったら……もう少し……）

欠伸をして布団を手繰り寄せる。

ぷに……

「ぷに？」

あれ？　この布団にぷにぷにぷになものなんてあったかな？　しかもなんだか妙に暖かくて、すべすべつるつるしている。

（あー、すっごく気持ちいいな、これ……）

その未知の物体Xを手繰り、抱きしめる。おぉ、なんと心地のいい。まるで日だまりを腕に抱いているような……。

「んぅ……」

――待った。今の声は誰？　明らかに女の子の声で僕や一夏ではない。そもそも、一夏だったら気色悪いだろ。おぇっ……。

あれ、まさか……。いや、もしかしたらもしかするかも……！　予想が予想を呼ぶ。確かめる意味を込めて、いざオープンザスカイ！

がばっ！

……

……

…

き、

「キャアアアアアアアアッ！」

絹を裂く悲鳴は僕の口から上がった。情けないとは思うけど、女の子のよりも大きな声で叫んでしまう。寮の皆様申し訳ありません！

ですが、ですがねっ……！

「ん……。なんだ……？　朝か……？」

全裸の女の子が布団のなかにいたら誰でも驚くよね！？

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒがそこにいたのだ。しかも、なぜだか左目の眼帯と待機状態のＩＳ、右太ももの黒いレッグバンドだけ。簡素とか、もはやそう言う次元の問題じゃない。

「うわぁ！　隠して隠してっ！」

毛布を渡しながら僕はそっぽを向く。見てない！　僕は何も見ていないからね！

「おかしなことを言う。夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ」

「色々とおしいけと、服！　とりあえず服を着てよ！」

「部屋に置いてきたが？」

「どうやってここにっ！？」

「無論、裸で」

「ごめんなさいすみません！　その話は止めてください！」

この話題は色々とまずいことを直感し、ベッドの上で土下座。僕の様子を訳のわからなそうに眺めるラウラは毛布を羽織ると口を開いた。

「日本ではこういう起こし方が一般的と聞いたぞ。将来結ばれる者同士の定番だと」

「……君にその情報を教えた人とは近いうちに話し合わなくちゃいけないみたいだね……」

「しかし、効果は抜群のようだな」

「はい？」

「目は覚めただろう？」

「嫌でも覚めるって……」

ため息混じりに答えた僕にもう眠気は微塵もない。むしろ醒めすぎ

て、頭が痛いくらいだ。バ●ァリンあったかな……。

「しかし、朝食までにはまだ時間があるな」

と、結わえた髪を散らす。朝日に銀色の髪がきらきらと煌めいて思わず見とれてしまった。

「どうした？　あ、あまり見つめると私とて恥ずかしいぞ……」

「ダウト！　それだけはダウトー！」

全力で否定する。恥じらいがあったらお風呂に入ってきたり、ＩＳスーツを着ている時とかに乱入してこないはずだ。それに、羞恥心があるならこんな状況に陥るはずがない。

このまま放置しておくと、いつか取り返しのつかないレベルにまで成りかねない。

なんとかしなくちゃ……。あ、名案。

「ボーデヴィッヒさん」

「ラウラと呼べといったはずだ」

「ラウラさん。僕はね、控えめな子が好きなんだ」

「ほう」

こう言っておけばラウラは刺激的なアピールを控えるはずだ。僕の言葉を聞いて、ラウラが二度三度と頷いた。成功したかな。

「だが、それはお前の好みだろう？」

「え？」

「私は私だ。他の誰にもなれないと言ったのはお前だろう」

仰る通りでございます。まさか僕の台詞が墓穴になるなんて思ってもみなかった。

「私はラウラ・ボーデヴィッヒ。お前の嫁だ」

「……」

なに、このカッコいい女の子。突っ込みすらも忘れさせる男らしさに言葉を失ってしまった。

「だ、大体、私は言ったではないか……？」

「はぇ？」

「お前の愛した景色が見たいと……。だから、私は今ここにいるんだぞ……？」

「うっ……」

責めるように下から見上げるラウラに言葉を詰まらせる。同じ景色は見れるけど、いや、そんな問題じゃなくって。

さっきの凛々しい態度から一変、もじもじと上目遣いに責める姿の

ギャップにドキリとしてしまう。

しかも一度そう捉えてしまうと、堂々と胸に手を当てている手も、今や僕から隠すかのように見えてしまうから不思議だ。

「か、隠せと言った割にはご執心のようだが？」

「いや！　ち、違うってば！　そうじゃなくって！」

「な、ならば見たいというんだな？　よ、嫁の頼みならば断れないな……」

「ああっ、もう！」

シーツを下ろそうとしたラウラの手を取った。

ガッ（足払い）

グイッ（倒れた僕の腕を掴む）

ギリギリギリ……（腕を絞める音）

わずか一秒足らずで床に解き伏せられる。

「いたたたっ！」

「お前はもう少し寝技の訓練をしたほうがいいな」

「つ、強い……」

さすがは千冬姉さんの教え子だ。容赦がないし、視線の冷たさまで一流だ。

「し、しかし、そうだな……。ね、寝技の訓練をしたいというなら、私が相手になってやらんでもないが……」

「どうしてそこで赤くなるの！？」

いかん、このままでは右腕が折れる。早く脱出しなくちゃ……！

コンコン……

「カイトさん、起きてらっしゃいます？」

いきなりのノック音に絶句する僕とさして気にしないラウラ。なんでこの時間にセシリアさんが僕の部屋に来るの？

「カイトさん？　入りますわよ？」

ダメダメダメ！

「ら、ラウラ！？　早く腕を解いて！　解いてください、お願いします！」

「だったら抜け出してみろ」

「無理だからこうしてお願いしてるの！」

そうこうしている間にガチャリと地獄へのドアが開いて――。

「朝ご飯は一日の活力ですわよ。しっかり食べないと体が一一ふぉあ」

どうやら新しい奇声のバリエーションを開拓したらしい。ピタリとセシリアさんの表情が、動きが、その全てが硬直する。

「あ、あ、あ、あ……」

「不作法な奴だな、夫婦の寝室に土足で上がるとは」

今セシリアさんの目に映っている光景は実に衝撃的だろう。仰向けに倒れた僕と、その腕に絡み付くように抱きついている裸の銀髪美少女。

はい、弁解無理。以降説明不要。

「カイトさん、いったい何ｓｆｄじょｈｊｖｊｖキｋｆｓｊｄｐフォゐｋｌｐｇｌ！」

ははははは、セシリアさん。地球語もしくは日本語でいいんだよ。

「変な奴がいるな」

うん、僕にとっては君も十分同類だけどね。

「何をしてらっしゃるんですか、カイトさんッ！」

我に返ったセシリアさんの背後にビットラックが呼び出され、射出された鋭角なフィンが部屋を滑空して僕に飛来する。

あ、死んだ。僕死んだ。

が、銃口を覗かせた四枚のビットは僕の目の前で止まっていた。いや、正確には止められていた、だ。

「勝手に嫁を殺されては困るな」

「くっ、貴女……！」

いつの間にか僕の前に仁王立ちするラウラの右腕に展開されているＩＳアーマーから発せられる慣性停止結界、《ＡＩＣ》によって受け止められていた。

不可視の圧力によって身動きを封じられたビットたちはセシリアさんの命令を受けてもびくともしない。

どうやら僕の命は首の皮一枚繋がっていた。よかった、極刑は免れたみたいだ。

「あれ？　ラウラ、眼帯が……」

ふと眼帯が床に落ちたのに気が付き、見るとラウラの金色の左目が露見している。その目を曝すことにコンプレックスがあるような素振りを見せていたはずだけど……。

「確かに、かつて私はこの目を嫌っていたが、今はそうでもない」

「そうなんだ。やっぱり自分の体を嫌ってもしょうがないもんね」

「お、お前が綺麗だと言ってくれたからな……」

「そ、そっか……」

色白の肌が微かに朱に染めるラウラに、どうしてだかドキドキとしてしまう。うう、ラウラの顔を見られないよ……。

「しゅ……」

「しゅ？」

「シュートォォーーー！」

キュインッ！

気合いと共に放たれた《スターライトｍｋ？》がＡＩＣを突き破って頬を掠めた。い、今の殺す気だったよね！？

「カイトさん、大人しく撃たれなさい！」

「ええ！？　セシリアさん、君は何を口走ってるのか分かってるの！？　どわぁ！　銃口を向けないでぇっ！」

「人の嫁に手を出すとは不躾な」

光り踊る朝のダンスパーティーは騒ぎを聞き付けた千冬姉さんが介入するまで続いたのだった。

いやぁ、生きてるって素晴らしいよね。

●

で。

「……」

「……」

「ずずっ……」

食堂の一角。重苦しいＢＧＭの中、僕は朝食を取っているんだけど……。

さっきのトラブルは解決したものの、セシリアさんのご機嫌はどうもよろしくないらしい。氷のように冷たい視線で睨み付けられているので、思うように食事が喉を通らない。

ちなみに隣に座るラウラは何事もなかったかのようにコーンスープをすすっている。

「ん、欲しいのか？　なら、分けてやろう」

僕の視線に気付いたラウラは自分の口にパンを含んで「ん」と差し出した。

「どうひた、はじっへいいほ？」

「……」

もはや反論する気力もないので、大人しく従おうとすると、

ガチャン！

食器がふわりと浮かび上がった。セシリアさんがテーブルを叩いたのだ。

「お二人とも、テーブルマナーを害なう行いは美しくありませんわよ……？」

その顔はひくひくと口元が引きつり、米粒サイズの青筋が浮かぶ怖い笑顔だった。反論したら殺される、という強迫観念じみたものに押されて食事を再開する。

「ふむ。……嫉妬か？」

「なっ！？」

「自分ができないものだから、羨ましいと。女の嫉妬ほど見苦しいものはないぞ？　だろう？」

わざとけしかけるような事を言わないの。あと、僕に話を振らないでください。これ以上惨事に巻き込まないで。メンタルが持たないよ。

「そ、それくらいこのセシリア・オルコットにできない訳がありませんわ！」

むしるようにパンを噛み千切ったセシリアさんが身を乗り出してきた。あのさ、さっき君はテーブルマナーがどうこうって言ってませ

んでしたっけ？

「……！　……！！」

目が怖い。目は口ほどにものを言うとは諺であるものの、その視線は血に飢えた肉食獣のそれだ。僕はこのパンを食べた瞬間にセシリアさんに食べられてしまいそうだ。

「ちなみにこれはカイトが言っていたことだが」

一人平然と朝食を食べ進めているラウラがチキンサラダを飲み込むと、こう続けた。

「カイトは控えめな女が好みだそうだぞ」

「！？」

なんでそんなに驚くのさ？　口にくわえていたパンを飲み下し、ゆっくりと席に着いて食事を再開した。もう睨むこともなく、目を瞑って朝御飯をしっかりと味わっているみたいだ。これでようやく僕も朝御飯を普通に食べられるよ。

（けど、こうして喋らないでいるとセシリアさんってかなり綺麗な人だよね）

綺麗に整えられた柔らかな金褐色に輝く髪に、艶やかで柔和な白い肌。二つが高い次元で交差し、並大抵の女の子じゃ敵わないような人形（ヒトガタ）に削りだされた宝石めいた怜悧を醸し出している。

「わああっ！　ち、遅刻っ……遅刻するっ……！」

うん？　この声はシャルロット？　食堂の入り口を見ると、大慌てで食堂に飛び込んできたシャルロットが適当な定食を手に取ったシーンだった。

「シャルロット」

「あっ、カイト。お、おはよう」

隣が空いているので、シャルロットを呼ぶ。

「珍しいね、シャルロットがこんな時間に食堂に来るなんてさ」

「う、うん……。ちょっと、寝坊しちゃって……」

寝坊だって？　それはまた珍しい。シャルロットは同じ部屋にいた頃からかなり規則正しい生活をしていたのに。

お茶を濁すみたいにどもりながら答えるシャルロットとは若干の距離がある。心の距離じゃなくて、物理的な距離が。

「シャルロット。微妙に僕のことを避けてない？」

「そ、そんなことは、ないよ？　うん。ないよ？」

何でか二回否定した。でも、言葉の割には僕を警戒しているような――あ。

「シャルロット、寝癖ついてるよ」

「ええっ！？　ど、どこ？」

「動かないで。僕が直してあげるから」

ぴょこんとアンテナのように頭から跳ねている髪の毛を撫で付ける。女の子の髪は丁寧に扱わないとすぐに傷ついちゃうから気を付けないと。

二度、三度撫でると寝癖は倒れてくれた。

「はい、これで大丈夫だよ」

「あ、ありがとう……」

「それにしてもシャルロットの髪の毛ってサラサラで綺麗だよね…　…どうしたの、顔が赤いみたいだけど？」

「な、なんでもないよ！　あははっ！」

「？」

ぶんぶんと手を突きだして否定するその顔は真っ赤だ。まあ、本人がなんでもないと言っているんだし、気にしても一一。

ゲシッ！　ギリッ！

「足と頬から伝わる謎の痛みがっ！？」

「人に控えめな女がいいと仰っておきながら随分と軽薄ですのね？」

「お前は私の嫁だろう。私のことも褒めるがいい」

足を蹴ったのはセシリアさんで、頬をつねったのはラウラ。二人が妙に迫力のある視線で僕の言葉を心待ちにしている。

「えっと……」

一瞬だけ、走馬灯のように時間がゆっくりと流れる。走馬灯って人間がピンチに陥ったときに窮地を脱する妙案を探すために見せるものだってテレビでやってたような……。

「「……」」

「う～ん……はっ！」

ピキュイーン！

キタッ！　名案だ！

「二人とも喋らないとすごい美人さんだよねっ☆」

グシャッ！

足を蹴り砕かれた。

「一緒にしないでくださいまし」「一緒にするな」

「足がぁッ！　足の指の感覚がぁッ！！」

ど、どうして二人ともそんなに怒ってらっしゃるんですか？　しか

も親の仇だとばかりに睨んでるし。怖ぇっす、超怖ぇっす。

キーンコーンカーンコーン……

なんだか頭の悪い漫才をしていたら頭上でチャイムが鳴って――って、え？　チャイム？

「い、今の予鈴じゃないの、ってあれ！？」

三人がいない！？　セシリアさんもラウラも、僕の後から来たはずのシャルロットは朝御飯を綺麗に平らげて既に食堂を出ようとしていた。

「ごめんなさい、カイトさん。今日は織斑先生のＳＨＲですから、遅刻するにはいけませんので」

「右に同じく」

「そう言うわけだから、先に行くね、カイト」

「あ、ちょっとみんな！？　カムバァァァック！！」

なんて叫んでる時間も惜しい。残った朝食を腹に押し込み、猛然と走りだす。くそっ、間に合うかな！？

校舎に向けて走っていると、不意に見慣れた後ろ姿を見つける。

「一夏っ」

「カイトかっ！」

そう挨拶は返すけどお互い走る足は休めない。この足を止めていいのは教室に入ったときだけだ。

「間に合うと思うか！？」

「さあね！　ＩＳが使えるなら別だとは思うけど！」

「同感だ！」

首に掛けたヘッドフォン、待機状態のレイヴァー・デイの内蔵時計を起動させる。時間は三分切った！

「カイト！」

隣を走る一夏の声。その視線は校舎二階の僕らの教室、開け放たれた窓に向いていた。成る程、あそこからショートカットするつもりか！

「オッケー！」

制服の上着を脱ぐ僕の前を走る一夏が振り向き、手を組んで踏み台を作る。

「外すなよ、カイト！」

「当たり前でしょ！」

踏み台を蹴り上げ、瞬間、一夏が僕を跳ね上げる。難なく我らが一年一組に飛び込めた僕は脱いだ制服を窓から垂らす。眼下では壁を

蹴って跳躍、上着を掴んだ。

「おいっしょぉっ！」

一夏の一本釣り。時間はセーフ。かくして僕らは鬼の処刑を逃れた――、

「無駄な身体能力を発揮するな、馬鹿共」

あれ？　まだ本鈴が鳴っていないのに千冬姉さんが教室にいるぞ？

「遅刻しそうになったのにも関わらず、ＩＳを使わなかったことは褒めてやろう。だが、」

スパァン！　スパァン！

「先の行為は学生としての行為から逸脱した行いだ。この言葉の意味がわかるな？」

「「はい……」」

二人揃って意気消沈。せっかく間に合ったのにこれじゃ水の泡だ。

ちなみにセシリアさんたち三人は僕らを尻目にお咎めなしときた。

キーンコーンカーンコーン……

そして今更ながらに鳴る本鈴。空気読め。

「お前たち二人は後で教室の掃除をしておくように。いいな？」

「「はい……」」

とぼとぼと肩を落としながら着席する。うう、今日はなんだかロクでもないことしか起きないよ……。

「今日は通常授業の日だったな。ＩＳ学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

そう言えば、そろそろ期末テストの時期が迫ってきてるんだっけか。毎日復習してるとはいえ、ちゃんと点数取れるか心配だな。

「それと、来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

教室が色めき立つ。七月の頭には校外実習、すなわち、臨海学校がある。三日間のうち、最初の日がオールフリーとなっている。しかもそこは海ということもあって、咲き乱れる十代女子の皆様は妙にテンションが高い。

前に一夏が水着を買うのをめんどくさいとのたまったら、セシリアさんや鈴に叩かれていた。

「それではＳＨＲを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ。緋神、ちょっと」

「はい？」

上履きを取りにいこうとした僕を呼び止め、廊下に引っ張ってくる千冬姉さん。

「お前、水着を持っていないだろう。週末に一夏に金を渡しておく。それで水着を買ってこい」

「いいんですか？　あ、でも僕がバイトを始めたのを知ってますよね？」

一応バイトも始めたし、水着を買うお金ぐらいはある。

「その金は気になる女にプレゼントする時にでも取っておけ」

「ですけど……」

「カイト」

はぁ、とため息を付き、頭を抑える。

「これくらい気にするな。気にするなら、後で恩返しでもしてくれればいいさ」

「……わかりました。ありがとうございます、千冬姉さん」

「学校では織斑先生と呼べ。ではな」

黒い髪を揺らして、廊下を歩き去っていく千冬姉さんに頭を下げる。

いつか僕は姉さんにお礼を返すことができるだろうか。

（とにかく、姉さんの心遣いを無駄にしちゃいけないよね）

そう決意する僕の背中を誰かが見ていたのには気付けなかった。

●

そして週末の日曜日。僕は駅の入り口にいた。できるなら早めに水着を買って明日の準備をしたいんだけど、

「何してるんだろ、一夏」

待つこと三十分が経過。奴は全然来ない。寝坊したにしては連絡がないのはおかしい。

連絡しようかとレイヴァー・デイを起動させようとしたところで、

「カイトさん」

「セシリアさん？　それにシャルロットまで。どうしてここに？」

一夏を待っていた僕の前に現れたのは私服姿のセシリアさんとシャルロットだ。二人一緒に買い物かな？

「カイト、一夏は来ないよ」

「え？　それってどういうこと？」

言うなりシャルロットから手渡される財布。ってこれ一夏のじゃないの！？

「何でも急な用事が入っちゃったんだって。代わりに水着を買って

きてほしいんだって」

「そ、そうなんだ……」

一応、確認の意味を込めて一夏に連絡を――。

ガシッ！

両手を捕まれ、駅へと連行される。え？　あの？　なんで？

「「一夏は来ないよ」」

「でも、確認を――」

「「一夏は来ないよ」」

「いや、あのね、」

「「イチカハコナイヨ」」

「……はい」

二人の笑顔に頷いてしまう情けない僕。目が笑ってないんだもの、仕方ないじゃないか。

いやな予感を胸に、僕の日曜日が始まったのでした。

第二十五話　～空回りな空騒ぎ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

派手な啖呵を切った割には、出来上がったのはどこか病的なマゾい文章。新章始まったばっかりなのに、大丈夫かねぇ？　なお、次回はお買物編です。グダグタにならなければいい、なぁ……。

ちなみに私事ですが、９月２８日時点で本作品のお気に入り登録が百件を越えていました。こんな駄文をお気に入り登録していただき有り難うございます。新章も開幕致しました故、一層の精進を心掛けます。皆さんもよろしければ応援お願いします。

それでは、またの機会に。

第二十六話　～平穏に潜む影～（前書き）

第二十六話です。

前述した通り、お買い物編です。リア充爆発しろっ！

それでは、第二十六話『平穏に潜む影』幕が開きます。

第二十六話　～平穏に潜む影～

それは三十分前……

一夏＆箒の部屋にて

「な、なんだ!?　どうしてセシリアとシャルロットが臨戦態勢なんだっ!?　セシリアはまずそのライフルを足元に置こう、で、シャルロットはそのコンバットナイフをこっちに渡してくれ」

「一夏さん、わたくしたちはあまり手荒な真似はしたくありませんの」

「一夏が僕らの問いに『はい』か『イエス』で答えてくれればいいんだからね」

「選択肢なしかよ!?」

「さあ、一夏さん」「さあ、一夏」

「「財布を渡しなさい」」

「もはや質問ですらない!?　ぜ、絶対に嫌だ!　ここには千冬姉から預かった大切な金が、」

「おほほ……。一夏さんは本当に冗談がお上手ですのね」

「いや、冗談を言ってるんじゃなくて一一待て、二人とも。どうしてＩＳを起動してるんだ?」

「一夏、君は聡い人だから話せば分かってくれると思ってたんだけど、僕の思い過しだったみたいだね」

「話してないし、話されてないぞ！？　そもそもこれは話し合いじゃなくて脅は」

「レディーの頼みを無下にするなんて紳士のすることではありませんわ」

「話聞けよっ！　てか、淑女は銃を突き付けながら交渉しないだろ！？」

「シャルロットさん、やむを得ませんが……、」

「そうだね、こんな方法は取りたくなかったけど……」

「「実力行使だ」」

「極論じゃねぇか！　ま、待て話せば分かる。対話をすれば未知の金属生命体とも、」

「「問答無用！」」

「ギャあアァａａａａａａａａａａ！！」

「……私は何も見ていない。私は部屋でゆっくり茶を飲んでいたのだ」

ズズズ……

理不尽な蒼雷が描くホロスコープを横目に、箒は朝の一時を楽しんだ。雲一つない青空に、一夏の断末魔を受けて滑る流星が一条あったことに気付く者は少なかった。

●

モノレールに揺られて十分弱。僕たちは駅前のショッピングモール『レゾナンス』にやってきた。

都市開発により駅舎を含む地下街と直結した構造の当ショッピングモールは衣住食を問わず、大手サプライチェーン店や海外の超一流のブランドまで網羅、さらにはゲームセンターなどのレジャー施設も完備し、まさにセントラル・ターミナルと言うべき場所、ということをさっきモノレールの中でセシリアさんに教えてもらった。

そんなパーフェクト駅前ビルの二階、見取り図のまえに僕らはいるんだけど……。

「シャルロットさん、まずは水着を購入する方針で宜しいですわね？」

「そうだね、選ぶのにも時間がかかっちゃうし。そうしたら、次は消耗品かな？」

「……あの、」

「なに？」

「なんですの？」

予定を打合せていた二人が僕を見る。セシリアさんもシャルロットも笑顔で楽しそうだ。けれど、

「腕を組むのは、どうにかならないかな？」

「ダメ」「ダメですわ」

「……ですよね～」

押し殺していた嘆息がポロリと零れる。僕は左腕をセシリアさんに、右腕をシャルロットに取られている。エージェントに連行されるエイリアンを連想してくれるのが一番近い。

お陰でさっきからすれ違う男の人には怨念の籠もった視線を浴びせられている。二人は気にならないかもしれないけれど、僕としては堪ったものじゃない。

「カイトは男の子なんだから、僕らをエスコートしてもらわなくちゃ」

「そうですわ。自らの幸福を自覚しない者は犬にも劣りますわよ？」

断続的に舌打ちが聞こえるこの環境を僕は幸福だと思えないよ。

「それでは参りましょうか、カイトさん」

「まずは向こうだね」

そう促して水着売場を目指して歩き始めるんだけど、直後に困ったことになった。

「カイトさん、あとであちらのお店を伺ってもよろしいでしょうか？」

むにゅん

「あ、そう言えば地下においしいバイキングがあるって鈴に聞いたんだ。お昼にどうかな？」

ふにゅん

「う、うん。そうだね、あそこの店は水着を買ったら行こうね。バイキングはその後にしよう、うん、それがいいね」

と言いつつも、頭のなかは大混乱だ。左右それぞれに腕を組んでいるんだけど、三人が横に並ぶとさすがに他のお客さんのお邪魔になってしまう。そこで、セシリアさんたちは極力僕に密着して歩いているんだけれど――。

その、一歩歩くたびに女の子特有の膨らみが柔らかに形をゆがめて、腕に押しつけられるんだ。考えないようにしても、さすがに意識しちゃうよ……。

「どうしたの、カイト？」

「どうかしましたの、カイトさん？」

むにゅりんふにゅりん

二人が僕の顔を覗き込んできて、また密着度が上がる。制服と比べて生地が薄い私服であるため、弾力的な膨らみの変化がダイレクトに伝わってくる。

「大丈夫だ、問題ない。ミッションを続行しようか、レディ」

頭の中では『ＷＡＲＮＩＮＧ！』と警笛が音響し、理性を剥離させる。だが、この程度の困難ならば千冬姉さんの鬼の補習に比べたら児戯にすぎない。耐えきってみせろよ、緋神カイト！

●

カイトが内なる自分との脳内死闘を繰り広げているその十数メートル後方、自販機の物陰から伺う小さな影があった。気配を消した彼女にカイトは兎も角、幸せに浸っているセシリアとシャルロットが気付いていない。

「くっ……まさかこの私が出し抜かれるとは……！」

柄にもなく焦っているのは銀髪の少女、ラウラだ。今朝からシャルロットの機嫌が良かったのを気にもんだラウラはその後をつけ、こうして今も追跡している。

（まったく……カイトも私の嫁なら、わ、私を誘わないなど、自覚

が足りん！）

ぎしぎしっ、と自販機が軋み、側壁がひしゃげ始める。美少女が自販機を破壊するというアンバランスな絵に通行人が自ずと距離を取っている。

（このまま見ているだけでは埒があかん。早く追い付いて――）

「ラウラちゃん、そんなところで何してるです？」

「！」

不意に声をかけられ、ラウラは脊髄反射で大きくその場から飛び退き、ベルトのホルスターからコンバットナイフを構える。しかし、そこにいたのは見慣れた人物だった。

「お前、竜胆うるむか？」

「はい。こんにちはですね、ラウラちゃん」

そこに立っていたのは先月の学年別トーナメントでラウラのパートナーを務めた少女、竜胆うるむだった。白いスポーツジャージに身を包んだうるむはぺこりと頭を下げた。

「どうしてここに？」

「うるむは水着を買いに来たですよ。明日から臨海学校ですから。ラウラちゃんも水着を買いに来たですか？」

「私は……」

ちらりと人混みの奥を盗み見たラウラの視線の先を素早く追ったうるむは「……ああ」、と手をぽんと叩いて納得した。

「尾行ですか？」

「ま、まあ、そんなものだ……」

「知ってるです？　日本ではストーカー行為は犯罪なんですよ」

「そ、そのくらいは知っている！」

「そうですか」

噛み合っているようで限り無く噛み合わない会話はまるで漫談だ。などと頭の悪い漫才を繰り返しているうちに、

「しまった……！　見失った……！」

ラウラの届く視界からカイトたちの姿が消えてしまうのもある意味、当然だと言える。ラウラはすぐさまＩＳの情報網を洗う。

「『コア・ネットワーク』、情報照合……見つけたっ！」

幸い三人の反応はまだ遠くには行っていない。ナイフをホルスターに収納し、駆け出す。と一一、

「どうしてお前も付いてくる！？」

並走するうるむにラウラが吠えた。水着を買うなら自分に構わず、

売場に行けばいいものをどうして自分の横に並ぶのか。

「うるむもカイトの事は気になるです。気にする相手を知りたがるのは当然です」

「一理あるな。付いてくるのは勝手だが、私の邪魔だけはするなよ」

「うるむはそんなヘマはしないですよ」

カイトのことならすべからく知っておきたいのはラウラとて同じだ。かくして、ラウラとうるむの凸凹追跡コンビがここに結成された。

●

「僕の……勝ちだ……」

水着売場の前の待合ベンチに崩れ落ちた僕は真っ白な灰となっていた。途中何を喋ったのかまったく覚えていない。よからぬことを口走っていないといいけれど……。

「それじゃあ、カイトさん。わたくし達はこちらで水着を見てまいりますね」

「３０分くらいしたら戻ってくるね」

「うん。僕も水着を買ったらここに戻ってくるよ」

セシリアさんとシャルロットが女性用水着売場に消えたのを見た僕

は、しばらくその後ろ姿を眺める。

そういえば、学園に来てからこうして女の子と出かけるのは初めてだ。身分証明が出来ないからとか、学園行事が忙しかったとかでゆったりと外に出かけるなんて今回が最初だ。

……五反田君の家に一夏を迎えに行ったときはカウントしない。だってあの時は女装していたわけだからね。

水着を楽しそうに選ぶ二人を見ていると、たとえ付き添いとはいえ、思わず愉快な気持ちになってしまう。

「楽しいなぁ……」

天井を仰ぎながらそう呟いた。あめ玉を舐めているような甘く染みてくる刹那（じかん）。記憶を失った僕がこうして日常を謳歌できるなんて、夢みたいだ。

いっそのこと、この時が止まればいいのに――。

「カイト」

名前を呼ばれ、振り向くとそこにはシャルロットがいた。もう水着を買ったのかな？

「シャルロット、もう水着は選び終わったの？」

「あ、ううん。ちょっとね、カイトに選んでほしいなぁって思って」

「……水泳用のゴーグルを？」

「違うよ、水着だよ」

シャルロットさん、貴女は僕に死ねと仰るか。女の子の水着売場に男一人足を踏み込むのは地雷原に全裸で特攻するようなものだ。

「……ダメ？」

「っ……わ、分かったよ……」

シャルロットの上目遣いにあっさり陥落。雨に濡れた捨て犬みたいな目は流石にズルい。

「やった♪　じゃあ、行こう」

嬉々として僕の手を掴んだシャルロットは水着売場に足を踏み入れた。うわぁ、これが全部水着なんだ。こんなに沢山の種類があるんだね。

（それに、お客さんも結構いるし……）

日曜日は伊達じゃない。ちらほらと女性客の姿が見え、向こうも僕が入ってきた事に気付いて、なにやらひそひそ話が始まってしまった。今更ながら頷いてしまった自分に後悔。

「あら、カイトさん。もう水着を選んだんですの？」

「う、ううん、まだだけど……」

姿鏡の前に立って水着を確認していたセシリアさんが僕に気が付き、

そう声をかけてきた。両手にそれぞれ異なる水着を持っているから、セシリアさんを直視できない。

「カイトに水着を選んでもらうんだ♪」

「なっ！？　シャルロットさん、それは協定に反するのではないかしら？」

「カイトがＯＫしてくれたんだから、違反じゃないよ」

……協定？　なんだかよく分からないけど、嫌な響きだ。

「か、カイトさん！　シャルロットさんが選び終わったら、わたくしのも選んでくださいまし！」

「きょ、拒否権は？」

「ありませんわ！」

凄まじい迫力に赤べこよろしく首を縦に振った。こ、怖い……。

「それじゃあ、カイト。まずは僕だねっ」

シャルロットは笑顔で四つの水着を並べた、って……。

「スクール水着、ビキニ、Ｔバックに Ｔフロント。カイトはどれがいいと思う？」

決断を促すように僕に見せ付けるけど、待って。お願い、待ってください。

「あの、シャルロットさん？」

「なにかな？」

「その、君は僕をどんな人間だって思ってるの？」

なんだかシャルロットの中で僕のイメージがどうにもおかしな事になっているような気がする。

「カイトを？　そうだね、普通の健全な男の子だと思うよ」

「なんだ。よかった、」

「同級生の水着姿でご飯は三杯いけちゃうような健全な男の子だよ」

「よくないしっ！　それは健全さとは言えないよ！？」

僕のイメージを破壊するためにも、一度シャルロットとは腹を割って話したほうが良さそうだ。

真剣に悩む僕を見て、シャルロットが吹き出した。

「冗談だよ、ごめんねカイト」

「よかった……」

本当に良かった。同級生に変態だなんて思われていたら僕は明日から生きていけない。

「じゃあ、改めて。どっちがいいかな？」

シャルロットが見せたのは二つの水着。右のはセパレートとワンピースの中間のような水着。フレッシュなイエローのそれは上下に分かれていて、背中でクロスした構造になっている。

そして左手に持っているのは、オーソドックスなビキニだ。オレンジ色をしていて、全体的に大人しめな印象を受ける。

「そうだね……」

選ぶといった以上、ちゃんと選んであげないと。二つとシャルロットを代わる代わる見比べて、僕が選んだのは――。

「右かな」

「本当？　じゃあ、こっちにしようかな」

「まあ、僕なりの判断基準だからあんまり当てにはならないけどね」

シャルロットには黄色が似合うと思ったし、左の物だとシャルロットとはあまりマッチしていない気がする。

「カイトが選んでくれるのが大切なんだから、気にしなくていいよ」

「そう言ってもらえると選んだ身としては気が楽だよ」

「それじゃあ、試着してくるね。覗いちゃダメだよ？」

「し、しないよっ！」

左手の水着をラックに戻すと、シャルロットは朗らかに笑って試着室に入っていった。

まったく……シャルロットは僕のことをからかい過ぎだよ。そんなに弄られやすいかな、僕って……。

「はあ……」

溜息を吐きながら水着売場を移動する。次はセシリアさんだ。

「カイトさん、大丈夫ですか？　あまり顔色が優れないようですが……」

「大丈夫だよ、セシリアさん。もう水着は決まったかな？」

「お恥ずかしながらまだですわ。二つには絞り込まれたのですが、どちらにすべきか迷ってしまいまして……」

困ったような笑みを浮かべて、セシリアさんが二つの水着を僕に見せた。

一つは翡翠色のVネックラインのワンピース。各所にフリルをあしらって、華やかなデザインだ。しかし、ワンピースなので地味さは拭えないかな。だったら、

「そっちのパレオが付いたほうが似合うと思うよ」

と、僕は左の方を指差した。それはパレオとセットにされたビビットブルーのビキニ。セシリアさんにはブルーが映えるし、何よりも

雰囲気的に優雅で格好いいデザインだし。

「そうですか？　わたくしはこちらの方も可愛らしいと思うのですが」

「セシリアさんは綺麗だからね。地味な水着を着ちゃうと、水着のほうが負けちゃうんだよ」

「綺麗、ですか……。か、カイトさんがそう仰るなら仕方ありませんね、こちらにしましょう！　それがいいですわ！」

「うん、そうしてよ」

セシリアさんは目鼻立ちも整っていて、とても怜悧な顔をしているので、地味な物を着てしまうと、逆に浮いた印象になってしまう。水着が負けるとはそういう意味だ。

「それじゃあ、わたくしも試着してきますわね」

「じゃあ、僕は自分の水着を買ってくるよ。まだ買ってないからね」

「あら、ならわたくしが選んで差し上げますか？」

「さすがにそれは勘弁して」

女の子に水着を選んでもらうなんて恥ずかしくてかなわない。早足に女の子の水着売場を後にした僕は隣のスポーツショップに入って水着を選ぶ。

まあ、選ぶといっても選べるほど種類はないけど。取り敢えず、普

通にトランクスにしてサイズはっと、あ、一夏の分も買っていかなくちゃいけないんだっけ。

「……ブーメランでいいか」

赤いブーメランを手に取る。きっと一夏に似合うはずだ。これで一夏は夏の海の支配者だ、やったねっ！

●

時は数分前まで遡る。ラウラ・うるむの凸凹追跡コンビだったが、浮き足立っているセシリアとシャルロットに比べてカイトの反応はいつもと変わらない。

「心配するまでもなさそうですが？」

「ああ、いつものあれか。キングオブ朴念仁、緋神カイトか」

セシリアらはどうかは分からないが、大方カイトはこれを買い物以上の出来事とはとらえないだろう。だったら、こんな面倒なことを続ける必要もない。

「それにしてもこれが全て水着とはな。世の中にはこんな様々な水着があるものなんだな」

ラウラは水着売場を見渡し、感慨深い言葉を発した。だからどうだと言うわけではないが、自分の知っている水着とは世界がまるっきり異なっていて、若干のカルチャーギャップを感じたのだ。

「ラウラちゃんは水着を買わないですか？」

「必要ないだろう。学園指定の水着があるのだからな」

本心からそう思っている。スクール水着は学園指定されているだけあって機能性に優れているし、高々一回の海水浴のために買う必要など感じない。

「泳げればなんでも『気合い入れて選ばないとねー！』……む？」

ふとテンションの高い声が耳に飛び込んできた。見ると、年上の女性二人が談笑していた。

「ラウラちゃん？」

「シッ」

いつもなら気に留めないのだが、なぜだか今日に限って気になってしまった。ラウラは耳をそばだてる。

「似合わない水着着ていったら彼氏に一発で嫌われちゃうもんね」

「他のことが全部百点でも水着がカッコ悪かったら致命的だもんね～！」

「！！！」

チュドーン！

ラウラの心にＲＰＧが直撃した。吹き上がる熱波が冷めた心ごとラウラを溶かしてしまった。

（致命的……彼氏に嫌われる……？）

「どうしたですか、そんなに震えて」

うるむの言葉は彼女には届いていない。痙攣しているようにも見えるラウラの頭の中で緊急対策会議が開かれていた。

（わ、私が無様な格好をしていったなら、か、カイトは、わ、わたっ、私を嫌って……嫌ってぇ！）

決してそんな事はないのだが、暴走した彼女の思考は止まるところを知らず、ひたすらに明後日の方向へと転がっていく。

（き、嫌われるわけにはいかない！　しっ、しかし、そのためには水着を選ばなくてはいけないが……。どのような水着を選べばいいのか、私には判断基準が分からない！　だ、誰かの判断を仰ぐべきなのだが……！）

頭を掻き毟るラウラ、頭のなかはスコールも真っ青な怒濤の思考の土砂降り。カイトに嫌われないためにも自分に合った水着を選定しなくてはいけないが、今まで軍隊にいたラウラにはその手の話は一切関心を持たなかったのだ。

迷子の子供が親を探すが如く、涙で潤んだオッドアイが縦横無尽に売場を走る。そして、見つけた。

「う、うるむ！　緊急事態だ、力を貸せ！」

「どうしたです？　さっきから赤くなったり青くなったり。まるで信号機です。あ、黄色がないですか」

「そんなことはどうでもいい！　み、水着を一緒に選んでほしい！」

藁にもすがる勢いでうるむに頼み込む。相変わらずの無表情のうるむはどうしたものかと頭を掻いた。

「さっき学園指定の水着があると言ったじゃないですか」

「そ、それはそれだっ。今必要なのは、機能性など二の次の魅せるための水着なのだっ！」

もはやなりふり構っていられない。必要なら土下座や切腹すらも辞さない覚悟で頼み込むラウラに、ついにうるむが折れた。

「分かったです。ですが、あまり期待してもらっても困るですよ」

「大丈夫だ！　よろしく頼む！」

凸凹追跡コンビは解散し、凸凹ファッションコンビが再誕した瞬間だった。

●

「ごめんなさい、カイトさん。荷物を持たせてしまいまして」

「ううん。これくらいならお安い御用さ」

「疲れたらすぐに言ってね、僕らは自分の分を持つから」

「ありがとう、シャルロット。でも軽いから大丈夫だよ」

僕は両手にぶら下げた紙袋を持ち上げる。セシリアさんたちが気にするほど重くないのは事実だ。

水着を買ってからかなりの時間が経った。明日の必需品から足りない日曜雑貨などを買い足していたら、気が付けばもう日が傾いていた。明日の準備もあるので、僕らは駅に向かっていた。

「二人とも、今日は楽しかったよ。ありがとう」

「感謝なんてしなくていいよ。ね？」

「そうですわ、カイトさん。寧ろわたくし達が感謝の意を示すべきですわ。本日はわたくし達の買い物にお付き合い頂きましてありがとうございます」

「僕の方こそ、楽しんでもらえれば何よりだよ」

スカートを摘んで一礼するセシリアさんに笑顔で答える。

そうだ、感謝するのは僕の方なんだ。始まりのあの日、全てを無くして学園に打ち上げられた自分。自分が誰だか分からなくて、恐がっていた自分がこうして笑っていられるのは学園にいる皆のおかげなんだ。

（止まれ――お前はいかにも美しい）

確かめるように胸の内で呟いてみるが、僕は死にはしない。ゲーテの戯曲『ファウスト』ではこの言葉を本心から呟いたファウスト博士は、その瞬間に魂を奪われる。だけど、当然ながら僕は死なない。

それは――僕が彼のように心の底から『今ここ』の美しさに絶望し、僕が自分の存在意義に満足していないから。

自分の限界を決め、生を肯定してしまったファウスト博士の境地には辿り着けないかもしれない。

だけど――。

そこに行き着くことは出来なくても、その頂きにはないものを見つけることは出来る。それは僕の記憶だけじゃなく、一緒に買い物に来ているセシリアさんたちにも当てはまる。

永遠不変なんていらない、ただ『今ここ』にあるものを大切にしたいんだ。それが僕が僕らしくいられるようになるための――。

「カイトさん、どうかしました？　ぼぅっとして？」

「なんでもないよ。さあ、早く帰ろう」

かぶりを振った僕は紙袋を持ち直すと、二人の間に並んだ。暖かで穏やかな夕日の中を今日という日を思い返しながら、二人と話の花を咲かせる。幾日かぶりの穏やかな瞬間に癒されていた僕。

だったからこそ――。

傍らを通り過ぎた氷点下の存在に、僕は気付くのが遅れてしまったんだ――。

「どうして、あなたも中々苦労人ですね、ヴァルキュリア」

「――――」

今の、声って……。

「うん？　どうしたの、カイト？」

振り返っても誰もいない。だが、今、確実に、『奴』は僕達とすれ違った。勘違いや聞き間違いではない。

ドクン……ドクン……

動悸が早まる。息が荒くなる。さっきまで何ともなかった心が波風立つ。

追え追え追え――。

「セシリアさん、シャルロット」

「なんですの？」

「僕、買い忘れたものがあるから、先に帰ってて」

「あ、だったら僕らも付き合うよ」

「大丈夫だよ。それに、早く帰らないと千冬姉さんに怒られちゃうよ？」

「それはそうですが……」

「だから、ね？　すぐに買って追い付くからさ」

「……分かりましたわ。カイトさんがそう仰るなら、心苦しいですがお先に帰らせて頂きますわ」

「それじゃあ、カイト。先に行くね」

訝しげな目をしながらも、二人は荷物を受け取って駅へと向かっていった。駅までは帰る客で溢れているし、そこからは一本道だから

二人に危険は及ばない。

さて、僕はどうする？

さっきの奴、名前も顔も覚えていないけれど、間違いなく僕の過去を知っている。正直、声を聞いたときからああいったタイプの奴とはかかわり合いを持ちたくないと直感している。

自分は安全な場所に控えておきながら、周りの反応を薄ら笑い、それでいながら右往左往する人の感情を化学反応程度にしか見ていない、どこまでも俗な狂人。

「僕も奴を知っているのか……？」

自分が今何を考えていたのかを悟って背筋が凍り付いた。まるで僕が奴をよく知っているような考え。

「……」

とりあえず、見ざる聞かざるで通すのは無理だし論外だ。相手が何を思って僕に接触してきたのは分からないが、偶然で片付けるにはあまりにも出来すぎている。

まずはあいつを探そう。戦闘になるかどうかは分からないけれど、奴の真意を探らないことには始まらない。

「ッ！」

見つけなければ。軽挙妄動じみた感覚に支配された僕は黄昏時のショッピングモールを疾走する。気配を追い掛けて階段を駆け上がり、

二階へと辿り着いたその時だった。

ドンッ！

「うわっ！」

「むぅ！」

突然目の前に現れた人とぶつかってしまう。その拍子に荷物がばらまかれてしまった。

「ご、ごめんなさい！　急いでいたもので！　って……ラウラ？」

「か、カイト！　ど、どうしてお前がここにっ！？」

ぶつかったのはなんとラウラだった。彼女に手を貸して立たせると周囲を見回した。階段の先はちょうどエレベーターホールになっていて、三機のエレベーターと鏡状になっている壁だけがあった。

あの気味の悪い声の主と思しき存在はそこにはおらず、気配も途切れていた。

上下に移動しているエレベーターも、タイミング的に乗って移動したとは思えない。一体どこに消えたんだ……？

「どうしたんだ、カイト？　顔色が悪いぞ？」

「あ、ああいや、うん。何でもないよ」

「……そうか、分かったぞ」

「えっ！？」

何が分かったんだ？

「浮気だな、カイト」

「……浮気？」

「絶世の美女がいたから前後を忘れて走り寄ったんだろう？」

「違っ！　僕は別に一一待って、どこに連絡してるの？」

「セシリアとシャルロットだ。二人ともすぐに来てくれるそうだ」

ラウラ、君は何の理由があって僕を陥れようとしているんだい……！

「隠さなくてもいいぞ。今から私たち三人で調べてやる」

「だから、なんで……」

ふと、背後に視線を感じると、そこには無表情のうるむちゃんが。

さらにその背後からは地響きじみた死神たちの行進曲が聞こえていた。

「カイトは意外とバカです？」

「……そうかもしれない」

こうして、僕たちの日曜日は暮れていった。

さて、僕は晴れて明日を迎えられるかな？

第二十六話　～平穏に潜む影～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

ひゃっほーい！　ひでぇ文章じゃぁー！　文才のない自分じゃこれが限界ですかね。やっぱり僕なんかじゃ魅力のある文章には昇華できませんね……。はふぅ……。

今回の話は原作からかなりイベントを削りました。ひぃ、石投げないでぇっ！　お気に召さないかも知れませんが何とぞ御了承くださいませ。

それでは、またの機会に。

第二十七話　～魅了・魅力・魅惑の海水浴場～（前書き）

第二十七話です。

タイトルどおり、ちょっとでも魅力的なシーンが書けていればと思います。

それでは、第二十七話『魅了・魅力・魅惑の海水浴場』幕が開きます。

第二十七話　～魅了・魅力・魅惑の海水浴場～

「海っ！　見えたぁっ！」

誰かの歓声がバスに響き渡った。長いトンネルを抜けた先に広がるのは初夏の日差しを反射してキラキラ光る海だ。

臨海学校初日は天気もよく、泳ぐにはもってこいの日だ。クラスのみんなが到着を今か今かと待ち望んでいる中、僕は頬杖をついて外を眺めていた。

『どうして、あなたも中々苦労人ですね、ヴァルキュリア』

「っ……」

昨日すれ違った奴の台詞が脳裏をよぎって、つい唇を噛んでしまう。あんな声に『僕』は聞き覚えはないけれど、『僕（カイト）』は知っている。だから、怖い。知っているのに知らない矛盾を解きほぐすのが。

記憶を取り戻すのに恐れを抱いたことは無かったのに、今になって過去と向き合うのがたまらなく怖いんだ。

それでも沈み行ってしまった霞の夢（きおく）、それが繋ぎ合おうとして僕のなかの傷口を塞ごうとしていた――。

「カイトさんっ」

「っ。ごめん、セシリアさん。どうしたの？」

話し掛けられて我に返った。言葉を返すと、セシリアさんが僕の顔を心配そうに覗き込んでいた。

「お加減でも悪いんですか？　昨日から顔色が優れませんでしたけれど……」

「いや～、実は臨海学校が楽しみで寝付けなかったんだよね」

ごまかし笑い、頭を掻いた。せっかくの臨海学校に水を差しちゃいけない、これは僕だけで解決しよう。みんなを巻き込むには値しない。

「お前も意外と子供だな、カイト」

「むっ。一夏にだけは言われたくないね」

座席越しに反論する。バスに乗り込むなり眠っていたのはどこの誰だったかな？

「でも、泊まり掛けの遠出だし楽しみなのも頷けるよ。僕もちょっと寝不足気味なんだ」

前の席のシャルロットがこっちを向いた。因みに席順はシャルロット・ラウラ、僕・セシリアさん、一夏、篠ノ之さんとなっている。

「ラウラは？」

「……」

話を振ってみたけれど、返ってきたのは沈黙だ。ちょっと心配にな

って前の席を覗き込む。

そこでは体を小さく縮こまらせて、席に納まるラウラの姿が。しかも顔の色が赤くなったり青くなったりと忙しない。

「ラウ、」

「!?　なっ、なんっ……なんだ!?　ち、近い！　馬鹿者！」

「ぐぇっ」

鼻頭を手のひらで押し返され、潰されたカエルみたいな声が出てしまう。別段風邪を引いているわけでも無さそうだし大丈夫だね。

「向こうに着いたら早速泳ごうぜ。実は箒、こう見えて泳ぐの得意なんだぜ」

「へぇ〜！　そうなんだ」

意外だ。篠ノ之さんは剣道一筋って感じだったんだけど。

「あ、ああ。昔はよく遠泳をしていたものでな」

うん？　何だか篠ノ之さんの様子もいつもと違うような……。落ち着きが無いというのか、そわそわしている感じか。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

最前列に座っていた千冬姉さんの号令で全員がさっと席に着いた。チームワーク抜群だ。

「あの、カイトさん」

「どうしたの？　セシリアさん」

ごほんごほんと咳払いをする。姉さんの真似なら似ていない。

「せ、背中はサンオイルが濡れませんから、カイトさんにお願いしたいのですけど……よろしくて？」

「え？　シャルロット達に頼んだほうがいいんじゃないの？」

「え、ええまあ、そうですけど、できれば……その、カイトさんに……」

もじもじとしながら視線を泳がせつつそう頼んでくるけれど、お手洗いに行きたいのかな？

「いっそのこと塗らないのは？」

「却下です！」

間髪入れずに棄却された。冗談のつもりだったんだけどな。

「でも、僕でよかったらいいよ」

「ほ、本当ですね！？　後から取り止めになさるのは認めませんわよ！？」

「う、うん……」

ずずいっと、身を乗り出してくる。心配しなくても嘘は吐かないのに。僕ってそんなに信用無いかな？

程なくしてバスは旅館に到着し、荷物を持って入り口に整列。ずいぶんと格式がありそうな旅館だ。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

姉さんの言葉を受けて、全員で挨拶をすると、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀を返してくれる。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

よくドラマとかだと女将さんって年配の人がイメージされるけど、目の前の女将さんはかなり若い。三十歳くらいかな。

と、ふと女将さんと目が合った。

「あら、こちらのお二人が噂の……？」

「ええ、まあ。今年は二人も男子がいるせいで浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、二人ともいい男の子じゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけですよ。挨拶をしないか、馬鹿者共」

頭を押さないでください。千冬姉さんが話していたから挨拶できなかったんですから。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「同じく緋神カイトです。三日間お世話になります」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

洗礼された動きでお辞儀をしてくれる。気品があるその動きについ見とれてしまう。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女の子たちは、はーいと返事をするとすぐさま旅館の中へと向かっていく。せっかく海があるのだから、一分一秒とも無駄にしたくないんだろう。

「ね、ね、ねー。おりむーにあけりん～」

あ～、僕をそう呼ぶのは布仏さんだけだ。振り向くと、やたらと遅い足取りで布仏さんが歩いてきていた。目がとろんとしているのはいつものこと。

「おりむーたちのお部屋どこ～？　一覧に書いてなかったー。遊び

に行くから教えて～」

「いや、俺もよく知らない。カイトは知ってるか？」

「僕も知らない。もしかしたら廊下で雑魚寝かもね」

「わー、それはいいね～。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって～」

いや、冗談だから本気にしないでよ？　でも知らないのは本当だ。まさか現実に廊下で雑魚寝なんてないよね。

「織斑、緋神、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」

「一夏、行こう」

「おう。のほほんさん、また後で」

布仏さんと別れて、つかつかと歩いていく姉さんに付いていき、たどり着いたのは……。

「「『教員室』？」」

一夏とハモる。まばたきをしてもそこに書かれている三文字は変わらない。

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押し掛けるだろうだろうということになってだな」

部屋決めの苦労を思い出してか、千冬姉さんが嘆息を吐いた。

「隣は私と山田先生の部屋で、襖で遮られているものの部屋同士は繋がっているので実質同室ということにさせてもらった」

成る程、高が男子二人の為に鬼のねぐらにおいそれと近付く猛者はいないだろう。

「一応言っておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな」

「「はい」」

「それでいい。私はこれから打ち合せがある。お前たちは荷物を置いたら、好きにしろ。ただし、あまり羽目を外しすぎるなよ」

「わかっています」

部屋に荷物を置いて水着の入っている袋を引っ張りだす。タオルも入ってるし、準備万端。

「そんじゃま、行くか」

「そうだ、緋神」

思い出したように僕を呼び止めた織斑先生。なんだろう、注意は聞いたはずだけど。

「……ウサギの耳を見ても知らない振りをしろよ？」

「なんですか、それ？」

「いいから。見ても不用意に引っ込抜いたり、触ったりするなよ」

ジョーク、じゃないね。目が真剣そのものだ。ここの旅館にはウサギの耳なるものがあるんだろうか？

「……まあ、分かりました」

言っていることはよく理解できないけど、とりあえず首を縦に振っておく。見つけても無視しろってことだよね？

「分かればいい。呼び止めて悪かったな」

「いえ、それじゃあ失礼します」

先に行った一夏の後を追って別館の更衣室を目指す。

……ウサギの耳ってなんなんだろう？

で。

「わ、ミカってば胸おっきー。また育ったんじゃないの～？」

「きゃあっ！　も、揉まないでよぉっ！」

「ティナって水着だいたーん。すっごいね～」

「そう？　アメリカでは普通だと思うけど」

……。

何度も言うようだけど、僕は健全な男子だ。こんな会話を耳にして平常心を保っていられるほど枯れていないわけで。

ダッ！

心を無にして女子更衣室の横を走り抜けて、一番奥の男子更衣室へと駆け込む。

「おい、カイト！」

駆け込んだ僕を迎え入れる友人のドアップ。これはこれでキツいものがある。

「水着を買ってきてくれたのは感謝するがさすがにこれは無理だ！　ブーメランはヤバい！」

あ、忘れてた。

●

ぱぱっと着替えて僕と一夏は海へと繰り出した。あ、一夏はブーメランは嫌だとごねたから予備で買っておいたトランクスを渡した。いったいブーメランの何が不満なんだろうか？

「あ、織斑君に緋神君だ！」

「う、うそっ！　わ、私の水着姿変じゃないよね！？　大丈夫だよね！？」

「わ、わ～。体かっこい～。鍛えてるね～」

「二人ともー、あとでビーチバレーしようよ～」

「勿論、やるときになったら誘ってね」

ちょうど隣の更衣室から出てきた女子数人と鉢合わせた。みんな、それぞれ可愛い水着を着ていて、見ている身としては恥ずかしさがある。

「とりあえず、準備体操するか」

焼けた砂を踏んで波打ち際までやってきた僕らは準備体操をーー、

「い、ち、か～～～～！」

「のわっ！？」

前屈をしていた一夏に飛び乗ってきたのは鈴だ。

「ちす、カイト」

「うん、おはよう」

水着姿の鈴と挨拶をかわす。オレンジと白のストライプカラーのタンキニは鈴のイメージとマッチしている。

「あんたらって真面目ねぇ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら、終わったんなら泳ぐわよ」

「でも準備運動しないと溺れちゃうんじゃない？」

「ふふん。あたし、溺れたことなんてないわよ。前世は人魚ね、多分」

自称前世は人魚さんは一夏の体を駆け上って肩車の体勢を取った。

しかし、前世が人魚と豪語するには胸の辺りが淋しいような、

「カイト、今失礼なこと考えなかった？」

「気のせいじゃないかな」

僕は鈴の体はバランスが整ってるなって感心していただけだ。

「それにしても高い高い。遠くまでよく見えるわ。ちょっとした監視塔になれるわね、一夏」

「監視員じゃないのかよっ！」

「いいじゃないか。人の役に立つよ」

「だったらお前も監視塔になってみろよっ」

「乗ってくれる人がいないから無理だね」

僕にはそんな奇抜な真似をする友達はーー、

「じゃあ、うるむが乗るですよ」

「のわっ！？」

今度は僕がつんのめった。なんだ！？

「これはいいです。癖になってしまいそうですね」

「でしょっ！　潮風が気持ちいいんだから！」

黒いホルスターネックの水着を身に纏ったうるむちゃんだった。鈴、肩車の魅力を語るのはやめて。

「カイト、せっかくですからこのまま海に行くですよ」

「無茶言わないで！　お願いだから降りてよ！」

騒ぎを聞き付けた女の子たちが集まりだしている。このままじゃ、一日中肩車をし続ける羽目になる。それはさすがに勘弁してもらいたい。

「あっ、あっ、ああっ！？　な、何をしてますの！？」

と、ビーチパラソルにシート、サンオイルを持ったセシリアさんがやってきた。昨日選んだあのブルーのビキニを着ているけれど、水着に強調された谷間が予想よりも扇状的で、恥ずかしさから視線を泳がせてしまう。

「何って…」

「移動監視塔ごっこですかね？」

あ、ごっこなんだ。

「カイトさん、バスの中でわたくしと約束したのをわすれました、のっ！」

グサッ！

パラソルが唸りを上げて砂に突き刺さる。なんだか怒ってる？

しゅるしゅるとシートを引いて、パレオを脱いだセシリアさんそこへと寝そべる。

「さあ、カイトさん。サンオイルを塗って下さいな」

「「「え～～！」」」

集まった女の子たちが悲鳴のような声を上げる。ああ、いやな予感が……。

「私、サンオイル取ってくる！」

「私はシートを！」

「私はパラソルを！」

「じゃあ私はサンオイル落としてくる！」

呼び止める間もなく、散開していってしまう。あのさ、塗ってあるなら落とす必要は無いんじゃないのかな？　もう手遅れな気もするけれど。

そんな彼女らを尻目に、少しだけ上体を起こしたセシリアさんは首の後ろで結んでいたブラの紐を解く。ああ、辞めたいなぁ。

「レディとの約束を違えるなど、紳士のするべきことではありませんわよ？」

「わ、わかったよ……」

「ま、頑張ってよ、カイト。一夏、うるむ、行きましょ」

鈴は僕の肩をぽん、と叩くと監視塔、もとい一夏を前進させて海にザブザブと沈んでいった。

「それじゃあカイト、頑張ってくださいです」

飛び降り、前方宙返りで降りると一夏たちな後を追っていく。僕も海に入りたいなぁ。

「え、えーと、背中だけでいいんだよね？」

「カイトさんがされたいのでしたら、前も結構ですわよ？」

「う、ううん！　背中だけにしてよ」

「でしたら、さあ、どうぞ？」

白い肌を惜し気もなく曝しているセシリアさんに知らぬ間に喉が鳴る。体に潰されて形が歪められたたわわな果実は、脇下から覗いているせいか、かなり艶やかだ。

更にうつ伏せになっているので、お尻の主張が悩ましげだ。選んだときには気付かなかったけれど、ボトムの水着は中々に際どくて、伸びる御美足に目線が惹き付けられる。

「じゃ、じゃあ、塗るよ」

ひんやりとしたサンオイルを手に垂らし、セシリアさんの背中に手を伸ばした。

「ひゃっ！？」

「な、なに！？」

ど、どうして悲鳴をっ！？

「か、カイトさん、サンオイルは少し手で温めてから塗って下さいな」

「そ、そうなんだ……。サンオイルを塗るなんて初めてで……ごめん」

「そ、そうですか。初めてなんですの。それでは、仕方がないですわね」

気のせいかな、セシリアさんの声が嬉しそうに聞こえた。ともあれ、サンオイルを揉むように温める。これくらい温かければ大丈夫かな。

背中にまんべんなくサンオイルを塗っていく。

（うわぁ、セシリアさんの肌すべすべで柔らかいな……。不謹慎だけど、触ってるだけでもこっちが気持ち良くなっちゃうよ……）

口に出したら怒られそうだから、絶対に口にしないけど。

「セシリアさん、背中だけでいいんだよね？」

「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部お願いします」

「全部！？」

さっき背中だけでいいってことになりませんでしたっけ！？

「脚と、その、お、お尻も……」

「ヴェッ！？」

さ、さすがにそれはダメだよ！　脚なら未だしも、お尻に触るなんてさすがに無理があるよ！

「そんなに塗ってほしいなら、僕がやってあげるよ」

「きゃあっ！？　しゃ、シャルロットさん、何を邪魔してーーつ、冷たっ！」

突然現れたシャルロットがサンオイルをセシリアさんの全身に塗りたくっていく。

「サンオイルが塗れればいいでしょ。それそれっ」

「あああもうっ！　いい加減にーー、」

「「あ」」

怒って体を起こしたセシリアさん。当然、その上体には水着が無いわけでーー、

「きゃあああああっ！」

海岸に響く、真っ赤になったセシリアさんの悲鳴。

「うわあああああっ！」

そしてこれは、あまりの事態に驚いているシャルロットの悲鳴。

「ぎゃあああああっ！」

ちなみにこれは防衛本能から繰り出されたセシリアさんのＩＳの腕部に殴られ、海にぶっ飛んでいく僕の悲鳴。派手に水しぶきを上げて水中に没する。

（見てない……。僕は見てないのに……）

海の底は、暗くて静かでーー寒かった。

●

「ううう、どうして僕が殴られなくちゃいけないんだ……」

頭に巻き付いたワカメを取りながら浜辺に戻ってきた。生きているっていうのは、ただそれだけでなんて素晴らしいことなんだろう。

「あ、カイト。戻ってきたんだ」

「辛うじてねーってうわぁ!?」

シャルロットの隣には全身バスタオルのミイラがいた。鬼火が見えるのは僕の幻覚?

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、カイトに見てもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」

この声、まさかラウラなのか!?　でも、どうしてバスタオルぐるぐる巻きなんだろうか。

「ふーん、じゃあ僕だけカイトと遊んじゃうけどいいのかなぁ?」

「そ、それは困る!　ええい!」

バスタオルをキャストオフして、水着姿のラウラが海水浴場に現れる。

「わ、笑いたければ笑うがいい」

レースをあしらった黒い水着は大人用下着（セクシー・ランジェリー）にも見える。さらに、泳

ぎに邪魔になるのか、伸ばしたままの銀髪は一対のアップテールにしている。

いつもは強気のラウラが、落ち着きもなくもじもじしている姿は、文句の付けようもなく、可愛い。

「おかしなところなんてないよね、カイト？」

「うん。ちょっと驚いたけど、とっても可愛いよ」

「なっ……！　そ、そうか……。私は可愛いのか……。そんなことを言われたのは初めてだ……」

「もちろん、シャルロットも水着似合ってるよ」

「う、うん、ありがと」

照れくさそうに髪をいじるシャルロット。陽光を浴びるイエローの水着が可愛らしい。

「おーい、カイト！　ビーチバレーやろうぜ！」

「わー、あけりんと対戦～。ばきゅんばきゅーん」

「カイト、パスです」

一夏と布仏さんとうるむちゃんだ。うるむちゃんがサーブしたビーチボールを受け取ってメンバーを確認。

「ちょうど三対三だし、やろっか」

僕の返事を聞いて一夏とうるむちゃんがネットを張って、布仏さんがコートを書いていく。彼女の動きは相変わらず遅い。それに着ているのは水着というよりも、狐の着ぐるみだ。あんなので泳げるのかな？

「ルールはタッチ三回、スパイク連発禁止、十点先取で一セットな。あと、負けたほうがそこの海の家でかき氷おごること」

「了解。それじゃあ、そっちのサーブからで始めようか」

ぽーんとビーチボールを放る。受け取ったうるむちゃんの目が怪しく光る。

「うるむは負けるのが嫌いですから、本気でいきます……です！」

ズバン、と勢いよくジャンピングサーブ。スピード、角度申し分ない。

「任せて！」

シャルロットが横っ飛びにボールを弾く。勢いを殺されたボールがこちらに流れてくる。

「ナイスレシーブだよ、シャルロット！」

まずは様子見、敵陣に軽いスパイクたたき込む。そのボールは布仏さんに向かっていきー、

「あわわわっ、わぁっ」

「のほほんさん、ナイス！　うおりゃあ！」

スパァン！

中国拳法のような動きで見事にボールを弾き、一夏が遠慮の無いスパイクを打ち込んできた。僕もシャルロットも間に合わないからここはラウラに任せようーーあれ？

「ラウラっ！」

「ふぇーーへぶ！」

一夏の撃った鋭いスパイク、それはものの見事にラウラの顔面に激突した。

「大丈夫、ラウラ？」

「可愛い……。可愛いと言われると、私は……ううっ！」

「もしかしてまだ照れてたの？」

うん？　先に駆け寄ったシャルロットがラウラと何か話しているけど聞こえないし、ラウラが倒れたままだ。

「大丈夫、ラウラ？」

「〜〜〜〜〜〜！」

バヒューン！

「ちょ、ちょっとラウラ！？」

声をかけた瞬間、ラウラは脱兎の如く海へと走っていってしまった。
取り残されるビーチバレーに興する僕ら五人は皆ぽかんとしている。

「あれって追い掛けたほうがいいのかな？」

「今は放っておいた方がいいと思うよ」

ルームメイトのシャルロットがそう言うんだし、今はそうさせておこう。でも、ちゃんと後で様子は見に行こう。

あ、ラウラがいないってことはビーチバレーのメンバーが足りなくなっちゃったか。どうしようか。

「ビーチバレーですか～。楽しそうですね～」

誰か参加者を探していると、浜辺に姿を見せたのは山田先生だ。先生方も海で遊ぶんだろう、山田先生は黄色いビキニを着ている。

「山田先生、参加しませんか？　ちょうど一人いなくなっちゃいまして」

「ええ。織斑先生もいかがですか？」

と、山田先生に続いて現れたのはーー。

「ぁ……」

ドキリ、と心臓が跳ねて呼吸が浅くなる。僕はその一瞬で意識の全てを千冬姉さんに奪い取られた。スポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している。

腰に手を当てたいつもの姿が今は妙に色っぽく見え、モデルのような格好良さも相まって浜辺の視界全部を奪うには十二分だった。

「織斑先生、水着格好いい～！」

「先生、モデルみたいです！」

きゃいきゃいと盛り上がる女の子の声を聞いてなぜだか気恥ずかしさを感じてしまう。なんでこんなにドキドキしてるんだろう……。

「先生ぇ～、私変わりますからどぞ～」

「では、やろうか」

「はい！」

布仏さんが抜けて千冬姉さんが向こうのチームに、山田先生がこっちに入る。

砂を踏み締めて歩くだけで絵になって、まさに絵画から飛び出してきた造形物だ。

「カイトって、織斑先生が好みのタイプなの？」

「え！？　ど、どうしたのさ、急に……」

「だって、ずいぶん僕たちの水着を見たときと反応が違うなぁって思っただけだよ」

なんだかシャルロットが膨れているけど、なんで？

「はぁ、ライバル多いなぁ……。セシリアにラウラにうるむに……。そこに織斑先生まで入ってくるんだもん」

「そうだね、千冬姉さんは強いよね。でも、負けるわけにはいかないよ！」

「……カイト、絶対に勘違いしてるよ」

勘違い？　千冬姉さんは決して弱くないよ。先月なんか生身で打鉄用の近接ブレードを振り回してたし。

「サーブ来ますよ！」

おっと、そうだった。負けたらかき氷奢らされるんだった。いくら姉さんとは言え負けるつもりはない。

千冬姉さんのジャンピングサーブが唸り、試合が再開された。試合の結果は言うまでもなく、惨敗。姉さん、強すぎますってば。

●

「ふぅ……」

泳ぎ疲れたので、浜辺のテトラポットの上で休んでいる。まわりに

人はおらず、僕一人だけが休んでいる。

（やっぱり昨日のことを気にしてるのかな……）

ポットの上に寝そべり、空を見上げる。心のなかと違い、曇りが無い快晴がそこには広がっている。

楽しいと感じれば感じるほど、何度考えないようにしても頭のなかに沸き上がるアイツの声。僕をヴァルキュリアと呼び、どこかに引きずり込もうとする悪魔（メフィスト）の囁き。

ヴァルキュリアー。戦場において死を定め、勝利を導く半神。王の命を受け、天馬に跨り戦場を駆け、戦死した勇者（エインヘリアル）をヴァルハラへと迎え入れる役割を担っている。それは、世界が死を迎えるまで終わる事なく輪廻続けられる不条理の円環。

なぜアイツは僕をヴァルキュリアと呼ぶんだ？　僕にはそれを語るだけの力があるのだろうか？

それが記憶の鍵を握っているのは分かっているが、それが何を意味するのか、理解の埒外にあるのは予想に容易い。

ただ、分かっているだけでそれを手にする方法がない。記憶は砕けて、自分のことなんて現実、名前以外思い出せていない。

知りたいことだらけで、これじゃあ臨海学校に身が入らないよ。せっかく海に来たのにー。

「カイトさん」

この声は……セシリアさんかな？　寝そべりながら頭を横に倒すとちょうどテトラポットを上っているセシリアさんの姿を見つけた。

「どうしたの、セシリアさん」

「それはこちらの台詞ですわ。もうすぐお昼ですのに、こんなところで何をしていたんですの？」

「もうそんな時間なんだ」

お昼は各自旅館で取ることになっている。気立てのいいセシリアさんのことだ、僕を呼びに来てくれたんだろう。

「でも、僕はさっきかき氷食べちゃったからお昼はいいよ」

嘘だ。一夏やシャルロットらには奢ったけど、僕は食べていない。あんまり食欲がない。

「僕はここでゆっくりするから、セシリアさんは旅館に戻っていいよ」

僕なんかに気にしないで、楽しんできてほしい。せっかくの臨海学校なのに、時間を無駄にしちゃ台無しだろう。

ぐいっ

などと考えていたら、不意にセシリアさんが僕の手を引っ張り上げた。

「なら、わたくしと一緒に散策をしませんこと？」

「散策？」

「ええ。この辺りは観光地でもありますし、いかかです？」

そう笑顔で提案してくれるセシリアさん。僕の屑野郎、気を遣わせちゃったみたいだよ。鬱ぎ込みがちだったのが伝わっちゃったんだ。

せっかくのセシリアさんの好意を無下にするのは気が引けるし、ここは素直に受け取っておこう。

「そうだね。それじゃあ、着替えたら散策に行こうか」

「はい！」

嬉しそうなセシリアさんに手を引かれ、僕は旅館へと戻っていった。

お昼下がり、まだまだ一日は終わらない。

第二十七話　～魅了・魅力・魅惑の海水浴場～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

水着シーンが難しい。今回はこの一言に尽きます。艶やかで甘い感じがまったく表現できない自分の文才に呆れてモノも言えない……。

次回は散策、まあそんなのは建前にすぎなくて、デートっすよね、セシリアさんとの。書けるかな、ぼかぁ、甘いのは苦手なんだけどね。

それでは、またの機会に。

第二十八話　～Ｄｏｌｐｈｉｎ　Ｂｌｕｅ～（前書き）

第二十八話です。

まず先に言っておきますが、今回の話にギャグは一切ありません。なので、糖分２０００％をブッ千切った甘い話になっております故、ご注意下さいませ。

ちなみに作者はこれを書いているとき、メンタルをズタズタにされました。甘いのはキツすぎる……。

それでは、第二十八話『Ｄｏｌｐｈｉｎ　Ｂｌｕｅ』静かに幕が開きます。

第二十八話　～Ｄｏｌｐｈｉｎ　Ｂｌｕｅ～

彼の癖に気が付いたのはいつだっただろうかーー。

春先から気になっていて、ずっと彼を見ていたらいつの間にか見えていたおかしな癖。

隠し事や嘘を吐くとき、彼は無自覚に首に掛けたヘッドセットに触れてしまう。

あまり表情に出さない彼の心の揺れを如実に表す彼だけの仕草。シャルロットやラウラはまだ気付いていないだろうそれを今はまだ自分だけが知っていることが唯一の救い。

今朝から彼の様子がおかしいことにはずっと気が付いていたし、それを誤魔化そうとしているのにも当に分かっていた。

自分らに何かをひたに隠し、無理にでも平常を装っているならわざわざ聞き出す必要性はない。彼が自分らに話してくれるまで待てばいいだけのことなのだから。

それがいつになるのかは定かではないが、彼の物語（オペラ）では未だ自分は一エキストラに過ぎない。彼が自分を舞台の中心へ誘ってくれるまではその定位置から脱却することは出来ない。

「ですが……」

ただ、そう……一人の女としては内心複雑だ。幼い頃から染み付いた男性への偏見は、彼との交流を通じて薄らいでいた。それは一人の男性をフィルターとして通して見る男性像が、自分とよい意味で異なる部分があったからだ。

人を急に好きになれなくても、いつかはその全てを受け入れられるかもしれない。少しずつでも、そう思い始めていた。

しかし、いや寧ろ、だからこそ自分がこんな場所に落ち着いているのがもどかしくもあった。

話し掛ける距離に自分は立っているのに、手の届く距離に自分はいるのに、彼の一番深いところには絶対に届かない。それが自分の無力さを煽り、なぜか大切な部分を土足で踏み躙られているような気がしてしまった。

なぜこんなに悲しい気持ちになるのかわからない。代表候補生だろうが、高貴な血筋すらも意味を為さない只の少女としての個がこんなにも不安なものだなんて。

「いけませんわね」

照り返しの強い石畳を、セシリアは足早に歩いていく。こんな気持ちでは、彼をより不安にさせてしまう。自分は彼に元気になってもらいたいのだから。

彼のことを思って、彼の喜ぶ顔が見たいがために、一生懸命になる

自分。国にいる幼なじみがこのような姿を見たら一体なんと言うだろう？　オルコット家の当主とあろう方が一男になびいてしまうとは、と嘆くだろうか。それともーー、

ーーようやくあなたも、恋を知る年ごろになったのね。

昔のようにそう言って、意味深に笑うだろうか。懐かしい彼女の声を思い出しながら、待ち合わせ場所に急ぐ。同じ旅館に泊まっているんだから待ち合わせなんて、と彼は理解に難色を示したが、このわがままだけは譲れなかった。

ーーわたくしが出て五分経ったら、旅館を出てくださいまし。

そう無理に言ってから、今こうしてセシリアは待ち合わせ場所を目指している。うるむに借りた少女漫画のワンシーンに憧れたからこそ、セシリア自身が先に待ち合わせ場所に着いて、彼を迎えてあげたかった。

しかし、

「やあ、セシリアさん」

待ち合わせ場所のバス停に着くと、どういうわけか彼がいた。少し照れくさそうな表情を浮かべながら、こちらに手を振っていた。

「……あのカイトさん、一体どのような魔法を使ったのかしら？」

半ば呆れながら言った。後から旅館を出たはずなのに、なぜ彼がここにいるのか？

「ちょっと近道をね」

得意げな口調に、むっとするセシリア。尻ポケットからのぞく地図がいやらしい。

「それにさ、やっぱり女の子を待たせられないよ」

「ですが……」

どんな時でも相手を尊重する。彼らしいと言えば彼らしいが、今回くらいは別にいいではないか、自分の願望を叶えようとするくらい大目に見てもらいたいものだ。

「バスが来たみたいだね。それじゃあ、行こうか」

彼は言った。相変わらず照れくさそうな表情で。そんな彼を見ていたらなぜだかこちらまで恥ずかしくなってしまう。

今から彼と散策、もといデートをたっぷりと楽しみたかったのに。なのに、彼を元気付けるという思いが先に立ち、知らず知らずの内にセシリアの肩がこわばっていた。

ーーまさか緊張しているとでも？

バイオリンのコンペディションでも動じない自分が、たった一人の男性を前にして一一。

●

バスに揺られてやってきたのは、旅館からちょっと離れた場所にある水族館だ。まさかこんな場所に水族館があるなんて思っても見なかったし、想像していたよりも大きな建物だった。

散策に誘われた僕にここのチケットをくれたのは千冬姉さんだ。なんでも旅館の方からのサービスらしいけど、扱いに困って手元で腐るくらいならと、いっそのことで僕にくれたんだけど……。

『有意義に使えよ、青春少年』

なんていたずらっ子みたいな事を言うもんだからセシリアさんの顔を見られない。有意義にって言われても……。

「とても大きな水族館ですわね」

「千冬姉さんが言うには全国的にもなかなか大きな部類に入るらしいよ。イルカのショーがあったり、海中トンネルがあるみたいだしさ」

「海中トンネル？　海のなかに潜るんですの？」

セシリアさんにはいまいちピンとこないみたいだ。

「水槽の中にトンネルがあるんだよ。本当に潜るわけじゃないよ」

「？　何のために？」

「見上げるんだよ。水槽の中をさ」

「見上げる？　水槽の中を？」

僕の説明ってヘタクソなのかな？　セシリアさんは僕の説明を受ければ受けるほど眉をひそめている。ちなみにイルカショーの説明をしたときは、

「イルカがジャンプして輪をくぐる？　冗談もほどほどにしてください」

と咎められてしまったくらいだ。うーん、水族館なんてお気に召さないのかな？

「もしかして、水族館じゃ気に入らないかな？」

幸い近くには他にも遊ぶ場所はあるし、チケットをくれた千冬姉さんには悪いけどここが嫌なら別の場所にしよう。

「いいえ。むしろとても楽しみですわ」

「そっか、よかったよ。じゃあ、入ろうか」

イルカをモチーフにしたゲートをくぐる。平日なのに結構な賑わいだ。家族連れも多いけれど、カップルがそれ以上に目立つな。

「日本の学生は海洋学に高い興味を示していますのね？」

「へ？　海洋学？」

「皆さん学習意欲が高いんですのね」

感心しているみたいだけど、セシリアさん、何か勘違いしてるみたいだ。いくらなんでもそれは無いよ。

「あははっ、それは大げさじゃないかな。水族館はデートスポットのテンプレだよ？」

「デッ……！？」

現に周囲を見渡すと肩を抱いたり、寄り添い歩いたりと随分とラブラブっぷりを見せ付けている。ここまで当て付けられるとこっちまで困っちゃうよね。

「あの、カイトさ、」

「どこから見ようか？　熱帯魚なんて面白そうじゃないかな？　あ、でも、マグロの大群も珍しいよね」

パンフレットとにらめっこしながらセシリアさんに問い掛ける。どのコーナーも魅力的で僕一人ではコースを決められない。

「それとも、ふれあいコーナーがいいかな？　ヒトデとかにも触れるしさ」

「カイトさんに一任しますわ。お恥ずかしながら、こういった場所に来たのは初めてですので」

「あ、そうなんだ。じゃあ、どうしようかな……」

限られた時間の中でより多くのコーナーを見るにはどんなルートがいいかな。

「カイトさん、あれはなんですの？」

「うん？」

セシリアさんが指差しているのは鳥居かな。イルカの形をしていて、『縁結び神社』と書かれていて、隣の立て札には『ラブラブカップルイベント☆ドルフィン・キス』というポスターが貼ってあった。

「あれは……カップル限定のイベントみたいだね。登録したら鳥居の前で記念写真を撮ったり、イルカショーでカップルシートに座れたり、屋上のカフェで限定メニューが注文できるみたいだ」

「まあ！」

セシリアさんの目がキラキラと輝いている。女の子ってこういったイベントが好きなのかな？

「でも、こういうのは恥ずかしいよね」

「恥ずかしいもの……なんですの？」

「……えっと、なんていうのかな、記念写真もあそこに張り出されちゃうし、目立つでしょ？　小心者の僕にはちょっとハードルが高いかな～、なんて」

言葉には出さないけれど、僕個人の問題もあるし、必要以上に目立つのは好ましいとは言えない。

「それでは仕方ないですわね。まずは熱帯魚を見に行きましょう」

「そうしようか」

僕らは『熱帯魚パラダイス』と書かれた看板へと歩を進めた。とりあえず今は、焦らないでゆっくりと見ていこう。

●

言葉を失うとはまさにこのことだ。ガラスの向こうには色とりどりの珊瑚礁が広がっていた。その隙間を悠長に泳いでいるのはとても自然界に生息しているとは思えない程の極彩色の輝きの魚たち。

「どう？　初めての水族館は？」

「すごいですわ……」

セシリアはカイトの言葉にただ頷くことしか出来なかった。先程まで海にいたが、その中にこんな潤沢な世界が広がっているなんて思いもしなかった。

（すごい、綺麗……）

どれくらいの時間、そうしていただろうか。時間の感覚すら忘れるほど見入っていたセシリアにカイトは何一つ文句を言わず付き合ってくれていた。

足元に子供がぶつかって、ようやくセシリアは我に返った。

「わたくしとしたことが……つい我を忘れてしまいましたわ」

「みたいだね」

カイトはなぜか満足げに頷いた。

「魚を見てるより、セシリアさんを見ていた方が楽しいかもね」

「……カイトさん、意地悪ですわ」

にわかに耳が熱くなる。何を見ても冷静でいようと決めていたのに、いとも容易く心を持っていかれてしまった。まだ一コーナーを回り切っていないのにこの有様なのだから、カイトに笑われても致し方ないというものである。

「初めてって言ってたよね。両親と来たことなかったの？」

「お父様もお母様もお忙しいですから、このような場所に来ること自体初めてなんです」

我ながら綺麗に決まった嘘だ。自分の両親が既に他界していることをこの場で言うことがお門違いなくらい分かっている。

カイトはそれを受けとめたのか、「そっか」と返した。

「でも、せっかく来るなら僕たちだけで来るのも勿体なかったよね。シャルロットとかラウラとかも連れてくればよかったかな」

……そう返してくるのも予想できた。予想できているものの、実際に言葉を返されると心がむかむかしてしまう。今日だけとは言わな

い、せめて今だけは自分だけを見てほしい。

「セシリアさん？」

つい無言になってしまったセシリアの顔をカイトが覗き込んだ。

「もしかして、体調がよくないのかな？」

「いいえ、大丈夫ですわ」

気丈に振る舞った。カイトに心配をかけてはいけない。セシリアはにっこり笑ってから歩きだした。

しかし、ものの数分でその表情が崩れてしまう。

「きゃっ！」

その生物を見た瞬間、つい小さな悲鳴が出た。

「シャコだね、これ」

「しゃ、シャコというんですのね？」

知らぬ間に声が上ずっていた。

「虫みたいなビジュアルだからね」

カイトは苦笑しているけれど、それは虫みたいではなく、虫そのものと言った姿形をしている。さすがのセシリアもたじろいでしまう。

「そんなに驚かなくてもいいよ。こう見えても食べられるみたいだよ、シャコって」

「た、食べるんですの……？」

「お寿司のネタとしては定番みたいだね。コリコリしてて美味しいって一夏言ってたし」

卒倒しそうになった。これを食べようとする日本人の度胸を疑ってしまう。同時に、これをパクパク食べている一夏の姿を想像してどん引きした。今後、一夏とはちょっとだけ距離をおこう、そう決めたセシリアだった。

早足でシャコの水槽を通り過ぎてから息をついた。

初めての水族館決して楽しくないわけじゃない。楽しくないどころか、カイトの楽しそうな顔を見ているだけで胸が一杯になる。

けれどーー怖い。

計り知れない『海』という存在に圧倒されて、急に途方も無い気分になってしまった。

「休憩しようか？　まだまだ時間はあるし」

カイトが通路端のベンチを指差す。しかし、セシリアはそれを断って、

「大丈夫ですわ。それに時間かあるとはいえ、限りがあるのは変わりませんもの」

再び微笑んで先に進む。海なんかを怖がるなんて柄でもない。せっかくのデートに水を差したくない。

「セシリアさん、いよいよだね」

不意にカイトに肩を叩かれ、セシリアは顔を上げた。気付けば、薄暗い階段を上りきったところだった。

「カイトさん？　なにが始まるんですの？」

「あと少しだよ……ほら！」

暗闇を抜けた。その瞬間、一面の青が視界に飛び込んできた。

「……っ」

そこは海の底だった。頭上を優雅に泳ぐ魚達の群れ。大きなヒレをはためかせ、白い腹を揺らしながら駆けていくもの、その後を追うもの、様々な生き物たちがセシリアを包囲していた。

あまりに突然で、自分がどこにいるのかわからない。ガラスに映り込んだ自分の姿を見た時に、ようやくそこが『海中トンネル』だと気付いた。

全身が粟立った。数十メートルにも渡る大海原に、幼い頃に図鑑でしか見たことが無い生き物がひしめいている。それも、水槽の中にいたものとは比べ物にならない大きさの魚ばかり。

ゆらゆらと揺れる光の渦の中で、ただただ圧倒されてしまう。まる

で自分が海の青に呑まれてしまったかのような錯覚を起こすほどに。

「か、カイトさん」

足の震えが止まらなくて、セシリアは手を伸ばした。しかし、カイトはその手を一瞬だけ握ったかと思うと、すぐに離してしまう。

「すごい汗だよ。暑いんじゃないの？」

「え？」

「自販機でジュースを買ってくる。ここで待ってて」

「あ……」

引き留めるよりも先に、カイトはその場を去ってしまう。そんなに自分は尋常な様子ではなかったのだろうか。一人取り残されたセシリアは深呼吸してからもう一度頭上を見上げる。

最初に目が合ったのはウミガメだ。首をもたげ、トンネルを一直線に泳いでいく。その後をさらに巨大な影が追従する。

四畳半はあろうかという影が、すっぽりとセシリアを覆った。そのっぺりとした腹に何尾もの魚が張り付いている。誰かが「マンタだ」と叫んだ声が遠くに聞こえる。セシリアは息をするのも忘れて、その巨大な生き物の後を目で追った。

ーー怖い。

美しすぎて、怖い。

初めてブルー・ティアーズを目にしたときに目に栄えた青よりも鮮烈な蒼に、そして初めてＩＳを纏った時よりも、もっとリアルに迫る透明な世界。

孤独にも似た気持ちが唐突に沸き上がり、セシリアは自分の体を抱きしめた。怖いなら頭上から目を逸らせばいいものの、なぜかそうすることが出来ない。

やがて、一際大きな影が飛来する。その生物を見て、セシリアはついに気を失いそうになった。

魚ではない。もはや空母といったサイズの何かがセシリアへと近づいてくる。斑点模様の体に角張った大きな口。全長十メートルは優にあろうジンベエザメが、今にもセシリアを飲み込まんと口を開いたーー。

「セシリアさんっ！」

がくんと膝から力が抜けた瞬間、誰かが自分の身体を抱いてくれた。おそるおそる目を開くと、今度はカイトの顔がいっぱいに広がった。額にびっしょりと汗をかいて、これ以上ないくらい切迫したカイトの顔が。

その顔を見て、一気に肩の力が抜けた。危なかった、どうやら本当に気を失う一歩手前まで行ってしまったようだ。

「おかえりなさい……カイトさん」

やっとの思いでカイトにそう言ってから、カイトの制服にしがみ付

いた。

●

「ごめん、セシリアさん！」

館内にある休憩室についてから、カイトは改めて深々と頭を下げた。その声に周りは何事かと彼らを振り向く。

テーブルに額を擦り付けて深く下げるので、セシリアは周囲の目もあってカイトを制した。

「あ、謝らないで下さいカイトさん。カイトさんは何も悪くないんですから」

「いや、僕がセシリアさんを一人にしたのがいけなかったんだ」

カイトはやはり頑なだった。土下座どころか切腹すら辞さない勢いでしきりに頭を下げている。

どうやらカイトは、セシリアが暑さのせいで元気が無いのだと勘違いし、彼女が汗を浮かべていたものだから、慌てて飲み物を買いに走ったのだ。

しかし、セシリアは暑さのせいで具合が悪かったのではなく、初めて見るものばかりの水族館で、あらゆる情報を一気に取得しすぎたために動揺をしていただけなのだ。

「わたくし、ちょっと怖かったのかも知れません」

カイトが買ってきてくれたミネラルウォーターを一口飲んだセシリアは笑みを浮かべた。

「だって、あんなに大きな魚がいるなんて思いもしませんでしたもの。魚だけではなくて、ええと……」

「シャコ、とか？」

「そう、それですわ」

思わず身を乗り出した。あれには本当に驚かされた。できれば海では遭遇したくない生き物のナンバーワンと言っても過言ではない。

「それに、怖かったんです」

「怖かった？」

絶対的な深青に身を包まれたときに感じたあの孤独感。なににも触れられない無力感の檻。まさしく両親を失ったときに感じたものと同じだった。

何を見ていいのかも、何を信じていいのかも解らない緞帳がまた目の前に降りてきて、どうしようもなく恐怖を感じた。

「そっか……。ごめん、怖い思いをさせちゃって」

「違います、そうではないんです」

すぐにカイトの言葉を遮った。確かに恐怖を感じたが、それ以上に嬉しかった。

強固な碧の牢に捕われそうだった自分をカイトはひっぱり上げてくれた。今の自分には手を引いてくれる人が、自分のすべてを受け入れてくれる人がいるのだと実感させてくれた。カイトに肩を抱かれたとき、全身の力が抜けたのはそれに気が付いたからだ。

それに、ほんの少しプライドの問題もあった。カイトを励ましたいがためにこの時間を完璧なものにしたかった。カイトが辛そうな顔をしてほしくないから。ビーチにいた時のように寂しげな顔が見たくなかったから。

そんな気負いが逆に自分を縛ってしまった。カイトにつまらない思いをさせたくないあまり、ついつい大丈夫な振りをしてしまったのだと思う。

幼なじみにしてメイドのチェルシーに今の自分を見られたら『素直ではないですね』なんて、きっと笑われてしまうだろう。

「わたくしが正直でないから、カイトさんにいらない心配をかけてしまいましたわね。でも、もう大丈夫ですわ」

この人の前では、妙なプライドを誇示しなくてもいいんだ。今になって再確認した。

（そうですわね。この人の前なら、取り繕う必要など何一つありませんわね）

「僕さ」

言葉を選びながら、カイトが続ける。

「ちょっと緊張しちゃってたんだ。せっかく出かけてるんだから、セシリアさんにつまらないって思われないようにって、そればっかり考えてさ」

カイトの赤い目がセシリアを見た。

「でも、セシリアさんがだんだん元気が無くなっていくのを見たら、その、どうしたらいいのか解らなくなって、それで気が付いたら水を買いに行っちゃって……」

「ちょっと待ってくださいまし」

セシリアは口調を強くして言った。

「わたくしがつまらないと思うわけがありませんわ」

想い人とのデートだ、一緒にいるだけでドキドキが止まらないのに、つまらないとは何事だ。まったくもって心外だ。これだからこの男は……。

「でも、心配だったんだよ」

「心配だったのはわたくしの方です。散策にお連れした甲斐がないのかと、そればかり考えて……」

「「……」」

お互い、顔を見合わせた。きょとんとしていたカイトの頬が緩んでいく。それを見たら、どうしてかセシリアの頬からも強ばりが抜けていくのが分かった。

それから二人はしばらく笑い合った。他人に変な目で見られようとも、関係ない。

相手に気遣っていて、二人して明後日の方向へと空回りしていたなんて。

呆れるほどの細やかなわだかまり。くだらないこんな感情でも、セシリアにはそれすらも愛しくて、切ない。恋をしなければ、自分がこんな小さなことで悩む人間なんて気付きもしなかっただろう。

ーーカイトさん、わたくしは、

「それじゃ、仕切り直しだね」

カイトが気を取り直したように言った。

「セシリアさん、今からお互いがしたいことを何でもしよう。何かしてもらいたいことがあったら、はっきりと言うことにしよっか」

力強く言われ、セシリアは頷いた。だったら、やりたいことがある。

「でしたら、カイトさん。一つだけ、お願いがありますの」

「いいよ。なに？」

身を乗り出すカイトに、セシリアは耳打ちした。これくらいのわが

ままなら許されるだろう。

……だって、シャルロットもラウラもいない今だからこそ出来ることだからーー。

●

まあ、何でもしようと言ったのは僕だし、訂正するつもりはない。だけどまさかーー、

「はい、チーズ！」

まばゆい光に紛れてシャッターが切られる。

セシリアさんの願い事。それは、この『ラブラブカップルイベント☆ドルフィン・キス』に参加することだった。カップルじゃないのに、いいのかな？

周囲のギャラリーの生温かい声援にもうどうにでもなれという気分になってくる。僕らが参加したことを皮きりにイベントに名乗りを上げる（本物の）カップルが続出して、辺りが活気づいていく。

「カイトさん、変な顔ですわ」

出来上がったポラロイドの写真を覗き込むと、うげ、フラッシュの眩しさで半眼になっている僕が映っていた。これじゃあ笑われるのも無理はない。

「は、恥ずかしい……」

肩身が狭い。ちなみに撮った写真はサインを入れてゲート脇のボードに貼られ、来館者らの目に曝されることになる。

ボードの端に並べられた写真を他の写真と見比べる。しかし、なんだろうか、

「やっぱり、セシリアさんって目立つよね」

「……ご迷惑でしたか？」

「いや、そうじゃなくて」

「？」

解らないならそれでいいや。セシリアさん、君には自分の容姿を客観的に観察してもらいたい。

「えーっと、次は何かな？」

「イルカショーですわ。特等席で見られるらしいんですの」

係員の誘導で、僕らは屋外に出た。ちょうどイルカショーが始まるみたいで、観覧席は満員御礼の賑わいを見せている。

プールにほど近い席に座って間もなくして、イルカショーはスタートした。双子のようにぴったりと息を合わせたイルカが、音楽に合わせて華麗にジャンプを披露する。

「カイトさん、見てください。イルカがあんなに高く……！」

セシリアさんが我を忘れて、子供のようにはしゃいでいる。水中で踊るイルカはとても優しそうな目をしていた。言葉は解らなくても、時間をかければ仲良くなれそうな気がする。

さっきまで恐がっていたセシリアさんもイルカショーに夢中になっている。

『……それでは、本日のカップルにご協力いただきましょう！』

そんな時、アナウンスが流れ、周囲の姿勢が一斉にこちらに集まった。係員さんがいつの間にか僕らの隣に立っていたからだ。

「カイトさん？　何が始まるんですの？」

「どうやらイルカと仲良くなれるチャンスみたいだね」

「はい？」

セシリアさんが首を傾げるや否や、係員に手を差し伸べられた。下に降りてきてほしいということみたいだね。

誘導に従ってプールサイドへ歩いて行くにつれ、歓声が大きくなり、やがてイルカのすぐ目の前に到着。まさに目と鼻の先といった距離だ。

「か……カイトさん」

セシリアさんの目がイルカとばっちり合う。つるんとした身体をく

ねらせながら、イルカがヒレを振っている。まるでセシリアさんに手を振っているかのようだ。

「喜んでよ、セシリアさん。イルカに餌をあげる大役を仰せつかったみたいだ」

「……ええ？」

係員に小魚を渡されたセシリアさんの全身がフリーズした。相当なプレッシャーがのしかかっているだろう。

「む、無理ですわ」

「大丈夫大丈夫」

「うう～っ……。わ、わかりましたわ……」

意を決したセシリアさんは餌を片手に一歩踏み出した。イギリス代表候補生として、精一杯任務を遂行しなくては、なんて思っているんだろう。

「頑張れ、セシリアさん」

「が、頑張りますわ」

セシリアさんの手にある餌を確認したイルカは、かなり興奮したらしく、いきなりギューンと身を乗り出してきた。その大きな体躯にセシリアさんが驚いて体を震わせた。

「きゃっ……！」

その一瞬だった。痺れを切らしたイルカが、いつの間にか、いつの間にかセシリアさんの手から餌を掠め取っていたんだ。

『おおっとー！　キャンディちゃん、フライングだー！』

客席がどっと湧いた。セシリアさんが恥ずかしさと緊張が解けたのとで、へなへなと座り込みそうになっている。

「お疲れさま。頑張ったね」

「ありがとうございます」

手を貸して体を支えてあげる。観客席がやたらと盛り上がっているからこれでよかったんだろう。

『それでは最後にキャンディちゃんと記念撮影しまーす！　勇敢なお姉さん、キャンディちゃんと彼氏さんの真ん中に立ってくださーい！』

まだミッションは終わっていないみたいだ。アナウンスに促され、僕らは再びプールサイドに歩み寄る。イルカ、セシリアさん、僕の順に立ち、カメラを構える係員の方へと顔を向けた。

キャンディちゃんは餌をもらえると勘違いしたのか、今にもセシリアさんに飛び掛かろうと体を揺らしている。準備がまだなのか、一向にシャッターを下ろされる気配がない。

「……カイトさん」

「うん？」

「イルカは、人間を食べませんわよね？」

「多分ね」

「……」

イルカは肉食かも知れないなんて言ったら、キャンディちゃんを刺激してしまいそうだったから濁したけど。

あれ、セシリアの手が震えている。

「もしかして、まだ怖い？」

「そういうわけではないのですが……」

「それじゃあ、ほら。あれを見るといいよ」

顎をしゃくると、セシリアさんが空を見上げた。青天の三日月。穏やかな輝きを讃えたそれはイルカが空を跳ねているように見えなくもない。

「…どうかな？　落ち着いた？」

「そうですわね、ちょっとだけですが」

「それはよかった」

緊張しちゃったからさっきの僕みたいな変な顔をしちゃうからね。

『準備できたんで、それじゃあ撮りますねー！　さん、にー、』

カウントを始めたカメラマンの横にカンペが見える。えっと、軽く目を瞑って横を向いてって……。

『いーち！　はい、チーズ！』

空に響く、合図の声。

その瞬間、僕は指示通り横を向いた。ただ、この時失念していたのはセシリアさんとの距離。

やりやがったな係員、なんて思ったときには色々と遅くてーー。

イルカと僕の唇が彼女の頬に触れていた。

第二十八話　～Ｄｏｌｐｈｉｎ　Ｂｌｕｅ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

甘い、甘いよぉ……。しかもその甘美さに当てられてすっげぇ気分悪いしさー。文章も意味が解んねぇしさーー！　だから、ぼかぁ活動報告で言ったよね、セシリアファンにぶっ殺されても文句言えないってさーーー！

おまえの罪を数えろ？　今更数え切れるかぁーーーー！　（作者暴走中）

―閑話休題―

スミマセン、取り乱しました。さて、今回の話は完全にセシリア一色に染まっています。自分なりには甘い話を書けたかなと思われますが如何でしょうか？　まあ、気に入らなくても容認してください。今後こんな甘ったるい話は書く予定はありませんから、その分を消化（ちゃけ）させていただきました。

本当なら最後に新キャラを出す予定だったのに次回にお預けだなんて、口惜しい。実に口惜しい！

さて、次回からオリジナル展開が増える……のかな？　あとバトルシーンも。ようやく正座編らしくなってきたかな？

それでは、またの機会に。

第二十九話　～Ａｎｆａｎｇ～（前書き）

第二十九話です。

さあ、ここからが始まりだ。蒼兎は難しいことは言いませんゆえ、しっぽりとお楽しみくださいませ。

それでは、第二十九話『Ａｎｆａｎｇ』幕が開きます。

第二十九話　～Ａｎｆａｎｇ～

水族館から帰ってきたときには既に夕日が傾き、水平線の向こう側に沈もうかという時間だった。

「水族館、楽しかったね」

「え、ええ、そうですわねっ」

生返事のセシリアさん。帰りのバスのなかからこんな感じで、今も返事をしたらすぐに首もとに視線を落としている。

「それ、気に入ってもらえたかな？」

「えっ、あ、はい。まあ、そうですわね。ふふふっ」

セシリアさんの首から掛かっているのはイルカの形を模したネックレス・トップ。イルカの瞳には空色のガラス玉がはめ込まれている。夕焼けを反射して鈍く輝くそれを眺めて、時には触ったりして、今日のことを思い出してはさっきみたいに微笑んでいる。

それは僕のことを気に掛けてくれて、励まそうとしてくれたセシリアさんに何かお詫びが出来ないかと思って、水族館での一件の謝罪も込めて帰りがけにお礼としてプレゼントしたものだ。

若干値はしたけれど、ここまで気に入ってくれるとこちらとしても嬉しい限りだ。

『ありがとうございます！　我が家の家宝にしますわ！』

なんて言われた時にはさすがに言い過ぎなんじゃないかなって思ったりしたのはここだけの話。

「くすくすくすっ」

うん、気に入ってくれるに越したことはないけどね。

（それに、セシリアさんには感謝してもしたりないぐらいだからね）

ショッピングモールですれ違った女のことをいつまでも引き摺って、気に病んでいた僕を励まそうと散策に誘ってくれた。

せっかくの臨海学校の時間だ、本当ならクラスの皆との思い出を作りたかっただろうに僕なんかを優先してくれた。

空回りもしたけれど、水族館での一時はあの女から受けた嫌な気分が吹き飛ぶような楽しい時間だった。

ようやく真剣に臨海学校に望むことが出来そうだ。

「……ん？」

と、そんなことを考えていた矢先だった。

「……なんだろう、あれ？」

交差点の向こう側、ちょうど僕らの対角線上の石畳に、妙な人がいる。

「大道芸、ではなさそうですが……」

セシリアさんも気が付いたみたいだ。びっくりするくらいの金髪を振り乱して、なにやら右往左往している。

道行く人に声をかけては、透かしをくらい、それでもあきらめずに次から次へと。あ、ヤバイよ、あれは……。

セ）「きゃー、やだ、寄らないでよ変態。ばっちーん」

カ）「ああ、待ってください。せめて私の話だけでも……てズッガーン」

セ）「気やすく触らないでよ。なんでまだ付いてくるのよ、気持ち悪いわ、誰か助けてー」

カ）「ぎゃー、ドガーン」

「「……」」

「みたいな感じでしょうか？」

「概ね」

その人の行動を勝手に解釈してアテレコしてみたけど、遠目でもそんなやりとりが想像できてしまう。あ、駄目だよ、また行った。

「うわぁ、今のは絶対に痛いよ」

「大丈夫でしょうか、頭からごみ箱に飛び込んでしまいましたが…
…て、もう跳ね起きましたわ」

タフだというかなんというか。そんな姿を見ていたからか、誰もその人に寄り付かなくなってしまった。哀れな雰囲気がこちらにまで漂ってきて、こちらとしても見ているのがいたたまれなくなってくる。

「カイトさん」

「分かってるよ」

セシリアさんの考えを汲み取って、道路を横切ってその人に近付く。

「……」

大きい。女の人だけど、僕よりも背が高い。少なくても１８０はあるだろう。しかし、体のラインは細くて、長身特有の威圧感など持ち合わせていなくて、むしろ枯れ木のような印象を受ける。

「Ｉｓ　ｉｔ　ｇｏｏｄ　ｆｏｒ　ａ　ｍｏｍｅｎｔ？」（少しよろしいでしょうか？）

流暢なクイーンズイングリッシュでその女の人に話し掛けた。流石はイギリス代表候補生、積極的だ。

「Ｉｓ　ｔｈｅｙ　ｓｏｍｅ　ｅｍｂａｒｒａｓｓｍｅｎｔ？　Ｗｅ　ｃｏｏｐｅｒａｔｅ　ｉｆ　ｉｔ　ｉｓ　ｇｏｏｄ」（なにかお困りですか？　よろしければわたくし達がお力になりますわ）

「……」

イントネーションも完璧な英語に返ってきたのは沈黙だけ。セシリアさんには悪いんだけど、それは骨折り損としか言えないよ。

「日本語、喋れますよね？」

「ふぇ？」

「……ええ。そちらのお嬢さんのお心遣いが嬉しくて、言いだしそびれてしまいましたが」

「そ、そうだったんですの……。も、申し訳ありません、わたくしとしましたことが……」

「申し訳ないのはこちらの方です。私はむしろ英語の方が苦手なんです。ああ、いえ、分からないというわけではないんですがね」

思った通り、慣れた日本語でその人は応えた。セシリアさんは真っ赤になって縮こまっている。

その人は司祭さんだろうか、僧衣（カソック）にロザリオと典型的な格好をしている。

「それに、あなたの優しさには感謝していますよ。あなたはお優しい方だ」

にっこりと、まさしく修道女の教典に載っていそうな笑顔。セシリアさんはそれにはにかんだ笑みで返す。

「い、いえ、わたくしはそんな……。そ、それよりも大丈夫ですか？　突き飛ばされたりしてらしてましたが」

「ああ、あれは私が悪いのですよ。どうも宗教の勧誘と間違えたらしい。こちらの配慮が足りなかった」

「ですが、殴られたほうが悪いというのはいささか……」

「大丈夫です。私、ああいうのには慣れていますから」

見た目どおり、いや、それ以上に苦労性なんだろう。そもそも、司祭なんて常に苦労してそうだからなぁ。

「それで、司祭さん」

「リーゼロッテ――リーゼロッテ・アーベントデンメルングと申します」

司祭――、アーベントデンメルングさんはへこっと頭を下げる。話していると、この人は無害が服を着ているみたいな印象を受ける。

「ご丁寧にどうも。僕は緋神カイト、こちらはセシリア・オルコットさんです。それで司祭さん、一体どうしたんですか？」

「ああ、そうでしたね。申し訳ありません。どうにも私、抜けていまして。参りました……」

ボサボサになった金髪を掻きながら訳を話してくれた。

「この町の教会に赴任してきたのですが、道が分からなくて迷って

しまいまして」

「教会？」

旅館のカウンターで貰い、ポケットにねじ込んだ地図を見てみる。
旅館の立ち並ぶ道の奥に教会のマークが描かれている。

「それでは、わたくし達が教会までご案内いたしますわ。ね、カイトさん」

「そうだね。ここで会ったのも何かの縁だし」

理由を聞いてはいさよなら、というのも気が引けるし、見捨てるなんて後味悪いし。

「おおっ、それは本当ですかっ！？」

「もちろんですわ、司祭様」

「ああ、なんという慈悲。なんという愛。この巡り合わせこそ主のお導きに違いない。お嬢さん、もしやあなた天使さまでは？」

「そ、そんなことありませんっ。わ、わたくしはただの学生ですの」

感激しているシスターに、またもや真っ赤になるセシリアさん。セシリアさんが天使なら、僕は地蟲以下だろうな。

「いやもう、冗談抜きで泣きそうだったんですよ。私の同僚なんか誰も彼も怖い人たちばかりでしてね、やっぱり優しい御方は素敵だ」

「いえ、そんな、それほどでは……」

わたわたと手を左右に振って否定しているセシリアさんは嬉しそうだ。

と、まあ、そんなこんなで僕らは司祭さんを教会まで連れていく事になった。

●

夕日に染まる町並みを眺めながら僕らはアーベントデンメルング司祭を教会に送り届けている。

司祭さんは少しのんびりな感はあるけれど、全身から滲み出る柔和な雰囲気は司祭という職を頷けるものだった。悪く言えばからかいやすいタイプなんだけど、そんな人ほど人に好かれやすい。頼りない印象はあるけれど、不愉快になんて思う人なんて殆どいないだろう。

嫌味にならない程度に整った容姿、柔らかな口調と物腰に加えて、この雰囲気とくれば完璧だ。まだ話して間もないけれど、アーベントデンメルング司祭には人徳めいたものを感じる。

事実として、僕もセシリアさんもさっき会ったばかりの司祭さんに好感を抱いている。こんなにあっさり人に好感を持つなんて珍しい。

気付けば僕の抱えていた後ろめたさは鳴りを潜めていた。懺悔を聞くでも説教をするわけでもなく、胸の支えを消してしまったのだか

ら、かなり優秀な聖職者だと言えるだろう。

傍らを歩きつつ、セシリアさんの話に耳を傾ける長身の司祭さんを盗み見みつつ、そんなことを考えている内に、目的地に辿り着いた。

「ここでいいんですよね？」

地図を見るかぎり、ここら辺にある教会はここだけだ。

「はい、助かりました。お二方にお会いしたことに感謝をしてもし切れません」

「気にしないでくださいまし、司祭様」

「それじゃあ、僕らはここで」

だいぶ辺りも暗くなってきたし、そろそろ旅館に戻らないと夕食に間に合わない。

少し名残惜しいけど、司祭さんに頭を下げてその場を後にしようとした。

と。

「緋神さん」

「はい？」

「すみません、言い忘れたことがありまして。少しだけよろしいでしょうか？」

「僕に、ですか？」

追い掛けてきた司祭さんに呼び止められて、振り返った。

「はい、申し訳ありませんが。オルコットさん、彼をしばらくお借りしてもよろしいでしょうか？　お時間はとらせませんので」

「わたくしがいましたら、いけないんですの？」

「そういうわけではないのですが……いえ、そういうことになるんですかね。ご理解いただけると助かります」

司祭さんの言葉に納得いかないのか、思案顔のセシリアさんの肩に手を置いた。

「すぐ終わるよ。変な話じゃないと思うし」

「どうなんですの、司祭様？」

「……あの、オルコットさん。私は一応、司祭ですよ？」

「でしたら、お早くお願いしますわ。時間も押していますので」

納得したセシリアさんは教会の門まで下がってくれた。一体なんの話なんだろうか？

「セシリアさんも言っていましたが出来れば手短にお願いします。僕らの学校の先生、物凄く怖いから」

「ええ、承知しました。ありがとう。それで話というのは他でもないあなたのことですが……」

僕の？

「緋神さん、あなたの生まれは日本（ここ）で？」

「……？　違いますけど、それが何か？」

予想外の質問に若干面食らった。どうしてそんなことを聞くんだろうか？

「そうですか……。いや失礼。どうにもあなたが私の知人と似ていまして、もしかしたらと」

「！　僕がその人だと？」

「いいえ、私の勘違いのようです」

「そうですか……」

思わぬところから記憶の手がかりが転がり出たと思ったんだけど……。

「私の古い友人に、あなたと瓜二つな人がいましてね。彼は私にとって憧れの対象でしたが……残念ながらそういう人ほど早世しやすい」

「ま、まってください。司祭さん。やめてくださいよ、そういうの」

縁起でもない。それじゃあ、まるで僕がその人みたいに早死にするみたいじゃないか。

「面識のない僕を心配してくださってありがとうございます。ですが、一応これでも用心はしてますので」

「一応とはどれくらいで？　用心とはどのような？　失礼ながら認識が甘いように思われますが」

「……食い下がりますね」

司祭さんの友達と僕を重ねてくれているのか、びっくりするくらい心配してくれている。

「ですが、あなたがいなくなってしまいましたら、ご両親が悲しみますよ？」

「ーーーー」

両親？

ナンダ、ソレハ？　ボクハソンナモノ、シラナイーー。

「大丈夫ですよ。心配かけないように自分第一に考えて行動していますから」

「そうですか。これは申し訳ない。失言でしたね」

「いえ、気にしないでください」

両親なんていたのか思い出せないけど、今の僕には千冬姉さんが両親代わりだ。あの人に恩を返すまで死ぬわけにはいかない。

「カイトさーん、まだ終わりませんのー？」

声に反応して、手首に視線を落とすと、いよいよ走らないと間に合わない時間になってきた。

「司祭さん、時間が押していますので僕らはここで。またいつかお会いしたいです」

司祭さんの話を切り上げる。司祭さんだけあって話が重い。僕はどうにもそういった話を好まないみたいだ。

だけど――、

「緋神さん、最後に一つ。ＩＳについてどう思われますか？」

「また難しい質問ですね」

司祭さんが人の息吹の無い機械について尋ねてくるなんて。

「そうですね……今の世界の抑止力にして、一瞬で世界のバランスを崩してしまう情報の固まり、だと思います」

「それはつまり？」

「うまく言えませんが、核兵器の発明とか、テロとか、ちょっとした発明や発見が、簡単に世界のバランスを一変させてしまうことだってありえる訳です」

「では、ＩＳはその典型的なものであると？」

「ですが、それは棄民的な一面にすぎません。事態はもっと多面的です」

事実、ＩＳは今の人の手には行き過ぎたものだし、クリティカル・カウンターな兵器であると言わざるを得ない。ＩＳに対抗するにはＩＳしかない、という構図が出来てしまったのはそのためだし、依存性が高いのもそこにある。

しかし、その反面で新たな技術がもたらされたことも忘れてはいけない。

現代医療がちょうどそれに当たる。今まで処置不可能だった難病への治療技術がＩＳからもたらされ、命を救われた人だっている。懸念されがちだが、これはれっきとした『発明』だ。

ＩＳは紛争を助長させてしまいかねない兵器であると同時に人類の革新に必要な情報を孕んだ、フィフティ／フィフティのパンドラの箱。ＩＳを駆る僕にとっては否定も肯定もできる。

「なるほど。緋神さん、あなたは聡い。年表を暗記して分かることではない。まったく仰る通りだ。重ねて失礼をしました。いつかまたお会いできることを楽しみにしております」

「いえ……それじゃあ、またいつか」

頭を下げて、僕は教会を後にした。さっきのことは以前から思っていたことだけど、あそこまですらすらと言えたのは自分でも驚きだ。

それにしても、司祭さんは何を言いたかったんだろう？

●

「さて……」

困ったような顔をして、連れの少女と共に去っていく少年の背を見送った司祭は軽いため息を吐いた。

ちょっとした雑談のつもりだったんだが、随分と話し込んでしまったらしい。日が沈み、辺りに夜の闇が降りてきている。

「しかしまあ、正直肝を冷やしましたよ。ただの鎌かけだったのですが……」

苦笑は深く、自虐的だ。司祭は先ほどのやり取りを反芻していた。

そう、確かにＩＳは人類に大きな革新を与えた。抑止力として戦争が激減しただけではない、不治の病とされた奇病ですら治療を可能とする高い技術力を世界にもたらした方舟だ。

だが、世の中には本音と建前があり、それらは往々にして食い違うものなのだ。

ＩＳはどうしようもなく、究極的なまでにおぞましい兵器だ。どれだけ華々しく着飾ろうとも、銃口は火を吹き、人の命を奪うためのもの。確かにそれが兵器であるＩＳの面でもある。

ならばこの場合、本音――真実はどちらだ？　ＩＳにより崩れた世界に存在する絶対不変の現実はいかなるものか。

革新すべき宝箱（ラプラス）という都合のいい妄想、陳腐な奇跡か。死者の慟哭に精神を苛まれる悪夢の核心か。

人は冒涜的でもそれを真実として受けとめることが出来るのだろうか？

「あなたはどう思いますか、『天歇』」

「下らない事を聞くわね、司祭様」

吹き抜ける風に紛れて、少女は司祭の背後に立っていた。どうやらことの一部始終を見届けていたらしい。気配は完全に無かったのだが、両者共に暗黙の了解があったのだろう、さして驚いている様子はなかった。

「私たちに今更そんなことを聞いたところで意味を為さないの、知っているでしょ？」

「思想は個人の自由だと？」

「気分は害してないわよ」

「ははは、怖いですね」

緩い調子で笑いながら、リーゼロッテは眼鏡を押し上げる。その様子を横目にしながら、少女は嘆息気味に続けた。

「ともかく、私としては助かったわよ。こんな話を『天秤（ヴァーグ）』にでも聞かれてみなさい。あんなのが前に出るなんて言いだしたら私たちなんかじゃ手に負えないわよ」

「確かに。汗顔のいたりですね。以後気を付けるといたしましょう」

「だといいのだけれど」

『天歇』はやれやれと言った調子で肩を竦めた。幼げな顔には懐疑の念が浮かんでいるが。

「あと、言わせてもらうけど。ちょっとばかり勇み足だったんじゃないの？　あなたがあの子に接触するのはもう少し時間が経ってからのほうがよかったと思うんだけど」

「それなら目を瞑ってくれるでしょう。まだその時ではないのですからね。まあ、いささか軽挙妄動だったのは認めますが」

だが、それも司祭には当然だった。リーゼロッテは忙しい。貪欲的なまでにやるべきことがあるのだ。それに欲しいものだってある。胸に抱いた深い業など、神に純する身には相応しくない思想だが。

「『宝瓶（ヴァッサーマン）』には俗物等と宣われるやもしれませんが、これも私の務め――なればやむなしといったところでしょう。あなたには分からないと思いますがね」

「右の頬を打たれたら、左の頬を差し出すマゾい聖職者の考えなんて私には分からないわよ」

「結構。でしたらば行きなさい。現場の指揮はあなたに一任します。『巨蟹（クレーブス）』がやりすぎるようなら止めるように。あの少年の中身はどうもキナ臭い。我々の知っているものと何かが違うと思えてなりません」

「了解（ヤヴォール）、猊下様。まったく、私はハズレクジばかり引かされるわね」

一際深いため息を吐いた少女は桜色の髪の毛を揺らして身を翻した。こんな役割ばかり担わされる自分に呆れが差しているんだろう。

現れた時と同じように夜風に紛れて少女の姿は戸張の中へと消えていった。その消えた姿に胸が昂揚し始める。

「今宵の歌劇もなかなか面白くなりそうですね。ですが、誰しも死の前には幸福を得ることが出来ないのですよ、『獅子（レーヴェ）』」

●

アーベントデンメルング司祭さんと別れてから旅館にたどり着いた僕らを迎えたのはシャルロットとラウラだった。僕を見るなりに「水族館に連れてって」みたいなことを言われたけど何で知ってるんだろうか？

そんなことがあったりして時間が過ぎて、今は七時半。大広間を三

つ繋げた大宴会場で、僕らは晩ご飯を食べている。

「うわぁ！　凄い、凄いよこれ！」

目の前には理想的かつ完璧な夕食が並んでいた。刺身からお吸い物まで一級品。これじゃあどうしならいいのか分からないよ。

「食べないの、カイト？」

「そ、そうだねシャルロット。食べないともったいないもんね」

そう促すのは僕の隣に座るシャルロットだ。何でもこの旅館では『お食事中は浴衣着用』らしく、みんな浴衣に着替えていた。本当なら袖が汚れちゃうからいけないらしいんだけど。

お刺身に山葵を乗っけてっと……いただきます。

「うん、おいしい！　しかもこのわさび、本わさじゃないか。高校生の食べられるレベルじゃないよ、これ」

「本わさ？」

「あ、シャルロットは知らないんだっけ。本わさって本物のわさびをおろしたものを言うんだよ」

「うん？　じゃあ、学園の刺身定食についてるのって……」

「あれはね、練りわさって言ってね、ワサビダイコンとかセイヨウワサビとかを原料にして、着色したり混ぜたりして、見た目と色を似せたものなんだよ」

「へぇ～。そうなんだ。はむ」

え？　シャルロットさん、今あなたお皿に乗っていたわさびを全部食べちゃったよね？　そんなことをしたら……。

「っ～～～～～～～！」

やっぱり、鼻を押さえて涙目になるシャルロット。な、なにをしちゃってるんだろう……。

「だ、大丈夫？」

「ら、らいひょうぶ……ふ、風味があってお、おいひい……よ？」

鼻声で返事をしながら、にこりと笑顔を浮かべようとするシャルロット。だけど、その笑顔は涙目のせいで崩れちゃっている。

「どこまで優等生なの、君は。はい、これ飲んで」

「あ、ありらりょう……」

お茶を渡すと間髪置かずに一気にあおった。相当堪えたみたいだ。あれだけのワサビの山を食べれば仕方ないか。

さてと、僕もご飯の続きを――。

「っ……ぅ……」

「……」

「ん……ぅぁ…ぅぁ……」

隣から聞こえる、場違いななまめかしい声にぴたりと動きが止まった。

「あのさ、セシリアさん。顔色良くないけど、大丈夫？」

「だ……ぃ……ょう、ぶ……ですわ……」

とりあえずダウトとは言っておこう。左の席に座るセシリアさんは正座が苦手なのか、呻くだけで一向に食事が進んでいない。

「い、ぃただき……ます……」

ず、ず……ず……

平静を装ってお味噌汁を飲んでいるけど、それすらも辛そうだ。一体何がそれをなせるんだろうか？

「お、おいしぃ……ですわ、ね……」

に、ニコリ……

さっきのシャルロットと同じくらい残念な笑顔だ。やっぱり、かなり無理をしているように見えるんだけど……。

「セシリアさん、正座が苦しいならテーブル席に移動したらどうかな？　クラスのみんなも何人か行ってるよ？」

ＩＳ学園は各国から学生が留学してきて、人種のるつぼとなってるから、正座がＮＧな人のために隣の部屋はテーブル席が利用できる。お膳もお盆と台が分離できるタイプになっているので、自分の食事を運ぶだけで大丈夫となっている。

ちなみに、ラウラはテーブル席で黙々と食べ進めている。

「へ、平気ですわ……。この席を獲得するのにかかった労力に比べればこのくらい……」

「席？」

「いいえっ！　なんでもありませんわ！」

席を獲得も何も、入ってきた順に座っただけなのに。何か違うのかな？

「カイト、女の子には色々あるんだよ」

「そうなの？」

「そうなの」

そうみたいだ。

「う、ぐ……、くぅ……」

「セシリアさん」

「移動は、しませんわ」

言い切られた。でも、やっぱり苦しいのかご飯がまったく食べられてないけど。

このままじゃせっかくのお刺身が無駄になっちゃうよね……。あ、そうだ！

「セシリアさん、よかったら僕が食べさせてあげよう――」

スコンッ！

目の前を鋭い何かが通過した。おそるおそる首を傾けるとそこには――コンバットなナイフが深々と突き刺さっていた。

「「……」」

投げた本人と目が合った。平常を装っている彼女だったけど、その目にハイライトがないことくらい僕には分かっている。

ラウラ、これは冗談じゃ済まないよ？　何が君をそうさせるんだい？

「か、カイトさん。それは本当ですの！？」

「え？」

「そ、その！　食事を食べさせてくれるというのは……！」

あ、ナイフのことはいいんだ。僕も気にしないけど。と、いうか気にしたら負けだろう。

「う、うん。別にいいよ。足の痺れがとれるのを待っていたら料理が冷めちゃうよ。それにお刺身の鮮度が落ちちゃうし」

「そ、そうですわね！　ええ、ええ！　せっかくの料理が痛んでは、シェフに申し訳ありませんものね！」

シェフというよりかは、板前さんだろうね。そんな突っ込みをしながらセシリアさんのお箸を受け取る。

「それじゃあ、まずはお刺身からね」

「はい！　あ、ワサビは少量で」

これくらいなら大丈夫かな。箸の先端でほんの少し掬ってカワハギのお刺身の上に乗っけて。

「じゃあ」

「あーん」

ぱくっとお刺身に食い付いたところで地鳴りのような声が旅館に轟いた。

「セシリアずるい！　何してるのよ！」

「緋神君に食べさせてもらってる！　卑怯者！」

「ズルイ！　インチキ！　イカサマ！」

他の女の子たちがどっとセシリアさんに詰め寄せる。気付かれるの

も当たり前か、だって一列にずらーっと並んでるんだし。

「ずるくありませんわ！　席が隣の特権です！」

「それがずるいって言ってんの！」

「緋神君、私も私も！」

チャンスと見込んだ女の子たちが僕にお箸を押し付けてくる。あの、皆さん？

「カイト」

「な、なにかなシャルロット？」

状況を見兼ねてか、シャルロットが背中越しに声をかけてきた。助けてくれるのかな。

「はい」

シャルロットさんが戦闘に介入しました。お箸を差し出すシャルロットの考えが僕にはさっぱり分からない。

「お前たちは静かに食事をすることはできんのか！」

襖が開かれ、悪鬼羅刹が宴会場に現れた。その威圧感をまとうお姿に場が凍り付いた。

「お、織斑先生……」

「どうにも体力が有り余っているようだな。よかろう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。５０キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！　とんでもないです！　大人しく食事をします」

そう言って蜘蛛の子を散らすように散開して自分の席に戻っていく。

それをはた目に千冬姉さんが僕を見た。

「緋神、面倒を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「返す言葉もございません」

千冬姉さんの手を患わせてしまったのは僕の所為だ。素直に頭を下げると、姉さんは襖を閉めた。

「というわけでセシリアさん、悪いんだけど後は――」

「……」

ぷく～～～～っと餌を詰め込んだハムスターみたいにセシリアさんの頬が膨れている。怒らせちゃったみたいだ。あ、そうだ。

「代わりって言ったらアレだけど、後で僕の部屋に来てよ」

小声でそう囁くと、セシリアさんは二回瞬きをして、みるみるうちに笑顔に変わった。

「後で部屋に……？　か、カイトさん、それはもしや――」

「まあ、無理にとは言わないけど」

がばっ！　と言葉を遮っていきなり僕の手を取ったセシリアさんは熱の入った小声で答えた。

「はい！　わかりました！　じゅ、準備がありますので少々お時間をいただきますが、必ず！」

準備？　はて、なんのだろう。それを問い掛ける前にセシリアさんは嬉々として晩ご飯を食べ始めた。足の痺れに慣れたみたいだ。

「ああ、何を食べても美味ですわ！」

……不安になるテンションの高さだ。でもその気持ちは分からなくもないかな。晩ご飯めちゃくちゃ美味しいし。

（温泉も気持ち良かったしなぁ。あとでまた入りにいこうっと）

そんなことを考えながら晩ご飯を堪能した。

うん、カワハギおいしいなぁ。

第二十九話　～Ａｎｆａｎｇ～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

え？　ここで終わり？　……なんて突っ込みが聞こえてきそうです。そうですね、まずはここで終了です。あまり話を詰め込むのもアレなんで、次回に持ち越しました。

なお、今回のタイトルの『Ａｎｆａｎｇ』とはドイツ語で『始まり』を意味しており、今回のキーポイントであるリーゼロッテ・アーベントデンメルング司祭との邂逅を指しており、引いては、リーゼロッテ司祭との出会いが今回の星座編に大きな影響を与えることを示唆しております。

さて、次回は僕が書きたかったお話その一です。ふふふっ、実に楽しみだ。ようやく厨二に浸れそうだ……。次回の更新を楽しみにしてくださいませ。

それでは、またの機会に。

第三十話　～襲撃～（前書き）

第三十話です。

ドタバタ二割、シリアス八割でお送りする第三十話。皆様のお気に召しますことを祈っております故、ごゆるりとお楽しみくださいませ。

それでは、第三十話『襲撃』、嵐の前の静けさと共に幕が開きます。

第三十話　～襲撃～

「ふぃ～、極楽極楽～」

「年寄り臭いよ、一夏」

「いいじゃねぇか、せっかくの温泉、しかも露天だぞ？　満喫しなくちゃ悪いだろうが」

「それもそっか」

夕食後、僕らは二度風呂ならぬ二度温泉を堪能していた。学園の大浴場じゃこうはいかない。男子が使えるのは週一だからだ。

「うは～、すげぇ星だなぁ」

一夏が空を見上げて感嘆の声を上げた。その気持ちも分からなくもない。つられて僕も空を仰ぐ。

静かに、穏やかに広がる夜空。そこに輝くのは蒼白の満月。そして、それに負けじと輝く星の大河。学園にいたときには見えなかった満天の星空を見られるなんて、幸運だ。

「こういうのもたまにはいいよね」

「こういうの？」

「騒ぎのない、静かな時間さ」

「確かにな」

学園が始まってからの3ヶ月はあまりにも濃密だった。それがいけないこととは言わないけど、時々には喧騒のない、静かな時間も欲しい。

「今回ばっかりは何もなければいいよな？」

「疑問形やめなよ。フラグみたいじゃないか」

イベントで予期せぬアクシデントが起こってしまう。もしかしたら今回も……。なんて考えたらキリがない。臨海学校が終わった後だって、行事はあるんだから。学園祭にキャノンボール・ファスト、三年間を通じて換算したらもっとあるだろう。

そのイベント毎に厄介事が舞い込むなんて、神様に百億積まれても断固拒否するね。

「まあ、なにもないのに越したことはないけどね」

「だよなぁ～。はぁ、変なジンクスつかなきゃいいけどな」

「バイクのサンケツは事故る、みたいな？」

「やめてくれ、冗談でも勘弁だ」

降参とばかりに両手を上げた一夏と笑い合う。くだらない冗談が言えるなら、まだまだ僕も一夏も大丈夫だ。

「さてと、俺はもう上がるな」

「早いね。何かあるの？」

日本人にはお風呂ほど必要なものはない、と一時間かけて力説していた一夏はもっと長く浸かると思っていたのに。

訊くと、一夏は苦笑しながら答える。

「千冬姉にマッサージ頼まれたんだよ」

「マッサージ、ねぇ」

「……カイト、一応言っておくが、やましい意味じゃないぞ」

「失礼な」

誰がそんなことを考えるか。そもそも、一夏に千冬姉さんを襲うなんて度胸がないことくらい僕が分からないと思っているのか？　僕を見くびりすぎてるよ。

「なんだか納得がいかないが、まあいい。カイト、お前はどうする？」

「僕はもう少しゆっくりしていくよ。せっかくの露天風呂だし」

「おう、じゃあ先に部屋に戻るからな」

一夏に答えた僕は後ろを向く。この露天風呂は海に面していて、合わせ鏡のように星空がそこには映り込んでいる。

さて、それをゆっくりと鑑賞しよう――、

バリバリバリッ!!

「ギャアアアアアアア！」

「一夏!?」

お風呂の入り口で閃光が迸り、一夏の断末魔が夜の闇に吸い込まれた。瞬時にレイヴァー・デイを起動できるようにしながら、入り口を仰ぐとそこには――。

「キャアアアアッ！」

悲鳴を上げてお風呂に沈む。気分はさながらホラー映画のヒロインだ。

黒焦げになって横たわる一夏、奇跡的にタオルは腰に巻かれたままだ（↑ここ、意外と重要）。そしてそれを冷たく見下している銀髪の襲撃者は手にスタンガンを構えている。

「ら、ラウラさんっ!?　な、なな、何してるの君は!?」

「無知な男だな、お前は」

「常識知らずには言われたくないよっ！」

一夏を沈めた襲撃者、ラウラはなぜかスクール水着を着用していた。

一夏の亡骸を踏み越えて（踏む必要はないはずなのに）ずんずんとこちらへと進軍してくる。

「聞いた話によると、こういったイベントでは異性の入浴所に突撃するのが習わしだと聞いたぞ」

「まずい……、どこから突っ込んだらいいのか分からない……」

ラウラにはその知識の源泉たる存在との対談の場を設けてもらわなければならない。

いやいやいや、そんなことを考えている場合か!?　僕だって木石じゃないんだ、女の子のそんな姿を見て平常心を保てるかどうか……！

「で、では……失礼するぞ、カイト……」

逃げ道を塞がれた。なぜか温泉のなかで体育座りのような恰好で向き合う僕ら。

なに、この展開？　普通なら背中合わせとか、横並びじゃないんだろうか？　いくら、薄い乳白色のお湯プラス水の屈折具合で見えないからといって、裸で対面するのは僕には辛い仕打ちだ。

駄目だ、耐えられない！

「ぼ、僕は上がるねっ！」

ザブザブと一目散に入り口へと逃亡。のぼせているのか、頭がくらくらしだしている。心臓もヘビメタバンドのヘドバンよろしく激し

く脈打っている。

湯船から上がって一歩踏み出した瞬間だった。

ツルンッ（石けんに足を取られる）

ドサッ（僕、倒れる）

ズシッ（ラウラ、のしかかる）

「全く、漫画のようなことをするな。お前は」

「最近の漫画でもないよ、こんなベターな展開」

僕の目にはあと一メートル足らずの出口が遥か二万マイルも彼方に見える。逃亡するのは不可能だろう。

「ちなみに石けんを転がしておいたのは私の作戦だ。どうだ、用意周到だろう？」

誰がなんといおうと、今の僕にはラウラを説教できる権利があるはず。

「あのさ、今はそんなことはどうでもいいから、僕の上から降りてくれないかな？」

「それは無理な相談だな」

僕の背に馬乗りになっているラウラの手には泡立ったスポンジが握られている。なぜだかその顔には、被虐心を擽るサディスティックな笑みが浮かんでいた。

「嫁の背中を流すのは私の仕事だからな、これをやり終えるまでは離れんぞ」

「嫁じゃないからね……もういい、好きにして」

ここは大人しく従おう。抵抗しても無意味だし。諦めの境地に至った僕の背中をスポンジが滑る。

「どうだカイト、気持ち……いいか？」

「うーん、強いて言うならもっと強いほうがいいかな」

「了解、した……」

ラウラの手に力が入る。

「っ……んんっ。カイトっ、これならどう、だ？」

なんだかラウラの吐息が艶っぽい。湯気の熱気に当てられたのかな？　ヤバイ、僕の理性が……。

「つ、次は前か……」

「ラウラっ、もういいから！」

前はヤバい。床にしがみ付いて仰向けにしようとするラウラに必死に抵抗する。

「抵抗するなっ！」

「嫌だよ！」

神様仏様国王様法皇様大統領様総理大臣様千冬様！！　お願いだよ、届いてくれよ、叶えてくれよ、僕の魂の慟哭をーッ！！

バァン！

「神様！」

「悪いな、神様ではなくて」

爆ぜるように開かれた脱衣場のドア。そこから現れたのは救いの女神、織斑千冬姉さんだ。

「いくら待ってもお前たちが帰ってこないから様子を見に来てみれば、随分と愉しそうなことをしているじゃないか」

言うが早いか千冬姉さんは雷速で踏み込み、ラウラの手首を取ってそのまま壁に向かって投げ飛ばした。

「教官！　これは夫婦ならば当然の帰路です！　共に背中を流すことが何がいけないのです！？」

壁に着地、そのまま三角飛びの要領で空を舞い、天の川のような銀

髪をなびかせて床に降り立った。なんてポテンシャルだろうか。

「何が夫婦だ馬鹿者。私はお前のような倫理観の欠けた義妹はいらん」

「！！」

千冬姉さんの一言がラウラのハートを木っ端微塵に粉砕した。よほどショックだったんだろう、ラウラは絶句して、そのまま倒れてしまった。あの～、ラウラさん？

「……教官にいらないと言われた。教官にいらないと言われた……いらないといらないといらないいらないイラナイィ……」

千冬姉さん、やりすぎですよ。ラウラがここじゃないどこかを見て、呪咀のように呟いてますよ。

「カイト、一夏を別館の医務室に運んでやれ。私はこいつを預かる」

「それは、まあ、構いませんが……」

「……いっそ、私を殺して……ふ、ふふっ、ふふふっ……」

一夏よりもラウラを医務室に運んだほうがよろしいんじゃないでしょうか？　笑い声が怖い。

「では、頼んだぞ」

スクール水着のラウラを引き摺って、千冬姉さんは浴場を去っていく。その後ろ姿を唖然と見送った僕は足元を見た。

「一夏、生きてるかい？」

「……」

返事がない。ただの屍のようだ。一夏の様子としばらく姉さんの言葉を反芻した僕は一一。

「後でなんとかなるか」

湯船に戻り、全身を暖めることを決めた。

●

それからしばらくして、一夏を別館の医務室に運び終えた僕は自室に戻ろうと来た道を引き返していた。

そう言えば大分時間が経っちゃったけど、セシリアさんは部屋に来てるかな？　せっかくだから皆でトランプに興じようと思ったんだけど、一夏は気絶、ラウラは再起不能だし、どうしようか。

臨海学校、その一日目の夜の一コマをどう楽しもうかと考えながら旅館の通路を急ぐ。

―さて、今宵の恐怖劇（グランギニョル）の幕を開こう。もはやここに、退路はない―

「―――――」

なんだ？　何かが妙だ。ここには僕だけしかいないはず。なのに、なんだ？　この曖昧な感覚は？　無機質な誰かが僕を見ているような―。

キィン……！

「っう！」

刹那、酷い鈍痛が脳を巡る。痛い、なんてものじゃない。まるで熱したワイヤーで締め付けられるような痛み。この痛みを感じるのは二回目だ。初めてこの感覚に苛まれたのは、クラス代表戦に乱入してきたＩＳと対面したとき。あの時と同じようなことがここでもおきているのか？

「っあ……あがぁ……」

痛みに崩れ落ちそうになるのを壁に寄り掛かってなんとか堪える。頭が割れそうになる激痛の濁流に抗うように、理性という名の心棒で意識をつなぎ止め、通路の脇に広がる漆黒の闇に覆い被された森林。その中から確かに感じる言い知れぬ圧力。

暗がりに紛れているが、見えない力の有刺鉄線はミリミリと僕に食い込み、がんじがらめに拘束し、捕食者の元へと誘おうと手繰り寄せる。

「『僕』を呼んでる、のか？」

痛みにかき乱される頭のなかの何かが答えを否定しようと警告を発している。怯え、恐怖、怒り、様々な感情がないまぜとなりながらも、必死に行くなと警告している。僕が僕を、制御させない。

それでも、僕は――緋神カイトは――。

「行かなくちゃ……」

酩酊感を覚えながらも、ふらふらと歩きだす。いつもなら気にせず意識せずとも歩けるのに、悪夢に促されるかの如き激痛に苦しみながら一歩ずつ踏み締めながら先を急いでいく。

●

「あれ？」

「あら？」

スタンガンの痺れから目覚めた一夏は、自分らの部屋の前に立っていたセシリアの姿を見つけた。

「こんなところで何やってるんだ、セシリア？」

「いえ、カイトさんにお部屋に呼ばれましたのでお伺いに参りましたの」

そう胸に手を当てて答えるセシリアからはなにやら高級そうなコロンの香が漂っている。

（セシリア、わざわざ部屋に来るだけなのに随分と準備してるな）

なんて、本質を捉えていないことを思いながら一夏はドアに手を掛ける。

「たぶんカイトはもう部屋にいると思うし、入ろうぜ？」

「ま、待ってください！　まだ心の準備が、」

止めようとするセシリアの制止虚しく、一夏は自室のドアを開いてしまった。

「なんだ？」

途端に一夏が眉をひそめる。ドアの向こうに広がる畳部屋。そこには横一列に並んだ箒、鈴、シャルロットにラウラ、うるむまでもが正座させられており、彼女等の前には仁王立ちの千冬の姿があった。

「ああ、戻ったか、一夏」

「どうなってんの、これ？」

「不法侵入で説教中だ」

「あ……、そう」

苦笑するしかない。わざわざ部屋にくるまでもないだろ、などと思ってしまう一夏に彼女等の心境は届いていない。

「千冬姉、カイトは？」

「ん？　てっきりお前を看病していると思ったんだが、違うのか？」

「いや、俺はてっきり部屋に戻っているとばかり……」

二人の見解の食い違いに不穏な空気が部屋に降りる。張り詰め、先鋭化していく最悪の感覚。しかし反面茫洋で、曖昧さが後を引く最低な思考の乱反射。

サイケデリックでカオスな予測が容易く出来てしまうのは惨劇の幕が開いているのを直感させて――。

「千冬姉、俺、カイトを探してくる！　セシリアはここで待っててくれ！」

一夏は考えるよりも早く身を翻し、旅館を疾走する。日常という世界から排斥される前にカイトを捜し出さなければ――。

●

丸い、丸い、真円の月。そこから降り注ぐ月光に照らされた道を疾走する。もはや痛みに麻痺し、鈍痛すら感じない。

先の見通せない闇、引き替えせない緞帳。――それらはまるで奈落の底に下っていくような錯覚を起こす。

説明のつかない衝動が胸を突き上げ、走る速度を数段高める。次第に朧気だった思考も夜風に研磨され、クリアになっていく。

「――――」

瞬間、体を縛る有刺鉄線じみた慙愧の糸がぷっつりと切れ、思わず足を止めてしまった。

「ここは……」

どれくらいの距離を走ったのだろう、気が付けば開けた場所に立っていた。そこはまるで自然が作り出した天然のオペラホール。頭上には凍えるような蒼い光が月からさめざめと降り注ぎ、スポットライトを当てられたダンサーを思わせるように、一人月光の元に佇んでいた。

「……」

ふと、幽かに声が聞こえた。正面を向くと、そこには横たわる人影

が見えた。それだけじゃない、よく見ると月に照らされたステージのあちらこちらに、粉々に砕け、見るも無残な形に成り果てたＩＳのパーツが転がっている。

どう見ても、戦闘が行われた形跡がある。それも、一方的な一一。

「だっ、大丈夫ですか！？」

考えてる場合じゃない。瞬時に駆け寄り、抱き抱える。瞬間、僕は絶句した。

倒れていたのは二組の担任の先生、秋月先生だったからだ。

装備した『リヴァイヴ』の深緑色の装甲板は禿げ、その下から露見する皮膚は痛々しく腫れ上がっている。

「っう……あぁ……」

「先生、大丈夫ですか！？」

まずいな、呼吸が浅い。怪我も深いし、早く旅館に連れていかないと……。

「一体、誰がこんなことを……」

「んな、下らねぇこと聞くなや」

「!?」

驚きに目を剥いた。不意に声を掛けられたことよりも、刹那に取った僕自身の行動に。さっきの一瞬でＩＳスーツに着替えて脚部装甲のみを部分展開、さらには先生を抱えたまま、一体何メートル後ろに飛び退いた。

僕は今、何をしたんだ？

「ほぉ……」

愉快げに目を細め、こちらを見ているのは『覚えのない』女性。彼女がいた場所に僕がいたとするなら、おおよそ十メートルは飛んだことになる。

「いい反応してるな、さすがは黒騎士候補（ニグレド）だっただけはあるじゃねぇか」

にこやかに、穏やかとも言える声で、僕を撫で付けながら女性は言った。

その様子に直感した。さっきまで感じた言い表わしようのない胎動の中核にいたはこいつだと。先生を一方的に叩き潰したのもやはりこいつであると。

そして瞬間、形容しづらい悪寒が脳天から爪先に走り抜けた。

『星穿ぎの獣』

意せずして、そんな揶揄が脳内に浮上する。

「ぁ……、く……」

ヤバい、いやヤバいなんてものじゃない。身体中のありとあらゆる神経や細胞が最大級の警戒警報を鳴らしている。

導かれたとか、先生がやられたとか、そもそもどうして僕がこいつと対面しているのかすらも些細な困惑と化し、胸の彼我の深遠へと吹き飛ばされてしまった。

こいつを猛獣を形容するなんて生々しい。何か得体の知れない人外の、まさしく、星を喰い穿つ埒外の魔獣。

夜の静寂を塵芥と成して姿を見せた凶源に、考えがまとまらなくなる。

こいつは一一人間なんてカテゴリーに納まる生物じゃない。

「よぉ、久しぶりなんだ、なんか言えよ。こっちは再会を祝して、猿用の言葉で話してやってんだぜ？　口の利き方まで忘れたってわけでもねぇだろ？」

「一一一一ッ！！！」

女が一歩、ステージから歩む。大気が震え、大地は悲鳴を上げ、呼応するように喚き散らす警報の嵐。それは本能に近い、獣じみた直

感だった。

逃げろ――喰い殺されるぞ。

無意識の内に足が動く。先ほどの跳躍同様の、いやそれ以上の速度を発揮し、一気に離脱を図る。だけど――

「ばあ」

「ッ！？」

その作戦は背後にいた少女によって阻止された。冗談じゃない。今の僕はＩＳを装備して加速したはずだ。例え障害物があろうとも、並大抵のものなら破壊して突き進んでいたはずなのに。

それなのになぜ？

「ねぇ、何で逃げようとするのかな？」

なぜ、こんな少女一人を突破できないんだ。展開したＩＳの腕部で軽く胸を押さえられているだけなのに――、

「く、そ……」

重い。その掴めば折れてしまいそうな細腕に纏う装甲は信じられないほどの重圧だった。なまじＩＳ一機では発揮できない出力。

「ねぇ、ベイ。ヴァルキュリアは相変わらず面白いわね。私の『スコルスピア』に抗おうとしてるわよ」

「へぇ」

先程の白墨の女がにやにやしながら僕を見ている。逃げられるわけがないだろとでも思っているのか、嘲りに満ちた笑みをこちらに向けている。

絶望的なまでの人外感。笑いたくなるほどの魂の苦悩の固形。この女も同類だ。災厄をその身に宿し、その罪科を受け入れることで世界の枠組みの外へと弾き出された戦火の魔神。

「ヴァルキュリア……、戦乙女の名を冠しながら戦いの海から逃げたバカな男だ。なんだっけ、マレウス、こいつを確かめてみてもいいんだったか？」

「そうね。猊下も了承してるし、それにこの国の諺にもあるじゃない？　鉄は熱いうちにナントカって」

「……ッ」

声を聞くだけで脳が揺すられ、どうしようもない吐き気が意識を流しだそうとする。こいつらから流出する言葉の裏に見え隠れする甘く濁ったような悪臭と死臭の奔流。

耐えられない。このままじゃ、意識が潰される。

「おまえ、ら……」

吐き気を飲み下し、口を動かす。どうにかして突破口を開かなくては……。

「なんなんだ……？　僕にいったい、何の用がある？」

「うん？　やっぱりすごいね、喋れるんだ？　普通の人間なら卒倒するくらいのことはしてるんだけど。自我が保てるだけじゃなくて、口も利けるなんて、うぅん、堪らないわ、ぞくぞくしちゃうよ」

身悶えするかのように言いつつ、胸元に触れた指が首を登り、顎に触れ、頬に指を這わせながら女は尋ねる。

「あなた、本当にあのヴァルキュリア？　雰囲気似てるし、匂いだってそっくりだけど、なんだかおかしいのよね。『六番（ゼクス）』の星痕核（ゾディアック・コア）の星素群配列（ネビュラルート）も何だか変な軌道を描いてるし、誰が『獅子（レーヴェ）』なのかがわかんなくなっちゃったのよ」

「もしそうなら、野郎の星痕核だけが別の適合者を見付けたってことなのか？」

何を、こいつらは一体何の話をしているんだ？　まるで意味が解らないし、それにそもそも――、

「知らない、僕は……」

ヴァルキュリアとか星痕核（ゾディアック・コア）とか、星素群配列（ネビュラルート）とか全く記憶にない。これは現実逃避とも、他の誰かへの責任転嫁とも言えるかもしれないけど――。

「僕は、そんなもの、『覚えて』いない……！」

『僕（カイト）』の記憶にないんだ。だから、ヴァルキュリアだろうがなんだろうが、僕には知る手段がない。僕が精一杯の力でそう答えたら……、

「はっ、ははは、ハハハハハハハハハハハハ！」

「あはっ、あはは、アハハハハハハハハハハハ！」

躁狂的に喜悦の色を浮かべ、栓の壊れた蛇口のように、二人は笑いを迸らせた。純粋な悪意の血漿、それが狂喜と色を替え、嘲笑となって月夜を蹂躙する。

聞いているだけで背筋が凍てつき、吐きそうになる。こんな声は、絶対に人間が上げられる笑い声じゃない。

「くく、ははは、そうかそうか、覚えてないか。そうだよなぁ、ああ、そうだろうとも。笑わせてくれるじゃねぇか」

肩を震わせて笑いながら、白蝋の女が僕の前に立った。その目は笑っておらず、身が裂かれるような憎悪の刃が覗いていた。

「面倒くせぇな、体に訊くかよ」

「――ッ」

咄嗟の判断として間違ってはいないと信じたい。先生を雑草林に投げ飛ばした瞬間だった。

ズガンッ！

「――ご、はぁッ」

無造作に腹に蹴を入れられ、きりもみ回転しながら飛ばされた。

なんだ、今のは……？　まるで力を入れていない、まるで塵でも払うかのような適当な一撃で、胃液が逆流しかけている。確実に骨に罅が入っただろう。

上体を起こそうとした瞬間に、左肩を踏み付けられ、地面に押しつけられる。

「ぎぃッ――がぁ――」

「それでもう一度訊くんだけどよぉ」

ギシギシと悲鳴を上げて、関節が壊されていく。こんなのＩＳの出力でも……！

「おまえ、本当にヴァルキュリアか？　どうして、あのクソ野郎と星素群配列（ネビュラルート）が違う？」

「……づぁ、ッが……」

痛みで視界が明滅する。もはや声すら上げられない。それでも女の声音は限りなく軽薄で、左肩を押さえ付ける圧力は次第に高まっていく。

「おいおい、サクサクいこうや。実際、謎掛けは得意じゃねぇんだ。

オレが相手してるうちに吐かねぇと、おまえあっちのロリババアにマジなの食らわされっぞ」

「ちょっとロリババアって誰のことよ。いーわよ、そこまで言うなら手伝ってあげないんだから。あなたもたまには私の苦労を味わうといいわよ。最悪、脳だけ残ってれば情報を引き出せるから」

「だ、そうだぜ？」

ゴギンッ！

「ーーッアアアア！」

肩が砕けた、いや、脱臼したのか？　左腕がまったく機能しなくなる。

「ちく、しょう……！」

なんとか逃れようと残っていた右腕で女の足首を掴んだ。が、いくら力を込めようとも、その足は鉄塊のように重く、冷たく、まるでびくともしない。

「おい、触んじゃねぇよ、猿臭ぇのが移るだろうが」

「ッ！？」

そんなバカな。女は片足の力だけで、僕を宙に吊り上げ、そのまま廻し蹴りの要領で投げ飛ばした。ＩＳを展開したのはいいものの、僕は木に背中を打ち付ける。

「が、はァ――！」

洒落にならない痛みが全身を駆け巡る。このままじゃ、冗談抜きで殺される……！

「なぁ、あんまりシラケる反応すんなや。役者気取りなら大したもんだが、オレぁ、気の長い性分でもないんでな。もったいぶられるとマジでどうでもよくなる」

真横の木を蹴り倒し、女が僕を見下す。数秒、そのまま睨み合いが続き、ようやく口を開く。

「これが最後だ。テメエ、ヴァルキュリアか？」

「……」

いくら問われようとも解らないものは解らないし、答えられない。

死ぬのか、ここで？　こんな暴力じみた展開に巻き込まれて、記憶を取り戻す前に殺されるのか？

そんなのは嫌だ。そんな展開（オペラ）を認められるか。

話が通じない相手には、説明や弁解なんて意味を成さないし、同時に容易に逃げられる相手でもない。

なら、僕はどうすればいい？　理不尽で不条理なこの現状を打開するにはどうすればいい？

「残念だな、タイムオーバーだ」

心底つまらなそうな声と共に、大上段から振り下ろされる鉄槌のような一撃。訊くに値しないと雄弁に語りつつ、その一撃は僕の心臓へと落ちてくる。

殺意が、死が、当たれば確実に絶命すると本能で理解した。もはや選択の余地はない。

ヴァルキュリアが誰かなんて今更知りたくないし、興味だってない。ただ、痛いくらいに思うことはただ一つで。

――死にたくない。

手前勝手で、意地汚くて、浅ましい生への執着。だけど、それは何より強く、僕のなかの何かが爆発した。

殺されてたまるか、壊されてたまるか、動け、避けろ、足掻いてみせろ。

死にたくなければ、真実を知りたかったらやることは一つだけだろう。

そもそも僕は、まだまだ、完成していないんだから――。

『やるんだね、かーくん。だったら私がヒントをあげるよ。『巨蟹』は力だけならかーくんより上。今の君じゃ、どう足掻いても勝てな

いよ？』

ズガンッ！

「ほぉ」

素手で木を殴り倒し、地面すらも砕いた腕を戻して、女は笑った。
僕は転がるようにして距離をとり、体勢を立て直す。頭がぐらつき、今にも倒れそうだ。耳元で爆発が起きたような衝撃に三半規管が揺さ振られ、平衡感覚が狂っている。体を支えられるのはＩＳのＰＩＣのお陰だ。

『だからどうするの、かーくん。ここであのカニ女を相手に、『獅子（レオ）』の力を引き出してみせるのかな？　のるかそるか？　ふふふっ、私にかーくんの本気を見せてほしいな』

「……躱せた」

今のも、そしてさっきのも威力だけならかなりのものだけど、決して躱せない速度じゃない。恐怖に竦みさえしなければなんとでもなる。

「ふん、ちったぁオレ好みの展開になってきやがったか」

嬉しそうに唇を歪め、こちらに向き直る軍服を来た白髪の女。ここで背を向けて逃げ出したらその瞬間に殺される。なら、今できる最良の一手は奴を撃退すること、できなければ最悪隙を生み出すこと。

怪我はあるけど、こんなのがなんだ。戦えない負傷じゃない。

――戦うしかない。そして、突破口を開くしか――。

『うふふ、そうこなくっちゃね。じゃあまずはかーくんが思うようにやってみてよ。今の自分の力を知るのも、今のかーくんには必要だからね』

「なぁ、マレウス、こいつ潰すぞ。文句はねぇよな？」

「駄目って言っても聞かないでしょ？　どーぞどーぞ、昔からそんなんだし今更止めはしないわよ。ただ、忘れないでよね、さっき言ったこと」

「脳ミソは残せ、か？　まあ、善処してやらぁ」

薄笑いつつ、女が僕に近付いてくる。相手のポテンシャルが解らない以上迂闊に仕掛けるのは禁物――。

「ああ、ちょっと待って。どうせやるならあなたの本気を引き摺りだしてあげるわ。たとえばそうね……」

少女が僕の思考にとんでもない言葉をささやいた。

「あなた、あっちの旅館に泊まっているのよね？」

「――」

……何を言ってるんだ？

「んだよ？　そうだっけか？」

「そうよ、だったら手っ取り早いじゃない」

待て。おまえらは何を話しているんだ？

「逃げるとか誤魔化そうとか、そんなつまらない気が起きないようにしてあげるから、もっと死に物狂いで頑張ろうよ。あなたみたいな人って自分のことはどうでもよさそうだし、こうすればやる気が出るんじゃないのかな？」

「あぁ、いいじゃねぇか」

やめろ、その気持ち悪い笑顔を僕に見せるな。そんな何を考えているのか馬鹿でも解るような、吐き気のする笑みで下らない事を言おうとするな。

誰かから聞いたような物言いに違和感を覚えたのは一瞬で、すぐにそんなことはどうでもよくなる。ただ刹那に恐怖と焦燥に息が止まりそうになる。

あの場所には一夏がいて、篠ノ之さんがいて、セシリアさんがいて、鈴がいて、シャルロットがいて、ラウラがいて、うるむちゃんがいて、千冬姉さんがいて――。守りたい、大切な人たちがそこにいるんだ。僕が見付けた止まり木なんだ。

なのにそれを――。おまえらみたいな頭の螺旋のトンだ奴らが足を

踏み入れていい場所じゃないんだよ。

「もし逃げたら――」

へらへらと笑うあのチビの声が、耳障りだ。その口を縫い付けてでも止めなければ。その先を言わせてはいけない！

「あなたのお友達、みんな殺しちゃうから」

「ッ！」

瞬間、レイヴァー・デイが僕の体に装着され、思考するよりも早く地面を蹴っていた。ＰＩＣを頼りに機械じみた突進を少女に繰り出す。

怖い。怖くて堪らない。こいつらが旅館で暴れる姿が簡単に想像できたから――。

だから加速した。思考するのも捨てて。ホワイトアウトした思考に駆られて、ただ機械的に突貫した。

それを――

「まあ待てや。どうしたおい、急に勇ましくなりやがって。つっても、女相手にキレる男ってのは、度量が知れるぜ？」

渾身の特攻は、いとも簡単に止められた。腕を捕まれ、それ以上一歩も進めない。いや、それどころかこいつの腕にほんの少しでも力が入れば装甲ごと腕をへし折られかねない。

だけど、負けるわけにはいかない。背筋を走る悪寒の質はさっきとは異なるものだ。そうだ、これは怒りだ。そして、ここでこいつらを放置したら、さっきの悪夢が現実の物になるという恐怖心。

「ふん、逃げ打とうって気がなくなったんなら、追加でオレからも発破くれてやらぁ。もう質疑応答は終わりだ。『獅子（レーヴェ）』の力見せてみろや」

力、だって？

「心配すんなや、手加減してやる。ＩＳは右腕しか展開しねぇし、武器は出さねぇ。だからおまえは単一仕様（ワンオフ・アビリティ）でも第二形態移行（セカンド・シフト）でもすりゃあいいさ。おまえがヴァルキュリアだろうがなんだろうが、要は遊べるかだしよぉ」

息は荒く、声に興奮が滲んでいる。

「暇してたんだぜ、長いこと。待つってのは辛ぇよなぁ。もうシケた戦（まつり）じゃ満足できねぇ。だからよぉ、これは最後のチャンスだ。オレにここまで譲歩させておいて、萎えるオチつけやがったらおまえ――」

ぐいっと僕を引き寄せて、なんでもないことのようにこいつは言った。

「ＩＳ（あそこ）学園、地図から消しちまうぞ」

「――――」

目眩がした。思考が乱反射して、なぜこんな目に遭っているのか、

なぜこんな奴らがここにいるのか、僕には何一つ理解できない。だけど、一つだけ。

こいつは本気だ。ここで選択を間違えば、本気で学園を潰しにいくだろう。僕の見付けた大切な日常を、どうしようもなく間違いなく情け容赦なく防ぎようもなく良心の呵責もなく嬉々として笑いながらすべてを壊して殺して根こそぎ粉砕して破砕すると。

なら、戦わなくちゃ、いけないだろう。

「……ああ、そうか」

「あん？」

守りたいから、涜されたくないから。ここで戦わなくちゃいけないんだ。だからもう、迷うことなんてない。

振りぬいた左足を女に叩き込み、その反動で飛び退いた。無理矢理引き剥がした対価として、レイヴァー・デイの右腕、左足の装甲が砕け、内部装甲が露見している。エネルギーに反転されるようなダメージはないけど、楽観視できる状況じゃない。加えて、

「ぐぅ……」

足を襲う痛みも酷い。今の一撃で足の骨に深刻なダメージを負っていた。鋼鉄でも蹴り付けたみたいだった。しかし、

「なんだ、今のは？　やる気あんのか、テメエ」

そいつは吹き飛ぶどころかＩＳを纏った右腕で防ぎ、その場から一歩も動いていたない。尋常じゃない力の塊は只のレイヴァー・デイの攻撃じゃびくともしないのか。

だけど、諦められるか。こいつを野放しにしておいたら、もっと深刻な被害が出る。セシリアさんたちをこんなキチガイ連中に関わらせるわけにはいかないんだ。

「ベイ、わかってると思うけど」

「ああ。すっこんでろ、マレウス。ご指名はオレだぜ」

苦笑気味に、くだらない雑魚にじゃれつかれた程度のことだと言わんばかりに女は連れを下がらせた。足が悲鳴を上げるほどの一撃すら、致命傷にすらなっていない。

もう疑う余地はない。こいつは怪物だ。僕の戦力なんか足元にも及ばず、戦いとして成立させることすら難しいだろう。

だけど、それがなんだ？

ゴキンッ！

「ぎぃッ！」

外れた左肩を嵌め直し、腑抜けた根性を入れなおす。ここで死ぬくらいなら、僕の存在なんてそんなもんだったってことだろうが。僕はそれでいいかもしれないが、最悪、皆に被害が及ぶことだけはなんとしてでも避けなければならない。

だからッ！

「準備は済んだか？」

ゴキゴキとＩＳのマニュピレータを鳴らし、白貌の魔神が僕を見てくる。目眩すら覚える眼光に、それでも圧倒されている場合じゃない。

「黄道十三星座騎士団第四位、『巨蟹』＝ヘルガ・アーレントだ。名乗れよガキ、戦の作法も忘れたのか？」

「生憎と……『覚えてない』ね。知りたかったら、力ずくで吐かせてみなよ白髪女！」

「一一面白れぇ！」

星を穿つ野獣の咆哮が空を切り裂き、迫ってきた。

第三十話　～襲撃～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

蟹座を司る星痕の騎士、襲来。この圧倒的な敵を前にカイトは逆転できるのか？

次回は高濃度な厨二成分をたっぷりと詰め込んだバトルオペラをお送りしますので、しばしお待ちくださいませ。

それでは、またの機会に。

第三十一話　～星穿の獣～（前書き）

第三十一話です。

蟹座の騎士との一騎打ち。果たしてカイトはこの強敵にどう立ち向かうのか？　彼の真価が試される……！

さあ、本物の暴力とは何かを教えてやろう。

それでは、第三十一話『星穿の獣』、星座踊るバトルオペラの開幕です。

第三十一話　～星穿の獣～

「いくぜェ、オラァッ！」

狂相の笑貌、その釣り上がった口元から放たれた凶獣の咆哮と共に穿たれる右の掌底。いや、これはもはや鉤爪だ。

全身のスラスターを噴かして体を捻り、その攻撃を回避する。胴体が急激なマニューバの発動にねじ切れそうになる。

「ぐぅ――！」

爆発音じみた轟音に遅れて、旋風がレイヴァー・デイの装甲を削る。ほんの僅か擦っただけで、胸元の装甲が引き剥がされていた。――のみならず、背後の樹木が握り潰されてへし折られた。

どう見ても、もはや人間の為せる領域ではない。こんなものをまともに食らえば、その一撃だけで絶対防御すらも貫いて僕の命を刈り取るだろう。

「ははははっ！」

女が笑う。その気になれば追撃して、僕を肉塊に変えることも可能だったに違いない。しかし、こいつはあえてそれをせずに後退して、距離を取ってこちらの様子を愉しそうに眺めている。

僕を舐めているのか、遊びのつもりなのか、いずれにせよ好都合だ。本気になられる前に突破口を掴まなければ……。

「へぇ、こりゃあ驚きだ。さっきに続けて二度連続か。腑抜けに躱されるほど手ェ抜いたつもりはねぇんだけどな。オレが日和ったのかそれともてめえがやるのか……」

なにかを確かめるように僕の全身をまんべんなく眺め回す。剥げた装甲を透過して、僕そのものをその目は見ていた。

「見たところ鍛えてるってガラじゃなさそうだが……くくっ、なるほど、いやいやマジであのクソ野郎と似てやがる」

言いつつ、ゆらりと、ヘルガと名乗った女は奇妙に弛緩した姿勢を取る。こいつの動きは格闘技とか武道のような上品な形式に則ったものではない。これは――、

「おい、次はもう少し速く行くがよ。てめえ、簡単に潰れんじゃねえぞ――！」

都合三発目の穿孔が伸びる。こいつの業は無秩序に速く、無限に重い。練習も修業の跡もない、奴の全ては数多の戦闘によって研磨され、贅肉が削ぎ落とされた技術体系そのものを力任せに叩きつける暴威の塊。工夫など逃げだ、技の本質は力だと言わんばかりの傲慢さ。

こういった奴と戦うのは『初めてじゃない』。そして、その対策を僕は『覚えている』。

（躱せ、死ぬ気で躱せッ！）

ＩＳごと心臓を抉り取らんと繰り出された一撃を、背面のウィングスラスターを点火し、奴の懐へと潜り込んだ。即座に《ガルベスト

ーン》を呼び出して、軍服に銃口を向けた。

「この距離ならッ！」

バシューンッ！

トリガーが引かれ、灼熱の紫閃が迸る。武器の展開から発射まで、流れるように決まったカウンター。タイミングまで完璧なこれをもう一度やれと言われても不可能だ。

文字どおり全身全霊を込めた逆転の一手。しかし――

「で？」

「！？」

体軸をずらし、マグナムの一撃をほぼ零距離で回避した。本来ならその腹部に穴を開けるだけの火力、そしてクロスレンジからでは避けることすらままならないスピードの一撃。起死回生の攻撃をこいつはことともなさげに躱したのだ。

そんな馬鹿な……これはどうして！？

「取らせてやったのにこの程度かよ。こりゃあ見込み違いだったか？」

「ならっ！」

高速切替（ラピッド・スイッチ）で打鉄用近接ブレードに武装を切り替え、逆袈裟に切り掛かる。銃撃を避けるなら、マルチに攻撃できる剣戟だ。

そして狙うは人体の急所。いくら、身体能力が人離れしているからといっても急所さえ狙えれば力の差なんて関係ない。

だが――

バキィッ！

怖気が奔るような音と共に潰れたのは突き立てた刃の方だった。ふざけてる、冗談じゃない、有り得ない。いくら装甲を展開している右腕でブレードをガードしたとしても、装甲を破れず、ましてや鉄刀がへし折れるなんて。

いったい、こいつはなんなんだ――？

「どうした、おい？　それで終わりか？　男の根性ってのを見せてみろよ、なぁ！」

ゴウッ！

「ガッ、グァ――ッ！」

顔面を刈り取るようなアッパーを、咄嗟に交差した腕で防ぐ。――が、あまりの威力を殺せずに吹き飛ばされた。脳をぐちゃぐちゃにする衝撃に、嘔吐感が込み上げる。

「ご、ぁ……げぇ……！」

痛い。痛いイタイいたい――畜生ッ！　今の一撃でシールドエネルギーがごっそり持っていかれ、ガードに使った両腕のアーマーが削

り落とされている。胃からせり上がってくるものを飲み下しながら悶絶し、体の被害を確認する。

腕はダメージから震えが止まらず、レイヴァー・デイのシールドも半分を切っている。明日はＩＳのデータ採取があるのに、好き勝手ブッ壊してくれるよ。

でも、これくらいの痛みなら、僕の決意を折るには……。

「……まだ、まだ」

立てる、やれる、恐くない。そんなもがく僕の様子を見下ろし、薄ら笑うヘルガはやはり何のダメージも受けていなかった。その背から立ち上る陽炎の如き鬼気。捕食対象を観る人喰者（マンイーター）の眼光。

そんな目なんか恐くない。畏れない。冷たい輝きを迎え撃つ光をレイヴァー・デイ、君なら見せてくれるはずだ。

だから、力を貸してくれ。こんな不条理を抜け出して、もう一度『俺』の居場所（にちじょう）に戻るための力を――！

「『Ｄｉｅ－Ｗａｌｋｕｒｅ』ェェェェェッ！！！！」

平常を求める慟哭が天上に雷鳴のように轟く。。黒い装甲板を押し上げ、露見している内部装甲共々発光し、黄金の燐光が鬼神の眼光を弾くように溢れて月夜を照らす。

『変身』したレイヴァー・デイを目の当たりにしてもヘルガはさして驚きもせず、唇の歪みが一段と深くなった。

（……来るっ！）

意識した瞬間に繰り出される攻撃。先に宣言した通り片手しか使っていないにも拘らす、Ｉ（イオタ）を発動したＩＳに追い付いてくるほどに、鋭く、早い。

「――ぐぅッ！」

さらにはその一つ一つが即死の威力を誇っている。防御は不可能――擦っただけでも装甲を吹き飛ばされ、血が飛沫く致命の暴風。

躱しているだけじゃ勝てないが、まず、いつまでも躱し続けられるものじゃない。

力学をまるで無視した片手だけの多角攻撃。ＩＳの補助動力も絡めた埒外の怪力がそれを為している。しかも、その一撃は加速を続けている。それはまるで、一撃躱す毎にこちらの限界を確かめるようで。

「どした、どしたァ！　てめえの中身はんなもんかよ、アァ！？」

故に直感、本能だ。戦場において発揮される生存本能のみに縋り、俺は機関銃じみたヘルガの攻撃を捌いていく。

だが、それもジリ貧。すぐにその差は詰められる。

「ハッ！」

鼻で笑い飛ばした刹那、やおらヘルガの右腕が有り得ない伸びを見せた。これまで規則的に加速していた攻撃が、ここに来て一気に数

倍に――！

「ガぁッ！」

反射的に展開した《ディーン？》がその威力を押さえて、吹き飛ばすに留めてくれた。刃には大きくひびが入ったものの、あの速度の攻撃を防ぐことが出来たのは運以外の何ものでもないし、上出来だ。いくら神様に嫌われてはいても、どうやらまだツキには見放されていないらしい。

「……このぉッ！」

バシューン！　バシューン！

吹き飛びながらも、攻撃のチャンスと見込み、左手に呼び出した《ガルベストーン》を二射する。二つの熱線がヘルガに飛び掛かっていく。

「かはっ」

しかし、耳に届いたのは小馬鹿にしたような嘲笑。迫り来る一撃を再び避け、さらにはもう一撃のマグナム弾をあろうことか、殴り落とす。

信じられない、いったいどんなことをしたらそんなことが出来る？　ＩＳを身に纏っているとはいえ、燃え盛る砲弾を弾くなんて――！

「遅ェッ！」

地面を蹴り跳ばし、一気に肉薄した奴の横殴りの一撃が放たれる。

ガルベストーンを楯に見立てて攻撃を受けとめようとするも、マグナムは加速度の乗った鉤爪によって銃身がぐしゃりとひしゃげ、殺し損じた強大な威力が腹部で爆発する。ＰＩＣすら無力と化す破壊力にボロクズのように吹き飛ばされた。

「ぐ……ボォ、あ……」

幾つもの木を薙ぎ倒し、その根元に転げた俺の口から飛び散る、赤黒いどろりとした塊。血反吐を撒き散らし、脳が擦り切れるような激痛に身悶えする。

今ので武器を破壊され、アバラに内臓までイカレた。それでもまだ諦めるには程遠い……！

「……ッ」

俺は傍の樹木に寄り掛かりながらも立ち上がる。アバラがへし折られた状態の運動は、気絶しかねない痛みを伴っていた。こんな状態で動き続けていれば、いつか肺に穴が開きかねない。だが、それ以上に今一番の問題なのは……。

「まだやれるよなぁ、ヴァルキュリア？　こんなんじゃ、てめえ、そそらねぇよ」

にやついたまま、俺が立ち上がるのを待っているヘルガ。そう、こいつを攻略する手段が見当たらない。

その早さと力が人間の動体視力と反射神経の限界を超越し始めているように思え、おそらくまだまだ拳速は上がるだろう。躱せるのは、よくて一、二回だ。

加えて、こちらの攻撃の一切が見切られ、効果を為していない。今のままじゃどうにもできないと文字通り痛感した。

だったら……。覚悟を決めろ。

キィィィィン……

高周波と共に呼び出されるバズーカ《ウィルマ》二丁。助長した砲身がヘルガを睥睨する。

「へぇ……」

こちらの意図を察したのか、ヘルガの殺意がより濃密になってくる。そうだ、こいつは俺を殺すつもりなのだから、殺し返す覚悟なしに戦えるはずがない。

ぐぉん！

喰らえば首から上が吹き飛びかねない攻撃を、樹木を盾にしてやり過ごした。

結果、俺の胴体はあろう木が真っ二つとなり木っ端に砕け散る。恐ろしい破壊力だが、ここではむしろ好都合ーー！

ドンッ、ドォンッ！

宙を舞う木片の影に紛れ、瞬時にウィルマのトリガーを引く。排煙機からもうもうと熱波が漏れ、弾倉（マガジン）が一対の銃身を滑る。

刹那、爆ぜる弾頭から飛び散る深緑の鉄球の雨。砕けた木の欠片に紛れ、無数のベアリング弾が互いを弾き、跳弾し、予測不能の軌跡を描く。数多のそれは明確な殺意を持ってヘルガの全身へ降り掛かる。

殺人者なんかになりたくはないけど、そうしなければ俺が死ぬ。他に選択の余地なんかないし、当然手加減なんてしていない。奇跡的にも殺意の矛先は全て奴に向っていた。

それなのに――。

「くはっ」

嘲り笑い、何を思ったのかヘルガは弾雨の中に自ら身をねじ込んだ。信じられない、乱射とも言い換えられる鉛玉の殺到を意にも返さずにこいつは何をしているんだ？

――全部、避けている。

予測の範疇を越えた、変則的な軌道を描くウィルマの弾丸を意にも反さず、その中を突っ切ってくる。本当にどういう体をしているんだ？　こんな動きをしたら筋肉が切れてもおかしくない――。

「――――ッ！」

考えるな、躱せ、避けろ、足を動かせ、一ヶ所に留まり続ければアイツの鉤爪に引き裂かれるぞ――！

「づぁ、おぉぉ……っ！」

バズーカを投げ捨て、身を翻す。重傷を負った状態からの無茶な回避マニューバは、そのままダメージとなって俺の体に跳ね返ってきた。特に足だ、今のでアキレス腱が切れたかもしれない。

頭上でウィルマがヘルガの狂爪によって凪ぎ払われ、微塵と砕け、破片がばらまかれた。

……ちくしょう。嘘だろ。ここまでやっても駄目なのか？

どんな種があるのか知らないが、こいつの強さは出鱈目だ。隙も弱点になるような欠点すらも、存在しないように思えてくる。

なら、いったい……どうすればいい？　どうすれば、こいつに勝つ？

「……ふん、しかし解せねぇな。てめえ、本当にそんなもんかよ？」

「……」

ヘルガの白い顔が訝しむように歪む。しかし、その表皮の下では仄暗い、隠微な感情が見え隠れしている。

それは、呆れのようで別のベクトルに向いた感情――。

「そこらのＩＳ乗りに毛が生えた程度でどうにかなると思うほど間抜けじゃあるめえ。キレたもん勝ちが罷り通る御都合主義（デウス・エクス・マキナ）はよ、『双魚（フィッシェ）』みたいな反則馬鹿以外にゃ起こせねぇんだよ。お前には、そんな資質はねぇよ」

御都合主義が起こせないなんて、当たり前だ。そんな生きるのに不必要な資質なんてこっちから願い下げだ。

「それとも、くくく……カミカゼ主義ってやつか？　相変わらず島国の蛮人はワケ分かんねぇなぁ。気合いで勝てりゃあ、一生戦争続いてんだろうが」

そんなことは言わなくても嫌になるほど分かっている。今必要なのは、物理的な手段としての攻撃法。隙を衝こうが、策を張り巡らせようが、マトモな手段でダメージを与えることは不可能だと痛感した。

常識の枠の外にいる。そんなやつに枠に入った攻撃では倒せないのだ。張り合う世界が違う。

ましてこいつは、手を抜いているようでも冷静にこちらの戦力を測っている。対抗策を見つけても、即座に対応されるのが関の山だ。

（だけど……）

だけど、このまま負けるなんて……。

「気に食わねぇな。お前、絶望が足りてねぇよ。死ぬ奴の目をしてねぇ。これから死ぬって実感してねぇのか、いいや違うな、そうじゃねぇ」

ぶつぶつと、誰に言うわけでもなく独りごちるヘルガ。その視線には、無数の氷槍が籠もっている。

「覚えがあるぜ、そういう目にはなぁ……まるであのクソッタレと同じじゃねぇかよ。その、ムカつく面はよぉ……！」

「ーーぁ」

突然、それはやってきた。体温を根こそぎ奪われるような感覚。嘔吐感、酩酊感に掻痒感がない交ぜとなった怖気。呼吸が出来ず、瞬きも出来ず、指の一本すら動かせない。

消える――。力が、命が、傷口から流れる血が、奴に略奪されているかのように。

「おまえ、まさかな、もしかして……」

『自分がここで、壊されるべき運命じゃないという呪咀を刻んでいるのか――？』

「くはっ、くくく、くは、かははは……」

そうして一転、何が面白いのかヘルガは体を折って笑いだす。押さえるように、堪えるように、ぶるぶると肩を震わせていたのも一瞬で、もう我慢できないとばかりに天を仰いで――爆発する哄笑。

「あは、あははは、アハハハ

かる。震えが止まらない、歯が鳴り止まない。とめどない感情の濁流に意識が軒並み流し尽くされてしまいそうになる。

「――面白ェ！」

見開かれた両目は、サングラスの下から迸る赤い閃光。物理衝撃すら伴う殺気が、レイヴァー・デイの黄昏の光を喰らい尽くす。

この時、曲がりなりにも意識を保てたのは覚悟を決めていたからだろう。もし、精神的に無防備だったなら、今の一瞬でＩＳもろとも塵芥と成り果てていただろう。

「面白ェ、面白ェ面白ェ面白ェ面白過ぎるだろ、このゴミクズ劣等野郎ッ！　テメエ、今の自分がなんなのかを知らねぇくせして笑わせてくれるじゃねぇかよ、身の程知らずのカスがよォッ！」

怒り。いや、怒りと評するのも生々しい。憎悪で固形となった刃が胸に突き刺さる。その感情の波は火山の爆発のようで、熱く、どろどろと俺の意識を侵食する。

「いいなぁ、いいぜおまえ。そそるぜ喰いてェ堪んねェ！　引き裂いて串刺してブッ千切って、吊して晒してテメエの『因子（ソイル）』を全部吸ってやらぁ！」

狂喜――この女の表皮の裏に隠れていたのはこの感情だ。何か分からないことに喜び、激昂し、この叫びとなって顕れていた。

「侮辱じゃねぇか、ああ冗談じゃねぇ許せねぇ！　オレが高々猿一匹殺れねぇなんて、相変わらず舐めた真似してくれんじゃねぇかよ！！　なぁ、ヴァルキュリアよぉ！！！」

押し寄せる殺意の波が、蒸発する血液が、俺の視界を真っ赤に、真に赤く染め上げる。

「上等だ、だったら、試してやらぁ。ここでテメエを殺せれば、オレがヴァルキュリアより上ってことだよなぁ！？　そうじゃねぇのかよ、なぁ、ガキがァァァッ！」

タガが外れた本気の怪物が牙を剥いた。その威圧は最早人と形容するには不適合だ。この瞬間に、こいつは正真正銘、この世界から弾き飛ばされたのだ。

その桁違いの威圧に、俺は今、心臓すら動いているのかも疑わしい。

――死ぬ。

「ッゥオォラアアアアアアッ！！！！！」

迫り来る致死の狂腕。それがやけにゆっくりに見えるが、食らえば絶対防御すらも粉砕し、レイヴァー・デイすらも破砕され、一撃の元に即死だろう。

なんだよこれ？　俺はこんなところでこいつに殺されるモノとして、ただ死ぬのみなんだろうか？

本当に？

俺はここで？

死ぬ、のか？

●

かーくんは、この世界に明確な一本の線があると思うかな？

その線は境界線。かーくんの知っている秩序のある世界と、かーくんが覚えていない無秩序で暴力的な世界との、絶対的な境界。

例えば、正義と悪。

敵と味方。

有と無。

知識のある人ない人。

そして、生と死。

生きたいから生きる姿を想像して、未来を予測して、今、かーくんが何をすべきなのかを実現させていく。

要はね、『想像力と創造力』なんだよ。あらゆる感動も幸福も脅威もない、まるで楽園みたいなかーくんだけの世界。そこでは何も壊れないし、奪われないし、かーくんだけが味わいたいワガママを創り出せる。

その世界は、ふふっ、現実なのかな？　それとも夢？　まあ、どっちにしても時間って概念の破壊だよね。それは水車のようにくるくる水の流れで何回も何回も、未来にも過去にも進まない、かーくんだけの綺麗な世界。

そうだよね、かーくんはこんな汚れた世界はイラナイよね？　不条理も理不尽もいらない、ただ甘くて優しい世界がかーくんの欲しい真実だって私は知ってるからね。

さあ、かーくん。君の想像力（りそう）を創造力（げんじつ）にするために用意した、三つ目のプレゼントを受け取って。かーくんはこんなところで負けちゃ駄目なの、私のかーくんは絶対に負けないんだから。だから、かーくんはかーくんでいられるんだよ？

レイヴァー・デイ。

災厄の風、祝福の疾風、悪魔の吐息、真実の嵐。この子を憎んで、この子を愛して。この子を護って、この子を壊して。この子は私の世界の創造物。想像力の外で生み出されたＩＳ。でも、ＩＳであってＩＳじゃない。ＩＳなんて概念には一番当てはまらない機体。

デーカン、コード、ルーラー、サイン。お星様の輝きを編み込んだ

不滅の流星。

――それが、星痕核（ゾディアック・コア）。

想像（りそう）を創造（げんじつ）に映し出す鏡。かーくんのために私が創り出した、十三の特別なコア。でも、それを本当に使いこなせるのはかーくん唯一人だよ。私がかーくんに『獅子（レオ）』の星痕核（ゾディアック・コア）をプレゼントしたのが、その証明だよ。

そうだね、例えば――。

あの白髪女を見てよ。自分の立場が分かってないのに、かーくんを殺そうとしているこの女もまた、星痕核に適合した一人。馬鹿みたいに戦って、経験したことを生かして自分を強くしている星穿ぎの獣。

でもね、それはかーくんが勝てないってことじゃないんだよ？　星痕核は戦えば戦うほどに強くなるけど、戦うだけがすべてなんて脳キンなんてノーサンキューだよね。

いい、かーくん。私がかーくんにプレゼントしたのは、私の至高にして最高の創造物（クリエィション）。この子と一緒にいるかーくんが、『巨蟹（キャンサー）』みたいな弱いコアを凌駕できないわけがないんだよ？

うふふ、一つ予言をしてあげるよ。

かーくんが『完成』した時には、神様にも悪魔にもなれるって。私はその日が待ち遠しいよ。

だから、かーくん。

君の想像力（ちから）、見せてよ。

Der Transplantationsanfang vom Faktor.
Ich bestatige Gleichformigkeit.
Ich leistre Gleichformigkeit Niveau 150.
Constellation－Soil，Aktivierung.
……
……
…
Ein『Claudio－Auge』，beim Wecken.

●

ドガァァァァンッ！

人外の速度で間合いに踏み込み、繰り出したヘルガの拳。巨木を薙ぎ、地面を抉ったその鉤爪。だが、弾け飛んだ数多の欠片のなかにカイトの肉片はない。それどころか、彼の愛機たる漆黒の機体の影すら見えない。

なぜ？　あの速度の攻撃が回避できるワケがない。ましてや彼はかなりの負傷をしている。どんな回避機動を取ろうとも、金色の残光なしに一瞬にして姿が掻き消えるなど――。

「そこかぁぁーーッ！」

地面を抉り取りながら、振り上げたヘルガの拳は確かにレイヴァー・デイに触れた。だが、それはほぼ空を切ったのと同義だった。当た

っていた気がしない。蒼白の月をバックに飛翔していた漆黒の影が自然のオペラホールに降り立った。

纏う闘気は海のように穏やかだが、その水面下では灼熱の火炎の大華が開いていた。静と動、相反する波動を従えるカイトの姿はまるで別人だ。

それを証明するようにバイザーから覗く瞳はあまりにも冷徹で、感情の欠片もない。いや、そもそもその眼が一一。

「ふふ、ははは、アハハハハハハハハーー！！！」

同時に、三界を揺るがす哄笑が響き渡る。白貌の破壊者が身を捩り、可笑しくて堪らないといった風に笑い転げた。

なるほど、そうか、どいつもこいつも分からなかったわけだ。この少年は今まさに一一目醒めたのだ。

「やる、やるねぇ！　まさか本当にマジモンだとは恐れ入ったぜ、大したもんじゃねぇか！　なあ、そうじゃねぇのかよ、答えてみろや、『獅子（レーヴェ）』エエエエエエ！！！」

叫びにもさして動じた様子のないカイトの両眼球に映えるのは機械の歯車のような紋章（エフェクター）。紅く光輝な刻印は紛れもなく、彼が『本物』であることをどんな言葉や行動よりも雄弁に語っていた。どうりで『双児（ツヴィリング）』がキナ臭いと言っていたわけだ。

「これでちったぁやれるようになったか、ガキ？」

「……」

ジャキンッ！

答えるように展開するのはディーン？だ。黒い両刃剣が殺意を迸らせる。カイトの感情がそのまま刃に流れ込んでいるのだ。枠組みを超越する、爆発した感情はそのフレームすらも歪める。

『ｍＡ．ｊＭＤ　ＡＭ．ＤＭＰＰＤＭ　０ＤＭＷ　ＡＧ．　．ＷＰ．』

エラーメッセージが流れ出し、そのバグが粒子なってレイヴァー・デイの二重装甲の下からディーン？を包み込む。光の中で黒剣が変貌する。

それは『Ｃｏｒｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ』とは違う変化、進化。刀身部が二つに裂けて切羽までスライド、鍔が横に広がるとそこから出力される光の刃。本来なら金色の輝きのそれは、彼の瞳と呼応するように真紅のエネルギーを発振している。

「はっ、語りたかねぇってことかよ。いいぜ、楽しませろや。目が醒めたってんなら全力を絞りだせよ。オレを退屈させんじゃねぇ――ぞォォォ！」

繰り出される右の一撃。大気を切り裂くのではなく引き千切るかのような勢い、シールドエネルギーなどゼロに近しい機体では防御しても突き破られてしまう。

躱すしかない。そう、本来ならば。

「――んだとッ！？」

赤い眼球をたぎらせ、カイトが背面のスラスターで加速する。その神速はヘルガを上回り、まるで瞬間移動したかのような瞬時加速（イグニッション・ブースト）で圧倒、懐に彼の姿があった。加速の勢いを借りた斬撃が真っ向からヘルガの腕を押し返す。

紅い粒子がつぶてのように降り注ぎ、夜の森を真紅に染める。

「うおおおッ！　テメエェ！」

均衡は、脆くも崩れる。右腕一本では限界出力以上の光刃を受けとめ切れず、巧みな体捌きで受け流したヘルガ、そのすぐ脇に振り下ろされたディーン？の刃が爆ぜる。

ズドォォォォォンッ！！！

刃の形を保てなくなった粒子が破壊エネルギーに流転し、光の大瀑布が地上から天へと昇る。余剰なエネルギーは大気を震わせ、ソニックブームとなって森林を蹂躙する。

斬撃が光となって消滅し、後に残ったのは穿たれたクレーター。そして、刃を振り下ろしたまま硬直しているカイトの姿。

「……くぁ、ぁ……」

しかし、その一撃で自身の精魂全てを使い果たしたのか、カイトを護るように展開していたレイヴァー・デイが粒子となって消滅し、途端に彼自身もその場で気を失ってしまう。

「チッ、余計な手間かけさせやがって」

もうもうと立ち上る土煙、それを手でわずらわしげに振り払いながら姿を見せるヘルガ。右腕に装着した装甲は先の一撃でボロボロだ。

「でも、クリストフの言ってたことは確かだったわ。この子の中身、私たちとはやっぱり違うわね」

ただ二人の戦いを傍観していた『天歇』、マレウスがカイトの顔を覗き込む。彼女の表情は嬉しいような悲しいような、複雑な色を見せていた。

「んでだ、マレウス。こいつどうする？」

「そうねぇ～。とりあえずは～」

間延びした声を出しながら、マレウスの指がカイトに触れようとした瞬間、

ダダダダッ！

頭上から降り注ぐ断続的な二本の火線。即座にその場から飛び退いた二人の目の前に現われたのは、シャルロットだ。リヴァイヴを纏い、サブマシンガンを二人の騎士に向けている。

「あ？　んだ、てめえ？　いきなり出てきて、何勝手かましてくれてんだよ？」

「うるさい、黙れ」

同時に轟音。一射、二射、そして三射。問答無用とばかりに、シャルロットの銃口が火を噴いた。

「僕の友達に手を出したんだ、覚悟はできてるよね、白髪女」

表情こそいつもと変わらないが、声にはとてつもない怒りが滲んでいた。自分の大切な人を傷つけられて平静でいられるほど、シャルロットは大人ではないことを自覚していた。

「それに、怒ってるのは僕だけじゃない」

その言葉を証明するように、月影からさらに二つの影がフィールドに飛び出してきた。一つは剣呑な刃を振りかざしてヘルガに飛び掛かり、もう一つは一睨みでマレウスの動きを止めてしまう。

うるむ、そしてラウラだ。

「無駄な抵抗はするなよ、騎士団（リッターオルデン）。既に狙撃手がお前達を狙撃する手筈を整えている」

ラウラのどこまでも静かな声がマレウスに突き刺さり、その傍らでは、

「見つけたですよ、『四番』……！」

「てめえ、どこかであった顔だな。おもしれぇ、今すぐやっか？」

展開したギロチンでヘルガの腕部とつばぜり合いをしているうるむ。その表情は心成しか冷静さを欠いているようにも見える。

そんな今にも戦いを再開しそうになっているヘルガを横目で眺めたマレウスが、はぁ、とため息を吐いた。

「ほんと、空気読めない子って嫌だよね。余計な邪魔入れちゃうから、いいとこ見逃しちゃったじゃないの」

「何を分からないことを……。まあ、いい。洗い浚い吐いてもらうぞ、貴様らの組織について」

ラウラは少なからずこの者達を知っていた。その目的は不明だが、カイトを襲ったのには重要な理由があると踏んでいた。

「でもまあ、今日はそれなりに楽しかったかな。『双児』の依頼も全うしたし、ここら辺でお開きにしよっか。続きは、また今度」

「逃げるつもりでいるのか？　この状況で」

「つもり、じゃないわよ」

マレウスの目がラウラを捕らえ、スッと細まる。まるでそれは抜き身の刃を彷彿とさせ、ラウラはＡＩＣの出力をあげた。

それをものともせず、マレウスの口元が釣り上がった。嫌な予感を察知したラウラがその正体を確かめる前に、その薄い唇から言葉が紡がれた。

「私たちは、逃げるわよ」

オオオオオオッ！

「ッ！？」

かぶさるように獣の咆哮が闇夜の森から轟き、刹那に飛び出した何かがラウラとうるむを吹き飛ばした。

ロールしながら体勢を立て直したラウラはその正体を視界に捕らえた。

「随伴機だと！？」

「どうかしら？　可愛いでしょ？」

空と地面。二ヶ所に現われたのは独立遠隔兵器、随伴機だった。マレウスの足元にはラウラを吹き飛ばした獣型の機体が、そして上空にはうるむを弾いた猛禽型の随伴機が控えていた。

二機は主人に仇成す三人を睥睨しており、いつでも攻撃が出来るように爪を磨ぎ、翼をはばたかせている。それでも仕掛けてこないのは、マレウスが命令を下さないからか。

「ベイ、構わないでしょ？」

「……だな。もう白けちまった。今日の祭りはここまでだな」

「はぁいはぁい、終了撤収ー」

「な、待て！」

逃がさないと、ラウラが再度ＡＩＣを発動させようとした瞬間、二機の随伴機がラウラの足元に飛び掛かり、土煙を立て、一瞬だけ彼女らの姿を隠してしまう。

「あ、そーだ。さっきの旅館がどうとか学校がどうとかは冗談だから。てゆーか、そんなこと私たちにはできないしね。だから、替わりにその子に謝っておいてよ。じゃあね～」

夜風に紛れてその言葉を残した二人の騎士は煙が晴れたときにはもう見る影もなく、コア・ネットワークでも追跡することは出来なかった。

「セシリア、目視での確認は？」

『……すみません、叶いませんでしたわ』

「そうか……」

チャネルの向こうから沈んだ声が聞こえていた。木々の影に隠れ、狙撃体勢を取っていたセシリアだったが、彼女にも姿は確認できなかったのだ。

展開した『シュバルツェア・レーゲン』を戻しつつ、足元に開いた傷痕を見下す。

（黄道十三星座騎士団、奴らはなぜカイトを狙ったんだ？　そこに何かが匿されているのか？）

ラウラの疑問に答えるものはおらず、ただ深い闇がその疑問を飲み込んでいくのみだった――。

第三十一話　～星穿の獣～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

しっちゃかめっちゃかの竜頭蛇尾。久しぶりのオールバトルパートは老体には堪えるわい。駄文でしたが、皆様にお楽しみいただければ幸いかと。

さて、今回のバトルパートのテーマは『絶対的な暴力』です。二人の騎士の力の鱗片、目醒め始めたカイトの中身、その二人の力の矛先は似ているようでもベクトルが異なっているんです。ですが、絶対的な力の発動には変わりはない。この力が一体どう物語に作用するのか、一つのキーポイントです。

伏線もバリバリ張ったし、残りは回収できるように善処するのみさ！　やぁってやるぜってね。……でも、この後何回かバトルパートがあるんだよなぁ。はぁ、書けるかねぇ。今回で出し切った感はあるんだけど……。

それでは、またの機会に。

第三十二話　Aパート　～ウサミミとルービックキューブ？～（前書き）

第三十二話Aパートです。

文章がしっちゃかめっちゃかの大根ＲＵＮです。詰め込みすぎは宜しくなかったかな……。

それでは、第三十二話前半戦、『ウサミミとルービックキューブ？』、てんやわんやな幕が開きます。

第三十二話　Aパート　～ウサミミとルービックキューブ？～

「……」

薄暗い月の明かりしか届かない、旅館の一室。規則正しい心電図の音が空しく響くそこでは、死んだように眠るカイトの姿があった。そして、その傍らにはセシリアが控えていた。

（どうして……こんなことに……）

顔に貼られた絆創膏、砕けたＩＳの装甲は体に突き刺さりこそしなかったものの、無数の擦り傷をその身に深々と残した。ヘルガ・アーレントとの戦闘の結果だ。

他にも全身各所で内出血を起こし、肋骨もいくつか折れているという。毛布に包まれた体はしんと動かず、左手にも青アザを見つけたセシリアは顔を背けてしまった。

彼のこんな姿は見たくない。しかし、今この時を逃していつ彼を支えずしていつ支えるのか？　無力さへの諦観を彼我の彼方に押し込んだセシリアの蒼い瞳が前をむいた。

「セシリア」

声が背後で発し、セシリアはその声の主へと振り向いた。シャルロットさん、と出しかけた声が喉に張りつき、セシリアはただその紫陽花色の瞳を見返した。

「僕がカイトを看てるから、セシリアは休んで」

「ですが……」

「……あのさ、今、何時だと思ってるの？」

言われて始めて時計を見た。気が付けばもう四時間も経っていた。時間というのを失念していたようだ。

「明日はＩＳのデータ収集があるんだ。少しでも休まなくちゃ、それこそセシリアが倒れちゃうよ」

「……」

「心配なのはわかるよ。でもね、カイトのことが心配なのは僕だって一緒なんだ。ラウラも、うるむも」

「……そうです、わね。わかりました。後をお願いします」

渋々ながらセシリアは納得し、立ち上がった。自分まで倒れてしまったら本末転倒だ。去り際、セシリアはシャルロットに声をかけた。

「もう、後には引けませんわね」

「お互い様だよ」

すれ違いざまに交わされた二言乃葉は到底二人以外には理解のし得ない言葉だった。それでも尚、二人の言葉は強く、決意に満ちたものであり、隠された意味はしっかりと通じ合った。

廊下に出たセシリアを迎えたのは、妙に肌に障る冷ややかな風と、

柱に寄り掛かった少女の姿だった。どこまでも冷たい紅い眼がセシリアを捉えた。

「酷い顔をしているな」

「化粧をしていない乙女の顔なんて、概してそんなものですわ」

「私には分からないな」

それを鼻で笑ったラウラだったが、その影でシャルロットに化粧のやり方を習っているのを知っていたセシリアは思わずくすりと笑ってしまった。

応えるように笑ったラウラだったが、すぐに笑顔は引っ込み真摯な表情を浮かべた。それは軍人としての少女の顔立ち。

「教官から話は聞いたな？」

「箝口令、ですわね？」

静かに、そして重厚にラウラは頷いた。やはり他言無用か、とセシリアは確信した。

正体不明の二人のＩＳ搭乗者は何の目的があってか、一人の教師と一人の生徒を負傷させた。相手の思惑が分からない以上、無闇に話に出すのは控えるべきだ。

より不安を煽ってしまっては、余計な騒ぎに発展しかねず、さらには世界に波紋を呼びかねない。カイトの情報が明るみに出た今、一石を投じようものなら何が起こるか分からない。

下手をすれば戦争にだって――。

「これは『ＩＳ学園』という一国家内での行為だ。他国が介入すべき問題ではない。それだけは――」

「問題ありませんわ」

ぴしゃりと言い切ったセシリアはラウラの白磁の顔を見やる。今更そんなことを言われなくても分かっている。自分とて木偶ではないのだ。思考し、想像し、実行できる一人の人間なのだ。

「本国に泣き付こうなど考えていません。わたくしはわたくし自身の意志でここにいます。逃げようなど、本位に反しますわ」

「……そうか」

表情を崩し、微笑を浮かべたラウラに思わずこちらも綻んでしまう。

「呼び止めて済まなかったな。また明日会おう」

「ええ。お休みなさい、ラウラさん」

旅館の廊下を歩き、その奥へと消えていくセシリアの背を見送ったラウラはふと、中庭に視線を投げた。

見事な満月がこちらに光を傾けており、雲はそれを阻害しないように捌けていた。じっと月を見上げていたラウラはポツリとつぶやいた。

「この世界は歪んでいる、か」

●

『いい加減にしろっ！』

バン、と机が音を立てた。衝撃に雪崩のように積み上げられていた書類が倒れ、部屋を白く染め上げた。

『お前は■■■■■■をどうするつもりなんだ？　実験動物にでもするつもりか！？』

『やだなぁ、ちーちゃん。人聞きの悪いことを言わないでよ。私はあの人のお願いを聞いてあげただけなのにさ～』

『そんなことはどうでもいい！　それが例え奴の願いであろうと、これ以上あいつをＩＳに関わらせるなっ！』

『だけどね、あの人は理解してくれたんだよ？　私もこの子たちも、全部ぜーんぶ受け入れて愛してくれたんだよ。私、嬉しかったなぁ。ちーちゃんの他にも、私をちゃぁんと見てくれる人がいたんだから』

『そんなことは私にだって出来るだろう！？　どうしてアイツなんだ？』

『どうしても何もないよ。私の全部を託せるのはちーちゃんじゃない、■■■■■■なんだよ。そこを分かってくれにゃいかな？』

『分かるものかよ！　私はＩＳの登場を否定はしないし、乗れる事を誇りに思う。だが、それは人によっては呪縛なんだ。お前のやろうとしていることは奴に足枷を付けるようなものなんだぞ！　何故それが分からない！？』

もう話していても仕方がない。そんな顔で椅子に腰掛けた千冬姉さんが顔を俯かせてしまった。闇の中、うっすら差し込む光の輪の外に立つ誰かを仄かに照らし出す。その表情は、闇に溶けてほとんど見えない。

『……ちーちゃんなら、分かるよね？　誰かに敷かれているような世界（レール）は嫌い』

『だから、そんな世界から脱却したい。ああ、分かるさ。実行し、世界を変えたお前には敬服すらするよ。だがな、私はお前のやろうとしていることを認めない。これだけは、断として認めるわけにはいかないんだ』

見えない誰かは何かを言おうとして、それを飲み込んで闇のなかに溶けていく。しんと冷えきった部屋で対立する二人を傍観することしか出来ない僕は怖さと心細さに息が詰まりそうになる。

なにかをしなくてはいけない、そう考えた矢先、千冬姉さんが立ち上がった。

『次に会うときは、味方でありたいな』

『私はずっと、ちーちゃんの味方だよ。ちーちゃんが私を信じてくれればね』

『そうありたいものだよ』

素っ気なく答えた姉さんの背中が遠ざかる。そこには冷たい刺のようなものが生えているように見えた。拒絶、という言葉が頭に浮かぶ。

それを取り払いたくて、僕はその背中を追い掛けた。と、手首が誰かにいきなり掴まれ、走る足が止まってしまった。

ぎょっと振り替えると、姉さんと話していた人が僕の手首をつかんでいた。柔らかく小さな手、だけどそれは驚くほど冷たい。

『君だけは私を見捨てないよね？　私のこと、受け入れてくれるって言ったよね？』

縋るようにそう問い掛ける彼女の声が耳朶を打つ。僕の目の前で次第に形が崩れ、手のひらが皺だらけになりながらも、掴んだ手は離さない。

『君も、私よりもちーちゃんを選ぶの？　私のすべてを愛してくれるって言ったのは嘘だったの？　ねぇ、答えてよ』

「そんな事言われても……！」

夢中で食い込む手から逃れようとしても、その人は手を離さない。姉さんはどんどん先に行ってしまって、こちらに振り返ろうともしなかった。

夢中で腕を振り乱していた僕は、今いる場所が変わっていることに気が付いた。書類のばらまかれた床も、月明かりの差し込む窓も、

ハードカバーの本が並ぶ本棚もそこにはなく、僕が対面しているのは闇夜に浮かぶ、黒塗りのＩＳ。

「レイヴァー・デイ……」

闇のなかにひときわ濃い闇を作り、桂冠を生やした鉄機がこちらを睥睨している。僕の呟きが虚空で弾けた瞬間、鉄機の体がくぐっと膨れ上がり、破れた表皮の下から終幕の黄昏のような金色の光が迸った。

同時に角が二つに裂け、バイザーの奥の紅い瞳が悪鬼の如く輝いた。喰われる、と直感した体が凍り付き、膨れ上がる恐怖が悲鳴になって、深く、長く、体の奥底から洩れて――。

「うわあぁぁぁぁぁぁ！？」

自分の悲鳴で目が醒めた。肩で息をしながら手の甲で、額の汗を拭った。滴るくらいに濡れていた。

「なんなんだよ、さっきの夢……」

あんな夢を見たのは初めてだ。今までは苦しみを伴うような夢を見ることなんてなかったのに……。ヘルガとの戦いが僕の中の何かを揺さ振ったのか？

「痛っ……」

考えても答えは出ない。考えれば考える程、鈍痛が襲ってくる。痛むくらいなら悩むのはよそう。

「そういえば、ここはどこだ？」

周りを見渡すかぎり旅館のようだけど、僕に割り振られた部屋ではないことは確かだ。荷物がないし、一夏の姿も見当たらない。見当たるのは、点滴と心電図に裸のラウラ。どうやら僕は別室に担ぎ込まれて治療を受けていたようで……。

「……おや？」

何だか見過ごせないものを見つけたような……気のせいだろうか？

もう一度しっかりと一つずつ確認していこう。

1、規則正しく滴る点滴。異常はない。

2、これまた規則正しく音を鳴らす心電図。至って普通。

3、穏やかな寝息を立てて僕に寄り添い眠るラウラ（全裸）。うん、いつもの襲撃と思えばなんらおかしなところはない。

なんだ、おかしなところなんて何もないじゃないか。どうにもまだ寝ぼけているみたいだな。アハハ……。

……なんて言うと思ったか！

「ラウラァァァァ！？」

ブランケットに腕を拘束されたまま、大きく飛び退いた。なんでこの子は僕の布団に一緒に寝てるの！？　つーか、なんで裸なのさ！？

「う……ん……カイト？　目が覚めたのか？」

「聞くべきことはそこなんだ！？　覚めたけど、覚めたけどもね！」

目ならバッチリ覚めたよ。こんなことをされて目が覚めない男がいるなら憧れるね。誰か紹介してくれませんかね。

「動いても大丈夫なのか？」

「あ、そういえば……」

その場で体を動かしてみる。不思議なことに痛みを感じない。昨日、あんなにボロボロにされていたのに……。理解不能ながらも、負傷が消えているなら喜ばしいことなんだろう。

「ふむ……」

布団を羽織ったまま、僕の体をペタペタと触るラウラ。その顔は思案しているようにも見えるけど……。

「あの、ラウラ？　何をしてるの？」

「……見舞い？」

「なぜ疑問形？」

尋ねてもラウラは僕の体を万遍無く触れている。これを触診、とでもいうんだろうか？

「何故だ？　怪我の容体から数時間で傷口が塞がるなどありえない。

ましてや骨にも罅が入っていた。少なく見積もっても一、二ヵ月はかかる怪我だったはずなのだが……」

ぶつぶつと呟きながら触るラウラの表情は真剣で、邪魔したら殺されそうだ。しばらく為すがままにされていると、気が済んだのかラウラは僕から離れた。

「カイト、体調はどうだ？」

「気だるいくらいだよ。なんでだか、あんまり痛くないんだ」

「完治しているのか……」

「うん？　何か言った？」

「いや、独り言だ。気にするほどじゃない。それよりもカイトは病み上がりなんだ。もう少し休んでいろ」

ラウラはかぶりを振ると、僕の手を掴んでベッドに寝かせて、その小さな体をぴったりと寄り添わせた。……あの、ラウラさん？

「どうして君まで寝ているんだい？」

「カイトは無知だな。これは添い寝だ。またの名を人間抱き枕とも言って、」

また余計な知識を吹き込まれたな……。この子の中で歪んだ常識が出来上がっちゃったらどうするんだろうか？

「ラウラ、僕なら大丈夫だから早く集合場所行きなよ。時間すぎち

ゃうからさ」

今日は一日かけてＩＳの各種装備試験運用とデータ取りが行われる。特に専用機持ちは国の方から沢山の装備が送られて来るのだから、時間を無駄にしていられない。

「しかしだな、そんな状態のお前を蔑ろにするなど、嫁として出来ないぞ……」

それでも渋るラウラ。本当に僕のことを心配してくれているんだろう。それはうれしいし、誰かが傍にいてくれればあんな夢だって見ないだろう。

でも、

「心配いらないよ。痛みもないし、ちょっと休めば気だるさも抜けると思うから」

「……カイト」

見上げるラウラの頭に手を乗せる。大丈夫、という意味を込めて撫でながら言葉を紡ぐ。

「僕は頑張っているラウラが好きだよ。だから、ＩＳのデータ採取を頑張ってほしいな」

「！！　そ、それは本当か！？」

「嘘なんかつかないよ。だから――」

「分かっている！　待っているといい、私は誰よりもいいデータをとってみせるからな！」

布団を蹴飛ばしたラウラは既にＩＳスーツを身に纏っており、目は嬉々と輝いている。

「待って、ラウラ」

襖を派手に開いたラウラを呼び止める。時間がないといったのは僕だけど、これだけは言わなくちゃいけない。

「看病してくれてありがとう」

「……礼なら、私だけではなくシャルロットやセシリアに言うんだな」

大胆不敵で惚れ惚れするような笑顔を浮かべたラウラは部屋を後にした。途端に頭がくらくらしだした。話しただけでこんなにも疲れるなんて、まだ精神的に完治はしていないらしい。

ともかくここは、さっさと体調を回復することに努めよう。そう思い、しばらく安静にすることにした。眠気はあるけど、寝ちゃったらいつ起きるか分からないから、絶対に寝ないと心に決めて――。

●

結果から言おう。四時間の熟睡だった。その甲斐あってか、全快には程遠いけど、多少胸がむかつく程度のところまで体調が戻ってき

た。寝過ぎで頭が痛いのはこの際無視を決め込ませていただく。

動けるくらいになったのだから、このまま体を持て余すのも悪い気がするので、旅館の女将さんに頼んで呼んできてもらった他クラスの先生に点滴の針を抜いてもらい、絆創膏やらブランケットを剥ぎ取ってもらった。やっぱり、怪我は見る影もなく、動いても気分を害することはなかった。

不思議なこともあるものだ、と首を傾げながらみんながデータを取っているビーチに迎う廊下を歩いていたその時だった。僕は珍妙な光景を目にした。

「……」

旅館の中庭に当たる場所、そこにウサギの耳がにょきっと生えているのだ。と言っても、生のウサギの耳じゃなくて、どこか機械チックな耳、カチューシャの様にも見える。

しかも何故かその脇には『引っ張って』と書かれた看板が立てられている。

「なんでウサギの耳がこんなところに生えてるんだ?」

ウサギの耳に問い掛けてみるも答えは返ってこない。当然か。土の中に誰かが埋まっている訳じゃないんだから。

「とりあえずこれ……抜けばいいのかな?」

じっと眺めていても埒が開かない。好奇心に駆られた僕は立て看板に書かれた旨の通り、その耳を引っ張ってみる。そりゃっ!

すぽんっ

「うわぁ！」

あまりにも簡単に抜けてしまい、反動で地面にしりもちを付いてしまった。

引っ込抜いたのはやはり、ウサギの耳を模したカチューシャだった。ずいぶんと手の込んだものだけど、誰がこんなものを突き刺したんだろう？

キィィィン……

嫌な予感ほど的中するものだ。僕は空を見上げるとキラリと輝く流れ星一つ。それは消えずにこちらに向かって――ちょっとまさか！？

ドガーーーーン！

流星は盛大に土埃を立てて地面に落下した。ミサイルか？　いや、違う。この形状は――、

「る、ルービックキューブ……」

どう見てもルービックキューブそのものだった。しかも3×3じゃなく、8×8のパズルのプロフェッショナル御用達の超高難易度の、って、そうじゃなくて！

「あっはっはっ！　ひっかかったね、かーくん！」

ガシャンガシャンとスライドし、きちんと六面揃えたキューブがパカッと二つに割れ、中から笑い声と共に現れたのは――。

「ビックリドッキリ大成功ーー！　イェイイェイ！」

不思議な格好をした女性だった。具体的には不思議の国のアリスという童話を一人で体現しているような、まさしくそんな感じだ。伝わりにくいかもしれないけど、この表現が的を射てるんだ。掠めるように取ったウサミミを装着した姿はよりその印象に拍車を掛けている。

「やー、前はね、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機にあぼーんって打ち落とされそうになっちゃってね～。でもね、天才束博士は学習するのだよ、ワトソン君。どうどう？　この束さんオリジナル飛行機めちゃめちゃ凄いでしょ、かーくん？」

「か、かーくん……？」

な、なんなんだこの人？　事態の急変に追い付いていけない。茫然としていると、不意にその人が僕の顔を覗き込んできた。

「どうしたのかにゃー、束さんの顔に何か付いてるかにゃ？」

「あ、いえっ！　綺麗な人だってつい見とれてしまって、」

「綺麗だって！　やだなー、かーくんったら女の子を喜ばせるのが上手なんだから！　この色男（ロメオ）君っ！」

照れているのか、頬を朱に染めながらバンバンと背中を何度も強く叩かれる。痛っ、スミマセンお姉さん、痛いです……！

「ところでかーくん、箒ちゃんたちはどこかな？　一緒にここに来てるんだよね？」

「箒ちゃん？」

箒ちゃんって、もしかして篠ノ之さんのことかな？　今は試験場にいると思うけど、この人と篠ノ之さんにどんな関係があるんだろう？

そう言えばさっきこの人自分のことなんて言ったっけ？　確か束さんって……それってもしかして、

「まあ、この私が開発した箒ちゃん探知機を使えばすぐに見つかるけどね。やっぱり私ってば凄いね、さすが私！」

これは聞くべきなのだろうか？　この人がもしかしたらＩＳを開発した稀代の天才、篠ノ之束博士であることを――。

考えを巡らす僕の手を掴んだのは、篠ノ之博士かもしれない人。その表情は曇り一つない輝いた笑顔。言わずもがなだけど、嫌な予感は継続中だったりする。

「かーくんも行くよね？　箒ちゃんだけじゃなくて、いっくんもちーちゃんもいるみたいだし」

「いえ、僕は、」

「それじゃあ、束さんにぎゅーっと掴まっててねー！　ほいじゃ、いっくよー！」

「わぷっ」

有無を言わさず僕をその豊満なバディに押しつけたその人の背後にちらりと見えたのは、ロケットエンジン。待って、スミマセンお願いします待ってください。ＩＳを展開しているワケでもないのに、そんなのを点火したらＧで潰れかねない……！

「全力全開！　篠ノ之束頑張ります！」

ドドドドドドドッ！

「むぐーーーー！」

圧倒的な加速に地面が遥か彼方へと押し遣られ、つられて意識も地上に置き去りになりそうになる。柔らかな感覚に意識を刈り取られそうになる僕の脳裏に千冬姉さんの警告が思い出される。

『……ウサギの耳を見ても知らない振りをしろよ？』

『見ても不用意に引っ込抜いたり、触ったりするなよ』

そうですね千冬姉さん。見ない振りをするのが正解なんですね。好奇心に負けて、引っ込抜くべきではなかったですよ、ウサミミをね……。

●

四方を切り立った崖に囲まれているその場所がＩＳ試験用のビーチ

だ。ドーム状のこの場所に搬入されたＩＳと新型装備のテストを行うのが今回の合宿の目的である。

「ラウラさん」

本国から送られたパッケージのカタログデータを眺めていたラウラに話し掛けてきたのはセシリアだった。その後ろにはシャルロットも控えていた。

「二人とも、装備の確認はどうした？」

「インストール中だよ。それよりも、カイトの容体は？」

やはり気になるのか。ラウラは舌打ちをしたくなった。教えるべきだろうが、あの回復速度は度を超えていた。発言を控えるべきだろうか……？

「……意識は戻った。今は旅館で療養しているはずだ」

「本当ですか！」

「嘘などつかん。ただ……」

「ただ、なんですの？」

歯切れの悪いラウラを訝しんでセシリアが怪訝そうな視線を向けてくる。彼女等もカイトの事を心配していた。ならば、隠し通すべきことではない。どうせ数時間したら分かることなのだから。

「カイトの怪我だが……完全に治っていたんだ」

「……まさか、全部が？」

「ああ。破壊されていた臓器も骨も元通りだった。まるで、昨日の一件が無かったかのようにな」

カイトの体に触れてみて実感した。彼の怪我は影もなく消え去っていた、と。本来ならば喜ぶべきなのだろうが、どうにも手放しでは喜べない。

まるで人の枠を超えた力が発揮されているかのようにすら思えてならないのだ。

「この事を織斑先生には？」

「いや、まだだ」

首を横に振ったラウラの視線が千冬に注がれる。今は試験稼働で忙しい。言うならば昼の休憩時間にすべきだと踏んだからだ。

この判断は果たして間違いだったのか？　訊ねようとしたラウラの頭上から響いてくる謎のエグゾーストに、試験中の生徒達の動きが止まり、揃って空を見上げると――。

「ちーちゃ～～～～～～～ん！！！」

ドドドド、と白煙を吐きながら人影が落下してくる。ロケットエンジンを装着しているので、その速度はＩＳにも匹敵している。

「……束」

千冬が迫る人影を見て頭を抱えた。本来なら如何なる理由があろうとも部外者は参加できないはずだ。それを堂々と破って現れたのは天災にして文字通りの天才。

「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！　さあ、ハグハグしよう！　愛を確かめ――ぶへっ！」

エンジン全開の人影を難なくアイアンクローで捕捉する千冬。受け止められた束の腕からポーンと放物線を描いて水面に落下したのはカイトだった。

「なにをやっている、束」

「ぐぬぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

ロケットの推進力すらも受け止める拘束から抜け出した束は水面に向かって叫んだ。

「かーくん、かーむばーっく！」

●

「かーくん、かーむばーっく！」

「ぶはぁっ！　い、いかにも死んだように扱わないでください……」

もう二、三秒飛行していたら冗談じゃなく、海じゃなくて三途の川に沈んでいただろう。その死因が女の人の胸に抱かれて超高速でラ

ンデブーした挙げ句意識を失って海に沈められた、なんて事になったら死んでも死にきれない。

「カイト、大丈夫かい？」

「ありがとう、シャルロット」

手を差し伸べてくれたシャルロットの手を掴んで海から上がる。僕に怪我が無いことを見て満足気に頷く篠ノ之博士（仮）。あなたは僕の敵ですか？

そんな僕の視線を見事にスルーしてスタタタ、と明後日の方向に走っていく。そんなところに誰もいない、

「やあ！」

「……どうも」

……こともなかったようだ。岩影から姿を見せたのは篠ノ之さんだ。何故そんなところに隠れたんだろう？

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

ガンッ！

うわぁ、篠ノ之さん、今全力で叩きませんでした？　どこから取り出したのか分からないけど、木刀に罅入っちゃってるし。

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ……！　ひどい！　箒ちゃんひどい！　ねぇ、いっくんもそう思うよね？」

「はぁ……」

頭を押えながら泣き付く女性に、返事ともため息とも取れない言葉を吐いた一夏も、どう対処すべきか判断に困っているようだ。

「え、えっと、この合宿では関係者以外は――」

「んん？　奇妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私を差し置いて他にはいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……ぐすっ」

や、山田先生泣かないでください。きっと明日はいい日になりますからっ！

もうここまでくればこの人が誰だか断定できる。心のどこかでは認めたくなかったけど、認めよう。やっぱりこの人は――。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなぁ」

唇を尖らせるけれど、それでも姉さんに従うその人は皆の前で名前を明かした。

「私が天才の束さんだよ、はろー。終わり～！」

第三十二話　Aパート　～ウサミミとルービックキューブ？～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

もうヤダこの作品。蒼兎のモチベーションをことごとく削りにくる。チェックするたびお気に入り登録が減る謎の呪い。なんだ、蒼兎が嫌いか？　いっちょ蒼兎をいびってやろうぜと、そんな同盟が知らないところで結成されてたりするんかよ。　よーしおまえら、体育館裏まで行こうか。

まあ、愚痴っても仕方ないですね。ご指摘、アドバイスなどがありましたらお願いします。蒼兎はこんなところで甘んじるほど、負け犬根性が染み付いていないので。目指すなら一番目指さなきゃだし！　皆様の御協力お願いします！　蒼兎も自分の力を研きます故。

さて、本編の話をしましょうか。今まで裏方に撤していた篠ノ之束博士がついに満を持して表舞台へ登場しました。彼女が登場したことで物語は一色も二色も色合いを変化させる。それは束博士がキーパーソンであり、このお話の影の主役だからであります。その理由を想像しつつ束さんの絡みをこれから楽しんでいただければ幸いです。

次回は赤椿の登場、付け加えてレイヴァー・デイについて深く切り込むお話になる予定です。そして後半からは……。

それでは、またの機会に。

第三十二話　Bパート　～飛花落葉～（前書き）

第三十二話、Bパートです。

今回は、次からの展開に備えて一気にイベントを消化します。皆さん、覚悟は宜しいですね？

まあ、宜しくなくても始めちゃいますけどネ（＾ω＾）

それでは第三十二話後編、『飛花落葉』、篠ノ之束の登場で物語はさらに加速する……！

第三十二話　Bパート　～飛花落葉～

「束って……！」

「ＩＳの開発者のあの篠ノ之博士!?」

「うそっ!?　ほ、本物なの?」

突然の来訪者の正体を知り、唖然としていた一同がにわかに騒つき始める。当たり前か、目の前の一人不思議の国のアリスな人がＩＳの開発者にして天才中の天才、篠ノ之束だと気付いたんだから。

「カイトさん、篠ノ之博士とお知り合いだったんですの?」

「いや、少なくとも僕は知らない……はず」

そっと耳打ちしてきたセシリアさんに小声で答えた。束博士は僕のことを知っているみたいだけど、どうしてなんだ?

「はぁ……。もう少しまともに挨拶はできんのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」

「こいつはひどいなぁ、らぶりぃ束さんって呼んでいいよ?　はい、かーくん、リピートアフターミー。らぶりぃ束さん」

「ら、らぶ……」

「緋神、このバカの話は聞かなくていいぞ」

こめかみを押える千冬姉さんはバイカル湖よりも深い溜め息を吐いた。ツッコミ、大変そうだなぁ。

そんな千冬姉さんに話し掛けたのは先程一蹴された山田先生だ。

「え、えっと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつは空気として見て構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「むむ、ちーちゃんが優しい……。束さんは激しくじぇらしぃ。このおっぱいエロエロ大魔神め、成敗してくれる～！」

「え？　きゃああっ！？」

言うなり、山田先生に飛び掛かった束博士はその肉プリンを鷲掴みにして滅茶苦茶に揉みしだきはじめた。もみくちゃにされて変幻自在に形を一一、

ガチャッ×5

……あれ？

「「「カイト（さん）？」」」

「「一夏？」」

「「濡れ衣だ（よ）っ！？」」

そして放り込まれる命の危機。僕らが何をしたっていうんだ!?

「やめろ、バカ。大体、胸ならお前も十分にあるだろうが」

「私の胸でちーちゃん誑かせる？」

「知るか、痴女」

真剣のような姉さんの一撃が束博士に命中し、砂浜に顔から突っ込んでいった。……なんだか、この人が本当にマッドサイエンティストと名高い篠ノ之博士なんだろうか？　だんだん疑わしくなってきた。

「それで、頼んでいたものは……？」

一夏の後頭部に木刀を突き付けたまま、おずおずと篠ノ之さんが尋ねた。刹那、顔を砂だらけにした束博士の目がピキュイーンと（怪しく）光った。

「うっふっふっ。それは既に準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれぇっ！」

大げさとも思えるモーションで空を指差す博士に続いて空を見上げると……。

ズズーンッ！

「な、なんだっ!?」

凄い衝撃を伴って、四角錐の金属の塊が落ちてきた。大きい、何が入っているんだ？

「黒、白と並び立ち、鮮烈な華を開かせる機械仕掛けの創造物（アルマ・マキナ）。その名も――、」

スイッチを押すと、鉄塊が粒子になって大気に消え、僕らの眼前に顕れたのは……、

「全スペックが現行ＩＳを上回る箒ちゃんの専用機こと、束さんお手製ＩＳ、『紅椿』ィ！」

赤い――。うるむちゃんの『ケリュケイオン』とは違う色合い、真紅とはまさしくこの色だ。鋭角的な意匠を纏いながらも、優雅かつ洗練されたフォルムを持つマシーンは、今か今かと乗り手を待ち焦がれている。

これが、束博士が作ったＩＳ、『紅椿』。赤い威光は成る程、確かにハイスペックな最新鋭機を裏付けている。

「さあ！　箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！　私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

「……それでは、頼みます」

「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうさ、もっとかぁいい呼び方で、」

「はやく、済ませましょう」

「ん～、まあ、そうだね。じゃあ、始めようか」

篠ノ之さんは紅椿に体を埋め、束博士はコンソールを開き、同時に空中投影のフォロスクリーンを展開し、情報を瞬時に処理していく。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに書き替えるだけだね～。ほいほいっと」

「お願いします」

「紅椿は近接格闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むんじゃないかな。後はちょー便利な自動支援装備（ラディオ・ウェポン）を装備してあるからね～。私からのプレゼントだよ！」

「それはどうも」

「それにしても箒ちゃん、また剣道の腕前があがったねぇ。筋肉の付き方を見れば分かるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなぁ」

「……」

「てへへ、無視されちった」

しかし、姉妹仲はあまり宜しくないのかな？　篠ノ之さんの対応がよそよそしいように、というか他人行儀に見える。

一方の束博士は休むことなく動き続けており、まるでキーボードをピアノの鍵盤に見立て演奏するピアニストだ。何だかんだ言っても、天才を語るのは伊達じゃなかった。

（それにしても、この機体って白式に似てるなぁ。近接特化の機体みたいだし、腰には日本刀型のブレードが一本ずつなんて）

それに、白式ほどじゃないけどレイヴァー・デイにも似ているような気がする。鋭角的なシルエットといい、スラスターの配置といい。

もしかして、レイヴァー・デイの製作には束博士が係わったのかな？　そうすれば色々と符合するけど、千冬姉さんはサイクロン社製だって言ってたよね。束博士はどこの研究機関にも所属してないみたいだし、やっぱり僕の考えすぎ、なのかな？

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？　身内ってだけで」

「だよねぇ。なんだかずるいよねぇ」

不意に野次馬の中からそんな声が聞こえてきた。羨ましがる気持ちは分からなくもないけど、言い方ってものがあるんじゃないの？

注意しようと声をかけようとした僕よりも先に反応したのは、意外にも束博士だった。

「おやおや、歴史のお勉強ができてない無知がいるみたいだね。知ってるかな、有史以来、世界が平等だったことなんて一度もないんだよ？　まったく無知って恥ずかしいね。『恒産なきものは恒心なし』って言葉を知らないのかな？」

注意、というには余りにも手厳しい指摘を受けた女子はそそくさと作業に戻っていった。束博士は別段気にする素振りも見せず、ニコニコとしたまま調整を続けている。喋りながらよくできるなぁ……。

「はい、一通り終了～。後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくんとかーくん、ＩＳ見せて。束さんは興味津々なのだよ」

「俺は構わないですけど……」

ちらりと一夏がこちらを見た。僕のＩＳ（レイヴァー・デイ）は昨晩の戦闘で相当なダメージを受けている。下手に展開しちゃうと内部回路が狂いかねない。

展開を躊躇う僕に近付いてきた束博士は待機状態のレイヴァー・デイを一撫でする。

「んー、まあ、大丈夫じゃないかな。この子はそんなに弱くないよ」

「……分かり、ました」

確信じみたセリフに妙な魔力を感じた僕は頷くと、ヘッドセットを装着して意識を集中する。

（――出てきて、レイヴァー・デイ）

ヘッドセットから光条が伸び、輝く粒子が全身を包み込む。素粒子レベルまで分解されていた装甲が現界し、体を黒色に染める。

（これって……）

展開されたレイヴァー・デイを見て言葉を失った。

元通りになっている。

あれだけ盛大に砕かれた表装甲板も修復され、バイパスも正常値をキープしている。損傷の跡すら残らない完璧な状態で顕れたのだ。

なんでだ？　まだ一日も経っていないのにどうして……？

「はいはい、二人ともデータ見せてね～。うりゃ」

ぶすり、とレイヴァー・デイと展開していた一夏の白式にコードが刺さった。すると、ディスプレイに情報が提示された。

「ん～……不思議なフラグメントマップを構築してるね。ちーちゃんのに似てるけど、やっぱり男の子だからかな、見たことないサインを描いてる」

「なあ、カイト」

「なに？」

一夏が話し掛けてきた。久しぶりだなぁ、この感じ。

「フラグメントマップって、なんだ？」

ほら来た。

「人間で言うところの遺伝子だね。各ＩＳが搭乗者によって独自に発展していくものだよ。……この前教えたばっかりじゃないか」

「あー、そういえばやったっけ」

このアホ。臨海学校から帰ったらテストがあるのに、そんな頭で大

丈夫か？

「そうだ、束さん。それで思い出したんだけど、どうして男の俺やカイトがＩＳを使えるんですか？」

「あ、それは僕も気になる」

思い出したように束博士に尋ねる一夏。開発者なら、その理由が分かるはずだ。

「ん～……、どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すれば分かる気がするんだけど、していい？」

「どうぞ一夏を」

「待て、カイト！　お前何を言ってるのか分かってんのか？」

何を言ってるの、はこっちだ。例えナノ単位まで分解されようとも、それで男性ＩＳ操縦者の謎が解ければ安いものじゃないか。

「にゃはは、二人とも面白いなぁ。でも、私にも分かんないんだよね。まあ、ＩＳって自己進化するように作ったし、こういうこともあるんじゃないかな？　いつか三人目が見つかったら分かるんじゃないかな～」

投げ遣りな束博士の言葉にがっくりと僕と一夏は肩を落とした。結局分からずじまいか。と、そこで一人の女の子が博士に声をかけた。

「あ、あのっ！　篠ノ之博士のご高名はかねがね承っておりますっ。もしよろしければわたくしのＩＳを見ていただけないでしょうか！

？」

誰かと思ったらセシリアさんだった。博士に会えて興奮しているのか、声色がいつもより高くて、目には星が入っているかのようにキラキラ輝いている。

しかし――、

「はあ？　誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそも今は箒ちゃんにいっくんにかーくんと話してるんだから。分からないかな、そういうシーンなんだよ。いったいどんな神経で君はしゃしゃり出てきたのかな？　これだから外人は頭悪いんだよ。っていうか誰だよ君は」

先ほどの朗らかな印象から一転、極限的に冷たい言葉がセシリアさんに突き刺さった。言葉だけじゃなく、その視線もまるで汚物でも見るかのような嫌悪に満ちた視線だ。

急激な変化にセシリアさんだけじゃなく、僕も面食らった。明確な拒絶に背筋が凍り付いた。

「え、あの……」

「うるさいなあ。さっきも言ったよね、今はそういうシーンなんだよ。君みたいなケバい女は邪魔なんだよ、あっちいきなよ」

「う……」

ここまであからさまに拒絶されてはさすがのセシリアさんもうなだれて引き下がっていった。

「大丈夫です、セシリアちゃん？　あとでうるむがプリンをご馳走するですよ」

「あたしも肉まん奢ってあげるから元気出しなさいよ、ね？」

「鈴さん、うるむさん……。ありがとうございます……ぐすっ」

うるむちゃんと鈴に励まされるけど、傷は深いみたいだ。お通夜みたいな空気が漂ってきた。

「あーやだやだ。どうして金髪の外国人ってこうも図々しくてビッチなのかなぁ。やっぱり日本人だよね、ビバ日本人。まあ、日本人でもヤな人はたくさんいるけど」

そんな空気をものともせず、愚痴る束博士。なんだったんだ、今のは？

不思議がっていると、一夏がプライベートチャネルを開いてコンタクトしてきた。

『束さんは人の区別が付かないらしいんだってさ。分かるのは箒に千冬姉、俺に箒の家族だけだったんだけど……』

『どうしてか僕も『そっち側』みたいだね』

確かに僕は千冬姉さんの計らいで織斑家の一員にされているけれど、束博士の態度を鑑みるにどうもそれだけではない気がする。

「あの、篠ノ之博士」

「ちっがーう！」

話掛けた途端に飛んできたのは否定の言葉。え？　違うって？

「かーくんよそよそしいよ！　もっとキュートな呼び方じゃないと束さんは満足しないんだよ！」

満足て。

「じゃあ……、束博士」

「ダメ」

「篠ノ之さん」

「箒ちゃんと被る」

「束さん」

「却下」

「束姉（たばねぇ）」

「なんかビミョー」

「僕にどうしろとっ！？」

否定に次ぐ否定に声を荒げてしまった。これ以上呼び方を考えられないよ！？

そんな僕に提案する篠ノ之束博士姉。

「呼び捨てにしよ。束って」

「いや、ですけどさすがに失礼なんじゃ……？」

年上の人を呼び捨てに出来る程僕は豪気じゃない。そう断ると、博士はぷくーっと頬を膨らませていた。

「もういいもん！　私、かーくんが束って呼んでくれるまで梃子でもここを動かないもんねっ！」

言うなり、博士はぷいっとそっぽを向いてしまう。へそを曲げちゃったのかな、これって？

「おい束、ワガママを言うな。緋神を困らせるような真似をするんじゃない」

「……（プイッ）」

「話ぐらい聞け、束」

「……（プイッ）」

千冬姉さんが宥めてみるも、馬耳東風、馬の耳に念仏。これっぽっちも効果がない。

「……カイト、頼む。篠ノ之の機体の調整が終わったと伝えてくれ」

うわ、投げたよ。いや、原因は僕なんだから投げられても文句は言えないか。しょうがない……。

「話を聞いてください、束……」

「うん♪　何かな、かーくん？」

にへら、という擬音語が似合うフニャッとした笑顔でこちらを仰ぐ束。ご機嫌が直ったようだ。

「篠ノ之さんの機体、調整が終わったみたいですよ」

「おー、本当だねー。それじゃあ箒ちゃんお待たせ。紅椿のテスト稼働始めよっか」

「はい。では」

繋がれたケーブルが音を立てて外れ、紅椿がその鉄の翼を開く。篠ノ之さんはすっと目を閉じ呼吸を整える。

張り詰めた緊張の糸、瞬間それは弾け飛んだ。

ゴウッ！

「うわっ！」

目にも止まらぬ急加速で紅椿は飛翔した。余波で発生した衝撃波を交差した腕で受けながらハイパーセンサーが上空の篠ノ之さんを認識する。

なんて速さだ。レイヴァー・デイのＩ（イオタ）でもこんな速度を瞬間的に発揮することは出来ないよ……。

「どうどう？　箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まあ……」

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが《雨月》で左のが『空裂』ね。武器特性のデータを送るよー」

そういって投影モニタに表示されたデータを送信する。受信し、即座に機体へと反映させた篠ノ之さんは左右の刀を抜き取り、構えた。剣道をやっているあたり、構えが様になっている。

「雨月、いくぞ！」

まずは小手調べとばかりに、右の太刀《雨月》で牙突を放った。すると赤いレーザーが雨のように放射した。伸びた赤い閃光は漂っていた雲を穴だらけにした。

「うんうん、いいねいいね～！　じゃあ、次はこれを打ち落としてみせてよ！」

ズドン、と束の隣にコールされたのは十六連装ミサイルポッド。全ての砲門が開き、反応弾を連射する。

「やれる、この紅椿なら！　空裂ッ！」

力強い言葉と共に振り抜かれた左の太刀が空に半月を描いた。その軌跡をなぞるようにエネルギーが帯状に広がり、一撃で十六発もの

ミサイルを粉砕した。

「すげぇ……」

一夏が僕らの総意を零した。現行ＩＳを上回るのは口八丁じゃなかった。圧倒的なスペックに誰もが言葉を失った。

羨望の眼差しを受け、紅椿の装甲はより一層堂々と輝いていた。

「すごい、すごいよ箒ちゃん！　うふふふっ、あははははっ！」

妹の威風堂々とした姿に感動しているのか、束は笑っている。そんな彼女を厳しい目で見つめている二人の人物に気が付いた。

（千冬姉さんにうるむちゃん……？　どうしてそんな顔をしているんだ？　まるで、篠ノ之さんたち姉妹が敵みたいじゃないか……）

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

かなり慌てた様子で駆け込んできたのは山田先生だった。いつにも増して動転している姿に嫌な予感がしてならない。

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

山田先生が千冬姉さんに小型情報端末を手渡した。ここからでは見えないけど、姉さんの表情に影が差したところを見るに、僕の予感は確信へと切り替わった。

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……。成程な、全員注目！」

千冬姉さんが声を張り上げ、手を叩いて生徒皆を振り向かせた。

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて速やかに旅館へ戻れ。連絡があるまで各自自室待機をするように。以上だ！」

剣呑な空気に女子一同は騒がしくなる。しかし、只ならぬ気配を感じているのだろう、各国の代表候補生の表情は堅く能面のように色が削ぎ落とされていた。

「とっとと戻れ！　以降、許可なく室外に出たものは我々で身柄を拘束する！　いいな！」

「「「はっ、はい！」」」

全員が大急ぎでＩＳを片付け始めた。……さっきの千冬姉さんの怒号、初めて聞いた。手が震えてる。

「専用機持ちは全員集合しろ！　織斑、緋神、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰、竜胆！　それと篠ノ之、お前も来い」

「はいっ！」

専用機持ちが全員集められるなんて……。一体何が起きてるんだ？

さっき専用機を手に入れた篠ノ之さんまで呼ぶだなんて。

でも、なんだろう、この感じ……。ヘルガと会ったときよりも胸の

奥が焦燥し、騒ついている。それは時間の経過と共にじわじわと侵食してくる。

（僕の思い過し……だよね）

そうこじつけても、胸の中の黒い不安は拭えなかった。

●

「では、現状を説明する」

僕ら専用機持ちは旅館の一番奥、宴会用の大座敷に集められた。締め切られ、薄暗い部屋の中央にフォログラムスクリーンが映し出されている。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代の軍用ＩＳ『銀の福音』、通称『福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

軍用ＩＳの暴走だって？　不安の正体はこれだったのか……。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

じゃあ、先生方のアシストを僕らがするのかな。或いは……、

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よっ

て、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

そうきたか。第二世代の訓練機を使用しての作戦より、第三世代の最新鋭機をあてがった方が成功する確率が高いだろう。そう考えれば妥当だけど……腑に落ちない。

いくらハイスペックな機体を持っていても僕らは所詮学生、しかも一年生だ。実力も未熟な僕達をぶつけるよりも、経験豊富な先生方を出したほうが合理的なはずなのに。

学園の上層部は何を考えているんだ……？

「それでは作戦会議を始める。意見のあるものは挙手するように」

「はい」

誰よりも早く手を挙げたのはセシリアさんだ。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヶ国の最重要軍事秘密だ。決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

千冬姉さんの注意事項に頷くと、ディスプレイに福音のデータが開示される。これは……、

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳ（ブルー・ティアーズ）と同じく系

統ですわね……」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。スペックもあたしの甲龍を上回ってるし、向こうのほうが有利みたい……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しいかな」

「しかもオールレンジ攻撃をもってるです。詳しい特性が分からない以上、回避することも視野に入れると不用意な接近も危険ですね。うるむの苦手なタイプです……」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも不明……。教官、偵察は行えないのですか？」

ラウラの意見に賛成だ。スペックデータは所詮データだ。実際にエンカウントしてみなくちゃ分からないこともある。

しかし、千冬姉さんは首を横に振った。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速２４５０キロを超えるとある。然り、アプローチはたった一度と考えてほしい」

「一度きりのチャンス……ということはやっぱり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかないですね」

一度の交戦でシールドエネルギーを削り潰し、敵機を撃墜できるだけの攻撃力を持つ機体と言ったら一機だけだ。

僕の言葉に、皆の視線がそれが可能なＩＳのマスターに注がれる。

「は？　お、俺！？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わなくちゃ難しいし……」

「しかし、相手は超音速飛行を続けているですよ。並大抵の速度では無駄にエネルギーを消耗するだけで引き離されるのが落ちです」

「ならば当然、超高感度ハイパーセンサーも必要だろう。戦闘の高速化も避けられんだろうしな」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！　お、俺が行くのか！？」

「「「「「「「「「当然」」」」」」」」」

「ゆ、ユニゾンするなよ！」

一夏を除いた七人の声が重なった。悔しいけれど、僕らの機体じゃシールドエネルギーを削り切ることは不可能に近い。でも、零落白夜という切り札を持った白式ならばそれを可能に出来る。

ただし、

「織斑、これは訓練ではない。命を賭した実戦だ。もし戦う覚悟がないなら、無理強いはしない」

「……ッ」

及び腰になっていた一夏が拳を握り締める。すると、自然とその表情が引き締まった。

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「でしたら、わたくしとブルー・ティアーズがおりますわ。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきています。超高感度ハイパーセンサーもついています」

「それなら、うるむもいけるですよ。サイクロン社から強襲用のオートクチュール、『ヴァーダント・レイド』が送られてきてるです」

セシリアさんの話した『パッケージ』は換装装備のことで、対するうるむちゃんの『オートクチュール』とは専用機にしか扱えない特定機能を特化した特別装備だ。

けど、オートクチュールって開発に手間取るから研究が下火になってるとは聞いていたけど、まさかちゃんと実在するなんて、ちょっと驚きだ。

「オルコット、竜胆、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「わたくしは２０時間ほど」

「うるむもそのくらいです」

「ふむ、どちらも適任か、さて」

どちらを選考するかに移ろうとしたときに、思考を遮る場に似付かわしくない明るい声が部屋にこだました。――天井から。

「待った待ーった。その作戦ちょっと待ったなんだよ～！」

見上げると、部屋の中央の天板を外して束の首がにょきっと生えていた。少し、いや、かなり不気味だ。

「とうっ★」

空中で三回半捻りを決めた束が部屋に降り立った。姉さんといい束といい、僕の周りの年上の人ってどうしてこうやたらとハイスペックなんだろう？

「ちーちゃんちーちゃん。もっといい作戦が私の頭のなかにナウ・プリンティング！」

「……出ていけ」

「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

紅椿？　どうしてここで紅椿が引き合いに出されるんだ？

「紅椿のスペックデータ見てみてよ！　パッケージなんかなくても展開装甲を調整すれば、そりゃりゃりゃりゃっ、ホラホラ！　これでスピードだってバッチリ！」

千冬姉さんを包囲するように紅椿のスペックデータが掲示される。

でも、展開装甲ってなんだろう？　初めて聞いた言葉だ。

そんな僕らの様子を見てか、束はメインディスプレイの情報を書き替えた。さっきまで福音の情報が載っていたそこに、入れ替わり表示される紅椿のデータ。

「説明しましょ～そうしましょ～。展開装甲というのはだね、この天才束さんが作った三機の第四世代ＩＳに搭載されたスペシャルな装備なんだよ！」

第四世代だって!?　まだ各国でやっと第三世代の試作機が出来たばかりだというのに、それを飛び越えて第四世代だなんて。

しかし、三機のという表現が気になる。一機は紅椿だけど、もう二機は一体……？

「束、『三機』の第四世代とはどういう意味だ？」

姉さんもそこに引っ掛かったらしく、束に問い掛けると、ふっふっふ、と彼女は含み笑うと僕と一夏を指差した。まさか……！

「さすがちーちゃん鋭いね。だったら説明しましょう！　紅椿は三機目の第四世代ＩＳ、その開発には二機のＩＳが試験機として生み出されました。それが、かーくんのレイヴァー・デイといっくんの

白式なんだよ！」

ザワザワッ！

会議室が騒然となる。僕と一夏の機体が第四世代だったなんて。その事実はあまりにも衝撃的だった。

そんな僕らをよそに、束はつらつらと説明を始めた。

「『パッケージを必要としない万能機』が第四世代のモットーだけど、それを可能にしたのがこの展開装甲、かーくんのレイヴァー・デイはその母体となった機体、いうところによる試験機だね。単一仕様（ワンオフ・アビリティ）発動時に限定的に展開装甲が発現するのはそのためなんだよ。あ、でも、かーくんに余計な負荷を掛けちゃったり、制限時間があったり、やたらとエネルギーを使っちゃうのは実験機ゆえの宿命ってやつだね」

「ちょ、ちょっと待ってください！　レイヴァー・デイはサイクロン社で作られたんじゃないんですか？」

千冬姉さんが調べたときにはそんなデータは出なかったのに。

「のんのん。そんなのは建前だよ。産廃まっしぐらな実験機がポイされてたから私がもらって一手間加えたのがその子なんだよね～。まあでも、表向きにはサイクロン社で作られたことになってるけどさ」

だからだったのか。レイヴァー・デイが紅椿に似ているなんて感じたのはそのためだったんだ。

「馬鹿たれ。機密事項をベラベラ話すな」

ベシン！　と手加減なしの手刀が束の頭を叩いた。痛いだろうなぁ。

「いたた。は～、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も厳しいネ」

「やかましい」

ゴスッ！

「ぎにゃー！」

千冬姉さん、情報端末の角はまずいですって。束が頭を押さえて蹲っちゃったよ。

「話をやめるか、早く続けるかにしろ」

「ううー……。じゃあじゃあ、いっくんの白式の話をするね。かーくんのレイヴァー・デイから見えた欠点から、局所的に展開装甲を搭載したのが《雪片弐型》、んでもってそれを制御できるように調整した白式も第四世代だね。ちなみにこの子も元は廃棄された実験機を貰って改造したんだけど……あぅ、頭痛いよぅ。かーくん、頭撫でてー」

「えーっと……」

千冬姉さんを見ると首を横に振った。へそを曲げられたら困るから頼むと視線で訴えてきた。はぁ、しょうがない……。

「分かりました。束」

「えへへ～」

束の頭を撫でると、にぱっ、と一瞬にして笑顔になった。見かけによらず子供っぽいな、この人は。

「カイトさん、どうしてあんなに篠ノ之博士と仲がよろしいんでしょうか？」

「だよね。頭まで撫でてもらってるし……。僕だってしてもらったことないのに……ズルいなぁ」

「ギリギリギリギリギリ……」

背中に流れる冷や汗は作戦の行く末を案じているからだ。それ以外に理由が見当たらないもんね。決して背中越しの冷たい空気に当てられたわけじゃない。

ラウラ、平常を装ってるつもりだけど、せめて歯軋りは止めようね。むっちゃ怖い。

「束、紅椿はどうなんだ？」

「レイヴァー・デイと白式から取れたデータをより反映した機体だよ。紅椿はレイヴァー・デイの直系進化だね。全身のアーマーを展開装甲にして、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能にしちゃいました。これぞ第四世代の目標である即時万能対応機（リアルタイム・マルチロール・アクトレス）。こんなのを作れちゃう私ってやっぱり天才だね」

……

僕らは度肝を抜かれていた。第四世代がこうして完成してしまった以上、各国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材の全てを結集させて競っている第三世代が、無価値なものになってしまったんだ。

あまりにも、あまりにも馬鹿げている。悲劇を通り過ぎて笑劇とさえ思えてくる。

「――束、言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだっけ？　えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ～。いやぁ、科学の徒って嫌だよね」

落ち着き払っているけど、千冬姉さんの声には微かな怒りがにじんでいた。それにようやく僕らが黙り込んでいる理由を理解したみたいだ。

「あ、でもほら、紅椿はまだ完全体じゃないんだし、そんな顔しちゃダメだよ、かーくん。かーくんが暗い顔してると束さんまで悲しくなっちゃうよ。笑って笑って」

いや、そんなウィンクされてもですね……。

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすくらいなら夕食前だね！」

夕食前って、随分と中途半端な時間だな。

「……束、紅椿の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

「千冬姉さん!?」

つい驚いた声を上げてしまった。まさか、篠ノ之さんを作戦に出すつもりなのか!?

「篠ノ之さんはまだ専用機を手に入れてまだ間もないんですよ。それなのに訓練なしに出撃するなんて無茶にも程があります」

「待ってくれ、緋神」

異を唱えた僕に待ったをかけるのは篠ノ之さんだった。

「心配する気持ちは分かる。私はおまえたちと違って訓練も不十分なんだ、不安がる気持ちも分からなくもない」

「だったら……」

「だが、私なら平気だ。紅椿がいる今なら、やってみせるさ」

拳を握り締め、そう続ける篠ノ之さん。なんだろうか、いつもの篠ノ之さんと雰囲気が違うような……。

「織斑先生、私にやらせてください」

「一一覚悟は出来ているようだな。いいだろう。では、本作戦は織斑・篠ノ之の両名による、」

「一一僕も出る」

「……なに？」

聞き返す千冬姉さんの目を睨み付けるように見返しながら、もう一度言葉を発した。

「その作戦、僕も行きます」

「ちょ、ちょっと待ってカイト！？」

僕の視界に割り込んできたのはシャルロットだった。僕がそんなことを言い出すとは思っても見なかったらしい。

「束の話を信じるなら、僕のＩＳも同じ第四世代だ。なら、二人の作戦に入っても問題はないはずだよ」

「そうだけど、でもカイトは……」

昨晩の戦闘を思い出したのか、シャルロットがどもる。昨日に比べたらまだ本調子とは言い難いけど、この作戦を二人だけに任せるにはいかない。ましてや相手は軍用機、数が多いほうが戦いやすいはずだ。

そんな僕の意を汲み取ってくれたのか、姉さんが頷いた。

「わかった。緋神も加えた三名による目標の追跡及び撃墜を本作戦とする。話を戻すが束、紅椿の調整には何分かかる？」

「えっとね、七分あればヨユーかな★」

「よし。では、作戦開始は３０分後だ。各員、ただちに準備にかか

れ」

ぱん、と千冬姉さんが手を叩くとそれを皮きりに教師陣はバックアップに必要な器材の準備を始めた。

邪魔にならないように部屋の隅に退き、レイヴァー・デイのエネルギーを確認する。……よし、充填されてる。これなら、いつでも出られそうだ。

でも、武器が破壊されたままだ。ガルベストーンもウィルマもない、あるのはフロイド四門と打鉄のブレード。Ｉ（イオタ）展開時にはディーンも使えるようになるけど、これだけじゃ心許ないな。さて、この穴をどう埋めようか……。

「やあ！」

「うわぁ！　た、束？」

コンソールに表示された武器の一覧を見ながら考えていると、ぬっと視界に首が割って入ってきた。束だった。

「んふふっ、かーくんも無茶なこと言うよね～。『同じ』第四世代なら、かぁ～。ふふふっ」

「？　それってどういう……」

「えへへ、ナ・イ・ショ。それよりかーくん、レイヴァー・デイ貸してくれないかな？」

質問をひらりと躱した束が首に掛けたヘッドセットを指差し、続け

る。

「今のこの子の速度じゃ、紅椿には追い付けないからね。私がちょこっとセットアップしたいんだけど、いいかな？」

「じゃあ、お願いします」

「任せといてよ！」

せっかくの好意を断るのも悪い。首に掛けたヘッドセットを束に渡すと、束は篠ノ之さんの元へと歩いていった。紅椿と平行して調整するのか。本当に規格外だな、あの人は。

「織斑、緋神。作戦までにオルコットから高速戦闘のレクチャーを受けておけ」

「「はい」」

一夏に目配せし、セシリアさんに声をかける。……あれ、なんだか落ち込んでない？

「うぅ……篠ノ之博士には嫌われますし、作戦要因からも外されますし、その上カイトさんまで……」

「僕がどうしたの？」

「はい……？　――きゃあっ！」

僕らがいることに気付いたセシリアさんがびっくりしたのか、小さく飛び上がった。その際、運搬中だった小型モニターがその腕から

するりと抜けて何の因果か――

ゴッ

――一夏の足の小指を打った。

「ほあぁぁぁぁぁ！」

「す、すみません、一夏さんっ！　お怪我はありませんかっ!?」

「だ、大丈夫……」

小指を押さえて床を転がる一夏。全然大丈夫そうには見えない。

「と、とりあえず、千冬姉――じゃない、織斑先生が俺たちに高速戦闘のレクチャーをしてもらえってさ」

「そ、そうですか！」

セシリアさんの顔から陰りが消え、ぱぁぁっと華やいだ。よかった、持ちなおしたみたいだ。

「こ、コホン。それでは高速戦闘のアドバイスをします。お二人とも、超高感度ハイパーセンサーを使用したことは？」

「俺はない」

「僕もないよ」

「そうですか。ではまずその注意から。高速戦闘用に調整された超

高感度ハイパーセンサーというのは、」

「使うと世界がスローモーションに感じるのよ。ま、最初だけだけどね」

「あ、鈴」

器材を運搬し終えたのか、鈴がレクチャーに加わる。説明できるってことは高速戦闘の訓練をしたことがあるんだろう。

「鈴も言ったけど、スローモーションに感じるのは最初だけ。ハイパーセンサーが操縦者に対して詳細な情報を送るために、感覚を鋭敏化させるんだよ」

「だから世界がスローに感じるのか……。なるほど、納得したよ、シャルロット」

「しゃ、シャルロットさん……？　わたくしの説明の途中で――」

「それよりも注意すべきはブーストの残量だな。カイトはI（イオタ）を、一夏は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使ったときに特に気を配れ。高速戦闘状態ではブースト残量は普段の倍速以上で減っていくぞ」

「Iや瞬時加速（イオタ　イグニッション・ブースト）の使用は極力控えるようにするよ、ラウラ」

「ら、ラウラ、さん？　わたく――」

「あとは通常時よりも相対的に速度が上がっているですから、射撃武器のダメージが大きいですよ。直撃すればたった一発でエネルギーシールドを抜いてくるですよ」

「じゃあ、援護は射撃武器を使おう。ありがとう、うるむちゃん」

「うるむさんまで！　あああもうっ、どうして皆さんわたくしの邪魔をしますの！？」

セシリアさんの堪忍袋の緒が切れた。これだけ話に横槍を入れられれば、怒るのも無理はないかな。

「あー、えっと、セシリアさん？」

「なんですの！？」

一瞬、セシリアさんの顔が般若に見えた。

「色々教えてくれてありがとう。他にもアドバイスがあるなら、教えてよ」

「え、ええ、まあ。こ、このくらいはお安いご用ですわ。なにせわたくしはイギリス代表候補生セシリア・オルコット。分からないことがあればいつでもお訊きになって」

セシリアさんが腰に手を当てて、いつもの様になるポーズを取った。よかった、その表情から怒気が抜けたよ。

（それにしても射撃武器の威力が上がってる、か……）

さっきのうるむちゃんの言葉を思い出した。……よし、光明が見えた。

「セシリアさん、シャルロット。ちょっといいかな？」

「なにかな、カイト」

「ちょっと頼みがあるんだ」

「頼み、ですか？」

荷物を運び終えたシャルロットとセシリアさんを手招きで呼ぶ。

講ぜる手段があるなら選り好みせずに、実行しよう。

「二人の射撃武器を貸してほしいんだ。今のレイヴァー・デイには武器が足りないから、貸してもらいたいんだけど……いいかな？」

僕の頼みに顔を見合わせる二人。やっぱり難しいか……。他人の武器を使わせるのは、自機の情報をリークするのと同じ意味だ。ましてや二人は代表候補生、情報漏洩には厳しいだろう。

「カイトさん。一つ、約束して下さい」

「大丈夫、これが終わったら二人の武器のデータはちゃんと消すよ」

「いえ、そうじゃありません」

ふぅ、と息を吐いたセシリアさんの青い瞳が僕を見る。

「無事に帰ってきてください」

「ちゃんと帰ってくるって約束してくれなきゃ、武器は貸さないか

らね」

……なんだ、そんなことか。当たり前すぎて、苦笑してう。自分の決意を確認する意味も込めて、二人に宣言した。

「約束するよ。作戦を無事に成功させて、三人で帰ってくるよ」

「その言葉に偽りはないな？」

「当然じゃないか、ラウラ」

こんなことは早く終わらせて、臨海学校を楽しむんだ。そのためなら、僕は自らの限界だって越えてみせる。

「では、私からお前にジンクスをかけてやろう」

「え？　ジンクス？」

右手を握り締めて決意を固める僕はすっとんきょうな声をあげてしまう。ジンクスって、基本まともなことじゃないよなぁ――って、あの、ラウラさん、どうして顔を両手でがっちり固定するんですか？　このパターンはまさか……！

――ちゅっ

ラウラの柔らかな唇が僕の唇と重なった。

「――んふぁ」

しっとりとした潤いと甘い香り、そして色っぽい吐息を残してラウ

ラの唇が離れた。

「わ、私にはお前に渡せるような武装はない……。だ、だから私に出来ることをした……」

恥ずかしさから、もじもじするラウラを正面から見られない。

「か、帰ってこい、カイト。無事に戻ってこなければ、ゆっ、許さんからな……！」

「う、うん……」

「「……」」

ふたりして無言になってしまった。甘いような緊張しているような、何とも言えないイヤーな雰囲気が漂ってきて――ん？　イヤーな雰囲気？

なんとなく、ただなんとなく、後ろを振り返る。

「オヤオヤ、カイトサン。ラウラサントナカガヨロシイヨウデスネェ」

「シアワセイッパイデウラヤマシイナァ、カイト」

すたすたと歩いてくるセシリアさんとシャルロットの背後にドス黒いオーラが見える。

セシリアさんの手にはブルー・ティアーズの《スターライトｍｋ？》が、シャルロットの手には《レイン・オブ・サタディ》と《ガル

ム》が握られていて――ああ、頭の中で十字を切っておこう。アーメン。

「「ハイ、ドウゾ！」」

投げ付けられるＩＳの武器×３。正直、これは死ねるレベルだ。

なんでミッション前にこんな頭の悪い漫才をやらなくちゃいけないんだ……ろ……う……ガクッ。

作戦開始まで、残り２３分。

●

小高い丘の上の教会、その祭壇で祈りを捧げているのはリーゼロッテ司祭だ。彼女の声はたおやかな調べとなり聴くものを惹き付ける美声であるが、その実、それは形式的なものでしかなく、彼女には祈る神などいない。

神に祈れば何かが叶うのか？　祈りを捧げれば死人は蘇るのか？

否、どちらも否である。神はただ悦を得られない人の妄想の産物に過ぎず、死人は朽ちて土となり、この世界に戻ることは出来ない。

ただ、それでも人は飽くなく神に縋り、無意味な救いを求める。なぜか？

想像する力が――自らの欲望を尊ぶ心が、

創造する力が――常識（モラル）を捨ててまで己が渇望を世に流出させる意志が、

――欠けているからだ。

開いた穴は深く、自らの命一つでは埋めることなど叶わない。だから、神を崇める。崇高なる全能神、その威光に触れることで仮初めの蓋をするしかない。

ああ、なんと愚かだ。ああ、なんと汚いんだ。偶像を崇拝して、いったい何が救われる？　神が何をしてくれるというんだ？　どれだけ盲目的に崇めようとも、それは事実存在しない幻想。自分はそれを知っている。自分は、いや神に遣える者などすべからく聖職者の皮を被った無神論者に過ぎないのだから――。

それに気が付いたとき、彼女は本当の聖女に生まれ変わったのかもしれない。救えるものを救うべく、想像を創造する力はこの手に転がり込んできた。これを奇跡と言わずなんと言う。ならば、この力を如何にして使おうか。

自分が神になるのか？　まさかそんな下衆な方法に使うものか。自分の見ている世界にそんなものは不必要だ。言ったであろう、無神論者であると。

この力は法則（ゲットー）を超える力だ。ならば、神にならずとも『知の枠組み』を書き替えることも出来よう。自分はただ、そのためにここにいるのだから――。

瞬間、得たりと――何かを確信したように嗤う『双児（ツヴェリング）』の騎士。その狂喜が陽炎のように揺らめく瞳を前にして、己の自制心というも

のに全幅の信頼を寄せられる人間が、果たしているだろうか？

「まあ、最初の相手としては『魔羯（シュタインボッグ）』は適当でしょう。今のあなたにぶつけるはちょうどいい。さて、それではお願いしますよ。こうして塩を送るのも、これが本当に最後です。何せ、これで目醒めぬのであるなら、さすがにもう救いようがない。あなたの力が完成の時を迎える瞬間に立ち合えることを祈らせて頂きますよ、『獅子（レーヴェ）』。でなければ、私がこちらに赴いた意味がなくなってしまう」

ここにはいない誰かへとそう語り掛けた司祭はゆっくりとミサの続きを語りだした。まるで赤子に聴かせるかのように、静かな声色で。

「だが誰が聴くだろうか。大多数の人々が異教の神々に向いているのに。特別の快楽を司る最古の偶像が、人々の心を支配している。知恵が愚行を招き、ベリアルが神の家に居座っている。キリスト者自らも、キリストから走り去っているのだから」

あなたの道とその先の未知に、幸と祝福のあらんことを。

――緋神カイトよ。

第三十二話　Bパート　～飛花落葉～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

かなり伏線も張りましたし、重要なｔｉｐｓもばらまきました。露骨なものから分かりにくいものまで多種多様なそれを君は見つけられるか！？　……なんだか戦隊ヒーローの次回予告的な言い回しになっちゃったなァ。

ですが、この話は冗談抜きでかなり重要です。後で見返すと意外な発見があるかも知れません。長いので疲れると思いますけど……。さて次回は、白式、紅椿と共にレイヴァー・デイが福音と激突します。白、紅、黒の三機の共同戦線は予想できない局面へと流れていく……。そして、介入する第三勢力の影が……。

ここからは少年マンガよろしくバトルシーンが倍増します。ヤバイな、蒼兎死んじゃうかも。出来ればここは応援が欲しいところ、皆さん、蒼兎に感想ください！　それによって蒼兎のモチベーションがかなり上下するのでｗｗｗ

それでは、またの機会に。

第三十三話　Aパート　～轟天～（前書き）

第三十三話、Aパートです。

銀の福音と激突。しかし、この福音、どこか様子がおかしい……？

それでは、第三十三話前半戦、『轟天』。

天に轟く福音は、絶望の調べ……！

第三十三話　Ａパート　～轟天～

時刻は午後十二時五七分。もうすぐ暴走した軍事ＩＳ、『銀の福音』撃墜作戦決行の時を迎えようとしていた。

さんさんと降り注ぐ陽光の下、浜辺に少し距離を取って並んでいた僕、一夏、篠ノ之さんは一度視線を交わらせる。

……全員、準備は出来ていた。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「出番だよ、レイヴァー・デイ」

頷き合った僕らの身体が光に包まれる。一瞬の浮遊感の後、全身が強固な装甲に覆われる。

「はーい、かーくん。聞こえますかー？」

「よく聞こえます」

「オーケーオーケー、そいじゃ装備の説明をするよー」

回線越しの束の声に答えると、バイザーにレイヴァー・デイのデータが表示された。

「今、かーくんの機体には加速用の大型ブースターが付いてるね。

それで一気に加速して箒ちゃんたちに追い付いてね」

機体の背部、脚部、腕部の展開装甲を推進力に回した紅椿に追い付くべく、バックパックに追加フレームを増設したレイヴァー・デイに搭載されたのは機体よりも遥かに巨大な外部ブースターだ。

束がロケットエンジンを改良したもので、約二千キロ級の速度が発揮できるようになるらしい。

「ただし、短い時間しか使えないし、最低限のエネルギーしか積んでないから余計なことを考えてちゃダメだからね」

「気を付けます」

専ら突撃や強襲にでも使うんだろうな、これ。僕の身体、潰れないよね？

「それじゃあ、一夏、篠ノ之さん。頑張ろうね」

「おう、絶対に成功させようぜ。な、箒？」

「当然だ。例え相手が軍用機でも、私たち三人ならば苦無く達成できるだろう」

作戦の成功を予期してか、ふふん、と篠ノ之さんは鼻を鳴らして答えた。ずいぶんリラックスしているみたいだけど、大丈夫かな？

同じことを思ったのか、「でもな、」と一夏が言葉を繋げた。

「先生たちが言ってた通り、これは訓練じゃないんだ。実践じゃ何

が起きるから分からないんだし、用心したことに一一」

「無論、わかっているさ。ふふ、どうした？　臆病風にでも吹かれたのか？」

「違うよ、篠ノ之さん。一夏はね、」

「緋神もそんなに心配するな。私たちは第四世代ＩＳのマスターだ。負けるわけなどないさ」

「「……」」

どうにも胸のもやもやが取れない。専用機を貰って嬉しいのは分かるけど、ちょっと浮かれすぎているんじゃないだろうか？

（もし何かあったら、フォローに走ろう）

そう心に留め、気を引き締める。

『織斑、緋神、篠ノ之、聞こえるか？』

オープン・チャネルが開かれ、千冬姉さんの声が聞こえてきた。僕達は頷き、返事をした。

『本作戦の要は一撃必殺（ワンアプローチ・ワンダウン）だ、短時間での決着を心掛けろ。さらには初めての超高速戦闘だ、お前たち、目を回すなよ』

「「「了解」」」

未知の領域である高速戦闘に一抹の不安を感じる僕の隣で篠ノ之さ

んが姉さんに問い掛ける。

「織斑先生、私と緋神は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理だけはするな。篠ノ之はその専用機を使っての初戦闘、緋神は病み上がりだ。共に、唐突な不具合が起きるとも限らない』

「わかりました。出来る範囲で支援します」

やはり浮ついているのか、篠ノ之さんの声が弾んでいる。僕の深読みだといいんだけど……。

『一一織斑、緋神』

「は、はい！」

『一夏、これはプライベート・チャネルだよ』

『っと、そうだった』

そう言うと、一夏は慌ててチャネルを切り替えた。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態ではなにかをし損じるやも知れん。いざというときには、サポートしてやれ』

『はい、意識しておきます』

『俺も分かりました』

『頼むぞ』

それからまたチャネルが切り替わり、オープン・チャネルから山田先生の声が響き渡った。

「作戦開始時刻となりました。スタンバイ、どうぞ」

一夏は篠ノ之さんの背中に乗り、僕は大型ブースターを点火させる。

「織斑一夏、準備できました」

「篠ノ之箒、同じく」

「緋神カイト、いつでも行けます」

「では――」

すっと回線の向こうの千冬姉さんが息を吸い込む。そして――その時が訪れた。

「作戦開始ッ！」

――福音撃墜作戦、その火蓋が切って落とされた。

「一夏、行くぞ！」

ゴウッ！

紅椿が一夏を背に乗せたまま、一気に飛翔、三百、いや、上空五百

メートルまで上昇していく。

「僕らも行こう、レイヴァー・デイ！」

答えるように、背中のブースターが野獣のような唸りを上げて火を噴いた。瞬時加速（イグニッション・ブースト）なんて比較にならないほどの振動が全身を揺さ振る。

「くっ……」

歯を食い縛りながらレイヴァー・デイのＰＩＣをマニュアルで制御する。先行する紅椿に追い付くべくして、さらに加速するブースター・ロケット。その長大な噴射光が海面に筋を引く。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了……！　目標の現在位置を把握……っ！」

機体の制御を行いながら、福音の居場所を探知する。と、ようやく一夏たちの後ろ姿を捉える。

「追い付いたか、緋神。情報によると対象は尚も加速中だ。このままだと封鎖区域から逃亡されてしまう。二人とも、一気に迫るぞ！」

「了解っ……！」

「お、おう！」

並んだのも束の間、言うなり、紅椿の装甲がスライド展開し鮮烈な赤い光を放つと、その速度はさらに跳ね上がる。

（これが、レイヴァー・デイと白式の完成型、紅椿か……）

大型ブースターを装備しても追い付くのがやっとなこの性能でも、稼働効率が百パーセントじゃないのかと考えると、恐怖すら覚える。

（でも、そんな機体のプロトタイプがレイヴァー・デイなんだよね……）

「見えたぞ、二人とも！」

「「！」」

思考を中断し、意識を前方に飛ばす。ハイパーセンサーが前方を飛行するＩＳを認識する。『銀（シルバリオ）』という色を名に冠してるだけあって、その機体は鈍い銀色、まるで抜き身の刃を彷彿とさせる輝きを纏っていた。

そして、頭部からマフラーのようにたなびくのは一対のウィングスラスター。確か、これが広域射撃武器を内蔵しているみたいだけど……。

（ブルー・ティアーズみたいな自律兵器（ラディオ・ウェポン）じゃないのか……？）

『緋神、ブースター使用限界近いぞ！　詰められるだけ、距離を詰めろ！』

「了解！　一夏、篠ノ之さん、先に仕掛けさせてもらうよ！」

「気を付けろよ、カイト！」

一夏の言葉を肯定するように残り少ないエネルギーを爆発させるブースターに押し出され、蒼穹を駆け抜ける。この速度なら接触まであと十秒。

『ブースター使用限界だ！　緋神、パージしろっ！』

「もう少し……！　もっと距離を……！」

耐久度が無くなり、ブースターから火炎が吹き出す。頼む、爆発だけはしてくれるなよ……！

『緋神ッ！！』

「爆発するくらいならぁっ！」

身が引き千切られそうなＧに苛まれながらも、レイヴァー・デイを旋回させる。瞬間、爆発寸前のブースターを追加フレームごと切り離す。勢いの乗ったそれは回転しながら福音へと投擲される。

「！！」

今更気が付いても遅い！　セシリアさん、君の力を貸してもらうよ！

ガチャ！

展開するのは蒼穹のレーザーライフル、《スターライトｍｋ？》。高速で呼び出した狙撃銃で投げ付けたブースターに狙いを付け一一、

「貫けェェェェッ！」

キュイン！

寸分の狂いなく天駆ける一条の閃光。青い残楽を尾引く光が丸太のようなロケット・ブースターに直撃、刹那――破裂し、膨れ上がる炎の渦。

ボォォォォォォォォン――――！

苛烈に燃え盛る焔の花。その爆風から逃れるように急上昇する福音。

「一夏、篠ノ之さんッ！」

「任せろォォォッ！」

スラスターと展開装甲の出力を最大にした紅椿のテールスタビライザーを足場に立ち上がる一夏の《雪片弐型》が変形し、エネルギーの刃がそこから発振する。

「うおおおっ！」

自らを鼓舞するように雄叫びを上げた一夏に応えるように雪片に更なる輝きが灯った。零落白夜が発動したのだ。瞬間、紅椿の背中を蹴り、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を同時に行い、福音との距離を一気に詰めた。

「！？」

「絶対に逃がさねぇぇぇぇぇ！」

迫る光刃から逃げるように加速をかける福音。しかし、逃げる暇はなく、すでにその距離は零になった。

「ハァァァァァッ！！！」

振り下ろされるのは大上段からの乾坤一擲の一撃。一夏の全身全霊を込めた破壊の一刀。それを受ければ、どんなＩＳだろうと切り伏せられるだけの強い意志の結晶。

それが銀色のボディを切り裂いた――。

そう、捉えるはずだった。

「「「！？」」」

福音の姿が掻き消えた。一夏の一撃は虚空を切り裂き、ただの風車となってしまった。福音は一体どこに！？

「二人とも、上だ！」

篠ノ之さんの声に顔を上げると、――見つけた。福音はそこに佇んでいた。騎士甲冑のようなヘッドアーマー、その奥のデュアルカメラがこちらを見下していた。

まさか、雪片を避けた一瞬で反転上昇と急停止を行ったのか……？

いくら高出力の多方向推進装置（マルチ・スラスター）を装備していても、あんな細密な動作を連続して行えないはず。

この機体、本当に暴走しているのか？　僕には、自我を失って暴れているようにはどうしても見えないんだ……！

「敵機を確認。本機は迎撃行動に移ります。《銀の鐘》、エネルギーを充填」

オープン・チャネルから聞こえたのは人が乗っているとは思えない、機械じみた声。感情は伝わってこないけど、明確に伝播する『殺意』に肌が粟立った。

考えるのは後だ。福音に気付かれてしまった以上、もはや正面からぶつかるしか策はない。

「箒、カイト！　援護を頼む！　もう一度仕掛ける！」

「了解！」

「任せろ！」

篠ノ之さんの背に飛び乗り、雪片を握り締めて再び切り込む一夏たちに合わせて、スターライトを連射し、福音の動きを牽制する。

だが――

「くっ！　このぉ……！」

「当たらない……！？」

ひらりひらりと、僕の銃撃をＢＧＭにして一夏らと踊り交わす踊り子のように、福音は攻撃を避け続ける。

「エネルギーの充填を確認。『銀の鐘』による殲滅攻撃を実行」

繰り出された雪片の一太刀をぐりん、と身体を一回転させ、躱した福音が一気に上空へと舞い上がった。

カシュッ！　カシュッ！

銀色の翼。推進機を兼ね備えたそれが、羽ばたくように装甲が一斉に開き、その真実の姿を開眼させる。

（銃口、違う、砲口だ！）

露見した砲口から放たれる光弾の暴風。広域殲滅攻撃の名に恥じない、エネルギーの渦。

「くっ！　紅椿！」

篠ノ之さんの紅椿は展開装甲により、一気に離脱し、輝く弾雨を回避する。でも、

（この数、躱し切るのは無理だ……！　防御を……！）

スターライトを収納し、替わりにシャルロットから借りた中型シールドを展開、レイヴァー・デイを走らせながら、執拗にホーミングしてくる羽根状のエネルギー弾を躱し、シールドで防御する。

ドドドドドーーーーー！

「うぐ……クゥ……！」

楯に突き刺さった即時、爆発する光の羽根。これが《銀の鐘》、なんて威力なんだ……！　ガードしても、ダメージを殺し切れてない！

高火力に加えて、更に問題なのは――

（なんて連射速度なんだ……！）

重機関銃すらも超える連射力が何よりの脅威だ。そこにあの爆発弾（バースト・シェル）だ、少しでも触れれば一気に蜂の巣にされる。

だけど――！

「一夏、篠ノ之さん、左右中央、同時に仕掛けよう！　僕が中央、篠ノ之さんは左を！　その隙に一夏は右からッ！」

「おう！」

「了解した！」

三方向に散らばると瞬時、回避から攻撃の流れに転じる。ホーミング性能はたしかに脅威だけど、元の狙いが甘いんだ。擦りこそすれ、直撃だけは避けられる。

空間を縦横無尽に飛び回り、連射の手を休めない福音へと接近する。シールドを構えながら、右腕腕部ラックを展開、そこにビームガトリング《フロイド》を二門連結させた形で呼び出し、こちらからも仕掛ける。

「行けェ！」

ズガガガガッ！

牽制として撃ち散らすライトグリーンの弾丸。ばらまかれる光雨に、福音がたじろぎ、攻撃の手が緩まった。

「デヤァァァァーー！」

その隙を逃さず、左方から篠ノ之さんが二本の刀で切り掛かる。

応射される銀の鐘を展開装甲から吹き出す赤い粒子が機体を弾丸同士のその僅かな隙間に押し込み、加速度の相乗された一刀が福音を掠めた。

「一夏！」

「分かってる！」

篠ノ之さんが声を飛ばし、応じる一夏がその死角から飛び出した。三機の連携で、漸く一撃が入るか！？

「格闘戦闘の機体への対処を最優先と認定。《銀王国（シルバー・キングダム）》の発動を認証する」

がきぃん！

「なにっ！？　――ヅァ！」

雪片が切り払われ、カウンターの蹴りが一夏の腹を穿つ。海面ギリギリで持ち直した一夏に向けられる、銀色の矛先。

福音が展開したのは、大槍だ。柄に楯を備え、太陽光を受けて鋭い輝きを放っている円錐形の槍。それが、銀の福音が展開した接近武器、《銀王国（シルバー・キングダム）》。

「どういうことだ！？　スペックデータにはこんな武器など掲載されていなかったぞ！？」

「……情報の改竄だね。うまく誤魔化したもんだよ」

「なんだとっ！？　どういう意味だ、緋神！？」

「文字通り、受け取ったデータは所詮、『情報媒体（コドモダマシ）』だったってことだよ」

畜生、まんまとしてやられた。まさか偽物のデータを掴まされるな

んてさ。

福音が格闘武器を搭載していないことを前提として動いていただけあって、作戦がよくない方向に傾いてきている。

（これは、まずいな……）

「攻撃パターン変更。ＡＣ（アサルト・コンバット）を選択――」

「考えるのは後でもやれる。箒、カイト、来るぞ！」

「――戦闘を、再開します」

ギュイン――！

大槍を振り上げ、一夏へと突撃する福音。最大旋速の銀の鐘による急襲が白式に襲い掛かる。

どうやら白式の攻撃特性を理解しつつあるようで、先に一夏を潰す作戦に出たみたいだ。援護しようにも、こちらに羽根状のエネルギーの弾丸を射出して近付けないようにしている。

「こいつ――！」

苦々しく吐き捨てた一夏が立て続けに迫る打突の洗礼を受け流し、弾き返す。身の丈ほどの大槍なのに、振るう速度は刀剣である雪片と同等、いや、それ以上の精度だ。

「緋神、私を援護をしろ！　踏み込んで、奴を一夏から引き剥がす！」

「わかった！　じゃあ、これで一一！」

返事を受けるや否や、飛び込む篠ノ之さんをサポートすべく、高速切替（ラピッドスイッチ）を行い、展開する武器は二丁のアサルトカノン《ガルム》。脇に挟み込むように構えた両手のそれを、連続で打ち込み、福音を狙撃する。

「一一！」

「《雨月》、撃てェッ！」

打ち出された弾丸を柄に備えた楯で防ぎ、一時後退した福音目がけ、紅椿の雨月がレーザー光を放出した。アサルトライフルに匹敵する閃光を迎え撃つように、福音が槍を突き出した。

「《銀王国》、最大稼働。防御障壁を展開します」

その言葉が引き金となり、円錐形の槍先の中腹部が展開し、六本のパイルが内部から伸びると、雷光が煌めき一一、

バリバリバリ一一！

まばゆい光が膜のように広がって福音の銀色のボディを覆い隠すと、篠ノ之さんの一撃を完全に打ち消してしまった。

「紅椿の一撃を一一防いだだと！？」

「反撃に移行。《銀の鐘》を最大稼働、並びに対象Ｂをクロスレンジに」

驚きに目を見開く一夏の眼前でパイルを収納し、膜を破り捨てて再び姿を見せた福音の砲口が開いた。その総数は一一三十六。

銀の鐘を轟かせながら、再度突貫してくる福音。その狙いは一一篠ノ之さんか！

「好都合だ！　一夏！　私たちがこいつの足を止めて隙を作る！！」

「わかった！」

「緋神、遅れるなよ！」

言うなり、篠ノ之さんが飛翔し、福音の銀槍と攻防を繰り広げる。しかも、腕部の展開装甲が開き、そこから発生するエネルギーの刃が福音の行動を制限する。

（福音も怖いけど、こっちの機体も恐ろしいな……）

機体の反応速度が異常に迅い。展開装甲による高い機動力と自由自在な方向転換を両立させ、福音と打ち合っている。

ガルムを乱射し、篠ノ之さんの動きをアシストしつつ、一夏の切り込めるタイミングを作る。二体のＩＳの攻撃をものともせず、福音は歌う。

「Ｌａ……♪」

嘲笑うかのように甲高いマシンボイスが自朶を打った。歌劇（オペラ）の演者（ヒロイン）の如き悲痛さを兼ね備えた声が、銀の鐘と共に全方位に降り注ぐ。

「軍用機だけあって確かに強い……！　だがなっ！」

「篠ノ之さん！？」

回避に撤する僕らを余所に、篠ノ之さんが飛び出した。合わせて、紅椿の装甲が外れ、福音を狙う。束の言っていた自律兵器（ラディオ・ウェポン）か。セシリアさんのものとは違って、一対のそれらはエネルギーブレードによる攻撃を行っている。

「下がらせないよッ！」

両手のガルムに替わり、両腕ラックにフロイドを展開し、福音目がけてトリガーを引いた。十六門もの回転式銃口から速射される光弾に後退しようとした福音の動きが鈍くなった。

「押し切る！」

銀色に輝く槍を力ずくで押し、迫撃した紅椿の両手の日本刀型ブレードが福音を押さえ込んだ。隙ができた！

「一夏！」

「ああっ！　今度こそ決める！」

タイミングを見計らっていた一夏が雪片を握り締める。最後のエネルギーを振り絞り、零落白夜を発動させた一夏はそのまま福音へと肉薄し――

「一夏！？」

――そのまま減速することなく急降下していってしまう。驚愕に顔を歪める篠ノ之さんの遥か眼下で急制動をかけた一夏の刃が、一発の銀の鐘を打ち消した。だがその代償として、一夏の手の中で雪片の光が淡く大気に溶けてしまった。

（一体何をしたいんだ、一夏は？）

整いつつあった三機の連携がこの一瞬で脆くも崩れ去った瞬間だった。そんな絶好のチャンスを軍用機が逃すわけもなく――。

キュイン

いななくように喉を鳴らした福音が篠ノ之さんを大槍で弾き飛ばすと、ウィングの砲口が一夏を狙う。まずい、今の一夏は無防備だ！

「お願い、レイヴァー・デイ！」

レイヴァー・デイは即座に反応し急下降、シールドを展開した僕は一夏と弾雨の間に体を滑り込ませる。

「ッウウウウウ！」

シールドが爆撃で焼け焦げ、ボロボロになってしまう。機体へのダメージも凄まじく、一気にシールドエネルギーが半分も削られてしまった。フロイドで応戦しつつ、一夏に問い質した。

「何をしてるんだい！？　篠ノ之さんが作ったせっかくのチャンスを棒に振って！」

「船がいるんだ！　海上は先生たちが封鎖したはずなのに！」

「船？」

一夏の指差す方向、そこには確かに一隻の船があった。照合するとその船は国籍不明、つまりは密漁船か。

「密漁船じゃないか、馬鹿者！　なぜあんな奴らを守る必要がある！？」

「犯罪者だからって、見殺しなんかできるかよ！」

落ち合った刹那に声を荒げる篠ノ之さん。その怒りはもっともだ、一夏は作戦の要たる零落白夜を無駄に使ってしまったことになるのだから。

しかし、いや、だからといってその命を見捨てていいのか？

僕と一夏の答えはＮＯだ。戦うだけじゃ、ダメなんだ。それを忘れているのか、篠ノ之さんの言葉はさらに熱が籠もる。

「奴らは罪人だ。身勝手な行いで身を滅ぼすなら自己責任だ！　私たちが身を挺して守る価値などない――」

「箒！！」　「篠ノ之さん！！」

「ッ――――！」

大声を張り上げ、遮った言葉は自然と一夏と重なった。

「篠ノ之さん、そんな――そんな寂しいことを言っちゃダメだよ。犯罪者だからって守る価値がないだなんて、悲しすぎるよ」

「そうだぜ、箒。見捨てていい命なんてない。俺たちは、みんなを守るために戦ってるんだ。間違っても、誰かを叩き潰すために戦ってるんじゃないんだ。お前は、そうじゃないのか？」

「ぁ……」

宥めるように問い掛ける一夏に篠ノ之さんの表情が歪み、ぽろりとその手から二振りの刀が零れた。

「なぁ、どうしちまったんだよ、お前。力を手にした途端、弱いヤツのことが見えなくなっちまうなんて、らしくねぇよ。全然らしくねぇよ、箒」

「わ、私、は……」

福音を迎撃していた自律武装が粒子になって消えてしまう。海に落ちた刀も同様に水のなかに溶けてしまった。

限界だった。篠ノ之さんも紅椿も。せき止めていたものが次第に流れ出す。

「私は……ただ……、ただ……一夏を……！　うぁ、うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

流れは止まらず、ただ嗚咽となって戦場に虚しく響き渡った。自分が何をしたかったのか、何をしていたのか、それを痛感してしまった彼女は戦うことに折れ、ただ泣き崩れるしかできなくなってしま

った。

ただ、それを見つめることしかできない僕らは失念していた。

ここが『どこ』で、『なに』をしているのかを――。

「前方に敵機の集中を確認。《銀王国》を機体と直結、最大出力により殲滅します」

ここは、ＩＳ学園を離れた戦場。そこで行われているのは――実戦だ。

それを大言するように福音が槍を構える。バチバチとエネルギーを矛先に溜め込むそれを見て、槍に搭載された機能に気が付いた。

――ＥＭＰ、指向性プラズマ。その発生装置だ――！

その射線軸にいるのは、まずい、篠ノ之さんだ！　今の彼女はあまりにも無力だ。しかもシールドエネルギーも無くなっている。いくら第四世代ＩＳと言えどエネルギーがなくてはそれはただの鉄の鎧にすぎない。

ましてやエネルギーを対消滅させるだけの高圧電撃だ、そんなのを受けてはひとたまりもない！

（間に合え！　間に合え！）

「間に合えぇぇぇぇっ！」

考えるよりも早く、レイヴァー・デイを走らせる。万分の一秒というあまりにも瞬間的な世界の中、銀の福音は銀槍のエネルギーを解放した。

落雷が轟き、銀色の光が一直線に篠ノ之さんに走る！　手を伸ばすも空を切るのは僕の手。駄目だ、届かない。今の僕じゃ、駄目なのか……？

刹那――

篠ノ之さんの体が僕にぶつかった。なんで、という答えを悟る前に、全てに合点がいった。

割り込んできた白いＩＳ、その操縦者が篠ノ之さんを横へと投げ飛ばしたんだ。

「箒を頼むぜ」

やめろよ、縁起でもないことを言うな。僕らは勝って、みんなのところに帰るんだろう？　夕日が沈む頃に浜辺に降りて、やったぜって肩を抱き合いながら笑い合う、そんな最高にカッコいい完全勝利。

だれか一人でも欠けたら意味が無いんだ。全員で勝ってこそこの青臭い縮図が気持ちいいんだ。今浮かべてるその笑顔はその時までとっておけよ。

だから――だから届けよ、僕の手！

必死に伸ばした黒い腕。届かないという事実を認めたくなくて、けれど現実はあまりにも、酷だった――。

「グァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

指向性プラズマに身を焼かれ、白い装甲が黒く焼け焦げ、シールドエネルギーすらも貫き、マスターすらも焼き焦がす電撃の灼熱地獄が彼を包み込んだ。僕らの叫びなど威にも返さず、悪意が熱を従えて絶望を刻み込んだ。

認めたくない、ただその一心から上げた篠ノ之さんの悲痛な叫びは銀の光にただ、飲み込まれてしまう――。

「いちかぁぁぁ

第三十三話　Aパート　～轟天～（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

ＶＳ福音。まずはその前半をお送りいたしました。一夏撃墜。残されたカイトと箒はいかにしてこの危機的な状況を乗り切るのか？

次回の更新をお待ちくださいませ。

さて、ちょっと今回のお話について語っておきます。銀の福音、それに搭載した大槍、シルバー・キングダム。ちょっと不意打ち気味に出してみました。蒼兎の趣味です。はい、いわゆる隠し玉ですよ。他にもアニメのラスボスよろしく、福音には秘密があります。それを想像しながらお待ちいただければ幸いです。

上記しましたが、次回は福音戦の後半パートをお送りします。この戦いはただじゃ終わらない。極限の絶望をくれてやる。

それでは、またの機会に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7883u/

IS〈インフィニットストラトス〉LABOR DAY FULL ACTION

2011年11月7日13時05分発行